

2015 年度 根力育成プログラム

プロジェクト実習
活動報告書

2016 年 3 月

茨城大学人文学部

巻頭言

人文学部長 佐川泰弘

茨城大学人文学部は、いろいろな「学び」の場を用意しています。

入学した一年生が最初に学ぶ教養科目には、英語や未修外国語、人文科学や社会科学の講義、主題別ゼミナールなどがあります。二年生からは専門科目を学び始め、九コース（人間科学、歴史・文化遺産、文芸・思想、言語コミュニケーション、異文化コミュニケーション、メディア文化、法学・行政学、経済学・経営学、地域研究・社会学）での講義や演習等に加え、学部共通科目と呼ばれる授業も多くあり、その内の一つが「プロジェクト実習」です。

2011年度以来、茨城大学では学生の就業力育成支援を目指す教育プログラム「根力（ねちから）育成プログラム」を展開してきました。PBL 技法に基づく授業「プロジェクト実習」は同プログラムの中核に位置づけられています。PBL (Project Based Learning) 技法とは「課題解決型学習」とも訳され、昨今その教育効果の高さが注目されているアクティブ・ラーニングの一つです。

社会の現状を分析し、課題を見つけ、その課題を解決するため主体的に行動する。自分の意見を発信し、他人の意見を丁寧に聴き、異なる価値観を持つ人たちとチームを組んで課題に取り組む。そのような“社会人”を育てることが「プロジェクト実習」の目標です。

この授業は、人文学部だけでなく、教育学部や理学部、さらに単位互換協定を結んでいる茨城キリスト教大学、常磐大学の学生も一緒に学んでおり、授業がまさに一つの“社会”となって、互いに切磋琢磨する場となっております。過去三年間で、のべ149名が「プロジェクト実習」を履修しました。

茨城大学人文学部は、未来を見据えて成長していきます。「プロジェクト実習」授業運営をご支援くださっている地域の皆様の日ごろのご尽力に深く感謝申し上げますと共に、大学で四年間を過ごして巣立っていく若者たちの成長をうながす「プロジェクト実習」という授業自体がこれまでどのように“成長”し、現在どのような姿となっているか、ここに謹んでご報告いたします。

はじめに

神田大吾

茨城大学人文学部の「プロジェクト実習」は通年 2 単位の専門科目であり、2 年次から履修できる学部共通科目である。加えて、本学の他の 4 学部さらには連携関係にある茨城キリスト教大学・常磐大学の学生にも単位互換で開放されている。学生の自発的学習を促すアクティブ・ラーニングの中でも特に学生の負荷の高い PBL (Project Based Learning) 授業をその特徴とする科目であり、2010 年度から始まった、本学就業力育成教育の一環として開講されている。学生は各種プロジェクト（地域連携・地域貢献、国際交流・異文化理解、PBL 型インターンシップなど）の中から自分の関心のあるものを選び、5 名以上 9 名以下のチームを組み、仲間と協力し合ってプロジェクトの実現を目指す。その過程で彼らの根力（ねぢから）、即ち「単なる就職試験対策に留まらず、社会人となった後も生涯活躍していける能力」を伸ばすことがこの授業「プロジェクト実習」の目標である。

この目標を学生がはっきりと意識するよう、2015 年度の授業では、①マインド・マップによる自己分析、②個人の達成目標ルーブリックの作成、③事例シナリオ学習などを新たに導入した。やり始めたプロジェクトを実現させることは大事ではあるが、この授業にとってプロジェクトは“手段”であり、“目標”は根力（ねぢから）を育てることである。プロジェクトの実現自体が自己目的化し、目の前の事務作業をこなすことばかりに目が行かないよう、学生の目的意識を高めるための授業改善である。（Ⅰ：プロジェクト実習の概要と 2015 年度の授業改善）

2015 年度は 37 名が履修登録し、他に 2 名が（1 年次生なので単位にはならないことを承知で）自主的に参加した。合計 39 名の内訳は、地域連携・地域貢献を目指す「プロジェクト実習 B」に 12 名、国際交流・異文化理解の「同 C」に 10 名、PBL 型インターンシップの「同 D」に 17 名である。

この「B」「C」「D」履修者は、活動内容ごとに幾つかのチームに分かれた。「B」は常陸太田市里美地区で主に活動する「さとみ力伝え隊」と、里美地区と水戸市泉町とをつなぐ活動を行う「泉美・ゆう」の 2 チームから成る。「C」は茨城大チーム「Link」と、茨城キリスト教大チーム「DCE」の 2 チームから成る。「D」はインターンシップの受け入れ先別に、「こみっとフェスティバル」、「公共交通」、「IU+IC×NTT コムプロジェクト」の 3 チームから成る。これらのチーム名は、いずれも学生が話し合っ て命名した名前である。各チームの「1:活動の目標・概要」、授業時間外に行ったミーティング等の「2:活動記録」、「3:会計報告」、「4:活動トピック」、12 月 12 日に一般公開して行った「5:活動報告会 PPT」資料、期末レポートとして提出させた「6:最終レポート」を本報告書の「Ⅱ:チーム別活動報告」に載せた。

「プロジェクト実習」では、学生がキャンパスから「外に出て学ぶ」機会を多く設けている。その

一つが「先進地実地研修」である。教員の引率のもと、他大学の先進事例をじかに見聞きし、自らの取り組みと比較して検証するように指導した。2015年度は拓殖大学で行われた「社会人基礎力グランプリ 2016 関東地区予選大会」と、山形大学を始めとする複数の大学と山形県最上郡金山町との連携に基づく取り組みを参観した。前者は関東の諸大学のすぐれたプロジェクト活動から学ぶものであり、後者は大学と地域との連携の理想的な姿（授業終了後も学生が自発的に活動を続けている姿など）を視察して考えを深める貴重な機会となった。（Ⅲ：2015年度 先進地実地研修）

この授業の山場は、年度末に行われる活動報告会である。(1)履修生のリフレクションとプレゼンテーション実習、(2)教員による授業運営と授業改善の報告、(3)お世話になった方々への御礼のご報告、(4)学内と学外への情報発信（広報）の4点を主な目的としている。今年度は2015年12月12日（土）13:00～16:10に人文学部10番教室で実施した。学生各チームの活動報告と、先進地実地研修の報告と、トークセッション「PBL 授業の質保証を考える」がその主な内容である。履修生は、この授業を通してどんな活動をしたかと共に、活動から「何を学んだか」に力点を置いて発表した。トークセッションでは学外協力者と履修学生代表が登壇し、「プロジェクト実習」の学修内容や授業運営を巡って活発な意見交換が行われた。また、16年1月31日（土）13:00～16:10には常陸太田市里美地区里美学習センターにおいて、現地報告会も実施された。会の前半で「プロジェクト実習 B」、先進地実地研修、連携して活動した茨城県立水戸農業高等学校の活動報告が行われ、会の後半では里美産品の試食会と関係者スピーチによる情報交換会が行われた。（Ⅳ：年度末活動報告会）

今年度はまた、来年度以降の新たな展開を視野に入れ、初めての試みも行った。高校において PBL 授業が導入され始めているが、茨城大学の1年次に PBL 授業が開講されていない現状に鑑み、高大間の接続という観点から、1年次生を対象に「初年次 PBL 試行」を実施した。正規の授業ではないので単位にはならないが、人文学部3名、工学部2名の計5名の1年次生が参加し、(1)学内で現地講師による事前レクチャー、(2)現地（常陸太田市里美地区）でのフィールドワーク（里川カボチャの農作業、イノシシ被害地の見学、里美牧場等関係施設の見学など）、(3)事後にレポートを執筆して提出、という密度の濃い内容をこなした。並行して「プロジェクト実習 B」夏季合宿も行われた。（Ⅴ：初年次 PBL 試行（プロジェクト実習 B 夏季合宿フィールドワーク報告を含む））。

「プロジェクト実習」の活動は、多くの組織や個人の皆様からの物心両面にわたる手厚いご支援を戴いて初めて可能となるものです。また、直接的な予算支援としても、本学「COC 地域志向教育支援プロジェクト経費」「人文学部教育改革推進経費」「人文学部後援会経費」からプロジェクト実習全体に対して、山形県最上郡金山町様からは先進地実地研修（遠郊）に対して、茨城県様並びに公益社団法人茨城県青少年育成協会様からは「企画提案チャレンジ支援事業」により、さとみ・あいチームに対して、ご援助を戴きました。末尾ながら、「プロジェクト実習」の学生の活動にご助力を戴いた全ての皆様へ、篤く御礼申し上げます。どうぞ今後とも引き続きよろしくお願い申し上げます。

目 次

巻頭言

はじめに

目次

I : プロジェクト実習の概要と 2015 年度の授業改善

- | | |
|----------------------------|----|
| 1. 茨城大学就業力育成支援事業と根力育成プログラム | 3 |
| 2. プロジェクト実習の位置づけと枠組み | 4 |
| 3. プロジェクト実習 運営体制と課題 | 5 |
| 4. プロジェクト実習 2015 年度の授業改善 | 12 |
| 5. プロジェクト実習 2015 年度シラバス | 23 |

II : チーム別活動報告

- | | |
|---------------------------------|-----|
| 1 : プロジェクト実習 2015 年度の運用 | 29 |
| 2 : さとみ・あい 活動報告 | 35 |
| 3 : 異文化交流プロジェクト 活動報告 | 73 |
| 4 : こみっとフェスティバル 活動報告 | 101 |
| 5 : 公共交通 活動報告 | 119 |
| 6 : IU+IC×NTTコムプロジェクト 活動報告 | 133 |
| [編者追記]「茨城インターンシップフォーラム 2016」に登壇 | 153 |

III : 先進地実地研修

- | | |
|-------------------------------------|-----|
| 1. 趣旨 | 159 |
| 2. 2015 年度先進地実地研修 (近郊) : 東京都文京区拓殖大学 | 159 |
| 3. 2015 年度先進地実地研修 (遠郊) : 山形県最上郡金山町 | 180 |
| 4. 御礼ならびに今後に向けて | 197 |

Ⅳ：年度末活動報告会	
1. 趣旨と経緯	201
2. プロジェクト実習活動報告会（全体報告会）	201
3. プロジェクト実習B活動報告会（現地報告会）	219
Ⅴ：初年次PBL試行(プロジェクト実習B夏季合宿フィールドワーク報告を含む)	
1. 趣旨と経緯	259
2. プロジェクト実習B活動報告会PPT	259
3. 設計理念	262
4. 概要	262
5. 初年次PBL試行・プロジェクト実習B夏季合宿 合同フィールドワーク	280
6. 総括 ―今後に向けて―	286
Ⅵ：成果と課題	301

おわりに

付記

I : プロジェクト実習の概要と 2015 年度の授業改善

1. 茨城大学就業力育成支援事業と根力育成プログラム
2. プロジェクト実習の位置づけと枠組み
3. プロジェクト実習 運営体制と課題
4. プロジェクト実習 2015 年度の授業改善
5. プロジェクト実習 2015 年度シラバス

I : プロジェクト実習の概要と2015年度の授業改善

鈴木 敦

1: 茨城大学就業力育成支援事業と根力育成プログラム

茨城大学は、2010～11年度に「大学生の就業力育成支援事業G P」、2012～14年度に「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」という2つの文部科学省補助金に採択され、一貫して就業力育成教育の充実に取り組んできた。

具体的には、まず本学学生が卒業時に身につけておくべき就業力を「根力（ねぢから）」と名付け、社会人基礎力 (<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>) をベースに本学独自の要素を加えて、根力の構成要素として整理した（図1）。

1. 基礎的素養 *この素養の上に 根力」を構築していく	読み	文章読解能力、論理的思考力、分析力
	書き	文章作成能力、論理的思考力、分析力
	ソロバン	基本的なIT能力
	話す	説明能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力
2. 社会生活力	生活力	自立した生活を実践できる力
	人間関係構築力	生活を送る上で必要な、人間関係を円滑にするための力
	情報収集力	生活を送る上で必要な情報のありかや、入手方法を把握する力
3. 行動力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
	対応力	物事に流されず、疑問に思い主体的に対応する力
4. 思考力	課題発見能力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	想像力	課題が抱える影響、課題解決方法の影響など、ものごとをイメージする力
	課題解決能力	課題の本質を捉え、適切な解決に導く力
5. チームワーキング 能力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

図1: 根力の構成要素

その上で、具体的なカリキュラムとして、「根力養成」「根力強化」「根力実践」の3段階の正課カリキュラムと、正課外カリキュラムの「スキル養成プログラム」、加えて学生一人一人の学習過程を記録し学びの設計に活かすツールである「電子ポートフォリオ」からなる「根力育成プログラム」を、構築・運用している（図2）。詳細は、茨城大学大学教育センターキャリア教育部編『茨城大学就業力育成支援事業報告書（平成22年度～平成26年度）』を参照されたい（図3）。



図3: 茨城大学就業力育成支援事業報告書表紙

各期の全学目標		根力 ねぢから) 育成プログラム			
第一階段	根力養成プログラム： 学生の自発的学びを後押しし、 社会で活躍するための基盤となる能力 =根力を育成するための土台を築く ①フレッシュマンゼミナール： 高校生から大学生へ ②ステップアップ科目群： 自らの方向性を確認して 次の段階へ	個々の分野で直接求められる基礎的スキルを養成し、 「資格」としてオンラインライズする準備を整える スキル養成プログラム	1年	根力養成プログラム ①フレッシュマンゼミナール	電子ポートフォリオにより、入学～卒業までの 学生一人一人の学習過程を、学生自身・教職員 更には地理的に分散している部局間でも共有 スキル養成プログラム (正課外)
			2年	②ステップアップ 科目群	
3年	根力強化 プログラム				
4年			根力実践プログラム		
第二階段	根力強化プログラム： 座学と実地体験を通じて 社会人として要求される能力を 理解 養成する				
第三階段	根力実践プログラム： 実際の活動を通じて、これまで 培ってきた力を確認し 不足点を自覚して、自らを高めて行く				

図 2:根力育成プログラム

2:プロジェクト実習の位置づけと枠組み

プロジェクト実習は、「根力強化プログラム」並びに「根力実践プログラム」の一環として人文学部が開講している通年2単位の専門科目であり、昨今、その導入・拡充が強く求められているアクティブ・ラーニングの中でも、最も負荷の高いものの一つとされる PBL (Project Based Learning) 授業である。同授業は、本学を構成する他の4学部に対しては勿論、連携関係にある茨城キリスト教大学・常磐大学・常磐短期大学に対しても、単位互換科目として開放されている。

プロジェクト実習は、2012年の初開講以来、順次体制を整備・拡充しつつ今年度で4年目を迎えた。今年度の構成を図4に示す。

授業科目名		プロジェクト実習 A	プロジェクト実習 B	プロジェクト実習 C	プロジェクト実習 D
テーマ		総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
段階	対象学年				
根力強化 プログラム	2-4年	プロジェクト 実習A スタッフ編	プロジェクト 実習B スタッフ編	プロジェクト 実習C スタッフ編	プロジェクト 実習D スタッフ編
根力実践 プログラム	3-4年	プロジェクト 実習A リーダー編	プロジェクト 実習B リーダー編	プロジェクト 実習C リーダー編	プロジェクト 実習D リーダー編
	4年	プロジェクト 実習A メンター編	プロジェクト 実習B メンター編	プロジェクト 実習C メンター編	プロジェクト 実習D メンター編

図 4：2015年度プロジェクト実習の構成

(1) カテゴリ A～D について

プロジェクト実習は、2014年度から A～D の4カテゴリに分化した。個々のプロジェクトのカテゴリ分けに当たっては「授業並びにプロジェクトとしての運用のしやすさ」を第一に決定しており、「分類学的厳密さ」はもとより志向していない。それぞれの内容は、以下の通りである。

A：総合

以下の B～D のいずれにも該当しない、多様なプロジェクトの受け皿である。将来、何らかの纏ま

りを持ち、年度を越えた継続的な活動が見込めるテーマが誕生した際には、新たなカテゴリ「E」「F」・・・として切り出すこととなる。プロジェクト実習C・Dは、Aから切り出す形で2014年度に誕生した。

B：地域連携・地域貢献

比較的遠方にフィールドを持ち、地域づくり系の活動を行うもの。2012年度のプロジェクト実習開設時以来、常陸太田市里美地区を主たるフィールドとするプロジェクトが継続的に進められている。

C：国際交流・異文化理解

「国際」「異文化」をキーワードとする活動を行うもの。2012年度のプロジェクト実習開設以来、茨城キリスト教大学の学生チームと共同で、留学生・日本人学生・高校生の交流事業に取り組むプロジェクトが継続的に進められている。また惜しくも中断したが、かつて途上国援助に取り組むグループが活動した時期もあった。

D：PBL型インターンシップ

通常のプロジェクト実習に、夏季休暇中等を利用して2日間以上のいわゆるインターンシップを組み合わせたもの。2013年度に茨城交通株式会社様のご協力を戴いて試行し、2014年度からは水戸市役所様、2015年度からはさらにNTTコミュニケーションズ様のご協力を得て正規開講しており、安定したカテゴリに育ちつつある。

(2) スタッフ編・リーダー編・メンター編について

プロジェクト実習は2年次より履修可能となるが、この区分は学年によるものではなく「過去の受講経験年数」による。学年に関わらず、プロジェクト実習を初めて履修する場合はスタッフ編、2回目はリーダー編、3回目はメンター編となる。従って3年生のリーダー編受講者もいれば、4年生のスタッフ編受講者もいる、という形となる。

また、スタッフ・リーダー・メンターという名称は、必ずしもそのままチーム内における役割分担と直結させなければならないというものではない。チーム内の役割分担はチーム構成員の合議で決定されるため、スタッフ編受講者がチームリーダーとなるケースもありうる。授業設計者としては、このネーミングには少々問題があったかと反省している所である。

(3) チーム構成について

プロジェクトにはチームを組んで取り組むが、1チームの人数は「5名以上9名以下」を原則としている。これは、5名に満たない人数でプロジェクトを遂行するのは概して過重負担となること、10名を越えるチームとなるとえてしてフリーライダーが生じてしまうことによる。

同時に、複数のチームが明確な役割分担の上で「大チーム」を結成し、個々のチームを「大チーム内小チーム」という位置づけとして、フリーライダーの発生を回避しつつ、より大きなプロジェクトに取り組むことも推奨している。2015年度は、プロジェクト実習B・Cでこの方式が採られた。

3:プロジェクト実習 運営体制と課題

プロジェクト実習は、学内・学外の多くの方々のご支援を戴きつつ運営されて来た。2012年度の初開講時に比して、大幅に改善・強化された部分があれば、丸4年を経てもなお改善の道筋さえ見えない部分もある。加えて、近年の大学教育においてはPBLを含めたアクティブ・ラーニング全般の拡充が強く求められるようになった。機会に現状を整理し、アクティブ・ラーニングとりわけPBL授業の拡充に向けた課題を列挙したい。

(1) 教員

PBL授業は、受講生だけでなく担当教員にとっても負荷の大きなものである。このため、プロジェクト実習においては「主担当教員」「副担当教員」「顧問教員」の3段階構成を採っている。それぞれの役割は、以下の通りである。

①主担当教員

プロジェクト実習A～Dそれぞれのカテゴリについての最終責任者。

担当カテゴリに関する外部との調整・予算確保・学外引率を含む教育指導・成績評価ならびにチーム予算の執行管理や各種事務手続き等々、授業に関する事柄全般を担当する。

*成績評価は、副担当教員・顧問教員の意見も参考にしつつ、最終的には主担当教員の判断・責任においてなされる

②副担当教員

A～Dのカテゴリ単位で、主担当教員の補佐ならびに必要に応じて職務代行を担う。当該カテゴリに所属するチーム構成員の成績付与に当たっては、主担当教員にセカンドオピニオンを提供する。

③顧問教員

a：プロジェクトの特性に鑑み、専門的な知見に基づく指導が必要な場合

b：他大学との連携チーム等、地理的制約から主担当教員の指導が手薄になる危惧がある場合

c：1カテゴリに所属するチームが多数に上り、主・副担当教員だけでは指導しきれない場合等に、必要に応じて1チーム単位で顧問教員を置く。主担当教員の上記諸業務の内、教育指導を担うと共に、その成績付与に当たって主担当教員にセカンドオピニオンを提供する。

とはいえ、これはあくまで授業の最前線で学生と向き合う者の体制である。PBL 授業という新しい形態の授業を運営するには、当然ながら高等教育の専門家による・専門知識に裏打ちされた指揮・支援体制が不可欠であるが、少なくとも現時点では本学にそのような体制はない。それぞれの専門分野を持ちつつも、こと高等教育に関しては素人の教員が、独力で勉強し・あるいは見よう見まねで運営している状態である。

(2)職員

PBL 授業は、その教育手法自体が新しいものであるのみならず、学外での教育活動・多様な外部予算の獲得と運用・各種外部組織との緊密な連携等、従来型の大学の授業にはない要素を多々含んでいる。量的な負荷だけでなく、例えば教員がレンタカーを運転しての学外引率等、従来の規則には無かったケースへの対応等、質的にも負荷がかかるケースが多々ある。

過去4年間にわたるプロジェクト実習の円滑な運用は、学部事務職員の献身的な支援無しにはあり得なかった。ただただ感謝あるのみであるが、現在のような体制のままに、今後プロジェクト実習以外にもPBL 授業が開講されていけば、早晩間違い無く事務方の業務キャパを越えると予想される。

(3)他学部・他大学との連携

プロジェクト実習は人文学部開講科目であるが、本学他学部は勿論、連携協定を締結している茨城キリスト教大学・常磐大学の学生にも単位互換授業として開放されている。これは、単に書類上単位互換が可能であるとしているだけではない。茨城キリスト教大学・常磐大学の教職員の皆様には、

- ①春先の単位互換ガイダンスに当たって、本学のプロジェクト実習担当教員が両大学に出向き、両学の学生に向けて直接ガイダンスをさせて戴く
- ②単位互換受講をそれぞれの大学の学生に直接働きかけて戴く
- ③茨城キリスト教大学・常磐大学の単位互換学生を含むチームについて、必要に応じて上記(1)～③の「顧問教員」をご担当戴く
- ④メンバーとして茨城キリスト教大学の単位互換履修学生を含むチームが、学外でミーティングを行うに当たっては、会場として同学が水戸駅前に設置されている同学の水戸オフィス「サテライトIC」(<http://www.icc.ac.jp/org/satellite/index.html>)をご提供戴く
- ⑤プロジェクト実習履修生以外の参加が可能な、下記の催事の開催に当たって、単位互換履修生以外の学生にスポット参加を呼びかけて戴く

a：先進地実地研修（近郊）

第Ⅲ章－2

b：プロジェクト実習B・収穫祭

第Ⅱ章－2

さとみ・あい活動報告

c：プロジェクト実習活動報告会 第V章-2

d：プロジェクト実習B活動報告会 第V章-3

⑥上記c・dの開催に当たっては、両大学から多数の教職員の方々にご参加・ご登壇戴く等々といった、当該年度さらには次年度以降の単位互換履修を促進するための、具体的かつ手厚いご支援を戴いている。

プロジェクト実習の重要な設計理念の一つとして「専攻・学年等、バックグラウンドを異にする学生がチームを組んで課題に取り組むことで、多様な価値観・発想に触れ、新たな価値を共創する」というものがある（第V章図1スライドNo.2-5に言う「化学反応型」）。そのためには、他学部・他大学からの履修者が多数加わってくれることが理想である。しかし、他学部・他大学の教職員の皆様からのご支援にも関わらず、現状では本学人文学部学生が大多数を占める状態が続いている。近年、常磐大学・茨城キリスト教大学との間で連携協定が締結され、連携大学間を結ぶ遠隔授業システムの整備も進みつつあり、環境は着実に整備されてきている。しかし、残念ながら当の学生にとっては、他大学は依然として「心理的に遠い」存在のままなのであろう。

茨城県は長らく大学コンソーシアム不在県に留まっていたが、2015年3月31日に本学・茨城キリスト教大学・茨城工業高等専門学校・常磐大学との間で「いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム」が成立した（<http://www.ibaraki.ac.jp/news/2015/03/242040.html>）。2015年度には、更に県立医療大学を加えた県内5つの高等教育機関による「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）」もスタートした。単なる単位互換協定を越えた連携の成立により、地域貢献や研究の分野でも一層の協力関係強化が進むものと期待される。それが最終的に単位互換体制の強化にも繋がって欲しいと願う。

(4) 地域・組織・個人との連携

プロジェクト実習はA～Dの各カテゴリを通じて、地域・組織・個人の方々とは様々な形で連携させて戴いている。特に「地域連携・地域貢献」を掲げるプロジェクト実習Bにおいては、大久保太一常陸太田市長を始めとする常陸太田市役所の皆様の周到なバックアップの下、フィールドである常陸太田市里美地区の方々との緊密な連携を維持させて戴いている。詳細は、第II章-2 さとみ・あい活動報告・第IV章-3・第V章を参照されたい。

一方で、本学であれ他の組織であれ日本における「組織」の常として、「担当者ないし担当者の上司が替わると、時として方針も一転する」という問題がある。連携の現場に身を置く者としては、関係の維持・拡大に努めつつも、いつ方針が変わって状況が一変してしまうか、それによって連携相手との信頼関係を傷つけてしまうことになりはしないか、常々不安を抱えることとなる。現実には、過去4年の間には（本学側に起因するもの・連携組織側に起因するものの両方で）そのようなケースも無かった訳ではない。PBL授業の中でも学内での完結が比較的容易なProblem Based Learningとは異なり、概して学外との連携が求められることの多いProject Based Learningの運用に当たっては、常に意識しておかざるを得ないリスク要因である。

(5) 学外協力者との各種会議

① 提案者－学生ミーティング

プロジェクト実習では、プロジェクト課題は年度当初の一斉授業の際に「履修学生自身から」と共に「学外の協力者の方から」も提案して戴く。さらに、実際のプロジェクト遂行に当たっては、より多くの外部の方々にご協力戴く事となる。プロジェクト実習を開設した2012年度当時は、果たしてどれほどのご支援を戴けるか甚だ不安であったが、幸いにして質・量共に予想を遥かに上回る組織・個人の方々からご協力を戴け、連携関係はその後にも順調に拡大を続けている。

学外からご提案戴いたプロジェクト課題に取り組むチームは、ご提案者とメール等で恒常的にご相談させて戴きつつプロジェクトを進めて行く。ミーティングは、第II章に示すように、通常は学生のみで行われるが、節目節目ではご提案者にもご参加戴いて、学内・学外で提案者－学生

ミーティングを開催し、対面での意見交換の場を設けて戴いている。

言うまでもなくご提案者はなべてお忙しい方々ばかりであり、労力・時間共に大きなご負担を戴いている。中でも、プロジェクト実習Dにご提案を戴いた NTT コミュニケーションズ株式会社の吉川昌吾様・川口高弘様には、わざわざ東京から水戸までお運び戴いたことが一再ならずあった。加えて、夏季休暇中のインターンシップ（第Ⅱ章-6 IU+IC×NTT コムプロジェクト活動報告4-(2)）受け入れに当たっては、吉川様からは詳細な実施報告と参加学生に対する評価を、川口様には学生の事後レポートに対する講評を戴いた。いずれも、今年度の評価は勿論、今後のプロジェクト実習の運営・改善に活用させて戴きたい内容が多々含まれていた。性質上、本書に全文を掲載することができないのが大変残念であるが、ご本人のご了解を得て、一部を図5・6に抄出する。

お二方を始め、ご支援を賜った学外協力者の皆様には、ただただ感謝あるのみである。

図5:実施報告・抄（吉川様）

<p>鈴木先生、神田先生</p> <p>NTTコミュニケーションズ 吉川です。 いつもお世話になっております。</p> <p>ご丁寧に、メール頂きありがとうございます。 先ほど（17:20頃）、無事に1日目を終了し、皆さんに帰宅してもらいました。</p> <p>本日は、座学が中心でしたが、緊張もありますし、内容も、 ・NTT Com の会社説明 ・通信の仕組み ・Web マーケティング関連 等で、なれない話題ばかりなので、かなり、疲れたかと思えます。</p> <p>明日は、グループワークが中心で、Web サイトのイメージ（案）を作ってもらい、Web ペンダーとの打合せにも参加頂く予定です。</p> <p>6人とも、緊張の中にも、少しずつなじんできたようですので、(成果物のレベルは別として)、彼らなりの意思が反映されたものを、作り上げてもらうことを楽しみにしています。</p> <p>それから、明日にでも、招待メールが届くと思いますが、「Biz グループワーク (https://www.ntt.com/groupwork/)」というサービスのIDを、先生方も含めたメンバー分確保しました。 企業版の SNS みたいなもので、特定の話題について、掲示板に書き込んだり、関連資料（ファイル）をアップできるものです。 更新があるたびに、メールが届きますし、とりあえずアクセスすれば、最新の状況や過去の経緯なども確認できるため、プロジェクトの進捗状況を確認したり、アドバイスなどの意見を書き込むことが、自分の都合でできるメリットがあります。</p> <p>先日のマイポケットは、個人向けサービスですが、写真の整理・保管や共有などに役に立つと思いますので、並行して使って頂けるかと思えます。</p> <p>メールが長くなり申し訳ありません。 明日も終了しましたら報告いたします。</p> <p>引き続き、よろしくお願いたします。</p>	<p>鈴木先生、神田先生</p> <p>NTTコミュニケーションズ 吉川です。 いつもお世話になっております。</p> <p>2日目も無事に終了し、先ほど（17時過ぎには）、解散しました。</p> <p>本日も、内容的には、かなり HARD に感じたようで、かなり、疲弊してしまっただけです。 (笑)</p> <p>ホームページを作るという、一点シンプルな内容ですが、 ・誰をターゲットにするのか、 ・何を見てもらいたいのか、 ・見てもらった人に何が役に立つのか・・・ という「コンセプト決め」そのものに、チャレンジ頂いていますので、自分が訴求したい内容が曖昧であればなおさら、突き詰めると、難しいと感じると思います。 「産みの苦しみ」だと思えます。 サービスローンチに向けた我々の仕事も、一部ですが、理解頂けたものと思えます。</p> <p>また、今日は、様々な企業のマーケティングを手掛けている Web ペンダーさん（検定サイトの構築も実施しています）にも来てもらい、製品マーケティングの話もしてもらいました。彼が扱ったものには身近な製品も多数あり、彼らにとっても、刺激になったことと思います。また、その際にも、コンセプトをしっかりと考えることの重要性や、考えたことによっては、失敗した時のリカバリーが早くなることといったことを強調してもらい、さらなる「産みの苦しみ」を味わって頂くという状況でした。。。</p> <p>今後は、昨日ご案内した「Biz グループワーク」等を活用し、宿題となっている「コンセプト案」と「今後のスケジュール」を提示頂く予定で、それに対して、私たちがコメントをするなどしてペンダーへ発注できるレベルに仕立てていくこととなります。</p> <p>恐らく、9月のいずれかの日に、後期の授業の関係の打合せなどで、先生方にお会いするタイミングもあろうと思いますので、その際には、彼らにも連絡して、時間を取って議論を深めることしたいと思います。</p> <p>ちょっと、大人しい感じはしますが、それぞれイキイキと取り組んでくれていたので、良かったかと思えます。 2日間が無事に終わって、こちらもホッとしているところです。 それぞれのメンバーに対する印象などは、少し、メモにしておきますので、先生方に近い内にお渡ししたいと思います。</p> <p>雑駁ですが、ご報告まで。 引き続き、よろしくお願いたします。</p>
---	---

図6:レポート講評・抄（川口様）

<p>学生さんのレポートを拝読させていただきましたが、いずれの方にとっても弊社におけるインターンが貴重な体験になったという印象を受けました。とりわけ、仕事の現場と学問のそれとの乖離を実感していただくことで、社会人になるために「今の自分に何が足りないのか」という問題について考えるよい機会となったようです。また、それぞれの学生さんは、具体的な問題意識を持ってインターンに参加されたので、学ぶことも少なくなかったように感じました。</p> <p>学生の受け入れ側として感じたことはいろいろありますが、一つだけ申し上げれば、これまで大学で学んださまざまな知識を、インターン経験においてもう少し発揮していただいてもよかったように思いました。具体的には、プロジェクト活動において顕在化したさまざまな問題を、「目的と手段」「原因と結果」「時間と空間」といったフレームで分析し、その結果を手がかりとしてプロジェクト活動を修正していくことです。申し上げるまでもなく、こうしたスキルは、大学卒業の要件となっている学位請求論文の執筆において必要になると思われます。「大学で学ぶ」とこと「社会で働く」とことは、表面的にはまったく異なる営みのように見えますが、問題意識を持って何かを改善することは、両者に共通している性質のように思われます。</p> <p>最後に、インターンに参加していただいた学生さんの益々のご活躍を、心よりお祈り申し上げます。</p>

②連携校とのミーティング

連携関係にある茨城キリスト教大学・常磐大学・茨城県立水戸農業高等学校の関係教職員の皆様とは、チーム活動の進捗状況だけでなく、連携活動に纏わる各種事務手続き等についても、メールだけでなくしばしば対面でもご相談させて戴いた。プロジェクト実習の運用には、大学・高校のいわゆる「通常の授業」にはない事案が多数存在する。連携校のご協力により、2015年度も、それらを一つ一つ解決しつつ、滞りなく全日程を終えることができた。篤く御礼申し上げます。

③オトナ会議

「オトナ会議」は、主として水戸市内に職場を持つプロジェクト課題提案者の方々と、プロジェクト実習担当教員による情報交換の場である。中核メンバーは、以下の5名の方々である（敬称略）。

- ・宮本紘太郎 泉町二丁目商店街振興組合
- ・須藤 文彦 水戸市役所 市長公室 地域振興課
- ・鬼沢 隆文 水戸市役所 市民協働部市民生活課
- ・田治亜紗子 水戸市役所 市民協働部市民生活課
- ・西島 佳子 JTB 関東法人営業水戸支店

それぞれにプロジェクト課題をご提案戴いているため、当該チームの取り組み状況に関する情報交換も勿論行われるが、プロジェクト実習という授業全体の運営や改善についての、「一歩踏み込んだ意見交換」が真骨頂である。

提案者－学生ミーティング同様、メール等による恒常的な情報交換に加えて、節目節目で会合を持ち、率直な意見交換をさせて戴いている（図7・8）。次節に記す2015年度の授業改善も、オトナ会議でのご指摘が大きな契機となってなされたものである（図12スライドNo.16・17）。



図7:オトナ会議(学外開催時)



図8:オトナ会議(学内開催時)

④拡大オトナ会議に向けて

上述の如く、プロジェクト実習の改善・運用に関しては、学外の多くの方々から積極的なご支援を戴いている。唯一残念なのは、距離的・時間的制約から、どうしてもご提案別・個別のご相談になってしまいがちなことである。個別のご相談であってもこれだけプラスになるのである。一堂に会して意見交換をさせて戴ければ、さらにその比ではない成果が期待出来よう。既に2014年度の里美地区現地報告会の折りに部分的ながら試みたことであるが、いずれ年度末の活動報告会の折り等を活用して、オールスターキャストの「拡大オトナ会議」を開催させて戴けないかと夢想している。

学外の方々に、プロジェクト課題をご提案戴くのみならず学生チームへの対応からさらには授業改善レベルまで意を用いて戴ける体制を築くことができたのは誠に幸運なことである。心より感謝申し上げますと共に、プロジェクト実習が大いに誇れる実績であると自負している。

(6) 予算

2014年度までは、前述の文部科学省補助金を背景に、若干の学内予算を調達することで運用が可能であった。しかし、今後は全ての予算を担当教員の裁量で確保しなければならないという状態である。関係各位のご尽力により、2014年度以前も含めて学部予算・全学予算・さらに2015年度にはCOC補助金等からご支援を戴く事ができ、これまで予算が原因で運用が破綻することは無かった。皆様のご支援に、篤く御礼申し上げます。

しかし一方、授業担当教員が・前年度末～新年度冒頭にあちこち申請したり頭を下げたりしてどうか運用予算を確保するという不安定な体制は依然として続いている。2012年度のさとみ・あいチーム、2015年度の泉美・ゆうチーム（第Ⅱ章-2 さとみ・あい活動報告4-(4)）のように、学生自ら外部予算を確保できたケースもあるが、あくまで例外的なケースに留まる。学内で学生自身がトライできる予算としては、かつては「学生地域参画プロジェクト予算」があったが、現在ではエントリー対象が「授業と無関係の学生団体」に厳しく制限されるようになり、申請は不可能となっている。

大学の予算状況は今後ますます厳しくなることが予想され、いずれ（最速で2016年度には）、予算が確保出来ずに一度動き始めた授業が頓挫する、という事態が発生することも予想される。加えて、幸いにして予算が確保出来たとしても、発注・検収・学生への受け渡しその他の細々とした業務が大量に発生する。かくしてプロジェクト実習の担当教員は、通常の授業においてイメージされる「授業負担」を大きく越える様々な業務をこなさなければならない状態にある。新しい授業形態そのものへの抵抗感に加えて、新たにPBL授業に取り組もうとする教員にとってのハードルとなると思われる。

(7) 施設

PBL授業の運用に当たっては

①チームで会議や作業を行うことができる設備（ホワイトボードやプロジェクタ等）を備えたスペース

②チームの資材を安全に保管し、随時簡単な手続きで出し入れができるスペース

の二種類の施設が必要である。

①は、昨今多くの大学でラーニングコモンズ設置の一環として整備が進められている。本学においても、図書館の増築や共通教育棟の整備の一環として、着実に整備が進められて来ている。現在のPBL授業やアクティブ・ラーニング授業の運用規模に照らせば、ほぼ心配の無い環境が整備されていると言えよう。しかし、下記(8)に照らして十分な整備計画が予定されているか否かについては、寡聞にして知らない。

②は、特にProject Based Learningにおいて極めて重要でありながら、概して忘れられがちな施設である。プロジェクトの遂行に当たって必要となる資材をキャンパス内に保管できる施設の有無で、学生チームの活動しやすさは大きく異なってくる。プロジェクト実習については、学部のご好意により2013年度から授業全体として20平米の部屋を一つ宛がって戴いており、上記①②の両方を兼ねるスペースとして、大いに活用させて戴いている。ご配慮に感謝申し上げます。

今後、本学としてPBL授業を全学的に拡充する際には、プロジェクト実習にご提供戴いている程の対応は望めないとしても、最低限ロッカーの大きめの引き出し一つであっても「チーム固有の資材保管スペース」を準備することを御検討戴きたい。

(8) 第3期中期計画とPBL授業／アクティブ・ラーニングの拡充・その課題

本学の「第三期中期目標・中期計画素案」の第4ページには、「新たな共通教育の展開」としてPBL授業を含むアクティブ・ラーニング全般の重視が謳われており、評価指標の②「学士課程全体を通じてのPBL科目受講者数」の目標として「全学部生が受講」という具体的な文言が盛り込まれている。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/1363013_15_1.pdf

換言すれば「茨城大学の全ての学生が、卒業までに最低一回はPBL授業を履修する」ことが、目標とされているのである。

これを実現するためには、少なくとも下記の3項目の対応が不可欠と考える。以下、「教育の現場での必要」から「大学組織としての必要」へと遡る形で記す。

①PBL 授業を実際に担当する教員を、飛躍的に増加させる

本学の全ての学生に PBL 授業を履修させるには、当然ながら PBL 授業の開講本数を飛躍的に増やす必要がある。本事案の規模の大きさに照らして、その主体はプロジェクト実習のような Project Based Learning ではなく、前述の通り比較的負荷の少ない Problem Based Learning にならざるをえないと予想されるが、いずれにしても PBL 授業担当教員の数を大幅に増やさねばならないことに変わりはない。

大学教員は、それぞれの分野の専門家ではあっても「PBL 授業の専門家」ではない。専門性に拠って立つ大学教員に、専門外の分野に「一歩踏み出して戴く」ためには、そのためのハードルを少しでも低くし、抵抗感を減らすことが重要である。具体的には、専門分野に関わらず有効な「マニュアル」や「成功ならびに失敗の事例集」等の教員用資料、並びに授業の現場で使える「議論の進め方」「情報検索の仕方」「ループリック」等の具体的な教材類を、大学として予め整備し提供することが必要である。

また、実際の授業運営に伴って発生する様々な課題に対して、専門知識を背景に助言等の支援をしてくれる人材が(特に PBL 授業の全学的拡充の初期においては)非常に重要な存在となろう。

②PBL 授業の運用に必要な各種体制を整備する

PBL 授業そのものへの抵抗感を減じさせることができたとしても、例えば上記(6)の如く、個々の担当教員が個別に・何もかもこなさなければならない体制では、積極的に取り組む教員が多数出てくるとは思えない。事務方の負担も然りである。学外との関係を、責任を持って安定的に維持する体制(或いは組織としての責任感・覚悟)も不可欠である。大学の方針に従い、教職員の協働により、運用に纏わる各種体制の整備が必要となる。

③本学の然るべき部署に高等教育の専門家を任用し、PBL 授業の全学的拡充を推進するに当たっての「耳目」「頭脳」機能を付与する

繰り返しになるが、上記①②は個々の教員や個別の部署で散発的に取り組んでいても、どうにもならない。大学における教育を巡る環境がかつてないスピードで変化中、高等教育に関する専門的なバックグラウンドを持つ人間が「耳目」となり「頭脳」となって情報を収集・分析し、必要とされる事業の全体像を描き、必要な諸施策を体系的に明示することが求められる。その上で「学長ならびに大学執行部のイニシアチブ」、換言すれば学長ならびに大学執行部が「司令塔」となって具体的な施策を強力に進めてゆくことが、あるべき姿ではないだろうか。現状で、本学には「司令塔」はあり「現場担当者候補」もいるが、「耳目と頭脳」を担う要員が欠落しているように思えてならない。

近年の高等教育学界におけるアクティブ・ラーニングあるいは PBL に関する議論をリードしておられる、京都大学の溝上慎一教授は、その著書『<深い学び>につながるアクティブ・ラーニング』(河合塾編 東進堂 2014. 4. 10 pp. 277-278)において「(一般に高等教育の先進地と目されているアメリカにおいてさえ)アクティブ・ラーニングについて体系的にまとめた学者がいたり、理論的なアクティブ・ラーニングの大家の本があったりするわけではありません」「アクティブ・ラーニングというのは総称です。専門分野や課題の内容によって、多くの技法があります。」と述べておられる。専門分野・クラスサイズ・運用形態を問わず、普遍的に適用可能なアクティブ・ラーニング技法がある訳ではなく、個々の教員がそれぞれの担当授業の特性を踏まえて、独自に学び・工夫して構築していかねばならないということであろう。しかし、誰も彼もがゼロからスタートしていたのでは、大学全体として必要とされる労力は膨大なものとなり、結局は画餅に帰すこととなろう。高等教育の専門家によるイニシアチブと支援が、是非とも必要であると考えられる所以である。

(9) 今後に向けて

1 学年約 1,600 名の学生を有する本学の規模から見れば、高々 40 名程度の履修生で運用されて来たプロジェクト実習は、極めて小規模な存在に過ぎない。さればこそ不備・不安定な条件下でも、限られた関係者の努力・ご支援でどうにか破綻することなく運営してこることができた。しかし、今後本学としてアクティブ・ラーニング、就中 PBL 授業を全学的に拡充してゆこうというのであれば、そのような対応ではもはや応じきれない。組織的な体制整備が焦眉の課題であると考えている。

4: プロジェクト実習 2015 年度の授業改善

授業改善の具体的な内容については、2015 年 12 月 12 日に本学水戸キャンパスで開催された、プロジェクト実習活動報告会において報告した。その際の PPT を次ページ図 12 に示す。

過去のプロジェクト実習は、ややもすれば活動に追われ・活動自体が目的となってしまうかねない点が、オトナ会議さらには年度末活動報告会参加者からも指摘されていた。そこで、2015 年度は年度始めの一斉授業（下記①～⑤）を 9 コマに拡大し、内容を強化して、学生個々人が明確な目的意識を持って履修するように促す体制を整えた（図 13）。

① ガイダンス

従来の内容に加えて、今年度は特に「目的意識の明確化の必要性」を強く打ち出した（図 12 スライド No. 13・14）。

② 受講目的の明確化

マインドマップによる自己分析（図 14）を踏まえ、根力の構成要素ルーブリック（図 15）に基づき、個人の達成目標ルーブリック（図 16）を作成することで、自らの受講目的を言語化・明文化することを課した。

③ 企画プレゼンと参加プロジェクトの決定

1 コマの前半を従来通り企画プレゼンとした上で、後半は学生が興味に応じてそれぞれの提案者の周りに集まり、個別に質問をする形を採った。その上で、履修生には参加希望プロジェクトについて第一希望 400 字程度・第二希望 100 字程度で希望理由を文章化することを課した。

④ チーム分けと役割分担

事例シナリオ（図 17・18）による学習を導入し、チーム活動にありがちな問題点を認識させた上で、自らが所属チームで果たすべき役割について自覚を促した。

⑤ プロジェクト基本構想の策定と発表

以上を踏まえて、チームでの議論の進め方としてブレインストーミングと KJ 法（図 19）を紹介・実践させ、その上でプロジェクトの基本構想の策定と発表に進む体制とした。

図 13: 授業風景(左: 企画プレゼン 右: 個別質問会)



図 12: 活動報告会 PPT

茨城大学

4年目を迎えたプロジェクト実習

質保証に向けた改善への取り組み

茨城大学・大学教育センター
副センター長(キャリア教育部長)
人文学部プロジェクト実習担当教員
鈴木 敏
atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

茨城大学

プロジェクト実習の背景(1) 就職力と就業力

就職力:
面接対策などの、就職試験突破のための力

就業力:
就職活動時だけでなく、
就職後も活躍して行ける
ための種々の能力の総体

茨城大学

プロジェクト実習の背景(2) 「根力(ねぢから)」とは

大学生が卒業時に 身につけているべき**就業力**

経産省「社会人基礎力」をベースに
「根力の構成要素」を選定

茨城大学

プロジェクト実習の背景(3) 根力の構成要素

1. 基礎的素養 *この素養の上に 12能力を構築していく	語学 読書 ITスキル 英語 生活力	文章読解能力・読解的想像力・分析力 文章作成能力・読解的想像力・分析力 基本的な能力 読解能力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力 自らの生活を実践できる力
2. 社会生活力	人間関係構築力 情報力	生活を送る上で必要な、人間関係を円滑にするための力 生活を送る上で必要な、情報とどこにあり、どのようにすれば入手できるかを把握する力
3. 行動力	主体性 動機付け力 実行力 調整力	物事に進んで取り組む力 他人に動かしは難い力 目的を達成し、結果に責任を負う力 物事に先回りし、疑問に思いを具体的に解消する力
4. 思考力	課題発見力 計画力 整理力 実行力	課題を分析し、目的や課題を明らかにする力 課題の解決に向けたプロセスを具体的に準備する力 課題に取り組む準備、情報収集の方法を整理し、状況に依って調整する力 課題の本質を捉え、適切な解決方法を提示する力
5. チームワーク能力	柔軟性 状況把握力 規律性	相手の意見や立場を尊重し理解する力 自分と他者の人やや物事との関係性を理解する力 社会的ルールや人の約束を守る力
	フレキシビリティ アタリマエの発想力	状況の変化に対応する力 リスクの発生源に注意する力

茨城大学

プロジェクト実習の背景(4) プロジェクト実習の位置

各期の全学目標	根力(ねぢから)育成プログラム
第一段階 無力量成プログラム 単位の修得や単位取得を目指す力 *履修を希望する以上の単位を履修し、 ①履修の計画を立てる力 ②履修の計画を実行する力 ③履修の計画を振り返る力 ④履修の計画を評価する力	1年 根力量成プログラム ①スケジュールマネジメント 2年 ②メンタリング 3年 根力強化プログラム 4年 根力量成プログラム
第二段階 無力量成プログラム 履修の計画を立て、これを踏 まえて履修する力 *履修を希望する以上の単位を履修し、 ①履修の計画を立てる力 ②履修の計画を実行する力 ③履修の計画を振り返る力 ④履修の計画を評価する力	3年 根力強化プログラム 4年 根力量成プログラム
第三段階 無力量成プログラム 履修の計画を立て、これを踏 まえて履修する力 *履修を希望する以上の単位を履修し、 ①履修の計画を立てる力 ②履修の計画を実行する力 ③履修の計画を振り返る力 ④履修の計画を評価する力	4年 根力量成プログラム

茨城大学

プロジェクト実習 2015年度の構成

授業科目名	プロジェクト実習 A	プロジェクト実習 B	プロジェクト実習 C	プロジェクト実習 D
テーマ	総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
対象 学年				
根力強化 プログラム	2-4年 プロジェクト 実習A スタッフ編	プロジェクト 実習B スタッフ編	プロジェクト 実習C スタッフ編	プロジェクト 実習D スタッフ編
根力量成 プログラム	3-4年 プロジェクト 実習A リーダー編	プロジェクト 実習B リーダー編	プロジェクト 実習C リーダー編	プロジェクト 実習D リーダー編
	4年 プロジェクト 実習A メンター編	プロジェクト 実習B メンター編	プロジェクト 実習C メンター編	プロジェクト 実習D メンター編

*2015年度はプロジェクト実習A相当のテーマは無し

茨城大学

PBL授業の特色と 担当教員のスタンス

- Project Based Learning (課題解決学習)
アクティブラーニング(能動的学習)の一種
学生がプロジェクトに取り組むことを通じて
自発的に学ぶ
- 担当教員のスタンス
「学習環境提供者」「相談相手」=勘所は「我慢」
「わかっちゃいるけどやめられない」との戦い・葛藤
⇒「教育の場では許されること」と
「社会では許されないこと」との見極め(影加減)

茨城大学

*学生向けガイダンス用スライド

PBL授業 プロジェクト実習の特色

- 茨城大学就業力育成プログラムの中核
- プロジェクト+追加アイテム
- 2年生~4年生向け
- 他大学からの受講、大歓迎
→大学・学部・学年の異なるメンバーで
チーム(5人~9人)活動
- 通年2単位
→「単位集め」には不向き
→「外」との繋がり=責任感が必要

*学生向けガイダンス用スライド

名城大学

プロジェクトの 提案・選択は自由!

1. 昨年度の履修者が提案した
継続プロジェクトに参加する
2. 学外から提案された
プロジェクトに参加する
3. 自分でやりたいプロジェクトを提案して
メンバー(=自分を含めて最低5人)を
集める

どれでもOK!

9

*学生向けガイダンス用スライド

名城大学

活動予算について

1. 1チーム当たりMAX4万円を配分
→「使い切る」必要なし。節約に努めて下さい
→用途によっては制限あり。
2. 不足分は、チームごとに自前で調達
→「学内・学外の、この種の活動に対する
補助金に応募する」
「連携相手と交渉する」
「学園祭出店等で稼ぐ」 等々
→「計画遂行の為に予算調達」自体が
根力育成のトレーニング!

10

*学生向けガイダンス用スライド

名城大学

参加姿勢の考え方(1)

「自分が動かなければ回らない」

- ・ チームは5人以上9人以下
- ・ 誰もが何らかの役割分担
- ・ 「自分の頭で考える」「報・連・相」を
怠れば、チームは勿論
「学外の協力者の皆さん」に迷惑

**「学生だから」では許されない
=社会人を疑似体験**

11

*学生向けガイダンス用スライド

名城大学

参加姿勢の考え方(2)

「やむを得ない欠席は必ず生じる」

- ・ 単位付与の規定時間を自ずと越える活動計画
→ 正当な理由があり、チーム・学外協力者・
担当教員にきちんと報告した上での
くやむを得ない欠席を一定程度保証

~~「欠席は罪」~~

**将来、必要な休暇も取りながら、支障なく
職務をこなしていくトレーニング**

12

*学生向けガイダンス用スライド

名城大学

プロジェクト実習の勘所(1)

***プロジェクト貫徹! 万歳!!**
**…だけ? だったら、
サークルと何が違うの?**

***「教えて貰える」ことは
何もない!**

13

*学生向けガイダンス用スライド

名城大学

プロジェクト実習の勘所(2)

だから!

1. プロジェクト貫徹から何を学ぶの?
「自分にとっての学び」を、明確に設定!
2. PJ実習に取り組む自分の姿勢・思考・
行動は、自ら設定した「学び」の達成に
叶ったものか?
常に検討→「明日の活動」に反映
3. 自分で学ぶ・周りから「盗む」

14

2012~2014

名城大学

プロジェクト実習の大まかな流れ

4月~5月:
ガイダンス→前年度チーム代表による活動紹介→
プロジェクト提案→チーム結成→チーム別活動→構想発表会

6月~前期末:
チーム別活動→中間報告会

夏期休暇~後期初頭:
チーム別活動→中間報告会

11月ごろ(チームにより変動あり。概して学園祭時期)
チーム別活動→ピークとなる活動・催事

11月後半~1月末:
チーム別活動→先進地実地研修(2013~)→活動報告会

1月末~年度末:
リフレクション→報告書作成

適宜、追加アイテムを挿入
(朝日新聞講座・PROGテスト等)

15

名城大学

「オトナ会議」

「オトナ会議」とは?

- ・ 2013年以降、年数回・不定期開催の
プロジェクト実習に学外から課題をご提案下さった
水戸市内に所在する官庁・企業の皆様と
プロジェクト実習担当教員による
プロジェクト実習の設計・運営に関する意見交換の場
* 距離を超えた拡大も模索中(2014年12月7日オトナ合宿in里美)

中核メンバーは?

- ・ 泉町二丁目商店街振興組合 : 宮本様
- ・ 水戸市役所 : 須藤様・鬼沢様・田治様
- ・ JTB関東 法人営業水戸支店: 西島様

ご支援、ありがとうございます! <(_)>

16

オトナ会議の分析 開講後3年を過ぎて

茨城大学

教員

- ・ PBL技法自体を学びながらの授業運営
- ・ 予算確保、学外協力者の開拓・調整
- ・ 授業＝学内を前提とした諸規則の壁との戦い 等々

学生

- ・ 「先輩」が殆どor全くいない中での取り組み
- ・ 学外の方々は勿論、担当教員との「未知の間合い」
- ・ プロジェクトに対する責任感とオーバーワーク

プロジェクト遂行自体が目的化していなかったか？
プロジェクトを通しての「学び」こそが目的だった筈！

17

授業の質保証 二つの局面

茨城大学

1. 授業の設計と運用

2. リフレクションと
成績評価

18

1への対策

茨城大学

これが必要！(1) 履修目的の明確化

- ・ 自己の現状分析：「根力構成要素ルーブリック」記入
マインドマップ作成&学生間意見交換
- ・ 取組対象の研究：PJ提案者との直接面談(質問票作成)
- ・ 選択理由の文化化：取組希望PJとその理由
- ・ 履修目的の明確化：「個人の達成目標ルーブリック」作成

これが必要！(2) 課題発見技法の実践学習

- ・ 役割の自覚：事例シナリオ学習
- ・ 課題発見技法(1)：ブレインストーミングとKJ法AL
- ・ 課題発見技法(2)：BSとKJでチーム活動構想立案
→2015年度プロジェクト実習冒頭に組み込み

19

2015 プロジェクト実習の大まかな流れ

茨城大学

4月～6月前半：
ガイダンス→根力R→前年度代表チームによる活動紹介→マインドマップ→プロジェクト提案→直接面談→希望理由書→目標R→チーム結成→事例シナリオ→BSとKJ法のAL→チーム別活動(BSとKJ法で構想立案)→構想発表会

6月後半～前期末：
チーム別活動→中間報告会

追加アイテムも
適宜差し替え

夏期休暇～後期初め：
チーム別活動→中間報告会

11月ごろ (チームにより変動あり。概して学園祭時期)
チーム別活動→ピークとなる活動・催事

11月後半～12月前半：
チーム別活動・先進地実地研修→活動報告会(約50日編り上げ)

12月後半～年度末：
リフレクション→報告書作成

20

主な追加教材

—お手元の資料をご覧ください—

茨城大学

1. 根力の構成要素ルーブリック
2. マインドマップ解説書
3. 個人の達成目標ルーブリック
4. 事例シナリオと課題(雛形)
5. BS(ブレインストーミング)とKJ法解説

21

中断したアイテム

—お手元の資料をご覧ください—

茨城大学

1. 朝日新聞講座(原因は主に日程)
出張講座→活動紹介文作成→朝日新聞講師による添削→ポスターセッション
2. PROGテスト(原因は主に予算)
「コンピテンシーを測る」テスト
データは継続的に蓄積されてこそ将来の財産になるのだが...
来年度以降の復活はなるか？

22

2015年度 授業の設計と運用 改善の試み

茨城大学

さて、効果の程は？

23

ご清聴 ありがとうございました

茨城大学

鈴木 敏
atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

24

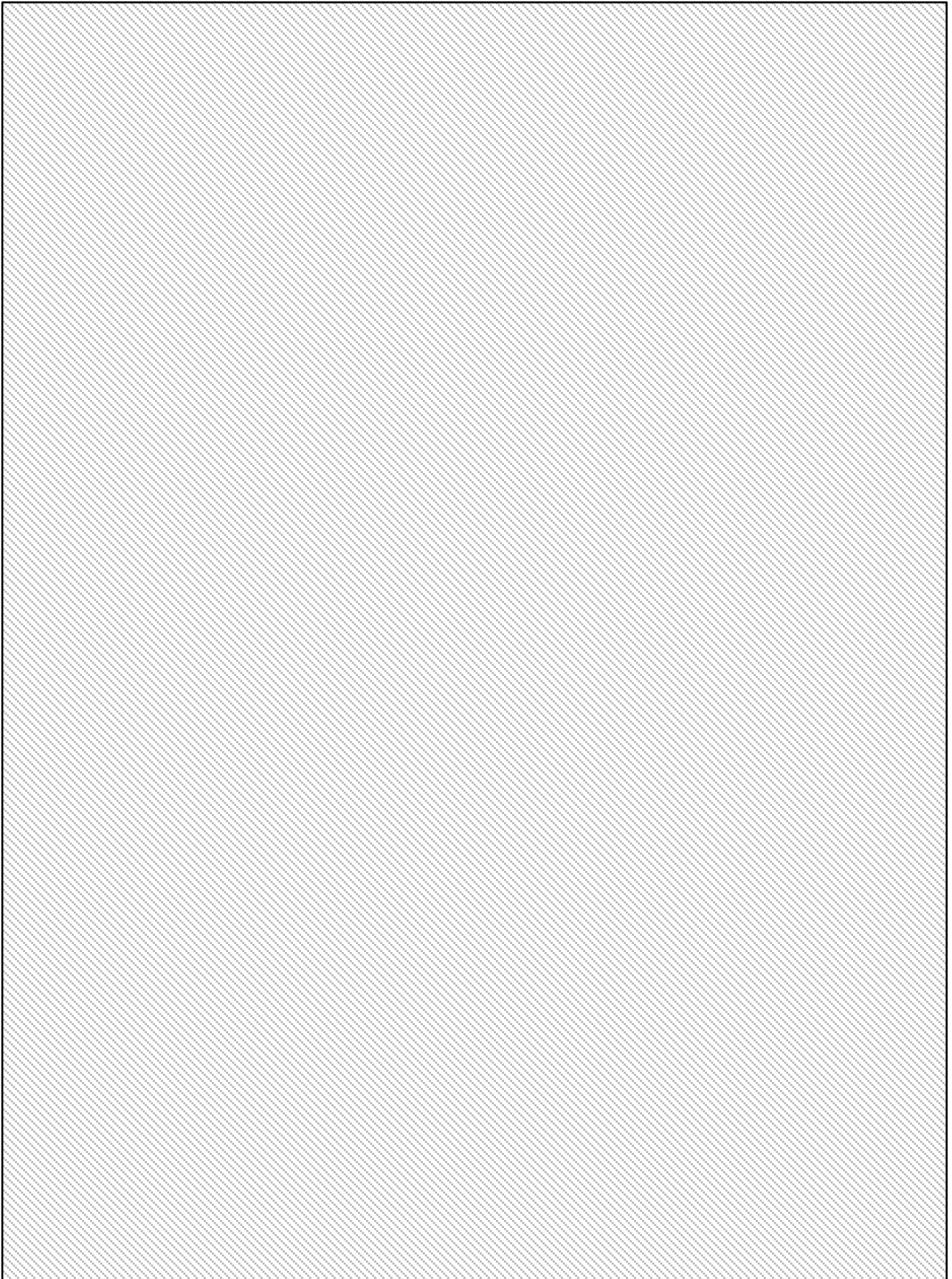


図 14: マインドマップ簡易マニュアル (1/4縮小)

根力の構成要素		4	3	2	1	
1 基礎的素養	読み	文章読解能力 論理的思考力 分析力	難解で長大な文章でも、論旨を的確に捉えることができる。筆者の主張を論理的に理解・分析し、自らの見解を組み立てることができる	比較的平易で短い文章であれば、論旨を的確に捉えることができる。筆者の主張を理解・分析し、自らの見解を組み立てることができる	比較的平易で短い文章であれば、ほぼ最後まで読み通し、筆者の主張をある程度まで理解・分析することができる	比較的平易で短い文章であっても、最後まで読み通すことができない。たとえ読み通せても、筆者の主張を理解・分析することができない
	書き	文章作成能力 論理的思考力 分析力	特定のテーマについて、論理的に思考・分析することができ、必要な資料をルールを踏まえて提示しつつ、4,000字以上の論旨が明確な文章にまとめることができる	特定のテーマについて、論理的に思考・分析することができ、必要な資料をある程度ルールを踏まえて提示できる。4,000字以上の文章を書いた経験はない	特定のテーマについて、短い文章を書くことができる。論理的な思考・分析や、必要な資料をルールを踏まえて提示することには難がある	「つぶやき」に短い文章を書くことはできるが、論理的な思考や分析を提示することはできない
	ソロバン	基本的なIT能力	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、初心者に分かりやすく説明することができる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、基本的にマニュアル無しで自力で対応できる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、マニュアルを参照しながら自力で対応できる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、自力では対応できない
	話す	説明能力 プレゼンテーション能力 コミュニケーション能力	公の場で、相手の理解度や受け止め方を読み取りながら、説得力のある説明・魅力的なプレゼンができる。質問や批判にコミュニケーションの機会を受け止めることができる	公の場で、論理的な説明やプレゼンができる。アイコンタクト等、聞き手とのコミュニケーションに難があり、質問や批判には思わず身構える	フランクな場では、論理的な説明やプレゼンができる。アイコンタクト等、聞き手とのコミュニケーションもとれ、質問にも平穏心で答えられる	親しい人々との気兼ねな会話・コミュニケーションはできるが、第三者への論理的な説明やプレゼンにはできない
2 社会生活力	生活力	自立した生活を実践できる力	起床・食事・登校・各種活動から就寝までの健康的で安定したペースで送ることができる。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなすことができる	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースが乱れがちである。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなせないことが多いことがある	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースがしばしば乱れる。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなせないことが多い	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースで安定したペースで送ることができない。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなすことができない
	人間関係構築力	生活を送る上で必要な、人間関係を円滑にするための力	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い、態度がとれる等の基本マナーを、常に遵守することができる	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い、態度がとれる等の基本マナーを、時に守ることができる	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い、態度がとれる等の基本マナーを、しばしば遵守できる	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い、態度がとれる等の基本マナーを、遵守できない
	情報収集力	生活を送る上で必要な情報のありかや、入手方法を把握する力	書籍を含む各種メディアや人脈等を幅広く有効に活用して、情報の入手方法を的確に把握し、必要な情報を確実に入手できる	情報のありかも情報を入力するための新たなルートの開拓方法も把握している。しかし各種メディアの活用や人脈等が不十分で確実性に難がある	生活を送る上で必要な情報のありかはある程度把握している。しかし情報を入力するための新たなルートを開拓する方法は分からない	生活を送る上で必要な情報のありかが分からない。どうすれば情報を入力できるかも分からない
	主体性	物事に進んで取り組む力	物事を自分の問題として受け止め、指示や命令・切迫した必要などが無くとも、自らの意見・計画に基づき、自主的に判断して取り組むことができる	明確な義務を伴う事案については、責任感から率先して取り組むことができる	自らの利害や、興味関心が高い事柄については、自主的に取り組むことができる	指示や命令・切迫した必要があっても、できるだけ他人の後に付いていくことを考え、積極的に取り組むことができない
3 行動力	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	立場の異なる人や初対面の人にも、課題について説得力のある説明をし、協力を促すことができる。また、自分の意見に固執せず全体を纏めることができる	学生同士など、立場の近い人に対しては、さほど親しくなくとも課題を分かりやすく説明し、協力を促すことができる。また他のメンバーへの気配りもできる	親しい友人に対しては、課題について説明し、協力を促すことができる	第三者に対して課題を説明し、協力を促すことができない。或いは、協力は促せるが発言の独り占め・攻撃的言動等で協力者の意欲を阻害させがちである
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	明確な目的を設定し、自分の能力や客観的な諸条件を的確に踏まえた計画を立て、迅速かつ粘り強く行動していくことができる	目的を設定し迅速に行動していくことができるが、計画性に難があり、迷走することもある	目的を設定し、行動して行くことができるが、迅速さと粘り強さに難があり、所期の目的を達成できないことも多い	目的を設定できない、あるいは設定してもその達成に向けて確実に行動することができない
	対応力	物事に流されず疑問に思い主体的に対応する力	賛同者の多寡・声の大小に拘わらず、客観性や自らの意見に照らして疑問がある事柄には、関係情報を検討・確認した上で主体的に対応する	賛同者の多寡・声の大小に拘わらず、自分の意見に合わないものであれば反対の意思表示をすることができる	賛同者の多い意見や、「声の大きい」意見に疑問を感じることもあるが、敢えて主張することはしない	賛同者の多い意見や、「声の大きい」意見には、疑問を抱かず従ってしまいがちである
	課題発見能力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	現状を分析し、背景や原因を追究した上で、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握し、明確に言語化して第三者にも提示できる	現状を分析し、背景や原因を追究した上で、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握できるが、明確に言語化することができない	現状を分析し、背景や原因を追究することはできるが、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握することができない	現状を、漠然とした諸事象の集合としてしか認識できず、分析や課題発見ができない
4 思考力	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	解決の為にプロセスを複数用意でき、最善の物を選んで解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等を、チーム活動のレベルで構築できる	解決の為にプロセスを立案し、解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等を、個人活動のレベルで構築できる	解決の為にプロセスを立案し、解決までの道筋を構想できる	解決の為にプロセスを立案することができない。或いは、立案はできるが解決までの道筋を構想できない
	想像力	課題が抱える影響課題解決方法の影響等、ものごとをイメージする力	課題自体や解決に向けた取り組みがもたらす影響といった「目に見えない物」について明確なイメージを持ち、その得失を念頭に的確な対応ができる	「目に見えない物」をイメージでき、その得失を念頭に考えるが、イメージの多様性と明確さに難があり、的確な対応を構想できない	「目に見えない物」をイメージし、その得失を念頭に考える必要性は認識しているが、明確なイメージを描けない	課題自体や解決に向けた取り組みの影響といった「目に見えない物」についてイメージすることができない。またイメージする必要性を自覚しない
	課題解決能力	課題の本質を捉え、適切な解決に導く力	課題の本質を捉え、解決のための勘所を明確にした上で、具体的な取り組みに必要な条件を整えて確実に解決に導くことができる	課題の本質を捉えることができ、解決のための勘所を明確にできるが、具体的な取り組みに必要な諸条件の整備に難があり、失敗も多い	情報を客観的に分析して課題の本質を捉えることができるが、解決のための勘所を捉えることができず、適切な解決に導くことができない	周辺情報や個人的利害・感情等に囚われて、課題の本質を捉えることができず、課題解決に取り組めない
	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	自分の意見を、相手の立場や前提となる知識・文化的背景の違い等も視野に入れて整理し、分かりやすく説得力のある内容・話法で伝えることができる	自分の意見を論理的に整理し、知識・文化の共有が乏しい相手に対しても、明確な内容・話法で伝えることができる	自分の意見を、家族や友人等、基盤となる知識・文化を共有する相手に対しては、その共通性に依拠しつつ分かりやすい内容・話法で伝えることができる	自分の意見を整理し、分かりやすい内容・話法で伝えることができない
5 チームワーキング能力	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	話者が話しやすい環境を作り、適切なタイミング・内容の質問等で話者の意図を更に引き出しつつ、最後まで集中力を切らさずに聴くことができる	話者が話しやすい環境を作り、最後まで集中力を持って聴くことで、話の筋を正確に把握できる	一見最後まできちんと聴いているが、集中力が続かず、話の筋を正確に把握できない	目を逸らしたり話の腰を折ったりして、話者にとって話しにくい条件を作ったり、注意力を切らして最後まできちんと聴くことができない
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	相手の意見・立場になって考え、「違う」ことを前提に、相手を理解することができる。自分の意見に固執せずアドバイスを進んで受け入れられる	自分と異なる意見・立場があることを認識でき、アドバイスも素直に受け入れることができる	自分と異なる意見・立場への違和感が強く、アドバイスを受け入れることに抵抗感が強い	自分と異なる意見・立場が存在することを許容できない。アドバイスを攻撃と受け止め、受け入れることができない
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	組織における自分の責務を正確に認識し、自分の意思や言動が相手にどう影響するかを考慮しつつ、組織全体を視野に臨機応変な対応ができる	組織における自分の責務を正確に認識し、組織全体を視野に入れて行動しているが、相手への影響を気にしすぎて臨機応変な対応ができない	「組織の構成員としての自分」という意識はあるが、自分の意思や言動が相手にどう影響するかという意識に乏しく、臨機応変な対応ができない	「組織の構成員としての自分」という意識が無く、物事を自分中心にしか考えられないため、臨機応変な対応ができない
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	法令や規則に拘わらず、チーム内での取り決め等についても、決められたことは本意でも遵守する。高い倫理観を持ち、自ら公平公正に努める	法令・規則・チーム内での取り決め等、明確に決められたことには従うが、公平公正等、本人の倫理観に拠る事柄への意識は高いとは言えない	罰則を伴う法令や規則等は遵守するが、チーム内での取り決め等は軽視する。公平公正への意識が低く、往々にして我田引水に陥る	時間厳守等、社会常識レベルの取り決めも遵守できない。公平公正への意識が低く、しばしば我田引水に陥る
ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	ストレスを感じても成長の機会と前向きに捉え、平穏で冷静な判断を下しつつ課題を遂行できる。また、気晴らしの方法を持っている	ストレスを感じても平穏心で冷静な判断を下しつつ課題を遂行できる。しかし前向きに捉えたり気晴らしをすることはできず、不満を蓄積させる	ストレスを感じても投げ出さず、概ね適切に判断し課題を遂行できる。しかし気晴らしの方法もなく、最終イライラして攻撃的になる	ストレスを感じると、適切な判断や課題遂行ができなくなる。気晴らしの方法もないため、最終イライラして攻撃的になる	

図 15: 根力の構成要素ルーブリック (1/2縮小)

個人の達成目標ルーブリック					学籍番号：	氏名：
(1) 根力の構成要素	(6) 比重	(3) 卒業時の理想像	(5) 2015年度末に できればここまで達成したい	(4) 2015年度末に ここまででは達成したい	(2) 現状	

*** 2015年度のプロジェクト実習の履修を始めるに当たり、現状と年度末の達成目標を文字にして確認しておきましょう**

(1)の水色部分に、根力の構成要素ルーブリックで選んだ「プロジェクト実習履修を通じて強化したい項目」をコピーして下さい
(2)の黄色部分に、自分の現状を記して下さい。**根力の構成要素ルーブリックの文言を踏まえつつ、自分の言葉で記して下さい**
(3)の黄色部分に、「2015年度末での実現可能性」とは一切関係なく、「卒業時に、こうなったら理想・こうなることが目標」という姿を記して下さい
(4)の黄色部分に、「2015年度末には、ここまででは実現したい」という事柄を記して下さい(ハードルが高くなりすぎないように設定するのがコツです)
(5)の黄色部分に、「2015年度末に、できればここまでで実現したい」という事柄を記して下さい(ちょっと大変だけれど、頑張れば何とか・・・というレベルを設定するのがコツです)
(6)の桃色部分に、それぞれの項目にかける比重を10刻みで全体が100になるように記して下さい(例えば、上から順に「60」「30」「10」という具合にメリハリをつけるのがコツです)

*** 黄緑部分は、年度末のリフレクションで使用します。当面、空欄にしておいて下さい**

図 16: 個人の達成目標ルーブリック (1/2縮小)

<p style="text-align: center;">ブレインストーミング (BS) と KJ 法の心得</p> <p>1 : BS はアイデア出し。</p> <p>難しいことは考えず、とにかく質より量で発言する。</p> <p>大脳はお休みさせて本能と感性の赴くままに「垂れ流す！」</p> <p>そのために</p> <p>(1)質より量：一言でも多く発言する</p> <p>(2)自由奔放：他人の目を気にしない。変な見栄や遠慮は NG</p> <p>(3)尻馬推奨：他人の意見を踏まえて「さらにこんなことも・・・」というアイデアを出す</p> <p>(3)批判厳禁：BS はひたすらアイデアを出す場面。議論の場ではない。批判は(1)~(3)の障害となり、BS 全体の意義を損なうので厳禁！！</p> <p>2 : KJ 法は構想の取りまとめ。BS とは打って変わって大脳全開！</p> <p>第1ステップ：カードをばらばらに広げる。</p> <p>第2ステップ：関連性のあるカードを重ね、見出をつける。</p> <p>第3ステップ：第2ステップで作った小グループの見出を眺めながら、親近性のあるグループをより大きなグループへとまとめていく。</p> <p>第4ステップ：グループ間に論理的な関連性ができるよう大グループのカードの束を並べ替える。→配置の意味する内容を、ストーリーのようにつないでしゃべれるようにする、のがコツ。</p> <p>第5ステップ：大グループごとに、中身を検討。</p> <p>第6ステップ：完成形を記録 (写真等)</p> <p>第7ステップ：記録を見ながら、すべてのグループのうちどれが重要／やりたいと思うかを議論。(上位3〜5件を選出する投票も有効) 合意形成へ。</p>	<p style="text-align: center;">KJ 法の手順</p> <p style="text-align: center;">(川喜田二郎『発想法』中公新書、1967年；『続・発想法』中公新書、1970年)</p> <p>第1ステップ： まず、BS等の手法で作られたたくさんの方のカードをばらばらに広げてみます。</p> <p>第2ステップ： カードに記載された「1行見出し」を眺めながら、関連性のあるカードを重ねていきます。最後に、それぞれのグループの内容を簡潔に表す見出し＝「表札」をつけて上に載せます。その上で、それぞれのグループのカードを輪ゴムで束ねます。 *第2ステップの作業では、以下の点に注意して下さい。 ・1グループのカードは最初は枚数程度。はじめから大きくまとめようとしない。 ・1枚のまま残る「一匹オオカミ」があってもかまわない。無理に他のグループと一緒にしない。</p> <p>第3ステップ： 第2ステップで作った小グループの「表札」を眺めながら、互いに親近性のあるグループを中グループにまとめます。この作業を何度くりかえし、10近くの大グループにまとまったらグループ化作業は終了です。 大グループにも表札をつけますが、グループ分けがすべて終わってからのではなく、カード全体の3分の2程度がまとまってきたところで、グループ分け作業と並行して表札作りを進めて下さい。</p> <p>第4ステップ： ここからいよいよ論理的整理の段階に入ります。グループ間に論理的な関連性ができるよう大グループのカードの束を並べ替えます。「空間配置」と呼びます。配置の意味する内容を、ストーリーのようにつないでしゃべれるようにする、というのがコツです。</p> <p>第5ステップ： 空間配置ができたら、カード束の間隔を広げ、それぞれ1段下の段階までくはくします。その上で、もとのグループの範囲内で、ただし隣接する大グループ(およびその1段下の束)との親近性に注意しながら中グループレベルの空間配置を行います。これでカードの作業は終了です。</p> <p>第6ステップ： カードで作った空間配置を別の紙に写し取るのが次のステップです。その際、上の図のように、グループ間の関連の内容を示す記号を使って、空間配置の論理連絡が分かるようにします。たとえば次のような記号を使います。</p> <p>第7ステップ： いよいよ最後のステップです。図を見ながら、すべてのグループのうちどれが重要と思うか、各自最高5点から1点の幅で点数をつけます(6番目以降は点数をつけない)。総得点が最も高い5つのグループをゼミでのグループ研究のテーマとします。研究にあたっては、KJ法によってえられた中テーマ等が主要な研究項目となるでしょうし、また図解の「因果連鎖」も重要な指針を与えてくれるでしょう。</p>
--	---

図 19: ブレインストーミングと KJ 法 (1/4縮小)

図 17: 事例シナリオと課題(学生用)

事例シナリオ C

「学外者を巻き込んだ国際交流イベント」

* Z さん：水戸第六中学校長。59 歳。自校の教育の国際化に熱心。大学生・留学生と中学生の交流の場を設けて、中学生を「海外」「異文化」に目覚めさせたいと強く思っているが、現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z：中学生は海外といっても実感がありません。貴学の留学生や留学経験者と交流の場を作って、我が校の教育の国際化を進めたい。いいプランを考えてください。

A：海外とか興味ね〜。言葉通じねえとかあったるいんだよな〜。

B：留学生や留学経験者との交流で疑似海外体験か。よくあるパターンだな。

C：ビンゴとかあ〜クイズとかあ〜・・・いろんな国のお料理を作れないかな？かわいい民族衣装、着てみた〜い♥。

D：よし、じゃあさっそく会場を押さえよう！

A：だりい〜。ガキンチョ集めてチーパッパなんて、やってらんね〜。

C：かわいい民族衣装でえ〜、留学生のお国自慢料理を出してもらったらあ〜、きっと女の子は大喜びだよお〜。夕方になったらライトアップしてえ〜、お国別にパレードやってえ〜♥

A：おーい、Cが一人で TDL 行っちゃってるぜえ〜。

B：そもそもここで言う「国際化」って何なんだ？経産省じゃないんだから WASP 標準にすり寄ることじゃないよな。それに茨大の留学生は中・韓・マレーシアが御三家だし・・・

D：早速ググろう！え〜と、まずは「中学」「留学生」「国際化」っとお！

A：そんな検索じゃ、欲しい情報なんて出てこねえんじゃね？俺やるわあ。かしてみ。

C：じゃあ私、留学生の友達を誘ってくるね〜♥

B：いや、そうじゃなくて！第一に、この催しでどういう成果が上がれば Z さんの課題に応えられたことになるかを考えなきゃ。それと留学生に協力してもらう以上、彼らにもメリットがなくちゃいけないし・・・そうだ、Z さんはどういう流れをお望みなんですか？

Z：え？・・・いや、その、留学生と交流すれば国際化が進むだろうなあと・・・

B：交流会の前と後に、中学側ではどんな授業をお考えですか？

Z：いやあ・・・先生方も忙しいから・・・

A：調べたの、ここ置いとくぜー。俺、バイトあつから先帰るわあー。

D：こらっ、待てえ！みんなで協力して取り組めって言われてっだろ！

A：バ〜イ

B：へー、短時間でよくここまで調べたな。まずはこれで情報共有から始めようか？

D：よし、B。お前リーダーやれ。ほら、あるだろ。プレーンストーブとか何とか言うの。

B：ブレインストーミング！でも僕は知的分析者だ。リーダーなんて勘弁してくれ。

事例シナリオ課題

- (1) 課題1・3・4は、課題文の直下に記入して下さい。必要に応じて行を追加して下さい。
- (2) 課題3は、シナリオに赤字で直接書き加えて下さい。
- (3) 5/28・13:00までに、レナンディ「課題02 事例シナリオ解答」に提出して下さい。
- (4) 5/29の授業に、プリントアウトを一部持参して下さい(「文字カウントの仕方」部分は不要)。

課題1

シナリオA~Dの中から、自分の所属カテゴリに相当するものを選び、登場人物A・B・C・Dの、それぞれのキャラクター(「良い所」と「悪い所」の両方)を、下記の例を参考に<ごく簡潔に>記して下さい。

<例>

X: 良い所: 目配り・気配りが得意で名サポーター。

悪い所: 引っ込み思案で積極性に欠ける。

課題2

あなたのキャラクターを念頭に「登場人物 E」を設定し、「自分だったら、多分無意識にこういう行動・言動をとるだろう」(＝現状の自己分析)という内容を、このシナリオに3～4箇所、書き加えて下さい。

→選択したシナリオの当該箇所に空白行を設け、赤字で書き込んで下さい。

→シナリオには、予め1頁当たり4～6行の余裕が設けてあります。文言を工夫して、できるだけ1頁に収まるように記して下さい。

課題3

あなたがこのチームの第5のメンバーで、かつリーダーに選出され(てしまっ)たとします。「学外者を巻き込んだ国際交流イベント」という課題に、このチームを率いてどのように取り組んで行きますか?

→この下に、黒字で記入して下さい。長さは自由です。

課題4

あなたが今後このチームの有力な戦力として課題に取り組んでいくためには、どういう風に行動していくべきか(＝行動目標)を、先に規定した「この授業で高めたい根力(ねぢから)構成要素」に即して、またあなたがチーム内で実際に担う役割(リーダー・サブリーダー・書記・会計・渉外・・・等)を踏まえて、400字程度にまとめて下さい。

→この下に、黒字で記入して下さい。文字カウントの方法については、最終頁を参照して下さい。

事例シナリオ学習の運用と教材の作成

事例シナリオを用いた授業は、プロジェクト実習A～Dの履修学生が一堂に会し、各自の所属するA～Dのカテゴリ用の「事例シナリオ」を読んで、「事例シナリオ課題1～4」(以下に収載)に取り組み、最終的に「履修者全員としての答案」を作成するという内容です。

具体的な授業は、以下の手順で進めます。

- (1) 教員側は、プロジェクト実習A～Dそれぞれに合わせて4種類のシナリオ(=「事例シナリオA」「同B」「同C」「同D」と、A～Dに共通の「事例シナリオ課題」を1種類準備する
- (2) 学生は、自らの履修するカテゴリのシナリオを選択する
- (3) その上で「事例シナリオ課題」への「個人としての解答」を作成する
- (4) (3)を、プロジェクト実習A～Dのカテゴリごとにグループを組んで議論し、「グループとしての解答」を作成する
- (6) その上で、プロジェクト実習A～Dのカテゴリを越えて、それぞれの「グループとしての解答」を共有・議論し
- (7) 最終的に、「プロジェクト実習履修者全体としての解答」を作成・共有する

意図する所は

- (1) プロジェクト実習履修者がこれから遭遇するであろう状況を、デフォルメされたキャラクターで構成されたシナリオで疑似体験させ
- (2) チームメンバーそれぞれの個性を分析し
- (3) チーム活動において、個性を異にするメンバーそれぞれの「あるべき姿」を考えさせ・議論させ
- (4) 議論の結果と自らの姿を対比させることで、今後、現実の活動の中で自らが採るべき行動・言動について「あるべき姿」を自覚させる

所にあります。

このため、教員が準備する4種類の事例シナリオには

- (1) シナリオ中で示される具体的な問題状況は、プロジェクト実習A～Dそれぞれの状況を踏まえた・履修者にとって実感が持てる内容であることが必要であると同時に
- (2) 登場人物のキャラクターや、発生する問題が統一的に定義されていることが必要となります。

以上のことから、今年度の「事例シナリオ」は

- (1) 学生A～D並びに課題提案者Z氏のキャラクターを設定し、「プロジェクト実習C(異文化交流・国際理解)」で想定される問題状況を念頭に、「事例シナリオC」[編者注・本章図17]を作成し
- (2) 事例シナリオCを雛形とし、「プロジェクト実習A(総合)」「同B(地域連携・地域貢献)」「同D(PBL型インターンシップ)」それぞれで想定される問題状況を念頭に、「事例シナリオA」「同C」「同D」を作成するという手順で作成しています。

*キャラクターは、分かりやすくデフォルメします。

(1)学生自身に構想させるため、提案者は「独自の構想を持っていない」キャラクターに設定する。

(2)プロジェクトメンバー4名は、良くも悪くも個性的で協調性に乏しいキャラクターに設定する。

→提案者は丸投げ状態、プロジェクトメンバーは協調性なしという悪条件下で、対応を考えることが学びに繋がる。

雛形
プロジェクト実習
C用

(図 17 参照)

[プロジェクト実習A用]

事例シナリオA

「商店街を元気にするプロジェクト」

*Zさん：水戸市北町四丁目て文房具店を営む59歳。近年、人通りの少なくなった商店街の行く末に頭を悩ませ、昔のように人を呼びたい(呼び戻したい)と強く思っているが、現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z：北町の大通りでは、昔は歩く人同士が肩をぶつけ合うくらいだったんですが、今ではそんな光景を見ることはありません。それでね、ほら、ありますでしょ、「〇〇を元気にする」とかいうやつ、なんか、そういった、いいプランを考えてほしいんですが。

A：じゃ、人社のCさん、よろしくね。俺、人コミだから、わかんね〜。

C：土日のどっかで道路を歩行者天国にして、焼きソバとかクレープの屋台を出して“お祭り”みたいなするの、どうですか？ ちょっとずつ、いろいろ食べ歩きとかしてみたい〜❤️。

D：いいんじゃない？ 一丁目から四丁目まで、屋台は何軒、並ぶだろ？

B：イベントで中心市街地活性化か。よくあるパターンだな。

A：だりい〜 屋台ってさ、準備がたいへんそうじゃね？

D：だいじょうぶよ。サークルで学園祭の時にやったんだ。みんなでやれば、あっという間にできるよ。

B：ちょっと待って。屋台はさ、僕らが出すんじゃないよね？ 商店街の人が出すんじゃないかな？ それに、・・・

D：じゃ、ググってみるね！ え〜と、「イベント」「屋台」「活性化」ってキーワードで検索してみよう。

A：そんな検索じゃ、ダメなんじゃね？ 俺やるわあ。かしてみよう。

C：じゃあ私、北町商店街にお店が何軒あるか、調べてくるね。楽しみ〜❤️

B：いや、あのさ、それもいいけど、「元気にする」方法はイベントだけじゃなく、他にもあるはず。Zさん、そうですよね？

Z：え？ ええ、まあ・・・そうでしょうね、きっと・・・

B：この種のイベントって、いろいろ先行事例もあつたよ。中には、・・・

事例シナリオD

「フェスティバルを成功させるプロジェクト」

Z：今年度も水戸市主催の「〇〇フェスティバル」をやらなければならぬのですが、皆さんに、これはどう、いいプランを考えてほしいんですが。

A：なら、人社のCさん、よろしくね。俺、そんなことを考えるのは苦手だから。

C：「フェスティバル」だったら、例えば、物を売るとか、食べ物、飲み物など、例えばスイーツ屋台を出して“お祭り”みたいなするの、どうですか？ そんなフェスティバルだったら皆参加するんじゃない？

D：いいんじゃない、楽しそうだから、やろう、やろう。

B：食べ物、イベントで活性化か。よくあるパターンだな。

A：でもそういうのって、準備がたいへんそうじゃね？

D：だいじょうぶよ。サークルで学園祭の時にやったことあるから。みんなでやれば、あっという間にできるよ。

B：ちょっと待って。屋台はさ、僕らが出すんじゃないよね？ 団体の方が自己紹介を兼ねて出すんじゃないかな？ それに、・・・

C：ググってみるね！ え〜と、「フェスティバル」「団体」「活性化」ってキーワードで検索してみよう。

D：じゃあ私、どんな団体が参加してくれそうか、前回の事を調べてくるね。楽しみ〜❤️

B：いや、あのさ、それもいいけど、フェスティバルって何ができれば成功かというのを先ず考えるべきじゃないですか、Zさん、そうですよね？

Z：え？ ええ、まあ、そうでしょうね、きっと・・・

B：先行事例、って言うんですか、どこかの都市でもフェスティバルってのは、やっていると思うんですが、それに成功した所って、例えばどこでしょうか？

Z：え？ いやあ、それが分れば苦労はないんだけど・・・

A：あ、俺、バイトの時間だから、お先〜。

D：ちょっと待ちなさいよ！ 次のミーティングの予定とか・・・あ、行っちゃった。

C：へー、Aくん、短い時間でよく調べたね・・・〇〇市のマップ？ 何だろ、これ？

D：あ、何かいろいろ、あるね。じゃ、先ずはこれ、みんなにも送るね。

B：情報の共有は必要だね。あとでこれを基に、みんなで整理してみよう。

C：こないだ、なんか授業でやったね。なんだったっけ？

B：KJ法だろう。

D：じゃ、やろう。先ずカードを用意しなくちゃね。

事例シナリオB

「奥山カボチャのブランド化」

*Zさん：生産者代表。過疎・高齢化に悩む、奥山村青年団長・55歳。現状への危機感と奥山カボチャを活用した改善策への意欲はあるが、現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z：奥山カボチャは、奥山村の在来種でもおいしいカボチャです。これをブランド化して村の活性化に繋げたい。いいプランを考えてください。

A：地味〜。それに俺、カボチャ嫌いなんだよな。

B：村おこしにご当地産品か。よくあるパターンだな。

C：ジェラートとかあ〜ロケットとかあ〜・・・お酒にはできないのかな？かわいゆるキャラ作りた

じゃあさっそくゆるキャラのデザインを描いてみよう！

〜。カボチャ臭い酒なんて飲みたかねえ〜。

ゆるキャラの着ぐるみでえ〜、ジェラート売ったらあ〜、きつと女の子に人気が出るよおやねお店であ〜、イケメンのソムリエさんがいてえ〜、ゆるキャラのコスプレでえ〜、カ

をテストイングなんかしてくれてえ〜❤️

で、おもいっししシュールじゃね？

「奥山カボチャ」って何なんだ？在来種でおいしいって言われたって、見たこともないし。村おこし」って言ったって、実際の所は何も知らないし。

グろう！え〜と、まずは「奥山」「カボチャ」「在来種」ってキーワードで検索じゃ、欲しい情報なんて出てこねえんじゃね？俺やるわあ。かしてみよう。

私、カボチャプリンの試作してみるね〜❤️

そうじゃなくて！一口にブランド化って言っても色々なんだから、まずはゴールの具体像を

や。そうだ、Zさんはどういう基本戦略をお考えなんですか？

なんにも。奥山カボチャが高売れて、奥山村が有名になったらええなあ・・・

商品で村おこして、いろいろ先行事例もありますよね。うまくいってないケースも多いん

ですか？その辺は・・・

〜・・・わがんね。

の、こ置いとくぜー。俺、バイトあつから先帰るわあー。

待てえ！みんなで協力して取り組んで言われてっだろ！

短時間でよくここまで調べたな。まずはこれで情報共有から始めようか？

B。お前リーダーやれ。ほら、あるだろ。プレゼンストップとか何とか言うの。

ストップミング！でも僕は知的分析者だ。リーダーなんて勘弁してくれ。

あ！口先だけかあ！！

[プロジェクト実習B用]

[プロジェクト実習D用]

5:プロジェクト実習 2015 年度シラバス

2015 年度プロジェクト実習のシラバスを、図 20 に示す。なお、「授業計画」各回末尾の【 】で括った番号は、本学で定義したアクティブ・ラーニングの要素番号である（図 21）。

図 20:2015 年度プロジェクト実習シラバス

概要：

根力育成プログラムの一環として、根力養成プログラムの履修成果を踏まえて、具体的なプロジェクト (Project) に自覚的に取り組むことをベース (Based) に、根力のさらなる習得 (Learning) を目指す実習です。チームで一つのプロジェクトを完成させていく中で、社会人として必須の種々の素養を主体的・実践的に学び取って行きます。

キーワード：

根力育成プログラム PBL プロジェクト 主体的 実践的

到達目標：

- (1)一つのプロジェクトの企画・準備・成果記録のプロセスを、複数の学生での協働によって達成する。
- (2)協働を通じて他者を知り、自らの個性・能力を認識する。
- (3)自分と社会の接点を意識し、自分たちの学習が最終的には社会に帰属することを理解する。

授業計画：

第 1 回 シラバスによるガイダンス

第 2 回 企画プレゼン（前年度履修者による発表を視聴する）

第 3 回 企画プレゼン 【3】【12】

第 4 回 企画プレゼン（続き） 【3】【12】

*第 2 回のプレゼンを参考に、各自、自分が実施を希望する「企画」について調査研究を行い、それについての発表を 2 週に亘って行う

第 5 回 チーム結成 【3】【9】

*第 3～4 回のプレゼンを踏まえ、自分の希望する「企画」について更に調査研究を進めた上で、類似の企画同士が合流することにより、5 名以上 9 名以下のプロジェクトチームを組む。5 名未満ないし 10 名以上になった場合は、学生同士で相談して調整する。

第 6 回 チーム活動 【3】【9】

第 7 回 チーム活動 【3】【9】

*第 6～7 回は、チームで取り組む課題について、個人の調査研究と、その成果を持ち寄ってのグループワークとを重ね、プロジェクトの構想を固める。

第 8 回 構想発表会 【3】【9】【12】

第 9 回 構想発表会（続き） 【3】【9】【12】

*第 8～9 回は、これまでの調査研究とグループワークを踏まえてまとめた「構想」を 2 週に亘って発表する。

第 10 回 チーム活動 【3】【9】

第 11 回 チーム活動 【3】【9】

第 12 回 チーム活動 【3】【9】

第 13 回 チーム活動 【3】【9】

*第 10～13 回の各回で、構想発表会での質疑応答等によって浮き彫りになった諸課題をどのように克服するか、個人の調査研究と、その成果を持ち寄ってのグループワークとを重ねることで、プロジェクトの完成度を高める。

第 14 回 前期末中間発表会 【3】【9】【12】

第 15 回 前期末中間発表会（続き） 【3】【9】【12】

*第 14～15 回は、第 13 回までの調査研究とグループワークを踏まえて、各プロジェクトの中間発表を 2 週に亘って行う。

第 16 回 後期初め発表会 【3】【9】【12】

第 17 回 後期初め発表会（続き）【3】【9】【12】

*第 16～17 回は、夏季休業期間中に行った活動の成果を 2 週に亘って発表する。

第 18 回 チーム活動 【3】【9】

第 19 回 チーム活動 【3】【9】

第 20 回 チーム活動 【3】【9】

*第 18～20 回は、後期初め発表会での質疑応答等を踏まえ、個人の調査研究と、その成果を持ち寄ってのグループワークとを重ねることで、プロジェクトの完成度を更に高める。

第 21 回 企画準備 【3】【9】

第 22 回 企画準備 【3】【9】

第 23 回 企画直前準備 【3】【9】

第 24 回 企画本番 【3】【6】【9】

第 25 回 企画本番 【3】【6】【9】

第 26 回 実施した企画の振り返り 【3】【9】【16】

*第 21～26 回は、各チームの中心となるプロジェクト（企画）をグループワークで準備し、実行し（実習）、振り返る。各プロジェクト実は主に授業時間外に実施される。

第 27 回 チーム活動 【3】【9】

第 28 回 活動報告会 【3】【9】【12】

第 29 回 活動報告会（続き） 【3】【9】【12】

*第 28～29 回は、一年間の活動の成果を 2 講時に亘って発表する。

第 30 回 チーム活動 【3】【9】【16】

*「活動報告会」を総括し、報告書作成の打合せをグループワークで行う。

予習・復習のポイント：

下記の「履修上の注意」にもあるように、この実習の趣旨に沿って行う活動のための予習・復習は、責任感を持って自律的に行って下さい。

履修上の注意：

この実習では「教えて貰える」ことはありません。皆さんが自ら考え・活動することを通じて「学び取る」さらには「学び盗る」場であることをしっかり認識した上で受講して下さい。大略上記の内容・順番を計画していますが、実習の展開に応じて順次修正して行きます。予習・復習や遅刻については、上記趣旨に鑑み責任感を持って対応して下さい。オフィスアワーは別途定めますが、メールでアポを取って貰えれば随時対応します。

成績の評価方法：

プロジェクトへの取り組み姿勢とチームへの貢献度を 100%として、メンバー相互による評価も参照しつつ、総合的に判断します。期末試験は行いません。

教科書・参考書：

教科書：なし

参考書：プロジェクト実習報告書編集委員会『2015 年度プロジェクト実習活動報告書』茨城大学人文学部（非売品・授業で配付します）

図 21: 茨城大学におけるアクティブ・ラーニング要素表 (茨大AL要素表)

No	手法	概要	アクティブ・ラーニング科目を構成する際の留意事項
1	Problem Based Learning Project Based Learning	Problem Based Learning とは、問題解決を主目的として、学習者主体で実践されるグループ学習である。 Project Based Learning とは、具体的な学修課題をたて、一人ないしチームでプロジェクトを遂行しながら行う学習である。いずれも学習者が自主的に学修することが求められる。	「ペア・グループワーク」や「プレゼンテーション」などと組み合わせて実施することが想定される。学習者が主体となり課題を解決する方法を考え、計画を立てて学修を進めるといった、初年次の学生にとっては比較的高度な学修法ともいえるので、課題レベル設定や適切な学修支援(チューターによる補助など)に配慮が必要である。ポートフォリオの利用も考えられる。
2	クリッカーを用いたレスポンス	教員の質問に対し、学生がクリッカー(情報送信機)のボタンを押して答える形態である。レスポンスシステムとも呼ばれる。その結果が瞬時に集計され、スクリーンに表示される。学生は自らの意見の正誤や他の学生の意見を即時に知ることができる。意思表示を手軽に行えるので、授業への参加意欲が促される。	教員は学生の全体的な反応を確認しながら授業を進めることができる。しかし、クリッカーはアクティブ・ラーニング化を支援するシステムなので、他の手法と組み合わせるなど、主体的な学修を促進するような授業設計をする工夫が必要となる。
3	調査研究	教員が提示したテーマや課題に対して、図書館等で参考図書、新聞・雑誌、統計資料を調べたり、DM映像やインターネットのメディアを活用して情報収集を行い、結果をまとめ、発表する学習方法である。	単にレポートを課すだけでは、アクティブ・ラーニングとはいえない。学生によるプレゼンテーションへつなげたり、フィードバックを行ったりして、調査情報の質を高めたり、調査の成果を用いながら、学生がさらに学修を深めていく工夫が重要となる。
4	フィールドワーク	教員が提示したテーマや課題に対して、実地調査・研究等を行う学習方法である。	学修課題をフィールドワークに取り組み、学習者が実地での活動を行い、学修課題についての理解を深めることが必要である。
5	実験	理論や仮説を様々な条件の下で検証する学習方法である。学生が知識を活かして実際に行動することによって理解を深めると同時に、結果を整理してまとめる力を身につけることが期待される。	<p>教養教育で準備できる範囲の部屋や器具類で実施計画を立てること。実験を通して主題に対する探究を深めていくことが大切である。実験自体は主体的な活動ではあるが、実験の事前教育、実験過程での学習者の主体的・能動的な取り組みへの指導が必要である。</p> <p>特に自然科学系分野では、設定された課題について、学生が(協力して)自らの活動を通じて解決したり、講義で学んだ原理や現象を、学生自身が追体験して確認する要素が含まれていることが重要である。したがって、単に、計測器の取扱い方等について学ぶような実験・実習はアクティブ・ラーニングとはならない。</p>
6	実習	講義などで学んだ技術や方法を実際の場面で展開することで、理論と実践の関係を深める学習の方法である。学生が実践的な力量をつけるとともに、実践を理論的に省察すること、そのことでさらに実践力や課題への取り組みの姿勢の向上が期待される。	実習・実技は必ずしも、単純にアクティブ・ラーニングとはならない。講義等での学修内容・知識と、実習・実技で身につける知識・技能とが有機的に結びつく必要がある。
7	実技	技術や演技などが直接的な学習であるような授業方法。	
8	ロール・プレイング シミュレーション	現実起こる場面を想定して、参加者がそれぞれに与えられた役割を演じ(ロールプレイ)、疑似体験(シミュレート)する学習方法である。技術・技能の修得や、現実的なケースにおける多面的な見方、態度・姿勢の涵養、他人の立場への理解などを促進する際に効果的である。	ロールプレイやシミュレーションを取り入れるためには、その事柄に対する知識・理解が必要。教員による適切な場面の設定と、役割分担を話し合い等を通して決めるなど、学生相互の関わりも重要になる。
9	ペア・グループワーク	教員から与えられた課題に対して、ペアもしくは小グループ(3人から6人程度が一般的)で相互協力を行いながら学修を進めていく協同学習のことである。グループ構成員が相互協力して共同作業をする。	作業手順の明確化、課題解決への探究方法や手がかりをどのように準備するかが重要になる。円滑なペアワークやグループワークを行うために、協同学習の考えを取り入れながら授業の準備や設計を行うことが望まれる。学習者が明確な役割を持って学修を進められるような課題の設定をし、また互恵的な協力関係を生み出せるような人間関係に配慮することが必要である。グループワークは必ず授業時間内に終了することが必要である。
10	ディベート	課題討議法の一つで、ある公的なテーマについて肯定側と否定側の立場から、立論・反論といった論戦を通じて、第三者を客観的な証拠に基づいて説得するコミュニケーション形態である。ディベートを通して、自分の意見や問題意識を持ったり、論理的な考え方ができるようになるといった効果が期待される。	多数の受講者を一括した討議は一般的とは言えない。討議の成果が可能な授業設計が必要である。小グループで交代しながら討議を繰り返す場合には、それ以外の学生が果たす役割を明確しておく必要がある。成績評価方法についても明確にし、予め受講生に示しておくことも重要である。また、テーマの難易度が高すぎる場合にはうまく機能しないこともあるため、教員は進行をよく観察し、時には介入することも必要である。学生同士で議論させる機会を作るだけではなく、議論を行うための知識や経験を持たせた上でお互いの考えを深めたり、議論の結果としてテーマに関する学修を深める意欲につながりるように、授業を設計する必要がある。
11	ディスカッション	グループでの討議・話し合い。学生同士の相互の意見交換を通して、各人の持つ知識・経験などが共有され、討議課題への理解が深まることが期待される。自由討議法は、内容も役割も自由に議論することになる。	
12	プレゼンテーション	指示されたテーマや課題について、グループもしくは単独で調査・学習を行い、聴衆の前で発表する形態。発表形式は、パワーポイントなどの情報機器を活用したものや、ポスターセッションなど様々である。発表後は、他の受講生や教員からの質疑に応答する。	プレゼンテーションの回数と成績評価方法を予め明確しておく必要がある。プレゼンテーションをする学生と聞く学生の学修課題の明確化、評価基準の明確化が必要である。プレゼンテーションを聞くことが、学び合いにつながるように、質疑応答の時間を十分に確保すること、プレゼンテーション後に各学生が何を学んだかをふり返る機会も設けることなども考慮することが重要である。
13	輪読学習	書物を数人が順番に読んで解釈し、問題点について論じ合う学習方法である。一般的には、書物をいくつかの部分に分け、それぞれ担当者に割り当て、担当者はその部分の論点をまとめ、授業で発表する。それを受けて、分からなかった部分や疑問点などについて、各自の見解を論じ合う。	単に学生に書物の部分を割り振り、発表させるのではなく、教員の側では論じ合う問題点や解釈を適宜チャレンジすることも必要である。輪読する書物の選択は十分な考慮を必要とする。受講者数を考えた授業設計が必要であり、例えば50名の受講者なら、発表者が5名で、10回で全員が担当する場合には、各回で残りの45名が何をやるのかを、全員の学習機会の保証という視点で考えておく必要がある。またそれに伴った成績評価方法も必要である。
14	双方向型 問題演習	与えられた課題やテーマについて、学生が答案やレポート・小論文を作成し、それを教員が添削・採点してフィードバックしたものを、再度学生が確認し理解を深める学習方法である。教員とコミュニケーションをとることにより、学修意欲を引き出すねらいもある。学生は自らの理解度を確認し、新たな気づきや課題を見いだすことが期待される。	学生の能動的な学修を引き出すところにねらいがある。出題した課題の解答例や解説を示すとともに、双方向型演習としてのフィードバックが不可欠となる。
15	双方向型 執筆演習		
16	振り返り	授業の途中や終了時に、理解したことや分からなかったこと等について確認を行い、理解の促進を図る学習方法である。確認の方法としては、振り返りシート等の記入、確認テスト(小テスト)、ペア・グループワークによる意見の共有などがある。	学生は、講義を聞いただけ、体験しただけでは、次の機会に学修内容を応用できない可能性があり、学修内容や自らの言動を振り返る機会を設けることが有効であるという考えに基づく。振り返りを促すための支援方法が重要であり、単に振り返るだけでなく、その後の主体的(能動的)学修へつなげることが重要である。
17	体験型 学習	教員による講義等を中心とする授業形態ではなく、学外機関・企業等における体験学習を中心とする、インターンシップ、サービス・ラーニング、ボランティア活動などが挙げられる。	学外における体験活動等を完結するだけではアクティブ・ラーニングとはならない。事前準備・指導、体験活動・事後指導・展開等を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である。活動期間中における受入先の評価と併せて、事前事後の取組状況を加味して評価を行うことが重要である。また、成績評価方法の明確化が必要である。

Ⅱ：チーム別活動報告

1. プロジェクト実習 2015 年度の運用
2. さとみ・あい 活動報告
3. 異文化交流プロジェクト 活動報告
4. こみっとフェスティバル 活動報告
5. 公共交通 活動報告
6. IU+IC×NTTコムプロジェクト 活動報告

Ⅱ:チーム別活動報告

神田大吾

1:プロジェクト実習 2015年度の運用

(1)履修状況

2015年度は、茨城キリスト教大学から6名(内2名は一年次生のため、単位無しでの参加)、本学教育学部・理学部から各1名の参加を加えて、7チーム・総勢39名での運用となった(図1)。プロジェクト実習Aに該当するチームは無かった。同B・Cは大チームを編成した。3つのチームに顧問を配置することとし、茨城キリスト教大学の山中俊克先生・鈴木晋介先生にご協力を戴いた。記して感謝申し上げます。

2013年度の約90名には遠く及ばないが、2011年度に20名でスタートして以来、受講者数は緩やかに、かつ確実に増加してきている。各チームの活動報告は次節以降に記載する。

図1:2015年度プロジェクト実習履修者名簿

No.	カテゴリ	大チーム	小チーム	担当	顧問	分担	学年	学生番号	M/F	氏名	履修区分	大学	学部	学科	備考	小計
1	プロジェクト実習B	さとみ・あい	さとみ力伝え隊	主:鈴木敦 副:神田大吾 泉美・ゆう	鈴木晋介		4		F	千葉美香	BM	茨大	人文	人コミ		12
2							4	F	星野由季菜	BM	茨大	人文	人コミ			
3							4	F	井上紗希	BM	茨大	人文	社会			
4						涉外	3	F	南陽子	BL	茨大	人文	社会			
5						[長]	3	F	箭内淳美	BL	茨大	人文	社会			
6						会計	3	F	山口奈穂	BS	茨大	人文	社会			
7						書記	3	F	山口未来	BS	茨大	人文	社会			
8						副長	3	F	山田真理子	BS	茨大	人文	社会			
9						(長)	2	M	大枝俊貴	BS	茨大	人文	人コミ			
10						書記	2	M	鈴木透	BS	茨大	人文	人コミ			
11						涉外	2	F	小林希望	BS	茨大	人文	社会			
12						会計	2	F	助川実咲	BS	茨大	人文	社会			
13	プロジェクト実習C	異文化交流プロジェクト	Link	主:鈴木敦 副:神田大吾	山中俊克	副長	4		F	清野絢	CM	茨大	人文	人コミ	10	
14							4	F	櫻井優美	CL	茨大	人文	人コミ			
15						[長]	3	F	藤堂みさ都	CL	茨大	人文	人コミ			
16						会計	2	F	富田恵	CS	茨大	人文	人コミ			
17						涉外	2	F	野中萌	CS	茨大	人文	人コミ			
18						書記	2	F	渡邊悠	CS	茨大	人文	人コミ			
19						副長	4	M	飯村貴洋	CS	IC	文	現代英語			
20						書記	2	F	大高詩織	CS	IC	文	現代英語			
21						(長)	2	M	栗原大地	CS	IC	文	現代英語			
22						会計	2	F	寺門美千花	CS	IC	文	現代英語			
23	プロジェクト実習D	こみつと	フェスティバル	主:井澤耕一 副:神田大吾	鈴木敦	長	4		F	川井奈々	DL	茨大	教育	情報文化	7	
24						書記	2	F	佐藤李咲	DS	茨大	人文	人コミ			
25						書記	2	F	寺澤恵里香	DS	茨大	人文	人コミ			
26						書記	2	F	安藤有紀	DS	茨大	人文	社会			
27						副長	2	F	小野瀬莉央	DS	茨大	人文	社会			
28						副長	2	F	西野あゆみ	DS	茨大	人文	社会			
29						会計	2	F	塚本莉沙	DS	茨大	人文	社会			
30	長	2	F	佐藤詩音	DS	茨大	人文	人コミ								
31	会計	2	F	袖山良美	DS	茨大	人文	人コミ								
32	副長	2	F	鈴木美緒	DS	茨大	人文	人コミ								
33	書記	2	F	高橋慶祐	DS	茨大	人文	社会								
34	書記	3	F	猪狩彩夏	DS	茨大	人文	人コミ								
35	副長	3	F	磯貝麻菜	DS	茨大	人文	人コミ								
36	長	2	F	森遥香	DS	茨大	人文	社会								
37	会計	2	M	坂寄和哉	DS	茨大	理	学際理学								
38		1	F	鳥羽田瑠奈	DS	IC	文	現代英語	課程外							
39		1	F	征矢 芽久	DS	IC	看護	看護	課程外							
履修区分欄: A~D:プロジェクト実習A~D M:メンター編 L:リーダー編 S:スタッフ編															課程内合計	37
分担欄: [長] 大チームを編成するチームにおける、小チームリーダー兼大チームリーダー															履修者合計	39
[副長] 大チームを編成するチームにおける、小チームリーダー兼大チーム副リーダー																

(2) 各回の授業の構造

「プロジェクト実習」はPBL授業であり、学生が能動的に学習することを前提としている。即ち、
①教員の主導で履修者が一堂に会して行う、通常の「一斉授業」
②学生がチームごとに任意の時間と場所で行う「チーム別活動」
を適宜組み合わせながら運用することとなる。

②は、基本的に教員が同席しない場で行われるため、教員が活動状況を直接把握することはできない。そこで、「活動日」「場所」「参加者氏名」「開始時間と終了時間」「具体的な活動内容」等を定められた書式に従って記入する「議事録・活動記録」を作成し、レナندي（本学のeラーニングシステム）にアップさせ、これをエビデンスとして教員が点検し、授業時間としてカウントしている。紙幅の制約から全文を掲載することが不可能なため、本報告書では最低限の情報を一覧表にして収載している。授業計画では、第8～9、12～14、17～21、24～25、27、29～30講を「チーム活動」としているが、実際の活動時期はチームによって前後する。

具体的な活動状況は、次節以降の各チーム報告の「2：活動記録」を参照されたい。

(3) 各回の内容

2015年度の「プロジェクト実習」は、シラバス（第I章、図20）に沿って、以下のように行われた。なお、各チーム個別の活動ながら、結果的にチーム横断的に行われた活動については「活動1～活動5」として追記している。

第1講:ガイダンス(4月10日)

第1b講:ガイダンス(4月17日)

学年暦上、10日が授業開始の初日であり、17日から初めて来る学生も予想されたので、同じ内容で二回行った。

- ①授業の位置付け（「根力育成支援事業」及び「根力育成プログラム」との関係）、保険加入の確認等。
- ②実例紹介として、前年度履修者ICEチームによる事例報告。
- ③科目区分A～Dの説明。
- ④ループリックを説明し、4月24日の授業までに「根力構成要素ループリック」（第I章・図15）で自己分析し、「個人達成目標ループリック」（第I章・図16）で目標設定（3項目）をしておくように指示。

第2講:マインドマップ作成(4月24日)

- ①マインドマップの説明（第I章・図14）。
- ②マインドマップ実習：各人が準備してきた「個人達成目標ループリック（3項目）」（前記）の内、比重が最も大きい一項目について、実際にマインドマップを作成する。
- ③即席のチームを作成して、②を互いに披露して、意見交換。
- ④振り返り：③を参考に、「個人達成目標ループリック」記載の3項目について、“項目の選択自体は適当か？”及び“各項目の比重は適当か？”等について、各人で再検討して「完成版」にしておくように指示。

第3講:プロジェクト候補の発表と質疑応答、その一(5月8日)

第4講:プロジェクト候補の発表と質疑応答、その二(5月15日)

今年度のプロジェクト候補（いわゆる「お題」）の発表。里美地区での活動と異文化交流活動は学生有志の発表。加えて、外部協力者の泉町二丁目商店街振興組合宮本様、(株)JTB関東法人営業水戸支店西島様、水戸市役所須藤様、同じく鬼沢様、NTTコミュニケーションズ株式会社川口様（発表順）から発表。その後、各ブースに分かれる形で、発表者と学生との間で質疑応答が行われた（第I章・図13）。

[課題] 二回のプロジェクト候補発表を踏まえ、学生各自、具体的なプロジェクト2つを選び、「自分がなぜこのプロジェクトに取り組みたいのか」を、第一希望は 400 字程度、第二希望は 100 字程度（書式自由）で記し、5月20日(水)までに提出するように指示。

第5講:チーム分けと「事例シナリオ実習」(5月22日)

①チーム分け発表～調整:

事前提出の希望理由書（前記）を基に、5名以上9名以下なら即チーム成立。

10名を超えるプロジェクトは「大チーム、その下に複数の小チーム」体制に整理して成立。

5名に満たないプロジェクトは、「新メンバーを勧誘」か「他チームに参加」か、決断させる。

②役割分担:

①でチームが成立した所から速やかに役割分担作業に入る。「最低限、リーダーを確定せよ」と指示。

必ず置くのが「リーダー」「副リーダー」「書記」「会計」。他は任意。「渉外」等はチームごとに適宜考えさせる。

③「事例シナリオ」(第I章・図17)の説明。

④「事例シナリオ」による実習。

第6講:活動の基本構想策定(5月29日)

①一斉授業形式でブレインストーミングとKJ法(第I章・図19)の説明。

②チーム毎に分かれ、ブレインストーミングとKJ法により、取り組むプロジェクトの基本構想を策定させた。

第7講:構想発表会(6月5日)

チームごとに基本構想を発表し、質疑応答が行われた。

第8～9講:チーム活動

第10講:中間発表会、その一(7月10日)

第11講:中間発表会、その二(7月17日)

チームごとにこれまでの活動内容を発表し(時間の関係で発表チームを二回に分けた)、質疑応答が行われた。

第12～14講:チーム活動

第15講:中間発表会 part2、その一(10月2日)

第16講:中間発表会 part2、その二(10月9日)

7月の中間発表以降、チームごとにどのような活動に取り組んできたかを発表し、質疑応答が行われた。

第17～21講:チーム活動

活動1:水戸まちなかフェスティバル(10月25日)

チームごとに分かれ、屋外ブースで活動(ワークショップや、異文化スープの販売等)を行った。

活動2:茨苑祭(11月14日、15日)

チームごとに分かれ、茨苑祭で活動(教室展示や、屋外店舗での里美商品の販売等)を行った。

第 22 講:先進地実地研修(近郊)(12 月 6 日)

東京の拓殖大学文京キャンパスで行われた「社会人基礎力育成グランプリ 2016 関東地区予選大会」を参観した(第Ⅲ章・2)。

第 23 講:活動報告会(12 月 12 日)

人文学部 10 番教室で活動報告会を実施した(第Ⅳ章・2)。

第 24~25 講:チーム活動

活動 3:先進地実地研修(遠郊)(12 月 26 日~28 日)

山形県最上郡金山町において、金山町をフィールドとした各種域学連携活動を参観した(第Ⅲ章・3)。

第 26 講:リフレクション(1)(1 月 8 日)

一斉授業形式で、授業の「振り返り」を行った。併せて、個人レポートや報告書原稿の執筆についてアナウンスした。

第 27 講:チーム活動

第 28 講:リフレクション(2)(1 月 29 日)

一斉授業形式で、再度、授業の「振り返り」(教員への要望を含む)を行った。併せて、個人レポート(2 月 15 日までに提出)や報告書原稿の執筆について、必須事項等を最終的に確認した。

報告書の活動報告部分(「はじめに」「活動の目的・目標と概要」「活動記録」「会計報告」「活動トピック」「おわりに」)の分担を決め、各自で執筆した後、リーダーが原稿を集約して 2 月 15 日までに提出した。但し、「こみフェス」チームについては、2 月 20 日の「こみっとフェスティバル」の終了後の 2 月 24 日に個人レポートと併せて提出した。

活動 4:プロジェクト実習B・現地活動報告会(1 月 31 日)

常陸太田市里美地区里美学習センターにおいて、現地報告会を実施した。本来、第 23 講同様授業扱いとすることを予定していたが、日程調整が難航して後期試験開始前日となってしまったため、「プロジェクト実習B」単独の活動とし、他チームのメンバーは自由参加とした(第Ⅳ章・3)。

第 29~30 講:チーム活動

活動 5:こみっとフェスティバル 2016(2 月 20 日)

イオンモール水戸内原において、市民団体の活動を紹介するイベントが行われ、「こみフェス」チームのメンバーは終日、イベントの運営(展示物の説明や、出演者のステージ誘導等)に携わった。他のチームからも有志が参加して、運営に協力した。

以上。

2:さとみ・あい 活動報告

プロジェクト実習B

大チーム「さとみ・あい」全般

千葉 美香	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	4年
星野由季菜	同上	4年
井上 紗希	茨城大学人文学部社会科学科	4年

小チーム「さとみ力伝え隊」

リーダー（大チーム「さとみ・あい」リーダー）		
： 箭内 淳美	茨城大学人文学部社会科学科	3年
副リーダー： 山田真理子	同上	3年
書記： 山口 未来	同上	3年
会計： 山口 奈穂	同上	3年
渉外： 南 陽子	同上	3年

小チーム「泉美・ゆう」

リーダー（大チーム「さとみ・あい」副リーダー）		
： 大枝 俊貴	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
書記： 鈴木 透	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
会計： 小林 希望	同上	2年
渉外： 助川 実咲	同上	2年

主担当教員	： 鈴木 敦	茨城大学人文学部 教授
副担当教員	： 神田大吾	茨城大学人文学部准教授
泉美・ゆう顧問教員	： 鈴木晋介	茨城キリスト教大学文学部助教

2015 年度
茨城大学人文学部 プロジェクト実習B
「さとみ・あい」活動報告

はじめに

箭内 淳美

茨城大学人文学部プロジェクト実習Bは、地域連携・地域貢献をテーマに活動している。そのなかで結成されたのが「さとみ・あい」である。「さとみ・あい」はプロジェクト実習開講初年度より続いて結成され、今年度で4年目を迎えるチームである。初年度より、茨城県常陸太田市里美地区を主なフィールドとして活動している。

茨城県の最北端にある常陸太田市里美地区は、典型的な中山間地域、少子高齢化、過疎化が進む地域であり、若者の視点・活力が不足し、素晴らしい地域資源、景観があるにもかかわらず、それをうまく生かし切れていないという現状がある。そこで学生の視点で地域の魅力を発見・発信し里美を多くの人に行ってみたくと思えるような地域にすることが主な活動の軸となっている。

2014 年度は、「学生視点で里美をPRする」「里美をより元気な地域にする」という2点を目標に活動を行った。具体的な活動内容としては、初年度より継続し、関わらせていただいている「在来作物の里川カボチャの年間を通しての栽培のお手伝い」、常磐大学・茨城キリスト教大学・茨城県立水戸農業高等学校・茨城大学留学生・プロジェクト実習他チームの学生と合同で行った「里川カボチャ収穫祭」がある。そのほか、新たな取り組みとして、2泊3日の里美での合宿、水戸農業高等学校食品化学科との里川カボチャの商品開発を行った。商品開発では、里川カボチャのタルトを作成し、茨城大学学園祭「茨苑祭」での販売をした。その他、「水戸まちなかフェスティバル」への出店なども行い、不特定多数の外部の方へのPR活動ができた。さらに、里美に暮らす方々を取り上げたPR冊子「いいあんばい」を作成し配布した。地域の方々との交流並びに、新たな関係づくり、冊子の作成など多方面にわたる活動ができた。

2015 年度も、昨年度に引き続き常陸太田市里美地区のPRならびに商品開発、地域の皆様、茨城県立水戸農業高等学校との連携を継続して行っていった。今年度の大きな特徴としては「さとみ・あい」を大チームとし、それを構成する形で小チーム「さとみ力伝え隊」「泉美・ゆう」という2チームをおいたことである。それぞれ、常陸太田市里美地区と、水戸市泉町2丁目を主なフィールドとして活動させていただいた。いずれも地域の皆様のご協力のもと多くの活動を行うことができた。

活動形式としては、小チームごとにベースとなる活動を定め、提案チームが主軸となり、プロジェクトを進めた。提案していない方の小チームは、補助として活動に参加するという形をとった。

主な活動は以下のとおりである。

「さとみ力伝え隊」・・・里美ふれあい振興公社をはじめとした里美地区の皆様との連携をベースとした。メンバーは5名。リーダー編受講者2名、スタッフ編受講者3名である。

- ①里川カボチャ収穫祭
- ②SNS フォロワー倍増計画
- ③おさとちゃんグッズの試作

「泉美・ゆう」・・・水戸市泉町二丁目商店街振興組合との連携をベースとした。

メンバーは4名。全員がスタッフ編である。

- ①里美地区特産品販売ブースの設置
- ②リーフレット作成

なお、メンター編の受講者3名については全体統括として、両チームに所属する形を取った。

1:活動の目標・概要

(1)活動目標

学生視点での常陸太田市里美地区・水戸市泉町二丁目のPR。

- ・足を運ぶきっかけ作りをする。
- ・積極的な広報活動

地域住民の方々の新たな関係づくりの一助となる。

- ・連携の拡大、深化

(2)活動の概要

○チーム概要

プロジェクトB 地域連携・地域貢献のカテゴリーに属する。スタッフ編5名。リーダー編4名。メンター編3名、計12名にて、構成されている。本年度で、継続して4年目の活動となる。昨年度とは違い、「さとみ・あい」を大チームとして置き、それを構成する小チームとして、里美ふれあい振興公社をはじめとした里美地区の皆様との連携をベースとした「さとみ力伝え隊」、水戸市泉町二丁目商店街振興組合との連携をベースとした「泉美・ゆう」をそれぞれ置いた。

○各小チームの活動

小チームごとに、ベースとなる活動を定め、提案チームが主軸となり、プロジェクトを進めた。提案していない方の小チームは、補助として活動に参加するという形をとった。

主な、活動を小チームごとに述べていく。

「さとみ力伝え隊」

①里川カボチャ収穫祭

里美に実際に足を運んでもらうきっかけ作り、他大学との交流を主な目的として定めた。常磐大学、茨城キリスト教大学、水戸農業高等学校からも参加者を募り、計31名でのイベントとなった。主な、内容としては、里美地区の在来作物である里川カボチャの収穫、里美地区に関するクイズ等を取り入れたレクリエーション、水戸農業高等学校と連携した、里川カボチャ使用の軽食の提供、観光スポット「横川の滝」の案内を行った。当イベントのリフレクションとして、アンケートを実施。イベント満足度や、里美地区に関する印象の変化などを重点的に分析した。

②SNS フォロワー倍増計画。

「さとみ・あい」既存のSNS (Twitter、Facebook) のフォロワーおよびいいねの数を年度末までに倍増させるという計画を実施した。水戸まちなかフェスティバル、茨苑祭におけるビラの配布などを行い、Titter のフォロワーは、78人から172人に増加。Fabebook のいいねの数は、94人から108人の増加であった。

③おさとちゃんグッズの試作

「さとみ・あい」が里川カボチャをイメージして制作したキャラクター「おさとちゃん」のグッズの試作および配布を行った。今回制作したのは、配布物等の中に入れて一緒に配れるといった理由からトートバッグであった。2016年1月31日里美地区で開催されたプロジェクト実習B 現地活動報告会、2016年2月7日に常陸太田市観光物産協会主催で開催されたイベント「汁 one カップ」にて配布、アンケートを実施した。詳細は「4.活動トピック」の(3)に記す。

「泉美・ゆう」

①里美地区特産品販売ブースの設置

三度に渡って行った。

一度目は、水戸市泉町二丁目商店街振興組合協力のもと泉町会館を使用した「さとみCafé」を開催。事前に水戸農業高等学校の生徒さんにご協力戴き、アンケートを実施した。質問票(図1)と、ひとまずの集計結果(図2)を列記する。里美ふれあい振興公社協力のもと里美牛を使用したカレー、牛丼、水戸農業高等学校の協力のもと、里川カボチャを使用したスイーツの販売を行った。

二度目は、「水戸まちなかフェスティバル」の泉町二丁目商店街振興組合ブースをお借りし、ブース展開を行った。ここでは、里美牛カレー、水戸農業高等学校と連携した里川カボチャのスイーツおよび野菜の販売を行った。

三度目は、茨城大学の文化祭である「茨苑祭」で出店。水戸農業高等学校と連携した里川カボチャのスイーツの販売を行った。なお、各ブースの展開にあたって、仕入れ交渉、野菜の植ええ、試食、成分表の製作等を行った。

図 1:さとみ Café 事前アンケート 質問票

里美地区および泉町二丁目についてのアンケート

この度、私共「泉美・ゆう」は里美地区と泉町二丁目の連携をテーマとし、仮設カフェの運営を計画しております。場所は水戸市の泉町二丁目商店街の中にある泉町会館を予定しています。この運営に際して、皆様の意見を取り入れた意味のあるものとしたと考えております。お手数ではありますが、ご回答をお願いいたします。

性別：男 女 年齢：()

質問 1 常陸太田市の里美地区を知っていますか？

知っている 知らない

→知っているとは答えた方は 質問2、3へ
知らないとは答えた方は 質問4へ

質問 2 以下は里見地区の特産品です。知っているものに丸をつけて下さい。

里川かぼちゃ 里美牛 飲むヨーグルト 里美コーヒー

質問 3 里美地区について知っていること、または印象をお書きください。

()

ここからは、全員にお聞きします。

質問 4 水戸市の泉町二丁目(※地図の赤枠内になります)で利用したことのあるお店はありますか？ある場合は、店名もしくは〇〇屋さんという形でお答えください。
※京成百貨店は泉町一丁目ですので含みません。ご注意ください。

ある
[]
ない
[]

質問 5 もしあれば、行こうと思うであろうお店をお答えください。
[]

質問は次ページへ続きます

質問 6 泉町二丁目で気になっているお店はありますか？

ある()) ない

質問 7 泉町のような、若者の買い物客が減りつつある町に学生主催のカフェがあったら、行きたいと思いませんか？また、その理由をお聞かせください。

思う 思わない 理由()

質問 8 私たちはカフェで里美の特産品を販売します。食べてみたい特産品をお教えください。
例) 里見牛を使ったカレー、牛丼、里川かぼちゃのお菓子など
()

最後に、アンケートご協力の感謝を込めまして、カフェでご利用いただける優待券をお渡しいたします。ご来店時に、こちらの優待券を提示していただいた方に、ささやかながら特典をつけさせていただきます。特典の内容はお楽しみに！！

開店の際は、こちらをお手に、ぜひともおいでください！！
開催日は決まり次第ご連絡させていただきます。

ご協力、ありがとうございました。

泉・ゆう待券	泉・ゆう待券
泉・ゆう待券	泉・ゆう待券
泉・ゆう待券	泉・ゆう待券

図 2:さとみ Café 事前アンケート まとめ

【対象】
水戸農業高校生徒 15～18 歳男女 108 人

【目的】
泉町会館にて開催する仮設カフェに若い世代(高校生)の意見を取り入れる。
里美地区、泉町二丁目商店街の認知度、ニーズについて調査する。

【質問1】
常陸太田市の里美地区を知っていますか？
(1)はい 31 (2)いいえ 77
*知っているとは答えた方は質問2へ・知らないとは答えた方は質問4へ

【質問2】
以下は里美地区の特産品です。知っているものに丸をつけて下さい。
里川かぼちゃ:12 里美牛:4 飲むヨーグルト:19 里美コーヒー:8

【質問3】
里美地区について知っていること、または印象をお書きください。【自由記述】

(1)環境系

自然豊か：5・田舎：3・田がたくさん：3・子供が少ない：1・みんな優しい：1・農家がたくさん：1

(2)産品・催事系

ジェラートが売っている：4・飲むヨーグルトがおいしい：3・ソフトクリーム：1・牛：1・カボチャ：1・かかしまつり：3

【質問4】

水戸市の泉町二丁目で利用したことのあるお店はありますか？

(1)ある 10

八百屋・十銭屋・パスタ屋さん・ローソン・ぱんやさん・京成百貨店・神社

(2)ない 75

【質問5】

もしあれば、行こうと思うであろうお店をお答えください。

お菓子のお店：2・コンビニ：1・ユニクロ：1・古着屋：1・古本屋：2・ガルパンショップ：2(アニメ「ガールズ&パンツァー」関連のお店か)・ゲームセンター：1・ディズニーリゾート：2

【質問6】

泉町二丁目で気になっているお店はありますか？

(1)ある：4 (2)ない：83

【質問7】

泉町のような、若者の買い物客が減りつつある町に学生主催のカフェがあったら、行きたいと思いますか？

(1)思う 58

楽しく盛り上がりそう：11・どんな感じなのか気になる：9・学生主催だから：8・ゆっくりできそう：5・活気がありそう：2・カフェが好き：1・交通手段が取りやすい：1・めずらしい：1・友達が増えそう：1・普段利用しない場所なので興味ある：1・将来的にカフェの経営がしたい：1・安そう：1・京成目当て：1

(2)思わない 36

遠いから：10・興味がない：4・場所がわからない：3・面倒：3・魅力がない：2・学生主催だから：1・時間がない：1・高そう：1・あまりいいかない：1

【質問8】

私たちはカフェで里美の特産品を販売します。食べてみたい特産品を教えてください。

(1)里川カボチャ系

かぼちゃのお菓子：15・かぼちゃ：4・タルト：3・かぼちゃのスープ：2・かぼちゃケーキ：2・かぼちゃコロッケ：2・カボチャそば：1・かぼちゃパイ：1・かぼちゃカレー：1

(2)里美牛系

牛丼：8・カレー：7・里美牛カレー：1・里美牛シチュー：2・里美牛ステーキ：1・里美牛串焼き：1・牛かつ：1・里美牛ハンバーグ 1・牛タン：1・フルコース：1

(3)ジェラート・飲むヨーグルト系

飲むヨーグルト：3・ヨーグルトのデザート：3・ジェラート：3・アイス：3・パフェ：1・フラペチーノ：1

(4)里美コーヒー系

里美コーヒー：2・コーヒーのデザート：2・コーヒー牛乳：1・水：1

(5)特産品との関係不明

ラーメン：3・お菓子：3・クッキー：1・プリン：2・パン：1おにぎり：1・メロン：1・フルーツ：1・わたあめ：1

②リーフレット作成

里美地区と泉町二丁目商店街の連携を背景に、両地域のPRのためのリーフレットを作成することを計画した。詳細は「4.活動トピック」の「(4)リーフレットの作成」に記す。

2:さとみ・あい活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2015年5月29日 9:00~12:30	茨城大学人文学部 C406	今後の方針決定・ 構想発表会の打ち合わせ	井上、千葉、星野、 南、箭内、山口未 来、山田
2	2015年6月5日 11:30~13:00	茨城大学人文学部 C406	今後の活動の素案作成	黒澤、大枝、鈴木、 助川、小林
3	2015年6月6日 13:00~15:00	水戸駅近辺	今後の活動について	黒澤、大枝、鈴木
4	2015年6月12日 11:30~12:10	茨城大学人文学部 C406	1day カフェに関して	黒澤、大枝、助川、 小林
5	2015年6月14日 8:40~17:30	常陸太田市里美地区	荷見様農地にてかぼちゃの種ま き並びに振興公社様へご挨拶	千葉、星野、箭内、 山口未来、山田、黒 澤、助川 (予定外参加者: 井上、南、山口奈 穂)
6	2015年6月19日 10:30~12:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	水戸農業高等学校様との連携に ついて	南、箭内、山口奈 穂、山口未来、山田
7	2015年6月26日 10:20~13:00	茨城大学図書館	リーフレットに関して これからの役割	黒澤、大枝、鈴木、 助川、小林
8	2015年7月3日 10:40~13:00	泉町会館	泉町二丁目商店街振興組合様 との顔合わせ等	黒澤、大枝、鈴木、 助川、小林
9	2015年7月8日 11:00~12:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	夏合宿ついて	井上、千葉、星野、 箭内、南、山口奈 穂、山口未来、山田
10	2015年7月18日	茨城県青少年会館	企画提案チャレンジ支援事業 プレゼンテーション	黒澤、大枝、助川
11	2015年7月24日 10:30~12:30	茨城大学図書館 グループ学習室	・水戸農業高等学校農業科様と どのように連携していくか ・夏合宿をどうするか	井上、千葉、南、箭 内、山口未来、大枝
12	2015年7月27日	水戸農業高等学校	今後の活動に関して	大枝
13	2015年7月31日	茨城大学 C406	1day カフェに関して SNS に関して	黒澤、大枝、鈴木、 助川
14	2015年8月7日	茨城大学図書館	1day カフェに関して	大枝、鈴木、助川、 小林
15	2015年8月10日 9:00~17:00	常陸太田市里美地区	・里美地区の観光名所訪問 ・振興公社様へカフェ運営にあ たってのご挨拶とご協力のお願 い	井上、星野、南、箭 内、山口奈穂、山口 未来、大枝、小林、 助川
16	2015年8月18日 15:00~16:00	茨城大学図書館	学内誌「Blooming」取材	鈴木、助川、小林
17	2015年8月23日	泉町二丁目会館	リビングルームとの連携に関して 1day カフェに関する打ち合わせ	大枝、助川
18	2015年8月25日	茨城大学図書館	今後のチームの役割分担、 活動に関して	大枝、鈴木、助川、 小林

19	2015年8月28日	常陸太田市里美地区	荷見氏農地にて里川カボチャ農地手入れ ならびにBSジャパン取材対応	井上、星野、南、箭内、鈴木、助川
20	2015年9月7日	里美ふるさと振興公社	1day カフェに向けての試食会	山口未来、大枝、小林
21	2015年9月10日 15:00	水戸農業高等学校	1day カフェに関する打ち合わせ	助川、大枝
22	2015年9月13日	泉町会館	水戸芸術館森山さま、リビングルーム山口さまとの打ち合わせ	大枝、助川
23	2015年9月26日	里美ふるさと振興公社	1day カフェ出品商品の調理、受け取り	井上、箭内、大枝、助川
24	2015年9月26日	茨城大学 B502	備品準備	鈴木、助川
25	2015年9月27日	泉町会館	1day カフェ	井上、南、箭内、山口未来、大枝、鈴木、助川、
26	2015年9月28日・29日	常陸太田市里美地区	里美合宿	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝
27	2015年10月9日 12:00~13:00	茨城大学人文学部 C406	収穫祭について	井上、南、箭内、山口未来、山田
28	2015年10月15日 10:30~12:00	泉町会館	水戸フェスについて	南、山口奈穂、山口未来、山田
29	2015年10月17日 8:30~18:00	常陸太田市里美地区	収穫祭	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、鈴木、助川
30	2015年10月23日 10:00~12:30	茨城大学人文学部 C棟 406	収穫祭の反省点について	千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来
31	2015年10月21日	茨城大学図書館	水戸まちなかフェスティバルに関して	大枝、鈴木、助川
32	2015年10月23日	茨城大学 B502	備品準備	鈴木、助川
33	2015年10月24日	里美ふるさと振興公社	出品商品の調理、受け取り	大枝、山口未来
34	2015年10月25日	泉町二丁目	水戸まちなかフェスティバル	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、鈴木、助川
35	2015年10月31日、 11月1日	常陸太田市里美地区	味覚祭のお手伝い	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、
36	2015年11月4日	茨城大学図書館	茨苑祭に関して	大枝、鈴木、助川
37	2015年11月13日	茨城大学	茨苑祭準備	大枝、鈴木、助川
38	2015年11月13日	水戸農業高等学校	茨苑祭で出品する商品の準備、受け取り	南、鈴木、助川、

39	2015年11月14、15日	茨城大学	茨苑祭	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、鈴木、助川、小林
40	2015年12月4日	茨城大学 B502	リーフレットに関して	大枝、鈴木、小林
41	2015年12月12日 8:00~17:00	茨城大学講義棟10番	最終報告会	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、鈴木、助川、小林
42	2015年12月16日 16:00~18:00	泉町会館	リーフレットに関して	鈴木
43	2015年12月22日 8:50~10:30	茨城大学図書館グループ学習室	最終報告会反省	井上、千葉、南、箭内、山口未来、山田、大枝、助川
44	2015年1月21日	茨城大学	おさとちゃんトートバッグ準備	山口奈穂、山口未来、
45	2015年1月22日	茨城大学	おさとちゃんトートバッグデータ入稿準備	山口未来、大枝、鈴木
46	2015年1月29日 8:30~10:00	茨城大学人文学部	活動報告会冊子準備	南、山口奈穂、山口未来、山田
47	2015年1月29日 16:00	茨城大学人文学部 A棟	報告会準備	大枝、鈴木、小林
48	2016年1月30日	茨城県青少年会館	企画提案チャレンジ支援事業最終報告会	大枝、鈴木、助川
49	2016年1月30日	茨城大学人文学部	活動報告会準備	箭内、山口奈穂、山口未来、山田
50	2016年1月31日 8:00~17:00	常陸太田市里美地区	活動報告会並びに試食会	井上、千葉、星野、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、鈴木、助川、小林
51	2016年2月7日	常陸太田駅前広場	汁 ONE カップのお手伝い	井上、千葉、南、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、助川
52	2016年2月24日 (予定)	茨城県庁	「輝け！女性活動推進フォーラム」参加	星野(予定)
53	2016年2月28日(予定)	小美玉市四季文化館みの〜れ	若者フォーラム参加	星野、箭内、山口奈穂、山口未来、山田、大枝、助川(予定)

3:会計報告

予算運用の自由度を高めるため、さとみ力伝え隊チーム・泉美ゆうチーム、2つの小チームごとの予算を合算して使用した。このため、下記報告も大チームさとみ・あいとして行う。

チーム予算支出内訳

(小チームごとの予算：40,000円) ×2=80,000円

品名	単価	数量	合計
ニューエコのりパネ A3	518	13	6,734
ニューエコのりパネ A2	924	3	2,772
ニューエコのりパネ A1	1,836	5	9,180
バケツ	1,125	1	1,125
ペーパータオル	525	3	1,575
ハンドソープ	566	1	566
色画用紙 B4	540	1	540
スティックのり	163	1	163
養生テープ 若葉色	180	3	540
カッターナイフ	356	1	356
水タンク 20L	1,050	1	1,050
シヤチハタスタンプ台	918	1	918
かねやま杉の木口寄せプレート	3,000	1	3,000
販促バッグ	370	100	37,000
販促バッグデザイン手数料	1,000	1	1,000
不織布スクエアトート	250	50	12,500
		総計	79,019

4:活動トピック

地域の人との交流は授業のみにとどまらなかった。私たちは、地域のイベントにも参加した。

(1) かかし祭り&味覚祭

<日時> 2015年10月31日(土)・11月1日(日)、9:00~15:30

<場所> 里美ふれあい館 イベント広場 (茨城県常陸太田市大中町 3417-1)

<内容> 農家のシンボルであり、田んぼの守り神として古来より親しまれているかかし。会場中を埋め尽くすかかしたちは、いずれも一般の方々よりコンクール形式で応募を募ったオリジナル作品。毎回、市内外よりオリジナリティ豊かで、面白い表情のかかしが数多く寄せられる。また、里美地区の豊かな自然が育んだ特産物の即売会はもちろん、芸能発表会をはじめとする里美地区の魅力が満載のイベントが多数用意されており、小さな子どもからお年寄りまであらゆる世代が楽しむことができる。千人鍋やしし鍋、お米、乳製品など、豊かな自然を誇る里美地区らしさを感じられる、どこか温かくて懐かしいイベント。



図3：仕込みの手伝いの様子



図4：販売の様子と出展作品

<活動> イベントの前日と初日に里川カボチャ研究会会長の荷見誠様宅に泊りがけで準備をした(図3)。当日販売したものは、里川カボチャ(そのまま一口サイズにカットしたもの)、里川カボチャのコロッケ(1個100円)である。コロッケは2日間で470個即完売。同ブースでは、おさとちゃん(さとみ・あいオリジナルキャラクター)のグッズを作って下さった合名会社山口の山口景司様が里川カボチャの焼酎、おさとちゃんの缶バッジを販売していた。また、かかし祭りの方にも、さとみ・あいで合計3点のかかしを出品した(図4)。その中の1点は佳作を取ることができた。賞金は活動資金に充てた。

(2) 汁 ONE カップ 2016

<日時> 2016年2月7日(日)、9:30~15:00

<場所> JR常陸太田駅前広場(茨城県常陸太田市山下町998-23)

<内容> お椀で食べる温かい汁ものを、地元商店、自治会、他県からの出店者などが販売。提供される料理はけんちん汁やスープなど温かい創作汁で、食べ終わった器1杯を投票用紙1枚と交換し、気に入った店に投票。得票の多い上位3店が表彰される。今年で5回目の開催。

<http://www.kanko-hitachiota.com/page/page000386.html>

<活動> さとみ・あいは、チーム結成当初の2013年から4年間、この汁 ONE カップに参加してきた。毎年、里川町会様が出店するブースのお手伝いをさせていただいている。里川町会様のブースは里川カボチャのスープを販売し昨年2位を獲得している。また、里美ふるさと振興公社様も里美牛のビーフシチュー販売していた。私たちは主に呼び込み、販売の手伝いをした(図5)。また、おさとちゃんトートバッグに関するアンケート調査も行った。詳しくは次の「(3) おさとちゃんトートバッグの作成について」に記す。

図5: 汁 ONE カップの手伝いの様子





(3)おさとちゃんトートバッグの作成について

①作成の経緯

里川カボチャの妖精「おさとちゃん」は里美地区のマスコットキャラクターとしてさとみ・あいの学生により生み出された。さとみ・あいの活動が4年目を迎えた今、おさとちゃんは地元の方々に親しまれ定着し、地域のPRに一役買っている。

これらの活動は文部科学省からの支援に支えられてきたが、今後これらの活動を発展させ、里美地区の魅力をより多くの人々へ発信するためにはおさとちゃんグッズの試作と、来年度以降のグッズ量産、販売に向けた情報収集が必要であると考えた。

1月31日の「プロジェクト実習B活動報告会」や2月7日の「汁ONEカップ2016」等人が集まるイベントでの配布を目指し、持ち運びに便利な不織布のトートバッグの作成に至った。デザインは学生が担当した(図6・7)。

②目的

おさとちゃんトートバッグの作成、配布を通して里美地区のPRをするとともに、併せてアンケートを実施し、来年度以降の量産品作成に向けて情報収集をする。



図6:完成品

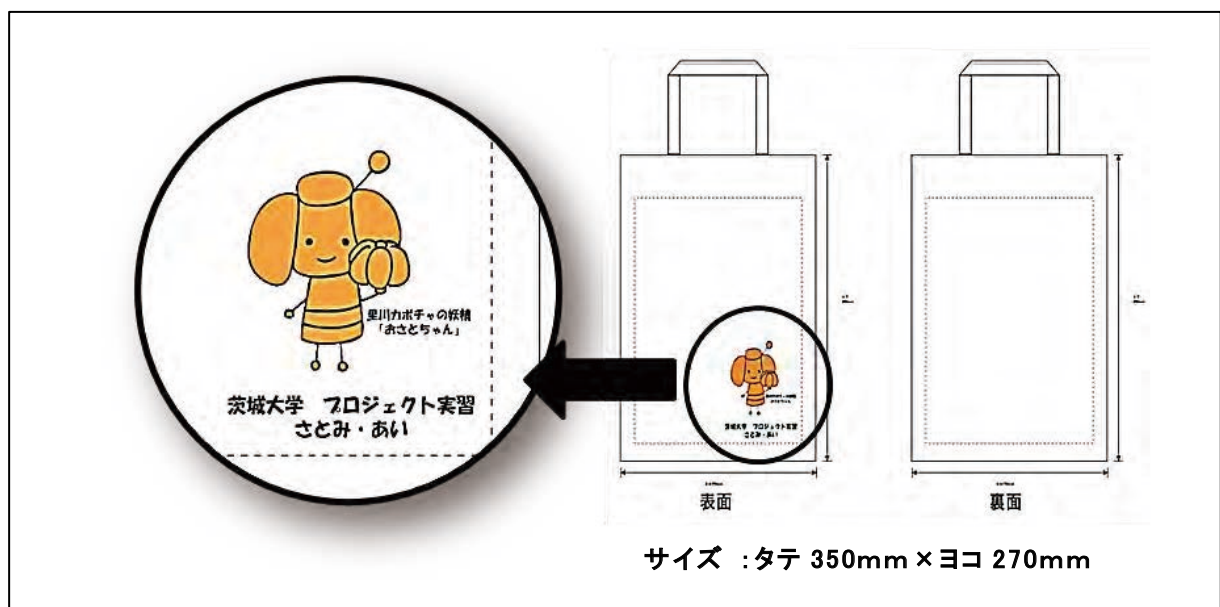


図7:デザイン指示書

③アンケート結果と今後の展望

トートバッグの試作品は100部作製し、上述のイベントで配布するとともにアンケートを実施した。アン

ケート項目と集計結果は以下の通りである。

全体的に好意的な意見が多かったものの、まだまだ質や量など改善の余地も多くあることが分かる。また、ほかの種類グッズの要望も多く、「おさとちゃん」をメインとしたグッズ作成の今後の可能性を窺える。今後はおさとちゃんグッズの一つとして各種催事等で配付、販売をすることで、里美地区の魅力を発信に貢献することが見込まれる。

④謝辞

最後に、年度末のお忙しい時期に早急に対応し、事務手続きに奔走して下さった人文学部総務係の波多野様を始めとする皆さま、トートバッグ作成において無理をきいて下さった RERECA 荻野様、デザインについてご指導戴いた教育学部の廣瀬様、全体を通してご指導下さった人文学部鈴木先生に深く感謝致します。

おさとちゃんトートバッグに関するアンケート まとめ

下記の通り、今回の「おさとちゃんトートバッグに関するアンケート」は主に常陸太田の若年層の方の意見が特に多く反映されたものとなります。

原稿締切までに日がなく、まだ細かな分析ができておりません。ひとまずの集計結果を図8に記します。

図8:おさとちゃんトートバッグアンケート まとめ

<p>回答総数: 83</p> <p>ご回答いただきました多方面の皆さま、ご協力ありがとうございました。</p>	
お 住 ま い	<p>常陸太田市民 47</p> <p>)</p> <p>常陸太田市以外(水戸 24、ひたちなか 3、日立 2、東海村 2、つくば 1、桜川 1、城里 1、十王 1、未回答 1) 計 36</p> <p>* 回答をしていただいた、約 56%が常陸太田市民の方でした。</p>
所 属	<p>学生 40</p> <p>教員 4</p> <p>会社員 23</p> <p>農家 1</p> <p>その他(主婦 5、公務員 8、NPO 団体 1、未回答 1)</p> <p>* 回答していただいた、約 48%が学生の方でした。</p>
年 齢	<p>10代 13</p> <p>20代 26</p> <p>30代 10</p> <p>40代 12</p> <p>50代 14</p> <p>60代 5</p> <p>70代 2</p> <p>未回答 1</p> <p>* 回答していただいた、約 31%が20代の方でした。</p>
<p>バッグの絵に気づきましたか？</p> <p>a) はい 78 b) いいえ 5</p>	

デザインは気に入りましたか？

- c) はい 80 d) いいえ 3

デザインを見てどんな団体かわかりましたか？

- e) はい 47 f) いいえ 36

おさとちゃん(バッグのキャラクター)に、興味がわきましたか？

- g) はい 61 h) いいえ 22

このバッグをほかの人にあげたいと思いますか？

- i) はい 66 j) いいえ 17

バッグの大きさは適当だと思いますか？

- k) はい 68 l) いいえ 15

* 現状より大きいものを望む 12、小さいもの望む 3

ひとつのグッズとしての完成度はどうですか？

- a) 平均 75 %

(理由)

ポジティブな面:

おさとちゃんがかわいい、シンプルで統一感がある、作りがちよっとした買い物に適している、シンプルですがすがしい

ネガティブな面:

留め具があるとよかった、「茨城大学」などという団体名のアピールに欠けている、おさとちゃんが小さすぎる、誰に向けての広告かよく分からない、デザインがワンポイントでさみしい、地味、デザイン性が足りない、中身が透けない色のほうがいい、バックの下にマチがあったら良い、簡素すぎて戦略が煮詰まっていないように思える、入れられるものが限られる、メッセージ性が弱い

配布ではない場合いくら位なら購入しますか？

- a) 購入する 61 平均 約 133 円
b) 購入しない 22

普段使いしようと思いますか？

- m) はい 49

(用途)

* 書類を入れて持ち運ぶ

(理由)

手ごろなサイズでちよっとした荷物もまとまるから、毎月の郵便入れ、細かい小物入れ、小物入れ、書類の携帯、会議の資料の保管

(茨城大がない方がよい。あっても、ごくごく小さく。おさとちゃんを強調するのがよい。)

- n) いいえ 23

(理由)

小さいので入れられるものが書類程度に限られており、書類を普段持ち運ぶ機会がないから、薄くて破れそう、恥ずかしい、何を入れればよいかわからない、男性が持ち歩くには抵抗があるデザインである

- o) わからない 11

他にどんなおさとちゃんのグッズがほしいですか？

- p) ほしい 63

ボールペン、消しゴム、ホッカイロ、保冷材、ティッシュ、ピアス、ストラップ、Tシャツ、

クリアファイル、シール、鉛筆、文具全般、エコバッグ、シール、T シャツ、カレンダー、
地元の愛情を感じられるもの

q) いない 20

さとみ・あいについて知っていますか？

r) はい 55

(具体的に)

里美で活動している大学生、パンフレットを見た、カボチャ代表、泉町PR、里美地区「特に牧場」のある地域で活動している学生、学生が地域で活動しながら学び、地域の再生の活動、里川カボチャのアピールをしているチーム、茨大、茨キリ、水農が共同で行っている地域連携、常陸太田の里美地区を中心に市域活性化事業している、毎年後輩がうけついで、プロジェクトBの実習とつづいた、大学生がさとみのことについてやっている、里美の魅力を伝える(2)、元さとみ・あい、里美の魅力を広める団体、里美の活性化をさせるため、里美の魅力を広げようとがんばっている団体

s) いいえ 28

おさとちゃんについて知りたいと思うことはありますか？

t) ある 41

性格、出身地、年齢、家族、声、何が最終ゴールなのか、モチーフ
どこにいったら会えるか、おさとちゃんはどんな味がするのか、彼氏の有無

u) ない 42

どんなグッズであれば受け取ろうと思いますか？

キーホルダー、ボールペン、シャープペン、ハンカチストラップ、ぬいぐるみ、マスコット、クリアファイル、子供用食器、

あなたがバッグに求めるものは何ですか？

(例)デザイン、丈夫さ、ブランドなど

使用感、使いやすさ、かわいさ、デザイン、丈夫さ、チャック付きポケット、材質、機能性、

その他、自由な感想をお聞かせください

- *新しい物に挑戦する姿に感動しています。実習を通して常陸太田の活性化につながるよう頑張ってください。
- *おさとちゃんかわいい
- *里川の魅力をもっと引き出すようなものを考えて欲しい
- *私共、里美の物をいろいろアレンジして水戸や他の地域に広めてくださり、まさしくさとみ愛です。ありがとうございました。
- *物の好みなどは人それぞれなので、耐久性、実用性のあるクリアファイルなどを配布してもらったら嬉しい。
- *アンケートの内容ももっと考えたほうが良い
- *トートバッグとして「売る」よりも、カボチャを入れて売るとか、無料配布するとかで、里川カボチャ・おさとちゃん・さとみあいを「広報すること」に狙いを定める方が本来の趣旨に合うのでは？
- *おさとちゃんがかわいいので絵柄をもっと大きくしてもいいと思う
- *先生はじめ各学生さんが里美の良さを引き出し、宣伝して下さって有り難うございます。カボチャばかりじゃなく、もっといい場所品々が有りますよ。頑張ってください。
- *ブランド化のためにもっと発信してほしい
- *ポーズ変えてほしい
- *おさとちゃんがとても好きです。
- *おさとちゃんかわいい。バッグに書かれているおさとちゃんの服の色が緑じゃなかった…
- *なかなか団体名が入っていると使いづらい。おさとちゃんマークだけでいいと思う

(4) リーフレットの作成

里美地区と泉町二丁目商店街の連携を背景に、両地域の PR のためのリーフレットを作成することを計画した。

「一つのリーフレットに二つの地域の情報を盛り込み、手にとってくれた人に二つの地域に同時に興味を持ってもらうこと。同時に、両地域を結びつける泉美・ゆうの活動も知ってもらうこと」を目指した。このため、名称も泉町の「泉」と里美地区の「美」をつなぐ気持ちを込めて「泉美散歩」とした。また、さとみ・あいメンバーの南さんに自分たちの似顔絵キャラクターをデザインしてもらい、「泉美・ゆうメンバーが紹介する」という形をとった。これを四つ折りにして A6 判の小冊子風の体裁とすることとした (図 9・10)。

リーフレット作成に当たっては、里美地区での観光地の取材および泉町二丁目商店街の飲食店の取材を行った。

作成に係る資金の確保が問題となったが、泉町二丁目商店街振興組合・宮本紘太郎様のご紹介により、公益社団法人茨城県青少年育成協会主催の「企画提案チャレンジ支援事業」

<https://www.pref.ibaraki.jp/bugai/josei/seishonen/kikaku-teian-challenge.html>

に「事業名：里美地区・泉町二丁目商店街の賑わい創出事業」として応募した (図 11)。幸いにして採択して戴く事ができ、必要経費 10 万円を全額賄っていただいた。24,000 部印刷し、現在 JR 常陸太田駅等に設置していただいている。

宮本様・公益社団法人茨城県青少年育成協会様のご支援に感謝申し上げます。



図 9: リーフレット(外観 1/4 縮小)



図 10: リーフレット(展開時 左・表面 右・裏面 1/4 縮小)

図 11: 企画提案チャレンジ支援事業申請書(部分)

3 事業の内容、実施期間やスケジュール、実施する地域・場所等

(特に独自性などのアピールポイントを記載してください。また、例年実施している継続事業の場合は前年度との相違点や新たな工夫についても、記載してください)

○事業内容

常陸太田市里美地区と水戸市泉町二丁目商店街を紹介するリーフレットを作成し、その魅力を幅広い年齢層に向けて発信して、両地域の活性化を図ります。作成のための取材・編集・印刷・活用に関する助成をお願いしたく存じます。

茨城大学の授業科目「プロジェクト実習」では、2012年度以来、茨城キリスト教大学・常磐大学・茨城県立水戸農業高等学校・泉町二丁目商店街振興組合等と連携して、

- ①貴重な在来種である「里川カボチャ」のブランド化をはじめとした地域おこし活動を展開している常陸太田市里美地区のPRを、県都水戸市の泉町二丁目商店街を拠点として行う
- ②これにより、「少子高齢化の進む里美地区」と「かつての賑わいを失いつつある水戸市中心市街地」の活性化を同時に目指す

というプロジェクトを推進してまいりました。

今年度も、従来の枠組みを引き継ぎ、

- ①里美地区での複数回の農作業（里川カボチャ栽培支援）
- ②泉町会館での複数回の「里美 Café」（里美製品の販売等）開催
- ③水戸まちなかフェスティバル・茨城大学学園祭等への参加
- ④SNS等を活用した両地域の広報活動

の4つを柱として活動しております。同授業には、茨城大学が獲得した文部科学省補助金から活動経費の支援を戴いております。

今年度の活動が本格化するにつれて、メンバーの中に

- ①従来の活動の枠組みの継続だけでよいのか
- ②従来の活動に欠けていたものは何か

との思いが広がって来ました。議論の結果、「広報対象が同世代の若者に偏っており、幅広い年齢層への働きかけが弱い」との結論に至りました。具体的には、SNSという「ネットを自在に使いこなす層にしか発信できない媒体」のみに頼る広報計画に加えて、「幅広い年齢層への発信が可能な紙媒体のリーフレット作成と、広範囲での配付が必要」と考えました。

しかし、既に授業として確定した活動計画を変更することは困難であることから、

- ①独自にサークルを結成して
- ②授業としての活動から独立して
- ③主として夏休み期間中を使って活動する

リーフレット作成の独自プロジェクトを立ち上げることとなりました。具体的な活動は以下の通りです。

- ①7月・8月に集中的に取材を進める
- ②9月・10月に、授業とは別の場所・時間帯で編集・製作作業を進め
- ③11月以降、水戸市内は勿論、各地の道の駅等、授業での活動計画に含まれていなかった場所でも重点的に配付する

○実施する地域・場所（主に活動を行う市町村や施設名等を記入してください）

常陸太田市里美地区、水戸市泉町二丁目商店街、各地の道の駅 等

4 事業の実施により得られる成果

「授業としての活動」から切り離し、独自のサークル活動として実施することで、当初計画に無かった活動を実現する。これにより、実態としては概して「仲間内のメディア」になりがちなSNSに偏った広報形態の欠点を補い、幅広い年齢層に向けた情報発信を行うことが可能となり、里美地区・泉町二丁目商店街をつなぎ、お互いの賑わいを創出する効果を高めることができると考えます。

支出	予算額（円）	内容
印刷製本費	95,000 円	リーフレット作成費用
通信運搬費	2,100 円	通信費
交通費	2,900 円	取材時の交通費（@580 円×5 人）

2016年1月30日、水戸市の茨城県立青少年会館において茨城県ならびに公益社団法人茨城県青少年育成協会の主催により「企画提案チャレンジ支援事業活動報告会」が開催され、2015年度に選定された他の25団体と共に報告を行った。

また2月28日には、同じく茨城県ならびに公益社団法人茨城県青少年育成協会の主催により小美玉市四季文化館みの〜れで開催された「いばらき若者〇〇ミッション」に参加し、ポスターセッションを行った。

上記二件の報告用に作成した活動紹介のパネルと、参加メンバーのスナップを、図12・13に示す。



図12: 報告会参加メンバー



茨城大学 学生チーム さとみ・あい
泉美・ゆう
活動報告



〇団体メンバー(4人)

茨城大学2年
鈴木透 (代表)
大枝俊貴 (副代表)
助川実咲 (会計)
小林希望 (渉外)

〇活動内容

「泉町二丁目商店街魅力探し」
→アンケート実施
水戸まちなかフェスティバル参加
→泉町会館でのワンデイカフェ
「コンテンツ制作」
→店舗への取材
「リーフレットデザイン」

〇今年度の成果

リーフレット2400部を作成。
その頒布により、学生を中心とする若者の興味関心の喚起の一助となった。
地元の方々との交流したことにより、自分たちの理解も深まった。

〇今年度の課題

初期段階での計画性のなさからくる見通しの甘さがあった。
コンセプトが不明瞭だったため、後半にかけブレが見られた。

〇活動趣旨

「茨城県水戸市泉町二丁目商店街の賑わい創出」と「茨城県常陸太田市里美地区のPR」の2つを目的として、魅力をまとめたリーフレットを作成する。

〇活動実績

- ・6月 学内アンケートの実施
- ・9月中 店舗取材
- ・9月27日 泉町会館でのワンデイカフェ
- ・10月25日 水戸まちなかフェスティバル出店
- ・12月 キャラクター作成
- リーフレット「泉美散歩」完成
- ・1月 リーフレット頒布
- 有用性に関するアンケートの実施




〇来年度に向けて

リーフレットの配布を続けつつ、情報発信等を行う。

図13: 活動紹介パネル

<http://www.pref.ibaraki.jp/bugai/josei/seishonen/marumaru-mission.html>

[編者追記]

学生からの原稿提出後に、茨城県知事公室女性青少年課編『いきいきと活躍する若者支援事業 2015 実践報告書』が刊行された。

<http://www.pref.ibaraki.jp/bugai/josei/seishonen/ikiiki-houkoku.html>

編者の判断で、関係するページを図14として追加収載する。

なお、ユース&トップミーティングについては、第IV章図20も参照されたい。



図14: 茨城県報告書より(1/4縮小・一部原寸)
[2018年1月31日 転載承諾済]

いきいきと活躍する若者支援事業概要

地域における若者の活動を支援するとともに若者間や他世代間のネットワークを構築することにより、地域の活性化と若者活動の活性化を図ることを目的に、次の事業を実施しました。

- 企画提案チャレンジ支援**
若者が提案・実行する地域課題の解決や元気づけ等のための活動、若者団体の活性化・組織強化のための企画提案等を支援する。
(1) 対象：若者が中心となって活動する団体、グループ等
(2) 支援額：原則 10 万円×30 団体程度
(3) 選考方法：1 次審査(書類選考)、2 次審査(プレゼンテーション)
- 企画提案ブラッシュアップ**
企画提案チャレンジ支援の提案の中から、若者団体の提案の実現を支援するため、支援員のフォロー・助言・指導によるブラッシュアップを行う。
(1) 支援員：若者活動に造詣の深い学識経験者等5名
(2) 支援の方法：グループとのミーティング、支援検討会議、講座形式等
- ユース&トップミーティング**
若者活動団体のリーダーと県内自治体や企業の代表者が集まり、円卓会議や交流会を通して、意見交換や交流を図る。
(1) 対象：若者団体のリーダー等30名
(2) 内容：『若者活動 3つの力(活動の魅力、活動に参加する仲間、活動のPR力)を引出す』をテーマに、自治体・企業代表、若者活動団体のリーダーが円卓にて意見交換会を行う。また、円卓会議の後、交流会を開催する。
- 若者フォーラム(いばらき若者〇〇ミッション～見つけてみない?あなたのミッション)**
県内に点在する若者団体のつながりや活動の活性化、仲間づくりなどを目的としたフォーラムを開催する。
(1) 対象：概ね18歳以上概ね30歳の若者等
(2) 実行委員会：県内の若者で構成、企画・運営を行う。
(3) 若者フォーラムの開催
・企画提案チャレンジ支援事業優秀団体の発表及び表彰
・優秀団体によるトークセッション(3団体)
・講演会
・企画提案チャレンジ支援事業団体によるポスターセッション



(実行委員会作成ポスター)

目次

ごあいさつ

- いきいきと活躍する若者支援事業概要…………… 1
- 企画提案チャレンジ支援選定団体の紹介…………… 2
- 企画提案チャレンジ支援 活動事例集…………… 5
- 泉美・ゆうチーム…………… 5
- 五つ星音楽教室プロジェクトチーム…………… 6
- 茨女(いばじょ)…………… 8
- いばらきキャンドルナイト…………… 10
- 茨城大学地質情報活用プロジェクト…………… 11
- 茨城大学ネイチャーゲーム研究会…………… 12
- 茨城県立茨城東高等学校「We are 混浴っ子!」…………… 15
- いわまユースチーム…………… 16
- 特定非営利活動法人 大洗海の大学…………… 18
- おーちゃんドラゴン講演会事務局…………… 19
- カタリバいばらき準備室…………… 22
- ゲストハウス jicca…………… 25
- 子どもふれあい隊…………… 26
- Satoani文化祭実行委員会…………… 28
- スマイルプロジェクト…………… 29
- そよかぜナイト2015実行委員会…………… 30
- 特定非営利活動法人 ちゃんみよTV…………… 32
- 常陸大宮市PRビデオ「はくらの1ページ」制作委員会…………… 34
- 福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト茨城チーム Jr. …… 35
- 益子ライブ実行委員会…………… 36
- 学びと交流の秘密基地…………… 37
- Me Too 推進室…………… 39
- Mito kawaii project…………… 40
- 水戸啓明高等学校…………… 42
- 水戸桜川千木板プロジェクトユース…………… 44
- いきいきと活躍する若者支援事業報告…………… 49
- 企画提案チャレンジ支援…………… 49
- 企画提案ブラッシュアップ…………… 53
- ユース&トップミーティング…………… 61
- いばらき若者〇〇ミッション…………… 63

企画提案チャレンジ支援 選定団体の紹介

団体名	事業の概要
泉美・ゆうチーム	豊後太田町内田地区と、水戸市豊後を結ぶ鉄道のフェスの運営でつばさ、お互いの交流が断たれずに出発
五つ星音楽教室プロジェクトチーム	聴覚障害者習得のつばさ(聴覚)の活用、聴覚障害者に音楽習得の機会を創出し、音楽を通じた交流を促進
茨女(いばじょ)	茨城出身の活躍する女性を題材に、マガジンを発行し、マガジンファンレターを配布
いばらきキャンドルナイト	音楽祭でいばらきキャンドルナイトを企画、キャンドルを灯ることで地域の活性化、キャンドルがともる地域活性化を推進する
茨城大学地質情報活用プロジェクト	茨城県内のおける地質を活用し、ジオパークをテーマにしたツアーやイベントを開催
茨城大学ネイチャーゲーム研究会	主に小学生・中学生を対象にした、自然への理解を深め自然環境に親しみやすくするゲームを開発
茨城県立茨城東高等学校「We are 混浴っ子!」	茨城県東高等学校生徒会が、週刊の水鏡及び週刊混浴っ子
いわまユースチーム	「地質情報活用プロジェクト」学生メンバーによる、茨城の地質及び自然環境の活性化の活動
特定非営利活動法人 大洗海の大学	東京市、障害者芸術祭を支援、茨城のビーチをモニターカメラで撮影するなどの活動、県民生活に貢献する活動
おーちゃんドラゴン講演会事務局	全国の写真家であるおーちゃんさんと、祭りヒーローによる講演会を通して、講演者の理解を深める
カタリバいばらき準備室	自治体との協力の場づくりにより、お互いのレベルアップを目指す
ゲストハウスjicca	観光客の良質な滞在を目的とした滞在型宿泊施設を創出することで、(観光客に観光客が呼び込み
子どもふれあい隊	大学生が小学生の読書活動に、地域の子どもたちにキャンプ、音楽制作で収穫する活動を通して、自然体験の場づくり
Satoani文化祭実行委員会	アニメソングのシンガロングライナーが開催するイベント、地域の若者の活性化及び地域活性化を促進
スマイルプロジェクト	遊び好きのつばさ、若者の成長に貢献する「そば」をテーマにしたブースを企画し、そばに繋がる活動、文化を創出する
そよかぜナイト2015実行委員会	水戸市の歴史の活性化を目的とした公開型イベントの企画と実行の運営、市民の交流の機会づくり及び若者のリーダー育成
特定非営利活動法人 ちゃんみよTV	若者の魅力、子どもと保護者で、笑い、夢、感動、共感する場をつくる
常陸大宮市PRビデオ「はくらの1ページ」制作委員会	常陸大宮市の観光を、常陸大宮の魅力を伝える動画を制作し発信する
福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト茨城チーム	東日本大震災の被害により、震災で生活する子どもたちとその家族と交流する機会を創出することで、繋がりを築く
益子ライブ実行委員会	つばさの学生と音楽によるつばさの活動を行うことで、自然環境の美しさを伝える
学びと交流の秘密基地	親世代の世代を超えて、学生による異世代のつばさの活動の場づくり
Me Too 推進室	水戸の「西のそば屋」でイベントを行うことで、市民生活で楽しむ場づくり
Mito kawaii project	学生が中心となって中心市街地でAVファンレターの企画運営により、まちがけの場づくり
水戸啓明高等学校	茨城県立茨城東高等学校による、地質の活用を目的としたイベントの企画と実行の運営
水戸桜川千木板プロジェクトユース	高校と大学生による、水戸橋と川にまつわる歴史を題材にした、地質情報活用と観光振興に繋がる活動

いばらき若者〇〇ミッション ~見つけてみない?あなたのミッション~

テーマは「つなげる」。活動と活動をつなげる、人と人をつなげる、未来につなげる。そんな思いで若者の実行委員会が企画運営したイベントです。地域活動に興味のある人も、あまり興味のない人も、みんなであつたり、参加した方が自分のミッションを見つけられるようなイベントを実施しました。

日 時	平成28年2月28日(日) 13:00~17:15
場 所	小美玉市四季文化館のみね
内 容	1部 13:00 オープニング《森のホール》 ・企画提案チャレンジ支援事業26団体の紹介 ・企画提案チャレンジ支援事業 最優秀団体・優秀団体の発表&表彰 ・地域×若者×アイデア!トークセッション コーディネーター:山崎一希氏(茨城大学 広報室) 登壇者(企画提案チャレンジ支援事業最優秀団体・優秀団体) ちゃんみよTV(統部みよさん) 常陸大宮市PRビデオ制作委員会(益子尚也さん) 子どもふれあい隊(大竹夏未さん) 2部 14:00 レクチャー《森のホール》 テーマ『地域を変えるチカラとは何か?』 ゲストスピーカー:木村俊昭氏(東京農業大学教授・内閣官房シニアマネージャー) 3部 15:45 リレーション《森のホール》ねば〜君も来るネバ〜! 『ポスターセッション』 〜今年、この町で起きた面白いこと、面白い人、面白い話〜 企画提案チャレンジ支援事業選定団体26団体によるポスターセッション。若者団体と参加者がつながる交流の場。
参加者	173名
実行委員会	公募により集まった若者団体の実行委員会により企画運営されました。 実行委員:池田夏美さん(いわまユースチーム) 小川文太さん(いわまユースチーム) 赤松和音さん(いわまユースチーム) 高木真矢子さん(茨女) 川井真緒さん(茨女) 高田利枝さん(Satoani文化祭実行委員会) 実行委員会アドバイザー:原田啓司氏(小美玉市四季文化館のみね)

泉美・ゆうチーム

事業名

里美地区・泉町二丁目商店街の賑わい創出事業

目的

常陸太田市里美地区と、水戸市泉町二丁目商店街をつなぎ、お互いの賑わいの創出

内容

常陸太田市里美地区と水戸市泉町二丁目商店街を一枚で紹介するリーフレットを作成。二つの地域の魅力を幅広い年齢層に向けて発信して、両地域の活性化に貢献すべく配布を行った。作成に際する取材・編集・印刷に関して助成をいただいた。

茨城大学の授業科目「プロジェクト実習」では、2012年度以来、茨城キリスト教大学・常磐大学・茨城県立水戸農業高等学校・泉町二丁目商店街振興組合・里美ふるさと振興公社等と連携して、水戸市泉町二丁目商店街および常陸太田市里美地区のPRを行ってきた。今年度は、その一環として下記①～③の活動を行った。

- ① 里美地区での複数回の農作業（里美地区特産の里川カボチャ栽培体験）
- ② 水戸を拠点とした里美特産品販売ブースの設置
- ③ SNS等を活用した両地域の広報活動

これらの活動を通じて私たちが感じた、両地域の魅力をまとめ、発信することが、「大学生目線」でのPRにつながるという考えに至った。そこで活動を通して”私たちの体験記”をテーマとし、リーフレットを作成および配布を行った。

スケジュール

- ① 9月～11月 常陸太田市里美地区の名所を観光・泉町二丁目商店街での取材
- ② 12月・1月 リーフレット編集・制作作業
- ③ 1月 水戸市内や学内等でリーフレット配布・アンケート調査

活動場所

常陸太田市里美地区、水戸市泉町二丁目商店街、茨城大学、各地の道の駅

成果

茨城大学構内で約50部を配布。またその他の施設で配布を実施している。リーフレットによる成果は、経過の観察が必要であるため、今後も検証していく。

配布が不十分であることと、リーフレットによる振興の効果が実証しづらいことから、今回作成したリーフレットの有用性について検証を行った。検証の方法としては、茨城大学の学生を対象とし、リーフレット読前と読後でどのような印象の変化が起こったかアンケートを実施した。結果として、泉町二丁目に関しては、全体の88%、里美地区に関しては62%がリーフレットを読んで「行ってみたい」と思ったと回答した。内容に関しては、若者にターゲットを絞り、カフェを重点的に取り上げたことが功を奏し「おしゃれ」、「レトロ」といった言葉がよく見受けられた。私たちが取り上げた魅力が読者に共感を持って受け入れられたことがわかった。また、デザインの面でも、「キャラクターのキャッチーさ」が多く挙げられ、狙いに沿うものとなった。これらのことから、ある程度の有用性が認められると考えられる。このリーフレットを配布することにより、両地域の周知、関心の喚起は可能であると判断、配布に力をいれていく。



企画提案チャレンジ支援 活動報告会

日 時	平成28年1月30日（土）9：00～17：00
場 所	茨城県立青少年会館
概 要	企画提案チャレンジ支援に選定された26団体を対象に、活動報告会を実施しました。
内 容	<p>時 間：1団体10分間（活動報告5分，質疑応答5分）</p> <p>発表方法：パネル1枚（A1サイズ）に活動をまとめて発表。</p> <p>審査委員：審査委員による審査を実施し，最優秀団体と優秀団体を選出。</p> <p>※選出された団体は，2月28日に実施されるいばらき若者〇〇ミッションにて表彰。</p> <p>支 援 員：活動報告会には支援委員も参加し，質疑応答の時間を使って指導助言などの支援やブラッシュアップが行われました。</p>



団体が作成したパネルは，下記URLからご覧になれます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/bugai/josei/seishonen/marumaru-mission.html>

ユース&トップミーティング

地域で活動している若者団体やグループのリーダーと、自治体や企業のトップとの新しい出会いの場が「ユース&トップミーティング」です。意見交換会や交流会でトップとのコミュニケーションを通じ、若者団体・グループの新しい一歩を踏み出しチャンスづくりを目的に実施しました。

日時	平成27年11月15日(日) 14:00~17:00
場所	ホテルレイクビュー水戸
テーマ	『3つの力を引き出す!』 ～活動の力・活動に参加する仲間・活動のPR力を引き出す～
自治体	高槻大宮市長 大久保太一、笠間市長 山口伸樹、茨城町長 小林宣夫
企業の代表者	イオンリテール株式会社専務取締役北関東・新潟カンパニー支社長 渡田和成 株式会社常徳銀行常務取締役 横地裕昭、関東商事株式会社代表取締役社長 関 正樹
コーディネーター	伊藤 哲司 (茨城大学教授)
キーマン	山田タロシ (webディレクター/ラジオパーソナリティ) 木村さおり (フリーアナウンサー)
総合司会	鈴木もえみ (フリーアナウンサー)
参加者	32名 (男性70%, 女性30%) (10代30%, 20代50%, 30代20%)
内容	A～C卓に分かれ円卓会議を開催。それぞれの卓にて、自治体・企業の代表者と若者団体・グループの代表者とで、テーマに沿って意見交換会や交流会を実施。

事後のアンケート結果から

1	Q: いろいろな若者団体の活動があることを知ることができた A: そう思う (90%) どちらかといえば、そう思う (10%)
2	Q: 若者団体の知り合いができた A: そう思う (70%) どちらかといえば、そう思う (30%)
3	Q: 自治体・企業のトップの方々に、活動について知ってもらうことができた A: そう思う (70%) どちらかといえば、そう思う (30%)
4	Q: 自治体・企業のトップの方々とつながりができた A: そう思う (55%) どちらかといえば、そう思う (45%)
5	Q: 今後、このような事業があれば、また参加したいと思いますか A: そう思う (90%) どちらかといえば、そう思う (10%)

※1～5の質問で『どちらかといえば、そう思わない』『そう思わない』の割合は0%。

ユース&トップミーティング

自由記述 (参加者)

- ・もう少し長くたくさん、いろいろな方とお話したいと感じました。様々なイベントを通じよりつながってきたいです。
- ・茨城を良くしようと活動しているたくさんの方々と出会えました。素敵な機会をありがとうございました。
- ・活発な話し合いになり、とても良かった。
- ・様々な団体さんのお話を聞く中で、自分たちの活動のヒントが得られ、新たな活動が出来たのでとても良い機会になりました。
- ・僕のつながりが出来るのはとても良いことだと思う。今後に活かしたい。
- ・トップの方とお話する機会は初めてだったので、勉強になりました。
- ・普段お会いできない方とお会い出来て貴重な会でした。

【A卓の様子】 【B卓の様子】
【C卓の様子】 【集合写真】
【若者団体のリーダーと自治体・企業のトップ等の交流会の様子】

5: 活動報告会 PPT

プロジェクト実習B

さとみ・あい活動報告

さとみ力伝え隊
 箱内洋美 山田真理子 南陽子 山口宗穂 山口未来
 泉美・ゆう
 大橋俊貴 鈴木達 助川実咲 小林希望
 全体統括
 井上紗希 千葉美香 星野由季菜

全体報告

全体目次

1. チーム概要
2. さとみ力伝え隊活動報告
3. 泉美・ゆう活動報告
4. まとめ

全体報告

チーム概要

水戸市泉町を中心に活動
里美地区を中心に活動

さとみ力伝え隊報告

さとみ力伝え隊報告 目次

1. 活動の目的
2. 今年度の活動
3. 活動内容
 - ・・・里川カボチャ収穫祭
 - ・・・SNS広報
4. 反省点
5. よかったこと、学んだこと
6. 今後の展望

活動目標

- 学生視点で里美をPRする
- 里美を外の人に知ってもらう
- 里美との新たなつながりづくりのお手伝いをする



- SNSを利用した広報の活発化
- イベントを成功させ、里美のファンを増やす
- 持続可能な活動を心がける
- 外部との連携の強化

今年度の主な活動

【イベント】	【情報発信】
6月14日 里美訪問	SNS広報活動
8月10日 里美訪問	
9月28・29日 PBL里美合宿参加	
10月17日 里川カボチャ収穫祭	
10月30～	
11月1日 秋の味覚祭参加	

里川カボチャ収穫祭(10/17)

【目的】

- ・里美に実際に足を運んでもらうきっかけを作る
- ・里美について知ってもらう
- ・他大学との交流を図る

【方法・内容】

- ・里川カボチャ収穫祭
- ・レクリエーション
- ・里川カボチャを使った軽食の提供
- ・観光スポットの一つである「横川の下滝」案内

概要

活動場所: 常陸太田市里美地区

参加者:

常磐大学様、茨城キリスト教大学様、
水戸農業高等学校様、さとみ・あいより
生徒、学生、教員合わせて31名で実施

当日の様子



収穫祭成果 アンケート

参加者に、事前に作成したアンケートを配布

回答者

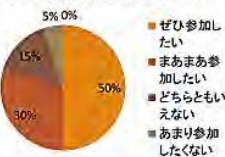
参加者20名(さとみ・あいメンバー以外)
質問は「まい」か「いいえ」の二択と自由記述によるもの
質問は全部で6項目

【成果】 アンケート結果

収穫祭満足度



収穫祭にまた参加したいか？



「特にどのスケジュールが良かったですか？(複数可)」

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1位 かぼちゃ収穫 14 | 4位 道の駅 5 |
| 2位 レクリエーション 9 | 5位 かぼちゃ試食会 5 |
| 3位 里美地区観光・横川の下滝 8 | 6位 その他 3 (お昼)(全部) |

アンケート(自由記述)

「収穫祭を通して里美に対する印象は変化したか？」

・自然、特産物、里美の人の良さなどを知り、里美は素敵な場所だと感じた。

「感想・その他」

・大学、高校の学生、生徒、そして教員の方々と交流し、楽しい時間を過ごせた。

・試食会に水農の食化も入れていければより面白いのではなしか。

・グッズの開発(どこに頼むか)などがあると楽しい。デザインをさとみ・あいに、トータルなPR(食・自然・地域伝統文化)パンフレットを太田市役所に提案してはどうか。

良かったこと・反省点

良かったこと

- ・役割分担を明確にして進めることができた
- ・当日はほぼ定刻通りに進めることができた
- ・全体として好評を頂いた
- ・他学校の皆さんと協力して進めることができた

反省点

- ・細かい部分まで調整が行き届いておらず、様々な事態に対応しきれない部分があった。(特に天候)
- ・役割を明確にした分、自分の作業のみに固執してしまった部分があった。

活動報告② SNS広報

- Facebookの「いいね！」 94人
 - Twitterの「フォロワー」 78人 (2015年6月2日時点)
- 目標・・・今年度末までに倍増させる！

2015年12月3日時点で

- Facebook 108人
- Twitter 172人

←達成！！

反省点、改善点

○更新回数

Twitter 昨年度7回、今年度25回

Facebook 昨年度25回、今年度12回

- 広報としてより即時性の高いTwitterに力を入れた
- 更新頻度が高いほど人の目に留まる回数が多くなる
- ・行事のたびに更新することができた

・どのように更新したらフォロワーや言い値が増えるのかも検討が必要だった

・イベントや行事のほかに、里美地区の情報なども併せて発信していただけたらよかった

反省点(年間の活動を通して)

・余裕のある時期にもっと活動ができたのではないかと

・小チーム内での意思疎通はできていたものの、大チーム全体での分担などがあいまいで、うまく動けないことが多かった

・小チームの活動にどのくらいかかわるべきか距離感を図ることが難しかった

良かったこと・学んだこと(年間通して)

- ・チームメンバー全員が地域の方々と密接に関わることができた
- ・メインの活動を絞ったことで、集中して取り組むことができた
- ・小チーム内での意思疎通、役割分担がうまくいった

・目的を持って行動することの重要性を考えることができた

・ただやみくもに目先のことをこなすのではなく、自分たちが何をするためにどんなことをすればいいのかを考えることができた

今後の展望

○広報に力を入れる

- ・・・里川カボチャを多くの人に知ってもらうための活動
- ・・・学内など身近なところに向けて活動する

○外部の方がもっと里美に足を運び易くなる方法を考える

○何が里美のためになるのか」ということを常に考えて活動していく

- ・・・地域の方々との交流を充実させる



ご清聴ありがとうございました！

さとみ力伝え隊の報告は以上です
以下、泉美・ゆうチームの報告です

泉美・ゆう報告 目次

「泉美・ゆう」概要

活動内容

学んだこと・得た知見

お世話になった方々

泉美・ゆう報告

「泉美・ゆう」概要

【由来】
水戸市「泉」向二丁目商店街振興組合
+
茨城県水戸市「美」地区 = 「泉美」

二つの地域を結び 「ゆう(ゆう)」

【誕生の経緯】
前身である「イヌミイル」と「さとみ・あい」の連携をきっかけとする

【目的】
水戸を拠点とした双方のPR活動⇒地域の振興

21

泉美・ゆう報告

活動内容

○里美の特産物販売ブース「里美・カフェ」の運営

- ・第一弾 泉町会館をお借りして
- ・第二弾 「水戸まちなかフェスティバル」への出店
- ・第三弾 「茨苑祭」への出店

○リーフレット

- ・泉町・里美双方の魅力を一枚に掲載
- ・「入口をふたつ口」
- ・一年を通じた私たちの体験記



22

泉美・ゆう報告

販売した里美の特産物

里美牛 ⇒ カレー・牛丼

里川かぼちゃ ⇒ デザート
(果肉ジェラート・タルト・マドレーヌ)

飲むヨーグルト

里美コーヒー



23

泉美・ゆう報告

学んだこと・得た知見

- ①「つながり」
- ②「コミュニケーション」
- ③「組織」
- ④「活動の中で」

24

泉美・ゆう報告

①つながり

○「つながり」は「つながり」を呼ぶ

- <水戸農業高校様との「つながり」>
- 前年の食品化学科様とのつながりが農業科様とのつながりへ
- <リビングルームとの「つながり」>
- 泉町二丁目振興組合様とのつながりが芸術とのつながりへ

○「つながり」は副産物を産む

農業科様との連携
→「さとみ・あい」大チームでの取組際に水戸農業高校生が参加



25

泉美・ゆう報告

①つながり

○「つながり」は「つながり」を呼ぶ

- <水戸農業高校様との「つながり」>
- 前年の食品化学科様とのつながりが農業科様とのつながりへ
- <リビングルームとの「つながり」>
- 泉町二丁目振興組合様とのつながりが芸術とのつながりへ

○「つながり」は副産物を産む

農業科様との連携
→「さとみ・あい」大チームでの取組際に水戸農業高校生が参加



26

泉美・ゆう報告

「つながり」を大事にすることは、身を助ける

⇒私たちは「つながり」を大事にできていたか？

「コミュニケーション」

27

泉美・ゆう報告

②コミュニケーション

○「連絡」は密に、常に更新を
打ち合わせで起こってしまっただ話

○伝わってこそ「連絡」

- 誤解を招く表現
- 自分たちが分かっていることを省く
- 緊急性のあるメールの書き方

28

これらは、失敗を通して学んだこと

⇒なぜ失敗が起こったのか

「組織」の弱さがあった。

③「組織」

○役振り

積み方…相手の得意な部分を、なぜ、その人に頼むか明確に
自分で全てやろうとすることの危険性

○ぶつかりあいはいはマイナスではない

モチベーションの違いを埋める作業

○共有

ハード面では実施していた EX)DPOPBOX・RENABDIの使用
打ち合わせの組み方

ここまでは、一般的なこと

⇒最後は、「泉美・ゆう」で活動してきた私たちだからこそ学べたことを。

④「活動の中で」

○ひとりよがりの解消

アンケートの実施(対象と内容)

○マーケティング

どんな層をターゲットとして、おすべはその層に届く？
いかにブースの中へ誘導を促していくか

○誘う難しさ

魅力を言葉にすること

目的の達成度

お客様の声(カメに)

- 「里美牛？」⇒メニュー等で里美を強調したことで興味のきっかけとなった。
- 「おいしいカレーでした」⇒里美牛のPRとしては期待外れ
- 「今年もかまちゃん買いましたよ」⇒効力は小さいが、確実に人気を得ている。
- 「タルト、美味しいって聞きました」⇒茨苑祭で販売するという情報の成功。

先輩方が作成したリーフレットの配布

⇒リーフレットのPRに対する有用性を実感。

「さとみ・あい」としての活動も相まり、
水戸での里美のPRはまずまず。
しかし、泉町のPRにおいてはその限り
でない。

⇒現在作成に当たっているリーフレットがPRを担
うに足るものになるよう取り組む

お世話になった皆様

- 荷見様始め里美地区の皆様
- 豊田紀雄様始め里美ふるさと振興公社の皆様
- 白石様始め常陸太田市里美支所の皆様
- 宮本紘太郎様 始め泉町二丁目商店街振興組合の皆様
- 森山純子様(水戸芸術館様)
- 茨城県立水戸農業高等学校様
- 新堀俊博先生(食品化学科様)
- 磯野貞志先生(農業科様)
- 池澤正博先生(農業科様)
- 茨城大学教職員の皆様

ご清聴ありがとうございました！



Twitter @satomi_ai
@izumi_u_satomi
face book さとみ・あい

6:最終レポート

学びと出合いの多い一年間 さとみ・あいとして活動して

12L1142F 星野 由季菜

受講3年目を迎えるものさとみ・あいとしての活動は今回が初年度であった。私が携わった活動としては、定期的な里美訪問や里美合宿、水戸まちなかフェスティバルや里美かかし祭りなどのイベントへの参加や出店補助に加え、ツイッターやフェイスブック等のSNSの更新、里美秋の大収穫祭における里川カボチャの試食会の担当などであった。

SNSの更新は里美の魅力をより多くの人に発信することを目的として取り組んだ。今年度中にツイッターについてはフォロワーを増やすという目標が達成でき、里美の認知度向上や魅力の発信に貢献したことが窺える結果となった。反省点として、実際に私が更新を担当したのは数回であり、どのような内容や投稿スタイルが効果的であるかなど分析・情報収集を行ったうえで投稿が行えたらフェイスブックのフォロワーの増加をより促すことができたのではないかと考えた。

里川かぼちゃの試食会(図)では、実際に食べてもらうことでそのおいしさや魅力を参加者に知ってもらうこと、里美ファンを増やすことを目指した。参加者からは「おいしい」という声もあり、事後アンケートにおいても数票であったが、特に良かった内容として挙げられた。

その反面詰めが甘かったと思う点があった。事前準備を計画的に行う事、当日のスケジュールを考慮した試食の分量の設定と試食の時間配分、当日の動きを具体的に想定し必要な物を準備するという点で課題が残った。まず事前準備について、イベントの4日程前に下準備をしていたが、里川カボチャが痛む可能性があるといった不安が残ったため、当日の深夜に一部再度準備し直すということがあった。

試食用のカボチャ料理がかなり余った点も反省すべきである。原因としては、昼食の数時間後に試食会が設けられているということを十分に考慮できていなかったことが挙げられる。中には、余ってしまった料理を無理に食べている参加者もいた。多少多めに準備するというのが鉄則ではあるが、試食会の前後の流れまで考慮できていれば準備する分量をより適切にできたと考えられる。

一番の反省点は、試食会の片づけまでの具体的な動きが想定できていなかった点である。ゴミ袋の準備を忘れてしまい、有り合わせのビニール袋で対処をしたものの、試食会の予定終了時刻を30分程超えてしまった。参加者の方々が素早く主体的に動いて下さったためこの程度の遅れで済んだが、いかに事前に具体的な動きを想定するかが重要であることを改めて痛感した。

以上のようなことは、これまで様々なイベントの企画や運営に携わってきた経験やそこで培った力を過信したために生じたのではないかと反省した。具体的に詳細まで詰めていなかったにもかかわらず、これまでの経験をもとにその場で臨機応変に対応できるであろうと考えていた節が少なからずあった。しかし、大切なのはその場での対応力のみならず、事前に生じうるリスクや、必要となるものを想定し最大限準備しておくことであると学んだ。

一年間の活動を通して里美の豊かな自然やおいしい食、そこで暮らる人々に出会った。里川カボチャや里美牛などの地域の食は人々をつなぐこと、地域を盛り上げることに大きな役割を果たしていた。これらの食を通じた地域活性が盛んになった背景として、そこに住む方々の地元の食に対する関心と誇り、郷土愛が感じられた。そうした人々自体も、地域資源であり、地域の財産であるという考えに至った。

また、里美の抱えているイノシシなどの獣害や少子高齢化、地域資源の活用や維持における課題を知り、それらに対し誰がどのような取り組みをしているのか学んだ。地域を盛り上げようと活動をしている方々と出会い、活動する中で、自分の暮らす地域に愛着をもつこと、地域の資源を守りつつ様々な人を巻き込みながら育んでいくこと、常に新しいアイデアや解決策を模索し挑戦していくことの大切さややりがいを学んだ。とても学びと出合いの多い一年間であった。今後も、ここで学んだことを今後の活動に活かすとともに、できたつながりを大切に、里美ファンとしてこの地域に関わり続けたい。



収穫祭・試食会風景

里美での活動から得たもの 3年間の活動を振り返って

12L2025Y 井上 紗希

私は平成25年度から3年間プロジェクトの活動を続けてきた。今回はその3年間について振り返る。

まずは、今年度の活動についてである。今年度は4年次ということで、活動の中心からは身を引き、後輩たちを支える・アドバイスをするという役を担って活動に参加した。出来る限り活動に参加してきたつもりではいたが、就職活動が少し長くかかったため、いろいろな活動を後輩たちに任せっきりになってしまったことが心残りである。しかし、今年度は、リーダーとして活動してきた昨年度とはまた違った立場からチームの活動を見て、経験することができた。自分の過去の経験から後輩にアドバイスをすることも大切であるが、それを押し付けるのではなく少し離れたところから見守っていくこともまた経験者である先輩として大切なことなのだろうと感じた。そうすることで後輩の成長にもつながるし、過去の経験にはなかった新しい化学反応が起こり良いものが生まれるのではないかと考える。

また、具体的な活動については、今年度は4年生3人でさとみ・あいのSNSの更新を担当した。なるべくたくさん更新しようと思っていたのだが、結果として更新回数はあまり多くはなかった。その要因としては、最初の段階で更新の担当や更新する内容についてしっかりと決めておらず曖昧になっていたことと人に伝わる文章の書き方や写真の魅せ方について勉強不足であったことが挙げられると考えている。SNSは多くの人とつながって自分たちの情報を発信できる手段であり、地域の人よりも大学生の方が使い慣れたものであるから、地域に関わる若者としてより強化していき、活用できたら良いと思う。SNSの更新の他に、私は収穫祭でのしおり作りと観光を担当した。しおり作りは作成がギリギリになってしまったことが反省点として挙げられるが、さとみ・あいや里川カボチャや観光スポットの説明を入れることができたので、昨年よりも良いものができたと思う。収穫祭に関しては、昨年度の直前のドタバタの経験を生かして今年度はしっかり役割分担をしてそれぞれが抜けのないように準備を進めていくことができた。もし来年度も収穫祭を行うのだとしたら、今年度とはまた違った要素を盛り込むのもっと面白いイベントになるのではないかと考える(図)。

次に、3年間の活動について振り返り、その中で学んだことをまとめる。今年度は就職活動の中でプロジェクトの活動のことや活動から学んだことを振り返る機会が多くあった。私がプロジェクトでの活動を通して学んだこと・得たものは、大きく分けて2つあると考えている。ひとつは「チームワーク力」である。今までやってきた活動は一人では到底やり遂げることができないことで、チームとしてみんなで協力してきたからこそできることであった。学年もやり始めたきっかけも全く違う仲間たちと一緒にひとつの目的のために活動することができたのは貴重な機会だったと思うし、その中で「みんなで協力しあう」とはどういうことなのかを自然と身につけることができたと考えている。ふたつめが、「人と人とのつながり」である。私は、プロジェクトの活動の中で数え切れないほど多くの人と出会い、その出会いからたくさんの刺激を受けた。荷見様や豊田様や宮本様などをはじめとして、地域おこしという答えの見えない課題に真剣に向き合っている大人たちがたくさんいるということを知ることができた。それらの出会いは現在の自分に大きく影響していると思う。これまでの活動の中で出会った多くの人とのつながりをこれからも大切にしていきたいと思う。

最後に、私は大学生活の様々な経験から「大学卒業後も地域おこし・まちづくりに関わりたい」と思うようになり、私の地元である常陸太田市役所に就職することに決めた。ずっと地元で暮らしていて華やかな経歴も持っていない私だが、大学での経験に自信と誇りをもって仕事に取り組みたいと思う。就職後も学生時代に身につけたチームワーク力と地域の人とのつながりを活かして地域に貢献できるように頑張っていきたい。



収穫祭 (さとみ・あいメンバー)

チームでの活動に大切なこと ～プロジェクト実習2年目を迎えて～

13L2198L 南 陽子

大学3年生の4月。正直、私はプロジェクト実習を取るかどうか悩んだ。昨年度の活動で2チームを兼任していたこともあり、その大変さを知っていたからだ。だが、自分の気持ちの中ではやりがいのほうが勝っていた。私は、履修登録のボタンを押すと同時に、今年度も頑張ろうと覚悟を決めた。明らかに2年生のころとは授業に対する意識は違っていた。振り返ってみて、今年度は特に、チームで活動することの難しさを感じた。それは、単純にメンバーが増えたこと、自分が3年生という中心的立場になったことが理由かも知れない。しかし、そこから私は多くのことを学んだ。

学んだことの1つ目は、「コミュニケーションをとること」の大切さだ。私たちのチームは、前半に体調不良でメンバーが一人抜けてしまった。その子は小チームのリーダーだった。私が考えるリーダーとは、いわば「司令塔」である。リーダーがメンバーに指示・役割分担をする。それは決して簡単なことではない。指示すること、頼ることを苦手とする人もいる。責任感が強い人ほど、理想のリーダーになろうと頑張りすぎてしまう。私はなるべくリーダーの負担を軽減しようと心がけた。作業の負担はもちろん、心の負担も減らせればと、話しかけたり、相談に乗ったりもした。前半はメンバー間の交流があまりなかった気がする。確かに一人ひとり活動に対するモチベーションは違う



図① さとみ・あいメンバー（教室にて）

かもしれない。だが、チームで活動していくには全員で力を合わせ支え合うことが大切だ。そのためには、やはり親密度を上げる必要がある。後半は、イベントをこなしていくごとに自然と仲が深まり、上手く役割分担ができたと思う。改めてコミュニケーションの大切さを実感した。

2つ目は、「発想の転換」の大切さだ。プロジェクト実習B（さとみ・あいチーム）は今年度で4年目に突入した。チームとしてはメンバーが入れ替わっており、毎年新鮮な気持ちで活動をしている。しかし、外部の人からすればそれは関係のないことである。活動を続ければ、その分の成果や新たな挑戦が期待される。今までやったことのない事を成し遂げるには相当の労力が必要だ。また、プロジェクト実習では、座学では学べないことがたくさんある。その分慣れない事も多く、疲れてしまう時もある。そのような時こそ自分の気持ちをコントロールする必要がある。例えば、おみくじで「凶」が出たとする。それをついていないと落ち込むのではなく、これから運気が上がる一方だと考える。この発想の転換こそが大切だ。大変だと感じることも、自分が成長できるチャンスだと考えれば明るく乗り越えられる。自分でやりがいや楽しさを見出すのだ。それができないと活動は続かない。チームで、個人で、発想の転換をし、良い方向へ持っていくことが大切だと学んだ。



図② さとみ・あいメンバー
（活動報告会にて）

3つ目は、「責任感を持つこと」の大切さだ。チームで活動するには、個々が責任感を持って行動しなければならない。良い意味でも悪い意味でも、ひとりの行動がチームに大きく影響するからだ。特にこの授業は、地域の方の協力があってこそ成り立っている。信頼関係を築くためにも、最後までやり遂げる、約束や期日を守る。これは社会人では当たり前のことである。忙しさは人それぞれだが、任された仕事は確実にこなす責任がある。チームに迷惑をかけないように、私は、何事も早めに行動することを心がけた。以前に比べ時間の使い方は上手くなったと思う。また、人間誰しもミスや間違っただけの行動をしてしまう時がある。『過ちと謂う』という教えがあるように、そこで失敗を素直に認め、次の行動に活かすことができれば、自分にとってプラスとなるだろう。責任感のなさというものは、時折、恐ろしく利己的に見える。他者がどうなるかを考えないから責任を放棄する。責任感を持つことは、他人を思いやることにも繋がるのだ。

以上の3点以外にも多くのことを学ぶことができた。プロジェクト実習の2年間は、私にとって、とてもかけがえのないものとなった。このような貴重な経験をさせてくれた大学の先生方や地域の方々、メンバーに感謝したい。

事務作業の繰り返し

13L2210A 箭内 淳美

今年度で個人的な活動は2年目となる。初年度には見えていなかった部分も多く見えるようになった。また、リーダーとして物事を動かす立場となったため、調整などの役割も担った。一方で、今年度もまた新たなつながりが多く生まれた。これはプロジェクト実習を履修していなければ得ることのできない大切なものであった。昨年度から関わりのある方たちとは今年度も継続してかかわることができた。

昨年度と異なるのはチームが小チーム2チーム体制になったことである。このことで、それぞれの活動フィールドを軸に多岐にわたる活動ができたことは大変良かったと思う。しかし、昨年度から少し感じていることがある。それは「もっとたいせつなことがあるのではないか」ということである。泉町会館、水戸まちなかフェスティバル、茨苑祭でのカフェの出店や他大学生や高校生と行った収穫祭、リーフレット作成など、イベントから紙媒体の広報まで様々なことを行った。これはこれで不特定多数の皆様へPRする良い機会となったし、昨年度から継続して行っているイベントでは、昨年度の評判などを聞いて自分たちのイベントに来ていただいたというお話も伺った。自分たちの成果だけではないにしても、多少なりとも貢献できているということを実感できる良い機会となったからだ。

活動を振り返ると、ほとんどすべてが外に向けられたものである。「PR」を目的として活動しているのだから当たり前といえば当たり前なのだが、果たしてそれだけでいいのかとも感じている。外に向けて発信する前に、「ウチ」でのまとまりが必要なのではないだろうか。実際に地域に住む住民の皆様のご生活や気持ちが重要なのではないかと、それを見落としているのではないかと考えてしまう。もちろん、不特定多数のソトの人間が地域を好きになることで、その住民が魅力に気づく、あるいは誇りや自信、自分の地域が好きということにつながるかもしれない。

活動の後半は、精神的に干からびてしまっていて、事務作業をこなすのもやっとなことといった状態であった。しかしイベントの企画にせよ、物を作るにせよ、事務的な部分をしっかりこなし、詰めていかないと満足なものではないし、来ていただいた外部のお客さま、物を受け取る皆様そして、お世話になる関係者の皆様にとって、迷惑・失礼になってしまうということを連絡係として身をもって学んだ。細かい基礎の部分がないと、後々もっと大変なことになるというのはイベントの企画実施に関わらず、普段の生活やこれからの生活においても当てはまることだろう。華やかな部分だけでなく細かい部分が重要であると考えられるようになったことはこの授業を受講してよかったことのひとつである。

そんなことを言いつつもやはり楽しいのは華やかなイベントや実際に人と接する場面である。収穫祭では、常磐大学、茨城キリスト教大学、水戸農業高等学校の皆さんを里美に連れていくことができた。「百聞は一見に如かず」という言葉があるが、魅力を伝えるのは実際にその場所に行くということが最も効果的と考える。今回参加いただいた皆様へアンケートを実施したが、「(里美に)来る前と来た後では印象が変わった」「一般的な田舎と思っていたが、その土地その土地に個性があると気づいた」等の意見をいただいた。このような意見をいただけたことに喜びつつも、内心ではしてやったり、と結果を見越して喜んでいたのである。本来の魅力があったからこそこういった意見をいただけたのだと思う(図)。その点で、外部のイベントの参加や広報誌は「地域をおとどけ」という気持ちで行った。空気を少しでもお届けすることで、カフェでカレーやお菓子を食べた皆さま、SNSで写真を見た皆さまが少なからず地域を想像でき、疑似体験できる。それを提供できることがひとつの楽しみであった。

最後に、地域の皆様、活動に関わってくださった皆様、ご支援いただいた皆様、チームメンバーに厚く御礼申し上げます。



魅力の一つ。収穫祭で収穫された里川カボチャ

経験から学び得るということ プロジェクト実習さとみ・あいの一員として

13L2212N 山口 奈穂

年度初めに、昨年度のプロジェクト実習に参加した方たちから聞き、さとみと、常陸太田市との連携のプロジェクトがあり、それがさとみ・あいというチームでした。さとみ・あいの今まで行ってきた活動や主旨を聞き、私自身が常陸太田市出身であるということもありましたが、自らが地域のことを考え、様々なことを体験し、学ぶことができること知り、この活動に興味を持ったのがきっかけでした。最近の常陸太田市は汁 ONE カップをはじめ、常陸秋そばフェスティバル開催など、「積極的に活性化のための活動をしているな、人が集まる工夫をしているな、」と住民として感じています。そのなかで、そこでの茨城大学との連携を知り、私も運営側の立場に立つことで、住民としてではなく違う感覚で地域活性化についての考えを持つことができるのではと考え、期待を持ちプロジェクトに携わることを決めました。



10.17 かぼちゃ収穫祭@里美 全体集合写真

そして、今年度を通して、地域に学生が関わることは、求められていることであり、学生は社会との関係性をもっと身近に感じるための行動を起こすべきだ、という自分の中での一つの答えを見つけました。また、私は、すでにプロジェクトとしての基盤や関係者の方々との継続した関係が築かれていたさとみ・あいチームに参加して、またチームとして活動し、様々な経験を得ることができました。

一つ目は、『発信力』の重要性を肌で感じられたことです。今年度を通して、特に今後課題が残っている『発信力』という力。年度初めには、自分自身の中で、「自分の意見・考えを伝えるという場数が少ない、場数を踏む経験が必要」と考え、どれだけ自分の意見を言えるかを自分の中での課題としていました。しかし、自分にとってはうまく伝えられていると思っていても、「それは、おそらく伝わっていないよ」と言われ、伝え方について改めて考えたことがありました。論理的に整理して伝えるという点がいかに難しいか実感しました。それからは、報告会や中間報告会など他チームの方の意見の仕方や、受け答えの仕方を注視するようにして、立場の異なる相手やその場の状況に応じた発信の仕方を学ぶことができました。これからは、他人から学ぶことに加え、伝え方に磨きをかけ、自分から発信する場面にどんどん出ていきたいと感じました。

二つ目は、自分自身の中での葛藤や迷いの経験です。「今までこうしてきたから次もこうしなければならない」という考えを持ってしまうことと、今までの考えから脱することができず、新しく柔軟な答えではなく、凝り固まった考えしか持たなくなってしまうことです。今まで築かれてきた流れを変えてしまうことは相手にとって、やりにくさを感じてしまうのではないかと、不都合なのではないかと、実際のところ不安を感じていました。しかし、今年度一年間、プロジェクトに携わったことにより、自分の考えたことを順序立て、きちんとした利害調整や連絡を密にすることで成功するイベントの達成感を感じ、不安を抱くよりもまずは、全体を把握して、そして、行動することへの自信をもつことの重要性を知りました。

三つ目は、プロジェクト実習に携わっていたからこそ経験することができた、学外の方との交流です。10月後半に参加した「ユース&トップミーティング」には刺激を与えられました。茨城県内での様々な問題意識を持ち解決のために現在活動し続けている個人の方や企業、団体のお話を聞いたことで、自分の中での漠然と抱えている問題に対して、主体的に『解決・改善のために何が必要か考える』という点での考えることへのハードルが下がり、「自分ごときが考えたってどうにもならない」という考えから、「自分がどうしたらよいかを主体的に考えて、行動をどうにかして起こすべき」というような考えに変わりました。つまり、自分が『発信すること』への自信を持つことができるようになりました。また、『現状を分析して』という点においては、まだまだ、分析をするまでは出来ておらず、独りよがりな思い込みな意見になってしまっています。積極的に自分自身で知ることの機会を増やし、またそれだけでなく多くの方と交流を通して、物事を捉える上での視点の転換を助けるはずの知識を増殖させていきたいと感じました。

このような経験をさせていただけたことをとてもうれしく思います。先生をはじめ、関係者の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

1年間を通して

13L2213G 山口 未来

今年度のプロジェクト実習の活動を通して、今までの講義型の授業では分からなかった様々なことを学ぶことができた。私は今年からこの授業に参加したのだが、最初は友人に誘われ、面白そうだと思い最初の授業に出席した。そこで説明を聞くうちに、大学生という立場で地域おこしに協力することに魅力を感じたため、プロジェクトへの参加を決心した。その活動のなかでは、自分が成長できたと思うことや学んだことはもちろんだが、反省点やもっと頑張りたいことも見つけることができた。

まず成長できた点や学んだことについてだが、これは大きくわけて2つある。

1つ目は様々な年齢・立場・考え方の人とのかかわり方についてだ。プロジェクト実習では学内だけでなく学外の人とも協力しながらプロジェクトを進めていくため、普段は話さないような人とも話す機会が多くあった。そこでは自分の立場を理解し、その場に応じた臨機応変の対応が必要であったように思う。私の普段の生活では友人や先生、バイト先の社員さんやお客さんなどしか話す機会がなかったので、特に自分の考えややりたいことを伝える時にどうプレゼンしたらいいか分からなかった。しかし今年度の活動を通して、その人に合わせた説明をすることの重要性や、相手の信用を得るためにも自信をもって話すことが必要だと学んだ。このことは今後の生活にも活かしていきたいと思う。

2つ目は地域おこしについてだ。「さとみ力伝え隊」として里美地区に関わらせていただくなかで、地域おこしにはなににより、地元の人が自分の地域に自信を持つことが大切ではないかと考えた。自分の地域をPRしようとするときにはなにが魅力なのか、それをどう活かしていくかが重要となる。それらを見つけるためには自分の地域を良く知り、そこが好きでないと魅力を活かすことはできないと思う。例えば友人からオススメの映画を勧められる時、その人が本当にその作品が好きだと、細かい設定や裏話も熱心に教えてくれるため私もその作品に興味を持つことがある。これは自分の好きなものをもっと多くの人に知ってもらいたいからこその行動であると思うが、地域おこしとして外部から人を呼び込もうとする場合にも、このように自分が好きだから、自信があるからもっと知ってほしいと思うことが必要になるのではないか。人は好きなもの、自信があるものについて説明するときの方が熱意と説得力のあるものになる。これは里美や金山(図)の方々を見て感じたことである。そのためにも地域おこしをしようという場合、魅力の発信を外部にばかり行うのではなく、まず内部に発信し、地域の人に自信を持ってもらい身近なファンの獲得から始めるべきだと私は考える。

次に反省点や頑張りたいことについてだ。これも2つあるのだが、1つ目は今年度ずっと改善しようと思ってもなかなかできなかった、時間に余裕を持って行動するということである。私はもともとギリギリにならないとやる気が起きないで苦労することが多かったが、それでも自分1人の問題だと大変なのは自分であるので、それでもよいと思っていた。しかしプロジェクト実習のように多くの人と協力しながら活動する場合、自分ひとりが余裕のない行動をすることで周りの人も巻き込んでしまい、迷惑をかけるということを学び、改善しなくてはいけないと思った。そのためにも今後はスケジュール管理をしっかりと行い、余裕のある計画を立てることで慌てずに行動していきたい。

2つ目はプロジェクトを実行中にはまともに使えそうなエビデンスを意識し、実行したあとには必ず反省とまとめを行い、今後活かさなくてはならないということだ。例えばさとみ・あいでカフェを行った時にはそれ自体を形にすることが第一目標になってしまい、次回の参考になりそうな写真の撮影や反省が不十分になり、その後以前の反省を上手く活かしてきれていないと感じることがあった。そうするとせっかく得た経験を無駄にすることになり、もったいないと思った。その時は反省をしっかりと行わなくても覚えているだろうと思うが、実際はそこまで記憶力は優れていない。やはりきちんと反省し、写真や文章にしてデータを残し、今後活用できるようにすることが必要不可欠であったと思った。これは活動のなかで徐々に改善できたと思うが、それでもやはり甘い部分が多くあるので、今後改善していく。

以上のように今年度の活動を通して私は様々なことを得ることができた。これはなにかプロジェクトを実行するときにはもちろんだが、普段の生活や遊びのなかでも活かせることが多々あると思う。それを忘れずに、今回の経験を無駄にしないよう、常に意識して生活していきたいと思う。



先進地実地研修(遠郊) 於:山形県最上郡金山町
「きごころ工房」にて社長の岸様・蜂屋先生と
(编者注:先進地実地研修については第Ⅲ章を参照)

里美地区で学んだこと

13L2217F 山田 真理子

約一年間、茨城大学プロジェクト実習B大チームさとみ・あい、小チームさとみ力伝え隊の一員として、実にさまざまな行事に参加させていただきました。なかでも私のなかでとても思い出に残っていることは、常陸太田市里美地区で行ったかぼちゃの大収穫祭です。さとみ力伝え隊が主催したこのイベントには、茨城大学のほか、常磐大学、茨城キリスト教大学、水戸農業高等学校の学生、生徒、教員の方々など、たいへん多くの方が参加し、大学の垣根を越えて、さらには高校生とも交流ができました。

私は、かぼちゃの収穫祭で配布するしおりの作成、横川の下滝観光を担当しました。しおりにはこだわり、里美地区や里川かぼちゃ、さとみ・あいチームの紹介などは温かみが出るよう手書きで作成しました。この部分はパネルにも使用され、茨苑祭や水戸まちなかフェスティバルだけでなく、茨城大学や里美地区での報告会でも展示されました。

収穫祭当日は、お世話になっているかぼちゃ農家の荷見さん宅にて、里川かぼちゃを収穫し（図）、お昼には荷見さんの奥様カツ子さんお手製の里川かぼちゃコロケを含む手作り弁当をいただきました。その他、○×ゲームやジェスチャーゲームなどのレクリエーションや、里川かぼちゃを使ったかぼちゃけんぴ、サンドイッチといった試食会、そして横川の下滝観光などを行いました。

収穫祭後に行ったアンケートによれば、8割～9割の方がこの収穫祭に満足し、試食会や、里川かぼちゃの妖精「おさとちゃん」のグッズ化に向けた提案などもいただきました。

こういったイベントを通して、今まで知らなかった里美地区に少しでもいいので関心を持っていただければ幸いです。私自身、里美地区の存在を知らずして、このさとみ・あいチームのメンバーになりましたが、里美訪問やフィールドワーク、さまざまなイベントを通して、里美の魅力を存分に感じる事ができました。緑豊かでリフレッシュのできる壮大な自然や、里川かぼちゃや里美牛といった美味しい食材はもちろんのこと、人の温かさや、もっと里美地区を元気にするぞという住民の方々のフレキシブルさを強く感じました。

里美地区での活動報告会にても、そういった住民の方々のフレキシブルさを感じる事ができました。活動報告会には、大変多くの方々に集まっていただき、お話も聞く事ができました。空き家を利用してはどうかなど、これからのに向けた改善や提案といった意見が挙がり、活発なお年寄りの方々が多いなと感心してしまうほどでした。私は、さとみ力伝え隊チームの報告を担当させていただいたのですが、皆さん真剣に話を聞いてくださり、「山田さん報告すばらしかったですよ」と、初めて会った方から言われた時には、大変嬉しく思ったのと同時に、やはり里美の人は温かいなと感じました。

プロジェクト実習に参加して、里美地区という、今まで知らなかった魅力に出会えました。また、さとみ力伝え隊メンバーとして、自分はチーム内でどう行動するのか、どういう人間なのかについても知ることができ、大変多くのことを学ぶことができたと思っています。チームとして行動する楽しさ、難しさ、などを知ることができました。これから、社会に出て行く上で、改善する必要があるなと強く感じています。それに気づかせてくれたのも、プロジェクト実習のおかげです。



収穫祭（全体写真）

プロジェクト実習の学び ～きっと踏み出せる～

14L1024H 大枝 俊貴

「お店を開こう。」「リーフレットを作ろう。」言うのは簡単である。プロジェクト実習開始時、4月の私は、大切なことをまだ知らなかった。「何をするにも、準備が必要である」ということだ。よく、考えればごくごく当たり前のことである。しかし、頭でわかっているのと、実感するのでは天と地の差がある。このことを、体感できただけでも、私にとって非常に実りあるプロジェクト実習であったと言える。私は、このプロジェクト実習の中で、何をしてきたのか、また何ができたのか、少し振り返りたい。

副リーダーとして、入った「泉美・ゆう」。リーダーとメンバーの仲介として、どちらにも肩入れしない動きを心がけた。リーダーとの間には、意見の相違も多かったが、スムーズなプロジェクト進行のためには、意見を飲み込むことも、時に、必要であった。リーダーとメンバーの間には、しばし軋轢が生じた。仲裁はできなかった。自分の力不足を責める日が続いた。それぞれの価値観の違いをどのようにしたら、埋められるのか見当がつかなかったのである。リーフレット作成の資金援助のために参加した「企画提案チャレンジ」。その提案会のあと、リーダーと数時間話した。リーダーは、味方がいないと思い込んでいる様子だった。そんなことない。何を言っても、聞き入れてはくれなかった。無力感に苛まれた。今後、どうやったらリーダーを支えつつチームを動かすことができるか、不安しかなかった。

リーダーが、体調不良を訴えて脱退した。リーダーを務めるのは、自分ではいけないと思った。メンバーへの不信感が強すぎたからである。毎回、欠席者は同じ。呼びかけに対しても応答がない。しかし、リーダー脱退の責任を多少なりとも感じている自分がいた。やるしかないと思った。むしろ、ここから、プロジェクトを成功に導くことができれば、すごいのではないかと、そう思うこととした。副リーダーを決める段階に入った。もちろん、名乗りは上がらない。自分は、無理。むしろ、指名より先に拒否されてしまった。どうすれば、いいか途方にくれた。第一回カフェの開催日も迫り、焦った。バイトもあり、課題もあり、しかし、プロジェクト実習はすすまない。チームメンバーに頼ればよかったのだが、それははたくなかった。今思えば、チームを信じられなかったのだろうと思う。そんなある日、バイト前、どうしようもなくなり、箭内さんに電話した。正直、そんなに仲は良くなかった当時、相当勇気のいることだった。

箭内さんは、他の先輩方とファミレスにいた。話を聞いてもらい、楽になった。頼ってもいいんだと思えた。あの時、電話で良かった。おそらく、感謝やらで涙目だったから。その後は、小チーム単位というよりは、大チーム単位で考えることができるようになった。その後も、メンバーへの不信感、リーダーとしての不安は拭かれることはなかったが、頼ることができる存在ができたことで、何とかなるように思えた。この時期は、メンバーの中での動きの差が大きく、あるメンバーにだけ仕事を頼むといったことをしてしまい、負担過多であったなど反省している。本当に、リーダーという役職は難しいと感じた。チームの外と内をうまく具合に、すり合わせるのも非常に神経がすり減る作業だ。役職に就くことの困難を垣間見ることができたように思う。

最後に、プロジェクト実習未履修者に、言えることは本当にやってよかったということである。辛さもあり、多くの時間を割いてきた。しかし、それでも見返りは大きかった。信頼できる相談相手もできた。学生という隠れ蓑はあれど、擬似的にでも社会を体験できた。実際に社会に出る前に、これらのことを経験できたことは、私にとって非常に有意義なことであったと思う。最後に、胸を張って、この数ヶ月間、誰よりも（先生にはかなわないが）「さとみ・あい」のことを考えてきたと言うことができる。そのような自分を誇らしく思う。協力してくださった方々、出会ってくださった方々との縁を大切にしつつ、経験を宝物として胸に刻みたい。一歩進めないとき、自信をなくしたとき、プロジェクト実習での活動をそっと思い出したいと思う。きっと踏み出せるはずである。



さとみ Café にて

「泉美・ゆう」の一員として学んだ根力 ～リーフレット制作を通して

14L1090X 鈴木 透

私は、大チーム「さとみ・あい」、小チーム「泉美・ゆう」の一員としてプロジェクト実習Bを履修した。今回は、その中でも小チームの「泉美・ゆう」での活動についてまとめたいと思う。

私が主に中心となって進めたプロジェクトは泉町二丁目商店街と常陸太田市里美地区を繋ぐためのリーフレット作りだ。これは平成27年度企画提案チャレンジ支援事業による助成をいただいていたものであっただけにチームとしても非常に大きな重要度があるもので、プレッシャーのかかる事業であった。

この事業における私の役割としては、中心となり全体をまとめつつ、実際にリーフレットの原案を作成するというものだ。最初の段階では、これは夏頃までにコンセプトを決定し、アンケートでそのニ



泉美・ゆうメンバー

ズを調査、それを元に取材活動を行い、秋に完成させ、茨城大学の学園祭である茨苑祭から配布開始、その後の経過を観察しその効果を見るという事業予定であった。しかし、自分たちの見通しの甘さ、夏頃に諸々の事情が重なった事が重なり、結果として事業の開始が大幅に遅れるという結果を招いてしまった。本来、夏に行くはずであった店舗への取材も10月頃になり、リーフレット完成にいたっては1月上旬という大幅なずれが出てしまった。結果として頒布活動は一部しか行うことができなかつたため、来年度に持ち越すという非常に悔しい結果に終わってしまった。もっと早く始めることができているならば、完成度としてももっと高いものを作れたのではないだろうかと思う。しかし、それは自分たちの見通しの甘さによるものであるので反省すべき点である。

次に、私がこのプロジェクト全体を通して学んだ事について述べていきたいと思う。まず一番強く思うのは、チームでの活動であることを意識するという点である。当然のことだが、プロジェクトというものは自分1人だけが行っているものではなくチーム皆で行っているものである。しかし、何かと情報共有が面倒であったり、1人でやってしまった方が早かったりと言うことも多々ある。しかし、それらは結果として後で自分を苦しめていくのだと学んだ。ある程度、役割を分担し、情報を共有しながら行うことでミスに気づく事ができたり、よりよいものに仕上げることができたりする。そのためには自分がチームの一員なのだと意識しなくてはならなかった。そして、助けてもらうだけでなく、同時にチームのメンバーを助けてあげることも大事であった。それによって、チームとしてまとまる上に、プロジェクトの質も上がるのだと感じた。2つ目としては、プロジェクトは終わりから考え始めるということだ。プロジェクトに限った話ではないのかもしれないが、最終的にどのような形にするのか、そのためには何をどのくらい行う必要があるのか、などを考えいつから始めればプロジェクトが完遂するのかと計画を立てることは重要であった。リーフレットの制作においても、事業完了日というものにぎりぎりまで間に合う印刷業者を探し、その締め切りのぎりぎりまで完成度を上げるために作業を行うことができた。プロジェクト全体としては、非常に大幅な遅れを取った形になるので良かったとは一概には言うことはできない。しかし、最後にこのことを学べたことは自分にとって非常に大きかった。

最後に、ここまで「泉美・ゆう」での活動について述べてきたが、「さとみ・あい」としての活動も含めた感想をまとめようと思う。この一年間の活動の中で非常に沢山の地域の方にお世話になった。泉町二丁目商店街振興組合の宮本様、里川カボチャ農家の荷見様ご夫妻、水戸農業高等学校の食品化学科・農業科の生徒のみなさん及び先生方など、ここには書ききれないほど沢山の方と会い、沢山のことを学ばせていただいた。ただのフィールドワークではなく、地域の方々との密なふれあいを通じて学びを得ることができたのはこの授業ならではのことであったし、私にとっても大きなものを得ることができた。沢山の方々に感謝したいと思う。このプロジェクト実習という授業を通して、沢山の出会いに恵まれた1年であった。

平成 27 年度 泉美・ゆう

14L2083X 小林 希望

平成 27 年度プロジェクト実習 B さとみ・あい 小チーム 泉美・ゆうの活動報告をする。

活動報告をするにあたって、活動までの経緯また学んだこともふまえていくこととする。

今回、平成 27 年度プロジェクト実習のさとみ・あいの小チームとして結成された泉美・ゆうチームは経験者不在のチーム員全員が 2 年生であった。もう一方の、小チーム さとみ力伝え隊の経験者である先輩方に 1 から手取り足取り教わりながらスタートした。

私が所属する泉美・ゆうは泉町二丁目と常陸太田市里美地区を「結う」というコンセプトをもとにチーム名を命名し、主に里美 Café の開催とリーフレット作成のふたつの事業に取り組んだ。これらの事業を遂行するために、茨城県青少年育成協会が行っている補助金に応募し、プレゼンテーション等も行った。

私はチームの中で渉外とさとみカフェ担当を務めた。渉外は事業やチームでお世話になる方々にアポイントメントを取ったり、お礼のメールを送ったり担当する役割であった。前期の任務はほぼ渉外のみであったが、毎日メールの返信に追われ、次から次へと降ってくる課題に心が折れそうになったこともあった。最初の任務としてこれからお世話になる方への挨拶をしなくてはならなかったが、私の連絡確認ミスでほかのチーム員が私の任務を遂行することとなった。私はこの時連絡の重要性を痛感した。連絡の一つ一つを他人事だと思っていれば、チームとしての活動は成り立たないということ、最初に確認できたことは今思えばラッキーであったともいえると思う。チームとして活動していく以上、この最初に持ったこの意識はとても重要であったと言える。



里美地区・せせらぎの郷にて取材中

私は泉町二丁目商店街振興組合の宮本様を始めとし、里美振興公社の豊田様、水戸農業高等学校様などたくさんの方々のお時間と知恵とご助言を参考にさせていただきながら渉外の任務を務めた。しかし、渉外の任務をすべて一人で全うできたわけではない。分からないことや自分では解決できない問題は鈴木先生や神田先生、さとみ・あいの先輩方の経験をもとにチーム内で話し合って打開策を探した。

後期になり、水戸に常陸太田市里美地区のセールスをするため、里美の特産物里川カボチャを使った商品を提供するカフェの運営も進めた。カフェ運営を行いながら、チーム内で話し合いをし、それを先方の方々とお話しして話を進めていく作業は困難なことが多くあった。しかし、チームで事業を遂行していくという意識をチーム員が持ち合わせていたことで、時には、自分たちの役割を超えて協力し合いながら、泉町会館、水戸まちなかフェスティバル、茨苑祭の 3 回にわたるカフェ運営を成し遂げることができた。

全員が 2 年生で、未経験者ということもあり難題は解決してはやってきて、私たちは多くの場面で試されているかのような試練に遭遇した。全部がトントン拍子で成功していたわけではなく、ご指導やご鞭撻を賜りながら事業を進めてきた。時にチーム内で意見の相違や情報の伝達ミスなどがあつたりもしたが、リーダーの大枝君が舵を取りながら泉美・ゆうは一つのチームとして事業を遂行できた。賛同者の大小に関わらず、個人の意見を尊重し、「ほうれんそう」を心がけ、問題発生時にも冷静に迅速に対応することができたチーム員全員は、この講義を通して社会に出て必要とされることになる就業力を十分に育成することができたと思う。

最後の泉美・ゆうとしての事業では、水戸市泉町を舞台にリーフレットを作成し、泉町と里美での活動をより多くの人々に知ってもらうことを試みた。この作業ではさとみ力伝え隊の先輩方の協力も戴いて、泉町近辺の情報収集をし、完成させることができた。私自身は印刷会社の方と話し合いをし、リーフレットの材質や発行可能部数などを決めた。この時もまたチームで役割分担をしたことで、無事任務を遂行することができた。

私はこの一年間プロジェクト実習を履修するにあたり、常に最初にたてた目標を達成することを頭の片隅に置きながら任務を遂行してきた。事業が終了して、プロジェクト結成当時の自分を振り返ると個人の目標達成ルーブリックに書いた目標を達成することができたと言える。

それらを成し遂げられた背景には、大学外部で私たちに尽力してくださった皆様をはじめとし、鈴木先生や神田先生、さとみあいの先輩方、そして何よりも同じ泉美・ゆうのチームで活動してきてくれた大枝くん、透くん、実咲ちゃんのおかげです。この場を借りて、お礼の言葉を述べさせていただきます。

一年間ありがとうございました。

「苦痛」から「感謝」へ 今年度の活動を振り返って

14L2121F 助川 実咲

わたしがプロジェクト実習を履修したのは、せっかく生まれ育った茨城の大学に入ったのだから、地域に貢献できるようなことをしたいと思ったのがきっかけである。通常の講義はいつも友人と一緒に受けていたので、一人で新しいコミュニティに飛び込んでいくことに期待と不安でいっぱいだったことを覚えている。また、正直なところ、あわよくばそれが就職活動でネタになればな、という下心もあった。

しかし、実際には思い描いていたものと異なる点が多く、予想以上に苦勞させられたのが本音である。

まず、先輩たちと活動するので、当初自分は先輩の後をつけていけばいいと思っていたが、小チームは二年生だけで構成されることになり、ほとんど手探りの状態で活動計画を立てた。特に精神的にきつかったのは夏休みである。

メンバーの予定が合わないことが多く、一人で打ち合わせに行くこともあり、責任重大な仕事を一人でこなす不安と、十分な話し合いができないことに焦りを感じていた。次第に自分ばかり仕事していると感じるようになり、メンバーに対してイライラすることもあった。ほかのメンバーの疲れもピークにきていたのか、チーム内でも険悪な雰囲気が漂い、メンバーの一人が体調不良で抜けてしまったときは自分がどうにかできたのではないかと、気付いてあげられたのではないかと、悩むこともあった。人生で初めて他人と協働することの難しさを知った瞬間であった。

上述のように、前半は本当に大変なことばかりで、プロジェクト実習が苦痛に感じ、できることならこれ以上仕事を増やしてほしくない、とばかり考えていた。しかし、そんな思いも次第に消えていった。新リーダーの下、手探りの活動は続いていたものの、先輩たちの助けを借りていいことに気付いたからである。先輩たちはみんな優しく、わたしたちが気付かなかったことも指摘してくださった。四人で手いっぱいになり余裕がなかったわたしたちにとっては、本当に頼りになる存在だった。もし先輩たちの手を借りずに無理して四人で活動していたら、最後までプロジェクト実習が苦になっていたのではないかなと思う。

先輩の存在のほかにもわたしがプロジェクト実習を履修してよかったと思えたことがいくつかある。1つは、社会人基礎力育成グランプリの予選を見に行ったことである。同じ大学生がレベルの高いプレゼンテーションをしているのを見て刺激を受けた。どのチームも活動内容はすばらしかったが、わたしたちももう少し軸がしっかりしていれば彼らのレベルに近づける可能性があるのではないかと感じ、少し自信が持てた。具体的な目標を知ることができた点でとても有意義な1日であった。

2つ目は里美で行った報告会である。わたしは収穫祭に参加することができなかったのも、メンバー以外の大勢の関係者の方とかかわることが初めてだった。今までお世話になった方々が一堂に会することで、こんなにもたくさんの方に支えられていたのだと目に見えて、とても感慨深かった。学生だからといって軽く考えたり、適当に扱ったりせずに、みんな本気で取り組んでくださった思い出がよみがえり、とてもありがたいことだし、さとみ・あいのOB・OGの方や先生が一生懸命取り組んでいたからこそ信頼関係が築けているのだろうな、と感ずることができた。

他にも印象に残っていることはたくさんあるが、プロジェクト実習を履修したことでたくさんの人に出会うことができ、また、たくさんの方の貴重な経験をするすることができた。イベントに参加するにしても、今までだったら当日会場に行って楽しむことができたのに、イベントを開催する側になるとたくさんの方とコンタクトを取り、打ち合わせを何度も繰り返して、やっとの思いで当日を迎えることができる。こういった経験ができるのも先生方をはじめ先輩方、協力していただいた地域の皆様のおかげである。これまでを振り返ると、メールのマナーも少しは身につく、立派な社会人になるためにわずかながら成長したのではないかと実感している。最初は苦痛でしかなかったプロジェクト実習だったが、今では感謝でいっぱいである。



里美地区現地活動報告会にて

おわりに

箭内 淳美

今年度の活動は、里山・街なか・学校・インターネット上など様々な場所で、また、カフェ収穫祭、リーフレット作成、グッズ作成など様々な方法でそれぞれの地域の魅力を発信してきた。

それぞれの主なフィールドごとに、小チーム2チームに分かれて活動したため、里川カボチャの栽培、販売、商品開発や収穫祭、カフェの開催、イベント出店・企画並びにリーフレット作成、グッズ作成など実に幅広い活動ができた。昨年度よりも幅広い活動ができたことは、それぞれのフィールドの特性を活かして小チームごとに企画の作成、実行、連携ができたことが大きい。

里美地区のPRを、「さとみ力伝え隊」の企画した収穫祭を通じて実際に里美に足を運んでもらうことで知ってもらうことも大切であり有効的手段である。しかし、私たちの力で興味のある人全員を里美に連れていくことは難しい。その点では、「泉美・ゆう」の企画した、泉町二丁目商店街振興組合様と連携をして、泉町会館にカフェを出店できたこと、水戸まちなかフェスティバルや茨苑祭で里美の物を販売できことは、不特定多数の方へのPRにつなげることができた。一つの目的に対して異なる側面からアプローチできたことは、小チーム体制ならではの成果であった。さらに、泉町でのカフェの開催による知名度の向上並びにリーフレットの作成によって、双方を知るきっかけを1つでなく2つにすることでそれぞれの地域の振興並びに連携、魅力探しを図ることができた。

一方で、そもそもの軸のひとつである地域貢献の役割は果たせているのであろうかという疑問はいつもつきまとう。地域のPRはじめ、地域振興においては何かをしてすぐに結果が出ることはなかなかない。自分達の活動に不安が残りつつも、何かしら地域のためになると信じて活動を行ってきた。そんな不安のなかで自信になったのが地域の皆様の声や、活動時に関わる皆様の声である。在来作物や地域の特産品を加工して販売したカフェイベントではお客様による「おいしかった」や「去年も来たから今年も来た」などの声を聞くことができ、活動の成果を感じられた。

今後の課題として、一つ一つの活動の深化、継続があげられる。活動の中で、各イベント時には目立ったPR活動ができるが、そのイベントごとの空白の時間が長くなってしまいがちである。一過性のものではなく細長く確実に活動を継続していくことが重要となる。また、授業活動がもちろんメインだが、それ以外の場でも、もっともっと地域の皆さんと関わって、話して深くつながっていききたい。

在学中に「さとみ・あい」の活動をしていて、大学を卒業した先輩方が、個人的に里美を訪れているのを見る。それをみて、講義を受講しているしていないにかかわらず、そういったつながりが継続していることこそ地域を元気にするひとつの力なのではないだろうかと感じる。

さらに、毎年活動の中に含まれている里川カボチャも、さとみ・あい公式キャラクター「おさとちゃん」を存分に活用したPRの可能性がまだまだあるし、今年度試作したトートバッグのアンケートを参考に、他のグッズを作成することもできるだろう。地域の皆様とお話しながら里川カボチャ以外にも「里美牛」や、そば、その他作物や景観、施設、自然環境やなど私たちが知らなかった魅力もまだまだたくさんある。商店街においても、今回リーフレット編集作業において知らなかったお店が数多くあった。地域の力はもちろん、まだまだできることがあると強く感じる。形が変わったとしても、ずっと関わっていききたい。そして、企画の実行だけではなく「何が地域のためになるのか」ということを常に考え続けていきたい。

最後になりましたが、今年度の活動にあたり、多大なるご支援をいただきました常陸太田市里美地区をはじめ常陸太田市の皆様、泉町二丁目商店街振興組合はじめ泉町二丁目の皆様、水戸農業高等学校の皆様、また各イベントにお越しくださった他大学の皆様並びに一般のお客様、そして活動にご支援いただきましたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

3:異文化交流プロジェクト

活動報告

プロジェクト実習C

小チーム「Link」

リーダー（大チーム「異文化交流プロジェクト」リーダー）			
	: 藤堂みさ都	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	3年
副リーダー	: 清野 絢	同上	4年
書記	: 渡邊 悠	同上	2年
会計	: 野中 萌	同上	2年
渉外	: 富田 恵	同上	2年
メンバー	: 櫻井 優美	同上	4年

小チーム「DCE」

リーダー（大チーム「異文化交流プロジェクト」副リーダー）			
	: 栗原 大地	茨城キリスト教大学文学部現代英語学科	2年
書記	: 飯村 貴洋	同上	4年
会計	: 大高 詩織	同上	2年
渉外	: 寺門美千花	同上	2年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授
DCE顧問教員: 山中俊克 茨城キリスト教大学生生活科学部准教授

2015 年度
茨城大学人文学部 プロジェクト実習C
「異文化交流プロジェクト」活動報告

はじめに

清野 絢

私たち異文化交流プロジェクトは、2012 年度に茨城大学の留学生センターと茨城キリスト教大学の国際交流センターが連携し、発足した学生によるプロジェクトチームです。2012 年度に結成されたインターナショナルチームを基盤として、2013 年度の CCP (Cross Cultural Project) チーム、2014 年度の ICE(International Cultural Exchanges) チーム、そして本年度の LinK チーム・DCE(Department of Contemporary English) チームとその活動を引き継ぎ、発展させながら活動してきました。異文化交流プロジェクトは「異文化交流（国際交流）フォーラム」の開催をメインの活動として継続・発展させながら、加えて、毎年新たな活動にもチャレンジしています。

本年度の異文化交流プロジェクトは、茨城大学の学生により結成した LinK チームと、茨城キリスト教大学の学生により結成した DCE チームが連携し、初めて茨城大学と茨城キリスト教大学それぞれの小チーム (LinK, DCE) での活動と、大チーム (異文化交流プロジェクト) としての活動がありました。プロジェクトのメンバーは昨年度の ICE チームから継続してメンバーになった 3 人に加え、新たに異文化交流や国際交流に関心をもつ仲間が集まり、10 人のメンバーでの活動となりました。

さらに各企画では大学生だけではなく、様々な背景を持つ人々が交流し、つながりが広がる活動となりました。水戸まちなかフェスティバルでは地域の人々、異文化交流フォーラムでは高校生や留学生を交えて、普段はなかなか交流する機会の少ない人同士が交流できる場になったと考えています。

この 1 年間の活動を通して、私達は異文化交流プロジェクトとしても、個人としてもステップアップすることができました。異文化交流プロジェクトは本年度で 4 年目の活動となりましたが、毎年より良いプロジェクトになるよう考え、進化しています。本年度の活動を報告書としてここに記し、来年度以降も異文化交流プロジェクトが継続・発展することによって、異文化交流の輪が広がっていくことに繋がってほしいと思います。

1:活動の目的・概要

(1)活動目的

留学生と地域を結ぶ架け橋になり、異文化交流のサポートをすること。また、日本の文化を留学生に伝えること。

(2)活動の概要

【水戸まちなかフェスティバル】

目的：留学生たちに水戸の地域の活動に参加してもらうことにより、地域の人々と留学生との交流を図るとともに、地域の人々に異文化を知ってもらう。

内容：LinK チーム 異文化ポテトの販売（10種類の各国のソースとともに販売）

DCE チーム カップケーキ、スコーン、タピオカジュースの販売

結果：販売数 異文化ポテト 226 食、カップケーキ 200 個、スコーン 78 個、
タピオカジュース 45 杯

反省：商品を完売し、地域の皆様に異文化を知ってもらうことができた。

臨機応変な対応ができた。

売り方を工夫し、積極的に声をかけることができた。

フェスティバルの参加者として来てくれた留学生はいたが、売り子として留学生に参加してもらうことは出来なかった。

事前準備等で、きちんとできたところと、準備不足だったところがあった。

販売品の試作の徹底をはかるべきだった。

【異文化交流フォーラム】

目的：自分とは異なるバックグラウンドをもつ人々と交流することで、異文化にふれ、貴重な経験を得ること。また、参加者同士がフォーラム後も続くような関係を築き、豊かな人間関係を構築すること。

参加者：高校生（水戸第二高等学校、茨城キリスト教学園高等学校、水戸桜ノ牧高等学校、水戸桜ノ牧高等学校常北校から）19名、留学生14名、日本人大学生8名

計41名

内容：アイスブレイク（人間知恵の輪/鳥とかごゲーム）

座談会（グループ）

ワークショップ（バーンガ：異文化を体験するカードゲーム）

フリートーク

アンケート結果：全体の8割の参加者が、フォーラムをとってもよかったと回答してくれた。また、ワークショップやグループでの座談会が好評だった。

反省：高校生・留学生・大学生の三者間の交流を図ることができた。

目的の差別化をしたことで、各企画が意義のあるものになった。

その国に行ってみなければわからないことを知ることができた。

参加者もチームメンバーも、楽しむことができた。

高校生で、もっと英語を使った交流をしたいという要望があったが、それにこたえることができなかった。

時間配分を考えるべきだった（早く進んでしまった）。

(3)プロジェクトを通して学んだこと

小チーム内や、大チーム内（二大学間）での情報共有の大切さを感じました。情報を共有するために、LINE や SNS を活用したり、月に一回は大チームでの合同ミーティングの場を設けました。また、チーム内で信頼関係を構築したり、仕事を分担することの大切さを学びました。

2:活動記録

(1)Link チーム 活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	5月22日(金) 10:50-12:00	茨城大学人文学部棟 C406	フォーラム、まちフェスの話し合い	藤堂、清野、渡邊、野中
2	5月27日(水) 20:00-00:00	清野宅	DCE との顔合わせ、構想発表会の話し合い	藤堂、清野、櫻井
4	6月19日(金) 10:30-12:00	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	異文化フォーラの話し合い	藤堂、櫻井、清野、野中、富田、渡邊
5	6月24日(水) 12:00-13:00	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	中間発表会の話し合い	藤堂、渡邊、富田、野中
6	6月26日(金) 10:30-12:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	合同ミーティングの情報共有	藤堂、櫻井、野中、富田、渡邊
7	7月3日(金) 10:30-12:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	まちフェス、合同ミーティングの話し合い	藤堂、櫻井、富田、渡邊
8	7月10日(金) 11:30-12:00	茨城大学人文学部棟 C406	フォーラム、まちフェスの話し合い	藤堂、櫻井、野中、渡邊
9	7月24日(金) 10:30-12:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	フォーラムの内容の話し合い	藤堂、櫻井、清野、野中、渡邊
10	7月31日(金) 10:30-12:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	フォーラムの内容の話し合い	藤堂、櫻井、清野、野中、渡邊
11	8月4日(火) 12:00-13:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	フォーラム、まちフェスの話し合い	藤堂、櫻井、清野、野中、富田、渡邊
12	8月17日(月) 10:30-13:00	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	まちフェスの話し合い	櫻井、清野、野中、富田、渡邊
13	9月19日(土) 10:30-12:00	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	まちフェスの話し合い	藤堂、櫻井、富田、清野、野中、渡邊
14	10月4日(日) 10:00-17:00	藤堂宅	まちフェスのポテト試作会、買い出し	藤堂、櫻井、清野、富田
15	10月9日(金) 9:00-10:20	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	まちフェス、フォーラムについての話し合い	清野、櫻井、野中
16	10月16日(金) 9:00-10:20	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	まちフェス、ラジオ放送についての話し合い	藤堂、櫻井、清野、渡邊、富田
17	10月23日(金) 9:00-10:30	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	まちフェス、フォーラムの話し合い	藤堂、清野、櫻井、野中、富田、渡邊
18	10月25日(日) 18:45-19:50	サイゼリア水戸駅南口 店	まちフェスの反省会	藤堂、清野、櫻井、野中、富田、渡邊
19	10月30日(金) 9:00-10:30	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	フォーラムの話し合い	藤堂、清野、野中、富田、渡邊
20	11月6日(金) 9:10:20	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	フォーラムのタイムスケジュール確認	藤堂、野中、富田、渡邊
21	11月20日(金) 9:00-10:20	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	フォーラムについて情報共有	藤堂、櫻井、清野、野中、富田、渡邊
22	11月27日(金) 9:00-10:20	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	フォーラムについて情報共有	藤堂、清野、野中、富田、渡邊

23	12月18日(金) 9:00-10:20	茨城大学図書館1階 共同学習スペース	LinK チーム総括ミーティング	藤堂、櫻井、野中、 富田、渡邊
----	-------------------------	-----------------------	------------------	--------------------

(2)DCE チーム 活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2015年6月3日 12:40~14:10	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	異文化交流フォーラムの役割に ついて。水戸まちなかフェスティ バルの出品物について	飯村、栗原、寺門、 大高
2	2015年6月12日 12:40~14:10	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	水戸まちなかフェスティバルの出 品内容の詳細について	栗原、寺門
3	2015年6月15日 12:00~12:00	茨城キリスト教大学 5204 教室 (Skype Meeting)	水戸まちなかフェスティバルの準 備内容について	栗原、寺門、大高
4	2015年6月17日 12:40~14:10	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	水戸まちなかフェスティバルにつ いて。異文化交流フォーラムの 詳細案出し	飯村、栗原、寺門、 大高
5	2015年7月1日 14:20~17:00	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	中間発表・PPT の内容(DCE チ ーム分)。今後行わなければなら ない作業について	飯村、栗原、寺門、 大高
6	2015年7月15日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	水戸まちなかフェスティバルのお 菓子試作について。異文化交流 プロジェクトで使うバスについて	飯村、栗原、寺門、 大高
7	2015年7月18日 15:00~20:00	東海村 石神コミュニテ ィセンター	水戸まちなかフェスティバルのお 菓子試作	飯村、栗原、寺門、 大高
8	2015年8月29日 10:00~12:45	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	水戸まちなかフェスティバルの詳 細確認。バスのルート確認	飯村、栗原、寺門、 大高
9	2015年9月18日 10:00~12:45	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	異文化交流フォーラムの詳細内 容について。水戸まちなかフェス ティバルについて	飯村、栗原、大高
10	2015年9月29日 16:00~15:50	茨城キリスト教大学 学 生ラウンジ	水戸まちなかフェスティバルでの 役割分担について。異文化交流 フォーラムのバスの最終確認	飯村、栗原、寺門、 大高
11	2015年10月10日 15:00~20:00	東海村 石神コミュニテ ィセンター	第二回 水戸まちなかフェスティ バルで出品するお菓子の試作	飯村、栗原、寺門、 大高
12	2016年1月6日	グループ内での情報交 換	活動報告会の反省	飯村、栗原、寺門、 大高

(3) 合同ミーティング活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	5月31日(日) 12:30-14:30	茨城大学人文学部棟 C406	活動経費、まちフェス、フォーラムの話し合い	飯村、寺門、大高、栗原、藤堂、櫻井、野中
2	6月20日(土)	茨城キリスト教大学 学生ラウンジ	フォーラムの話し合い	飯村、栗原、寺門、櫻井、清野、野中
3	7月19日(日)	茨城大学図書館2階 グループ学習室	まちフェス、フォーラムの話し合い	栗原、大高、寺門、藤堂、清野、櫻井
4	8月30日(日)	茨城キリスト教大学付近 サイゼリア	フォーラムの話し合い	大高、清野、櫻井、野中
5	9月19日(土)	茨苑会館2階 集会室	フォーラムの内容確認	飯村、大高、藤堂、清野、櫻井、野中
6	10月17日(土) 14:00-16:00	サイゼリア日立森山店	まちフェス、フォーラムの話し合い	栗原、大高、寺門、清野、櫻井
7	10月25日(日) 17:45-18:45	水戸駅南サイゼリア	まちフェスの反省会	飯村、大高、栗原、寺門、藤堂、櫻井、清野、富田、野中、渡邊
8	11月1日(日) 10:20-17:00	茨苑会館談話室	フォーラムについて情報共有、話し合い	飯村、栗原、大高、寺門、藤堂、清野、櫻井、野中、渡邊
9	11月18日(水)	茨苑会館談話室	フォーラムの最終確認	飯村、栗原、大高、寺門、藤堂、清野、櫻井、野中、富田、渡邊
10	11月29日(日) 16:15-18:45	茨城大学図書館2階 グループ学習室	フォーラムの反省会	飯村、栗原、大高、寺門、藤堂、清野、櫻井、野中、富田、渡邊

3:会計報告

異文化交流プロジェクト(LinK チーム)決算

品 名	単価	数量	合計
SD メモリーカード	2,215	1	2,215
USB メモリ	2,500	1	2,500
色画用紙	972	3	2,916
磁石	514	1	514
修正テープ	593	1	593
ノート	360	4	1,440
サインペン ポスカ中字丸芯 8色セット	1,944	2	3,888
サインペン ポスカナチュラルカラー7色セット	1,512	1	1,512
サインペン ハイマッキー	162	4	648
サインペン プレイカラー2 24色セット	2,592	2	5,184
ボールペン SARASA クリップ 10色セット	1,080	1	1,080
両面テープ	400	2	800
DVD	1,780	1	1,780
両面テープ	220	2	440
紙スープカップ	766	2	1,532
アルミカップ	430	1	430
キッチンペーパー	560	2	1,120
すくい網	600	3	1,800
ガスボンベ	351	2	702
紙ナブキン	100	3	300
爪楊枝	370	1	370
トランプ	700	8	5,600
インクカートリッジカラー6色	4,212	2	8,424
インクカートリッジ黒	1,134	2	2,268
コピー用紙	612	6	3,672
		総計	51,728

異文化交流プロジェクト DCE チーム決算

品 名	単価	数量	合計
ボールペン SARASA クリップ 10色セット	1,080	3	3,240
3色ボールペン	432	5	2,160
ボールペン	108	38	4,104
蛍光マーカー5色セット	810	2	1,620
蛍光マーカー	162	2	324
ボールペン替え芯	90	2	180
5冊パックノート	864	2	1,728
プリンターインクカートリッジ	4,500	1	4,500
		総計	17,856

4:活動トピック

(1)水戸まちなかフェスティバル 2015年10月25日開催

<https://www.facebook.com/mitofes>

「水戸まちなかフェスティバル」は、2015年度で4回目の開催となりました。今年度も泉町二丁目商店街振興組合・宮本紘太郎様よりお声がけを戴き、プロジェクト実習履修の他チームと共に、泉町二丁目商店街振興組合様の区画の一部を使って出店させて頂きました。

開催に先立つ10月22日の茨城放送に、チームメンバーの櫻井優美がフェスティバルに参加したプロジェクト実習の各チームを代表して宮本様と共に出演し、広報をさせて頂きました。

当日、異文化交流プロジェクトチームは、「異文化ポテト」「スコーン」「カップケーキ」「タピオカドリンク」を販売し、ご好評を戴きました(図1~3)。

異文化ポテトとは、フライドポテトに10種類のソースからお客様に種類選んでいただき、添える形で販売しました。10種類のソースは世界各国の伝統的な調味料やソースを選びました。特にイタリアのバーニャカウダソースやメキシコのナチョチーズが非常に人気でした。「スコーン」「カップケーキ」は欧米の伝統的なお菓子で、チームメンバーが当日手作りし販売しました。日本人にも比較的馴染みのあるお菓子だったこともあり、多くの方に気に入って戴くことができました。



図1:異文化ポテト販売風景



図2:スコーン



図3:異文化交流プロジェクトチーム メンバー

図1の写真は異文化ポテトを販売している様子です。

図2はDCEチームが販売しました、スコーンとカップケーキです。

図3の写真は両チームが販売終了時に撮ったものです。

- 11:00～ 座談会
- 12:00～ 昼食
- 13:00～ ワークショップ
- 15:00～ フリートーク（おやつ、立食形式）
- 15:30～ アンケート回答
- 15:45～ 閉会式
- 16:00～ 写真撮影
- 16:30 バス出発

(7)企画内容

1. アイスブレイク

※時間調整のため、2つのゲームしかできない場合もございます。

1-1 人間知恵の輪：輪になり、両隣以外の人と手をつなぎ、もつれた手をほどいていくゲーム。

※手の間をくぐったり、またいだりするので、気になる方はスカートなどの動きにくい服装はご遠慮ください。

1-2 鳥とかご：二人一組のかごと、一人の鳥、三人で鳥とかごのワンセットを作るゲーム。

※ペアを見つけられずあぶれてしまうと負けになるため、急いで走る場面もあります。

1-3 ジャンケン列車：ジャンケンをし、負けた方は相手の後ろにつき、勝った方はまた他の人とジャンケンをする。これを繰り返していくゲーム。

2. 座談会：グループによる話し合い。このグループは、事前アンケート調査による参加者の興味や、各校のバランス等を考えて構成します。お互いに興味のあることや聞きたいことを、普段は話すことのない相手と話せる場にすることが目的です。

3. ワークショップ

3-1 バーンガ：カードゲームを使って、自分が異文化に置かれた状況を体験するゲーム。言葉の通じない気持ちや、少数派の気持ちを体験し、考えてもらうことが狙いです。

3-2 ビンゴゲーム：三人一組で行うビンゴゲーム。ビンゴを通して世界の様々なことについて学んで戴きます。

4. フリートーク：立食形式でおやつを提供致します。おやつを食べながら、他の企画で話す機会がなかった人と、リラックスした雰囲気でお話を戴く場です。

(8)参加者募集の日程

- | | |
|------------|-------------------|
| 10月5日(月)～ | 申込用紙、ポスター、チラシ等の送付 |
| 10月28日(水) | 申込用紙返送(投函)締め切り |
| 11月16日(月)～ | 案内状発送 |

(9)その他

- ・参加者の皆様には**レクリエーション保険への加入をお願い致します**。加入費はこちらで負担させて頂きます。
- ・保険は、AIU損害保険株式会社のレクリエーション損害保険になります。
- ・保険加入にあたり、参加者の皆様のお名前、学校名を保険会社に提出させて頂きますがご了承ください。
- ・会場までの**無料送迎バス**を手配致します。詳しくは「異文化交流フォーラム参加者募集のお願い」をご覧ください。
- ・**参加費は無料です**。
- ・**服装は自由となっております**。異文化について学ぶ場ですので、型にはまらず自分らしい服装でお越し下さい。企画では動くことも予想されますので、気になる方は動きやすい服装でお越し下さい。
- ・**昼食は各自でご持参戴きますよう**お願い致します。

③ポスターとチラシ

当日に向けて、ポスター（図6）を作成・掲示すると共に、チラシ（図7）を配付しました



図 6:ポスター

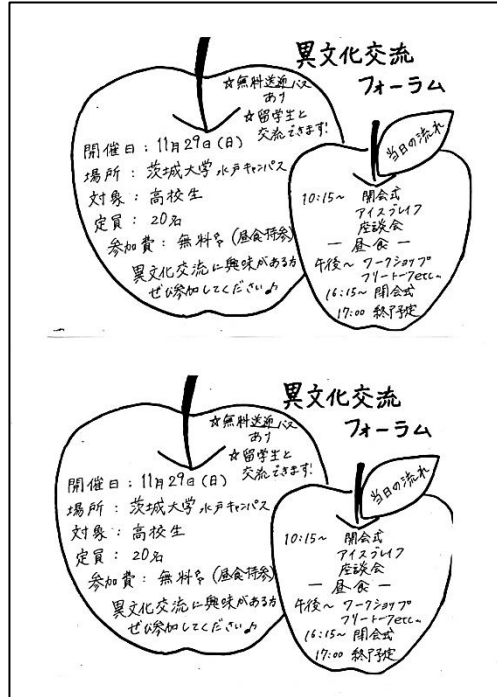
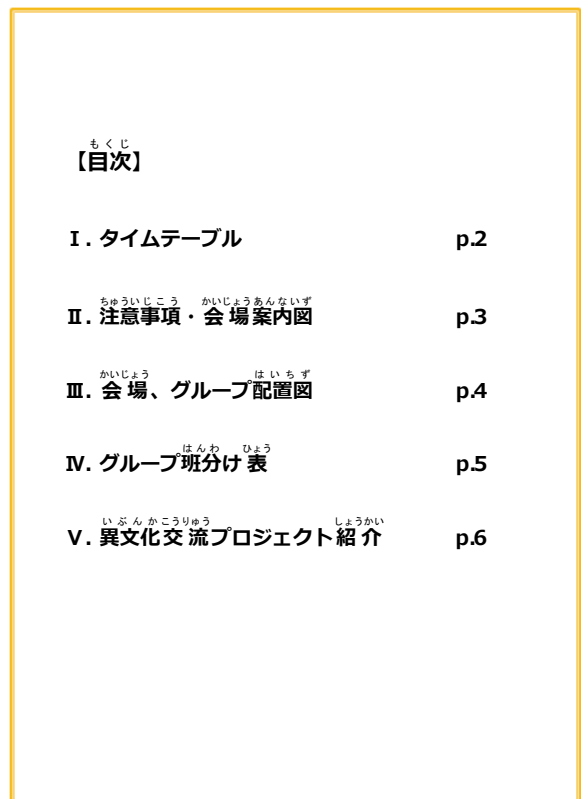


図 7:チラシ

④当日用パンフレット

当日会場で配付するパンフレットを作成しました（図8）。

図 8: 異文化交流フォーラム パンフレット



【タイムテーブル】

2015/11/29 (日)

10:00 参加者受付開始

10:15 開会式

10:30 アイスブレイク
(休憩10分)

11:00 座談会

12:00 昼休憩 (昼食)

13:00 ワークショップ

14:30 フリートーク

15:00 アンケート記入・回収

15:15 閉会式・写真撮影

15:45 解散

16:30 送迎バス 茨大出発

17:00 バス赤塚駅北口 到着(予定)

17:35 バス桜ノ牧高校常北校 到着(予定)

【注意事項】

- 全員で動くときは、スタッフの言う通りになるべく早く動いてください。
- 財布や携帯は、なくさないように自分で持っていてください。
- 気分が悪くなったら、近くにいるスタッフに言ってください。
- 休憩の時間ではないときにトイレなどに行くときは、必ずスタッフに言ってください。
- その他に困ったことがあったら、遠慮なくスタッフに言ってください。

【会場案内図】

フォーラム会場
茨苑会館1F談話室

正門

【会場・グループ配置図】

荷物置き場

WC

出入口

体育館側

出入口

正門側

各グループの配置は以下の通りです:

- A: 水戸第二
- B: 茨城キリス
- C: 水戸桜ノ牧
- D: 大学生
- E: (空席)
- F: (空席)

【グループ班分け表】

班	名前	性別	学校・国籍	学年	班	名前	性別	学校・国籍	学年
A	林 尚貴	男	茨大	3	D	曹 紹倫	女	中国	3
GL	Li Li Gu	男	中国	3	GL	張名路大知	男	茨大	博士3
	金 聖香	女	韓国	1		Son Seonjeon	男	韓国	1
	奥野 和人	男	茨北	3		オーム	女	タイ	1
	菅野 広典	女	茨キリ	2		李真 瑛花	女	茨キリ	1
	小野澤 崇輔	女	水戸二	1		濱口 雄一	男	茨北	3
	榎山 洋	女	水戸二	1		曹 聖 謙	女	水戸二	1
B	張 紹 暉	男	茨大	3	E	佐藤 健太郎	男	茨大	4
	アネ	女	インドネシア	1	GL	曹 聖 謙	男	茨大	2
	Thomas Huisman	男	アメリカ			ナフ・メイ・タオ	女	ミャンマー	研究生
	石黒 伊東菜	女	茨キリ	2		クワン・ヒドク	男	韓国	1
	佐藤 優子	女	桜ノ牧	1		Elizabeth Henry	女	カナダ	
	栗山 真珠	男	茨北	3		Ruby Duffy	女	桜ノ牧	1
	芝野 聖雲	女	水戸二	1		海海 台祐	男	茨北	1
						小宮 慧奈	女	水戸二	1
C	藤野由美香	女	茨大	4	F	出口 航	男	茨キリ	4
GL	ライアン 智村	男	茨キリ大		GL	出口 航	男	茨大	2
	曹 聖 謙	男	茨大	研究生		グレン・ズン・ホアン	男	ベトナム	1
	クワン・コハン	男	韓国			イナ・ヒョウ・アリナム	女	キルギス	
	林 悠 自 輪	女	茨キリ	2		曹 聖 謙	男	中国	研究生
	吉成 紀彦	女	水戸二	1		精志 りお	女	茨キリ	2
	高松 拓哉	男	茨北	1		曹 聖 謙	男	茨キリ	2
						曹 聖 謙	女	茨北	1

【異文化交流プロジェクト チーム紹介】

茨城大学: LnK (リンク) チーム

×

茨城キリスト教大学: DCE チーム

二つの大学の二つのチームがタッグを組んでできたのが

異文化交流プロジェクトです!!!

プロジェクト目的:

異文化交流と異文化理解の促進



LnK チーム

DCE チーム

顧問: 鈴木敦先生	山中俊克先生
藤堂みさ都	栗原大地
清野純	飯村貴洋
櫻井優美	大高詩織
野中萌	寺門美千花
富田恵	
渡邊悠	

どうぞよろしくお願ひします!!!

困った時は気軽に声をかけて下さい(*´艸`)

茨城大学・茨城キリスト教大学
学生チーム
異文化交流プロジェクト

なまえ
名前

当日は高校生・留学生・日本人大学生、計41名の参加となりました。アイスブレイクとして体を動かしながらゲームをしたり(図9)、グループになって座談会を行ったりしました(図10)。イベントの最後に行ったフリートーク(図11)では、異文化交流している様子が見受けられると思います。

図9:アイスブレイク



図10:座談会



図11:フリートーク

図 12 は、フォーラム終了時に撮影した全体写真です。



図 12: 全体写真

5: 活動報告会 PPT

異文化交流プロジェクト 活動報告会

(茨城大学 LINK)		(茨城キリスト教大学 DCE)	
リーダー	藤堂みさ都	リーダー	栗原 大地
副リーダー	清野 純	副リーダー	飯村 貴洋
書記	渡邊 悠	書記	大高 詩織
会計	高田 恵	会計	寺門美千花
渉外	野中 萌		
	櫻井 優美		

目次

- I. チーム概要
- II. 活動報告並びに結果報告
 - ①水戸まちなかフェスティバル
 - ②異文化交流フォーラム
- III. 先進地実地研修を受けて
- IV. プロジェクト実習全体を通して学んだこと
- V. お世話になった方々へ

I. チーム概要

大チーム：異文化交流プロジェクト
小チーム：
(茨城大学) LinK × (茨城キリスト教大学) DCE

〈活動目的〉

- ①留学生と地域を結ぶ架け橋になり、異文化交流のサポートをする
- ②日本の文化を留学生に伝える

II. 活動報告並びに結果報告

- ①水戸まちなかフェスティバル

日時：2015年10月25日(日)10:00～16:00
場所：(プロジェクト実習)泉町会館前

泉町二丁目商店街振興組合 宮本様のご協力の下、
LinKとDCEで各1ブースずつ確保して頂きました。

II. 活動報告並びに結果報告

<Link>

内容：異文化ポテトの販売

形式：10種類のソースから1ソースを選択

↳各ソースをフライドポテトに添える販売形式

結果：販売個数 226食(用意したポテト完売)

売上 45,200円

5

II. 活動報告並びに結果報告

<DCE>

内容：海外のお菓子の販売

■ カップケーキ：販売個数 200個

■ スコーン：販売個数 78個

■ タピオカジュース：販売個数 45杯

■ 合計売上金額 41,650円

6

II. 活動報告並びに結果報告

<水戸まちなかフェスティバルの写真>

- ・販売している様子
- ・DCEチームのカップケーキ
- ・全体写真

7

II. 活動報告並びに結果報告

<Link>

よかった点

- ・事前準備、後片付けがスムーズだった。
- ・役割分担がしっかりとできていた。
- ・積極的に声を掛けることができた。

改善点

- ・客として留学生を招くことはできたが、売り子として呼ぶことができなかった。
- ・使用する物品の確認が不十分だった。

8

II. 活動報告並びに結果報告

<DCE>

よかった点

- ・トラブルがあった中でもメンバーの臨機応変な対応をとることができた。
- ・販売方法を工夫することができた。→店頭販売、売り歩き
- ・他のチームのメンバーと協力し、無事に完売することができた。

改善点

- ・事前リサーチ不足だった。
- ・販売品の試作の徹底を図るべきだった。→特にタピオカの試作
- ・事前準備の詰めが甘かった。もう少し余裕を持って準備、確認ができたらトラブルを防げた。

9

II. 活動報告並びに結果報告

②異文化交流フォーラム

日時：2015年11月29日(日)10:15～15:30

場所：茨城大学水戸キャンパス内 茨苑会館談話室

参加者：高校生19名(茨城キリスト教学園高等学校様、水戸第二高等学校様、水戸桜ノ牧高等学校様、水戸桜ノ牧高等学校常北校様)

留学生14名(茨城大学、茨城キリスト教大学)

日本人大学生8名(茨城大学、茨城キリスト教大学) **計41名**

10

II. 活動報告並びに結果報告

<全体の目的>

高校生×留学生×日本人大学生の三者の交流の手助けをする。

<昨年度までのフォーラムとの相違点>

- ・「楽しく異文化を学ぶ」ことに重点を置いた。
↳楽しさの中の学び⇔学びの中の楽しさ
- ・全体の規模を小さくし、より密の濃い交流になるようにした。
↳フォーラム後にも繋がる関係作り

11

II. 活動報告並びに結果報告

<タイムスケジュール>

企画ⅰ：アイスブレイク(人間知恵の輪/鳥とかごゲーム)

企画ⅱ：座談会(グループ)

企画ⅲ：ワークショップ(異文化であることを体験できるバーンガ)

企画ⅳ：フリートーク

12

II. 活動報告並びに結果報告

<異文化交流フォーラムの写真>

- ・ウェルカムボード
- ・開会式
- ・アイスブレイク(人間知恵の輪/鳥とかごゲーム)
- ・座談会
- ・ワークショップ
- ・フリートーク
- ・全体写真

13

II. 活動報告並びに結果報告

<アンケート結果>

概要：回答者 41名中39名

全7項目 はい/いい/えの回答方式+自由記述

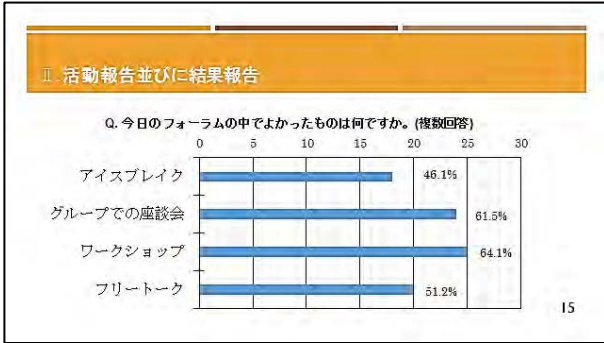
Q. 今日のフォーラムは全体的にどうでしたか。

[分類名]
[パーセンテージ]



[分類名]
[パーセンテージ]

14



II. 活動報告並びに結果報告

〈アンケート結果からわかること〉

- ・目的の差別化をしたことによって、各企画が意義のあるものになった。
- ・気軽に交流を楽しむことができた。
- ・留学生だけではなく、高校生⇄大学生の交流もあった。
- ・外国へのイメージがニュースなどによって固定されていたが、その国に行ってみなければわからないこともあることを知ることができた。
- ・高校生の英語に対する需要に応えることができなかった。

16

II. 活動報告並びに結果報告

〈よかった点〉

- ・アクシデントが起きた時、臨機応変に対応することができた。
- ・参加者だけではなく、私達自身も楽しむことができた。
- ↳余裕を持って全体を見ることができたから。

〈改善点〉

- ・時間配分を考えるべきだった。
- ↳はやく進み過ぎてしまった時の対処方法 など
- ・シミュレーション不足点があった。

17

III. 先進地実地研修を受けて

◇大学生として...
何事にも挑戦できるチャンスがある！
そのチャンスをどう活かしていくのか

◇チームとして...
スケジュールの調整/ToDoリストの作成
チームのために何ができるのか/貢献できるのか

◇チームリーダーとして...
責任感/正確性/親和性
メンバーの各意見を尊重する

苦手なことを克服する/
アプローチ方法を変えてみる/
諦めずに根気を持ってやる

全員が共有・把握すること
⇒信頼関係を作る

「まとめる」ということ
⇒チームの雰囲気作り

18

IV. プロジェクト実習全体を通して学んだこと

LinK × DCE → 二大学間の連携

(1) “情報共有”の大切さ

- 月に一回はミーティング ... 小チームから大チームへ、情報交換
- 密に連絡を取り合う ... SNSを最大限に活用する
わからないことはすぐに聞く
- 「ほうれんそう」の徹底 ... 全員が同じ情報を持つ
(報告・連絡・相談) チーム内で情報格差がないように

19

IV. プロジェクト実習全体を通して学んだこと

○うまくできなかった

- ・情報の伝え手と受け手の見解が一致しなかったことがあった。
例：発注の仕方

○うまくできた

- ・合同ミーティングまでの準備がしっかりできた。
- ・問題が起きたりわからないことがあったりした時にはすぐに確認を行った。
↳共通認識で行動、情報格差がないように
- ・RENANDIを上手く活用することができた。
- ・SNSを活用できた。

20

IV. プロジェクト実習全体を通して学んだこと

経験者×未経験者 先輩×後輩 チーム×連携先

(2) 信頼関係の構築

- 仕事を思いっきり割り振ること
↳分担したら全力でサポート ⇒不安感を払拭、安心感の誕生
- “頼る”ということを行動で見せること
↳経験者だけで話を進めない！⇒新しい視点からの考え

21

IV. プロジェクト実習全体を通して学んだこと

○うまくできなかったこと

- ・経験者だけで話を進めてしまう場面が多かった
→新チームとして、昨年度までの経験が必要な場面とそうではない場面とを区別をする

○うまくできたこと

- ・ミーティングを重ねるごとにチームの輪を広げることができた。
- ・役割によって同じ仕事量になるように割り振ることができた。
- ・少しずつ個人で行う仕事の幅が増えてきた。
- ・与えられたものをしっかり行うことによってチームに貢献することができた。
→チーム意識を持つきっかけに

22

IV. 御礼

○水戸まちなかフェスティバル
泉町二丁目商店街振興組合 宮本純太郎様
水戸まちなかフェスティバル実行委員会様

○異文化交流フォーラム
茨城キリスト教大学 文学部長上野尚美先生、国際理解センター長山中俊克先生
学校長鈴木龍夫先生、教頭大川通昭先生を始め、茨城キリスト教学園高等学校の皆様
学校長石崎弘美先生、谷萩淳子先生を始め、水戸第二高等学校の皆様
学校長野内俊明先生、教頭石井孝先生、神賀俊光先生を始め、水戸桜ノ牧高等学校の皆様
学校長野内俊明先生、野上敦子先生を始め、水戸桜ノ牧高等学校常北校の皆様
参加者の皆さん

23

ご清聴ありがとうございました。

異文化交流プロジェクト

24

6:最終レポート

今年度を振り返って

13L1130H 藤堂 みさ都

私はプロジェクト実習Cの活動は今年度で二回目になる。今年度受講しようと思った理由は、異文化交流フォーラムを行いたかったからだ。昨年度、初めてプロジェクト実習Cに参加し行ったフォーラムは、私にとって心残りがあった。緊張したり上手く回らなかったり、規模が大きかったこともあって人を動かすことの難しさを感じた。昨年度のフォーラムを振り返ると、一年間継続して行ったプロジェクトであったために達成感もあったが、同時に悔しさもあった。もっと工夫できたのではないか、こうすればよかったのではないか、今年度の講義が始まるまで非常に葛藤があった。そのような葛藤の中で参加することにしたが、今年度も今年度で濃密な一年だったと現在振り返る。

今年度のプロジェクト実習Cの特徴と言え、二大学間の連携である。茨城大学と茨城キリスト教大学の両大学で連携し活動を行っていくというのが、今年度最大の強みであり難点であった。まず物理的な距離があったことが挙げられる。私達は「異文化交流プロジェクト」(写真)としてチームを結成した時から、一か月一回の合同ミーティングを心がけていた。しかし人数も10人と予定を合わせるのでさえ苦勞し、土日を行うことが多かったため場所にも苦勞した。そのような中でも合同ミーティングを行い、情報共有を行ってきた。次に信頼関係の構築に時間がかかったことである。単純に会う時間がなく、全員が集めたのは私達の二つの企画の一つ目「水戸まちなかフェスティバル」だったと記憶している。LINEやメールでのやり取りが多かったため、情報に差があったり、誤った形で伝わってしまったり、もどかしさもあった。地道に合同ミーティングを重ね、活動を行っていくことで、現在の信頼関係になったのだと思う。特に最重要企画であった「異文化交流フォーラム」は、私達異文化交流プロジェクトのチーム力が試される企画でもあった。

「異文化交流フォーラム」では短い時間であったが、チームメンバーそれぞれが自分の役割を意識し、それぞれの強みを生かした準備期間、イベントであったと考える。今年度の「異文化交流フォーラム」は成功だったと強く思う。勿論小さいミスはあったがそれをカバーしたり、修正したり、また何より「異文化を楽しく学ぶ」ことができたことが私としても嬉しかった。イベントを行った際に参加者にアンケートをとったが、その中で「楽しかった」「初めて異文化について知ることができた」などの声があり、フォーラムをやった意図・意義が伝わったことがわかり、非常に嬉しかった。チームとしても私達自身がイベントに参加者と一緒に楽しむことができた。私個人としても二回目のフォーラムということ、万全な準備のお陰で安心感があったこともあり、余裕を持って全体を見ることができた。私はイベント内で全体を俯瞰する役割を担っていたので、常に冷静でいることや的確な判断力が求められていた。当日成功するかどうか不安もあったが、始まってみれば参加者の笑顔を見て安心し、チームメンバーが頑張っている姿を見て更に安心した。このチーム在っての「異文化交流フォーラム」だったと改めて思う。

最後にチームメンバーと、私達の活動にご協力戴いた先生方や連携先の皆様に、感謝の気持ちを述べたい。二大学間の連携ということでも苦勞も多かったが、先生方にはイベントの際も温かく見守ってくださり、本当に力になった。また、外部の方々にもお世話になり、私達の活動のきっかけをくださった。多くの方々に支えられて行うことができた一年間だったと考える。そしてチームメンバーに改めて感謝の気持ちを伝えたい。私は今年度リーダーとして活動してきたが、チームメンバー9人が居なければ成り立たなかった。このメンバーでなければ、今年度の「異文化交流フォーラム」は作れなかった。この10人でなければ成功しなかったと思う。私は今振り返れば、今年度プロジェクト実習Cに参加してよかった。今年度の活動には満足している。



異文化交流プロジェクト メンバー

3年目のプロジェクト実習

12L1096S 清野 絢

私は2年次からプロジェクト実習を受講し、三年間異文化交流プロジェクトの活動を行ってきた。この三年間のプロジェクト活動で、様々な立場を経験することができ、チームの中で自分がどのようなポジションで動くのが向いているのかがわかったり、あまり向いていないポジションになったとしても、そのときにどう行動すればチームの役に立てるのかということを考えることができたと思う。今年度は副リーダーという役割を任されたが、三年間の私の経験の中では、一番難しい役割であった。副リーダーは書記や会計の様に決まった仕事がないため、どのような立ち位置でチームに貢献するのが良いか悩む事が多かった。リーダーの相談に乗ったり、その時の状況に応じてやるべき事を引き受けたりという面では良くできていたが、もっとチーム全体を俯瞰的に見て、メンバーに声かけができるような立場になれるとより良かったのではないかなと思う。



異文化交流フォーラムにて

さらに今年度はメンター編受講者の立場でどのようにチームに貢献できるかも意識しながら一年間の活動を行った。特に昨年度から続けているメンバーと今年度新しく仲間になってくれた2年生というメンバー構成の中で、プロジェクトの前半はどうしても昨年のプロジェクト経験者であるメンバーに意見を求めてしまう部分があったり、自分自身で解決してしまう部分があった。新しくメンバーになった後輩に対して、本当は後輩の皆もきちんと仕事ができるにも関わらず、その力を信頼しきれずに、任せきれていない部分があったと思う。本来であれば、経験者として後輩が主体的に動きやすいような環境を整えるべきだったのだが、それができていなかった。これは今年度の大きな反省点である。スタッフ編やリーダー編の時のプロジェクト活動は、なるべく自分からやるべき事を探したり、引き受けた仕事を責任を持って果たしたりすることを意識して行動していたが、メンター編の今年度は、なんでも自分でやろうとしてしまうのはよくないという意識となるべくチームに貢献したいという気持ちが矛盾したような形になり、とても行動しづらかったというのが本音である。しかし、水戸まちなかフェスティバル、異文化交流フォーラム

(図)と企画を進めていく中で、信頼して仕事を任せたり、頼ったりすることができるようになり、後半はチームとして学年や経験に関係なくお互いに意見を交わせるようになったと感じた。

また、今年度は4年次であったため就職活動や卒業研究との両立もしなければならなかった。その一方で、就職活動の面接で自分が大学で頑張ってきたことを話す際に、プロジェクト実習の経験を話す機会がとて多くあり、就職活動の中で、今まで頑張ってきたプロジェクト実習での活動が認められている事がとても実感できる一年間でもあった。

私は4年間の大学生活の内、3年間プロジェクト活動を行った。2年次はとにかく何かに挑戦したいという思いだけで始めた活動だったが、気がつく私の大学生活の中で時間的にも精神的にも最も大きな割合を占めるものになっていた。四六時中プロジェクトの事を考えていて大変なことも多かったが、それよりも得たものの方が大きかった事は確かである。この授業の目的である根力をつけるという点は、就職活動をしていて身につけているということが実感できた。しかし根力だけではなく、この授業で学年や学部、大学を超えて仲間になったメンバーや、もしくは社会人の方々や高校生、留学生など多くの人と出会い、私自身がたくさんの異文化体験をすることができた。特に一緒に1年間、またはそれ以上プロジェクト活動をしてきたメンバーは普通の友達とも仕事仲間とも違う特別な存在になったと考えている。このプロジェクトで身につけた力やこの3年間の出会いがこれから社会人として働くときにも私の力になってくれると思う。この3年間、一緒に活動してくれた異文化交流プロジェクトのメンバーに感謝したい。ありがとう。

ほう・れん・そう

－仲間がいたからできたこと－

14L1173H 渡邊 悠

私は、「異文化交流・異文化理解」に興味があったため、迷うことなく異文化プロジェクトチームを希望した。何もかもが初めてで、何をすべきなのか全くわからないところからのスタートであった。私の担当は書記で、毎週行うチームミーティングの議事録を RENANDI にアップするという仕事内容であったが、最初は上手く RENANDI を使いこなせず、チーム内の情報共有のための分かりやすい議事録を作成することができなかった。しかし、回数を重ねるごとにどういう形で議事録を作成すれば分かりやすいのか、RENANDI のアップの仕方などのアドバイスを先輩方から受け、少しずつ慣れていくことができた。また、ミーティングやチームの活動を通して、チーム内の雰囲気も良くなり、プロジェクトという活動が楽しいものとなっていった。

私達異文化交流プロジェクトチームの1つ目の大きな活動は、水戸まちなかフェスティバルへの出店であった。これは、泉町二丁目商店街振興組合の宮本紘太郎様をはじめ、たくさんの人に支えられて行うことができた。私達は、「異文化ポテト」という様々な国のソースを用意し、選んでもらうという企画を考え、実行した。プロジェクトメンバーに加え、茨城大学の留学生にも売り子として参加してもらおう予定であったが、留学生のための別のイベントと重なってしまい、参加してもらおうことができなかった。「異文化ポテト」といっても販売しているのは日本人で、お客様にとってはただのポテト販売にしか見えず、初めはそこまで売れなかった。そこで私は「他にはない！世界のソースを使ったポテト！」と書いたボードを持ってお客様に声をかけた。するとお客様の反応も変わり、「他にはないって…？」「世界のソースだって」と言って興味を持ってお店に足を運んでくださった。この日は1日中店頭販売をし、準備や後片付けで疲労はあったが、ポテトを完売した達成感とメンバーとのチームワークが深まったことを感じる事ができた。

私達の最大のイベントである、異文化交流フォーラムでは、留学生、高校生、大学生の交流の場を作り上げることができた。出会いの場を設けることによって、新たな出会いが生まれ、そこからさらに友達の輪が広がっていく。私達プロジェクトメンバー内では、留学生、高校生、大学生が立場や考え方の違いを認め合い、交流してほしいと考えていたが、高校生同士、留学生同士、大学生同士の交流も生まれ、とても意義のあるイベントとなった。この企画を実行するためには、多大なる準備の時間を必要とした。2チームの合同企画であるので、本来ならば綿密な打ち合わせと数回のリハーサルをするべきだったが、学校が違うということやメンバーのスケジュールの問題で十分に打ち合わせやリハーサルができなかった。当日は、多少のトラブルはあったものの、その都度メンバー同士がフォローし合い、チームワークを発揮することができた。

様々な企画を実行するにあたり、異文化交流プロジェクトチームでは週に1回程度のミーティングや月に1回茨城キリスト教大学のDCEチームとの合同ミーティングを行い、話し合いや情報共有を行った。活動拠点となる場所が異なるため、スケジュール管理やミーティングの実施も非常に難しい問題であった。しかし、Skypeの利用や、SNSを上手く利用するなど、工夫してチームのハンデを乗り越えることができた。また、私はこのプロジェクト実習という授業を通して「連絡・相談・報告」の「ほう・れん・そう」がどれだけ重要であるかということ学んだ。中でも、私が1番大切だと思ったのは、「報告」である。様々な活動を行うにあたり、各担当を決めていたので、誰が何をどれくらい進めているのかをメンバーが把握することによって他のメンバーが手伝うことができ、アドバイスもできて誤解なども減る。「連絡・相談・報告」を怠ってしまうと、チーム内のコミュニケーションや活動への取り組みも上手くいかないということを感じた。

今回のプロジェクト実習を通して学んだことは、これから私が様々な取り組みを行う上で必ず役に立つと確信している。そして、プロジェクト実習に関わったすべての人に感謝しながら、人との繋がりを大切に、これからも異文化理解に努めていきたい。

プロジェクトを通して

14L1135G 野中 萌

私は、今年度初めてプロジェクト実習に参加したのであるが、正直に言うと想像以上に大変であった。まず、チーム内の役割として私は渉外という仕事を受け持った。この役割を選んだ理由は、会計などの仕事よりも外部との関わりを持つという点で、社会で役に立つ、人と接するときのマナーが身に付くのではないかと考えたからである。実際にはじめから外部との関わりが多く、電話やメールなど目上の方とのやりとりもほとんど初めてに等しい私には、先が思いやられた。しかし、四年生の櫻井さんに力を借り、というより一緒に教えてもらいながら活動したことで、一年を通して様々なことを学び取ることができたように思う。主な仕事として、水戸まちなかフェスティバルの際にお世話になった宮本様とのメールでの情報伝達や、異文化交流フォーラムに参加をお願いした各高校への電話やメールでのやりとり、それぞれの学校に訪問して先生方にフォーラムについての説明をさせていただいたこと、送付書類を作成したことなどが挙げられる。多くがフォーラムに関係するものだったの



水戸まちなかフェスティバルにて

だが、初めての私にとっては、冬に開催するイベントについてこれほど早くから準備に取り掛かるということがまず驚きであったし、高校の先生方へのそれぞれ対応の仕方が異なっていたりと、普段知ることのできないことがたくさん分かり、発見の連続であった。特にメールでのやり取りが多かったのだが、先輩方の言葉の使い方や対応が上手でとても参考になり、これから社会に出てコミュニケーションを取る際、例えば就活などにおいて使えていけたらと思った。良い発見もたくさんあった一方で、自分の能力の足りなさに気づくという、悪いというか、改善すべき発見もあった。自分は何も知らないということを知ることができ、まさに無知の知であると思う。

チーム全体の活動で得たこともたくさんある。今年は茨城キリスト教大学の人と一緒にチームを組んだこともあり、イベントだけでなく、チームの中でも異文化を感じることができた。留学生や地域の方々を結ぶ懸け橋となることや異文化交流をしてもらうことが目的であったが、自分もそのような交流ができて一石二鳥だと感じている。自分以外の人とはみな異文化であるという考えを持っているので、多くの人々と関わることができたこのプロジェクトに非常に感謝している。このように他の人と関わる中でたくさんの影響を受けたのだが、チーム内では特に先輩方の考え方や行動力にいつも驚かされ、自分もそうなりたいと憧れつつ、そうなれないことに落ち込んだこともあった。ミーティングでは、その日に話すべき内容を的確に定め、意見を聞きつつ意見を述べ、各役割に仕事の進行状況の確認をするなど、周りが見えている先輩だからこそその行動を見せられた。イベント本体である水戸まちなかフェスティバルや異文化交流フォーラムでは、緊急事態にも瞬時に的確な判断を下し、上手く収めていたり、外部の方々とのコミュニケーションの取り方も上手であった。自分の役割とは違い、チーム全体の活動の方では、自分が何かをして得たものよりも、人を見て学んだことの方が多いと感じられた。具体的な指導ではなくても、行動や姿から学び取れることが多くて、プロジェクトを一年やってきたなかで、自分にも少しでも同じ力が身に付いていれば非常に参加した甲斐があると思う。このプロジェクトに参加していなかった自分と参加した今の自分を想像して比べてみると、行動力や考え方、そして何よりも自信が身に付いていて、全く違う人のように感じられる。もっと自分にできたこともあったと後悔することもないわけではないが、その後悔を他のことに活かしていければよいのだという考えが身に付いたので、良かったと思っている。

このプロジェクトのチームメンバー、関係者の方々、先生方には感謝の気持ちで一杯です、本当にありがとうございました。

プロジェクト実習を通して

14L1120Y 富田 恵

私は、異文化交流プロジェクトの会計として、1年間プロジェクト実習に携わってきた。もともと異文化交流に興味があり、昨年度の異文化交流フォーラムに参加した際に興味を持ったため、参加することにした。今までサークル活動などでイベントを企画してきたこともあり、その経験を活かすことができると考えていた。しかし、実際にプロジェクトが始動すると、少ないメンバーでの活動は想像以上に責任感を持って活動することが求められ、仕事内容の負担も軽いものではなかった。そして、初めてプロジェクト実習に携わるメンバーと、経験者との間に溝が生じ、未経験のメンバーが思うように活動できなかつたり、コミュニケーションがうまくとれなかつたりするということがあった。

私は会計を担当し、一年間の収支を見越した予算計画を立て、その中での必要物品の発注や予算管理等を行った。初めは、物品発注のメールを送ることすら容易ではなく、このような自分がメンバーとして仕事をやり遂げられるのか不安でいっぱいだった。しかし、その様子を感じとり、前年度までの情報を共有した上で、意見を求め、分からないことがあった時にはしっかり支えてくださったリーダーをはじめとする経験あるメンバーのお蔭で、徐々に主体的にプロジェクトに携わっていくことができるようになった。初めは負担に感じていた会計という役割も、次第に責任感を持ち、任された仕事をやり遂げようという気持ちが芽生えた。それからは、分からないことはすぐに質問し、責任を持って会計の持つ情報共有を行い、メンバーに自主的に意見や情報を求めたりできるようになった。当たり前のように思えることだが、実行するのは難しいことであり、このような基礎的な能力は今後あらゆる場面で活用することができるものだと思う。

プロジェクトを通して多くのことを学んだが、最も重要だと感じたのはチームワークの大切さだ。チームを組んで活動に取り組む以上、チームワークの大切さは言うまでもないが、メンバーの誰が欠けてもプロジェクトの遂行に問題が生じるような環境では、信頼関係の構築が必要不可欠となる。初めは意見があっても言い出しにくかつたり、わからないことばかりで自分はどのようにチームに貢献していけば良いのか不安になつたりすることも多かつた。しかし、フォーラムという1つの目標を目指して、様々な問題を乗り越えていくうちに、自分がこのチームの中で果たすべき役割が明確になり、主体的に意見を交換し、行動できるようになった。また、今回は自分が初めて参加する立場であったが、迎える側の苦悩も知ることが出来た。経験があると、つい自分の力で進めようとしてしまつたり、予定通りに進まないことに焦り、活動を進めることばかりを考えてしまつたりする。しかし、新しい人材を育成し、1つのチームとしての結束感を高めるためには、一見回り道に見えても、サポートをしながら他のメンバーに仕事を与えたり、メリハリをつけて信頼関係を構築したりすることが最終的なプロジェクトの成功に繋がると知った。これは自分が上の立場となった時に心がけたいことである。

また、フォーラム当日は思いがけないトラブルが生じたが、柔軟に対応することができ、司会進行も全体の流れや雰囲気を考えながら進行することができた。司会は先生や他のメンバーにも褒めて戴いたが、このようにできたのも入念な準備を行つたり、中間発表のようなプレゼンを経験したりしたことによって、柔軟性やコミュニケーション能力が高まつたためである。

プロジェクト実習に携わつたこの1年間で、私は多くのことを学び、成長できた。1つの企画を実行していくために、ただフォーラム当日の企画をするだけでなく、人間関係の構築や資金の確保といった活動をする必要性を学んだ。そして、他者と円滑にコミュニケーションをとるための柔軟性、あらゆる可能性を考える問題発見力、計画的に自ら行動する行動力、人前で自分の意見を発表、プレゼンテーションしたり、司会進行をしたりする能力など、社会人として活かせるスキルを身につけることが出来たと思う。このように、主体的に活動することで様々な困難にぶつかつたが、それらを乗り越えたことによって、プロジェクト実習は今後の大学生活や社会で活躍できる能力身につける良いきっかけとなつた。

プロジェクト実習を通して

12L1071T 櫻井 優美

プロジェクト実習C（異文化交流プロジェクト）では、メンバーとして、渉外の仕事のサポートや書類づくり、保険関係等を担当した。水戸市内及び茨城キリスト教学園高等学校の高校生に、異文化交流フォーラム（図）に参加してもらうために、各4高校を訪問した。その際に大変だった事は、送付するための書類づくりで、対外的なものなので、言葉遣いに気を配ったり、失礼のないようにと細心の注意をはらった。それは、訪問した際にも同じ事であったが、実際に会うと、先生方はとても優しく、私たちの活動にも理解を示してくださった。また、去年も同じようにプロジェクト実習Cで渉外を務めていた事もあって、先生方に顔を覚えていただき、信頼関係を築く事ができた。高校訪問は一番緊張した仕事だったが、好感触で終わる事ができ、フォーラム参加者の募集も快諾していただけた。



異文化交流フォーラムにて

最初のイベントであった水戸まちなかフェスティバルでは、私たちLinkチームは異文化ポテトを販売した。これの事前準備には、試作会を二回したので、しっかり準備できていて当日はとてもスムーズだった。何事も事前準備は大切だと思った。ただ一つだけ、途中で容器の紙カップがなくなってしまうという緊急事態が発生し、先生方やメンバーに迷惑をかけてしまった。これについては、物品の確認不足な点があった。どれだけ準備をしたつもりでも、ミスをしてしまうときにはしてしまうものである。ミスをした時には、ただそのままにするのではなく、その後どれだけ臨機応変に対応するかが大事だと、今回の失敗で学んだ。

メインイベントである異文化交流フォーラムでは、たくさんの高校生、留学生からの参加希望があり、とても嬉しかった。特に、当日バスで高校生を迎えに行ったとき、去年も参加してくれた高校生がまた来てくれて、二年間プロジェクトに携わってなければ感じられない喜びを味わった。帰りもバスに乗って高校生を最後まで送っていったが、そこでゆっくり話をする機会があり、参加者がフォーラムを本当に楽しんでくれた事や、将来の事など色々な事を考えてフォーラムに参加した事がわかり、参加者の声を直に聞く事ができた。事前の準備では何回もミーティングを開いたり、小道具を用意したり、バスや会場等の手配をしたり、進行計画を立てたりと、言ってしまうと大変だった。しかし、参加者が楽しかった、勉強になった、ためになったと言ってくれた事で、やって良かったと心から思った。

プロジェクト実習を履修して得た一番大きなものは、自信である。外部の社会人の方との話し合いの場を体験したり、一つのプロジェクトを自分達で計画し完遂した事は、大きな達成感とともに大きな自信となった。自信がついた事で、様々な事に挑戦するようになった。今年は、海外に研究に行ったり、ボランティアやイベントに参加したり、新しい人脈ができたり、プロジェクト実習以外でも様々な新しい事にチャレンジした年だった。プロジェクト実習がきっかけで、自分自身を大きく成長させる事ができた。

また、プロジェクト実習を通して、人との縁やつながりの大切さを感じた。何をやるにしても、たくさんの方の協力が必要で、例えばお弁当一つ作るにしても、箱を作る人、食材を育てる人、料理をする人、お箸を作る人、お弁当を売る人など、たくさんの人が関わる。今回のプロジェクトも、たくさんの人々のおかげでプロジェクトを成功させる事ができた。その協力を得るためには、まず何よりもそれを本当にやりたいという情熱と、相手の立場になって考える事、誠実な対応をする事が大事だった。これは、プロジェクト実習だけでなく、どんな事にも言える事で、バイトをするときも、ボランティア活動をするときも、就職活動をするときも、同様の事が言えると思う。もう4年生なので、来年からは社会に出て仕事をしていく事になるが、仕事をする上でもこれは大切な事だと思う。誠実に、地道に努力を積み重ねていく事で、周りから信頼されるような社会人になりたい。プロジェクト実習で学んだ事を活かして、社会で活躍していきたい。

リーダーとして学んだこと

15SP113A 栗原 大地

この1年間のプロジェクト実習を通してリーダーという役割の責任の重さ、仕事の大変さなどを改めて実感することができた。チーム内でのミーティングや合同ミーティングなどの日どりの決定からチームメンバーの予定の把握などといった細かいことから全体での話し合いでの正確な意見を出していき活動に直結させていくなどといった重い仕事まで幅広く行っていくことから、他のどの役割にもない大変さがあった。上の立場に立つ責任として積極的な意見の発言はもちろんのことであったが、他のメンバーの意見も尊重したり、時にははっきりと反対することもあった。しかしそういった経験が自分のためになっていることも実感することができた。この授業を履修する前でもリーダーとしての責任やどのように仕事をしていくべきかのイメージはある程度できていたが実際に活動してみるとその想像を超えた大変さがあり苦勞することも多くあった。しかしそういった苦勞もチームのメンバーがサポートしてくれたこともあり乗り越えることができた。チーム内でうまく意見がまとまらなかったり理想通りに決められなかったりするなど厳しいこともあったが、そこをチーム全員で乗り切ることができたことで自分たちの成長にもつなげることができたのではないと思う。



異文化交流フォーラムにて

水戸まちなかフェスティバルや異文化交流フォーラム(図)ではメンバーの助けもあり成功につなげることができた。特に水戸まちなかフェスティバルではDCEチームで独立して出店するということがかなり多くの不安がある中での準備が始まった。DCEチーム内に過去に経験したことが一人もいなかったというのも一つの原因だったのではないと思う。それでもLinkチームの方々に聞いていたりすることで問題を解決していくことができた。自分たちが使える予算内で何を販売していくか、どこで作るか、どのように販売していくかなど解決すべきことは多くあったがうまく解決していくことができた。特にDCEチームの女性陣にはより多くの負担をかけてしまったが、その二人の活躍があったことが成功した一番の要因であったと思っている。年間を通して計画していき行っていった二つの行事のなかで自分もいくつかの仕事はこなしたが他のメンバーがより多くの仕事をこなしてくれたため自分としてはよりの確かな指示を出し成功につなげていけるように考えていくことに集中することができた。ときには誤った指示を出してしまい失敗することもあったが、その失敗をしたときにどう巻き返していくか、修正していくかなどをチームで考えていくことができたのもよかった。リーダーとしての責任を果たそうとして深く考え込んでしまったり、よりいい案を出していこうとして逆に失敗してしまうということもあったがミーティングなどで協力し合ったことで良い結果に結び付けることができたことが自分にとってもメンバーにとっても成長していくことにつなげられたのではないと思う。チームとしてどう助け合っていくか、お互いにフォローし合っていくかを学ぶことができた。

この一年間の活動を通して初めての経験をするのが多くあり戸惑うことが絶えず失敗してしまったことが多くあったが今後の人生に向けて生かしていくことができる経験を得ることができた。そのため将来、今回の経験を生かす機会が出てきたら今回の失敗を忘れることなく成功に結び付けられるようにしていきたい。就職して仕事をしていく中で上の立場に立って指示を出していきたり指導していきたりといった仕事もすることになるだろう。そういったなかで今回のようにリーダーとしての責任がしっかりと果たせるようにしていきたい。今後も失敗していくことがあると思うが、その失敗をしたなかで成功に変えることができるかということをしっかり考えて行動していきけるようにしたい。そしてリーダーとしての役割をしっかりとこなしていき課題の成功により貢献できるように今後も努力していきたい。

プロジェクト実習を通して学んだこと

個人の達成目標ルーブリックの観点から

15SP108A 飯村 貴洋

私はこのプロジェクト実習を通して、課題を解決する能力、解決に向けて計画を立てる能力、物事に進んで取り組む力の三つの能力の大切さを学ぶことができた。私がこの授業を履修しようとしたのは、自分には社会人として足りない能力をはぐくむことが出ると考えたからである。この授業では、あらかじめ「個人の達成目標ルーブリック」で「プロジェクト実習を通して強化したい根力」を考える。私は、主に「主体性」、「計画力」、「課題解決能力」の三つが自分に不足しているものと考え、今後強化したい能力として挙げた。

一つ目に「課題を解決する力」については、社会人としてどこ職場でも必要とされている力だと考える。プロジェクト実習は普通の座学の授業とは違い、学生が主体となって計画を立て、実行する授業である。プロジェクト実習Cでは、「異文化交流フォーラム」を開催することを主目標にした。そのフォーラムを開催するにあたって、参加者を会場まで送迎するバスを手配することとなり、「水戸まちなかフェスティバル」に出店し、予算を集めることとなった。「水戸まちなかフェスティバル」では、限られた予算の中で、商品を作り販売し、十分な利益を上げる必要があった(図)。ルーブリック作成時は、課題の核心をとらえることや、解決に導くための方法あまり理解していなかった。プロジェクトが終わった後に振り返ったが、やはり、いまだに課題の原因は何か、分析をし、解決のために動くことができるようになるためには、さらにいろいろなことを経験する必要があるということが分かった。その中で試作や当日の流れ、販売方法などの様々な課題があった。チームメンバーと協力してこれらの課題を乗り越えて、利益を出すことができたが、課題の本質をとらえて、適切な解決に導く力は必要とされていると改めて感じた。

二つ目の「解決に向けて計画を立てる能力」も、課題に直面したときに必要となる能力である。「水戸まちなかフェスティバル」だけでなく、「異文化交流フォーラム」を開催するにあたり、特に予算の問題で壁に当たるが多かった。課題を見つけ、本質を見極めた後は、その解決に向けた道筋を立てて、それを実行していく必要がある。もともとは、ある課題に直面しても、どうすれば解決できるかわからなかったり、それを乗り越えるために必要なプロセスを考えることがあまりできなかつたりした。今回のプロジェクトでは、課題に直面する毎に、その都度「どうすれば解決できるか」や、「どうすればよりよくなるか」などと、少なからず考えることができた。具体的な解決のためのプロセスを考えたり、それを実行に移したりはできなかつたりしたが、大切さを学ぶことができた。

三つ目の「物事に進んで取り組む力」は、社会人として仕事をしていくうえで必要不可欠なことである。「異文化交流フォーラム」では、各企画があり、メンバー間で担当を決めた。私は、ワークショップの担当となり、日本にいながら異文化を体験できる「バーンガ」というトランプゲームを企画した。この企画は自分の担当となるので、責任をもって行うこととなった。フォーラムを成功させるために、この企画に関して、主体的に取り組み、ゲームのワークシートなども用意した。「個人の達成目標ルーブリック」に記入した時点では、私は自ら物事に取り組もうとはせず、ほかの人から支持をもらってから動くことが多かった。しかし、今回のプロジェクトを通して、少しでも自分で積極的に物事に取り組もうとする力は身についたと感じる。

今までの学生生活の中で、「授業」というものは教室で受けるというイメージだったが、この「プロジェクト実習」を通して、普通の授業では学ぶことができない知識や能力を得ることができたと感じた。また、社会に出る前に、一人前の大人として必要な知識やマナー、立ち居振る舞いなども身につけることができ、良い経験になった。



水戸まちなかフェスティバルにて

新しい挑戦をして学んだこと

15SP109A 大高 詩織

一年間DCEチームの書記を務め、時には渉外としても活動していました。この二つの役職を務め、プロジェクト実習という新しい授業に挑戦して感じた事、学んだ事をまとめていきます。

① 書記を務めて

まず、人に文章で物事を伝える事の難しさを学びました。メンバー内で連絡事項があった時にどのようにまとめたら全員が分かりやすく理解できるか、という事に常に気を配っていました。自分の考えを一度まとめた後、その情報をより簡潔に伝える為の言い回しや、書き方まとめ方を工夫するようにはしていました。小さな事項でも記録を残しておくべきと判断したものは、メンバー全員が見る事のできるメモを使用して見返した時に思い出す事ができるようにもしていました。また、議事録も同様に内容を知らない人が見た時に見やすくかつ分かりやすいように、一度書いた文章を読み返しながら客観的に見る様にしました。加えて、文章での説明が難しかったり、分かりにくかったものは写真や表を使用し一目でも分かるようにまとめるように努めていました。以上の点に気を付けながら記録を残すようにしていたので、簡単に振り返りやデータを探す事ができたのではないかと思います。ただ記録を残すだけではなく、見返した時に具体的な内容が思い出す事ができる様な記録の仕方を今後も身に付けていきます。

② 渉外を務めて

異文化交流フォーラムを開催するにあたり、参加高校の一つである茨城キリスト教学園高校との連絡を担当させていただきました。外部との連絡は初めてだったので電話連絡やメールの書き方に気を付けながら行っていました。メンバー内との連絡とは全く異なるので、誤解のないように内容をよく確認し自分でも誤解をしていないかどうかを茨城大学のLinkチームと入念な確認を行い、資料を準備したり連絡をするように努めていました。相手の信頼を失ってしまっは今後の活動に大きく響いてしまうと考えたので、迅速で正しい対応の取り方を学ぶ事ができました。

③ プロジェクト実習を通して

一年間、DCEチームや異文化交流プロジェクトチームとして活動して大切だと感じた事は「メンバーを信頼し役割分担をする大切さ」と「お互いをフォローし、助け合う事大切さ」です。私は今まで自分で何でもやる傾向がありました。しかし、この活動を通して全て一人でこなそうとするとすぐに限界が来てしまい、仕事の質も落としてしまう事を改めて実感しました。そこで、自分でこなす事が難しい部分はメンバーに相談しそれぞれに合った仕事を役割分担しお願いする事で全員が平等に仕事をする事ができ、一つ一つの質が上がるという事に気付きました。しかし、これはお互いの信頼があってこそできるものだと考えているのでグループ活動を行う時は信頼を失わないように努めていかなければならないと思いました。メンバー内で問題が生じてしまうと険悪な雰囲気を作り出してしまい、他のメンバーにまで迷惑をかけてしまいます。こういった問題が生じてしまった時は早い段階で話し合いを設け和解し、関係を復活させることが大切だという事も同時に学ぶ事ができました。二つ目に挙げたものについては、他のメンバーの仕事だから自分は関係ないという気持ちではなく、全員仕事内容を簡単にでも把握しておく事で緊急で必要となった資料を担当者が作ることができないといった事態が起きた時、臨機応変に他のメンバーが担当を変わり資料作成を行った事がありました。こういった助け合いがあったので、その後の活動にも滞りなく作業を進める事ができました。状況把握と助け合いを欠かさずに行う事で活動の質が高くなるのではないかと考えました。

④ まとめ

最後に、プロジェクト実習を受講した事で普段の授業では得る事のできない経験や茨城大学のLinkチームとの交流、合同のイベント開催など幅広い分野において経験を積む事ができ、自分の弱かった点や今後も伸ばすべき点を見つける事ができました。今後、弱かった点を強くできるようにグループ活動などを行う際に学んだ事を実践していきます。

成長の記録

15SP110A 寺門 美千花

このプロジェクト実習を履修したのには理由があります。私は大学1年生の時、新しい生活に慣れることに必死でした。そのため自由な時間が増えたにも関わらず、自分から率先して何かしたりすることはありませんでした。ですから、来年は何か新しいことにチャレンジしてみようと思ったのです。そんなときに大学の学生掲示板でプロジェクト実習のことを知りました。他大学との交流、社会人の疑似体験、実践型の授業等、多くのことに魅力を感じ、参加を決めました。茨城大学、茨城キリスト教大学の学生で結成された異文化交流プロジェクトの活動が始まりましたが、慣れないことばかりでこれから大丈夫なのかと不安な気持ちでいっぱいでした。私は DCE チームの会計を務めましたが、初めてのことで戸惑い、なかなか思うようにいきませんでした。しかし出来ないといって嘆いているのではなく、出来なければ積極的に誰かに聞くようにして会計の仕事をしてきました。ここで学んだことは、出来ないことを恥ずかしながら自分だけでどうにかしようとしないうことです。今までの私だったら、何でも一人でやろうとしていたと思います。しかし、このプロジェクト実習を受けるなかで、人を頼ることはとても大切だと思ったのです。「十人十色」というように人は皆違います。その違った人たちが集まることで、それぞれの足りない部分を補えると私は強く思いました。出来ないことがあって当たり前、それでいい。けれどこれはお互いに信頼していないと、出来ないことでもあると思いました。やはり私も最初は茨城大学、茨城キリスト教大学との境界線のようなものを感じてしまい、なかなか心をひらくことが出来ませんでした。また自分の意見を言えず、流されてしまうこともありましたが、一緒に活動していくと徐々に、心を開けるようになり、お互いに意見を出し合ったり、助け合うことが出来るようになりました。この時に信頼関係の大切さにも気づかされました。私たち異文化交流プロジェクトは、二つの大学の学生から結成されたため頻繁には集まるのが出来なかったうえに、それぞれ忙しく、メンバー全員が集まれる日がほぼなく不安もありましたが、その中で Skype を使ってミーティングを行うなどの工夫をしました。頻繁に会えない分、今何をやるべきかを考え活動を進めてきましたが、これも本当に大切なことだと思いました。物事の順序を考え、行動すれば効率が良い。私はあまり得意ではありませんが、これからはきちんと考えて行動していきようになりたいです。私たちが準備をすすめてきた、企画である「異文化交流フォーラム」は大成功したと思います。時間は限られていましたが、普段関わることのない他大学の学生、留学生、年の違う高校生が一つになり文化交流ができました。もちろん反省点がありますが、私たちが思い描いていた異文化交流フォーラムにすることができ、本当によかったです。私はフォーラムのポスターを作成しました(図)。本来なら、使いやすさ、見やすさの面からみてデジタル化したものが良かったとは思いますが、私にはそのような技術がなく手書きで作成しました。折り紙を使ってちぎり絵にしましたが、素敵なポスターだと言ってくれたので嬉しかったです。慣れないことばかりで多くの方々に迷惑をかけてしまったと思いますが、私はこのプロジェクト実習を受けて本当に良かったです。正直なところ、自分の容量の悪さに嫌気がさして投げ出してしまいたいと思うこともありましたが、しかし、チームの皆さんがそれぞれ頑張っているから私も頑張ろうと思い、最後まで活動することができました。もちろんチーム以外の方たちにも沢山支えてもらい、困った時には助けてもらいました。これからも、人との出会い、つながりを大切にしていきたいです。異文化交流プロジェクトのメンバーの皆さん、支えてくれた皆さん、ありがとうございました。このプロジェクト実習で学んだことを生かして、残りの大学生活を有意義なものにし、たくさんの方にチャレンジしていきたいです。



異文化交流フォーラム ポスター

おわりに

野中 萌

このプロジェクトを通して、学んだことや得たものはそれぞれ異なると思いますが、今回のチームメンバーや関係者の皆様がいなければこのプロジェクトは成立しなかったということは、全員が感じていることと思います。チームメンバー一人一人の役割、存在は大きなものであり、このメンバーが集まったからこそ活動内容が充実したものとなったのではないかと考えています。留学生と地域を結ぶ懸け橋となることが活動目的の一つとなってはいますが、私たち自身も活動の中で様々な人と交流すること、異文化を感じることができました。水戸まちなかフェスティバルに来てくださったお客さんも、異文化交流フォーラムに参加してくださった大学生、留学生、高校生など、プロジェクトに関わったその他の方々も、私たちと同じように、異文化への興味・関心を持つことができたり、新たな知り合いができたりなど、何かしらの良い影響を受けていれば嬉しい限りです。また、チームとしての目標とは別に、始めに各々が立てた目標の達成への意識も相まって、一人一人大きく成長することができたのではないのでしょうか。初めての経験ばかりで、頭を抱えることも多々ありましたが、このプロジェクトに参加して良かったと心から感じています。

そして、最後になりますが、この場をお借りしてお世話になりました皆様へお礼を申し上げます。水戸まちなかフェスティバルの際にお世話になりました、泉町二丁目商店街振興組合の宮本紘太郎様、また、異文化交流フォーラムの際にお世話になりました、茨城キリスト教大学様、茨城キリスト教学園高等学校様、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校様、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校常北校様、茨城県立水戸第二高等学校様、そして最後に、プロジェクト実習の担当教員である神田先生、鈴木先生、井澤先生、本当にありがとうございました。多くの方々にお力添えをいただいたおかげで、異文化交流プロジェクトを無事に終えることができました。今後また今回のような機会がございましたら、ご協力してくださると幸いです。

4:こみっとフェスティバル

活動報告

プロジェクト実習D

リーダー	: 佐藤 李咲	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
副リーダー	: 小野瀬莉央	茨城大学人文学部社会科学科	2年
副リーダー	: 西野あゆみ	同上	2年
書記	: 寺澤恵里香	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
書記	: 安藤 有紀	茨城大学人文学部社会科学科	2年
会計	: 塚本 莉沙	同上	2年
メンバー	: 川井 奈々	茨城大学教育学部情報文化学科	4年

主担当教員 : 井澤耕一 茨城大学人文学部 教授
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授

2015 年度
茨城大学人文学部 プロジェクト実習D
「こみっとフェスティバルチーム」 活動報告

はじめに

塚本 莉沙

私たちは 2016 年 2 月 20 日に開催した、こみっとフェスティバルに向けて 1 年間活動をしてきました。今年度は 2 年生が 6 人、4 年生が 1 人といった計 7 人のチームで活動しました。こみっとフェスティバルとはどういったものなのかの概要は次のページで詳しく説明しますが、ここでも簡単に触れておくと、こみっとフェスティバルとは水戸市にある NPO 法人とボランティア団体が水戸市と協力して行うイベントであり、市民の皆様へ水戸市にある NPO 法人とボランティア団体について知ってもらうことを目的にイベントを開催しています。

こみっとフェスティバルの開催は 2 月だったので、開催までの期間は実行委員会の会議に参加したり、インターシップに参加することでこみっとフェスティバル開催の意義を再確認することができました。また水戸市にはどういったボランティア団体があり、どういった活動をしているのかなど、ボランティア活動に私たちも参加させてもらうことにより、理解を深めることができました。それだけではなく、宣伝活動のため水戸まちなかフェスティバルや茨苑祭にも参加しました。ここでもボランティア団体の方々に協力していただき催し物を行うことで、お客様を呼び込み、来ていただいた方々にこみっとフェスティバルの宣伝を行いました。こういったことを通じて、イベント運営をやるにあたって必要なことを学びました。例えば、時間配分や役割分担、情報の共有の大切さ、また来ていただいた方とのコミュニケーションを通じてどうすれば興味をもってもらえるのか等を学ぶことができました。初めての経験が多く戸惑うことがたくさんありましたが、目標に向かいチーム一丸となって取り組むことができたと思います。

私たちがこのプロジェクトに参加した理由は、まずあらかじめ目標が決まっていたため取り組みやすいと思ったからです。このプロジェクトでは元々こみっとフェスティバル開催という大きな目標が定まっていた、そこに向けて自分たちがなにをしていくべきか、という道筋がある程度決まっていたため、取り掛かり易かったと思います。その他にも、学年が変わり、昨年 1 年間の振り返って何も出来ていなかったと反省し、今年は今までやったことのない新しいことにチャレンジしてみたかったからという意見や、前からイベントの運営に興味があったから、インターシップに行けるからといった理由の人もいました。また、市役所の方を初め様々な人と関わる事ができるためこのプロジェクトに参加したという人もいました。

上記のように様々な動機から様々な人が偶然に集まり、始まったプロジェクト実習でしたが、このプロジェクトを通して学ぶことは多かったです。楽しいというだけでなく、意味のある活動ができたと思います。

私たちの一年間の活動と成長の過程を、ここにまとめていこうと思います。

1:活動の目的・目標と概要

私たち「こみっとフェスティバルチーム」（以下、こみフェスチーム）は、茨城大学における PBL 型授業の一環として、水戸市役所市民生活課様と連携して活動を行ってきました。水戸市内の NPO 法人・ボランティア団体といった市民活動団体の存在を、より多くの人々に知ってもらい身近に感じてもらうためのイベント「こみっとフェスティバル 2016」の運営・広報を主な活動とし、その中で私たち自身も水戸市内の市活動民団体についての理解を深める、といったことを目標としています。

この最大の目的である「こみっとフェスティバル 2016」の開催に向け、当イベントの実行委員会に出席する中で、「知ろう！つながろう！きっと HAPPY！」という私たちこみフェスチームの案がイベントのテーマ・キャッチフレーズとして採用されるなど、実際に企画・運営に携わりました。そうした実行委員会の参加だけではなく、今回こみっとフェスティバルへ参加する市民活動団体様のもとでボランティアをさせていただいたことで、私たち自身が水戸市内の市民活動団体について知り、交流を深めていくことでより運営を円滑に進めるようにする、といった我々の目標の一つを達成することができました。

また、広報について、私たちこみフェスチームの活動内容を記したパネルの展示・こみっとフェスティバルのチラシ配布と合わせて、2015 年 10 月 25 日に水戸市内で行われた「水戸まちなかフェスティバル」に参加し、こみっとフェスティバル参加団体であるばるーん・レインボー様の協力のもと、バルーンアートの制作をしました。このイベントは十分に来場者を集めることができ、人々を集めて広報するといった点においては満足のいく結果とはなりましたが、事前の役割分担不足と想像以上の来場者によりバルーンアート制作が中心となってしまう、真の目的である広報活動がおろそかになってしまったという反省点も挙げられました。

次に、茨城大学の学園祭である「茨苑祭」においても、同じくこみっとフェスティバル参加団体の一つである水戸こどもの劇場様の協力によるカブラ（積み木）、はつらつサークル様の協力による折り紙教室を通して、小さなお子様を連れた「ファミリー層」をターゲットの中心としてイベントの宣伝活動を行いました。このイベントでは前回の反省をふまえて事前にしっかりと役割分担をし、スケジュールを組むことで円滑に活動を行うことができました。また、メインターゲット層である小さなお子様を連れた「ファミリー層」の来場者を多く集めることができ、満足のいく結果となりました。それに加えて、イベント開催間際の 1 月・2 月にはラジオへの出演と、マスメディアを通しての宣伝活動も行いました。

そして私たちの最大の目的・目標である「こみっとフェスティバル」開催日には、ビラ配り、これまでの活動内容を示したパネルの展示・説明、ステージ出演者の誘導、撮影、ステージライブ映像の管理といったスタッフとしての活動に携わりました。ダンスやライブなどのステージ会場と、バルーンアートの制作・吹き矢体験、食品などを販売する交流・相談・物販・体験ブースに分かれて行われましたが、当日は天候が悪く、物販・体験ブース会場の周りには人通りが悪かったこともあり、前年度より来場者を集めることはできませんでした。しかし、その中でも客の呼び込みに尽力しました。一方で、ステージ会場は大いに賑わい、来場者に影響するような大きなトラブルもなく進行し、ラストには実行委員の方々や私たちこみフェスチームが水戸市マスコットキャラクターである「みとちゃん」の「みとちゃんダンス」を踊ってイベントを締めくくりました。全体を通してイベントを盛り上げることに携わることができたとともに、周りの方々の協力もあって無事にイベントを成功に終えることができました。

2:こみフェスチーム 活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2015年6月10日 14:00～15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室2	構想発表会に向けて市役所 の方との事前打ち合わせ	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、寺澤
2	2015年6月24日 14:00～15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室2	第1回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、川井
3	2015年7月22日 14:00～16:30	水戸市役所本庁舎南側 臨時庁舎中会議室	第2回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、安藤、寺澤、川井
4	2015年7月24日 10:30～12:00	茨城大学図書館2階グル ープ学習室	夏季休業中の役割分担	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、安藤、寺澤
5	2015年8月2日 14:00～16:00	水戸市生涯学習センター	英語スピーチ大会の案内ボラ ンティア	佐藤、塚本、寺澤
6	2015年8月20日 14:00～16:00	内原中央公民館	こども広場ひまわり様の活動の ボランティア	塚本、安藤
7	2015年8月26日 14:00～16:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室2	第3回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	佐藤、小野瀬、塚本、安 藤、寺澤、川井
8	2015年8月27日 13:30～15:30	老人ホーム「かたくり」	老人ホームでのボランティア活 動	佐藤、小野瀬、安藤
9	2015年9月14日 10:00～13:00	茨城大学図書館2階グル ープ学習室	活動の振り返りと、水戸フェス に向けた打ち合わせ	佐藤、小野瀬、塚本、安 藤、寺澤、川井
10	2015年9月30日 14:00～16:00	水戸市役所本庁舎南側 臨時庁舎中会議室	第4回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	西野、塚本、川井
11	2015年10月12日 10:00～12:00	堀公民館	水戸フェスで行うバルーンア ートの事前指導	佐藤、西野、塚本、安 藤、寺澤、川井
12	2015年10月21日 14:00～16:00	水戸市役所本庁舎南側 臨時庁舎中会議室	第5回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	佐藤、小野瀬、西野、塚 本
13	2015年10月24日 11:00～16:00	人文棟 B501	水戸まちなかフェスティバル前 日準備	佐藤、塚本、安藤、寺 澤、川井
14	2015年10月25日 9:00～17:00	水戸市泉町2丁目	水戸まちなかフェスティバルの 参加	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、安藤、寺澤、川井
15	2015年11月14日 9:00～15日17:00	茨城大学人文講義棟 23 番教室	茨苑祭の参加 1日目にカプ ラ、2日目に折り紙教室	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、安藤、寺澤、川井
16	2015年11月25日 14:00～16:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室2	第6回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	佐藤、塚本、安藤
17	2015年12月12日 10:00～17:00	茨城大学人文講義棟 10 番教室	プロジェクト実習活動報告会	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、安藤、寺澤、川井
18	2015年12月16日 14:00～16:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室2	第7回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	小野瀬、塚本、安藤、川 井
19	2015年1月27日 14:00～17:00	水戸市双葉台市民センタ ー	第8回こみっとフェスティバル 実行委員会の参加	佐藤、小野瀬、塚本、寺 澤、川井
20	2015年2月20日 終日	イオンモール水戸内原	こみっとフェスティバル2016の 運営	佐藤、小野瀬、西野、塚 本、安藤、寺澤、川井

3:会計報告

品名	単価	数量	合計
のりパネ	1,000	2	2,000
バルーン	780	5	3,900
バルーン ファッションソリッド	853	4	3,412
バルーン ノーチップタイプ	1,177	1	1,177
バルーン クリスタル	1,026	1	1,026
公民館使用料	600	1	600
透明ゴミ袋	156	1	156
マーカー	259	2	518
		総計	12,789

4:活動トピック

(1)ボランティア参加

a) 第2回小・中学生英語スピーチ大会

- ・茨城世界青少年コミュニケーションクラブ様からのお誘い
- ・日時：2015年8月2日（日）14:00～16:00
- ・場所：茨城県水戸生涯学習センター
- ・活動内容：椅子を並べるなどスピーチ大会の運営の手伝い

b) こども広場ひまわり

- ・内原すみれの会様からのお誘い
- ・日時：2015年8月20日（木）14:00～16:00
- ・場所：水戸市内原中央公民館
- ・活動内容：家庭環境に悩む子どもたちを集め、学習サポートをしたり一緒に遊んだりする

c) 老人ホームへの訪問

- ・はつらつサークル様からのお誘い
- ・日時：2015年8月27日（木）13:30～15:30
- ・場所：介護老人介護施設 ナーシングホームかたくり
- ・活動内容：遊びとリハビリテーションを掛け合わせた「アソビリテーション」をもとに高齢者の方々とレクリエーションを行ったりお話をしたりする

(2)インターンシップ

- ・日時：2人ずつ3組に分かれ、8月24日・25日、9月1日・2日、9月3日・4日の2日間実施
- ・場所：水戸市役所 市民生活課
- ・活動内容：市役所内の研修を見学、研修内のグループワークへの参加、水戸市の協働事業に関する概要を聴講

(3)水戸まちなかフェスティバル

- ・日時：2015年10月25日（日）10:00～16:00
- ・場所：泉町二丁目商店街振興組合様のスペース
- ・活動内容：ばるーん・レインボー 馬場様と連携させていただきバルーンアートの楽しさを広めながら展示等を使い、こみっとフェスティバルの宣伝を行なった（図1・2）。



図 1: 催事ブース



図 2: 集合写真

(4) 茨苑祭 (茨城大学の学園祭)

- ・ 日時 : 2015 年 11 月 14 日 (土) 9:30~17:30
15 日 (日) 9:30~17:00
- ・ 場所 : 人文講義棟 23 番教室
- ・ 活動内容 : 1 日目は水戸こどもの劇場様と連携させていただきカプラという積み木を通して、また 2 日目ははつらつサークル様と連携させていただき連鶴折り紙教室を行い、参加者の皆様と触れ合いながら展示等を用いることでこみっとフェスティバルの宣伝を行なった (図 3~5)。



図 3: 展示

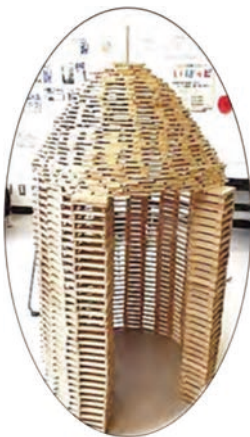


図 4: カプラの積み木



図 5: 連鶴

(5)こみっとフェスティバル 2016

- ・日時：2016年2月20日（土）10:00～16:00
- ・場所：イオンモール水戸内原
- ・こみフェスチームのピーク行事

・イベント内容

水戸市の市民活動団体が集まり、「知ろう！つながろう！きっと HAPPY！」をスローガンに市民活動団体について知ってもらい、市民と市民活動団体、市民活動団体と市民活動団体をつなぐことを主な目的とした水戸市役所主催のイベント

- 1階ステージ→ダンスや演奏会など多くの人に向けて行われる発表等が行なわれた。
- 2階中継地点→プロジェクト実習の展示や市民活動団体「すみれの会」、「i ランニング」の展示を行なった。a)とc)をつなぎ誘導する役割もあった。
- 2階イオンホール→市民活動団体ごとにバルーンアート・プラバン作りなどの体験コーナー、クッキー・ポーチなどの物販コーナー、市民活動団体についての相談コーナーに分かれ様々な催し物を行なった。

・活動内容

1階ステージ、2階中継地点、2階イオンホールの三か所に2人・2人・3人ずつ分かれ、イベントの運営に関わる活動を行なった（図6～9）

- 1階ステージ→ステージ発表内容をビデオで撮影したり来場者の数を数えたりした。
- 2階中継地点→こみっとフェスティバルのビラを配りながら1階ステージや2階イオンホールへ誘導を行なった。また、プロジェクト実習に関する展示と、その説明も行なった。
- 2階イオンホール→入口付近でのビラ配りや全体への指示・調整を行なった。



図 6:1 階ステージ



図 7:2 階中継:展示



図 8:みとちゃん



図 9:集合写真

活動報告会

**市役所連携チーム
こみっとフェスティバル班**

佐藤 李咲 (リーダー) 小野瀬 莉央 (副リーダー) 西野 あゆみ (副リーダー) 川井 奈々	塚本 莉沙 (会計) 安藤 有紀 (書記) 寺澤 恵里香 (書記)
---	---

目次

- チーム紹介・活動目的
- こみっとフェスティバルとは？
- 活動内容：
 - ・ 実行委員会
 - ・ インターンシップ
 - ・ ボランティア参加
 - ・ 水戸まちなかフェスティバル
 - ・ 茨苑祭
- 今後の予定：こみっとフェスティバル2016
- 謝辞

チーム紹介・活動目的

こみっとフェスティバルチーム
 茨城大学の授業の一環であるプロジェクト実習において
 結成されたチーム
 水戸市役所と連携して活動

- ①水戸市内の市民活動団体を知ってもらい利用を促進する
- ②市民と団体とのつながりの架け橋になる

↓

こみっとフェスティバルの成功

こみっとフェスティバルとは？

水戸市内の市民活動団体間でのネットワーク作りや
 団体の存在を知ってもらうことで
 一般の方々にも身近に感じてもらうためのイベント



こみっとフェスティバル実行委員会

○ 開催：
 ・ 毎月一回、水戸市役所にて開催
 ・ (6/24、7/22、8/26、9/30、10/21、11/25、12/16予定、1/27予定)

＜成果＞

- ・ 運営に実際に携わる
- ・ 提案したテーマが採用

「知ろう！つながろう！きっとHAPPY！」

インターンシップ

○ 実施日：8月24日・25日、9月1日・2日、3日・4日
 二名ずつ、二日間にわたり実施

○ 場所：水戸市役所 市民生活課

○ 内容：
 ・ 市役所内の研修を見学
 ・ グループワークへの参加
 ・ 水戸市の協働事業に関する概要を聴講

＜成果＞

- ・ 協働とは何かを学ぶ
 →こみフェスの開催意義を再確認できた

ボランティア参加

○ こみっとフェスティバルは市民活動団体のことを
 市民の方々に知ってもらうことが目標の一つ

↓

○ 運営側にいる私たちが市民活動団体の活動を知らない！

↓

- ・ 活動に参加して体感すること
- ・ こみフェス実行委員の皆さまと交流を持つこと

を目標に、夏休みの期間を利用して
 3カ所の団体様の活動に参加

第2回小・中学生英語スピーチ大会

○ 茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ 様
 からのお願い

○ 日時：8月2日（日）14：00～

○ 場所：茨城県水戸生涯学習センター

○ 参加者：佐藤・塚本・寺澤

○ 活動内容：運営の手伝い

○ 感想：
 ・ 授業とは異なった交流の場を提供することが、
 子どもたちにとって貴重な良い経験になるのではないかと

こども広場ひまわり

○ 内原すみれの会 様 からのお願い

○ 日時：8月20日（木）14：00～

○ 場所：水戸市内原中央公民館

○ 参加者：安藤・塚本

○ 活動内容：子どもと遊ぶ

○ 感想：
 ・ 家庭環境に悩む子供がいるということを考える
 きっかけとなった

老人ホームへの訪問

○ はつらつサークル 様 からのお願い

○ 日時：8月27日（木）13：30～

○ 場所：介護老人保健施設 ナーシングホームかたくり

○ 参加者：安藤・小野瀬・佐藤

○ 活動内容：レクリエーションのお手伝い・お話

○ 感想：
 ・ ボランティア活動の必要性、大変さを理解できた

○全三カ所のボランティア活動に参加して・・・

- 普段の生活では関わることの少なかった人たちと交流することができ、貴重な体験となった
- 私たちのような若い年代のボランティアの方が少ないように感じた

- ↓
- もっともっとボランティアの存在をたくさんの人に知ってもらいたい気持ちが強くなった
 - こみフェスがそのきっかけとなるように改めて全力で取り組んでいきたい

11

水戸まちなかフェスティバル

- 日時：10月25日（日）10：00～16：00
- 場所：泉町二丁目商店街振興組合様のスペース
- 内容：
 - **バルーンアート**・・・ばるーん・レインボー馬場様 との連携
 - **展示**・・・こみっとフェスティバルの紹介



12

＜成果＞

- ばるーん・レインボー馬場様のご指導の下、バルーンアートを子どもたちに教えることができた。
- 子どもやその保護者の方々が多く来客し、バルーンアートを楽しんでくれた。
- 同時に展示やビラ配布をし、「こみっとフェスティバル2016」の宣伝ができた。
- 水戸まちなかフェスティバルの出店の目的の一つである「企画・運営を学ぶ」ことができた。

13

＜反省点＞

- 役割分担が不十分であった。
 - 予想以上の集客数であったため、始まりで戸惑ってしまった。
- ⇒バルーンの指導役や宣伝役だけでなく、
全体を取りまとめる**指示役**をつくるのがポイントであった。



水戸まちなかフェスティバルでの成果や反省点を
茨苑祭や「こみっとフェスティバル2016」で
活かしていく。

14

茨苑祭（茨城大学 学園祭）

- 日時：11月14日（土）9：30～17：30
15日（日）9：30～17：00
- 場所：人文講義棟23番教室
- 内容：
 - 14日 **カズラ（積み木）**
・・・水戸こどもの劇場様 との連携
 - 15日 **連続・折り紙教室**
・・・はつらつサークル様 との連携
 - **展示**：こみっとフェスティバルの紹介



15

＜成果＞

- 2日間での来客数が116人であった。
- 水戸まちなかフェスティバルでの反省点であった役割分担をしっかりと定めて取り組むことができた。
- 遊びながらコミュニケーションをとることで、「こみっとフェスティバル2016」にも興味を持っていただくことができ、宣伝も十分にできた。



16

＜反省点＞

- 外で宣伝をする際に、天候が悪いときの対策がとれていなかった。
 - 他のチームとの連携・連絡が少し足りていなかった。
- ⇒予測することや確認しあうことの
必要性を学んだ。



17

今後の予定

こみっとフェスティバル2016

日時：**2016年2月20日(土)**
10：00～16：00

会場：**イオンモール水戸内原**
1階メインコート 2階イオンホール



18

謝辞

- 水戸市市民協働部 市民生活課 協働係 鬼沢様 田治様 皆さま
- 茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ 谷萩様・皆さま
- 内原すみれの会 井川様・皆さま
- はつらつサークル 平沼様・皆さま
- ばるーん・レインボー 馬場様・皆さま
- 水戸こどもの劇場 袴塚様・皆さま
- 水戸市環境保全会議 高橋様・皆さま
- M・I・T・O Z I 横田様・皆さま
- 朗読ボランティア「コスモス」 太田様・皆さま
- 泉町二丁目商店街振興組合 宮本様・皆さま
- 茨城大学教職員の方々

ありがとうございました!!!

19



ご清聴ありがとうございました

6:最終レポート

プロジェクト実習 D を履修して

12P6005X 川井 奈々

昨年に引き続き今年もプロジェクト実習Dを履修し、こみフェスチームとして1年間活動してきました。継続を行った理由は、チーム全体で1つのことを成し遂げる達成感をもう一度経験したかったことと、活動していく中で、新しく出会う人、特に接することの多い市民活動団体の方々から刺激を受けられるためです。また、昨年行ったことを今年の活動に活かしていきたいと考えていました。そのため、昨年はリーダー・渉外を務めましたが、今年は就職活動も重なったため、役職持たず全体を見られる位置として活動してきました。

私たちの目標は、もちろん平成28年2月20日(土)に行われた「こみっとフェスティバル2016」を成功させることです。そのために主に3つのことを行ってきました。

1つは、こみっとフェスティバル実行委員会の参加です。この実行委員会は、代表の市民活動団体の方と市の職員の方と月に1度集まり、こみっとフェスティバルの運営について協議するものです。ここで、ステージ発表、物販・体験コーナー、展示コーナーの内容を話し合いしていきました。ここで私たちのチームとして評価されたことは、チームで考えたメインテーマ「知ろう！繋がろう！きっとHAPPY！」が採用されたことです。市民活動団体についてあまり知らない市民の方々がこのイベントに参加しコミュニケーションをはかることで、繋がりができ、両者がうれしい気持ちになれることを目標に設定しました。これを軸に話し合いを行いました。特に昨年の課題であった、ブースごとの繋ぎや、ステージにおける持続的な集客、展示コーナーにおける協議の少なさを重視したことで、より密な話し合いができたと思います。

2つは、ボランティア活動です。このイベントを運営するためには、まず私たち自身が市民活動団体について知らなければならぬと考え、実行委員会の方に依頼し、ボランティア活動を行いました。そこで感じたことは、水戸市の中だけでも高齢化や子育て、教育、異文化など様々な課題があることと、それを支援していきたいという思いで活動している方々がいるということです。市民活動団体の方が市民の悩みを解決することで、行政と市民との架け橋になることができ、それを実現するためにもこみっとフェスティバルを行う意義があると改めて感じることができました。

3つは、広報活動です。親子世代をターゲットに、「水戸まちなかフェスティバル」と茨城大学の学園祭「茨苑祭」に参加しました。そこで私たちは一緒に出店して下さるよう声掛けをし、「水戸まちなかフェスティバル」では、ばるん・レインボーの馬場様とバルーン教室、「茨苑祭」では水戸子どもの劇場様とカブラの積木、はつらつサークル様と折り紙教室を実施しました。実際に市民活動団体の方と触れる機会をつくることで、コミュニケーションをはかることができ、紙媒体だけでなく体験で宣伝できたと考えます。また、運営について学ぶこともでき、役割分担や連携の大切さを知ることができました。

イベント当日、私はステージ発表にて出演団体の案内を行いました。スムーズにイベントが進むために的確に案内ができるように心がけました。また、広報活動で学んだ役割分担をしっかりと行い、必要に応じて連携ができていたと思います。また、ステージの準備中にクイズの導入、ステージにて各ブースの宣伝や誘導係の設置などを行ったことで昨年の課題を改善することができました。

2年間こみフェスチームとして活動してきて、前よりさらに良いものをとる意識が実行委員会全体に見られ、私自身もそのために参加できました。チームとしてはそれぞれがしっかりと役割を果たしており、連携もしっかりできていたと感じます。

こみっとフェスティバルは今年で4回目であったため、少しずつ認知度が高まってきた状況にあると思います。これからは、より良いイベントに磨き上げていき、自立できるようにするとともに、市民活動団体の参加を促すために、若者の斬新なアイデアが必要だと考えます。そのために、こみフェスチームはこれからもあり続ける必要があります。学生自身ももっと積極的に意見を発せるように努めていきたいです。若者と経験を積んできた方々が混ざりあい新しいものをつくっていきたくと考えます。

役割分担やコミュニケーションをはかる大切さは、これから社会人になっても必要になると思います。これら学んだことを活かし、まわりの環境に貢献できるよう努めていきたいです。最後に、水戸市役所様、実行委員会の皆様、プロジェクト実習担当教員の先生、2年間多大なる御指導、御協力ありがとうございました。

一步の挑戦が成長に繋がる

こみっとフェスティバル班として活動して

14L1078L 佐藤 李咲

私は、2015年4月頭に、大学一年の生活を振り返り、何にも挑戦できていない、環境を変えようとしないうちを変えたいと思い、このプロジェクト実習を受講することを決めた。こみっとフェスティバルの運営に携わる、というプロジェクトに決めた理由は、元からイベントの運営というものに興味があったということと、私にとって水戸市は生まれ育った地であり、そんな地で活動している人たちと関わってみたくったということが挙げられる。

プロジェクトを進めていく中で、まず夏季休業中に、ボランティア活動に参加したり、水戸市役所で二日間インターンシップを行なったりした。ボランティア参加では、茨城世界青少年コミュニケーションクラブ様の英語スピーチ大会の運営補助、はつらつサークル様の老人ホーム訪問、の二カ所に参加させていただいた。今まで触れてこなかったボランティアに実際に参加することで、よりボランティアを身近に感じることができ、ボランティアにも色々な形があることを知った。次に、インターンシップでは、水戸市役所の市民生活課で二日間お仕事の手伝いをさせていただき、とても勉強になった。今まで、市役所の仕事と聞くと事務のイメージが強かったが、協働についての説明や市役所内の研修を見学して、自分の中の市役所に対する固いイメージを変えることができたとても良い経験となった。

自分たちで一から企画を考えて行なった水戸まちなかフェスティバルと茨苑祭への参加は、チームにとって一番大変だった時期となったが達成感の得られる活動だった。市民活動団体の方々の力をお借りするための協力のおかげから当日の展示物の作成など、限られた時間の中で進めていくことで、メンバー間の団結も深まったと感じる。また、水戸フェスにおいていくつか出た反省点を、約半月後行なわれた茨苑祭で改善することができたことも、自信につながり成長できた。

最後に、最終目標であるこみっとフェスティバル当日は、チーム内で役割分担をしてそれぞれの持ち場を全員がやり遂げることができた。今まで、様々な活動を通して成長してきたからこそ、最後のこみっとフェスティバル本番で全力を出すことができたのではないかと、思う。

私は、約一年間このプロジェクト実習の活動を通して、本当にたくさんのことを体験し学ぶことができたと感じている。私は、チームが決まった時にリーダーとして活動していくことになり、正直初めは、人に自分の意見を伝えることが苦手な私が、果たして7人ものグループをまとめることができるだろうか、また外部の方ともたくさん話す機会があるのに私は失礼のない対応を出来るだろうか、と不安だった。そこで、私は自分の中でいくつか自分のリーダーとしての役割を考えた。一つは、メンバーを否定しないこと。もう一つは、全員が役割を持って、様々な経験をできるように割り振ること。チームとして活動していく中で、誰かに仕事が偏ってもよくないし、メンバーそれぞれが思いを持ってこの授業を受講しているので、なるべく全員が成長できる場であればならないと私は考えた。そこで、報告会での発表や資料づくり、イベントにおける役割分担など、必ず全員が全てを体験できるように心がけた。結果として、全員が自分の仕事に責任を持って活動できる環境を作ることに少しは貢献できたかなと感じている。

私は、プロジェクト実習を通して、普通に生活しているだけでは絶対に関わることはできないたくさんの人達と関わる機会を得た。その中で強く感じたことは、人のぬくもりである。私は、前述した通り対人関係に不安を抱いていた。しかし、「伝えたい」という意思を持って話せば、必ず相手はこちらの言葉にきちんと応えてくれる、ということはこの授業の活動を通して知った。今まで挑戦することから逃げていたが、一歩踏み出したことで私はたくさんさんの経験をし、たくさんの人と出会い、成長することができた。また、こみっとフェスティバルに向けて活動していく中で、地域の活動にとっても興味を持ち、今まで当たり前だった生まれ故郷である水戸市という街を、改めて客観的に見る機会を得ることができた。この経験は私にとってとても大きな変化であると思っている。自分のこの一年間での成長を、これから活かしていくように、もっと成長していけるように、頑張っていきたい。

こみっとフェスティバルを終えて

14L1117L 寺澤 恵里香

今回プロジェクト実習を履修して、たくさんのことを学び、得ることができました。以前から興味を持っていた地域との連携の関われることはもちろん魅力的でしたが、それよりも、明確な活動目標を立て、億票実現のためにメンバーそれぞれが意見を出し合い、計画し、実行に移すという、普段の授業でもサークルでも部活動でもなかなか得られない貴重な経験をさせていただきました。

こみっとフェスティバルチームは他のチームよりも少し長い期間での活動でしたが、今振り返るとチーム結成からあつという間に本番が終わってしまったと実感します。こみフェスを通して社会との関わりを持ったときにどのように対応するべきか、ずいぶん身に染みきたと思います。また、こうした市を挙げた活動に、大学生でもできることがあること、また、大学生だからできることがあるのだということを感じました。

こみフェス本番までは大変なことだらけでした。一つ一つの情報を聞き洩らさないように、チーム間での共有を密にとれるようにと何気ない話し合いから実行委員会のような場まで常に気を張っていたように思います。二人数が多いのを利用して、上手く役割分担を回すことの大切さは、水戸まちなかフェスティバルで身を持って体験しました。予想外の盛況に、誰一人として休む暇もなく、1日中イベントでふらふらでした。実行委員会では大人の関わり合いにタジタジになりながらも自分たちの視点だからこそ違うと思うことを述べることができました。そして、実行委員会の皆様とは夏休みやそれ以外の機会にもいつも声をかけてくださり、実行委員会内での信頼関係も築けました。実行委員会の皆様と関わる度に気を引き締めて行動していたように思います。

こみフェス当日では、私は中継点に展示してあるパネルの説明兼ビラ配りという役割に徹しました。いつもは素通りしてしまうビラ配りをやる立場になってみると、自分が一生懸命に取り組んできたことに目を向けてもらえないことの切なさも味わいました。みんながみんな、チラシを受け取ってくれるわけでもなく、いかにそういった人たちの注目を引き付けられるかが勝負なのだと感じました。どうしたら受け取ってくれるだろうか、どうしたら足を止めてもらえるだろうかと考えながら徐々に渡す枚数も増え、ノルマの数を達成することができました。また、こみフェスでは、たくさんの方が協力し合って盛り上げようとしている姿が見られ、より一層自分の力になりました。

こみっとフェスティバルを通して一番印象に残っているのはそれぞれのNPO・ボランティア団体の皆様がみんなキラキラしていたことです。どんなに興味があるからといって、興味だけであれほど真剣にかつ自身も周りも盛り上げようとする人たちを私は見たことがありませんでした。自分が参加している団体の目標に向けて、あついは自分自身の目標に向けて、一生懸命活動に取り組んでいる人が大勢いました。あまりそうした団体の目を向けたことのなかったわたしにとっては衝撃的でした。

今まで自分では見向きもしなかったものをあえて経験し、それがどういうものを感じさせるのか良い経験になりました。ビラ配りにしろ、団体にしろ、自分が見ていないだけ、気付いていないだけで、素晴らしいものは身近にあるものなのだと気が付きました。今回のプロジェクト実習の授業を通して学んだことは、ここで終わるのではなく来年も、卒業してからも、身に着けたものを発揮していきたいと思います。

体験と今後

学べた量は予想以上

14L2009F 安藤 有紀

私がかみっとフェスティバルというプロジェクトを選んだ理由は、主にインターンシップが理由である。そこで2択になり、そのうち、かみっとフェスティバルは明確に目的が決まっていたため選んだ。つまり、かみっとフェスティバルという内容に対し、特に思い入れはなかった。また、チーム活動についてもそれほど深く考えておらず、ただなんとなくでこの授業を受けることを決定した。

けれども、それだけの理由でこの授業を続けていくことはできなかつただろう。プロジェクトを達成する上で、多くの課題と学びがあった。時には失敗をし、他者に迷惑をかけた。これらは社会に出た後も生かせる体験であった。そのうち、特に私が重要に思った体験を以下に述べる。

まず、長期間における協力関係である。大学生活において、長期間決まったグループで協力できる場は少ない。それが、サークルのように共通の趣味をもって集まった同年代だけではない場合、なおさらである。かみっとフェスティバルを成功させるために、1年間という期間、ほぼ初対面の、同じ大学生だけでなく、市役所の方、市民活動団体の方とも連携をした。共通項は同じ目的を持っていること。相手がどのような人物なのか、どのようなことを求めているのか、理解していない段階から、協力していかなければいけない、という状況は極めて大変なことであった。それは1コマの授業中という限られた時間内の協力関係などより、よっぽど緊張することであったことは明白である。けれども、本来プロジェクトとは数時間でまとまるようなものは少ない。一つのことを成功させるために、数ヶ月、はたまた数年間、チームとして活動を続けていくことがあるだろう。この体験によって、そのためにどうすればいいのか、ある程度の知識を得ることができた。

次に、チーム内での責任を果たせなかつたことについてである。私はたびたびこの項目において失敗をした。書記係でありながら連絡を怠る、書記を忘れる、提出物をチーム内での締め切りに間に合わせないなど、いくつも数えることができる。自分は何をすべきなのか、余裕を持って計画を立てることができなかつたのだ。そしてこの文章もまた、チーム間での締め切りをすぎた上で記入をしまっている。私はついぞ、自分の欠点を直すことができなかった。その欠点を直すために、私に足りなかつたのは責任感であった。疑問に思ったことはすぐに聞かねばならない。締め切り当日に急いで終わらせるようでは足りない。いくつもの反省をしながら、それでもしてしまった失敗である。1年間を通し、私は自らの責任感が欠如していると気付くことができた。そして、社会に出るうえでそれは大きな問題である。まず、自分がしなければならぬことを書き出すことでその改善に努めていきたい。この方法は、チームのグループラインにおいて、メンバーが行っていたことを参考にした。

最後に、そこで行った3つのイベントである。水戸まちなかフェスティバル、茨苑祭、かみっとフェスティバルと、それぞれ形式の異なつたイベントであった。水戸まちなかフェスティバルでは直接、客と接点を持った。役割分担が明確でなかつたために、目の前に集中してしまつたが、その中で、どうやったらより効率的に動けるのか、考え、行動することができた。茨苑祭では、あまり客と接点を持たず、時には外に出て宣伝も行った。どのようにすれば、人が行きたいと思えるのか。実践はなかなかできなかったが、いくつか方法を考えることができた。また、余裕のあつた計画であつたために、イベント場所のレイアウトなど、細かい部分に目を配ることができた。最後に、大きな目標であつたかみっとフェスティバルでは、今まで関わつてきた実行委員の方々だけでなく、初めてお会いする市民団体の方々、ボランティアの方々とも協力をした。そして、その難しさを実感した。

以上が、私がかみっとフェスティバルを通して特に重要に思った体験である。多くの課題が、自らに残されている。できたこと、できなかったこと、やつたこと、やらなかつたこと。その中でも、やるべきなのにやらなかつたことがもっともしてはいけないことだ。体験したことの中で気付いたことは、今後行うべきことである場合が多い。授業を受けると決めたとき、ここまで多くのことを学ぶことができると思つていなかつた。けれども、実際は自分を見つめなおすきっかけとなつた。これからも、授業が終わつたことで、気付いたことを忘れてしまわず、生かしていきたい。

こみっとフェスティバルから学んだこと

14L2050T 小野瀬 莉央

私がプロジェクト実習を受講しようと思ったきっかけは大学1年生の一年間を終え2年生になったとき果たして何を身につけたであろうかと感じたからです。ちょうどその時プロジェクト実習について知り、新しいことに挑戦してみようと思い受講しました。こみっとフェスティバルに関わろうと決めたのはイベント運営に関心があったことと市民活動団体について知りたいと思ったからです。地域に密着して活動している市民活動団体の人々について知ることで今まで知らなかった地域の現状や問題について知ることができるのではと思いました。

活動を通して気を付けたこととしてどんくならないことでも様々なアイデアを出すよう心掛けました。それによって他のメンバーが発言しやすい雰囲気を作ったり小さなアイデアからまた別のアイデアが生まれたりするだろうと思ったからです。実際にこみっとフェスティバル当日の展示スペースのイオンホールとステージへの案内の張り紙やイオンホールのアンケートボックスの近くにアンケート記入場所を設けることなどを提案しました(図)。おそらく私が意図したような効果は多少なりとも得られたと思います。ただ、小さなアイデアも出すことによって大筋から外れることもあり発言回数などに注意して適度な発言を心掛けるべきだと思いました。また、アイデアを考える時に何のためにやっているのか、誰のためのものなのかを見失いがちだったのでなぜこの活動をしているのか、そのためにはどういった手順を踏むべきかを絶えず考えなければならぬと思いました。

次に活動を通して得たことについてです。まず一つ目は報告・連絡・相談の大切さについてです。茨苑祭のとき他グループへの連絡が遅れたためにパンフレットの制作が間に合わず大きな迷惑をかけてしまいました。報告・連絡・相談は社会人になった時にも必ず必要なことです。大学生のうちから身につけておかなければならないと痛感しました。二つ目は社会人の人々とのかかわり方です。メール一つとっても学生同士のものとはもちろん異なりますし、教授とのメールとも少し異なると感じました。具体的には相手は外部の方のため、冒頭に市役所の部署などを記入したりこちらで茨城大学と記入したりする等です。そして実際に会って話す際挨拶がとても重要であると感じました。挨拶はその人にとって第一印象となるものです。笑顔ではきはきと大きな声で話し、今後の挨拶とその日のお礼を欠かしてはなりません。当たり前前のことですが学生生活を送っているときにはあまりやらないことのため最初の頃は少し戸惑ってしまいました。これに気付けたことは意義のあることだと思います。三つ目に計画の大切さを改めて学びました。

何か行動しようと思っても取り掛かりが遅ければやっつけ仕事になりかねません。その活動はいつ行うべきか、その準備にはどのくらいの時間がかかるのか、そして他のやるべきこととの優先順位はどうかを考えなければならぬと思いました。そのためにはスケジュール管理を確実にし、準備にどのくらい時間がかかるのかを前回の資料で確認したり他の人に聞いたりする力が必要だと感じました。四つ目に実行委員会やその他の活動に参加していく中で市民活動団体の皆様の活動やそれに込められた思いを感じることができました。その活動を通して地域を良くしたい、この楽しさを伝えたいという熱意が強く、この思いを多くの人々に伝え広めていきたいと思いました。

以上のようにプロジェクト実習を通して様々なことを学ぶことができました。しかしこれで終わりにせずこの活動を次の人に伝えたりここで学んだことを他に活かしたりすることがこれからの課題だと思います。



こみっとフェスティバル展示の様子

自身を見つめた一年間

プロジェクト実習を通して

14L2178L 西野 あゆみ

このプロジェクト実習を経て、自身が新しく気づいた点や反省点、どのような能力を伸ばしていけば良いのかといったことを把握したと同時に、自身の中で変わっていった感じたことがあった。以下では、活動としての前に挙げた点を述べていきたい。当初、メンバーとうまくやっていけるか不安であったが、主体メンバーはみな同学年かつ同性であったためその心配もなく、気を重くせず、ラインでしっかりと互いに連絡をしたりと、円滑に協力し合いながら活動していくことが出来た。こみっとフェスティバルの実行委員会への参加を経ていく中で、水戸市内には実に多様な市民団体があるのだなということを知ることができ、夏休みにはその団体様のもとでボランティアをさせていただくことになった。しかし、入院という自身の体調の都合で参加することが出来ず、ともに企画したメンバーやそれを受け入れてくださった参加団体様に対し申し訳ないという気持ちでいっぱいになった。他にも実行委員会へ参加できなかった回など、自身の都合を優先してしまったことがあったので、将来社会に出ていくためにも、スケジュール管理や体調管理をしっかりと心掛け、他人へ迷惑が及ばないようにするといったことを身に付けていかなければならないと感じた。そのためにもまずはしっかりと自己管理をする癖をつけていきたい。次に、連携先の水戸市役所市民生活課様のもとでインターンシップをさせていただいた際、職員の方から実際に話を伺って公務員という社会の実情を参加する以前より明確に把握したと共に、職員研修でのグループワークを通し、自分の意見をしっかりと伝える力は大学のゼミなどだけではなく職場にこそ必要とされている事実を知ることができたと共に、自身の将来設計の参考になった。話し合いを円滑に進めるためにも、自分の意見をはっきり伝え、他人の意見を聞いて考えるなどといった社会的能力を今のうちから高めていかなければならないと強く感じた。続いて、水戸まちなかフェスティバルに参加した際には、あらかじめ役割分担をしておくことの重要性をメンバー共々改めて感じ、この失敗を茨苑祭に活かし、さらにはこみフェスにおいても活かしていくという意識づくりが自然となされていたのを見て、失敗してもそれを将来どう活かしていくかといったことが大切なのだと感じ、自身についてもそれを当てはめていくことでより良い自分になりたいと感じた。一方で、さまざまな方々と関わっていく中で以前よりも人に話しかけることに抵抗がなくなり、どのような年齢層の人にも普通に話せるようになっていた自分に気づき、反省点を見つけただけではなく、自身の成長を感じ始めることができた。そして、こみフェスに次いで自身の中で大きな山場となったのは、一般の方々も招いた活動報告会でプレゼンターを務めたことであった。こうした一般の方々の前でプレゼンをするといった経験をしたことはなく、プレゼンすらあまりしたことがなかったのでかなり不安を覚えた。しかし、チームメンバーと顧問の先生のみで行ったリハーサルの中で、自分でも想像以上にスラスラと発表することができ周りの評価も良く、自身でもこれまでの活動を通して人前に出て以前に比べあまり緊張しなくなっていることに気づいた。本番の際もそれほど緊張することもなく、一部詰まってしまったところもあったが、わりかしスムーズに発表できたと感じた一方、あまり聴衆の方を見ることができなかったという反省も残った。また、イベント開催直前には広報活動としてラジオに出演させていただき、かなり貴重な体験することができた。パーソナリティの方の協力もあり、円滑に進めることはできたが、少し堅苦しくなってしまったのが心残りである。そしてこみフェス当日では、ステージ会場の管理を担当したのだが、ライブ映像の管理や写真撮影といったことが主な活動であったので、他のメンバーが担当していたような客の呼び込みやステージ出演者の誘導といったアクティブな活動ができなかったのが非常に残念であった。しかし、何事もなく無事にイベントを成功させることができたことは嬉しく思う。

全体を通して、満足のいかない点・反省点も多々あったが、履修前に比べて、見知らぬ人と話すことや人前に出て発表することに対して苦手意識が薄れたなど、自身が少しでも成長することが出来たという面もある。このプロジェクト実習を通して実にさまざまな方と交流をもつことができ、普通ではあまり体験する機会のないことも体験することができ、満足のいく結果となった。改めて、当講義を履修してよかったと感じる。

活動を通して得たもの

14L2200S 塚本 莉沙

私は2月20日に行われたこみっとフェスティバルに向けて1年間活動してきました。こみっとフェスティバルの開催が2月だったので、それまでの期間は、月に1回の実行委員会の会議に参加したり、夏には実行委員会の人に頼みボランティア活動を体験してみたり、インターンシップにも参加しました。また後期にはこみっとフェスティバルの宣伝のために、水戸まちなかフェスティバルや茨苑祭に参加したり、ラジオにもでたりしました。そして、それらの経験を生かして無事にこみっとフェスティバルを開催することができました。私はこのプロジェクトを始めるまで、1度もボランティア活動をしたことがなかったので夏のボランティア活動を通して、ボランティアとはどういったものなのかを知ることができました。2日間の水戸市役所へのインターンシップでは協働はなぜ必要なのか、またこみっとフェスティバルを開催する意義をより深く理解することができました。それにより、絶対にこみっとフェスティバルを成功させようと改めて思いました。10月に行われた水戸まちなかフェスティバルでは宣伝のため催し物を行いました。ここでも、人を呼び込むためにボランティア団体の方の協力のもと、バルーンアートを行いました。バルーンは子供にとっても人気で行列ができてしまうほどでした。私たちは来てくださった子供の親御さんにこみっとフェスティバルのチラシを配ったり、どういったイベントなのかを説明したりしました。しかし、役割分担や休憩時間をきちんと決めていなかったため、一人一人の負担が大きくなってしまいました。その反省から、役割分担をあらかじめ決めておくことの必要性や時間配分の大切さを学びました。そういった反省を茨苑祭で生かすことができました。茨苑祭でもボランティア団体の方の協力の元、1日目にカブラといった外国の積み木を行い、2日目に連鶴といった折り紙をやりました。ここでは、前回の反省を生かし役割とシフトをあらかじめ決めておきました。そうすることで、スムーズに物事を進めることができました。また茨苑祭当日、雨が降るといいうハプニングがありましたが、即席で傘立てを作ったり、持ち歩く看板が濡れないような工夫をするなど柔軟な対応が取ることができました。こういったイベントへの参加経験を通して、まず呼び込むターゲットを誰にするかを絞り、どうすれば人に来てもらえるのかといったノウハウを学ぶことができました。1月には、ラジオに出演しメディアを使っての宣伝も行いました。全てが初めての経験だったので、戸惑うこともたくさんありましたがチームで助け合いながら活動してきました。こういった経験をして行われたこみっとフェスティバル当日、私は2階のイオンホールの方の手伝いをしました。主にチラシを配ったり、会場への誘導や呼び込みを行いました。チラシを配っている時にこんなことがありました。なんと、こみっとフェスティバルを宣伝してたラジオを聴いてくれていた人がいたのです。チラシを渡した際、「あのラジオで言ってた…」と声をかけてくださいました。そういった体験を通じて、これまでの私たちの活動が繋がってきているのだなと身をもって実感しすごく嬉しく思いました。このプロジェクト実習を通して、ただ楽しいというだけではなく、社会人になって必要になってくる実践的なことといった様々なことを学ぶことができました。例えば、メールの書き方や問題を解決する際にどう動けばいいのか、何かを行う際の取り掛かり方、またチームで働くときの協調性等といったことを今の時点で学べたのは良い経験になったのではないかと思います。ただ座って講義を受けるだけでは経験できないことではないでしょうか。最後になりますが、私たちの活動は多くの人の協力のもと成り立ってきました。私たちの活動を支えてくださった皆様に感謝したいです。



2月20日こみっとフェスティバル

おわりに

安藤 有紀

2016年2月20日、こみっとフェスティバルは無事終了しました。1年間共通の目標であったこみっとフェスティバルの成功は、達成されたといえるでしょう。そしてそれを支えたこととして、水戸市役所の方々、市民活動団体の方々との協働があります。こみっとフェスティバルチームという内部での連携だけでなく、外部との連携の難しさを知った一年間でした。

この授業を通して、私たちは多くのことを学び、また、自らの課題を発見しました。特にチームとして活動をするにおいて、いくつかの重要な気付きを得ることができました。

まず、学んだこととして、主に2つのことがあげられます。それは、役割分担の大切さ、情報共有の大切さです。役割分担を明確に行い、個人の領域をはっきりさせることは、その範囲内での個々の積極的な行動を促します。また、計画を立てることは、役割を分担することで、より正確に決定ができます。そのことを、水戸まちなかフェスティバルと茨苑祭を通して私たちは学ぶことができました。水戸まちなかフェスティバルでは、役割分担が曖昧であったために、それぞれ目の前の仕事に集中し、よりよい活動のために動くことができない、また休憩時間などの計画が破綻した、などといった反省点が挙げられ、茨苑祭ではその反省を生かし役割分担を明確にすることにしました。そのことで、自らの役割の中で、よりよい活動方法を臨機応変に模索できたと感じています。さらに、正確な計画の下、余裕を持ち活動を行えた、とも言えるでしょう。以上のことから、役割分担は個々の積極性と計画性をもたらすと学びました。次に、情報の共有の大切さについてです。こちらは、役割分担の明確化と違い、チームとしてまとまることに比重が置かれています。チームとしての力は、個人の力より大きく、それによって大きなことを成すことができます。このことを、授業全体を通して学んできました。イベントだけでなく、ボランティア参加やインターンシップのような個々の活動の中でも情報を共有することで、自ら気付いた学びだけでなく、他のメンバーが気付いたことも知ることができました。

このように、私たちは授業を通し学び、成長してきました。しかし、まだ課題はたくさん残されています。それは、目標と達成方法の明確化、理由の明確化、今後にいかにつなげるかの3点です。まず、今回のプロジェクトにおいて、私たちのチームはこみっとフェスティバル2016の成功という目標が定められていて、それに向かい活動を行なってきました。その目標は抽象的なものであり、どうすれば達成されたことになるのか、また、どのようにすれば達成できるのか、絶えず考え続けることを私達は求められました。しかし、余裕のない計画に見られたように、それは完全ではなかったと感じています。次に、理由の明確化です。自分達の活動がどのような結果をもたらすものなのか、私たちは理解しなければいけません。それによって、必要な行動を意欲的に行うことができるからです。そのことは情報の共有を通し、ある程度行うことができた実感していますが、それぞれの係について、あまり行うことができなかったという反省もできています。最後に、私たちの活動をいかに次につなげていくか、について、詳しい話し合いはまだ行なっていません。こみっとフェスティバルは、今までのイベントから繋がっているものであり、私たちが来年のこみっとフェスティバルのために何ができるか、話し合わねばならないでしょう。

以上、この授業を通し気付いたことをまとめてきましたが、ここで学んだことは、社会に出た後も重視されるものばかりです。また、発見した課題は、プロジェクトをするうえで、必ず求められるものでもあります。どうすればその課題を解決できたのか、今後解決していけるのか、考え続けていくことが大切です。授業内だけで理解や反省を終えてしまわず、更なる自らの発展のために、繋げていきたいと感じた一年間でした。

最後になりますが、私たちの活動はたくさんの方々との協力によりプロジェクトを進めることができました。この一年間お世話になりました先生方を始め水戸市役所の方々、協力してくださったボランティア団体・NPO法人の皆様、本当にありがとうございました。

5:公共交通 活動報告

プロジェクト実習D

リーダー	: 佐藤 詩音	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
副リーダー	: 鈴木 美緒	同上	2年
書記	: 高橋 慶祐	茨城大学人文学部社会科学科	2年
会計	: 袖山 良美	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年

主担当教員	: 井澤耕一	茨城大学人文学部	教授
副担当教員	: 神田大吾	茨城大学人文学部	准教授

「公共交通チーム」活動報告

はじめに

袖山 良美

「皆さんは、普段、交通について考えたことはあるでしょうか？今日は天気が良いから、学校まで歩いて行こうか、とか、雨が降りそうだからバイトはバスで行こう、とか、実はいつも無意識に考えているものなんです。交通は、とても身近なものなんですよ。茨大生が本気で、水戸の交通に取り組んでみませんか？」

昨年四月、水戸市役所交通政策課の須藤様の言葉であった。まさにこの時がきっかけだった。交通機関を愛する者、水戸の交通に不満と期待を持つ者、何か面白い活動を期待する者、様々な想いを胸にして、4人のメンバーが集結した。こうして、今年度の公共交通チームが発足したのだった。

さてそれから、チームの活動の方向性を定めるのが容易ではなかった。水戸の交通整備は、他の都市と比較して、遅れている。市としては、ちょうどこれから、他の地域の成功例や失敗例を参考にしつつ、真剣に取り組んでいく時期なのだという。実情としては、自動車が必須の街であり、高齢者も免許を手放しては暮らしていけない。そのうえ全体的に交通マナーも悪いと言われており、付け加えると、身近なところに危険の多い社会ともいえよう。公共交通機関としては、鉄道・バス・タクシーなどが走っているが、その利用しやすさや充実性には未だ問題があるようだ。こうして、水戸の交通事情は理解することができた。しかし、問題の規模が大きすぎて、解決に向け私たち茨大生には、一体何ができるのだろうか。市民や学生に意見調査をしようか、現状のバスなどの改善を目指そうか、それとも、交通弱者に向けて新たに何か導入しようか、環境を考えてレンタサイクルなどはどうか、はたまた、公共交通の利用促進のためにイベントを起こそうか、などなど色々と思案した。しかし、方向性がなかなか定まらなかったのである。

そんな時、またしても、須藤様が助言してくださったのだった。市民全体にとって有益なことを考えようとしなくても、まずは茨大生の視点に立って自分たちの身近なところの改善に励めば、それが広がっていった、市民にとっても良いことにつながっていくのだ、と。そこで私たちは考え方を改め、自分たちにとっての交通を捉え直し、大学生にとって一番身近な公共交通機関である路線バスに焦点を定めたのだった。こうして、やっと、私たちの活動は始まっていった。

それからは、茨城交通様の多大なるご協力を得て、およそ一年間の活動を経てきた。今となって振り返ってみれば、その時々、4人で役割を分担し、分担しきれず迷惑も掛けたこともあったし、様々生じた問題に巻き込まれ、皆で頭を抱えたこともあった。仲間割れもしたし、意見の相違でチーム解散の危機に瀕したこともあった。それでも、最後には4人で、自分たちなりに、そしてチームとして、精一杯取り組んできたつもりである。そして、周囲の方々には、本当に、大変お世話になってここまでやってこられたと思う。お力添えいただいた皆様には、メンバー一同、心より感謝申し上げたい。

さて、私たちの詳しい活動報告は、次より始まる。結果として、当初の目標のように、水戸の交通にとって、何か有益となれるような活動が達成できたのであろうか。正直なところ、それは、分からない。報告書に目を通してくださる皆様に、判断を委ねたいと思う。しかし、一つ、確実に言えることがある。「交通は、我々にとって、とても身近なものである！」私たちは、活動を通して学ぶことができた。皆様にも、幾分か感じ取って戴けたらと思う。そして、この私たちの活動報告をまたのきっかけとして、ご自身の、そして水戸市の交通に関して少しでも注目して戴けたら、なお、幸いである。

1:活動の目的・目標と概要

私たち公共交通チームは、プロジェクト実習内の授業で、それぞれのグループ紹介時に、水戸市役所交通政策課の須藤文彦様よりお話を戴き、それに共感した人文学部生四人によって発足されました。水戸市は自動車社会が深刻化しており、全国的に比較してみても、一人当たりの自動車保有率はかなり高いとされています。この、「自動車社会の深刻化」が進む水戸市では、これに伴い様々な問題が生じています。まず初めに挙げられる問題が、自動車事故が多いということです。交通マナーの普及が不十分であるがための人口当たりの交通事故発生率の高さということもありますが、バス・電車などの公共交通が発達しておらず、高齢になっても運転免許証を返還できずに、乗り続けなければ生活を維持していくことが難しいという現状もあります。水戸市の抱える問題として次に、公共交通へのなじみのうすさが挙げられます。高い自動車保有率から、どこへ行くにも、移動には自家用自動車の使用が当たり前という環境が出来あがっています。この問題の根底には、公共交通が未発達で上手く機能していないという現状があります。この現状から自動車運転免許は水戸市で生活していくためには必需品となっており、免許がないと外に出ることが億劫、もはや外出が出来ないということがわかります。

これらの、水戸市が抱える様々な問題を受けて、現在の水戸市の公共交通は大変不便であり、自家用自動車なしでは住みにくい状態になるということがわかりました。水戸市役所交通政策課様発案のもと、「公共交通の利用を促進することで、交通弱者を含め誰もが安心・安全で住みやすい街を目指す」ことを私たち公共交通チームの大きな活動目的とし、活動をすることを決めました。

この大きな枠としての活動目的である、「公共交通の利用を促進することで、交通弱者を含め誰もが安心・安全で住みやすい街を目指す」ことを中心に、より細かく、具体的な活動目標を決めました。まず一つ目に、「公共交通を上手に利用して安心・安全な、誰もが住みよい街づくり」を掲げました。水戸市に住む住人全員が自家用自動車の使用をやめて、バス・電車などの公共交通を利用する、というのは絶対に不可能です。もちろん自家用自動車は使用しますが、車の運転が厳しい高齢者や、道路の渋滞状況、車での移動が不便な場所など、公共交通が必要だと思う人がいたり、必要だと思ったときに、当たり前で公共交通が利用できる、そんな街にしたいと考えました。車社会が進む水戸市だからこそ、交通を理由に水戸を選んでもらえるような、公共交通の充実が必要であると考えました。そのために私たちが出来ることは何か、私たちがしなければいけないことは何かと考えたときに、「水戸市民と公共交通を繋ぐパイプとなる」ことが必要なのだと気がつくことができました。誰もが気軽に公共交通を利用できるようにするための手助けをしていくことが、先ほども述べたような、「公共交通の利用を促進することで、交通弱者を含め誰もが安心・安全で住みやすい街を目指す」ことに必要なことだと考え、活動目標としました。

主な活動概要としては、6月に水戸市役所交通政策課の須藤様、大津様と顔合わせを行い、今後の活動の流れ等について話し合いを行いました。7月には茨城交通株式会社様の任田社長、飛田運輸部長、下重様へ構想プレゼンを行い、主に特急バス新設へ向けての提案を発表しました。8月から9月にかけての3~5日間に、公共交通チームのメンバー全員が水戸市役所市長公室交通政策課でのインターンシップに参加しました。事務作業や水戸市交通戦略会議にも参加させて戴き、水戸市の交通問題を肌で感じる事が出来ました。夏季休業中には、茨城交通下重様と直通特急バス実現に向けた話し合いを行いました。公共性の有無やコストなどの課題の浮上により今年度中の実現は出来ませんでした。来年度月上旬のダイヤ改正の運行を決定することが出来ました。10月の水戸まちなかフェスティバルでは、メンバー全員が参加し、いばっぴのビラ配布、ポスター作成・張り出しを行い、いばっぴの告知を行いました。12月には学内いばっぴ販促キャンペーンを行い、茨城交通の社員の方と一緒に更なる認知度・利用者の向上を目指し、茨城大学構内でのいばっぴ販売や告知を行いました。

2: 公共交通チーム活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2015年5月29日 11:30~13:00	C406	チーム構想の今後	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
2	2015年6月10日 13:00~14:00	水戸市役所交通政策課	水戸市役所交通政策課様との 打ち合わせ	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
3	2015年7月6日 16:30~18:00	図書館1階	10日(金)のプレゼン資料作り・打 ち合わせ	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
4	2015年7月10日 12:40~17:00	茨城交通(株)本社	茨城交通様との打ち合わせ	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
5	2015年7月17日 11:45~13:00	C406	特急バスと時刻表について	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
6	2015年9月29日 13:00~19:00	図書館1階	水戸フェス、特急バス、茨苑祭に ついて話し合い	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
7	2015年10月2日 16:20~19:00	A305、図書館2F	中間発表の準備	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
8	2015年10月9日 11:45~13:00	C406	水戸フェス打ち合わせ	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
9	2015年10月19日 13:00~16:00	A305、図書館1F	クレヨンと画用紙の調達	鈴木、袖山
10	2015年10月20日 16:00~18:00	人文A棟印刷室	大判ポスター印刷	鈴木、袖山、佐藤
11	2015年10月23日 17:30~21:00	図書館2階	茨交への訪問、水戸フェス準備	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
12	2015年10月28日 14:30~16:00	PBL倉庫	水戸フェスアンケート集計	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
13	2015年11月13日 13:00~15:00	PBL倉庫、人文講義棟	茨苑祭準備	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
14	2015年12月1日 13:00~15:00	図書館1階	最終報告会について打ちわか せ	高橋、鈴木、袖山、 佐藤
15	2015年12月9日 10:00~15:00	生協前	いばっぴ学内販売会	高橋、鈴木、袖山、 佐藤

3: 会計報告

品名	単価	数量	合計
プリンタ用インク	6,980	1	6,980
画用紙	679	4	2,716
クレヨン	414	5	2,070
		総計	11,766

4:活動トピック

8・9月 水戸市役所市長公室交通政策課にてインターンシップ

各々が5日間程度、始業から終業までお世話になった。市役所での仕事内容だけでなく、一日スーツでいることや、社会人としての立ち居振る舞いなど、大学内では得ることのできない経験ばかりであった。仕事内容としては、主に書類作成、データ整理などの事務作業が多かったが、その内容が交通政策課ならではのものであった。水戸市に走る路線バスの系統図などを見ながら、年間を通してのバスの変遷やどの部分に公共交通機関が足りないのかなど、実際のデータを扱いながら知ることができた。また一部のメンバーは、水戸市交通戦略会議の打ち合わせ及び本会議に出席し、市職員や専門家などと同席し意見を拝聴するという貴重な体験をした。このように、行政の役割の一端に触れることで、自らが水戸に住まう、もしくは関係する者であるとの自覚と、交通という面から水戸の未来を変えられるのだという感動を得た5日間となった。

10月 水戸まちなかフェスティバルへの参加

タウンモビリティ内の茨城交通のスペースを間借りする形で出展した。このとき、12月より利用開始される茨城交通のICカード「いばっぴ」を周知するという目的が定まっていたため、これに特化した活動をメインに据えて行っている。学生だけでなく、水戸まちなかフェスティバルに来場した一般の方を対象にし、自分たちで文言からデザインまでを考えたチラシを配布した。自スペース内にはポスター(図1)を掲示し、立ち止まった方への説明や案内を行った。またICカードを利用したバス乗車体験への参加者の呼び込みなど、茨城交通の手伝いとしても働いていた。また塗り絵(図2)を用意し、子どもたちにバスに親しみを持ってもらうだけでなく、完成したそれらをバス車内に飾ることで子どもたち、ひいては親も一緒にバス利用促進をはかった。これは水戸フェス終了後からバス車内に飾られている。

茨城交通専用 ICカード
いばっぴ

茨城交通の路線バスが
ピッと簡単♪乗り降り楽々♪

12月1日からサービス開始!
回数券・定期券はICカード「いばっぴ」へ!
(回数券:11/30販売終了。ご利用・払戻しは12/25/30まで)
(定期券:12/2月にサービス開始予定)

①いばっぴ利用者割引
＜例＞水戸駅の大入券:330円→297円 **10%割引**

②平日昼間割引 (10時～14時に乗車の場合)
＜例＞水戸駅の大入券:1の297円→268円 **10%割引**
※乗車料上げ

③乗り継ぎ割引
(60分以内に乗車、必ず払いの方向のみ)
※必ずICカードに記録される
乗継の区間をいいます。 **50円割引** (小児、障がい者
30円割引)

※これらは割引サービスの一例となっております 1～3併用で **最大33.5%**

導入前の「いばっぴ」先行体験会開催!
水戸フェスでいち早く体験しよう!

茨城交通ブース
水戸まちなかフェスティバル
10/25(日) 10:00～16:00
於 タウンモビリティ
(茨城百貨店 西側)

スケジュール(予定)
10:00～10:30 らくがきバス(先着順)
オリジナルぬり絵大会
13:00～ いばっぴを使った
バスの乗り方教室

問い合わせ:茨城交通株式会社 TEL. 029-251-2315 茨城交通&茨城大学プロジェクト実習公共交通チーム

図1:いばっぴポスター



図2:塗り絵

11月 茨苑祭での展示

茨苑祭で、これまでの活動報告を目的とした展示を行った。前述のインターンシップや水戸まちなかフェスティバルでの実績を、グラフなどを使って来場者に伝わるような展示を心がけた。他 PBL チームと同じ部屋を使っていたため、公共交通チームに直接の興味関心がないような方の目にも留まったのではないかと考えられる。

12月 「いばっぴ」学内販促キャンペーン

水戸まちなかフェスティバルで行った「いばっぴ」の告知が一般の方を対象にしていたのとは変わって、このイベントは茨大生を対象として行われた。お昼をまたいで 4 時間程度、茨城交通の皆様と共に学生への呼びかけ、チラシの配布を行った。学内で販売も同時に行うことにより、営業所に足を運ぶのが億劫だと思っている層にもアピールできたのではないかと考えている。具体的には、新規 42 件、計 84,000 円を売り上げとして換算することができた。当日は購入まではしなかったが、興味を持って後日と考えた方もいると考えれば、本キャンペーンは成功として締めくくることができたのではないだろうか。

5: 活動報告会 PPT

交通と向き合って
公共交通チーム最終報告
リーダー: 佐藤 詩音 副リーダー: 鈴木 美緒
会計: 柏山 良美 書記: 高橋 慶祐

目次

- ▶ 活動理念と目的
- ▶ 活動報告
 - インターンシップ (水戸市役所交通政策課)
 - 水戸まちなかフェスティバル
 - 茨苑祭
 - 直通特急バス
- ▶ 一年を振り返って

活動理念

- 水戸市公共交通基本計画
→ 学生の視点でできることはないか
- 誰もが住みよい街づくり
→ 公共交通を上手に利用して安心・安全な街
- 水戸市民と公共交通を繋ぐパイプとなる
→ 誰もが気軽に公共交通を利用できるようにするためのお手伝い

活動目的

水戸市の現状

- ✓ 自動車保有率が高く、事故が多い
→ 交通マナーの悪さ、車社会の加速化
- ✓ 自家用車がないと、外出しにくい
→ 公共交通の不便さ、馴染みの薄さ、交通弱者

現在の公共交通は不便であり、
マイカーなしでは住みにくい状態

↓

水戸市役所交通政策課様発案の下

**「いばっぴ」と「特急バス」に
焦点を当てて
公共交通を盛り上げる**

活動内容

- 6月 水戸市役所交通政策課様との顔合わせ
須藤様、大津様
- 7月 茨城交通株式会社様へ構想プレゼン
茨城交通(株) 任田社長、飛田運輸部長、下重様
- 8-9月 水戸市役所市長公室交通政策課でインターンシップ
- 10月 水戸フェス
- 11月 茨苑祭
- 12月 「いばっぴ」学内販促キャンペーン

直通特急バス

茨大
正門前

沿線の学生の集中乗車によるバス車内の混雑
到着時間が不安定 などの従来の問題点を解消！

ノンストップで茨大正門前から水戸駅へと向かいます！

水戸駅

来年度初旬に運行予定！！

15

一年を振り返って

> 交通に関して

- ・水戸市の交通の現状を知るほどに、将来どのように変わっていくのか、案外楽しくなってきた
- ・路線バスでのICカード導入はその第一歩
- ・「交通は身近なもの、決して他人事ではない」との言葉を実感した
- ・交通を変えていくためには、私達ひとり一人の力が必要

> PBL全体を通して

- ・目の前のことだけでなく、数日後、数か月後のことを考えて計画を立てていくことが大事
- ・学外の方との交流を通して、社会人としてのマナーを学んだ
- ・学内外の連携のため、時間調整などの面で困難を経験したことで、どう対応するかを学んだ
- ・メンバーとの役割分担と情報交換の重要性を実感した

16

謝辞

- ・水戸市役所市長公室交通政策課
須藤様、大嶋様、小林様、村石様、大津様
- ・茨城交通株式会社
任田社長、飛田様、下重様、社員の皆様
- ・茨城大学
鈴木先生、神田先生、井澤先生
教職員の皆様

本活動をするにあたり、多くの方にお世話になりました。ご指導、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。本当に有難うございました。

17

ご清聴ありがとうございました

18

学内いばっぴ販売キャンペーン



販売会の様子

一年という糧

14L1076Y 佐藤 詩音

交通とは、目的地に行くための手段に他ならない。多くの人は目的地のほうを重要視するだろうし、もちろん私もその一人であった。常日頃から公共交通を利用して来たのは、自家用車を持っていないからであり、率先して利用を心がけていたというわけでもない。そんな私は公共交通チームとして活動するようになったのは、今まで気にも留めていなかった交通で未来を考えると知ったからだった。交通は確かに手段だが、逆に取れば、交通がなければ目的地に行くことは叶わない。私達が意識していないだけで、交通がなければ生活は回らないのである。この一年を通して、交通は誰からも切り離せないものであることを痛感した。その中でも特に公共交通は、移動したいという人々の強い気持ちに応えたものに他ならない。生きる上で避けることができない移動と、その選択肢として公共交通を挙げたとき、公共交通という手段がどれだけの意義を持つのか、自らに問いかけながらの活動であった。

また、活動するにあたって、自らの立場とその立場でできることの違いに悩まされることもしばしばであった。私は水戸市に住む一人の人間であると同時に、このプロジェクトにあたっては学生である。この二つの立場にしながら、公共交通と利用者をどうすれば結び付けられるのかということを見ると、どうしても理想ばかりを追ってはいられない。利用者の中でも特に対象を学生に絞ったのは、自らの立場上、学生の意見が最も想定できるからである。また、学生のうちは公共交通を利用していても、社会人になったときに離れたのでは意味がない。そういった意味でも、大学生と公共交通を繋ぐことには意味があった。まず自らの経験を基に周囲の意見を集約し、チーム全員で絞り出したのが「特急バス」というプロジェクトだった。諦めずに活動が続けられたのは、身も蓋もなく、それが自分たちのため、茨城大学生のために、という思いだったからである。始めに述べた通り、多くの人にとって交通はただの手段である。さらに公共交通を使ってはいても、その理由を考えたことがない人がほとんどだ。公共交通という手段を意識して選んでもらうためには、それがいかに身近なものであるかをアピールする必要があった。毎日利用している公共交通がより使いやすくなったらどうだろう。仕方なく使うのではなく、自ら選んで公共交通を利用してはもらえないだろうか。そう考えながら活動した結果が、今でなくとも、一年後、二年後、私達が社会人になる頃に繋がるようなものであればいいと願う。

また、一年間の活動を有意義なものとして自らの糧にできたのも、周囲の協力あってこそであった。たったの四人のチームでありながら、意見の衝突を繰り返し、やりたいこととできることの間で折れそうになりながらもやり遂げた実感を持つことができたのは、自分たちだけの力ではない。そしてまた、崩れそうになりながら持ちこたえることができたのも、四人だったからである。とことん話し合い、自分の意見だけでなく全員の意見をチームの総意としてまとめる過程は楽なものではなかったが、それゆえに様々な価値観の中で活動していく方法を学ぶことができた。自らの成長とするためにこの授業に参加した私にとっては、積み重ねた日々の話し合いこそが、自らの経験値になったと信じている。公共交通を通して人と人との繋がりを得た経験が、これから学生という立場を脱し、社会の中の個人となって生きていくときも役立つように、自らの糧としていつまでも残しておきたい。チームを組み、自分たちで目標を定め、成功に向けて周囲を巻き込み、実際に行動に移す。その過程を率先して体験したことで、一年前より成長した自分が確かに存在している。今年度のプロジェクト実習は終わるが、それを腐らせずに、これからの生活でも生かしていくことこそがこの一年間で私達に携わってくれた方々へのお返しになると信じて、これからの人生を見据えていきたい。

一年間の総括

14L1095N 袖山 良美

2年次になって選択できるようになった、人文学部主催の実践型授業「プロジェクト実習」普段から対外的な活動に興味を持っていた私は、普段の活動との兼ね合いに一抹の不安は持っていたが、面白い機会だと思い受講を決めた。同じような意識を持って活動している学生や、社会で積極的に活動している方々との出会いを期待していたのだ。そして活動は、公共交通チームを希望した。プロジェクトを提案して下さった水戸市役所の須藤さんの熱い思いに魅了されたからであった。

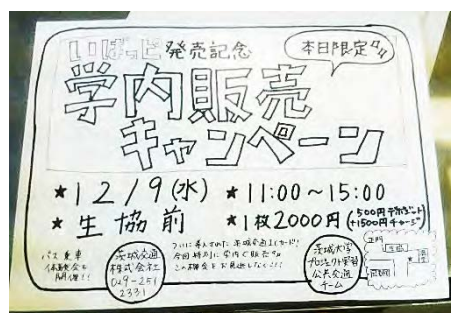
振り返ってみれば、普段から忙しい4人はなかなか集まれず、思うように活動できず、本当に様々な困難に出遭った1年弱だったとしみじみ感じる。夏休みのインターンシップに始まり、10月の水戸フェスに、茨苑祭に、茨交のICカードの学内販売会に、と、色々とイベントに参加させていただいた。活動の分担としては、毎回のミーティングの記録（提出しない形式のもの）や、イベントのポスターやチラシ作成を担うことが多かった。また、展示物装飾の作成なども行った。（図①～④）



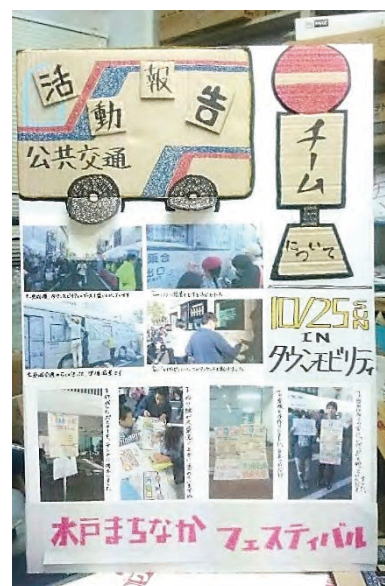
図① 水戸フェスでの告知用ポスター・配布用チラシのデザイン



図② 水戸フェスで使用した塗り絵



図③ 学内いばっぴ販売会の配布用チラシ



図④ 最終報告会の掲示物（メンバーと作成）

このようにしてみると、やはり自分はこのようなチラシやポスターを作成するのが好きなのだと思えてきた。自分の向いていること、向いていないことを、一年間の様々な経験の中で整理していったのは、自分の進路決定にとっていい機会となった。

当初の須藤さんの、大きくて面白いことを、本気で、楽しく、取り組んでみよう、という言葉と期待に、応えられるほどのことができたと思えて自信を持って言えないのが正直情けない。しかし、やはり座学では学べないとても貴重な経験ができて、良かったと感じている。この一年間をこれからの活動の糧にしていきたい。

プロジェクト実習で得た自信

14L2127N 鈴木 美緒

私がこのプロジェクト実習の授業を履修しようと思ったきっかけは、自分のなかで、成長を実感したい、何か変わりたいと思ったからです。大学に入学して一年が経ち、これまでなんとなく過ごしてきてしまったと感じていました。このような思いを抱きながらも、自分には何ができるのか、何がしたいのかが分からず、残りの大学生生活や今後の就職活動などに対して、漠然とした不安を感じていました。そんな時に見つけたのが、このプロジェクト実習の授業でした。はじめは聞くだけのつもりで授業ガイダンスに出席しましたが、説明を聞いていくにつれて、この授業を受けてみたいという想いが強



水戸まちなかフェスティバルにて（らくがきバス）

くなりました。通常の授業が半年間のみの開講であるのに対し、このプロジェクト実習の授業は一年間を通しての活動であるため、同じメンバーで一つのことに携わることが出来ます。また座学中心の授業とは異なり、自分たちでテーマを決め、それに向かって情報収集をしたり、実際に現地へ赴いたり、関係者の話を聞いたり、イベントに参加したりと、とてもアクティブに活動します。また一緒に活動に参加するメンバーも学部や学科、コース、更には学校の異なる、様々な背景を持った学生が集まります。今までに私が受けてきた授業の形態とは大きく異なりますが、この授業を最後まできちんとやりきることが出来れば、何か得られるものがあるのではないかと考えました。

実際にこのプロジェクト実習の授業を履修する事を決め、水戸市役所交通政策課の須藤文彦様よりお話を聞き、その考えに共感して公共交通チームの一員として活動していくことを決めました。自動車社会の深刻化するこの水戸市において、公共交通は未発達で上手く活用されておらず、マイカーなしではとても住みにくいという現状がありました。また自動車保有率が全国的に比較してみてもかなり高く、それに伴い、一人当たりの自動車事故発生率も高くなっていました。このような事態を受けて、誰もが公共交通を利用して安心して安全な街づくりを目指すことを目標とし、活動することを決めました。実際に活動するにあたって、茨城大学の教職員の方々はもちろんですが、茨城交通株式会社の社長を初めとした社員の方々、水戸市役所交通政策課の職員の方など、外部の方にもたくさん協力して戴きました。今までこのように外部の方とお話をしたり、メールや電話でやり取りをしたり、話し合いの場を持ったりした経験が無く、自分の無知さに気がつき落ち込んだこともありました。しかしこのようにたくさんの失敗を通して、社会人としてのマナーを学ぶことが出来ました。また今まで私はずっと、人前に出て自分の意見を相手に分かりやすいように、伝わりやすいように話すことに、苦手意識を感じていました。しかし活動内では、茨城交通の社員の方々の前で私たちの考える構想を発表したり、中間・最終報告で自分たちのグループについてプレゼンをする機会が多くありました。初めのうちは、恥ずかしいという気持ちが強かったのですが、回数を重ね、失敗したり、指摘してもらったりしていく中で少しずつではありましたが、ただ話すのではなく、どのようにしたら相手にうまく伝えられるのか、どんな話し方をすれば説得力があるのかなど、自分自身で工夫していくことが出来るようになりました。

正直、このプロジェクト実習はつらいことも多く、諦めたり、投げ出しそうになったりしたこともありましたが、担当教員の先生の手助けも借りて何とか無事、一年を終えることが出来ました。今振り返ってみると、あそこはもっとこうしたら良かったのではないかと、こんな工夫が出来たのではないかとといった後悔はありますが、最後までやり切れたことで自身を持つことが出来ました。まだまだ学ぶべきことは多いですが、このプロジェクト実習を通して学んだこと、得た自信は今後きっと生きてくるとおもいます。

プロジェクト実習に参加して

14L2141L 高橋 慶祐

私がこのプロジェクト実習で学んだことは数多くある。まず、公共交通の活性化についての考え方だ。私たちが実施した活動は主に特急バス、ぬりえのバス車内での掲示、いばっぴ促進であったが、この中の特急バスは私が強く推し進めたものであり、ぬりえは他のメンバーが提案して進めたものだった。ここで私が感じたのは、私がバスのダイヤなどから考えたのに対して他のメンバーは周囲の簡単どころから考えており、視点が異なるのではないかということだ。もちろん、私だって周りの人に公共交通への関心を持ってもらうことを考えることもあるし、他のメンバーだってバスの本数などダイヤに対して意見があったりする。それでも、重点を置くところに違いがあったのは事実だ。この違いは、実際の公共交通の改革における行政、事業者、住民それぞれの視点の違いに通ずる部分があるものと思う。今後、私が公共交通を学ぼうえで参考に来るとしても良い経験になった。

次に挙げられるのは地方の公共交通についてである。今回参加するのを機に、私は水戸市以外の公共交通の現状がどうなっているのか調べた。すると、多くの地域で公共交通の衰退が起きていることや、新潟のように新しい交通システムを導入してまちづくりに取り組んでいる都市があることなどが理解することができた。また、水戸市においても公共交通の改革に取り組んでいることを初めて知ることができた。このような公共交通の改革について学ぼううちにキーワードとしてコンパクトシティという言葉を知ることができた。全国的に取り組みが進んでいるコンパクトシティを知ることでもまちづくりについての考えを深めることもできた。この重要な言葉を今まで知らなかったのは自分の勉強がまだ不十分であるということを示しているともいえる。今後は地方の公共交通改革やコンパクトシティへの取り組みがどのように進んでいくのかを注視して、卒論などに生かせるようにしたいと思う。

また、市役所インターンシップも学ぼうえで良い経験になった。普段の生活では市役所での事務など仕事内容について知ることは難しい。今回、初めて市役所の方々の仕事を知ることができた。特に議事録作成は私にとって途方もない作業のように思え、このような業務を日々こなしている市役所の方々は大変なのだと思った。巷で公務員削減などの声がある一方で、現場で地道に働いている人々がいるのだと気づけた。

さらに、いばっぴについても学んだことがあった。私は割引サービスのために Suica や PASMO が使えないのは仕方ないと思っていたが、Suica や PASMO が使えないことへの疑問の声がよくあったことから使えるようにしなければ意味がなく、便利ではないのかもしれないと思えた。

今回学べたことのなかで特に重要だと思ったのは、グループで活動する際のふるまいの大切さだ。私は一連の活動で自分の言動などで注意すべきところがあるのを知った。何でも思ったことを口にしてしまうのは幼稚であるが、私はそれをしてしまう場面があった。他のメンバーは心で押し留めていたかもしれない。そのようなところで出来てなかったのはよくなかったと思う。また、ネガティブな発言も意図しないところで嫌な思いをさせていたかもしれないと感じた。これを機に今後はより気をつけようと思った。さらに、自分の仕事量についても問題があったのではと思ったところもある。私は特急バスにおける意見の提示などをした一方で、受けていた講義の量やバイト、家との距離などの都合により仕事量が少なくなってしまった面もあり、飾り物の作業など他のメンバーに任せてしまった部分も多くあった。これは反省すべき点だと思っている。これらは就職後など、これからの生活で第一に重要な点であるため、改善していかなければならないと思った。

最後に、メンバーへの不信感が生まれてしまったなど残念な点もあったが、これらのように多くの経験をし、学べたことで今回のプロジェクト実習はとても良いものだったと思う。本望を言えば、水戸市役所交通政策課の方々と公共交通について深く語り、私以外のメンバーが参加することができた水戸市交通戦略会議を直接見ることが出来なかったのがとても残念だった。これからゼミで公共交通を学んでいくうえで、今回学んだことを生かしていきたいと思う。

公共交通は、私達にとってもっとも身近な移動手段であるべきである。

公共交通チームとして初めての話し合いを終えたときに考えたのは、そんなことであった。公共というからには、誰もが利用することができるということが大前提である。しかし、利用できることと、利用しやすいことは近いようで、まったく別のものだということに、私達はまず気付かされたのだった。水戸市役所交通政策課の須藤様の「人間がまったく移動しないということはない。どんな人間にも当てはまる移動というものに焦点を当てたとき、水戸の未来はどうなっていくのだろうか」という問い掛けを、私達はずっと考えてきた。公共交通は、本当に便利なものなのだろうか。それならば、どうして公共交通機関を利用する人は限られているのだろうか。自家用車と比べて、どんなところが劣って、どんな部分が勝っているのだろうか。公共交通チームになったからこそ、何も知らないまま公共交通を推進するのではなく、それらを見極める必要があった。そして一年かけて知識を蓄え、活動してきた今でも、考えるのは冒頭と同じ思いである。身近であるためには、公共交通とそれを利用する人間が共に歩みよらなければならない。利用者の側にも、公共交通を身近な移動手段として選択肢に入れてもらわなければならないのだ。私達は自らが学生であるという立場を生かし、一年をかけて大学生と公共交通を結びつけるために活動してきたが、これが学外に広がり、本来の意味での公共交通となることを、切に願っている。

また、四人という少ない人数で最後までやり遂げることができたのは、周囲の協力あってこそであった。学生だけでできることが限られている中で、やりたいことや理想ばかりを掲げる私達に、その理想を形にするにはどういった道筋があるのかを示し、共に活動してくださった皆様にここで心からの感謝を申し上げたい。

水戸市役所市長公室交通政策課の須藤様、大嶋様、小林様、村石様、大津様には、私達の活動を温かく見守っていただき、親身になってご助言、ご指導していただきました。また、茨城交通株式会社の任田社長、飛田様、下重様、社員の皆様には、数々のイベントの企画段階からご助力いただき、今年度の活動を次年度に繋げるための方法を真摯に向き合って考えていただきました。そして最後に、茨城大学の鈴木先生、神田先生、井澤先生、教職員の皆様には、日々ご迷惑をお掛けしながらも、学生という身分の中で最大限の力が発揮できるよう、常に見守っていただきました。多くの方のお力添えのおかげで、本活動を有意義なものとして自らの糧とすることができました。皆様、本当に有難うございました。

6: IU+IC×NTT コムプロジェクト

活動報告

プロジェクト実習D

リーダー	: 森 遥香	茨城大学人文学部社会科学科	2年
副リーダー	: 磯貝 麻菜	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	3年
書記	: 猪狩 彩夏	同上	3年
会計	: 坂寄 和哉	茨城大学理学部学際理学科	2年
メンバー	: 鳥羽田瑠奈	茨城キリスト教大学文学部現代英語学科	1年
メンバー	: 征矢 芽久	茨城キリスト教大学看護学部看護学科	1年

主担当教員 : 井澤耕一 茨城大学人文学部 教授
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授
顧問教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授

2015 年度
茨城大学人文学部 プロジェクト実習D
「IU+IC×NTT コムプロジェクト」 活動報告

はじめに

森 遥香

私たちプロジェクト実習Dのチームは、IU+IC×NTT コムプロジェクトとしてコミュニケーション・リスクの啓発、削減を達成目標として1年間活動してきた。このチームは、PBL型（課題解決型）インターンシップということで、NTTコミュニケーションズ株式会社様から「コミュニケーション・リスクを無くそうプロジェクト」という課題をいただいた。コミュニケーション・リスクの例として、「就活の面談で思ったことをSNSにアップした」、「研究室で見つけたソフトウェアを自分のパソコンにインストールした」など、公開範囲を意識していなかったり、ソフトウェアのライセンス違反に当たる可能性があるなどが挙げられる。そこで私たちはチーム内でコミュニケーション・リスクについてそれぞれが考え、議論した結果、「SNSの危険性について調査し、まとめ、それを学生などに知ってもらうことで、コミュニケーション・リスクをなくしていく」ということを課題として活動していくことにした。

1:活動の目的・目標と概要

(1)活動目的・目標

活動の目的として、意思疎通の齟齬を表す「コミュニケーション・リスク」を減少させることを掲げる。そのために、大学生の SNS 利用実態を調査し、大学生が陥りやすいコミュニケーション・リスクを解明する。調査データから明らかになった結果を、リーフレットや Web ページに反映し、コミュニケーション・リスク減少の啓発運動の一助とする。

不特定多数に対して活動を展開するが、そのすべてに対して、啓発の効用が表れることは目標としない。本活動においては、その中の誰か一人でも行動を変えさせることができれば、目標の達成とみなす。

(2)活動概要

フォーマルな場面でもカジュアルな場面でも、勘違いや先走りや相手とうまくコミュニケーションが取れない時はないだろうか。私達はそういった意思疎通の齟齬を「コミュニケーション・リスク」と称し、日常の中に潜むコミュニケーション・リスクを調査した。

私達が調査の対象としたものは、「SNS に潜むコミュニケーション・リスク」である。普段どのようなツールを使ってコミュニケーションをはかるか街頭インタビューを行ったところ、SNS が圧倒的な人気を誇った。そのインタビュー結果を受けて、私達は自身と同じ大学生における SNS のコミュニケーション・リスクを調査することにした。スマートフォンの普及により急速にシェアを拡大した LINE や、大学生の間で根強い人気を持つ Twitter という二つの軸から、大学生 95 名に対してアンケート調査を実施、結果を受けてコミュニケーション・リスクについての考察をはかった。

続いて私達はその結果や考察を用いて、コミュニケーション・リスクの実態を訴えるリーフレット（図 1・2）を作成、学内で学生に対して配布した。作成したリーフレットには、あらかじめ作成していたチームの活動をまとめたホームページへリンクする QR コードを掲載した（図 2）。リーフレットの内容から興味を持った学生をどれくらいホームページへ誘導できるか、即ち、間接的にコミュニケーション・リスクに対する問題意識を学生に抱かせられたかを明らかにするためである。結果として、学生の誘導には失敗、原因は QR コードの掲載場所が悪かったこと、コンテンツに意外性が少なかったことが考えられる。これらの課題は、次回の啓発活動に役立てていきたい。

活動の達成度としては、アンケート結果に対する考察がチーム内で完全に共有できていないこと、チームホームページのコンテンツが不十分であることから、高いとはいえない。しかし、アンケート調査の実施や、リーフレットの配布によって、コミュニケーション・リスクの存在を学内で広める実践はできたと考える。

2:活動記録

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2015年6月5日 9:00~10:20	人文学部棟 C406	役員選出・プランの粗筋・チーム名について	森、磯貝、猪狩
2	2015年6月9日 13:00~14:30	茨城大学図書館ミーティンググループ	構想発表について	森、磯貝、猪狩、坂寄
3	2015年6月10日 13:00~14:30	茨城大学大学教育センター副センター長室	吉川様、川口様との意識合わせ	森、磯貝、猪狩、坂寄
4	2015年6月16日 14:40~16:00	茨城大学図書館ミーティンググループ	インターンシップ日程・要望などについて	森、磯貝、猪狩、坂寄
5	2015年6月23日 17:00~18:00	水戸駅ペDESTリアンデッキ	街頭インタビュー（ヒアリング）の実施（中座）	磯貝、猪狩、坂寄
6	2015年6月25日 16:30~18:00	茨城大学図書館ミーティンググループ	ヒアリングの許可に関して	森、磯貝、猪狩、坂寄

7	2015年7月2日 15:30～16:30	茨城キリスト教大学スチュー デントラウンジ	構想発表用 ppt の構成と役割 の振り分け	森、猪狩、坂寄、征矢、鳥羽 田
8	2015年7月7日 17:00～19:00	水戸駅ペDESTリアンデッキ	街頭インタビュー(ヒアリング) の実施	森、磯貝、猪狩、坂寄
9	2015年7月8日 17:00～20:00	茨城キリスト教大学サテライト IC・水戸駅ペDESTリアン デッキ	NTT コミュニケーションズ様に 向けた構想発表・ 街頭インタビューの(ヒアリン グ)実施	森、磯貝、猪狩、坂寄、征 矢、鳥羽田
10	2015年7月14日 14:40～16:10	茨城大学図書館ミーティン グルーム	アンケートの構想	森、猪狩
11	2015年7月16日 16:00～17:20	茨城キリスト教大学スチュー デントラウンジ	アンケート構想への意見	猪狩、征矢、鳥羽田
12	2015年7月27日 13:00～14:30	茨城大学図書館ミーティン グルーム	アンケートの構想・作成	磯貝、猪狩、坂寄
13	2015年7月28日 14:30～16:10	茨城大学図書館ミーティン グルーム	アンケートの作成	森、磯貝、猪狩、坂寄
14	2015年8月25日 13:00～16:00	茨城キリスト教大学サテライト IC	アンケートの集計・ インターンシップの確認	森、磯貝、猪狩、坂寄、征 矢、鳥羽田
15	2015年8月27日 13:00～17:00	グランパークタワー	インターンシップ	森、磯貝、猪狩、坂寄、征 矢、鳥羽田
16	2015年8月28日 9:00～17:00	グランパークタワー	インターンシップ	森、磯貝、猪狩、坂寄、征 矢、鳥羽田
17	2015年10月22日 10:45～12:00	茨城大学図書館ライブラリ ーカフェ	川口様との打ち合わせ	磯貝、猪狩
18	2015年10月29日 16:20～17:50	茨城大学図書館ライブラリ ーカフェ	吉川様、川口様との打ち合わ せ	森、磯貝、猪狩
19	2015年11月24日 16:10～17:50	茨城大学図書館ミーティン グルーム	パンフレットの配布とサイトの 公開について	森、磯貝、猪狩
20	2015年12月2日 13:30～15:30	茨城大学茨苑会館談話室	活動報告会とインターンシッ プフォーラムについて	森、磯貝、猪狩
21	2015年12月10日 12:10～12:25	茨城大学生協前	パンフレットの配布	磯貝、猪狩、坂寄
22	2015年12月14日 12:10～12:25	茨城大学生協前	パンフレットの配布	磯貝、猪狩
23	2015年12月22日 16:20～17:50	茨城大学図書館ミーティン グルーム	活動報告会反省・サイトペー ジと配布物について	磯貝、猪狩、坂寄
24	2015年12月24日 12:10～12:25	茨城大学生協前	パンフレットの配布	猪狩
25	2015年12月25日 12:10～12:25	茨城大学生協前	パンフレットの配布	猪狩
26	2016年2月9日 13:00～14:30	茨城大学図書館ミーティン グルーム	全体授業報告・活動レポート に関して	森、磯貝、猪狩、坂寄

3: 会計報告

品名	単価	数量	合計
アンケート調査を行うための証紙代	2,300	1	2,300
パンフレット作成費用	8,887	1	8,887
		総計	11,187

4: 活動トピック

(1) リーフレット作成

アンケート結果を踏まえ、コミュニケーション・リスクの実態を訴えるリーフレットを作成し、学内で学生に対して配布した(図1・2)。受け取りやすい大きさと形態を考え、A4判両面にカラー印刷し、これを二つ折りにして小冊子の体裁をとった。



図1: リーフレット(外観 1/4 縮小)

図2: リーフレット(展開時 上・表面 下・裏面 1/2 縮小)



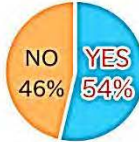
茨城大学の学生にTwitterの利用状況を調査！ アンケート結果から明らかになったこととは…！？

Q.他人の顔を含む写真を

ツイートしたことがありますか？

(人文学部 男女80名回答：2015年7月調べ)

→意外にも半数の学生が、他人の顔を含む写真をツイートしたことがあると回答。



Q.他人の顔を含む写真をツイートする際、
個人情報に配慮しましたか？

(人文学部 男女53名回答：2015年7月調べ)

→7割の学生が個人情報に配慮していると回答！



さらに!! 男女比で比べると
興味深い結果が!

	はい(男)	いいえ(男)	はい(女)	いいえ(女)
Q.他人の顔を含む写真をツイートしたことがあるか。	53.5%	46.5%	53.8%	46.2%
Q.その際、個人情報には配慮したか。	52.9%	47.1%	78.1%	21.9%

男性より女性のほうが
個人情報に配慮する傾向があるという結果に！

Twitter上の画像トラブルにはこんな実例も…

ツイッターにうそ 投稿者の情報開示命令

(朝日新聞デジタル/10月14日 15時36分)

ツイッター上に幼い娘の写真が無断で転用されたうえ、安全保障関連法が成立する前の反対デモに参加して死亡したなどその書き込みをされたとして、新潟市の両親が東京地方裁判所に投稿者の情報の開示を求め、認められた。申し立てをした両親が、14日に開いた会見によると、ことし7月、ツイッター上に生まれたばかりの娘の写真が無断で転用されたうえ、安全保障関連法が成立する前の反対デモに無理やり連れて行かれ、熱中症で死亡したなどその書き込みをされたとのこと。

去年8月、別のデモに参加した時の投稿写真が転用され、娘の名前は架空のものだったが、ツイートが拡散したため、両親はことし8月、肖像権の侵害に当たるとして、東京地方裁判所に投稿者の情報の開示を求める仮処分申請をした。その結果、先月、運営するツイッター社に情報の開示を命じる決定が出され、会社側も応じた。弁護士によると、ネット上でなりすましの被害が相次ぐなか、顔写真の無断転用で裁判所が投稿者の情報の開示を命じるのは異例とのこと。開示されたのはネット上の住所に当たるIPアドレスで、弁護士は今後、投稿者の特定を進めたいとしています。両親は、「娘を守る親としてきせんとした行動を取ることが必要だと考えた」と話している。(※一部、記事を要約)

マンガで考えよう！身近な肖像権



こんなとき、あなたはどうしますか？

- A. 2人に許可を得てから投稿 B. 何も許可を得ずに投稿

(2)NTT コミュニケーションズ様のオフィスにてインターンシップ

①概要

2015年8月27日、28日の2日間、東京・田町のグランパークタワー内のNTT コミュニケーションズ様のオフィスにて、2日間のインターンシップを行った。2日間の活動は、以下の日程表の通りに進められた。

時間割	内容
13:00	グランパークタワー1Fロビーに集合
13:10-13:20	オリエンテーション
13:20-14:05	「情報通信産業、NTTコミュニケーションズ、アプリケーション&コンテンツサービス部について」
14:05-14:50	「通信の仕組み～電話、インターネット、データ通信、携帯電話、海底ケーブル～」
14:50-15:00	休憩
15:00-15:15	コミュニケーション・ツールのご紹介
15:15-16:00	「Webマーケティングの概要」—一般的なWeb関連の知識、検定公式サイトでの取り組み
16:00-16:10	休憩
16:10-16:50	意見交換、「Webサイト制作実習」に向けたプレスト
16:50-17:00	撤収・解散

8月28日

時間割	内容
9:00-11:30	Webサイト制作検討 学生主体-コンテンツ内容検討
11:30-13:00	昼食 会食) ※GPビル近辺
13:00-14:30	Web構築打合せ (MA様・学生・Com) -MA様での事例紹介、最近のWebマーケティング事情 -Webサイト制作検討に基づくイメージ提示・意見交換
14:30-15:30	Webサイト制作検討
15:30-16:50	意見交換
16:50-17:00	撤収解散

2日間のインターンシップだったが、内容が密に詰まっており、貴重な経験と知識を得ることが出来た。特にWebマーケティングの知識は、今後の活動に活かしていきたいと強く感じる内容だった(図3~5)。



図3:川口様のレクチャー



図4:「Webサイト制作実習」に向けたプレスト



図5:最終日にオフィス前にてメンバー全員で撮影

②インターンシップ・レポート

正規履修生4名は、インターンシップ終了後にレポートの作成が義務づけられていた。課程外参加の2名には提出義務はなかったが、1名が提出した。以下に全文を収載する。

貴重な体験たち

NTT コミュニケーションズ株式会社
2015年8月27日～28日
猪狩彩夏（3年）



1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がこのプロジェクト実習 D への参加を決めた大きな理由は、派遣先の企業に実際に出向く、インターンシップを体験したかったからである。派遣先の企業の方とお会いし、会社にお邪魔させてもらうという体験は、社会に出るに当たって必要なスキルや自分に足りないものを自覚できるきっかけとなるのではないかと考えた。また、1つのチームで1年を通して長期的に行われるプロジェクトということで、チームメンバーと協力して1つの目標を目指すという点も魅力的だった。

2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、「コミュニケーション・リスク」をなくすことを最終的な目的として、行動している。この場合のコミュニケーション・リスクとは、他者と意思疎通をする上で生じる齟齬のことを指す。私たちは、特に、近年何かと話題に上がる SNS 上のコミュニケーション・リスクについて調査をし、人々に啓発していくことを考えている。そこで、街頭でのヒアリング調査や、大学生に向けたアンケート調査で得た結果をもとにした、Web サイトを作成する予定である。私はチームの書記を務め、話し合いの際の議事録を作成する。

3. 派遣先の概要

1999年、NTT コミュニケーションズ株式会社は、日本電信電話株式会社の分社化にともない、長距離・国際伝通信事業を展開する会社として設立された。同社は、企業または個人消費者向けに、主に国内長距離通信、国際通信、IP 電話サービス、インターネット・サービス・プロバイダ、国際電気通信等の各種サービスを提供している。

4. 派遣先での活動内容

1 日目は、前半の時間で、NTT コミュニケーションズの歴史や事業内容についての説明を受けた。通信事業の説明では、海底ケーブルについて特に詳しくお話して戴き、大変興味深かった。後半では Web マーケティングについての説明を受けた上で、Web サイト制作に向けてブレインストーミングを行った。Web マーケティングに関する考え方がとても新鮮で、Web サイト制作に向け、充実した時間を過ごすことができた。

2 日目は、Web サイト制作に向けたブレインストーミングを中心に行った。外部の方との構築の打ち合わせも経験することができ、私たちの Web サイトの案を検討して戴いた。

5. エピソード

1 日目は全体を通して説明を受ける場面が多かったが、特に、事前にリクエストをさせていただいた、海底ケーブルに関するお話が興味深かった。ケーブルの強度が重要であるのは勿論のこと、海溝を横切って設置する場合もあるため、膨大な長さのケーブルが必要とのことだった。当然のように享受している通信網が、様々な労力の上で成り立っていることを実感した。

2 日目の Web サイト制作に向けたブレインストーミングでは、1 日目に入ってきた情報量が多かったせ

いか、話し合いの着地点を見失う場面もあった。それでも、Web マーケティングの戦略を利用して Web サイトの質を高めたいと言うことで、チームメンバーの意見が一致した。インターンシップで得た知識を、これまで進めてきたことに取り込むことができたことは大きな成果だった。

また、その日は近くのレストランにて会食したのだが、その際に、担当して戴いた川口さんからお聞きした大学時代・就職に関してのお話が印象深かった。このようなお話を伺うことができるということもプロジェクト実習の醍醐味の1つだと感じた。

6. わかったこと、学んだこと

技術的な面では、様々なマーケティングの戦略を知り、自分達の Web 制作に活かすことを検討できたことが1つの成果だった。今回は Web という形での昇華になるが、色々な場面で活用できる考え方であると言えるので、今後もよく覚えておきたい。また、外部の方との打ち合わせといった業務の一端にも触れて、1つの仕事に様々な人が関わっているということを変えて理解した。チームで活動するプロジェクト実習も、そうした意味では社会に出た際の足掛かりになるのではないだろうか。

7. 後輩へのアドバイス

私は民間企業への就職を志望しているが、就職に対しての実感が薄く、踏み込んで考えることができないままだった。しかし、この度のプロジェクト実習・インターンシップを経て、実際に企業の方とお会いして、会社に出向くという体験をし、これまでより働くことへの理解を深めることができた。

さらに、「分かったこと、学んだこと」の項目でも述べたように、チームで動くということは、社会に出る上でとても良い経験になると言える。また、チームだと1人より心強いという部分もあるため、インターンシップに参加してみたいけれど不安だ、という人は、まずプロジェクト実習に参加してみるのも1つの手なのではないだろうか。私のように、就職に実感が持てず戸惑っている人も居るかもしれないが、その場合、インターンシップによる経験が判断材料となる場合もあると思うので、是非参加して、実際に見聞きしてみてほしい。

積極性で実のあるインターンシップを

NTT コミュニケーションズ株式会社
2015年8月27日～28日
磯貝麻菜 (3年)



1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がプロジェクト実習 D の履修を決めた大きな理由は、やはりインターンシップ型であることだった。3年に進級し、就職活動という単語が気になり始める時期、インターンシップがその活動の支えになると聞き、何か行動を起こさねばならないという気持ちに駆られた。私は今まで、そういった活動に消極的な気持ちを持っていたが、この機会に自分を変えたいという気持ちも重なり、履修を決めた。

また、プロジェクト実習 D はただインターンシップに参加できるというだけでなく、一年間を通して派遣先に与えられた課題に取り組むことで、強い繋がりを持つことができる。そのように、通常のインターンシップに比べ、派遣先とより近い位置で関わることができるのも魅力に感じた。

2. プロジェクトの概要と担当

私達のプロジェクトは、「コミュニケーション・リスクをなくそう」というテーマで、学生のコミュニ

ケーション・リスク減少を啓発することを目指す。コミュニケーション・リスクとは、その名の通り、コミュニケーションにおける危険のことで、私達は「意思疎通の齟齬」という意味合いで解釈している。私達はその中でも特に、大学生もトラブルに見舞われる危険性が高い SNS でのコミュニケーション・リスクに着目し、減少に向けてアンケートで実態調査を行った。その調査結果を踏まえて、コミュニケーション・リスクの減少を目的とする独自の HP を開設し、啓発活動を行っていく。私は、チームの副リーダーを担当し、リーダーのサポートに務めている。

3. 派遣先の概要

1999 年、NTT コミュニケーションズ株式会社は、NTT のグループ企業の一つとして、長距離・国際通信事業を行う電気通信事業会社として設立された。同社は、全世界 43 カ国、地域 123 都市の拠点を通じて、様々な電気通信サービスを提供している。

NTT コミュニケーションズ株式会社は、国内長距離通信から IP 電話サービス、インターネット・サービス・プロバイダ事業、国際通信まで、幅広い事業を展開している。また、2001 年 5 月より、ICT リテラシーに関する普遍的な知識を体系化した資格サービスとして知られるインターネット検定「ドットコムマスター」を提供している。

4. 派遣先での活動内容

1 日目は、情報通信産業や NTT コミュニケーションズ様、同社のアプリケーション&コンテンツサービス部について説明をいただいた。電話やインターネットなど、歴史をさかのぼって通信の仕組みについてもご教授いただいた。また、一般的な Web の知識を通して Web マーケティングの概要を教えていただき、翌日の Web サイト制作実習に備えた。

2 日目は、当日いらっしゃるマーケティング・エージェント様に発注する HP のコンセプトや概要について、学生主体で話し合いを進めた。マーケティング・エージェント様には、HP マーケティングについてや広告のコンセプト等について説明をいただき、その後、学生が話し合った HP 案に対してご意見をいただいた。

5. エピソード

1 日目の通信事業についての勉強会では、情報産業に関して踏み込んだ知識を教えていただき、非常に新鮮だった。私は、学科の講義で、通信の歴史等を学ぶ機会があったが、さらに通信事業を構造的な観点から学べたのは大変有益だった。また、NTT ワールドエンジニアリングマリン株式会社が敷設する海底ケーブルについてなど、ご教授いただき、通信事業と一言で言っても、その事業の幅の広さに驚いた。

2 日目のマーケティング・エージェント様との話し合いでは、Web 事業に重要なポイントをご教授いただき、また、ご教授いただいたことに対して質問をしたところ、丁寧にお答えいただき、非常に有意義な時間を過ごせた。学生同士の話し合いでは、煮詰まる場面が多く見られたが、そこから脱却しようと悩み意見を戦わせた時間は、今後の活動にとっても有益だったと感じる。

6. わかったこと、学んだこと

私は、文系でありながらデジタルや通信などに興味を持っていた。しかし、理系の領域であると考え、視野に入れていなかった部分があったが、今回のインターンシップを通して、必ずしも理系でなければならないということはないと実感できた。知識として理工学的なものも必要な場面はあるが、文系にも役立つ領域はあり、通信事業にも関わることができるチャンスがあると感じられた。

また、今回のインターンシッププログラムで、実際に Web 事業に関わる方からご教授いただき、その上で自分達で Web 制作について話し合いを重ねたことで、Web 事業に対する興味関心がさらに広がった。話し合いでも、腑に落ちない点などを自分の言葉で質問することで、自分の中で整理し消化しているよう

に感じた。ディスカッションへの参加はあまり得意ではなかったが、一步踏み出すということを学べたと思う。

7. 後輩へのアドバイス

私はインターンシップを通して、通信事業というのは一見、文系の人間には遠い存在であるものではあるが、実は文系理系の壁は厚くないということを実感できた。先入観で避けるのではなく、実際にその世界に飛び込み、自分の目で確かめることはやはり重要だと感じた。また、私はこのインターンシップで多くの話し合いや勉強会を行い、その中で意識して質問をした。少しでも疑問に感じたり、納得のいかない点があればすぐに質問をするべき。自分の言葉で質問をすることで、それらの早期解決を助けることはもちろん、積極性を鍛えるチャンスにもなる。発言をためらいがちな人は特に、意識して考え質問をすることで、ものの見方が深まるだけでなく、自分の自信にもつながるため実践して欲しいと思う。

不安なのは当たり前、何もわからないのも当たり前。分からないから不安になり、分からないこそ知るために行動をすることが大切だと思う。頭の中だけで考え、自分の可能性を潰すのではなく、まずはその一步を踏み出して欲しい。

視野が広がったインターンシップ

NTT コミュニケーションズ株式会社
2014年8月19日～20日
坂寄 和哉（2年）



1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がプロジェクト実習 D を履修した理由は、この授業は PBL 授業というもので「課題解決型学習」と言われており、授業の中でインターンシップに参加したり、プレゼンの資料作り、やり方などが学びながら 1 年間かけて与えられた課題の解決に取り組むことに惹かれたからである。

また、以前からインターンシップに参加したいと考えており、この授業では企業の方と 1 年間関わりがあるため通常のインターンシップよりもより派遣先の企業様のことや社会に出てからのマナーについて学べると考えたからである。

2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトはコミュニケーション・リスクをなくすことが課題である。そこで、若者のほとんどの人が利用している SNS のコミュニケーションリ

スクについて着目した。今後、茨城大学の学園祭やサイトなどを使ってコミュニケーション・リスクの啓発活動を行っていく予定であり、目に見える結果を出すことを目指している。このプロジェクトで私は会計を担当している。

3. 派遣先の概要

NTT コミュニケーションズ株式会社は、世界有数の通信事業者として知られる日本電信電話株式会社のグループ会社であり、従業員数は、2015 年 9 月現在では 21,200 人、内、10,700 人は海外勤務である。

主な事業の内容として、長距離・国際通信事業、インターネットプロバイダ事業、IP 電話サービス事業を展開しており、全世界 43 カ国/地域 124 都市に拠点をもち、196 ヶ国でサービスを提供している。

4. 派遣先での活動内容

1 日目は NTT コミュニケーションズ様の行っている通信事業や、会社の移り変わり、情報通信産業の発展などについて教えていただいた。また、以前から私たちが興味があった海底ケーブルの事業についても詳しく説明していただいた。

2 日目は NTT コミュニケーションズ様のインターネット検定のサイトに私たちが作ったサイトを載せていただけるため、そのサイト作成の会議を行った。会議室を利用させていただき、企画会議のやり方や流れなどを学んだ。

5. エピソード

1 日目の NTT コミュニケーションズ様の企業概要説明では、これまで情報通信業界については馴染みが薄かったため、初期の電話の仕組みや固定電話・国際電話に仕組み、web マーケティングの仕組み、海底ケーブルの敷設の仕方など多くの知識を得ることができた。

2 日目のサイト作成の会議では、実際に使用している会議室をお借りして、グループのメンバーとより良いサイトにするため話し合った。また、NTT コミュニケーションズ様のサイト作成をしている MA 様に私たちのサイト案を見ていただきご指摘をいただくという、貴重な体験をさせていただいた。

6. わかったこと、学んだこと

インターンシップに参加して、これまで詳しくなかった情報通信事業についての知識を得ることができ、NTT コミュニケーションズ様のことだけでなく社会のマナーや流れを学ぶことができた。

このインターンシップを通して様々な知識を得て、貴重な経験をさせていただいて社会を見る視野が広がった。これまで何も考えずに閲覧していたサイトが配置の仕方などで印象が変わってくることや見る人に興味を持ってもらうための仕組みがあるということを知りとても驚いた。普段何気なく生活している中でも視点を変えてみると違ったものに見えることもあるんだと実感できた。

7. 後輩へのアドバイス

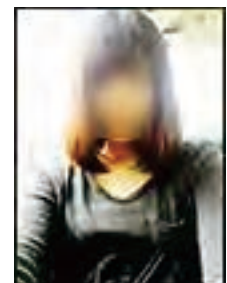
現在、インターンシップに参加しようと思っている方、参加しようか迷っている方はプロジェクト実習を履修することをお勧めします。プロジェクト実習は他のインターンシップとは違い企業にお邪魔して仕事を体験させていただくだけでなく、インターンシップの前から打ち合わせをしたり、インターンシップが終わった後も課題解決のために協力していただけます。よってこのプロジェクト実習は、1年間企業先の方との関わりがあります。そのため、普通のインターンシップと比べてより多くのことを学べると思います。自分を成長させ、新しい発見をするためにもプロジェクト実習を履修することをお勧めします。

自分を変えたインターンシップ

NTT コミュニケーションズ株式会社

2015年8月27日、28日

森 遥香 (2年)



1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私は大学一年生の時、ただ何も考えずに授業を受け、一年間をなんとなく過ごしてしまった。二年生からは、なんとなく過ごすのではなく、自分のためになることをしようと思い、プロジェクト実習 D を履修した。

また、インターンシップへの参加も考えていたため、プロジェクト実習Dでインターンシップも経験できるということが履修を決めた理由である。

2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、身近にあるコミュニケーション・リスクを減らすことを目指している。特に、Twitter や line などの SNS についてのコミュニケーション・リスクについて重点を置いており、私たちの年代の大学生などをターゲットとしている。

私の担当はプロジェクトのリーダーである。私は、人前で話したり、人をまとめることが苦手であり、そんな自分を変えたいと思い、自らリーダーに立候補した。

3. 派遣先の概要

私たちが連携させていただいた NTT コミュニケーションズ株式会社は、長距離・国際通信事業を展開する世界有数のグローバル企業であり、国内長距離通信から、IP 電話、インターネット・サービス・プロバイダ、付加価値アプリケーション、国際通信まで、幅広いサービスを提供している。

4. 派遣先での活動内容

一日目は、NTT コミュニケーションズ様がこれまでどんなことを成し遂げてきたか、また、その歴史や、今後通信企業がどうなっていくのかのお話しをしていただいた。また、通信の仕組みや、海底ケーブルのお話など、私たちプロジェクトのメンバーが以前リクエストしていたお話もして戴けた。

二日目は、NTT コミュニケーションズ様のサイトのドットコムマスターに載せていただくサイトの作成のために Web マーケティングのお話などを聞かせていただき、それをもとにどういったサイトを作成するかの話をした。

5. エピソード

一日目は、緊張してインターンシップに臨んだ。しかし、私が想像していたよりも会社の雰囲気は殺伐とはしてなく、意外とやわらかい雰囲気の中で働いていることがわかった。また、通信事業のプレゼンテーションをしていただき、時間にしたら3時間ぐらいであったのに、私の頭はいっぱいいっぱいになってしまい、知識が豊富で驚かされた。

二日目は、主に NTT コミュニケーションズ様のサイトのドットコムマスターに載せて戴くサイトの案だしたが Web マーケティングのお話をプロの方にしていただき、圧倒されてしまったが、NTT コミュニケーションズ様の担当の方にアドバイスを戴き、何とか案を固めることができた。

6. わかったこと、学んだこと

私は、このインターンシップに参加し、自分の知識のなさ、またその道のプロの方の知識量の多さにすごく驚かされた。また、自分が知っているつもりであることも広くみるとほんの一部しか知らないことを知った。私は、通信事業に関わる仕事をしたいと思っているので、このままではだめだと自分の意識を上げることができた。

7. 後輩へのアドバイス

私はこのインターンシップを経験して、今の自分では全然だめだと自分の意識を変えることができた。また、自分の知らない世界を知ることでも興味がいより一層強くなり、もっと知りたいと思うことができた。もし、このインターンシップに参加していなかったら自分を変えようとも思わず、ただなんとなく過ごす日々を繰り返していたかもしない。もし、インターンシップに参加するか迷っている人がいるならば、自分を変えるチャンスだと思い参加してほしい。

インターンシップを通して

NTT コミュニケーションズ株式会社
2015年8月27日～28日
茨城キリスト教大学
看護学部看護学科1年 征矢芽久



1. プロジェクト実習参加への動機

私は今年度のプロジェクト実習をボランティアとして参加させていただいた。ボランティアとして何か人の役に立てることがしたいと思っていた時、茨城キリスト教大学のウェブで今回のプロジェクトを知った。このプロジェクトは人の支えになることや協力をすることができ、かつ自分自身にもこのプロジェクト実習によって何か得られると思った。

また、現在私は看護学部の学生である。一見、看護と今回のプロジェクト実習のメインとなる SNS は関係がないように見える。しかし、先日病院で実習させていただいた際、患者さんの個人情報ほとんどパソコンで管理されていることを知った。近年、SNS 上での個人情報流出が問題となっているので、将来看護師になるうえで最低限の知識を身につけたいと思った。

2. プロジェクトの概要

私たちのプロジェクトは、SNS 上におけるコミュニケーション・リスクについて知ってもらい、そしてコミュニケーション・リスクをなくすということを目指している。具体的な活動内容としては、ヒアリングやアンケートを行い、その結果を含めたウェブとパンフレットの作成である。また、ウェブに関しては NTT コミュニケーションズ様のオフィスで2日間、企画・立案を体験した。一方でパンフレットにおいては、茨城大学の文化祭である茨怨祭で配布する。これらは全て私たち学生を対象としており、メンバーひとりひとりの意見を取り入れ、より良いプロジェクト内容になるよう取り組んでいる。

3. 派遣先の概要

NTT コミュニケーションズ株式会社は、1999 年の NTT 分社化にともない、長距離・国際通信事業を展開する企業として設立された。同社は、主に、長距離・国際通信事業、インターネット・サービス・プロバイダ、IP 電話、付加価値アプリケーションを提供している。「Global ICT Partner」のビジョンを掲げる NTT コミュニケーションズは、世界 43 ヶ国/地域 124 都市の拠点をベースに 196 ヶ国でサービスを提供している。

4. 派遣先での活動内容

私たち 6 人は平成 27 年 8 月 27 日から 28 日の 2 日間、NTT コミュニケーションズ様のもとでインターンシップをさせていただいた。

1 日目は情報通信産業、NTT コミュニケーションズ、アプリケーションについて説明していただいた。また、通信の仕組みの説明の中では海底ケーブルについても聞くことができた。私たちが当たり前に行っていることができる裏にはこんなにも苦労があるということを知ることができた。また、ウェブ関連の知識や検定公式サイトでの取り組みの説明をしていただいた後、メンバーと共にウェブサイト制作を始めた。

2 日目は株式会社マーケティングエージェント様 (MA 様) より、MA 様での事例紹介、最近のマーケティング事情について説明していただいた。この後、私たちの考えたウェブサイトのイメージを提示し、それに対して MA 様から多くのアドバイスやご指摘をいただいた。

5. わかったこと、学んだこと

「NTT」というワードはテレビや新聞で見たり、聞いたりすることはあったが、一体どんなことをしているのかは知らなかった。しかし、NTTコミュニケーションズの吉川様、川口様がとても丁寧にわかりやすく説明して下さったので、普段どのようなお仕事をされているか知ることができた。

また、MA 様の話では商品をつくる際には必ず目的とターゲットがあるということを知り、このデザインにはこういう意味があると考えることができた。そして、私たちのウェブサイトのイメージを提示した際に、ターゲットとサイトの目的が具体化されていないということをご指摘いただいた。自分たちでは明確であると思っていなくても、他社から見たらこんなにも印象が異なると感じた。

どちらのお仕事も必ずお客様の立場になって考えるということが重要になってくると思った。お話を聞いたことも、ご指摘・アドバイスをいただいたこと全てが私たちにとって非常に良い刺激になった。

5: 活動報告会 PPT

プロジェクト実習D

IU+IC×NTTコムプロジェクト 活動報告会

森 通香(リーダー) 磯貝 麻菜(副リーダー) 猪狩 彩夏(書記)
坂寄 和哉(会計) 鳥羽田 瑠奈 征矢 芽久

何から始めればいいのか分からない!!!

コミュニケーション・リスクって何?

コミュニケーション・リスクをなくそう

「ゼロからのスタート」

私たちのミッション

1. 「コミュニケーション・リスクをなくそうプロジェクト」の企画・実施
2. 実際に学内システムを使ったコミュニケーション・リスクの啓発活動
3. 東京(NTTコミュニケーションズ様のオフィス)で2日間、Webサイトの企画・立案を体験する。

1. 「コミュニケーション・リスクをなくそうプロジェクト」の企画・立案

◆身近なコミュニケーション・リスクについて調査

→幅広い年齢層の人に普段使っている連絡手段でトラブルにあったことがあるかhearing

<結果>
若い人のSNSを使う率が高い。
また、トラブルにあったという声も多かった。

年齢層	Twitter	LINE	メール	電話
高校生	100%	100%	100%	100%
10代	100%	100%	100%	100%
20代	100%	100%	100%	100%
30代	100%	100%	100%	100%
40代	100%	100%	100%	100%
50代	100%	100%	100%	100%
60代以上	100%	100%	100%	100%
大学生	100%	100%	100%	100%

hearingの結果からターゲットを大学生に絞り、SNS(Twitter,LINE)についてのコミュニケーション・リスクを調査していくことに!!

使用頻度の高い情報伝達手段 (調査対象:男性40人、女性39人)

性別	電話	メール	PCメール	手紙	SNS
男性	100%	100%	100%	100%	100%
女性	100%	100%	100%	100%	100%

年代ごとのLINEを使用している割合

年代	割合
高校生	100%
10代	100%
20代	100%
30代	100%
40代	100%
50代	100%
60代以上	100%
大学生	100%

hearingの結果をもとに大学生にを対象に行うアンケートの作成!!

TWITTER	LINE
→他人の写真などを載せるときの肖像権に注目した。	→微妙なニュアンスの違いからトラブルに発展するなどといった問題に注目した。
→バカッターなどに注目した。	→また、既読無視やLINEいじめなどの問題に注目した。

アンケートをとった結果

<Twitter>

意外にも半数の学生が、他人の顔を含む写真をツイートしたことがあると回答。

その際、約7割の学生が個人情報に配慮していると回答。

→また、男性より女性の方が個人情報に配慮する傾向があるという結果に！！

<LINE>

学生の約10割の人がLINEを使用していると回答。

また、比較的LINEを使用するのは、友人、家族などの身近な人であることが分かった。

<反省>

パンフレットを作成する際に、アンケートの内容が薄すぎて上手くまとめられなかった。

→もっと後のことを考えてアンケートを作成するべきだった。

2. 実際に学内システムを使ったコミュニケーション・リスクの啓発活動

根力育成プログラムに私たちのプロジェクトのまとめになるサイトを作る。

→Twitter、LINEのことにに関するパンフレットから根力育成プログラムのサイトにとべるようにQRコードを載せておく。

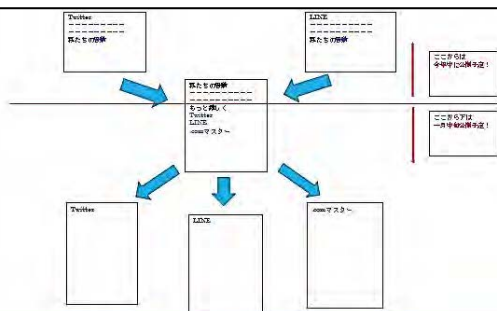
パンフレット配布に合わせて、簡単なTwitter、LINEのことにに関するページ、私たちの活動のページを公開する。

また、一月中旬にもっと詳しくTwitter、LINEのことにまとめたページ、.comマスターのページを公開する。

Twitter、LINEそれぞれアンケートの結果を元にTwitter、LINEそれぞれパンフレットを作成した。

まず、今年中にTwitterのことにに関するパンフレットを1週間配布する予定である。

次に、来年にLINEのことにに関するパンフレットを1週間配布する予定である。



3. 東京(NTTコミュニケーションズ様のオフィス)で二日間Webサイトの企画・立案を体験する。

◆PBL型インターンシップ

- ・NTTコミュニケーションズ様の歴史や事業内容、また、Webマーケティングについての勉強会。
- ・.comマスターのサイトに関するブレインストーミング

一般常識だけでなくより業務に近いことを経験！！
他では体験できないみっちりとした濃いインターンシップになった。

→インターンシップで学んだWebマーケティングを使い、私たちのTwitter、LINEのサイトを作成。

→また、私たちのサイトの直帰率・離脱率なども見る予定である。

協力して頂いた企業・大学の皆様

- ・NTTコミュニケーションズ様
- ・茨城キリスト教大学様
- ・ICサテライト様

ご清聴ありがとうございました。

6:最終レポート

一年を通して

～IU+IC×NTT コムプロジェクト～

14L2222L 森 遥香

このプロジェクトを始めたきっかけが新しい自分に出会えそうという理由だった。大学生になって、授業のシステムなどよくわからず慣れることに必死でただ何となく過ぎてしまった大学一年生。このままでただ何となく学校に行き、授業を受け、社会に出た時のこともよくわからないまま四年間が過ぎてしまい、大学で何かを得ることが出来ず卒業することになってしまうのではないかと思った。普段は、友達と同じ授業を取っていた私だが、今回は友達に声をかけることはしたが、履修しないと言う友達を置いて一人で履修することにした。私はこのプロジェクトで NTT コミュニケーションズ様と連携してやっていくプロジェクトに参加することにした。理由は、以前、NTT グループでは有名だと思えるネット回線などに関係する営業をやっていたからである。最初 NTT コミュニケーションズ様のグループは私一人だけだったが、鈴木先生がゼミ関係の生徒に呼びかけを行ってくださり、また、私の友人が参加したりと、4人で行っていくことになった。また、大学は違うが、茨城キリスト教大学様からも2人参加してもらえ、6人でやっていくことになった。私はこのプロジェクトに参加する上で、「積極性を身に付け、自分の意見をしっかりと伝えるようになる」という目標があったので、リーダーに立候補した。プロジェクトとは、何かしらのお題にチーム全員で協力し、活動していくというものだが、私たちのチームに出されたお題が「コミュニケーション・リスク」をなくそう。というお題だった。最初は、「コミュニケーション・リスク」って何？その概念は？と考えた私たちだったがそんなものはなく、抽象的なものしかわからず最初から壁にぶつかった。しかし、そこで NTT コミュニケーションズ様の吉川様、川口様からアンケートを取ってみるといいかもしれないなどのコメントをして戴き、なんとかつまずきながらもなんとかスタートすることができた。しかし、私たちはそういったアンケートを路上で行ったことなどなく、アンケートを駅前で行うのに、道路使用許可証を市役所に行ってもらわなければいけなかった。市役所に行ってもらおうというのも、水戸駅や、警察署などに電話をかけてやっと分かったことであり、最初からこんな感じでやっていけるのかとすごく不安になった。また、リーダーとしてもどうやって仕事を分け与えていいのか分からず、最初のころはほとんど全部の仕事を私が行い、他の授業もあるので、「どうしてこんな重い授業とってしまったのだろう」と思ってしまったことも多々あった。こうして、一年を通して振り返ってみると、すごく大変だった。というのが真っ先に思ってしまう。リーダーということで上に立つ責任感や、仕事の割り振りの大変さ、また、全体を見通す力がすごく大切だなと改めて思い知った。また、NTT コミュニケーションズ株式会社様の方や、学校の先生とメールでやり取りなど今まであまり行ったことなどなかったので最初はどのような風に送ったらいいのかも分からず、調べたり、友人に聞いたりして送っていた。振り返るとこういった大変だった思い出が真っ先に思い浮かんでくるが、よく考えるとそれは私にとってすべてプラスになっていることだと思う。メールの送り方、マナーや礼儀などは社会人になってから覚えたのでは遅く、学生の今うちに失敗しておいてよかったのかもしれない。もちろん何事も失敗しないのできた方がいいが、失敗して成長することが出来たのだからマイナスではないと思う。今回プロジェクト実習を履修し、他の授業では学べないような礼儀、マナーや、チームで協力することの大切さを学ぶことが出来た。チームで一つのことを分担して行う際には、きちんとその情報を共有するなどのごく当たり前のことが難しかったり、リーダーの大変さを学ぶことができた。もし、プロジェクト実習を履修していなかったらこのようなことは学べなかったと思う。この一年間で学んだことを忘れず、今後に生かしていきたい。

1年間の活動における気付き

インターンシップ、活動報告会、先進地実施研修を通して

13L1011G 猪狩彩夏

本プロジェクトの大きな目的は「コミュニケーション・リスクをなくすこと」であり、この1年間、コミュニケーション・リスクの存在を啓蒙する活動を続けてきた。「コミュニケーション・リスク」とは、人と人の間で起こり得るコミュニケーションの齟齬のことである。我々はコミュニケーション・リスクについて、Webサイトを利用して啓蒙することによって目的の達成を目指すことにした。

大まかな流れとしては、街頭インタビューを行ってターゲットを絞り、アンケートを実施。アンケートの結果を参考に、コミュニケーション・リスクの啓蒙パンフレットを作成して、パンフレットからWebサイトへ誘導する、といった構造である。このようにプロジェクトを進めていく中で、インターンシップや活動報告会、先進地実施研修といった全体行事は、自分たちのチームと、チームで取り組んできたプロジェクトを見つめ直すための良い機会となった。

8月に2日間の日程で行われたインターンシップでは、NTTコミュニケーションズ様のオフィスにお邪魔して、Webサイトの構造について話し合いを行った。情報通信事業について学び、そして企業の方との打ち合わせを体験できたことは貴重な経験となった。中でも、実際の商品やWebサイトなどを比較しながら学んだWebマーケティングに関する知識は、今後の活動の中では是非実践していきたいと感じる内容だった。この知識を得たことで、Webサイトへのアクセス数や離脱率を比較したらどうかという新しい方針が決定した。

12月の活動報告会では、他のプロジェクト実習チームがどういった活動をしてきたのかを知ることができた。また、自分は活動報告会においてパネル作成を担当したのだが(図)、その際に別のプロジェクトの方から昨年の状態を例に挙げて教えていただいた。本プロジェクトは今年発足したばかりで、前年度からの引継ぎがない状態からのスタートだったので、前年度の内容を踏まえた上での活動を新鮮に感じた上、来年に向けてチームに何を残していけるのかを考える機会となった。のりパネルの貼り方などといった、行事における単純な技術だけでなく、本プロジェクトにおいて実行できたこと・できなかったことを整理し、来年度への活動への引継ぎをしっかりと行う必要性を強く感じた。

同じく12月の先進地実施研修では、社会人基礎力グランプリの関東地区予選大会を見学した。他大学のプロジェクトチームの発表を聞き、日常生活に根差した問題意識とそれを解決するための行ってきた独自の取り組みを知ることができた。それぞれのプロジェクトの規模が大きかったことにも驚いたが、自分たちと同様の学生が運営していることにも驚かされた。

上記のように1年間取り組んできたプロジェクトを通して、2つほど考えさせられたことがある。

まず1点目はチームの機能についてだ。全体を通して考えると活動は分担できていたのかもしれないが、1人の負担が大きかった時期がそれぞれのメンバーにあったように感じた。先進地実施研修で他大学チームの発表の中にも、人数が多すぎて活動が一時停滞してしまったなど、チームの機能が上手く働かなかった例がいくつか挙げられており、複数人のチームで動くことの難しさを感じた。本プロジェクトはチーム人数が少なく、その中でさらに時期や能力で動ける人員が減っていく、といった状況だったため、来年度はもう少しチーム人数が増えれば、上手いこと機能していくのではないだろうか。

2点目は、プロジェクトの達成度についてである。結果的には、パンフレットの配布とWebサイトへの誘導までは実行できたが、アクセス数や離脱率の比較や目的の達成度の観測は実行できなかった。この件に関しては、上記内容においても言及したように、今年度の引継ぎをしっかりと行い、来年度の活動へ繋げていけるよう調整を行いたい。



活動紹介パネル

失敗から学ぶ「チーム」活動

13L1013S 磯貝麻菜

「コミュニケーション・リスク」って、何？、私達の活動はそこから始まった。

私達の活動テーマはずばり「コミュニケーション・リスクをなくそう」。NTT コム様のサポートを受け活動を行ってきた。活動は「コミュニケーション・リスク」について調査し、その減少のための啓発活動を行うという大枠で進められた。

活動の始まりはまず、「コミュニケーション・リスク」という未知の言葉を定義づけることだった。私達はコミュニケーションの場における様々な間違いや危険について話し合い、また、NTT コム様のビジョンも参考に、「意思疎通の齟齬」をコミュニケーション・リスクと位置づけることにした。

私達の活動内容は大きく、「アンケート調査」「インターンシップ」「各種制作活動」という3つに分けられる。私は特に、各種制作という点で活動に大きく貢献できたと考える。

私達が制作したのは、アンケート結果をもとに作成したパンフレット(図①)、及び、プロジェクトの活動内容を紹介するホームページ(図②)である。パンフレットについては、様々に変更が生じたものの、2015年12月に学内で配布活動を行うことができた。当初の予定ではパンフレットに掲載したQRコードから、作成したホームページにリンクしてもらい、その訪問者数を分析することで、活動の成果をはかろうと考えていた。しかし、結果としてホームページへの訪問者は期待をはるかに下回る数で、分析できる数にも至らなかった。だが、期待通りの結果は得られなかったとしても、それもまたひとつの結果であり、どうしてその結果に至ったのかなど考察の余地があったことは活動の上で収穫となった。

このようなコンテンツの制作だが、実のところ当初予定していたもののすべてを完成させることができないまま一年を終えてしまった。敗因は、活動のスケジュール管理が正確にこなせなかったことにある。活動の目指すゴールに向けて必要とされる行動は常に一定ではならず、変化していく場合も少なくない。その時々々の活動状況や個人の力量を正確に把握し、今、何をすることが求められているのかをその都度確認することが重要である。この確認作業を怠ってしまったことが、非常に心残りであり、また、これからの課題であるといえよう。

私達のチームで一番の反省点は、企業の方にうまく力を借りられなかったことであると考えられる。折角NTTコム様から分からないことや悩んでいることがあればいつでも相談に乗る、と様々なアプローチを受けていたにも関わらず、自分達の方でああでもないこうでもない根を詰めてしまった。私はこのとき、頼ることができないというのは、またある意味で「弱さ」なのではないかと感じた。人に頼るということは、自分の力不足を相手に見せなければならない。自分の力だけではどうにもならなかったこと、どうしてできなかったのか、やってほしいのかを理解してもらうことなど、頼ることにまた体力が必要とされる。しかし、この過程を疎かにしてしまっただけでは、チーム活動は成り立たないのではないだろうか。私は今回のプロジェクトで、人に頼ることもひとつの力であるということを感じた。

また、「頼ること」とも関連するが、チーム自体、最後まで歯車が合わなかったことが悔やまれる。私自身そうであったため、後ろめたい気持ちも非常にあるが、単独プレーが目立っていたように感じる。話し合いの場を設けても、どこかチームの総意とは言い難い結論に収束し、結果、行動がうまく噛み合わない場面が多かったように思う。チームプロジェクトである以上、全員が納得のうえで責任を持って活動を進めなければならない。そのような単純なことに最後まで気付くことが出来なかったことを悔しく思う。しかし、この失敗は今後の人生においても大きな発見であり教訓になった。思うような成果が残せなかったというところまで含めて、決してこの一年は無駄ではなかったと私は思う。



図① 作成したパンフレット



図② チームのホームページ

プロジェクト実習 D を 1 年間通して

14S6009S 坂寄 和哉

私たちプロジェクト実習 D のチームは、IU+IC×NTT コムプロジェクトとしてコミュニケーション・リスクの啓発、削減を達成目標として 1 年間活動してきた。このチームは、PBL 型（課題解決型）インターンシップということで、NTT コミュニケーションズ株式会社様から「コミュニケーション・リスクを無くそうプロジェクト」という課題をいただいた。はじめは、「コミュニケーション・リスク」という漠然とした単語のチーム員での共通理解から始まった。それぞれが理解し、それを共有し、話し合い、SNS の危険性を調査し、どうしたらコミュニケーション・リスクをなくせるかというということをテーマに活動していくことになった。

まず、SNS の危険性を調査するために水戸駅でヒアリング調査をすることになった。ヒアリング調査を前に NTT コミュニケーションズ様と話し合いをしたところ、ヒアリング調査話するにあたって、まず、どのような事を主にプロジェクトを進めたいのか、どのような回答を期待するのかを事前に明確にしておかないと意味のないものになってしまうという助言をいただいた。私たちは、水戸駅でヒアリング調査をするにあたって、その管理者に許可を取らずに行ってしまったがそれは禁止されている行為だと知った。水戸駅でヒアリング調査をするには市の許可が必要だということを知り、実際に市役所へ行き許可を取ることを経験した。実際にヒアリング調査を行ってみると、なかなか足を止めてもらえなかったり、思ったような答えを得られないことが多々あった。ヒアリング調査を通して、ヒアリング調査の意味、仕組みや公共の場で活動するには許可が要り時間もかかること、自分たちが欲しい回答を得ることは難しいなど様々なことを学ぶことができた。このヒアリング調査の結果を集計し、Twitter、LINE でのコミュニケーションの齟齬によるトラブルが多かったことから、Twitter、LINE でのコミュニケーションの齟齬の削減をテーマに活動することになった。また、このトラブルは、SNS の利用者が若者に多いこともありターゲットを大学生に絞り進めることになった。SNS において、どのようなコミュニケーションの齟齬が生じ、それによってどのようなトラブルに発展しているのかをヒアリング調査をもとに茨城大学の講義の時間を借りてアンケート調査を実施した。その結果として、様々なコミュニケーションの齟齬によるトラブルの事案を得ることができた。この結果から、どのようにコミュニケーションリスクを啓発していけば良いのかをチームで話し合い、SNS によってどんなトラブルが起きているかをパンフレットにまとめ茨城大学で配布し、学生に啓発していこうということになった。パンフレットは Twitter と LINE に分けて実施することになった。パンフレットによるコミュニケーション・リスクの啓発ということで、まず受けとった人に読んでもらえるように興味を引くような内容、どんなコミュニケーションの齟齬が生じ、それによってどんなトラブルが生じるかを理解してもらわなければいけない。そのためにはどうすればいいのかチームで様々な議論をした結果、4 コマ漫画でトラブルの発生原因を説明したり、SNS でもし自分がトラブルを起こしてしまったら罪に問われてしまうかもなどと少し大げさにして興味を持ってもらおうということになった。パンフレットには QR コードを掲載しパンフレットを見他人にアクセスしてもらうことでどれだけの人に見てもらえたのかが分かるようにした。実際にパンフレットを配布してみると、ごく少数の人にしか QR コードにアクセスしてもらえなかった。そのため、どれだけの人にコミュニケーション・リスクについて啓発できたのかわからない結果となってしまった。自分たちの伝えたいことを何も知らない人たちに伝えることは難しいことだなと感じた。

このプロジェクト実習 D を通して、メールのやり取りのマナー、企業の方との会議の流れや言葉使い、自分たちのやりたいことを実行するには様々な準備が必要であり、時間もかかるため、余裕を持って行動しなければならないなど様々なことを学ぶことができた。

おわりに

森 遥香

「コミュニケーション・リスク」をなくす。最初に与えられこの課題を約一年間にわたって行ってきた。最初は「コミュニケーション・リスク」って何？概念は？と考えるところから始まり、何がゴールなのかよくわからないまま進んでいた時もあった。しかし、そこでNTTコミュニケーションズ株式会社様の吉川様や、川口様のサポートがあったおかげで行き詰まるたびにヒントを戴け、6人で協力しなんとかこのプロジェクトを進めていくことが出来た。6人ともこのプロジェクトに参加するのは初めてで、分からないことだらけであったため、吉川様、川口様のサポートは心強く、正直お二方がいて下さったおかげでここまで形にできたのではないかと思う。

今回、「コミュニケーション・リスク」をなくそうという目的を掲げ、様々な調査を行ってきた。街頭インタビュー、学内アンケート、リーフレット作成、これらの作業は、全て「コミュニケーション・リスク」をなくすために行った。はっきりとこれが出来たら目標達成などといったものはないが、私たちの活動を知ってくれた人や、リーフレットが渡った人などに、まず、「コミュニケーション・リスク」の存在を知ってもらい、そこから一人でも「コミュニケーション・リスク」に対する意識が変わっていれば目的達成と言えると思う。ただ、今回失敗だったのが、リーフレットを読んで意識が変わったか、などのデータを取れなかったことだ。また、アンケートを何度か作成したのは良かったのだが、その後のことをあまり考えず、アンケートを作成してしまい、その後の考察に生かせなかったことだ。これらの失敗は来年度に生かしてもっとより良い「コミュニケーション・リスク」を減らすことができるサービスを作っていってほしいと思う。

一年間を通し、メールなどの送り方、礼儀なども含め、他の授業では得られないほどの成長が出来たと思う。これからもこの一年間で得たことを忘れずに成長していきたい。

[編者追記] IU+IC×NTTコムチーム「茨城インターンシップフォーラム 2016」に登壇

大学教育センターキャリア教育部は、本学「就業力育成支援事業」の背景である「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業補助金（テーマB）」（以下、「テーマB」）に基づく活動の一環として、本学学生就職支援センターとの連携により、2016年2月26日に「茨城インターンシップフォーラム 2016 茨城県におけるインターンシップ 様々な形」を開催した（図6）。

図6: 茨城インターンシップフォーラム 2016 チラシ並びに式次第



上: チラシ(表面)

右: 式次第(チラシ裏面データ)

茨城インターンシップフォーラム 2016	
茨城県におけるインターンシップ 様々な形	
1: 開会挨拶 佐藤和夫 (茨城大学 大学教育センター長)	10:20-10:25
2: 趣旨説明 鈴木敦 (茨城大学 大学教育センターキャリア教育部長)	10:25-10:35
3: インターンシップ実践事例報告 A: 茨城キリスト教大学 (短期型インターンシップの実践例) (1) 池内 耕作 (茨城キリスト教大学 副学長) 照沼 真 (茨城キリスト教大学 キャリア支援センター長) (2) 小野瀬晶子 (茨城キリスト教大学 4年) (3) 満仲 淳之 (茨城トヨペット株式会社 人事部人事課 課長) B: 茨城県 (中期型インターンシップの実践例) (1) 若松 佑樹 (えぼっく・茨城県地域おこし協力隊) (2) 鈴木 優太 (茨城大学 3年) (3) 高村 和成 (袋田食品株式会社 営業取締役) C: 茨城大学 (PBL型インターンシップの実践例) (1) 鈴木 敦 (茨城大学 大学教育センターキャリア教育部長) (2) 森遥 香 (茨城大学 2年) 鳥羽田瑠奈 (茨城キリスト教大学 1年) (3) 吉川 昌吾 (NTT コミュニケーションズ株式会社 A&C 部 担当課長)	10:35-11:35
4: 質疑応答	11:35-11:40
5: NPO 法人 全体コメント 宇留野 純 (NPO 法人 雇用人材協会事務局長)	11:40-11:45
6: 閉会挨拶 松坂 晃 (茨城大学学生就職支援センター長)	11:45-11:50
(司会 鈴木敦)	

インターンシップ実践事例報告は、従来型の「短期型インターンシップ」と現在拡充が求められている新しい形である「中(長)期型インターンシップ」「PBL型(課題解決型或いは実践型)インターンシップ」の3カテゴリで行うこととした。短期型については、テーマB参加校の茨城キリスト教大学様に、中期型はえぼっく・茨城県地域おこし協力隊様にご担当をお願いし、PBL型については本学が担当することとなった。また、茨城インターンシップ連絡会メンバーとしてテーマBの活動にご協力戴いているNPO法人 雇用人材協会事務局長・宇留野様に全体コメントを戴いた。

年度末の午前中ということで、どれだけの皆様にご参集下さるか、甚だ不安であった。しかし、当日は茨城インターンシップ連絡会構成校の皆様を始め多くの方々にご来場下さり、会場(ホテル・テラス・ザ・ガーデン 水戸)の定員60名の部屋が満席となり、補助椅子を出す盛況となった(図7)。

<http://www.hotel-terrace.com/top.htm>

お忙しい中ご登壇・ご参集下さった皆様、また裏方として本フォーラムを支えて下さったテーマB 関越グループ幹事校・新潟大学様ならびに本学職員各位に、篤く御礼申し上げます。

本学がPBL型インターンシップの事例報告を担当したのは、プロジェクト実習Dの存在を念頭に置いてのことである。しかし、同カテゴリでは「こみフェス」「公共交通」「IU+IC×NTT コム」の3チームが活動しており、どのチームに登壇を依頼するか、大いに悩んだ。最終的には、

①他の2つの事例報告が県内の企業での実践であったことから、遠隔地での実践事例を

②他の2つの事例報告が1大学単独での登壇であったことから、茨城キリスト教大学・茨城大学の混成チームによる登壇を

という判断で、IU+IC×NTT コムチームに依頼した。

その結果、受入先のNTTコミュニケーションズ株式会社吉川様・川口様には、ご報告のご準備を戴くのみならず、またしても水戸までご足労戴くことになってしまったが、幸いにしてご快諾戴けた。いつもながらのご配慮に感謝申し上げます。

報告は「企画者5分・学生10分・受け入れ者5分」の3者20分を1ユニットとして、3ユニットを並べるといふ形を採った。いずれも企画者が「これぞ」といふ事例をご手配下さったお陰で、大変質の高い報告になったと自負している。本学・IU+IC×NTT コムチームは、本学の森と茨城キリスト教大学の鳥羽田の2名で行う予定であった。鳥羽田がインフルエンザで倒れるというアクシデントに見舞われたが、吉川様・川口様のご支援もあり、森が緊張しながらも一人で危なげなく発表をこなしてくれた。何事であれ、アクシデントは付きものである。落ち着いてリカバリをこなしてくれた森に感謝すると共に、成長を実感した一幕であった。

図 7: 会場風景



①受付はプロジェクト実習履修メンバー



②大学教育センター 佐藤センター長挨拶



③ありがたくも満席



④事例報告A 左:照沼様 右:池内様・満仲様・小野瀬さん



⑤事例報告 B 左:鈴木君 右:高村様・若松様・鈴木君



⑥事例報告 C 左:森さん 右:吉川様



⑦NPO 法人雇用人材協会 宇留野事務局長コメント

⑧学生就職支援センター 松坂センター長挨拶

Ⅲ：先進地実地研修

1. 趣旨
2. 2015 年度先進地実地研修（近郊）：東京都文京区拓殖大学
3. 2015 年度先進地実地研修（遠郊）：山形県最上郡金山町
4. 御礼ならびに今後に向けて

Ⅲ:2015 年度 先進地実地研修

鈴木 敦

1:趣旨

プロジェクト実習では、授業の一環として 2013 年度から「先進地実地研修」を実施して来た。その目的は、

プロジェクト実習と親和性の高い目的・内容・形態で実施されている、他大学並びに先進地域の取り組みを参観し、これまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習は勿論、今後の勉学・諸活動に活かすべき<学び>を得ること。併せて、その学びを他のメンバーにフィードバックすること

にある。2013 年度の小規模な試行を経て、2014 年度からは以下の 2 カテゴリーで正式に運用している。

①先進地実地研修（近郊）

東京或いはその近傍・日帰り・プロジェクト実習 A～D 履修生全員の参加を原則として実施する。

②先進地実地研修（遠郊）

東北地方～近畿地方・宿泊込み・プロジェクト実習 A～D 履修生代表若干名の参加で実施する。

いずれにおいても、ただ漫然と参加したのでは「大学生の遠足」に堕してしまう。このため、両カテゴリー共通で「レポートの作成」「プロジェクト実習活動報告会での報告」の 2 つを課している。いずれも「参加者本人のリフレクション活動」とすると同時に、「研修で得た学びをメンバーにフィードバックすること」を目的としている。

先進地実地研修の勘所は、「学生に、先進地に直接でかけて学ぶ機会を提供すること」にある。実現のためには、交通費・宿泊費を大学予算で賄う体制を構築し、学生の個人負担を最小限に抑えることがポイントとなる。「近郊」が、バスをチャーターするという既存の予算執行の枠組み内で対応出来るのに対し、学生個人単位で宿泊費・交通費を支給する必要がある「遠郊」には、クリアすべきハードルも多かったが、関係各方面のご支援により実現することができた。篤く御礼申し上げます。

なお、先進地実地研修の趣旨については、本章・図 8 ならびに 30 を、「近郊」において「原則」という緩い縛りにしている理由については第 I 章・図 12 スライド No. 12 を、併せて参照されたい。

2:2015 年度先進地実地研修(近郊):東京都文京区拓殖大学

(1)拓殖大学での実施に至る経緯

先進地実地研修（近郊）は履修生全員を対象とすることから、各自が取り組んでいるプロジェクトの内容に関わらず参考となる点が多いと予想される催事を選択せねばならず、対象選びに苦勞した。当初想定していたのは、先進地実地研修の試行として 2013 年 12 月 15 日に学生 2 名を引率して参加した、公益社団法人日本観光振興協会の「産学連携オープンセミナー予選会」であった。同催事は年末に東京で開催され、大学生ならびに大学院生のチームによる質の高い活動報告がなされており、本研修の趣旨にぴったり合致するものであった。

<http://www.nihon-kankou.or.jp/home/committees/report/event/20131215.html>

しかし、同催事は 2014 年度途中に開催形態を変更し、場所・時期共に先進地実地研修（近郊）の対象とはなり得なくなってしまう。その後紆余曲折を経て、最終的に 2 月 12 日にさいたま市で開催された「シンポジウム・産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」（図 1）を参観することとなった。同催事は、産業界ニーズ事業で本学が所属する関越グループの年度末シンポジウムであり、所属 18 大学を代表して 4 大学の学生チームが事例報告を行った。他大学の取り組みに学ぶと共に、プロジェクト実習の背景となる産業界ニーズ事業についての理解を促進することも狙った選択で

あった。しかし、4 大学の内の一つは本学プロジェクト実習 C の ICE チームであり、そのこと自体は大いに誇るべきことであったが、こと先進地実地研修（近郊）の趣旨に限って言えば、二兎を追った感は否めなかった。

以上の経緯を踏まえて、2015 年度は当初より別の催事を広く検討することとした。その結果、12 月 6 日に東京・拓殖大学で開催される「社会人基礎力育成グランプリ 2016 関東地区予選大会」を対象とすることとなった (<https://www.mda.ne.jp/kisoryoku/index4.html>)。

同催事は、本学「根力」のベースとなっている「社会人基礎力」

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

について、全国の大学における育成事例とその成果を学生チームが発表する場として設定された。2007 年度に全国 7 大学でスタートし、全国規模のイベントに発展している。今年度の関東地区予選会には、信州大学他全 15 大学・17 チームが参加しており（図 2）、質・量共に先進地実地研修（近郊）の対象として申し分の無い内容であった。

なお、団体での参観となるため予め事務局に参観許可のお願いをした。ご担当の拓殖大学商学部教授・長尾素子先生、諏訪東京理科大学准教授・市川純章先生には、会全体のご準備で大変お忙しい中、種々ご支援を戴いた。記して感謝申し上げます。

図 1: 関越グループシンポジウムチラシ

社会人基礎力育成グランプリ2016 関東地区予選大会タイムスケジュール			
	時間	順番	学校名・学部名
第1レイン C201	12:50~13:05		開会式
	13:05~13:10		会場移動
	13:10~13:30	①	埼玉女子短期大学 国際コミュニケーション学科エアラインホスピタリティコース
	13:30~13:50	②	城西大学 経営学部
	13:50~14:10	③	千葉経済大学 経済学部経済学科
	14:10~14:30	④	創価大学 経済学部経済学科
	14:30~14:50	⑤	明星大学 明星教育センター
	14:50~15:00		休憩
	15:00~15:20	⑥	大東文化大学 国際関係学部国際関係学科
	15:20~15:40	⑦	東洋学園大学 現代経営学部現代経営学科・広告マーケティングコース
15:40~16:00	⑧	拓殖大学 政経学部法律政治学科	
16:00~16:30		休憩	
16:30~17:00		学生企画	
17:00~17:20		【結果発表】	
第2レイン C301	12:50~13:05		※開会式はC201で行います
	13:05~13:10		会場移動
	13:10~13:30	①	芝浦工業大学 工学部共通学群
	13:30~13:50	②	信州大学 サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボナリー (SVBL)
	13:50~14:10	③	諏訪東京理科大学 経営情報学部・経営情報学科
	14:10~14:30	④	多摩大学 経営情報学部
	14:30~14:50	⑤	創価大学 経営学部経営学科
	14:50~15:00		休憩
	15:00~15:20	⑥	拓殖大学 国際学部国際学科
	15:20~15:40	⑦	東洋大学 社会学部社会文化システム学科
15:40~16:00	⑧	明治大学 経済学部経済学科	
16:00~16:20	⑨	日本文学 人間学部心理カウンセリング学科	
16:20~16:30		休憩・C201へ移動	
16:30~17:00		学生企画・結果発表はC201で行います	
17:00~17:20			

図 2: 関東地区予選大会スケジュール

(2) 事前準備

事前準備として、「研修の趣旨」「社会人基礎力と根力の関係の確認」「発表を聞くに当たっての基本姿勢」を周知すると共に、

- ①採点表フォームを配付しての作業指示
- ②事後レポート課題のアナウンス

③12月12日に本学水戸キャンパスで開催予定のプロジェクト実習活動報告会での報告担当者決定を行った。

連携関係にある常磐大学・茨城キリスト教大学の内、常磐大学については残念ながら2015年度は単位互換履修生が皆無という状況であった。そこで、プロジェクト実習履修生以外でも希望があればご参加戴ける旨ご連絡し、一名の非履修生参加者をご紹介戴けた。ご協力に感謝申し上げます。

(3) 2015 年度先進地実地研修（近郊） 研修活動概要

2015 年度の先進地実地研修（近郊）は、履修生 20 名・非履修生参加者 1 名・引率教員 2 名で実施した。当日は、しおり（図 3）の「Ⅱ：全体日程表」に沿って諸事滞りなく活動できた。

図 3:2015 年度先進地実地研修(近郊)しおり(1/4 縮小)

**2015 年度 プロジェクト実習
先進地実地研修(近郊)**

**社会人基礎力育成グランプリ 2016
関東地区予選大会**

<https://www.mda.ne.jp/kisoryoku/index4.html>



2015 年 12 月 6 日
拓殖大学文京キャンパス C 館 201 教室・301 教室

I：趣旨説明

1：目的

先進地実地研修は、プロジェクト実習の一端として2013年度から実施しています。プロジェクト実習履修生の全員参加を原則として東京近郊で実施する「近郊」と、履修生代表者若干名により東北地方～近畿地方で実施する「遠郊」の、二種類が準備されています。そのいずれも、目的とする所は

プロジェクト実習と親和性の高い目的・内容・形態で実施されている他大学の取り組みを参観し、これまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習は勿論、各人の今後の勉学・諸活動に活かすべく<学び>を得ること

にあります。
このしおりの「IV：担当教員より」にも記しているように、漠然と眺めていたのでは効果がありません。「他校の取り組みを自らの取り組みと比較検証する」という姿勢で参観する事が重要です。

2：今年度の参観対象

2015 年度の先進地実地研修(近郊)では、東京・拓殖大学で開催される「社会人基礎力育成グランプリ2016・関東地区予選大会」(<https://www.mda.ne.jp/kisoryoku/index4.html>)の参観を行います。

3：社会人基礎力と根力

「社会人基礎力」とは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している能力です。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、経済産業省のIPでは、「企業や若者を取り巻く環境変化により、『基礎学力』『専門知識』に加え、それらをうまく活用していくための『社会人基礎力』を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきました。」とされています。

プロジェクト実習の背景となっている茨城大学就業力育成支援事業・根力育成プログラムでは、「根力(ねちから)」という能力を掲げていますが、この根力は社会人基礎力をベースに茨城大学独自の要素を加えて構成しています。つまり、根力のコア部分をなすのが社会人基礎力ということになります。

4：社会人基礎力育成グランプリ

社会人基礎力育成事業の一端として、全国の大学における「社会人基礎力」の育成事例とその成果を学生チームが発表する場として、「社会人基礎力育成グランプリ」が設定されました。2007年度に全国7大学でスタートし、2012年度以降は100チーム以上が参加する大規模なイベントとなっています。現在は創価大学に事務局を置く非営利組織「社会人基礎力協議会」が運営しています。

II：全体日程表

- 9：00 茨城大学水戸キャンパス発
*水戸キャンパス乗車者は、8:50までに生協前周辺に集合
- 9：15 JR赤塚駅北口発
*JR赤塚駅北口乗車者は、9:05までに指定の場所(次ページ参照)に集合
- 12：00～12：30頃 拓殖大学着
*拓殖大学文京キャンパスC館 201 教室・301 教室
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
URL：<http://www.takushoku-u.ac.jp/>
- 12：50 開会式
13：10 発表参観開始
- *発表は二系統に分かれてC201・C301の二カ所で別々に行われます。二手に分かれて参観して下さい。参観者が片方に偏りすぎないよう、適宜譲り合ってください。
*参観教室の変更は、原則として14:50～の休憩時間のみとします。やむを得ない場合は発表者の交代時に移動して下さい。発表中の移動は発表者ならびに他の参観者に失礼となりますので禁止します。
- 13：10 発表 1グループ
 - 13：30 発表 2グループ
 - 13：50 発表 3グループ
 - 14：10 発表 4グループ
 - 14：30 発表 5グループ
 - 14：50 休憩
 - 15：00 発表 6グループ
 - 15：20 発表 7グループ
 - 15：40 発表 8グループ
- 16：00頃 発表参観終了(第8グループ発表終了時点で中座)
*発表は9グループまであり、更に審査その他と続きますが、帰着時刻の関係から本学の参観は8グループまでとします。発表者・参観者の失礼にならないよう、静かに退出して集合場所(当日指定します)に移動して下さい。
- 16：15頃 拓殖大学発
19：00頃 JR赤塚駅着
*JR赤塚駅降車者は解散
- 19：15頃 茨城大学水戸キャンパス着
*完全解散
- *バスは大学間で準備しますので、茨城大学一拓殖大学間の足代は不要です。
*食事代等は、各自の負担となります。
*昼食は各自持参し、車中～開会式前までの間に適宜済ませて下さい。
*夕食については、解散前に摂る／摂らないを含めて、各自の自由とします。
*移動の途中、サービスエリア等でトイレ休憩を取ります。短時間ではありますが、その際に弁当等を購入することは可能です。
***当日の緊急連絡は、鈴木敦の携帯(XXX-XXXX-XXXX)へお願いします。**

参加者名簿・乗降地一覧

<略>

赤塚駅北口乗降地地図(赤丸の付近に集合して下さい)

<略>

III：主催者より

- 主 催：社会人基礎力協議会
共 催：経済産業省
後 援：公益社団法人経済同友会、日本商工会議所
協 賛：SMBコンシューマーファイナンス株式会社、株式会社ウチダ人材開発センター、日本経済新聞社、キーフアクター株式会社、メディア総研株式会社
- ・満席になりました場合には、立ち見や入場制限を行う可能性もありますので、予めご了承ください。
 - ・当日は学食が休業日です。キャンパスから徒歩3分圏内のスーパーや飲食店をご利用ください。なお、当日受付時に駅周辺の飲食店マップを配付します。ご活用ください。
 - ・当日はクロークや荷物置場等はございません。貴重品は各自で管理していただくようお願いいたします。万一、トラブルが発生しても事務局では一切、責任を負いかねます。
 - ・撮影は行って頂いて結構ですが、発表の邪魔にならないよう配慮してください。ただし、事前に発表者の許可を得るようにしてください。
 - ・スケジュールが変更になる場合もございますので、予めご了承ください。
- 【予選大会当日の連絡先】
会場校：拓殖大学 文京キャンパス
就職キャリアセンター 統轄部
担当： 栗田(きだ) 後藤
TEL：XX-XXXX-XXXX E-mail：xxxxxxxxxxxx@of.takushoku-u.ac.jp

IV：担当教員より

1：当日のスムーズな活動のために

当日は団体で行動します。遅刻や無断欠席等の無いよう、お願いします。
当日、緊急時の連絡は、下記鈴木敦の携帯へお願いします。

鈴木敦携帯電話番号：XXXX-XXXX-XXXX

＊鈴木敦の携帯電話は、普段は不携帯電話です。当日以外はメールをお願いします。
車に酔いやすい人は、乗車時にその旨伝えて下さい。前寄りの席を手配します。

2：学びのために

いくら優れた取り組みでも、漠然と眺めていたのでは学びは得られません。学びを活性化させる「しかけ」として、以下の2点をお願いします。折角の機会です。アクティブに取り組んで下さい。

(1)採点表の記入・提出

①採点表の記入（当日・紙媒体）

次ページに採点表を組み込んでいます。それぞれの発表を聴きながら・同時進行で記入して行って下さい。

「コメント」欄は、できるだけ記入して下さい。但し、「コメントに悩んでいる内に次の発表を聞き漏らした」となると本末転倒ですので、空欄になっても構いません。

採点・コメントとも、あんまりあれこれ考えすぎると、却って上手くいきません。直感で、「エイヤッ!」と書いてしまうのがコツです。

②採点表の提出（後日・電子媒体）

ガルーンの「プロジェクト実習（全体）」おしらせ欄に、採点表のフォームをアップしています。これに上記①のメモを転記して、鈴木敦（XXXXXXXXXXXX@ve.ibaraki.ac.jp）宛に12/20までに送信して下さい。その際、**ファイル名・メールの件名はいずれも「採点表（氏名）」**として下さい。

電子媒体のフォームには、標題の下に学籍番号・氏名を記入する欄があります。忘れずに記入して下さい。

＊②は、プロジェクト実習履修生の皆さんは「必ず」、プロジェクト実習履修生以外の皆さんは「できれば」お願いします（鈴木敦宛にメールを載ければ、採点表フォームをメールでお送りします）。

(2)ミニレポートの作成・提出

既にお送りしている「ミニレポート作成指示書」に沿って、作成・提出して下さい。念のためこのしおりの7ページに指示書を再録します。

＊ミニレポートについても、プロジェクト実習履修生の皆さんは「必ず」「レナディで」、プロジェクト実習履修生以外の皆さんは「できれば」「鈴木敦宛に添付ファイルで」提出して下さい。

20151206先進地実地研修（近郊）社会人基礎力育成グランプリ関東地区大会採点表

No.	大学名	採点（1=最低・6=最高の、5段階評価）							合計	
		発表				活動内容				
		PPT	ハンドアウト	プレゼン	質疑応答	着眼点切り口	フロンティング	具体的取り組み		計画の達成度
1A 1B	埼玉女子短期 芝浦工業									0
コメント										
2A 2B	城西 福州									0
コメント										
3A 3B	千葉経済 諏訪東京理科									0
コメント										
4A 4B	創価A 多摩									0
コメント										
5A 5B	明星 創価B									0
コメント										
6A 6B	大東文化 拓殖B									0
コメント										
7A 7B	東洋学園 東洋									0
コメント										
8A 8B	拓殖A 明海									0
コメント										

大学名欄 参観しなかった大学名を削除
採点欄 1=最低～5=最高で記入
＊「学び」欄は、「発表者達が、今回の活動を通じてどの程度学びを得たと思われるか」についての採点者の推測
合計欄 入力時に自動計算されます

(4) 研修日程終了後の活動

①採点表

採点表は、当日、しおり（図 3）の最終頁に綴じ込まれていた紙媒体のフォームに手書きで記入したものを、後日電子媒体にして提出する形を採った。プロジェクト実習非履修の1名を含め、全員が提出した。大学名を「A～H」と置き換えた上で、一例を図4に示す。

当日は二会場制が採られたため、学生達は同一時間帯に行われる二つの発表のどちらか片方だけを聞くこととなる。また、採点欄の内「ハンドアウト」については、当日のプレゼンが全てハンドアウト無しで行われたため、一律に採点対象外とした。

発表間のインターバルが短いため、コメント欄は「できるだけ記入」という緩やかな指示にしたが、長短はあるものの、殆どの学生が何らかの記入をおこなった。

筆者が違和感を覚え、学生のコメントにも類似のとまどいが散見したケースとして、「教員の徹底的な指示の下に学生が全力で動き、客観的に高い達成度を持つ成果物を生んだ」取り組みがある。「成果物のすばらしさに異論は無い。しかしここまで教員が指示したら、それはPBL授業と言えるのであろうか？」という問題である。

しかし、冷静に考えてみれば、社会人基礎力育成グランプリは、「大学が提供したカリキュラムへの取り組みを通じて、学生がどこまで社会人基礎力を身につけたか」を競うものである。具体的な手法として、しばしば「課題解決」が採用されるため、あたかも「PBL授業の実践と成果の競技会」であるかのような印象を抱きがちである。しかし、同グランプリの本質はあくまで「社会人基礎力育成の達成度」を競う所にあり、「理念型としてのPBL授業の実践」を競うものではない。「PBL(的)手法」は、社会人基礎力育成の有力な手法の一つではあるが、決して唯一の手法ではないのである。

一方で、本学のプロジェクト実習は「学生が自発的に取り組み・失敗の中から学びを得ることを最優先とする」のが設計の根本理念であり、「教員は極力手を出さない」というのが運用の大方針である。

学生達を感じた「とまどい」は、彼らが本学プロジェクト実習の理念・方針をよく理解してくれていることの証左とも言える。

この切り分けが、事前に担当教員自身にできておらず、必然的に参加学生にも告知されていなかったために、採点に当たっても混乱を招いた部分があり、反省している。次回、本催事を参観させて戴く場合には、本催事の趣旨と本学のプロジェクト実習ならびに先進地実地研修（近郊）の趣旨との間に存在するズレについて、事前に十分な整理と説明をしておく必要があると感じた。なお、PBL 授業と成果物の完成度を巡る問題については、第IV章 2-(6)トークセッションも参照されたい。

NO.	大学名	採点 (=最低・・5=最高 の、5段階評価)									合計
		発表				活動内容				学び	
		PPT	ハンドアウト	プレゼン	質疑応答	着眼点切り口	プランニング	具体的取り組み	計画の達成度		
1	A大学	3	0	5	4	4	4	5	4	4	33
コメント	観客に意識的に視線を配り、明瞭な声でトップバッターにして堂々とプレゼンしていたと思う。現場の中の色んなダメ出しを踏まえて、工学的アプローチを効果的に農業に組み込むという点で、第一弾、第二弾の活動につながりを感じられた。PPTはLINEのトーク画面のような演出があったりして面白かったが、全体的に文字量が多く感じた。										
2	B大学	5	0	5	4	5	4	4	4	4	35
コメント	活動の流れが明瞭でわかりやすい良いプレゼンだったと思う。一年生だが堂々とした発表だった。活動の中でどのような基礎力を磨いたのかが明確で、状況の分かるイラストも用いたデザイン性の高いPPTだった。具体的なプロジェクトの活動内容を提示した上で、どのよう課題解決に作用したのかをもっと知りたかった。										
3	C大学	4	0	1	2	5	5	5	3	4	29
コメント	図を多用して分かりやすいPPTだったと思う。プレゼンでは原稿に目を落としている姿が気になり、せつかくのPPTのアニメーションとタイミングがずれたりともったいなかった。発表時間をオーバーしてしまい動揺したのか、その後の質問でチグハグな回答が目立った。取り組みとしては非常に興味深かったので惜しかった。										
4	D大学	5	0	4	3	3	5	5	5	3	33
コメント	吹き出しやイラストを用いた図解が面白いPPTだった。「900回を超えるメディアアプローチ」など、具体的な数字で活動の成果が提示されていてインパクトがあった。暗転で聴衆の注意を引くなど、工夫されたプレゼンだった。それだけに、質問でややのを外れた答えをしている姿が目立った。										
5	E大学	4	0	4	4	5	4	5	4	4	34
コメント	声・表情・ジェスチャーなど練習が感じられるプレゼンで、非常にハキハキとしていたが「作られすぎている」印象を受けた。原稿をまるまる覚えていて、その中に学生自身の言葉というものが感じられなかった。質問を受ける際、相槌をしながらメモを取り、ある程度回答を用意して臨んでいる点は見習うべきものを感じた。										
6	F大学	4	0	5	4	5	4	5	3	4	34
コメント	突出して良い発表というわけではなかったが、安定していて印象の良いプレゼンだった。落ち着いて聞くことができ、内容が頭に入ってくる感じだった。「50年後の自分達のために」と視点を切り替えて活動したことで課題解決力を磨いていった印象を受けた。質問の回答では、一人称で素が出るなど危うい姿もあったが、全体を通して良い意味で学生らしかった。										
7	G大学	3	0	2	4	5	5	4	3	3	29
コメント	笑いどころが用意されたプレゼンで、浴衣や墨で文字を書いたTシャツで登場するなど、エンターテインメント性に富んだプレゼンだった。各自の役割分担を明確にしチームワークを形成しているようだった。PPTは文字量が多く、少々見るべきところが分かりづらかった。この活動を通して結局英語力は向上できたのが疑問に思った。										
8	H大学	4	0	2	4	4	4	5	4	4	31
コメント	警視庁との協力で活動を進めるなど、非常に活動的なイメージを持った。原稿に目を落としている時間は長いですが、内容が入りやすい話し方をしていた。PPTは適度に図は入っているが、少々文字が細かくて見づらかった。質疑応答では学生の体験談を通して、自分の言葉で話している姿が好印象だった。										

図 4: 採点表記入例 (茨城大学 13L1013S 磯貝麻菜)

②レポート

先進地実地研修（近郊）参加者には、しおりと同時に図5に示すレポート作成指示書を配付した。

20151206 先進地実地研修（近郊）ミニレポート作成指示書

20151120 鈴木敦

ミニレポートは、以下の要領で作成して下さい。

1：レイアウト・布字・字数等

ワードでA4タテ・横書き

余白は上下左右各 23・21・20・20

45字/行 48行/ページ

基本的にMS明朝・10.5ポイントとするが、必要に応じて変更可。

必要に応じて写真・図表等を盛り込む

写真・図表等を除いて「400字以上・上限無し」（文字カウント機能で確認して下さい）

*題名・氏名も文字数に加えます。

2：ファイル名・送信先・締切等

ファイル名：2015 先進地実地研修（氏名）

送信先：レナンディ「プロジェクト実習（全体）」の「課題」の04番

締切：2016年1月6日 23:00

3：レポート冒頭の体裁について

(1)第一行に〈中央揃え〉で題名を記して下さい。

*文章の内容に沿った題名を考えて下さい。「先進地実地研修に参加して」式の、〈小学生の夏休みの日記のような〉f(^_^; 題名は避けて下さい。

(2)第二行に学籍番号氏名を〈右寄せ〉で記して下さい。

(3)第三行から本文を記して下さい。

4：内容

他大学の発表を聞いて、「これを学んだ・今後活かしたい」ということを記して下さい。

(1)「素晴らしいから見習いたい」「あれはよくない。ああなつてはいけない」のどちらからでも/両方からでも結構です。

(2)記述対象は、「取り組み内容」「プレゼンの仕方」のどちらでも/両方でも/それらを踏まえてより踏み込んだ内容でも結構です。

(3)取り上げる発表は一校でも・複数校でも結構です。

(4)記述は、なるべく具体的にお願いします。

悪い例「発表してくれた大学は、みんなすごいなー、見習わなくちゃいけないなーと思いました♪」

よい例「〇〇大学の取り組みにおいて、メンバーは××というプロジェクトに取り組む中で△△という問題に直面し、◎◎という対応をすることでこれを解決した。類似の問題は、今年度の自分のチームでも発生したが・・・」

「〇〇大学のプレゼンは、使用したPPT・ハンドアウトの見やすさもさることながら、発表時のアイコンタクトや・・・」

「〇〇大学の発表は、内容・プレゼン共に素晴らしかったが、特別積極的な一名が一人で切り回して来たな、ということがありありと伝わって来た。チームでの活動を前提とするプロジェクトで・・・」

図5:レポート作成指示書

レポートは、履修生の参加者全員が提出した。さらに、提出義務が課されていないにも関わらず非履修生の参加者1名も提出してくれた。主催者として大変嬉しいことであった。以下に所属チーム順に掲載する(図6)。各チームの構成と取り組んだプロジェクトについては、第Ⅱ章の図1ならびに各チームの活動報告を参照されたい。

教員からの指示は「400字以上」という極めて緩いものに留めたが、最低字数を大きく上回るレポートを作成した学生も多かった。内容的にも、「PPTの作成法」「プレゼンの作法」から始まり「チーム活動の進め方」「具体的なPDCAの回し方」さらには「プロジェクトを自らの問題意識・学びにどう位置づけるか」という最も根本的な事柄まで、実に多くのことを学んでくれている。貴重な機会をご提供下さった長尾先生・市川先生始め関係者の皆様に篤く御礼申し上げます。

なお、図4と同様に、大学名は機械的に「A~LL」と置き換えている。その際、図4との間ならびにレポート相互間での大学名の突き合わせは、敢えて行っていない。

図6:事後レポート

<プロジェクト実習B:大チーム「さとみ・あい」・小チーム「里美力伝え隊」「泉美・ゆう」>

各大学の発表を聞いて学んだこと

茨城大学人文学部 1312217f 山田 真理子

A大学の発表は、内容が特に素晴らしいものであったが、プレゼンは、発表者一人一人が決められたセリフを、実に丁寧に言っているだけに過ぎなく、酷い言い方かもしれないが、機械のように感じられた。しかし、目線の位置、声の大きさ、姿勢はとても良かったので見習いたい。

B大学は、商店街活性化を図るというプロジェクト内容だが、実証分析を多様に用いて、商店街の徹底分析をし、また、商店街共同のマップ作り+クーポン作成、学生同士のつながりのための雑誌作成により、地域の人と大学生とを繋げることを目的とした。これは泉美・ゆうチームの活動と類似する点が多く、親近感の湧く発表であった。商店街全店舗がこのプロジェクトに協力したのかどうかは疑問であるが、クーポン作成や大学生向けの雑誌作成は面白いものと思った。

大学名は忘れてしまったのだが、審査員による発表後の質疑応答に対して、発表者3人のうち一人だけがメインで受け答えするチームがあった。チーム力が重視されるプロジェクト実習において、チーム全体ではなく、一人だけがメインで行動するという図はよろしくないのではないかと感じた。

発表に際して共感した内容

茨城大学人文学部 1411024h 大枝 俊貴

私が深く印象に残った発表は、C大学とD大学のものであった。この二つの大学に共通する点がある。それは、外部の者である学生が、ある特定の地域に入りPRもしくは活況を促すことを活動内容としているという点だ。これは、「さとみ・あい」ないしは「泉美・ゆう」のメンバーとして活動する私にとって、様々な面で自分ごとであり、共感する部分が多い。それゆえ考えさせられることが多かった。以下で具体的に述べていく。

C大学の活動を簡単に紹介すると、PRが不足する富山県を学生が動画等を制作し、広報していくというものだ。ここで問題になるのが、審査員の方々も指摘し、私も一聴講者として思ったことだが、「富山県の人々は本当にPRを求めているのか?」という点と「どういったPRを求めているのか?」ということである。つまり、活動は独りよがりではないのか?余所者がPRなどというのはおこがましいことなのではないか?ということである。これは、泉町と里美を繋げるなどと銘打つ「泉美・ゆう」、里美のPRを活動の主とする「さとみ・あい」にもいえる問題である。C大学の場合、この質問に要領を得ない答えをしていた。用意された土壌での活動だからだろう。私たちと同じだ。用意された土壌だとしても、自分なりの理由を考えなければ、そこに説得力はない。また、人をうごかすことは

できないと痛感した。

D大学は、ホアイフンタイと南三陸を繋ぐという活動を行っている。なぜ、このふた地域なのかという質問に対し、「先輩から引き継いで」という回答であった。これでは、いくら良い活動でも、評価はえられないだろう。ただ、自らの活動を自己満足という前提ではじめ、その活動の結果から意義のあるものであるように思っていくというストーリーは非常に面白いと感じた。自己満足であるという前提から始めるということは、新しい知見であった。

中にはもちろん、動機がしっかりとしている活動もあったのだが、私はむしろ動機が揺らいでいるこのふたつの大学に共感し、学びを得た。最後に、ぜひこの発表をプロジェクト実施前に見ることができればと強く感じた。自己を相対化でき、より有意義な活動につなぐことができるのではないかと感じた。

先進地研修で学んだプロジェクトに取り組む姿勢

茨城大学人文学部 14L1090X 鈴木 透

私が今回の発表の中で一番「素晴らしい」と感じたのは、E大学の「幸せおすそわけプロジェクト～Mottainai を行動に食品ロス削減を目指して～」だ。

その理由は2点ある。まず一つ目は、実施していたプロジェクトの中身の素晴らしさだ。日本ではホテルなどの飲食店で食べ残しが廃棄されている一方で、ケニアでは食事を得られない子どもが沢山いるという課題に対して、食べ残しを持ち帰るドギーバッグを販売するという事を実施した。日本での食べ残しを減らしながら、そのドギーバッグの売り上げがケニアの子ども達の食糧支援になるという仕組みが非常に素晴らしいと感じた。また、その仲介を学生が行っていたり、営業もしていたというのが更に私にとって衝撃であった。学生だけでも国境を越えた活動を行えるのだと感じた。

二つ目は、その活動を学生の授業の中の活動として終わらせてしまうという意志がなかったことだ。正直なところ、授業ではやってくれど卒業して起業してまでその事業を続けるというところまではいけないことが大多数であると思う。なので、彼らが「卒業後も続けて行きたい」と迷い無く言っていたのが印象的であった。

今回の研修でプロジェクトの内容はもちろん、その進め方なども含めて非常に学びが多かった。是非、今後に活かしていきたいと思う。

他者を知り 自分を知る

茨城大学人文学部 14L2121F 助川 実咲

先進地実地研修に参加して、様々な大学の活動を知ることができた。わたしたちと同様に地域に密着した活動があれば、遠い異国と連携した壮大な活動をしているところもあり、とても驚かされた。しかし、どこの大学の発表も上手でとても勉強になったが、取組み内容については私たちの活動も遜色ないものではないかと感じた。ただ、私個人としては、F大学の発表でも問題点として挙がっていたが、「誰のために活動するのか」ということを明確にできていなかったのではないかと気付かされた。さとみ・あいは先輩たちが築きあげてきた既存のプロジェクトチームであったため、里美地区の活性化を目的とすることは理解していたものの、荷見さんや豊田さん以外の里美地区の住民が、本当に活性化してほしいと望んでいるのかどうか考えたことがなかった。きっとなかには今のままの状況で満足だという人もいるのではないかと思った。この先進地実地研修は、プレゼンや質疑応答が素晴らしいのはもちろんのこと、自分たちの活動を見直す良いきっかけとなった。自分たちだけで振り返っても気づかない反省点も他の活動を知ることで見えてくる。関東大会でも十分にハイレベルであったので、ぜひ全国大会もみてみたいと思った。

<プロジェクト実習C:大チーム「異文化交流プロジェクト」・小チーム「Link」「DCE」>

リーダーとしてチーム力を高めるためにできること

茨城大学人文学部 13L1130H 藤堂 みさ都

私が特に印象に残ったのは、G大学である。発表内容は勿論素晴らしかったが、それよりもチーム力に驚いた。G大学は8人程のチームで活動しているようだ。メンバーの中には留学する人も多く、入れ替えが多いという難問があった。しかしその中でも情報共有を徹底的に行っている印象を持った。具体的に言うと、誰が誰に共有を行うのかをミーティング中に決めることやリーダーが不在になった時個人の役割を超えて補い合っていること、また集まることができる時間を把握することが例として挙げられていた。私達は二大学間が連携していることもあり、ミーティング時間を確保することが非常に難しかった。加えてLinKチームでも学年がばらばらであったために、限られた時間の中でミーティングをしなければならなかった。私はリーダーとしてミーティングをやりたいということを常に発信してきたが、なぜミーティングが必要なのか、どういうことを話し合うつもりなのか、具体性が伴った発信ができなかったと振り返る。「とりあえず集まって話し合いたい」という気持ちが先行し、私の頭の中では話す項目が整理されているがそれをチームに伝えることが不十分だったために、ミーティングを行う意義に疑問符を浮かべた人もいたのではないかと考える。その点においてG大学では、事前にミーティングで話し合う項目を全員で共有し、また全員の空きコマを模造紙に書いて共有していた。リーダーが一方的に管理するのではなく、模造紙で全員が一目で共有できるようにし、把握することが大事だと分かった。模造紙でなくても表にするなど工夫ができる。全員が集まることが難しい状況にあるということ把握していれば、時間を有意義に使う意識や焦りなどが一致し、ミーティングに対する意識が変わったのではないと思う。チームとして組織としてやっていく上で、目的や意欲はメンバー間で差異があってもうまく行かないと考える。その点でGの発表は非常に参考になった。今年度初めてリーダーを務めて難しさを感じた。次そのような機会がある時は、先進地実地研修で学んだことを活かしてやっていきたい。

驚きの連続

茨城大学人文学部 14L1135G 野中 萌

まず、このような大会に出場するだけあって、ヒドいからこうなりたくないと思わせるような発表は一つもなかった。しかし、ハイレベルな戦いではあるが、団体ごとに差が見られたと感じる

私が一番驚き感心した発表は、H大学の発表である。食品ロスの問題からドギーバックを企業に取り入れてもらえるように活動していたグループであり、内容・プレゼン共に一番優れており、メンバー全員がハキハキと発表していたので、私も見習わなければと思った。また、メンバーのスケジュール管理について、途中でインターンシップや留学などで出入りするメンバーがおり、ミーティングや実際の活動に支障をきたすだろうと思われたが、全員のスケジュールを把握し管理したり、空きコマにミーティングを重ねることによって、活動が滞りなく進められていて驚いた。また、私はチームで渉外という役割を担っているので、特に渉外の仕事が目に付いたのだが、途上国や企業とつながるために、何度も電話や訪問を重ねていることに、見習うべき忍耐力ややる気を感じた。都会の大学だからかもしれないが、行政やNPO、記者の方とコミュニケーションを取れるという状況に驚いたし、そのような機関を活用することもできるのだと参考になった。

学生主体であるべきプロジェクト

茨城大学人文学部 14L1173H 渡邊 悠

私は、I大学の「幸せおすそわけプロジェクト～Mottainai を行動に 食品ロス削減を目指して」の発表内容、活動内容に感銘を受けた。このプロジェクトチームでは、メンバーの入れ替えが多くあ

り、最初のメンバー全員が最後までプロジェクトに取り組むことができないという問題があった。しかし、プロジェクトメンバーのタスクとスケジュール管理、Skype などを通じて仕事の引き継ぎを行うなど、対策を取った。私達異文化交流プロジェクトチームでは、茨城大学と茨城キリスト教大学の連携チームであったため、メンバー全員が揃うことは難しかった。そのため、I大学のプロジェクトチームと同様に、メンバーの空きコマを確認し集まれる日を把握し、茨城キリスト教大学のメンバーとはSkypeを利用してミーティングを行うことがあった。また、ミーティングを行う前に、「to do リスト」のような、事前に議題を決めておくといったことをすることにより、時間を有効活用することができた。I大学プロジェクトチームの発表では、暗記したままの発表ではないことが伝わってきた。チームのメンバーが伝えたい事を、ゆっくりはっきりわかりやすく発表していた。

このチームと比べると、J大学の発表は聞き手のこちらがハラハラしてしまうことがあった。発表内容を丸暗記で、「間違えたくない！」という気持ちが伝わってくるだけで、プロジェクトの内容やチームのメンバーが伝えたいことが何なのか分からなかった。

K大学の「冷や汗体験英語プログラム(SHODO EXPERIENCE)への挑戦」チームの活動は、とてもユニークな活動で、貴重な経験ができたということが伝わってきた。しかし、このプロジェクトの目的の一つに「学生に逃げ場のない英語環境を提供することで、学習への意欲を喚起すること」というものがあった。私が考えていた社会人基礎力育成のためのプロジェクトはチームのメンバーが自ら行動を起こすことであるため、このチームの活動目的や指導教員の在り方について疑問に感じた。このチームの発表で、「先生は崖の上からメンバーが這い上がってくるのを見下ろしている」という表現をしていたが、先生が主体ではないので、先生がチームメンバーの這い上がる姿を眺めている必要はないと思うと同時に、チームメンバーが何のために何をしたいのかを考え行動する必要があるのではないかと感じた。

私は、今回この先進地実地研修に参加して、プロジェクトの内容は多種多様であると感じた。自分たちがやりたいと思ったらどんなことでもでき、工夫次第で困難もチャンスに変えることができるのだと思い、私は異文化プロジェクトチームとしてもっとできることがあったのではないかと考えさせられた。今回の会場であった拓殖大学のキャンパス内で、日本語能力試験の会場を間違えてしまった留学生の対処をしたりと、学ぶことの多い日となった。

研修に参加し今後、見つめ直すべきこと

茨城キリスト教大学文学部 15SP109A 大高 詩織

①L大学

北陸新幹線延伸を背景とした富山市の地域活性化～隠れた富山のガラス～

L大学のプレゼンは、内容に合わせて服装を工夫していたところやPPTの内容も学科に合わせて旅に出ていくような気持ちを聞く側に持たせ、どんな話が飛び出してくるのだろうか、というような興味を持ちながら聞くことができた。また、活動内容においても解決すべき問題をはっきりさせ、実際に富山県を訪れ街頭調査を行うなど現地の状況を踏まえながら解決に取り組んでいたと感じた。体験した成果物の掲示は写真などで見るよりも視覚効果があり、メンバーが一人一人しっかり取り組んできた、ということが伺えた。他には、研修の中で市の考え方と自分たちの考え方にズレが生じてしまうという問題に直面したが、話し合いや市の事を知りもう一度目的を見直すことで生じたズレも解決することができていたのではないかと感じた。行き詰ってしまったらもう一度考えて、話し合うことが大切ということを感じた。

②M大学

幸せおすそわけプロジェクト～Mottainaiを行動に食品ロス削減を目指して～

M大学の活動内では、メンバーの大きな入れ替えや減少という問題に直面したが、他の担当が代わりに仕事をしたりとお互いのカバーをしながら活動をしていった。自分の仕事ではないから、ということではなく全員で協力し活動して行くことの大切さを改めて感じた。また、スケジュールの管理を徹

底することで空いた時間を有効活用しての話し合いを持ち、そこで決まった内容も細かく議事録等で共有していったことも活動が円滑に進められることができた一つのポイントだと感じた。また、個人で解釈が異なる単語の理解を一定に定めたことで、勘違いをすることもなかったのではないかな。

今回、プロジェクト実習に参加し書記という役職に就いた時、内容を知らない人に伝えるにはどのような伝え方が一番分かりやすいのか、LinK チームとの間に解釈のズレは生じていないかな等に気を付けながら進めていたが、一度メンバー内での解釈を統一するというのも行えばより分かりやすい議事録や DCE チーム内での知らせを書くことができたのではないかと考えた。今後、同じような仕事をする時にはここで学び気付いたことを活かしていきたいと強く思った。

③N大学

冷や汗体験英語プログラム (SHODO EXPERIENCE) への挑戦

N大学のプレゼンも服装に工夫がしてあり、発表は会話をするような方法で進んでいたのも他の大学の発表よりも聞きやすく一層興味を引くようなプレゼンだった。型にはまらない発表が個性的でN大学の良さが出ていた。

活動内容においては、「得意分野」ではなくあえて「苦手分野」で活動を始めるという挑戦心に富んでいるなど感じた。自分に置き換えた場合、苦手な分野には失敗を恐れて挑戦しないことの方が多いので今後は自分を成長させるという意味でも恐れずに挑戦していきたい。また、活動していく中で各々の得意不得意というものが見えてきた中で、苦手な部分を得意なメンバーがフォローし穴を埋めていくという連携が取れていたことは活動の中でとても大切なことだったと思う。最後の質疑応答では、「自分でなんでもできる」と思っていたが「やはり人には限界がある」と感じ「メンバーに頼る」ことができるようになったということが強く印象に残った。自分にはまだ欠けている部分だと思っているので、メンバーを信頼し各々に合った仕事の割り振りをしていける様に努めていきたい。

チームの活動をうまく進めていくために学んだこと

茨城キリスト教大学文学部 15SP113A 栗原 大地

先進地実地研修に参加して多くのすばらしい発表を聞くことができ、自分としてもとても勉強になるところが多くあった。どの大学も発表の内容に関しては良い点が多くあったが、ここではその中からいくつか抜粋して書いていきたいと思う。

最初にプレゼンの発表について良かったと感じたのはO大学の発表だった。他の大学の発表でも多くの工夫はされていたが、どうしても細かい文字で書かれた文章が出てきたりして、聞き手として画面をみていると見えにくい部分が何度かあった。しかしO大学の PPT では実際に描いた絵や写真、またページによっては色を効果的に使うなどして聞き手に伝わりやすい工夫がされており、見ている側からしたらこの大学がどのような活動をしてきたのかがよく伝わってきた。今後、自分でも PPT を作る機会は多くあると思うが、今回のO大学の発表がとても参考になったためこれから作っていく際には、ここで学んだことを生かしていけるようにしたい。

次に活動について特に良かったと感じた大学が二校ある。まず一校目はP大学だ。この大学での活動をリーダーの方が話していたことでチームの活動を長い期間で行っていくにあたってメンバーそれぞれの週ごとのスケジュールを紙にまとめるなどして、活動しやすいように工夫していたと聞いていた。長い期間での活動を通して行っていくなかでメンバーが途中で入れ替わったり減少していくうえでも、チームに与える影響を最小限にとめることができたと言っていた。自分もリーダーとして活動していくなかでチームメンバーのスケジュールは把握していたつもりではいたが、紙にまとめたりすることはなく大雑把な管理になっていた。そのためメンバーの一人が急に参加できなくなったりすると慌ててスケジュールの組み直しを行ったりするなどして上手くいかないこともあった。自分もこのリーダーのように細かい管理をしっかりやることができていれば、もっとスムーズに活動していけたのではないかと感じた。今後もリーダーという役職について仕事などを進めていくことがあると思うため、この大学のリーダーのようにどのようなことがあっても冷静に対応できるようにして

いきたいと思う。

二校目はQ大学だ。ここの大学ではまず活動をしていくうえで、この取り組みに対するイメージをはっきりとした浸透がされていた。将来、就職していったら会社などでは結果をはっきり求めるところが多いと思う。これまでの人生では「失敗しても一生懸命やっていったからよし」で済まされていたが企業では「結果はどうであったか」に着目されるため、この結果に対する強い意識をもって活動をしていったという印象が見受けられた。こういった意識がはっきりと持たれていたため活動していくうえでも、どのように進めていけば上手く進められるかなど行程がはっきりしていた。結果としてそれが功を奏し良い結果につながっていったと感じられた。

自分が聞いた全ての大学は発表、活動内容ともにレベルの高いものであったが特に上記の三校が自分にとって強い影響を受けられた。チームの活動を通してどのように進めていけばいいかなどリーダーとしてどのように仕事をしていけばいいか、この点については多くのことを学ぶことができた。今後の人生でも必ず生かしていきたいと思う。

私が吸収してきたもの

茨城キリスト教大学文学部 15SP110A 寺門 美千花

私はこの先進地実地研修で多くのことを学びました。まずは、プレゼンの仕方にも様々な方法があるということです。R大学とS大学の方々はマイクを使わず発表していました。マイクを使わないことで、両手がフリーになります。どちらの大学もその両手がフリーになっていることを使い、ジェスチャー等を使って分かりやすくしていました。ですがマイクを使わないでプレゼンすることは簡単なことではないと思います。大勢の前に立つことはもちろん緊張するだろうし、普段よりも声が小さくなるかもしれません。マイクを使わないということは自分で声の大きさを調整し、一番後ろにいる聴衆まで聞こえるようにしなければなりません。私があの場合に立ったら緊張してしまい、普段より声が出なくなり、ましてやマイクなしでプレゼンをするのは辛いと思います。ですが今回のプレゼンの様子を見て、マイクを使わないで発表することは聴衆に言いたいことが伝わるということを知りました。手や体全体をつかって表現することで、説得力があがったので私もマイクを使わないでプレゼンしてみたいです。また、S大学は会話式でプレゼンを進めていました。チーム内で「〇〇さんはどうでした？」と質問を投げかけたり、ただ用意した原稿の内容を話すだけではなく、その場で会話しながら進行していたので「もっと聞いていたい！」と思えるプレゼンでした。この形でのプレゼンは初めてだったので、今回聞いてよかったです。聴衆に興味をもってもらいやすいと思ったので、何人かのチームでプレゼンをするときはこの形でやりたいです。

自分ができそうなものは、これから活かしていきたいです。今回先進地実地研修に参加できてよかったです。

<プロジェクト実習D:こみっとフェスティバルチーム>

関わりあいの中から見出す

茨城大学人文学部 14L1078L 佐藤 李咲

今回、先進地実地研修として他大学の様々な活動の発表を聞いて、参考になった面がとて多く楽しかった。今回見学させていただいた「社会人基礎力育成グランプリ 2016 関東地区予選大会」は、第一レーンと第二レーンに分かれていて、私は第二レーンの方の発表を聞いた。その中で特に印象に残っているT大学の「システム思考を用いた農業グループ支援プロジェクト」の発表を取り上げようと思う。

このプロジェクトは、日本の農業が抱える問題について工学的なアプローチで支援することを目指

すプロジェクトで、具体的には農作物の収穫時期などをデータ化しすぐに把握できるようなシステムをつくる、といった活動をしてきた。私がなぜこの大学を挙げたのかというと、まず第一にこのプロジェクトが地域志向のPBL授業、ということで、実際に農家の方々と話し合いを進める中でプロジェクトを進めていて、外部の方との連携を深めながら活動していく点で一番私たちのプロジェクトと共通点が多い、と感じたからである。彼等のチームでは、最初に作ったシステムが農家の方に認めてもらえない、という壁にぶつかり、農家への圧倒的な知識不足や、相手のニーズを考えず自分たちの成果のために行動していた点を改善し、農家へ何度も訪れたりすることでコミュニケーションを増やし、最終的に農家の方に認めもらえるようなシステム作りに成功したという。そういった、壁にぶつかったことからどうやってその部分を解決していったのかという部分が図を使いながら簡潔にまとめられていて、聞いている側も理解しやすかった。また、私も初めは、こみっとフェスティバル実行委員会会議に参加していても「ある一つのイベント」の運営に携わる、という客観的な視点からしか話を聞けなかったが、夏休みの期間に実際に複数のボランティア活動に参加するなかで、ボランティアの楽しさや大変さなどを肌で感じ、身近に感じることでよく「こみっとフェスティバル」に向けて考えることができた部分があり、相手方との関わりあいの中からプロジェクトの意義を再確認していたT大学の経験に共感した。他の大学の発表では、壁にぶつかって解決する、という事例は多く発表されていたが、何が原因で壁にぶつかり、その原因をどう改善したのか、についてはあまり詳しく発表されていない印象があり、その点においてT大学は一つ一つ丁寧に説明されていてよかったと思った。私たちも活動報告会では彼等の発表を見習って、改善点やその成果を丁寧に発表することを心がけることができたと感じている。

その他の大学も、それぞれが特徴ある活動をしていて、今回の先進地実地研修は自分にとってとても刺激ある日となった。この経験を今後の活動に活かしていきたい。

対照的であった二つの大学 —U大学とV大学—

茨城大学人文学部 14L2009F 安藤 有紀

2015年12月6日の先進地実地研修、社会人基礎力育成グランプリ関東地区予選大会にて、他大学の発表を聞いた。私が聞いたグループは2階で行われていたものである。どの大学にも特徴はあったが、その中で、私がかっこよく思えた大学の発表と、もっとも悪い発表であったと考える大学の2校を挙げさせていただく。良い発表をしたと考える大学はU大学、悪い発表であったと考える大学はV大学である。

では、まずはU大学をなぜ素晴らしい発表であったと考えたかを述べる。その理由として、主に2つある。パワーポイントの見易さ、発表者の姿の2点である。パワーポイントが見やすい、情報に集中することができることは、非常に重要なことだ。U大学のパワーポイントは文字の大きさ、太さを変えることで、どの言葉を伝えたいのかを理解しやすかった。特に、教師のパワーポイントがその傾向が強かった。V大学と比べると、色数は少ない。けれども、必要最低限の色数であることが良かった。つついパワーポイントを派手にしてしまいがちだが、今後気をつけていくべきだと感じた。次に、とりわけ素晴らしいと感じたものが、発表者の姿である。発表の最中、多くの大学がこちらを向いて言葉を発していた。けれども、話している人以外の、ほかの発表者はうつむいている場合が多かった。顔を合わせくすくすと笑っている場合もあった。そうすると、聞き手側は不快な気分になったり、そちらが気になり、発表に集中できないのだと実感した。だが、U大学は話しているときはもちろん、それ以外のときも、明るい表情を心がけ、こちらに視線を向けていた。

反対に、なぜV大学が悪い発表であったと考えるかについてである。こちらの理由もまた、2つある。パワーポイントの見づらさ、発表者の姿である。先ほど述べたとおり、V大学のパワーポイントは多くの色を使用していた。そのため、見た目として派手で明るくなっているものの、どの情報を伝えたいのかがわかりづらかった。また、文字の大きさや、太さをあまり変えていなかった。これらの

ことから、文字の色は最低限でよく、大きさや太さを変えることで、十分重要情報とそうでない情報の差別化が可能であると学んだ。次に、発表者の姿についてである。こちらもU大学と対照的だ。話していない人たちだけでなく、話している人もまた、身振り手振りが少なく、硬い表情となっていた。さらに、こちらへ視線を向けることが少なかった。自分もよくしてしまうことだ。気を付けていかなければいけない。

以上が、U大学のすばらしいと感じた点とV大学の悪いと感じた点である。けれども、U大学は時間内に発表が終わらないなど、悪い点があった。またV大学はゆっくりとした話し方で聞き取りやすく、また、硬い表情ながらもこやかになることもあり、良い点もあった。これらのことから、すべてが良い発表、すべてが悪い発表というものはないのだと再認識した。自分の発表時、そのことを胸に刻み、次につながるような発表としていきたい。

常に振り返ること

茨城大学人文学部 14L2050T 小野瀬 莉央

社会人基礎力育成グランプリ 2016 関東地区予選大会を見て、様々なことを学ぶことができました。まずプレゼンの仕方について述べていきたいと思います。全体として上手であると感じたチームは聞き手を常に意識してアイコンタクトや話すスピード、抑揚のつけ方を工夫しているように感じました。また、W大学の成果であるくるみの商品を実際に発表で示すことやX大学のコーヒー販売活動時の服装で発表することでより活動内容が聞き手に分かりやすくなるなど思いました。発表の流れとしてはW大学の壁→課題→解決策の明瞭な流れでプレゼンが進んでいた点、Y大学のSNSアプリのLINEのように事実経過を工夫して発表していた点などが参考にしていきたいと思いました。パワーポイントに関しては白と黒だけだどこが大切なのか分からなくなってしまうが、色や図が多すぎてもどこを見ればよいのか分からなくなってしまうため大事なところだけ色を付けたり文字の大小を利用してパワーポイントを作るべきだと学びました。

取り組みの内容に関しては課題達成のために予想・仮説をあらかじめ立てておき行動の一つ一つの意味を常に考え抜くということが大切であると学びました。Z大学は、功績自体はとても素晴らしいものでしたが膨大な作業量により、学生自身で考えフィードバックを得て改善するという社会人基礎力を育成させるための過程を達成できていなかったのではないだろうかと感じました。社会人基礎力はただ困難を乗り越えれば良いのではなくどう乗り越えるかを考え、実行することで伸ばせるものではないかと考えました。そのためにはプロジェクト全体を捉え、何のためのプロジェクトなのか、どういう意義でこのアプローチで進めているかを一人一人が常に考えていく必要があると思いました。以上の学びからこみっとフェスティバルチームはただ去年の活動を踏襲しているだけにとどまっていないだろうか改めて考える機会となりました。この一年を振り返って一步を踏み出す勇気が足りなかったのではないだろうかと思いました。

より良いプレゼンにするには

茨城大学人文学部 14L2178L 西野 あゆみ

今回、プロジェクト実習の一環として「社会人基礎力育成グランプリ 2016」の見学をさせていただき、さまざまなことを学びとることができた。そこで、いくつか学んだ点や見習いたいと感じた点を挙げていきたい。

第一に、全体を通して言えるのはどのチームをしっかりと前を向いて堂々と、はっきりとした声で、聞き手に語りかけるような発表を行っていたということである。私自身、この大会の後日行われたプロジェクト実習最終報告会でプレゼンターを務めさせていただいたのだが、実際にやってみるとスライドやカンペに目が行きがちでなかなか前に挙げたような行為をすることが難しかった。プレゼンターとして当たり前のことではあるが、なかなか難しいことであるのに、そう感じさせない自然な発表を行っていたことが素晴らしいと感じた。それに加え、こうしたことが自然とできるようにするた

めには、幾重にも練習を重ねていく必要があるのだなということも感じ取ることができた。

次に、こうした態度にくわえて、一部のチームは緊張した堅苦しい雰囲気を感じさせない、笑いを交えたユーモアな雰囲気を作っていた点である。こうしたことは聞き手に自分たちのプレゼンを聞いてもらうという点で効果的なことであり、なによりプレゼンを楽しんで聞いてもらおうという気持ちを感じられて、聞き手側としてもこのプレゼンに耳を傾けようとする気持ちになった。こうした点はこれからプレゼンをしていくうえで、参考にしたいと感じた。とはいっても笑いをとってよい雰囲気を作ることに力を注ぐのではなく、内容もしっかりとしなければよいプレゼンはできないと思うので、微妙なさじ加減が必要なのだろうと思う。

一方で、これはプレゼンをするにあたり、あまり良くないのではないかと感じた点もいくつか出た。自身がプレゼンを見ていて感じたのは、AA大学・BB大学のように、スライドの文字が一部細かすぎたり、文字が多すぎたりすると見辛くてスライドが何を伝えたいのかよくわからないという点である。また、図表を多く取り入れてかえって分かりにくくなっているチームもあった。スライドはあくまで補佐的なものであって、それがメインというわけではないので、パワーポイントの作成の際は、聞き手に見やすいようなものを作るといったことを常に念頭に入れ、発表前に発表者自身でチェックしておく必要があるのではないだろうか。

このように、今回の見学を通してさまざまな良い点・悪い点を見つけ、それらからいろいろなことを学びとることができたが、これだけで終わるのではなく、自身が実際にプレゼンを行うための、今回学んだことを参考にし、自分でもより良いプレゼンを行うことができるようにすることを今後の目標としたい。

先進地実地研修から学んだこと

茨城大学人文学部 14L2200S 塚本 莉沙

私たちは、他大学の活動を知り今後に生かせる学びを得るために社会人基礎力育成グランプリ 2016の関東地区予選大会を見学して参りました。その中から学んだことについて述べたいと思います。

CC大学のプレゼンの仕方は安定性があり、聞きやすく感じました。声の抑揚の付け方やアイコンタクトの取り方、聞き手に語りかけるような理想的な発表でした。しかし、独自性が出ていたと個人的に思う大学はDD大学とEE大学でした。まず、DD大学はプレゼンの仕方が「～君、これはどうですか？」「はい。これは～。」といった発表者同士が会話をしているような形で進められていたのが印象的でした。また、活動内容も他とは違った形の活動だと感じました。他大学のように企業や行政と連携して行う活動ではなく、授業を補佐する学生を指導するという活動を行っていました。こういったやり方もあるのだなと視野が広まりました。EE大学もプレゼンの仕方が他の大学にない形でした。発表者の衣装が浴衣や活動時に着ていたTシャツといった内容に合わせたものだったので活動内容がイメージしやすかったです。またジョークを交えながらの発表だったので印象に残りました。聞き手を引き付けるにはこういったやり方もあるのだなと1つ学ぶことができました。

<プロジェクト実習D:IU+IC×NTTコムチーム>

問題意識とその取り組み

茨城大学人文学部 13L1011G 猪狩 彩夏

先進地実施研修として社会人基礎力育成グランプリの関東地区予選大会に参加し、各プロジェクトの取り組みと成果を見た。その上で印象的だと感じたのは、プロジェクトの発端とも言うことができる「問題意識」と実際に行ってきた「取り組み」がきちんと結びついているかどうかといった点だった。

数々のプロジェクト発表の中で特に印象に残ったのは、FF 大学の「幸せおすそわけプロジェクト」である。プロジェクトの内容は、ケニアの子供たちが描いた絵をドギーバッグという持ち帰り用の容器にプリントし、バッグを利用する度に食費が還元される、といったものであった。

このプロジェクトの目的は「先進国の食材廃棄の防止」と「途上国の飢餓の解消」という、正反対の深刻な社会問題であるのにも関わらず、どちらの条件も満たした解決法が実行されており、問題意識と取り組みがしっかり合致していたプロジェクトであると感じた。

そこで自分たちのプロジェクトに立ち返り、上記のプロジェクトのように、問題意識と解決のための取り組みが合致しているかどうか、と言われると、少々疑問である。我々のプロジェクトは、「コミュニケーション・リスクをなくす」という目標を掲げており、パンフレット・Web サイトでの啓発活動を行っている。しかし個人の問題意識から設定された目標ではないため、解決のための取り組みがどこか抽象的であると言える。

「問題意識と取り組みの内容」に関してはプロジェクトの根幹とも言える部分であり、今から見直すのは不可能な事柄ではあるが、来年のプロジェクトへと繋げる反省の1つとしたい。

次へと「つなげる」活動を

茨城大学人文学部 13L1013S 磯貝麻菜

今回、先進地実地研修に参加し、他大学における社会人基礎力に対する様々な取り組みを知ることができた。その中でも、特に印象に残った二校の発表について述べたい。

まず、GG 大学の発表について、取り組み、プレゼン双方から学んだ点を述べていく。

取り組みについては、地域志向の PBL ということで、実際に農業における課題を工学的アプローチによって解決しようというものであった。この取り組みの中で、学生は数回に分けてアプローチをしていたが、最初のアプローチは現場の中で様々なダメ出しを受けた。しかし、学生はそのダメ出しを次のアプローチへと活かし、回数を重ねるにつれ、アプローチは洗練されていったように感じた。何も分からない状態から始めているのだから、最初は的外れなものを提示してしまうかもしれない。しかし、そこから、学生は提示したもののどのような点が的外れなのか、どうすれば受け入れてもらえるのかと試行錯誤していった。このように、取り組みがその場その場で完結しているのではなく、次の取り組みへとつながっているという点で、私たちも見習うべきだと感じた。

プレゼンについては、トップバッターでありながら、堂々たる発表だったと感じた。意識的に観客に視線を配っているように感じられ、明瞭な声で発表も聞き取りやすかった。質疑応答では、緊張が見られたが、答えようという意思は十分に伝わってきた。何よりも、チームの誰かが一生懸命に発表しているというのではなく、それぞれが意識を高く持って望んでいたように感じられた。私達のチームでは、このような公での発表の機会があまりなかったが、数少ない発表の場でも誰かに任せてしまいがちで、全員が発表者であるという意識を共有できていなかったように思う。今後は、自身の甘さを反省しつつ、チームの中でそういった意識を互いに確認できるようにしたいと感じた。

もう一校は HH 大学の発表について取り上げる。HH 大学では「日本大好きプロジェクト」という名称で、ゼミ活動で行っているイベント企画・運営について発表していた。この発表について良い面、悪い面でいくつか気になった点があった。

まず、良い面として、しっかりと活動実績を残していたということを挙げる。特に驚いたのは「900回を超えるメディアアプローチ」という点だ。ただのゼミ活動、と足蹴にできない驚異的な数に、学生のイベント広報に対する必死さが窺えた。そして、そのような必死のアプローチを経たにもかかわらず、水害で取り付けていた生中継が中止になるという悲劇、普通ならここで心が折れるものだと思うが、それでも「諦めない」という精神のもと、活動を続けた学生に賞賛の拍手を送りたい。また、そうして諦めずに活動を続けたことで、密着取材を取り付けるという成果を学生は残した。社会は、やればやった分だけ返ってくるような甘いことばかりではない。どれだけ必死に取り組んでもプロジェクトが白紙になってしまうということもままあるだろう。学生はそれをこの活動で身をもって知る

ことができただろう。そして、駄目になったとき、ただ諦めるのではなく、続けていくことで何らかの成果を得られるのだという貴重な経験を得られた。学生にとってはこの上ない、勉強の場となったのではないだろうか。

しかし、一方で、果たしてこの取り組みの中に学生の声はどれだけ取り入れられているのだろうと疑問に思った。それは、質疑応答で、学生が取り組みに対する自身の意見を聞かれて言葉に詰まってしまったためだ。一言でいいので、と審査員の方から添えられていたのもかかわらず長々と活動の内容を反復してしまったり、肝心の部分は答えられていなかったりと、学生の声を感じられない時間であった。この活動を通して、学生はいったいどのような課題解決に取り組んだのか。想像の範疇であるが、教員の指示が強く、学生自ら行動を起こす、あるいは問題意識を持って取り組むという場面が少なかったのではないだろうか。せつかく、社会とは何たるかを体感できる興味深い取り組みを行っていたように思えたが、その点に限っては非常に残念であった。

ここまで述べてきたように、数ある大学の発表の中でも、二校について取り上げた。それは種類は違えども、この二校の活動から「次の活動へとつなげていく」という点で学びを得られたからだ。GG 大学については、ひとつの取り組みにおいて、活動を単体で考えるのではなく連続したものにしていくことの重要性を気付かされた。HH 大学の発表では、この社会人基礎力の活動を、今ここで完結させるのではなく、未来の自分の力へとつなげていくことについて考えさせられた。私達が行っているプロジェクト実習の活動は、活動の中でしっかりつながりを得られているか、また、自分の中でどのような意味を為しているか、改めて考えてみたい。

先進地実習で学んだこと

茨城大学人文学部 14L2222L 森 遥香

たくさんの大学のプレゼンは、話している人と同じことが書かれているパワーポイントが多く見受けられたが、それとは対象に II 大学は図や表を多く用いて発表しておりとても見やすかった。ただ、図や表を多く使いすぎて少し分かりにくい気もした。文字と図や表をバランスよく、見てくれる人の立場になってパワーポイントを作成することの大切さが今日とてもよく分かった。

また、II 大学の取り組みにおいて、メンバーは農業をシステム化するというプロジェクトに取り組む中で一度失敗し、農業のニーズにあった物ではなく、自分たちの作りやすいものを作り失敗し、そこからその失敗を生かし、「hearing」などを行い、相手のニーズなどを考え、もう一度練り直したりして、活動をより良いものに行っている。類似の問題は私たちのチームにも置き換えられることであり、私たちのチームがいくら自分たちの考えを相手に伝えたところで、相手側にメリットがなければ聞き入れてくれることはまずなく、そういった面でもう一度私たちの活動を見直すべきだと深く考えさせられた。今回、先進地域実地研修に参加し、自分たちのチームと比較することで、自分たちのチームに足りないものを考えさせられた。これからは、今回学んだことを参考に、自分たちのチームに足りないものをよく考え活動していきたい。

プロジェクトを進めていく上で必要な事

茨城大学理学部 14s6009s 坂寄 和哉

私は、社会人基礎力育成グランプリにおいて8校の発表を聞いて多くのことを学ぶことができた。なかでも JJ 大学のプレゼンからはたくさんのことを学ぶことができた。

JJ 大学のプレゼンは、幸せおすそわけプロジェクトというもので、日本の食品ロス削減のためにおすそわけボックスを導入し、そのデザインをケニアの子どもたちにデザインしてもらいそのお返しに給食を提供するというものだった。このプロジェクトは、企業の方におすそわけ BOX を導入してもらわないと何も始まらないプロジェクトであった。そのために、ホテル、飲食店等への調査、営業を始めたが最初は受け入れてもらえなかった。そこで、たくさんのホテル、飲食店に電話やメールをし、時には企業に出向いてお願いをしていた。そして、すでにドギーバッグを採用しているホテルで

の導入が決定した。この点は、社会人として必要な能力を身につける上でとても良い経験だなと思った。しかし、導入にこぎつけるまでには電話の対応やメールへの返信、メンバー間でのミーティングなどやるべきことがたくさんあったがメンバーはそれぞれ忙しく全員が集まれることが少ないという問題があった。これは、私たちのプロジェクトを進める上でも起きたことであり、私たちは少数で集まって話し合いを行ったこともあったが、話し合いを先延ばしにすることが多かった。JJ大学のメンバーは、会議に参加できないメンバーがいてもその人にもミーティングの内容をシェアし、プロジェクトから置いていかれる人がいないように配慮していた。また、To do リストを作成しやるべきことに優先順位をつけたり、メンバー間の予定を共有して円滑にプロジェクトを進行していた。この点は、私たちのプロジェクトではあまり実行できていない点だったので見習わなくてはならないと思った。

<非履修生参加者>

伸ばすべき力

常磐大学 国際学部経営学科1年 榊田 桃子

私がこの研修に参加したきっかけは、様々な人の意見を聞いて自分の成長に活かしたいと思ったからだった。社会人基礎力の「前に踏み出す力」は、まさにこの思いなのではないかと感じる。

今回のような活動成果発表会の参観は初めてだったため、勉強になることがたくさんあった。まず会場に入って考えさせられたことは、発表者の身なりについてである。大半の大学はスーツ姿だったが、KK大学の客室乗務員服のように外見も発表に利用するのは成程と思った。また、髪型も女性の場合そのまま後ろに流すよりは縛った方が整っていてやる気が伝わってくる気がした。自分が発表者になるときは、こういった点にも注意したい。

どの発表も活動に対しての努力や達成感が伝わる素晴らしいものだったが、中でもLL大学の発表が私の一番だった。私の声が小さいというのもあるが、マイクなしでも後ろまで届く声の大きさとスムーズに話していたのは相当の練習を重ねたのだと思う。パワーポイントの構成も見やすく参観者を引き付けるものだった。私の作るパワーポイントといえば、ただテキストボックスに文字を入れ横に少しの絵を載せて終わりにしていた。音声や動画を入れる、文字は見やすくもユーモアを膨らませて置く。見る人を楽しませる資料は人を引きこむ力があると私は思う。今回で得た経験を将来に活かせるよう努力していきたい。

社会人基礎力とは「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」である。文の初めに書いたように、「前に踏み出す力」は意識してきているように思う。今回で新たに学んだ「考え抜く力」と「チームで働く力」も合わせて伸ばしていきたい。

*東京の大学内に入る経験は中々ないことだと思います。こういった面でもとても勉強になりました。里美地区に引き続き、本当にありがとうございました。



③2015年度プロジェクト実習活動報告会 報告

2015年度先進地実地研修（近郊）の報告は、2015年12月12日に本学水戸キャンパスで開催された「2015年度プロジェクト実習活動報告会」の中で行った。報告会の詳細については、第四章・2を参照されたい。

先進地実地研修（近郊）の報告は、まず教員から研修の趣旨について説明を行い、続いて参加学生による報告がなされた（図7）。それぞれのPPTを図8・9に示す。

図7:参加学生による報告



図8:先進地実地研修(近郊) 趣旨説明PPT

<p style="text-align: center;">プロジェクト実習 先進地実地研修 趣旨と実績</p> <p style="text-align: center;">茨城大学・大学教育センター 副センター長（キャリア教育部長） 人文学部プロジェクト実習担当教員 鈴木 敏 atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp</p> <p style="text-align: right;">1</p>	<p style="text-align: right;">茨城大学</p> <p>1：PBLは西高東低 同志社大学PBL推進支援センター コンソーシアム京都加盟の諸大学 等</p> <p>2：東の雄・山形大学 FD・SD・大学間連携・地域連携 エリアキャンパスもがみ「FW共生の森もがみ」 大地連携ワークショップ 等々</p> <p>3：さすが東京・役者がいっぱい 社会人基礎力育成グランプリ 産学連携ツーリズムセミナー 等々々</p> <p style="text-align: right;">2</p>
<p style="text-align: right;">茨城大学</p> <p>「井の中」から抜け出すために 履修生にこそ「まなぶ」「まねぶ」機会を！ そこで・・・</p> <p>先進地実地研修の趣旨</p> <p>プロジェクト実習と親和性の高い目的・内容・形態で実施されている他大学の取り組みを参観しこれまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習は勿論、各人の今後の勉学・諸活動に活かすべき<学び>を得る</p> <p style="text-align: right;">3</p>	<p style="text-align: right;">茨城大学</p> <p style="text-align: center;">2つのカテゴリー</p> <p>1. 先進地実地研修（近郊）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象地域：東京及びその周辺 ・参加形態：原則として履修生全員参加 ・実施形態：貸し切りバスで日帰り実施 <p>2. 先進地実地研修（遠郊）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象地域：東北地方～近畿地方 ・参加形態：履修生代表若干名 ・実施形態：一泊二日ないし二泊三日 旅費支給 <p style="text-align: right;">4</p>
<p style="text-align: right;">茨城大学</p> <p style="text-align: center;">学びのために —お手元の資料をご覧ください—</p> <p>1. 基本作業</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)レポートの作成・提出で総括 (2)年度末の活動報告会等で報告して 参加の有無に関わらず履修者全員で共有 <p>2. 研修内容に応じて</p> <ol style="list-style-type: none"> (3)プレゼン参観の場合は「探点」 (4)フィールドワークの場合は「事前調査」 等々 <p style="text-align: center;">今後に活かす！</p> <p style="text-align: right;">5</p>	<p style="text-align: right;">茨城大学</p> <p style="text-align: center;">実施の前提</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)まずは、予算確保！ eg.東京日帰り往復で大型バス借り上げれば 高速料金・駐車場料金等コミで軽く12万円超 マイクロバスでも9万円余 (2)適切な内容・適切な開催時期 ・特に催事に参加する場合は、意外に時期が難しい (3)独自計画では、先方のご協力がカギ ・戴いたご協力を、篤く御礼申し上げます (4)催事参加・独自計画とも安全第一 ・保険(履修前提として加入済)・交通手段・治安等 <p style="text-align: right;">6</p>

過去の実績(1)

茨城大学

2013年度（試行）
 公益社団法人 日本観光振興協会主催
 第10回産学連携オープンセミナー予選会(2名派遣)
 2013年12月15日 於：東京
<http://www.nihon-kankou.or.jp/home/committees/report/event/20140228.html>

発表題目(抄)

- ビッグデータの観光振興への活用
(明治大学政治経済学部)
- 食料産業クラスターによる地域ブランドの確立
～戦略マネジメントの視点から～(早稲田大学商学部)
- 雨の日の観光を考える(首都大学東京都市環境学部)
- 東京オリンピック2020をインバウンド誘致につなげる為に日本
が取り組むべき事(一橋大・院・商学研究科経営学修士コース)




7

過去の実績(2)

茨城大学

2014年度・遠郊
 山形大学エリアキャンパスもがみ(5名派遣)
 2014年11月29日～30日 於：山形
 →プロジェクト実習Bの「本家」

近年、注目度が高まっている「地域連携系PBL」
 COC採択を受けて、今後一層充実が求められる分野
 →独自計画。金山町役場と山形大学学生サークル
 「チーム道草」の皆様のご協力でご実現




8

過去の実績(3)

茨城大学

2014年度・近郊
 文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実
 体制整備事業」関越地域大学グループシンポジウム
 (19名派遣)
 2015年2月12日 於：埼玉

- 新潟青陵大学
- 千葉科学大学
- 西武文理大学
- 茨城大学
プロジェクト実習C
「ICEチーム」



9

2015年度の状況(1)

茨城大学

遠郊
 ＊候補：同志社大学PBL科目関係催事
 →プロジェクト実習A・C・Dのモデル
 →本学プロジェクト実習で2014年度から開始した
 「学外からのプロジェクト募集」においても先駆的存在

- 2015年7月26日：中間報告会＝前期末試験直前
- 2015年11月14日：PBLフォーラム＝茨苑祭当日
- 2016年1月17日：秋学期報告会＝センター試験当日

昨年に続き、今年も悉く日程が合わず断念 (T_T)

さて、どうする？

10

2015年度の状況(2)

茨城大学

近郊
 社会人基礎力協議会
 「社会人基礎力育成グランプリ2016・関東地区
 予選大会」(21名派遣)
 2015年12月6日 於：東京・拓殖大学
<https://www.mda.ne.jp/kisoryoku/index4.html>

・・・と、いうことで、
 さあ！それでは報告へ
 行ってみよう！ ∠(-o-)／

11

ご清聴、感謝申し上げます

鈴木敦
 atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

12

図 9: 先進地実地研修(近郊) 学生報告 PPT



社会人基礎力とは

- 職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的力
 →「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」
- 経済産業省が2006年から提唱している能力
 →企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、
 それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していく
 ことが今まで以上に重要となってきています。
- プロジェクト実習の背景となっている茨城大学就業力育成支援事業・
 根力育成プログラムでは、「根力(ねぢから)」という能力を掲げている
 →根力＝社会人基礎力をコアとし、独自の要素を加えた能力

2

参加理由

根力をUPさせる

他大学の活動を知る

今後に生かせる学びを得る

3

社会人基礎力グランプリ2016・関東地区予選大会とは

- ▶ 2015年12月6日(日) 拓殖大学 文京キャンパス C館201・301
- ▶ 社会人基礎力育成事業の一環として、全国の大学における「社会人基礎力」の育成事例とその成果を学生チームが発表する場。
- ▶ 全国6地区で予選大会を実施し、各予選大会を勝ち抜いた地区代表が決勝大会に進出。決勝大会で、最も成長が著しいと評価されたチームに「社会人基礎力大賞(経済産業大臣賞)」が授与
- ▶ 2007年度に全国7大学でスタートし、2012年度以降は100チーム以上が参加する大規模なイベント
- ▶ 近年企業からの注目も高まっている

4

出場校

- 埼玉女子短期大学 (国際コミュニケーション学科)
- 城西大学 (経営学部)
- 千葉経済大学 (経済学部)
- 創価大学 (経済学部)
- 明星大学 (明星教育センター)
- 大東文化大学 (国際関係学部)
- 東洋学園大学 (現代経営学部)
- 拓殖大学 (政経学部)
- 芝浦工業大学 (工学部共通学群)
- 信州大学 (サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)
- 諏訪東京理科大学 (経営情報学部)
- 多摩大学 (経営情報学部)
- 創価大学 (経営学部)
- 拓殖大学 (国際学部)
- 東洋大学 (社会学部)
- 明海大学 (経済学部)
- 目白大学 (人間学部)

15校17チーム

5

創価大学 経済学部経済学科について

・発表内容

幸せおすそわけプロジェクト～Mottainaiを行動に食品ロス削減を目指して～世界の食の不均衡に焦点を当てたプロジェクト。

＜問題解決策＞

①ドギーバック(食べ残しを持ち帰る容器)にケニアの子供達の絵を用いた独自のドギーバック「おすそわけBOX」を作成。

②日本の食品ロス削減とケニアの食料事情改善を両立する事業を開始。

＜成果＞

①ホテル、飲食店、行政、NGO等の調査や営業を実施し都内ホテルでの「おすそわけBOX」の導入が決定。

②ケニアの子供達への1000食分の給食提供を実現。

6

創価大学 経済学部経済学科について

＜感想＞

- ▶ プレゼンの仕方が上手だった
→ 声の抑揚の付け方
→ 聞き手に語りかけるような発表
- ▶ スライドは図を対比させたりと見やすい工夫がされていた
- ▶ 卒業後もプロジェクトに関わろうという意志があった

7

良かった点

- ▶ ジェスチャーを交えての発表
- ▶ 笑いを交えたユーモアがある発表
- ▶ 最後に改めて簡潔にまとめて提示してきた点
- ▶ 仮説や予想を立てていた点
- ▶ 実物の成果(商品など)を示していた点
- ▶ 意識改革をメンバー全員で行い高い意識でプロジェクトを実行していた点
- ▶ 相手側の変化にも注目していた

8

悪かった点

- ▶ PPTの展開が早くないか書いてあるか分からない点
- ▶ PPTは図や色が多すぎても少なすぎても見づらい
- ▶ 発表時間内に終わらないこと
- ▶ 発表の時、下やPPTの方ばかりを見てたこと
- ▶ なぜプロジェクトをやっているのか、目的が感じられない所があった
- ▶ 目的を遂行するという意志が感じられない所があった

9

ユニークだった点

- ▶ 発表者同士が会話しているような形で発表が進められていたところ
- ▶ 部屋の電気を消し、写真を映すことによって、より幻想的で印象に残った
- ▶ 発表者の衣装がスーツだけではなくその内容に合わせた衣装だったこと
- ▶ 時折ジョークを交えていたこと

LINE風に事実経過をしていたこと



10

学んだこと

- ▶ 発表者……………「明るく前を向いて、はっきりゆっくりと話す」、アイコンタクト、声の抑揚
- ▶ PPT……………色を使いすぎない、文字の大小を使い分ける
- ▶ 発表をよりよく……………楽しんで聞いてもらうには…?
- ▶ するための工夫……………印象的なものにするには…?
- ▶ メンバー内で……………役割分担、スケジュール管理、情報の共有の徹底、大切なこと……………後輩への引き継ぎ、メンバーを信頼して頼る

- ▶ 正しいフィードバックを得て今後活かすべき
- ▶ 一歩踏み出してやってみる
- ▶ 困難をどう乗り越えるかが社会人基礎力を上げるのでは
- ▶ 常に何のためのプロジェクトか、どういう意義でやっているのかを考える

11

ご清聴ありがとうございました



12

3: 先進地実地研修(遠郊): 山形県最上郡金山町

(1) 金山町での実施に至る経緯

先進地実地研修(遠郊)の対象地域は、「東北地方～近畿地方にかけてのPBL先進地」としている。これは予算的制約にもよるが、図30スライドNo.4に示す通り、設計者が第一に意識していたのが同志社大学「プロジェクト科目」と山形大学エリアキャンパスもがみの中核授業「フィールドワーク共生の森もがみ」であったことによる所が大きい。

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/mogami/index.html>

本学プロジェクト実習は、A・C・Dについては筆者が同志社大学「プロジェクト科目」をモデルに設計した。一方Bは、本学就業力育成支援事業開始に当たり山形大学から本学に赴任された、蜂屋大八准教授(現・宇都宮大学特任准教授)が、「フィールドワーク共生の森もがみ」をモデルに設計されたものである。「本学プロジェクト実習の、いわば本家のありようを学生に直接学ばせること」が、筆者が先進地実地研修(遠郊)の設計に当たって第一に意識していた事柄であった。

第一回先進地実地研修(遠郊)は、エリアキャンパスもがみの一翼を担う山形県最上郡金山町において、2014年11月29日・30日の二日間、学生5名と教員2名の参加で実施した。「四季の学校谷口」を宿舍とし、地元で在来作物の発掘と普及に取り組んでこられた金山町町会議員・沼澤道也様によるレクチャー、ならびに山形大学「フィールドワーク共生の森もがみ」履修生0B・0Gによるサークル「チーム道草」メンバーとの交流・共同学習を核に、大変有意義な学びの場をご提供戴いた(図10・11)。しかし、如何せん現地での活動時間が実質24時間にも満たない短時間であったことから、「密度は高いが、研修時間の絶対量が足りない」点が心残りであった。



図10: 沼澤町議によるレクチャー



図11: チーム道草メンバーとの共同学習

2015年度に第二回を計画するに当たっては、上記の経緯から当初は同志社大学訪問を検討していた(図8スライドNo.10)。しかし、2014年度の「時間の絶対量不足」に対する思いに加え、蜂屋先生から「大学環ネットかねやまフォーラム2015」参加のお誘いを戴いたこと、並びに蜂屋先生のご尽力により現地での活動全般について金山町役場から手厚いご支援を戴けることになったことから、二年続けて金山町の皆様にお世話になることとなった。

(2) 事前準備

先進地実地研修(遠郊)は、プロジェクト実習A～Dの履修生代表者若干名により実施される。実施地と活動の大枠が確定した時点で履修生全員を対象に参加希望者を募るが、応募者は自ずと所属チームのプロジェクト内容に近いチームのメンバーに集中する傾向がある。果たして今回の参加者は、全員が「地域連携・地域貢献」を主題とするプロジェクト実習Bの履修生となった。このため、先進地実地研修(近郊)以上に、年度末の活動報告会における報告等によってプロジェクト実習A～D履修生全員に研修の成果をフィードバックすることが重要となる。参加が確定した学生には、研修実施前にこの点を改めて強調するよう心がけた。

また、研修実施前に研修対象となる大学・地域の取り組みについて、ネット等で十分な下調べをしておくことを求めている。

(3)2015 年度先進地実地研修（遠郊） 研修活動概要

2015 年度の先進地実地研修（遠郊）は、

・学生

- 南 陽子（人文学部社会科学科 3 年）
- 箭内淳美（人文学部社会科学科 3 年）
- 山口未来（人文学部社会科学科 3 年）

・教員

鈴木 敦（人文学部

人文コミュニケーション学科教授）

の、学生 3 名と引率教員 1 名の計 4 名で実施した。昨年度の反省に立って日程を 2 泊 3 日に延長する一方、予算の制約から参加者数を減らしての実施である。

実施に際して配付したしおりを図 12 に示す。以下、しおりの「Ⅱ：全体日程表」に沿って概要を記す。

図 12:2015 年度先進地実地研修（遠郊）しおり(1/4 縮小)



Ⅰ：趣旨説明

1：目的

先進地実地研修は、プロジェクト実習の一環として 2013 年度から実施しています。プロジェクト実習履修生の全員参加を原則として東京近郊で実施する「近郊」と、履修生代表者若干名により東北地方～近畿地方で実施する「遠郊」の、二種類が準備されています。そのいずれも、目的とする所は

プロジェクト実習と親和性の高い目的・内容・形態で実施されている他大学ならびに先進地域の取り組みを参観し、これまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習は勿論、今後の勉学・諸活動に活かすべき学びを得ること。併せて、その学びを他のメンバーにフィードバックすること

にあります。

このしおりの「Ⅳ：担当教員より」にも記しているように、「ほんやりと付いていだけ」では、多分、何も見えてきません。「ここで何を見つけるのか」「何を掴むのか」を常に意識しながら活動して下さい。

2：今年度の参観対象

2015 年度の先進地実地研修（遠郊）では、山形県最上郡金山町をフィールドに展開されている地域連携 PHL ならびにその背景となる城学連携活動について、先進の大学・地域の取組に学びます。

金山町は、プロジェクト実習 B のフィールドである常陸太田市里美地区以上に山深く交通不便な上、有数の豪雪地帯でもあります。しかし、山形大学「エリアキャンパスもがみ」の活動に加え、近年は「大学環ネットかねやま」の結成により遠隔地の大学とも積極的に連携する等、活発な取り組みが目立っています。

今回の研修では、「大学環ネットかねやまフォーラム 2015」への参加を核に、エリアキャンパスもがみの設立を地元教育界側から積極的に推進された樋口勝也・元金山町教育長先生、地元名産の金山杉の活用に取り組んでおられる「金山きごころ工房」岸欣一様のレクチャー、山形大学の 1 年次向け PHL 授業「フィールドワーク共生の森もがみ」をきっかけに結成され、地域貢献に取り組む学生グループ「チーム道草」メンバーの皆さんとの交流等、様々な切り口から当地の地域連携 PHL・城学連携事業を学ぶ機会を設定しています。ぜひ積極的に取り組んで下さい。

3：謝辞

今回の研修プログラムは、2012 年に本学プロジェクト実習 B を設計・立ち上げて下さった、元本学大教センター准教授で、現在は宇都宮大学基礎教育センター特任准教授の峰屋大八先生の全面的なご支援により、実現することができました。実施に当たっては、本学「教育改革推進経費」から予算配分を戴いています。末尾ながら、記して感謝申し上げます。

Ⅱ：全体日程表

12 月 26 日

- ・7:34-14:30 移動
(JR 水戸 7:34-9:06 小山 9:25-9:51 宇都宮 10:38-13:16 新庄
(現地送迎) 14:30 「道草ふんこう」着
- ・14:45-16:45 現地講師によるレクチャー
「道草ふんこう」にて、樋口勝也氏（元・金山町教育長）より、「山形大学エリアキャンパスもがみ」立ち上げと「大学環ネットかねやま」結成への経緯等についてレクチャー
*山形大学エリアキャンパスもがみ <http://www.yamagata-u.ac.jp/gakurm/yauf/>
*大学環ネットかねやま
http://yamagata-np.jp/news/201501/02/ki_2015010200019.php
- ・17:00-19:00 夕食及び移動（道草ふんこう→市街地→ホテル）
- ・19:30-21:00 ホテル（シェーナズハイム金山）チェックインの後、現地関係者との交流会

12 月 27 日

- ・9:30-10:00 朝食後、市街地へ移動
- ・10:00-12:00 「金山きごころ工房」にて、現地講師・岸欣一氏（岸家具店社長・指物師）による金山杉を活用した取組に纏わるレクチャー、並びに工房見学
*金山きごころ工房 <http://meganinmura.com/hitotoki/ki-ri-chi-ki-shi/>
- ・12:00-13:00 昼食
- ・13:10-14:00 学生：チーム道草メンバーと市街地見学（金山住宅・マルコの蔵等）
教員：フォーラムの打ち合わせ（町民ホール）
- ・14:00-16:30 「大学環ネットかねやまフォーラム 2015」（町民ホール）
- ・16:30-17:30 大学環ネットかねやま協議会（町民ホール）
- ・17:30-19:30 フォーラム懇親会（金山町市街）
- ・19:30-20:00 ホテルへ移動
- ・21:00-22:30 情報共有とリフレクション
- *27 日の活動は、山形大学エリアキャンパスもがみの教育プログラム「フィールドワーク共生の森もがみ」受講経験者が結成した地域連携・地域貢献を目的とする学生チーム「チーム道草」メンバーと交流しつつ実施する予定です。

12 月 28 日

- ・9:00-9:15 朝食後、移動
- ・9:15-10:00 日輪舎見学
- ・10:00-16:35 移動
(現地送迎) 10:45JR 新庄着
(JR 新庄 11:17-13:58 宇都宮 14:06-14:32 小山 15:03-16:15 友部 16:20-16:35 水戸

***当日の緊急連絡は、鈴木敦の携帯 (XXX-XXXX-XXXX) へお願いします。**

Ⅲ：大学環ネットかねやまフォーラム 2015 概要

期日：平成 27 年 12 月 27 日（日）14:00～16:30
 場所：金山町役場町民ホール（山形県最上郡金山町大学金山 324-1）

趣旨：金山町では、平成 25 年度総務省域学連携事業の採択を受け、東京およびその近郊の大学との連携事業を始めました。この事業を契機に、平成 26 年、金山町が持つ地域の教育的意義や研究的価値に着目した各大学の研究者が、分野を超えて交流し、金山町の地域的価値を高めるための連携組織「大学環ネットかねやま」を設立しました。このフォーラムは、金山町民に対し、平成 27 年度において各大学が行った事業の成果を報告すると共に、参画する各大学・研究者が、次年度意向の事業展開に関する見通しを共有し、より高度な連携事業に結びつけるために開催するものです。

内容：

- 1 挨拶 金山町長 鈴木 洋
- 2 フォーラム 進行 金山町まちづくりアドバイザー（宇都宮大学）蜂屋大八
 - ①集落資源の調査による価値化・博物館資料化
機法国立大学 教授 大原一興
 - ②金山町の美しい連続景観とその価値、保全の可能性
東京工業大学 准教授 齋尾直子
 - ③「森と町と人のミュージアム」ワークショップの可能性
聖心女子大学 准教授 杉原真晃
 - ④金山町の地域資源を学生達がどう捉えたか
筑波大学 准教授 上田孝典
 - ⑤金山町の地域資源を活用したフットパス構想
宇都宮大学 准教授 高橋俊守
 - ⑥大学環ネットかねやま構想と今後の展開
宇都宮大学 特任准教授 蜂屋大八
- 3 質疑および意見交換
- 4 閉会

対象：金山町民、高等教育機関関係者、学生、その他
 主催：金山町
 申し込み先：金山町教育委員会学術課 担当 沼澤尚史
 電話 XXXX-XX-XXXX
 問い合わせ先：宇都宮大学基盤教育センター 蜂屋大八
 Mail XXXXX@ec.ut-suroniya-u.ac.jp

Ⅳ：担当教員より

1：基本姿勢

(1)意識して行動しよう
 ・「ほんやりと付いていくだけ」では、多分、何も見えてきません。「ここで何を見つけるのか」「何を掴むのか」を常に意識しながら活動して下さい。

(2)現地でしか得られない情報を集めよう

・書籍やネット等では得られない、「その時・その場でこそ得られる情報」を集めましょう。
 →例えば、金山町の方々と金山町の風土の中でお話することは、現地でしかできません。

(3)しっかりと・こまめにメモを取ろう

・「見つけた（ような気がする）もの」「掴んだ（ような気がする）もの」は、そのままではほんやりとしています。メモを取る一言語化し文字化することで、初めてハッキリとした像を結びます。
 ・人間の記憶というものは、それはそれは頼りないものです。メモを取らなければすぐに消えていってしまいます。写真を撮っても、それが「何を意図した・何の写真なのか」のメモを取っておかないと、後日「何でこんな写真を撮ったんだろう？」ということになってしまいます。

2：持ち物・必要経費

・保険関係：健康保険証（のコピー等）を必ず持参してください。また、学検災・学検賠への加入は、プロジェクト実習の履修要件です。念のため確認して下さい。
 ・現金：交通費、宿泊費（3名同室です）、現地での食事代、27日の懇親会費等
 ・衣類・靴：行き先は冬の豪雪地帯です。防寒具並びに雪に強い靴を準備して下さい。
 ・研修道具：筆記用具、メモ帳、カメラ等
 ・その他：傘/カッパ・使い捨てカイロ・常備薬等、各自の事情に合わせて準備して下さい。

3：レポート作成に向けて

研修後は

(1)各自 2,400 字程度を目処に活動報告書を纏めて下さい。
 →次ページの指示書に従って下さい。

(2)1月31日に予定されているプロジェクト実習Bの活動報告会で、報告して下さい。
 →発表時間 10 分をお願いします。



OSATO CHAN

12 月 26 日

- 13:30 JR 新庄駅着
 蜂屋先生・金山町役場沼澤尚史様にご出迎え戴き、金山町へ
 14:00 大美輪（おみのわ）の杉見学（図 31 スライド No. 7）
 ～14:30 沼澤様より、大美輪の杉ならびに金山杉についてレクチャーを戴く
 15:00 道草ぶんこう
 ～17:30 元金山町教育長樋口勝也様ならびに蜂屋先生より、「エリアキャンパスもがみ」立ち上げと「大学環ネットかねやま」結成の経緯、「道草ぶんこう」を始めとする金山町の廃校活用策等についてレクチャーを戴く（図 13）
 20:00 ホテル（シェーネスハイム金山）
 ～21:00 打ち合わせ



図 13:お二方からレクチャーを戴く

12 月 27 日

- 09:30 沼澤様運転の公用車で金山町中央公民館へ移動。金山町教育長岸隆一様他に御挨拶
 10:00 岸家具店内・木ごころ工房 (<http://mogaminomono.com/hito/kinichi-kishi/>)
 ～12:00 蜂屋先生のご紹介で、木ごころ工房岸欣一様より、金山杉の端材を活用した寄せ木細工の誕生経緯や製品開発におけるポリシー、基本的な製造技術等について実演を交えながらのレクチャーを戴く（図 14）。併せて、1月31日開催のプロジェクト実習B現地活動報告会における展示資料として、寄せ木細工のボードを購入させて戴く（図 15）。



図 14: 熱心にメモを取る



図 15: 寄せ木細工・木目が美しい

13:00 教員はフォーラム打ち合わせ (図 16)・学生は山形大学「チーム道草」メンバーと金山町
 ~14:00 中心地区散策を兼ねた交流 (図 17)



図 16: 打合せ



図 17: 小雪の舞う中、御案内戴く

14:00 大学環ネットかねやまフォーラム 2015 参加 (金山町町民ホール)
 ~16:30 参加大学 (横浜国立大学・東京工業大学・聖心女子大学・筑波大学・宇都宮大学) の教員・院生による、金山町をフィールドとした各種研究報告が行われた。報告者ならびに演題は、図 12「Ⅲ大学環ネットかねやまフォーラム 2015 概要」を参照されたい。本学は金山町とご縁ができてから日が浅く、まだ報告できる材料を持ち合わせていなかったが、先生方のご報告へのコメントの機会を戴いた。主催者のご配慮に感謝申し上げます (図 18~21)。



図 18: 会場風景



図 19: 金山町・鈴木洋町長



図 20 横浜国大・大原一興教授の報告



図 21:コメントの機会を戴く

17:30 金山町内「割烹 栄屋」にて懇親会
 ~19:30 金山町町長鈴木洋様始め金山町関係者・フォーラム参加の大学関係者等で、郷土料理を戴きながらの懇親会 (図 22・23)



図 22:研究者間での活発な情報交換



図 23:鈴木町長とお話させて戴く学生達

21:00 ホテル (シェーネスハイム金山)
 ~22:00 情報共有とリフレクション

12月28日

09:15 日輪舎見学
 ~10:00 沼澤様運転の公用車で日輪舎へ。管理人の三上俊一様より建物の由来や大学による調査状況についてレクチャーを戴く (図 24・25)



図 24:雪の日輪舎



図 25:三上様よりレクチャーを戴く

11:17 JR 新庄駅発

(4) 研修日程終了後の活動

① レポート

先進地実地研修（遠郊）参加者には、しおりと同時に図 26 に示す指示書を配付した。全員が指定の最低文字数を大きく上回るレポートを提出した。レイアウトを若干修正の上、図 27 に示す。

20151226－28 先進地実地研修（遠郊）

ミニレポート作成指示書

20151224 鈴木敦

レポートは、以下の要領で作成して下さい。

1：レイアウト・布字・字数等

ワードでA4タテ・横書き

余白は上下左右各 23・21・20・20

45字／行 48行／ページ

基本的にMS明朝・10.5ポイントとするが、必要に応じて変更可。

*要するに、この指示書の体裁と同じです。

必要に応じて写真・図表等を盛り込む

写真・図表等を除いて「2,400字以上」（文字カウント機能で確認して下さい）

*題名・氏名も文字数に加えます。

2：ファイル名・送信先・締切等

ファイル名：2015 先進地実地研修（遠郊）（氏名）

送信先：鈴木敦 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX@vc.ibaraki.ac.jp へ添付ファイルで

締切：2016年2月22日（月）23:00

3：レポート冒頭の体裁について

(1) 第一行に〈中央揃え〉で題名を記して下さい。

*文章の内容に沿った題名を考えて下さい。「先進地実地研修に参加して」式の、〈小学生の夏休みの日記のような〉f(^_^); 題名は避けて下さい。

(2) 第二行に学籍番号氏名を〈右寄せ〉で記して下さい。

(3) 第三行から本文を記して下さい。

*これまた、この指示書の体裁と同じです。

4：内容

今次研修で、「これを学んだ・今後に活かしたい」ということを記して下さい。

(1) 「旅行記」にならないように。「学びの記録」になるように注意して下さい。

(2) 今回の研修はコンテンツが豊富です。

①研修全体への言及は必ず盛り込んで下さい。

②その上で、必要に応じて特定のコンテンツに絞っての言及を記して下さい。

図 26: レポート指示書

地域資源の活用

13L2198L 南 陽子

私が先進地実地研修でのキーワードを挙げるとしたら『地域資源』である。これより、山形県で感じた『地域資源』についてとそれを自分たちの活動に照らし合わせて考えてみたい。今回の研修で感じた山形県の『地域資源』は多々あるが、以下の2点に絞った。

1つ目は「金山杉」だ。山形県最上郡金山町にある杉は全国でも有名である。初日に大美輪地区の大杉群(図①)を見に行った。その多くが樹齢300年近くで、大きいものでは樹高60メートルほどにもなる。建築で使用される杉は通常植林後40~50年ほどで伐採されるものが多いが、「金山杉」は樹齢80年以上の大径木となってから伐採する。冬が長く、雪深い気候の中でゆっくりと成長するため、年輪が細かく均一で強度があり、建築用材としてとても優れているようだ。その美しい「金山杉」の木目を活かした家具(図②)をつくることで他との“差別化”に成功している。

“差別化”といえば、街の景観も金山町独自の取り組みがされている。金山町では100年をかけて自然(風景)と調和した美しい街並みをつくっていかうとする『街並み(景観)づくり100年運動』を実施している。「金山町街並み景観条例」が制定され、「街並み形成基準」とともに、街並みの基本となる「金山型住宅」の基準と、「金山型住宅」を建てた場合の助成制度が定められた。「金山型住宅」とは、白い壁と切り妻屋根をもつ、在来工法で建てられた住宅のことで、先ほど述べた「金山杉」等の金山で育った木材や伝統的な材料を使っている点が特徴である。

私たちの活動の中で「金山杉」の類似的存在としては「里川カボチャ」がある。どちらもその土地にしかできない、土地の特徴を活かした産物である。「金山杉」の性質や魅力を活かして販売している点は是非見習いたい。加工の仕方や見せ方を少し工夫するだけで、唯一無二のものがつくれる。「里川カボチャ」もそのまま売るのではなく、切って販売することで購買率が上がったことがあった。また、焼酎も新しいカボチャの使い道だと思う。これからも新たな「里川カボチャ」の使い方を見つけたい。

そのためには、買い手の声を聞くことが大切である。2日目に行った岸家具店の岸社長も、「お客様のアイデアで気づかされることが多い」とおっしゃっていた。ただ売って終わりではなく、なぜ手に取ってくれたのかを聞くことで、何かヒントが得られるかも知れない。ターゲットをある程度絞ることも大切だと学んだ。今後は、人との会話(接客)や、アンケート調査を重視していきたい。また、ふとした瞬間の気持ちも大切にしたい。岸さんは、余った板の切れ端を「もったいない」と考え、コースター等にして販売したところ案外好評だったと言う。「これをカボチャで作れないかな」、「カボチャの食べられないところ(皮や種、花や葉、茎など)って何かに使えないのかなあ」という素朴な疑問や気持ちも拾っていききたい。

さらに、地域活性化に使える新たな素材の発見にも取り組みたい。私たちのチームは無意識に「里川カボチャ」を使ってPRすることが前提となっているが、里美の魅力は他にもたくさんある。“大学環ネットかねやまフォーラム2015”で紹介されていた“地域の宝探し”はとても興味深かった。普段



図①

大美輪地区の大杉群(「金山杉」)



図②

「金山杉」の木目を活かした家具

当たり前すぎて隠れているお宝や地域に眠っているものを見つければ、新たなものをつくるより低コストで済む。そして、地域に利益が還元されるという点でも地域にとって大きなメリットになるだろう。地域の宝は、自然やモノだけではなく、アート等も含まれる。祭りや音楽、演劇等様々な文化芸術活動に住民が参加・交流することで、地域の絆が生まれる。また、教育面におけるアートの効果について調べてみたところ、芸術は子供の①基礎学力の向上、他の教科との連携②自信、自己肯定感③社会性、協調性、グループワーク、責任感④想像力、創造力、批判的思考力などの育成に効果があるようだ。他にも医療、福祉等の社会的問題を解決する役割も期待されている。

そうした効果があるので、学校とアーティストと繋ぐ事業が注目されている。それが、英国で始まった『クリエイティブ・パートナーシップ』だ。アーティストやクリエイティブな仕事に携わる専門家を学校に派遣し、ワークショップ形式の授業を行うもので、日本でも学校とアーティストを結びつける活動を展開する。担い手としては、中間支援型のNPO団体（アートNPO）や地域おこし協力隊がある。私たちのフィールドでも地域おこし協力隊（アーティスト・イン・レジデンス＝芸術制作を行う人物を一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながらの作品制作を行わせる事業）を積極的に活用している。里美のかかしもアートの分類に入るだろう。今後はアート分野にも注目し、地域づくりに活かしていきたい。

2つ目の『地域資源』は「人」だ。「人」こそ地域の宝と呼べるのではないだろうか。今回の研修で、茨城大学プロジェクト実習B創設者の蜂屋先生や元・金山町教育長の樋口さん等がいなければ、「山形大学エリアキャンパスもがみ」はもちろん、私たちの活動も存在しなかったことが容易に想像できた。つまり、地域活性化には重要なキーパーソンが必要不可欠だと言える。私たちも元・里川町会長の荷見さんをはじめ、地元の多くの人の協力があるからこそ活動ができていて日々実感している。地域に大きく貢献した人に共通していることのひとつに人脈の広さがある。樋口さんも、社会教育を通して広い人間関係を築けたことが成功のカギだとおっしゃっていた。誰も通っていない雪道を歩くように、何事も最初に基盤をつくる人の足元は不安定でその先には様々な困難がある。それは決して1人では抗えない。助け合うこと・チームワークの大切さを改めて感じる事ができた。

私は大学に入ってから地域の人や他世代との交流を持つようになった。アルバイトやこのプロジェクト実習の活動をしていなければ、人脈はとても狭いものになっていただろう。金山町の教育では小さい頃からイベント等を通しての世代間交流が行われており、それが人のあたたかさや絆の強さに繋がっていると感じた。また、民泊の多さにも驚いた。それは、受け入れる側にもおもてなしを禁止する等の住民の負担軽減に積極的に取り組んでいることが影響しているのかも知れない。今後の活動として、小・中学生や高校生、お年寄り等の交流の場を提供できたらと思う。

繋がりをすることで、その地域が第二のふるさと化すれば移住者も増える可能性がある。なぜなら、移住の際どの地域に行くかはその人の人生経験に大きく左右されるからだ。その地域での良い思い出や繋がりがあれば、Uターン者はもちろん、I・Jターン者の移住選択地にもそこが含まれる確率が上がるだろう。山形大学地域づくりサークル「チーム道草」のメンバー（約70名）も活動を通して山形県に愛着を持った人が多くいるはずだ。それだけでも地域にとっては大変喜ばしいことである。里美のPRをすることも大切だが、活動を知ってもらう・私たちと一緒に活動するメンバーを増やすことも同じくらい大切なことである。

以上のように、今回の山形県の研修は「金山杉」と「人」が強く印象に残ったものであった。このような『地域資源』を上手く活かしていくことが、地域の存続・発展に繋がる。また、私は以前から、地域のために活躍している人たちは一体何をモチベーションにしているかが気になっていた。そして、この研修を通してそれは意外にも、自分の人生の充実のためではないかという結論にたどり着いた。話を伺った皆さんは自分の生き方に誇りを持っていきいきと話されていた。自分のやりたいことをやっていった結果、地域貢献にも繋がったという感じだ。私も今後の活動は自分のやってみたい！という気持ちを大切に取り組んでいきたい。そして、樋口さんの「人生は紆余曲折でいいんだ」というお言葉を胸に、寄り道、まさに道草を食って様々な経験をしていきたい。

そこにある“暮らし”を基本に

1312210a 箭内淳美

山形県金山町での先進地実地研修は昨年を引き続き2回目の参加となる。昨年は金山町の在来作物を中心にお話を伺った。今回は山形大学の取り組みや、金山町の取り組み、他大学の取り組みを中心にお話を伺うことができ、より多面的に金山町をつかむことができた。研修を通して、山形大学や金山町の取り組みに学ぶことは多くある。その中でも特に取り上げたいのが、「その土地に暮らす人々の暮らし」である。

今回の山形先進地実地研修を通じて最も考えたことは「その土地に住む人々の暮らし」を基本にするということである。そのきっかけとなったのが、初日の樋口勝也さんのレクチャーである(図①)。樋口さんからは道草ぶんこうの取り組みや、今後の構想などのお話を伺った。そのお話の中で『今後、自然豊かな中山間地域で守り続けてきた「当たり前の暮らし」が高齢化社会の「価値ある生きがい」になることを願っています』という言葉が印象に残った。暮らしが生きがいになるということは深く考えたことがなかった。道草ぶんこうでは、廃校になった小学校を活用してさまざまなことを行っている。具体的には、お祭りや造形教室、山形大学のフィールドワークの一つの拠点などである。参加しているのは、地区民、幼児小学生、金山中学生、大学生、外部サポーター、ホームステイをする人、高齢者と幅広く、重要な交流の場となっていることが分かる。自分が他人とかかわること、活動することで、地元意識や誇り、生きがい生まれるきっかけとなると考えることができた(図②)。

また、蜂屋先生の山形大学のレクチャーの中で紹介があった、山形大学の取り組みの一つである、地域へのホームステイにも興味を持った。私はプロジェクト実習の活動を通して、地域の魅力に気づき、それを発信していこうと考える一方で、自分たちの気持ちや考えが、そこに住む住民の皆さんの気持ちとかげ離れてしまっているのではないかと考えることがある。私たちは時々しか、地域に行くことはできないが、地域の皆さんは毎日そこで暮らしている。至極当たり前のことなのだが、これを見過ごしてしまいやすい。その点では、山形大学の取り組みの、活動の最初のホームステイは、短期間ながらも、実際に地域の中で「暮らす」、「過ごす」ということで学生はより地域の暮らし、考え、感覚に近い活動を行うことができる。その種は、気候や風景や景観、隣の家に行くまでの小道など小さい気付きである。毎日見ていては気にも止めることではないかもしれない。しかし、ソトの目線でそういったことに気が付くことで、地域のやりたいことと自分たちのやりたいことをうまく組み合わせやすくなるのではないかと感じた。

街並みの気付きといえば、今年も実際に山形大学のチーム道草の皆さんに金山の街並みを案内していただいた。金山の町を歩いてみて、細部まで徹底したまちづくり、しかも無理のない範囲、ペースでの活動が垣間見ることができた。例えば、金山杉を使用した伝統ある「金山住宅」を町役場はもちろん、地域住民の一般の家庭や、あるいは銀行などの企業まで徹底して活用していたこと、公共的に開放された施設が多いことなどである。空き地を作らないために、空いた場所ができれば公園などにする、まちにある鉄のもの(信号や鉄柱、水路の調整器具など)まで町並みに合わせて茶色などに染めているなどといった取り組みも見ることができた。前回訪れたときから一年置いて、また前日の樋口先生の「生きがい」のお話を考えながらまちを歩いてみて、そこには一般的な暮らしがあって、無理のない範囲で、「生活」を大切にしながらまちづくりを行っていると感じた(図③・④)。

時間の都合上、ほんの少ししか町の様子を見ることができなかったのが非常に残念だが、建物から建物への移動の道まで整備されているのを見て、まちを歩くだけでも十分な観光になった。実際はそこに住む住民の皆さんが多く利用するであろうほんのちょっとした小道だが、「ソト」の私の眼にはそれも魅力的に思えた。もし、毎日生活することになったら、この風景はどのように映るだろうかとふと考えたとき、程よく統一された街並みや風景は、そこが「金山」であることを無意識のうちに感じさせてくれるものであろうと想像した。当たり前の景観が、ソトも目線によって素敵なものだと気づいたときに、自分の地域に自信や誇りを持ち、そこに住んでいることの「生きがい」を感じるのだら

うと考えた。

多くのまちでも、「観光の名所」となるところは沢山あり、その周辺を整備するのは一般的であり、普通のことであるだろう。しかし、「その場所に至るまでの道」まで整備し、景観を徹底するという事は、非常に大変だが大切なことであると感じた。観光名所に行けば、その場所に来たという実感が得られるのはもちろんであるが、その間の移動中の景観によって気持ちが途切れてしまうことがある。金山町は、観光名所、観光施設にいたるまでずっと「そのまちのなかにいる」という実感が得られた。そういったことから、金山町での散策は、ある一つの「まち」の「観光地」に行くのではなく町全体が一つの観光地となっていると身をもって体験した。

このことは、そのあとに参加させていただいた「大学環ネットかねやまフォーラム 2015」での東京工業大学の斎尾直子先生と三輪さんの、『金山町の美しい連続景観とその価値、保全の可能性』という報告にも一部関連している。一般的な農山村地域の場合、地域の看板景観と、耕作放棄地や壊れたビニールハウス、捨てられた軽トラなど残念な景観が混在しているのがふつうであり、中山間地域において、少子高齢化や後継者不足などの問題により美しい農山村の景観を維持していくことが困難になってきているのであるとのことであった。その点において金山町では上記の「街並み景観づくり 100年運動」の実施など積極的に景観づくり活動を行っていることが分かった。

里美地区は、国道 349 号線を中心に南北に長い地域であるが、道路を北上しながら、観光地を回る事ができる。その点において看板景観地を結ぶ景観を整えていくことは、重要になる。その一方で今年度の夏の里美合宿で、耕作放棄地やイノシシの被害の状況などの説明を荷見さんからいただき、実際にその様子を見学させていただいた。田んぼの場合、4,5年放棄してしまうと木が生えてきて、木が生えてしまうと元に戻すのが大変になってしまうとのことであった。イノシシをはじめとする野生生物も、人の居住空間に入ってきてやすくなる。景観づくりは、観光者のためではなく、そこに住む住民のためとなる。金山の地域性に寄り添った取り組みを見て、里美地区ならではの地域性について、「暮らし」という視点でまた活動に取り組んでいきたい。



図①・② 道草ぶんこうでの様子。後ろの棚や体育館などから小学校の名残が残っているのが分かる



図③・④ チーム道草の皆さんに案内していただいている様子。金山町の取り組みを説明していただいている

まちづくりに関わるということ

1312213g 山口未来

今回私たちは地域連携、域学連携事業の先進例を学ぶため、山形県は金山町に研修へ伺った。そのなかでは宇都宮大学基盤教育センター特任准教授の蜂屋先生をはじめとして、金山町教育委員会の沼澤様や皆様、道草ぶんこうの樋口様、岸家具店の岸様、チーム道草の皆様や金山町長様、そして金山町の方々にお世話になりながらたくさんのごことを経験させていただき、様々なことを学ぶことができた。

私はプロジェクト実習への参加は今年が初めてということもあり、地域おこしや地方活性化について授業や専門ゼミのなかで扱うことはあっても、実際自分たちになにができるかということや、大学と地域の連携の在り方については、自分たちが関わらせていただいている常陸太田市里美地区のあり方しかよく知らなかった。しかし金山町へ研修に伺わせていただいたことによって、より広く地域連携を行い、様々なところから注目を集めている先進的な取り組みについて知ることができた。そこでは行政がより地域連携に力を入れることも必要であると強く感じたが、私たち大学生も、地域連携に関わるならば、なにが必要とされているか、自分がなにをしたいのかをもっと考えて行動しなければならないと思った。特にそれを強く感じたのはチーム道草のみなさんとお話をさせていただいている時だった。チーム道草さんは山形大学の公認サークルであり、山形県最上郡を中心に70名ほどのメンバーで活動している。その活動は地域おこしだけでなく、学習支援や母親がほっと一息つき、母親同士で交流のできるままティータイムなど多岐に渡っている。その規模や内容の自由度などを聞いたときは正直驚いたし、様々な学部の人たちが集まっているというのはおもしろいと思った。もちろんプロジェクト実習は授業であり、チーム道草さんはサークルであるという大きな前提の違いはあるにしても、その内容への取り組みの姿勢や、いろんなことに興味を持って参加しようとするフットワークの軽さ、アンテナの高さなどは見習わなくてはならない部分があると思った。実際私たちがメンバーの方とお会いした日も金山町から離れたところで学習支援活動を行った後に、雪のなか1時間半車を走らせて私たちに会い、その後「大学環ネットかねやまフォーラム2015」に参加するというスケジュールで動かされており、フットワークの軽さに驚いたことを覚えている。今回チーム道草さんと出来たご縁を大切にしながら、すごいと思ったところは今後の自分たちの活動にも活かしていきたい。

また、金山町では名産である金山杉やそれを用いた特徴的な金山住宅に関して、教育委員会の沼澤様に大美輪の大杉を見学させていただいたり(図①)、岸様に金山杉を使った作品について実物に触れながら説明していただいたり(図②)、チーム道草さんに金山住宅を紹介していただいたり(図③)、たくさんの方からお話を伺うことができた。そのなかでわたしが感じたのは、説明をいただいたすべての方がそれらに自信と誇りを持ちながら関わっていたということである。以前地域おこしや都市計画について扱う授業を受講したときに、「地域おこしには内外にアピールできる『宝物』が重要となるが、地元の人はその価値に気付いていないことが多い。従ってその宝物を再発見するための作業や外部からの新しい視点が必要になる」というような話を聞いたことがあった。しかし金山町ではすでに住民全体がその『宝物』が何であるかを理解し、どう活かしていくべきかを考えているように思えた。それにより自信と誇りを持った説明が可能になったのではないだろうか。日本では謙遜の文化が美しいとされてきたかもしれないが、人にもものを勧められるときには、その人が自信のあるものを堂々と勧められた方がより魅力的に見えると思う。金山杉や金山住宅について自信を持って熱く語る皆様の姿を見て、自分が興味を抱かされたことでそれを実感できた。そのことは今後プロジェクト実習の授業のなかでももちろん忘れずに活かしていきたいが、今後なにかを人にプレゼンするときにも活用していきたいと思う。ただ、なにかを自信を持って勧めるのは今までの私にとって簡単にできることではない。どうしても謙遜してしまったり、私がそこまで言ってしまうといいのかと不安になったり、もっと知らない良いところがあるのではないかと疑ってしまうことが多いからだ。従って、まずその事柄に関して情報を集め、理解を深めていくことが必要となる。自分が納得するまでそれを行うこと

で自信を得て、さらにそこから思考をめぐらすことで新たな考え方も得られるようにしたい。そしてここまで調べたという自信を土台にすることで、謙遜せず、アピールできるようになるのが今後の目標である。プレゼン力を鍛えるためにも、意識してできるようになりたい。

最後になるが、今回の研修で印象に残った言葉を挙げてみたい。

それは1日目の道草ぶんこうで現地講師としてお話をしてくださった、元金山町教育委員長の樋口様の言葉だ(図④)。お話を終え、最後に質問はないかという問いかけに対して、私たちのなかから「人間関係はどのように構築していけばいいのか」という質問がでた。それに対して樋口様からは「わたしは自分のことをアメーバのような人間だと思っている。それは環境に合わせて『同化する』ことができるからだ。自分ばかりを主張するのではなく、まわりに合わせる必要がある」というようなお返事をいただいた。この言葉は1年間プロジェクト実習の授業に参加し、様々な年齢、立場、考えの人と関わらせていただいたなかで、大事であると私が感じていたことだった。もちろん「自分」を出すことが求められる場面も多々あるが、人といい関係を築いていく場合には自分をその場に同化させることも必要であるし、そうすることによって新たに得られる視点というものもあると思う。意見がぶつかったときには自分ばかりを主張させるのではなく、同化することで相手の考えや立場を考慮に入れることも必要になる。このようなことを同化し、環境に合わせるという意味で「アメーバ」だと仰ったのは非常にわかりやすく、おもしろいと思った。

このように金山町での研修ではたくさんのことを学ぶことができた。それは新たに得られた知見もあつたし、今まで漠然と考えていたことが自分のなかで納得できるような言葉になったものもあつた。それをここで忘れてしまうことなく、今後の生活に活かしていきたい。

今回、貴重な機会を与えてくださった茨城大学様、研修の中で多大なご協力をいただいた蜂屋先生、金山町教育委員会の皆様、樋口様、岸様、金山町長様、チーム道草の皆様、金山町の皆様、そして引率してくださった鈴木先生、本当にありがとうございました。



図① 金山杉の大木



図② 岸様からのレクチャーの様子



図③ チーム道草さんと金山町見学の様子



図④ 大学環ネットかねやまにて再会した樋口様と

②2015年度プロジェクト実習B現地活動報告会 報告

2015年度先進地実地研修（遠郊）の報告は、2016年1月31日にプロジェクト実習Bの主たるフィールドである茨城県常陸太田市里美地区・里美学習センターで開催された「2015年度プロジェクト実習B現地活動報告会」の中で行った。報告会の詳細については、第IV章-3を参照されたい。

先進地実地研修（遠郊）の報告は、まず教員から研修の趣旨について説明を行い、続いて参加学生による報告がなされた（図28・29）。それぞれのPPTを図30・31に示す。

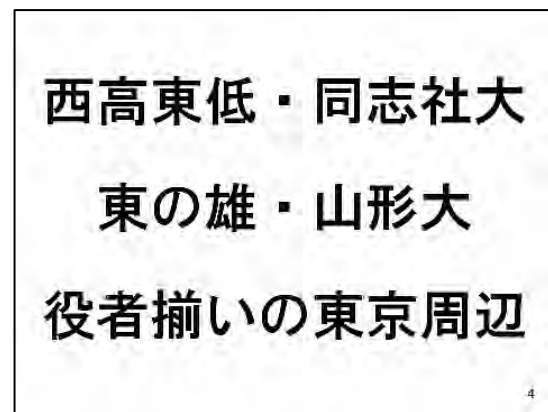
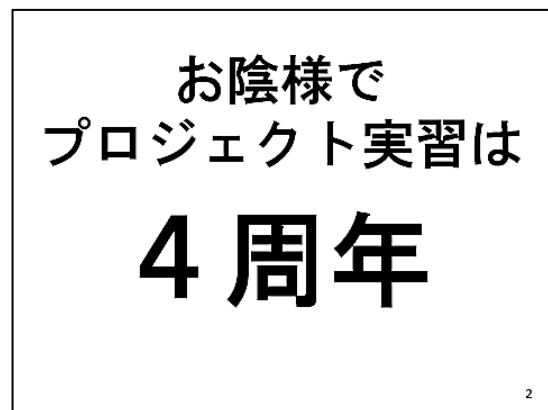
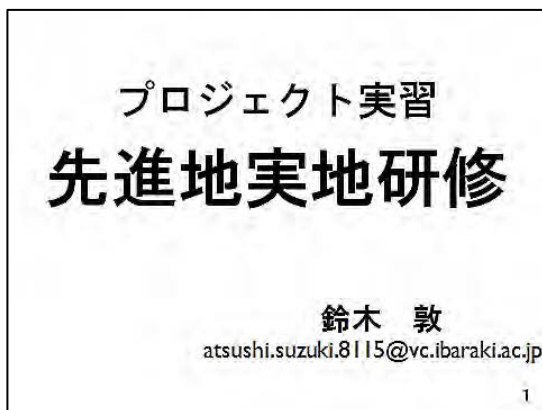


図 28: 教員による報告



図 29: 学生による報告

図 30: 先進地実地研修 趣旨説明 PPT



先進地に学べ！
教員は
公費出張

5

先進地に学べ！
学生は
自腹で
行け！



そ、そんな
無茶な！



学生にこそ
先進地に
学ぶ機会を！

6

1:自らが学ぶ
2:仲間に還元

9

先進地実地研修
(近郊)

東京近郊
全員参加が原則

10

先進地実地研修
(遠郊)

関西～東北
代表者若干名

11

2015年度は
近郊：東京・拓殖大

社会人基礎力育成
グランプリ2016
関東地区予選大会
<https://www.mda.ne.jp/sosoryoku/index1.html>
参観



12

遠郊：山形・金山町
 現地講師によるレクチャー・現地見学・
 大学環ネットかねやまフォーラム2015参観



お世話になりました
 たくさんの方々に
 心より感謝申し上げます

では！

2015年度
 先進地実地研修
 遠郊
 山形県最上郡金山町

報告へ
 行ってみよう！

∠(-o-)∠

ご清聴
 感謝申し上げます

鈴木 敦
 atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

図 31: 先進地実地研修 学生報告 PPT

先進地実地研修



箭内 淳美
 山口 未来
 南 陽子

目次

- ・研修概要
- ・研修目的
- ・金山町について
- ・活動報告と学んだこと
 - 1日目, 2日目, 3日目
- ・地域の比較
- ・チームの比較
- ・全体を通して学んだこと
- ・里美に活かしたいこと

目的

・先進地実地研修とは...?

プロジェクト実習と親和性の高い目的・形態で実施されている他大学の取り組みを参観し、これまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習はもちろん、各人の今後の勉学・諸活動に活かすべき「学び」を得ることを目的として2013年から実施されている。

今年度は先進的な取り組みを行っている山形県金山町にて研修を行うことで、様々な地域連携事業を見学し、そこで得たものを今後の活動に活かしていくことを目指している。

研修概要

- ・1日目
 - ❖ 金山杉の見学
 - ❖ 「道草ぶんこう」にて樋口勝也先生（元・金山町教育長）、蜂屋大八先生（茨城大学プロジェクト実習B創始者・宇都宮大学特任准教授）によるレクチャー
- ・2日目
 - ❖ 「金山きごころ工房」にて岸欣一様による金山杉を活用した作品に纏わるレクチャー・工房見学
 - ❖ 山形大学・チーム道草のメンバーと交流・市街地見学
 - ❖ 「大学環ネットかねやまフォーラム2015」への参加
 - ❖ フォーラム懇親会への参加
- ・3日目
 - ❖ 日輪舎見学

金山町について



- ・人口
およそ6,200人
- ・面積
161.79平方km



金山住宅

http://www.town.kanayama.yamagata.jp/aei/eng/inf/

- ・「町並み景観づくり100年運動」
- ・在来作物
- ・エリアキャンパスもがみ

活動報告 1日目（12月26日）

- ① 金山杉の見学
講師：金山町教育委員会 沼澤尚史様
- ② 「道草ぶんこう」にて「エリアキャンパスもがみ」、「大学環ネット金山」について立ち上げのレクチャー
講師：樋口勝也先生、蜂屋大八先生

写真①



左：金山杉見学
右：道草ぶんこう

学んだこと①

- ・まず、足りないものや必要なものについて考えることが活動の第一
- ・持続性を考えた活動の大切さ
- ・「いい」と思えるものは、意外と外からの目のほうが発見しやすい。外部や異なる世代の意見というのは大切
- ・幼いころから地域に関わるきっかけづくりをすることが大切
- ・地元のイベントを継続していくことの難しさと必要性
- ・地域のひとの「普段の暮らし」を大切にすることが活動の基本となる

2日目（12月27日）

午前：「金山きごころ工房」にて、現地講師・岸欣一様（岸家具店長・指物師）による金山杉を活用した取組に纏わるレクチャー、並びに工房見学

午後： チーム道草メンバーと市街地見学（金山住宅・マルコの蔵等）

↓

「大学環ネットかねやまフォーラム2015」

↓

フォーラム懇親会に参加

写真②



左：岸欣一様のレクチャー
中：「大学環ネットかねやまフォーラム2015」
右：フォーラム懇親会

学んだこと②

- ・専門家ではないからこそ出来る、柔軟な発想というものがあること
- ・今ある資源を大切にすること（もったいない精神）から新たな資源の活用が見えてくることもあるということ
- ・特産物（金山杉）の性質や魅力を活かして販売している
- ・加工の仕方や見せ方を少し工夫するだけで、他との差別化に成功
- ・接客が新たなアイデアに繋がることもある
- ・ターゲット（客層）や質や量を明確にすることが重要
- ・街の風景が観光にも活かせる
- ・様々な専門知識を持った人が集まることで、幅広い視野が持てる

3日目（12月28日） 学んだこと③

午前中：日輪舎見学
↓
帰路移動・・・
・・・帰宅

- ・歴史的建造物は高度な修復技術によって存続している
- ・その土地に古くからあるもの、当たり前存在しているものが観光資源になる
- ・記録に残しておくことの大切さ

写真③

日輪舎見学の様子



43

地域の比較

- 地域を良くしたいと考えるリーダーがいる
- 自分の地域をどうにかしたいという意識がある
- 自分の地域に誇りを持っている
- 地域の人が学生の活動をあたたかく受け入れてくれる
- 地域資源や在来作物がある
- 中山間地域、少子高齢化、中心市街地からの距離

⇒里美と金山には共通点が多い。しかし金山における地域と大学の連携に比べて里美でのそれはまだまだ発展途上。

したがって今後のさとみ・あいの活動や大学全体の地域連携として金山から学べることは多いのではないかと。

44

プロジェクト実習（さとみ・あい）とチーム道草

	さとみ・あい	チーム道草
運営形態	授業中の1グループ	サークル
人数	12人	約50人
メンバーの所属	3大学連携を旨とする 主に茨城大学人文学部	山形大学の様々な学部 (人文、教育、工、理など)
活動費	授業予備 + 助成金を自ら取得 (過去に常陸ビジネスアワード、今年も企画提案チャレンジ支援事業の助成金を取得)	助成金を自ら取得
結成の経緯	プロジェクト実習 →地域内こじら探訪したいという意志でグループ編成 →里美に出会う	フィールドワークが生の森最上 →金山町に出会う →地域に関わり続けたい仲間 →サークル結成
活動内容	少人数であるゆえ、地域に密着した活動に厳選	メンバーの興味関心に対応した多岐にわたる活動

45

学んだこと（全体）

- 街並みそのものを地域の魅力にするという発想
- 人を呼び込むために無理に開発をするのではなく、そこにある普段の生活を大切にするという考え
- 地域資源（モノやヒト）を活かす
- 仲間（同士）を増やすことで人脈・規模の拡大
- 積極的に取り組んでいるひとがいるとどんどん活動的なひとが集まってくる→きっかけとなるひと・ことは大事
- 地域に自分たちが自信を持つことが必要

46

里美での活動に活かしたいこと

- 廃校の利用
- 地域の住民が集まれる場をつくる
→集まることでなにかを起すきっかけになるかもしれない
- 民泊の実施
→学生や外部のヒトが地域に溶け込むきっかけ作りとなる
- 世代間交流や様々な役職の人との交流
- 他企業・他業界とのコラボ
- ターゲットを絞る
- 持続性（リピーターの確保）

47

具体例①廃校の活用

『人の集まる場』

金山
教育文化資料館、道草ふんこう、四季の学校谷口として
廃校を地域住民が気軽に集える場所として再利用
例)造形教室、公民館、宿泊所、農業体験、学校、伝統料理の提供

里美
廃校の利活用の可能性
伝統料理の提供、在来作物を使った料理の提供
農業体験、交流所里美案内所



学校統廃合(1947以降)

水戸市1、日立市10、土浦市4、古河市3、石岡市5、
結城市1、龍ヶ崎市1、下妻市3、常総市3、**常陸太田市14**、
高萩市3、北茨城市4、笠間市13、取手市11、牛久市5、
つくば市3、潮来市3、守谷市1、常陸大宮市26、那珂市3、
筑西市6、坂東市4、稲敷市6、かすみがうら市3、桜川市2、
神栖市2、行方市15、小美玉市2、東茨城郡15、久慈郡12、
稲敷郡2、結城郡2、猿島郡5、北相馬郡2

48

具体例②特産物につける付加価値

⇒里美だからこそできるものに付加価値を見出す
→里川かぼちゃなどの在来作物・風景・滝etc...
金山町.....もともと有名であった金山杉にマネできない付加価値をつけた。

里美地区...気候や里美に住んでいるひとだからこそ持っている知識を活用して、現在あるものに付加価値をつける

EX) 里川かぼちゃのピンク色の見た目を利用した「食べておいしい、飾ってかわいいかぼちゃ」としての広報活動
地域に受け継がれてきた伝統料理・自慢の料理を共有する
→普段食べている料理でも「伝統的なもの」として付加価値がつく



御礼

蜂屋大八先生、
樋口勝也先生、
沼澤尚史様、
並びに金山町教育委員会の皆様、
岸欣一様、
金山町町長鈴木洋様、
チーム道草の皆様、懇談会参加の皆様

49

ご清聴ありがとうございました



4:御礼ならびに今後に向けて

2014年度に続き、2015年度も「近郊」「遠郊」二種類の先進地実地研修を無事に実施することができた。予算の確保と執行、研修先の検討・決定、事前調整と当日の運用、さらには種々の事後手続きと、この間、本文中にお名前を記させて戴いた方だけでなく、大変多くの方々から沢山のご支援を戴いた。篤く御礼申し上げます。

学生達が、今回の研修を通じて多くのことを学び取ったであろうことは、事後レポート（図6ならびに27）からも感じ取ることができる。しかし「教育効果」というものは、概して教育プログラム終了時に直ちに・はっきりと・第三者にも分かる形で現れるものではない。前回ならびに今回の研修の成果が浸透し、参加者個々人ならびにプロジェクト実習全体に明確なレベルアップが見られるようになるまで、まだ暫く時間がかかることであろう。一方で、全てに・直ちに・分かりやすい成果とそのエビデンスを求められる昨今の風潮に鑑みれば、先進地実地研修は「予算に比して効果が少ない」として批判にさらされやすい性質の教育プログラムである。どうか長い目で見守って戴きたいと願う。

学内・学外の多くの方々のご支援に支えられて、先進地実地研修は、「近郊」「遠郊」共に漸く「実施することで精一杯」という段階を抜け出しつつある。プロジェクト実習全体がそうであるように、運用実績を蓄積しつつ継続的に授業改善を加えて行くことが重要である。

一方で、本学就業力育成支援事業の裏付けであった文部科学省補助金の交付期間は終了し、大学運営費交付金の大幅削減や2017年4月を期しての本学の大規模な組織改編等、先進地実地研修は勿論、プロジェクト実習そのものを巡る環境が大きく変化しつつある。教員の担当体制以前に予算の先行きの不透明さから、2016年度の先進地実地研修実施の可否は全く不明という状況である。この「芽」が大きく育つか立ち枯れてしまうか、これからが勝負所であろう。引き続きのご支援を、どうか宜しく御願ひ申し上げます。

IV：年度末活動報告会

1. 趣旨と経緯
2. プロジェクト実習活動報告会（全体報告会）
3. プロジェクト実習B活動報告会（現地報告会）

IV: 年度末活動報告会

神田 大吾

1: 趣旨と経緯

プロジェクト実習では、年度末に本学水戸キャンパスにおいて学外の方にもご参加戴く形で、活動報告会（以下「全体報告会」）を開催している。また、プロジェクト実習「B」に関してはさらに、主たるフィールドである常陸太田市里美地区において別途活動報告会（以下「現地報告会」）を開催している。いずれも、意図する所は、以下の4点である。

- (1) 履修生のリフレクションとプレゼンテーション実習
- (2) 教員による授業運営と授業改善の報告
- (3) お世話になった方々への御礼のご報告
- (4) 学内と学外への情報発信（広報）

全体報告会が「学生の学びと授業内容の紹介」を主眼とする「学修成果の発表会」であるのに対し、里美地区での現地報告会は「現地での活動を地元の方々にご報告し、ご支援への感謝の意を示すこと」に軸足を置く「ご報告とお礼の会」という色彩が強い。しかし、過去三年間を振り返ってみると、両報告会共に「前半は学生の報告、後半は教員と支援者代表と履修生代表によるトークセッション」という構造を持ち、また履修生の報告の主軸が「何をやったか」でほぼ共通しており、実態としての区別が明確ではなかった。

そこで、2015年度はこの差異を明確にすべく、以下の変更を行った。

①前半

全体報告会では、「履修生が何をやったか」もさることながら、「履修生はそこから何を学んだか」に報告の力点を置く。対して現地報告会では「どのような方々にどのようなご支援を戴いて、履修生が何をやったか」を中心に据えて報告する。

②後半

全体報告会では、従来通り「学びの内容や授業設計や授業運営等に関する意見交換の場」。対して現地報告会では、「地元を始めとして様々なお立場の方々にご参集戴き、ざっくばらんな情報交換と交流の場」として設定する。

2: プロジェクト実習活動報告会(全体報告会)

今年度の活動報告会は、2015年12月12日に本学人文学部10番教室で開催した。

(1) 事前広報

広報室を通じて、茨城大学 HP 冒頭のイベント情報欄に開催通知を掲載して戴いた。

<http://www.ibaraki.ac.jp/events/2015/11/251517.html>

また、チラシ2,000枚を作成し、本学並びに連携関係にある茨城キリスト教大学様、常磐大学様、水戸市役所様、常陸太田市様、泉町二丁目商店街振興組合様を始め、各種連携組織を通じたルート、ならびに履修生及び教員ルートで配付した。当日のチラシ（表面）と式次第（チラシ裏面用データ）を図1に示す。

(2) 会場設営と運営・撤収

本来、履修生と担当教員で全てを賄うのが理想であるが、限られた人数で、活動報告の準備と並行して全てを行うのは難しい。例年、「地域史シンポジウム」を開催して経験を蓄積している歴史・文化遺産コースの院生と学部生にアルバイトとして協力して戴いているが、今年度も同様に協力を依頼した（図2）。また、人文学部総務係からも例年通りの手厚いご支援を戴いた。記して感謝申し上げます。

図 1:プロジェクト実習活動報告会配チラシ並びに式次第



上:チラシ(表面)

右:式次第(チラシ裏面データ)

2015 年度 プロジェクト実習活動報告会	
1: 開会挨拶 佐藤和夫 (大学教育センター長・学長特別補佐)	13:00-13:05
2: 4年目を迎えたプロジェクト実習・質保証に向けた改善への取り組み 鈴木敦 (大学教育センターキャリア教育部長・プロジェクト実習担当教員)	13:05-13:20
3: 活動報告 (1)発表方法の説明 井澤耕一 (プロジェクト実習担当教員) (2)さとみ・あいチーム (3)異文化交流プロジェクトチーム (4)こみっとフェスティバルチーム (5)公共交通チーム (6)IU×IC×NTTコムプロジェクトチーム	13:20-14:40
4: 休憩	14:40-14:50
5: 先進地実地研修報告 (1)概要説明 鈴木敦 (2)社会人基礎力育成グランプリ 2016 関東地区予選大会から学んだこと 参加学生代表	14:50-15:05
6: 「プロジェクト実習 B」「初年次 PBL 試行」報告会開催のお知らせ 鈴木敦	15:05-15:10
7: トークセッション「PBL 授業の質保証を考える」 宮本絃太郎 (泉町二丁目商店街振興組合) 須藤文彦 (水戸市市長公室交通政策課長) 上野尚美 (茨城キリスト教大学文学部部長) 遊谷浩一 (人文学部副学部長・教育改革推進委員会委員長) プロジェクト実習履修生代表 コーディネーター: 鈴木敦	15:10-16:05
8: 閉会挨拶 佐川泰弘 (人文学部部長)	16:05-16:10
司会: 神田大吾 (人文学部根力育成プログラム小委員会委員長・プロジェクト実習担当教員)	

(3)活動報告会概要

例年の実績には届かなかったものの、学内と学外から併せて約 90 名の方々にご参加戴くことができた (図 3)。今年度、最も遠方からお越し下さったのは、京都からの大学院生の方であった。また連携組織からは、休日にもかかわらず、ご登壇戴いた方々に加えて、茨城キリスト教大学池内耕作副学長、常陸太田市役所福田洋昭少子化・人口減少対策課長を始め、多くの方々にご参加戴けた。

全体報告会では、2013 年度以来、ポスターセッションを同時開催して来た。時間制限が厳しいプレゼンテーションだけでは伝えきれない事柄を、履修生と参加者が直接遣り取りしながら説明できる場ではあったが、履修生の負担が大きいことは否めず、今年度は「疑似ポスターセッション」と称し、「できる範囲で対応」という緩やかな条件で対応を呼びかけた。結果的にチーム間で対応にバラツキはあったものの、全チームが情報提供の場として活用した (図 4)。

報告会は、人文学部の根力育成プログラム小委員会委員長、神田の司会により、式次第 (図 1 右) に沿って滞りなく進められた。学生の報告は、いずれも規定時間を最大限使い、かつ超過することなくなされた。各チーム、事前に十分なリハーサルを行ったものと思われる (図 5)。

2015 年度のトークセッションは、例年に比して踏み込んだ内容であったが、登壇者各位のご協力により、幸いにしてセッションの趣旨を十分に伝えることができた (図 6)。

また、昨年 2014 年度は所定の時間を大きく超過してしまい、参加者から苦言を頂戴したが、2015 年度はほぼ予定通りに終了することができた。

関係各位のご支援により、概ね「成功」と総括して差し支え無いものであったと考えております。ここに記して感謝申し上げます。

図 2: 歴史・文化遺産コース学生による受付業務



図 3: 会場風景



図 4: 疑似ポスターセッション展示 (左:北サイド 右:南サイド)



図 5: 履修生による報告と会場からの質問



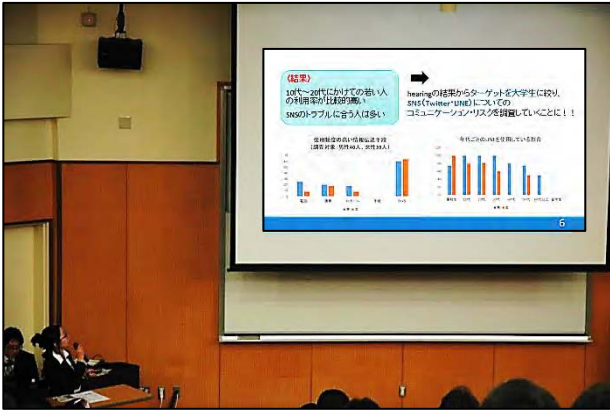


図 6:トークセッション

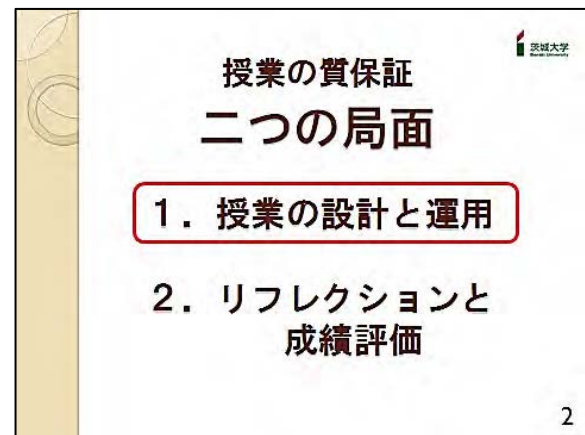
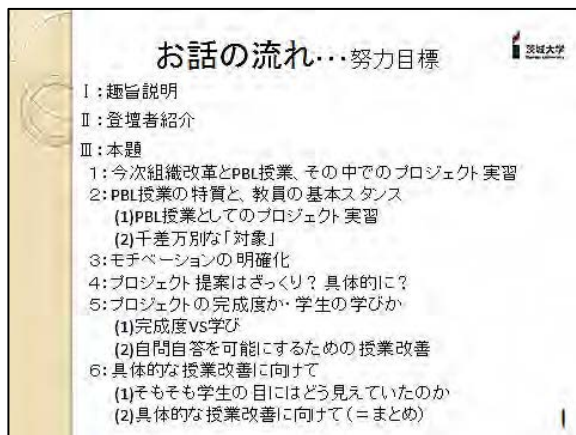


(4) 配付資料

以下に、活動報告会の配付資料を掲載する(図7)。但し、1点を除いて全てが本報告書の別の箇所に収載されているため、重載を避けて当該箇所の指示のみとする。適宜ご参照戴ければ幸いです。

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 式次第 2: 4年目を迎えたプロジェクト実習 | 第 I 章 図 12 |
| 式次第 3: 活動報告 | 第 II 章 各チーム活動報告 5: 活動報告会 PPT |
| 式次第 5: 先進地実地研修(近郊)報告 | 第 III 章 図 8・9 |
| 式次第 7: トークセッション | |
| 下記図 7 スライド No. 9 配付資料 | 第 I 章 図 21 |

図 7: 式次第 7 トークセッション PPT



1への対策

茨城大学

これが必要！(1) 履修目的の明確化

- 自己の現状分析：「根力構成要素ルーブリック」記入
マインドマップ作成&学生間意見交換
- 取組対象の研究：PJ提案者との直接面談(質問票作成)
- 選択理由成文化：取組希望PJとその理由
- 履修目的明確化：「個人の達成目標ルーブリック」作成

これが必要！(2) 課題発見技法の実践学習

- 役割の自覚：事例シナリオ学習
- 課題発見技法(1)：ブレインストーミングとKJ法AL
- 課題発見技法(2)：BSとKJでチーム活動構想立案

→2015年度プロジェクト実習冒頭に組み込み

主な追加教材

—お手元の資料をご覧ください—

- 根力の構成要素ルーブリック
- マインドマップ解説書
- 個人の達成目標ルーブリック
- 事例シナリオ雛形と
教員用手控え
- BS(ブレインストーミング)と
KJ法解説

4

中断したアイテム

—お手元の資料をご覧ください—

- 朝日新聞講座(原因は主に日程)
出張講座→活動紹介文作成→
朝日新聞講師による添削→
ポスターセッション
- PROGテスト(原因は主に予算)
「コンピテンシーを測る」テスト
データは継続的に蓄積されてこそ
将来の財産になるのだが...
来年度以降の復活はなるか?

5

2015 プロジェクト実習の大きな流れ

茨城大学

4月～6月前半：
ガイダンス→根力R→前年度代表チームによる活動紹介→マインドマップ→プロジェクト提案→直接面談→希望理由書→目標R→チーム結成→事例シナリオ→BSとKJ法のAL→チーム別活動(BSとKJ法で構想立案)→構想発表会

6月後半～前期末：
チーム別活動→中間報告会

夏期休暇～後期初週：
チーム別活動→中間報告会

11月ごろ (チームにより変動あり。概して学園祭時期)
チーム別活動→ピークとなる活動・発表

11月後半～12月前半：
チーム別活動→先遣地実地研修→活動報告会(約50日編り上げ)

12月後半～年度末：
リフレクション→報告書作成

6

プロジェクト実習 2015年度の構成

茨城大学

授業科目名	プロジェクト実習			
	A	B	C	D
テーマ	総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
段階	対象 学年			
根力強化 プログラム	2-4年	プロジェクト 実習A スタッフ編	プロジェクト 実習B スタッフ編	プロジェクト 実習D スタッフ編
	3-4年	プロジェクト 実習A リーダー編	プロジェクト 実習B リーダー編	プロジェクト 実習D リーダー編
根力実習 プログラム	4年	プロジェクト 実習A メンター編	プロジェクト 実習B メンター編	プロジェクト 実習D メンター編

*2015年度はプロジェクト実習A相当のチームは無し

7

COC事業

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/1354716.htm

Center Of Community

- *大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を支援すること
- *課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的とする(文部科学省HP)
- *茨城大学の連携先自治体・企業等
茨城県、水戸市、日立市、阿見町、高萩市、常陸太田市、常陸大宮市、東海村、大洗町、茨城町
(株)常陽銀行、(株)筑波銀行、(株)ひたちなかテクノセンター、(公財)日立地区産業支援センター、茨城産業会館

連携先を起点に
広く地域の方々と交流しながら事業を推進

8

様々なアクティブ・ラーニング

—お手元の資料をご覧ください—

茨城大学

名称	概要	特徴
アクティブ・ラーニング	学生が主体的に学び、知識・技能を習得する学習方法	学生主体、実践的、協働的
プロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)	課題解決を目的とした学習活動	実践的、協働的、自己学習
ケーススタディ	実際の事例を題材とした学習活動	実践的、自己学習
ロールプレイ	役割を演じる学習活動	実践的、自己学習
グループワーク	グループで話し合い、課題を解決する学習活動	協働的、自己学習
発表会	学習成果を発表する学習活動	実践的、自己学習
ディスカッション	議論を通じて知識・技能を習得する学習活動	協働的、自己学習
フィールドワーク	校外での実地調査や体験学習	実践的、自己学習
インターンシップ	企業や自治体での実習	実践的、自己学習
海外研修	海外での文化体験や学術調査	実践的、自己学習
ボランティア	社会貢献活動を通じた学習	実践的、自己学習
学生自治会	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生団体	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生起業	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生研究	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生発表	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生コンテスト	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生フェスティバル	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生祭	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生イベント	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生ワークショップ	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生セミナー	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生講演会	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生シンポジウム	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生パネルディスカッション	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生インタビュー	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート分析	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート報告	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2015	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2016	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2017	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2018	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2019	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2020	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2021	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2022	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2023	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2024	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2025	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2026	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2027	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2028	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2029	学生による自主的な活動	実践的、自己学習
学生アンケート活用事例集2030	学生による自主的な活動	実践的、自己学習

9

PBL授業の特色と 担当教員のスタンス

茨城大学

- Project Based Learning (課題解決学習)
アクティブラーニング(能動的学習)の一種
学生がプロジェクトに取り組むことを通じて
自発的に学ぶ
- 担当教員のスタンス
「学習環境提供者」「相談相手」=勘所は「我慢」
「わかっちゃいるけどやめられない」との戦い・葛藤
→「教育の場では許されること」と
「社会では許されないこと」との見極め(點加減)

10

(5)式次第1：開会挨拶 佐藤和夫（学長特別補佐・大学教育センター長）

茨城大学教育改革担当学長特別補佐をしている大学教育センター長の佐藤です。本日はお忙しい中本報告会のためにお集まりいただきどうもありがとうございます。

茨城大学では社会に出て働く意欲を高める教育に取り組んでおり、その代表が「根力育成プログラム」です。これは1年生ではまず大学生となるための基本的スキルや心構えを身につけ、2年生では社会で働く意義について考える。2年の後半から3年生では大学の外へ出て実際に社会の中で特定の課題を立て、解決の方策を考えます。このような知識・技術・実習を体験して、社会の中で貢献し、力強く生き抜いていく人間を育てるのがねらいです。

その後この「根力育成プログラム」に加えて大学の持てる力を地域と連携して活用するCOC事業、さらには社会で働くことをより直接に体験するCOC+事業が続き、地域との連携、大学同士の連携はさらに大きな展開を見せております。日頃の実習活動と本日の報告会開催にご協力いただきました水戸市、常陸太田市、泉町2丁目商店会他地域や企業の皆様、茨城キリスト教大学、常磐大学など大学関係者の皆様のご協力には深く感謝申し上げます。また主催者の茨城大学人文学部、とりわけ市民共創教育センターの関係者の方々のご尽力にも御礼申し上げます。

根力育成プログラムが始まって6年目を迎え、本年度から正規のプログラム修了者が出ることとなります。そういう時期の報告会ですので、充実した内容が期待できます。じっくり聞かせていただきたいのですが、本日は茨城大学の全1年生を対象としたTOEICテストが実施されております。私はその総責任者なので、本部に控えていなければなりません。ただ今ちょうど昼休みなのでその間を利用してあいさつさせていただいております。はなはだ失礼いたすこととなりますが、どうぞご容赦のほどお願いいたします。詳しいことは大学教育センターのキャリア教育の責任者である鈴木教副センター長よりお願いしたいと思います。はなはだ簡単ではございますが、関係者の皆様にもう一度感謝を申し上げ、あいさつを締めくくりたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(6)式次第7：トークセッション

以下に、式次第7・トークセッション「PBL 授業の質保証を考える」の全内容を、会場での録音に基づき掲載する。但し、紙幅の制約から

①司会者による発言者の指名等、定型的な発言

②「ありがとうございます」「宜しくお願い致します」等、受け答え系の発言

については、原則として削除している。また、口頭発言ならでの「繰り返し」や「係り結びの乱れ」、指示語における「指示対象の不明確な部分」等については、発言の趣旨を違えない範囲で若干の補記・修正を加えている。

登壇者は、以下の通りです（敬称略）。

宮本紘太郎（泉町二丁目商店街振興組合） 須藤文彦（水戸市市長公室交通政策課長）

上野尚美（茨城キリスト教大学文学部長） 澁谷浩一（人文学部副学部長・教育改革推進委員会委員長）

赤津遼馬（人文学部社会科学科4年次生） 南陽子（人文学部社会科学科3年次生）

飯村貴洋（茨城キリスト教大学文学部現代英語学科4年次生）

佐藤詩音（人文学部人文コミュニケーション学科2年次生）

●鈴木

それでは、式次第の7番、トークセッション「PBL 授業の設計と運用をめぐって」に参ります。

スライド[本章・図7：式次第7 トークセッションPPT]をご覧ください。1枚目のスライドです。これが本日のセッションの流れ・努力目標でございます。スライドの2枚目以降は、本日の式次第2の、私からの全体のご説明[第1章・図4]の所から、このトークセッションで使うことがあるかなというのをもう一遍引っ張ってきて再録したものです。適宜使いながらお話しさせて戴こうと思います。

本日はこのスライド1の流れでお話をしていこうと思っておりますが、学生諸君には、特に、大人の意見に予定調和的に話さないでねと言ってありますので、自爆テロ系の発言が色々出てくるのではないかと。そうであってこそここでしゃべる意味があるので大いにやってほしいのですが、そういうのを受けながら、大体こういう流れでいけたらいいなという位の形です。途中、時間の関係で少しずつ変わったりすることもあるかとは思いますが、その点ご容赦下さい。

色々改変をしまして、授業の質保証に向けて第一歩を踏み出したと少なくとも私は勝手に自覚している。スライド2のように、質保証には2つの面がある。ただ、今日、この時点で何か言えるのは1の「授業の設計と運用」方だなということで、今日は専らこのお話をさせて戴こうと思っております。

スライド3は、こういうのが必要だよというオトナ会議での分析を踏まえて色々やって参りましたが、先程も申しましたように、あくまでもこれは大人側の感想、あるいは担当教員の勝手な思い入れの世界です。これを学外の協力者、受講学生等、皆さんとディスカッションすることで効果検証をする。そして今後の課題抽出をしたいと思っております。さて、うまくいきますかどうか。

最初に、登壇者の紹介をさせて戴きます。ランダムにいきます。

まずは、泉町2丁目商店街振興組合、宮本紘太郎様です。今年でいうと、プロジェクト実習Bの所にお題を戴いております。先程ご紹介しましたオトナ会議の主要メンバーの一人でもあります。

それから、もうお一方、水戸市役所、須藤文彦様です。須藤様からは、プロジェクト実習Dの方にお題を戴くと共に、オトナ会議にも毎回のようにご参加戴いております。

それから、プロジェクト実習Cです。今年までは茨城大学で開講して、それを茨城キリスト教大学の学生さんが単位互換で受講するという形をとりましたが、来年度からはこれがひっくり返りまして、茨城キリスト教大学さんの方で開講して戴いて、茨城大の学生が受講させて戴くことになりました。お陰様で、いよいよもって連携が本当に実質化してきたなと思っております。それを今年度までずっと茨城キリスト教大学側で担当して戴き、来年度からはその授業を主催して下さいます茨城キリスト教大学文学部長の上野尚美先生です。

それから、ご存じのように今、大学は色々に変えを求められております。茨城大学の場合、2017年度4月を期して大きな改変があります。その中でプロジェクト実習も、今のまま、今の形態、今の位置づけでいいかどうかは分からない状態、そういう諸々を直接担当しております人文学部の副学部長、全学でいうと茨城大学評議員、そして、職務でいえば教育改革推進委員会委員長である澁谷浩一先生。これが大人側のメンバーです。

さて、今度は学生さんです。こちらはプロジェクト実習のカテゴリー順でいきましょう。

プロジェクト実習Bです。里美で活動して参りました、一見ほにゃっとして実は結構シビアな南陽子さん。

それから、プロジェクト実習C、茨城キリスト教大学4年生、今度大学院へ行きます、飯村貴洋君。

プロジェクト実習Dです。今年2年生。初めて受講で、いきなりチームリーダーを背負うことになって大変だった佐藤詩音さん。

今年度は4年生ということで受講しなかったのですが、昨年度と一昨年度、プロジェクト実習を履修しまして、佐藤さんの公共交通チームのOBに当たります。昨年度公共交通チームのリーダーを担当しました4年生、赤津遼馬君。このラインナップで参りたいと思います。

こういうメンバー、こういう流れでやるということは、要するに、大人のほうは事前にそれなりの打ち合わせをしたということです。大体こういうことが語られるべきだよねという話が出てきています。学生さんにはこの流れは伝えていますが、大人たちの相談内容は伝えておりません。委細気にせず、大いにしゃべって頂戴という形です。

それから、私は担当教員として成績をつける立場の人間ですから、そういう人間からよかったですか？と聞かれたら、よかったですとしか言いようがなくなってしまいます。ですので、なるべく私は大人に振る。そして大人から学生たちに振るという流れで転がしていきたいと思っております。極めてイレギュラーバウンドのできそうな、非常に恐ろしい構造を敢えて採りたいと思っております。さて、何が出来ますか。パンドラの箱を開けてみましょう。

さて本題なのですが、最初に、先程ちょっとお話しました、今次の組織改革の中で、このプロジェクト実習はどのような位置に置かれているのかということについて、まずは澁谷先生から簡単にご説明をお願いしたいと思います。

●澁谷

大きな背景というか流れ的な所を、不正確であっては困りますので、若干メモを見ながら話をさせて戴きたいと思っております。先程鈴木先生から、冒頭色々話があったと思っておりますが、そもそも2010年度に文部科学省の就業力育成支援事業というものに採択されまして、それがそもそもの始まりです。ちょうどその頃、人文学部では、今年で完成する4年目で初めて卒業生を送り出す今のカリキュラムというのを作りましょうという話がありまして、2012年度から始まる新カリキュラムでは、専門教育は勿論なのですが、同時に汎用的な能力をちゃんと養成しましょうということで、専門的な部分以外の実践的な学部共通プログラムというのを作ろうということになりました。その一つが、この根力育成プログラムでして、このプログラムの核になっているのが今日のプロジェクト実習ということになっています。

その頃はPBLという言葉そのものが、そもそもPBLとは何だろうという位のレベルの話で、恐らく今、PBLという
と大体イメージがつくようになってきているのは、茨城大学においては、この授業が正にそういう役割を果たしていた
のではないかと思います。一方、鈴木先生のお話にあったように、PBLの専門家というのは全くいませんでした。鈴木
木先生が中心になって、他の大学の事例を学びながら教員自身が学んで、学生と一緒に作っていくという形で動い
てきました。

鈴木先生からは、私はその頃からずっとこういう立場にいるものですから、組織的に取り組んで貰いたいという
話が何度もありまして、私もそれなりに努力したつもりではありますが、かなり限られた・特定の教員が担当する
という形で今に至っているというのは否定できない。そういう部分に関しては、私自身、反省する所があるかとは
思っています。

新カリキュラムには、実はそれ以外にも共通プログラムというのがありまして、学生の方はご存じだと思います
が、「地域課題の総合的探求プログラム」というのがあります。こちらのプログラムにも、同じように地域に出てい
くようなPBL的な授業があったりする。

さらに、世の中の動きは急でして、新カリキュラムが動き出してから、今度、COCという、大学は地域の中心であ
って、教育や研究で地域の核としてやりなさいという話になって、それでお金がついて、新しいプログラム、ここ
にいる学生の方も、今年の1年生から「茨城学」という授業が全員必修になっているということをご存じですよ。
そういう大きな変化ができています。加えて、今年、茨城大学はアクティブ・ラーニング元年で、全ての授業をアク
ティブ・ラーニング化するというので色々な取り組みが行われている。

そういう状況の中で、国立大学は改革しなさい、18歳人口は減ります、どうするのですかという流れの中で、特
に人文社会科学系は増えることはありませんよね、縮小ですよ、どのような形で縮小しながら前に踏み出すので
すかということが突きつけられている。そういう中で、先程紹介ありましたが、私のもう一つの肩書きである将来
計画委員長というのがありまして、正に将来計画をどうするかという課題に、今日、一番最後にご挨拶戴く佐川学
部長と一緒に取り組んでいるというのが現状です。これまでと同じような形には恐らくできないだろうと思っ
ています。しかし、これまで積み上げてきた今日の報告に凝縮されているような学生の学び、また教員が学んでいる
というものをぜひ今後に生かすような形でつなげていきたい。

先程鈴木先生からご紹介ありましたように、茨城キリスト教大学様との連携もこれからより一層深めて、学生の
学びの場とを保証しながら、これまで我々が積み上げてきたものを、これですなぐ形で、縮小という面はあるので
すが、そういう形でぜひ維持しながらやっていきたいと教員の方も思っておりますので、質保証という面におきま
しては、PBL授業に限らず、全ての教育に共通な部分ですので、そういう所にも生かせるようにできればと考えてお
ります。

●鈴木

非常に背景が広くて、色々なことがあって、そういう中での動きになっております。そういう背景を踏まえて、本
題に入りたいと思います。

スライドの9番をご覧ください。プロジェクト実習はPBL授業である。PBL授業というのは、この表のように一番上
に載ってまして、アクティブ・ラーニングの中でもトップクラスでアクティブ度の高い、学生にとって負荷の大き
いものです。続いてスライドの10番をご覧ください。PBL授業では自発的であることが大事だ。だから、教員はなる
べく手を出さない。しかし、教育の場で許されることでも社会では許されないことがあって、そこを見極めてきち
と舵取りをする必要がある。それが教員にとっては非常に難しいということがございます。

そういう中で、特にオトナ会議においては、授業にまつわる様々なことをご相談させて戴いております。色々な大
学の取り組みを見て参りましたが、このオトナ会議のような存在を持っているということにおいては、うちは進んで
いるぞ、すごいぞと自負しております。私は給料をもらってやっていますが、オトナ会議の学外の方は関係ないです
よね。全くのボランティアで、本学の教育のためにこれだけ色々に対応して下さる、とてもありがたいと思っ
ております。

さて、PBL授業の特質をさらにもうちょっと詳しくお話しさせて戴きたいと思います。

従来型の授業というのは、要するに、教員が自分の専門性に基づいて設計して、ぱっとしゃべれば、学生さんはま
じめに聞いてくれる。ある意味単純なのです。それに対してプロジェクト実習というものは、特にどこかのゼミの学
生という訳でもない様々な背景を持つ学生が、わっと集まってきて、さあその場で色々なプロジェクトをやるわけな
のですが、この千差万別な対象を相手にどうしたものかという所で、宮本さんから順番にご発言をお願いし

たいと思います。

●宮本

色々な方が履修されていて、私も今シーズン3シーズン目なのですが、最初の年は履修生も非常に多くて、100人を超える位いて、この報告会もいつ終わるのかなという位にすごく長かったのを覚えています。去年はちょっと人数が少なく、しかし、授業でカリキュラムになっている以上は、同じような成果といますか、PBLの授業を受けた学生さんたちはちょっと違うねというか、こういった所が身につけているよねという所まで持っていかなければいけないのかなと、僕は学外だから余計なお世話なのですが、思っていたりします。

でも、しかし、色々な方が学ばれているので、雰囲気も、肌感覚ですが、3学年とも違うし、なかなか難しいのだろうな、ここをどう乗り越えていくのかなとは思っております。

●須藤

色々な対象者がいる中で、今回、水戸市役所で取り組ませて戴いたのはインターンシップということで、それは結構重要なキーワードでした。最近の学生の方は結構まじめだということで、私の職場にいる者も、大学2年生の時からインターンをするというのが信じられないと言ったりしています。インターンシップで職場体験をして、自分の行き先を決めていくという流れが割合最近主流なのかなという中で、水戸市は茨城大学様と連携協定を結んでいるという状況はあるのですが、では、具体的にどういう連携をしているのかというと、余り見えてこないという部分があったりします。そこで私は、勝手に連携してしまおうということで、勝手に名乗りを上げて、私どもの部署でインターンシップを受け入れますと言ったら、誰も反対しなかったのが、連れてきてしまったという感じになっています。

実際、インターンという所に引かれてプロジェクト実習を受講したという人も多いと思うのですが、佐藤さん、どうなのでしょう。

●佐藤

正直に申し上げますと、私は民間企業が希望でございまして、公的機関は昔は考えていたのですが、最近は民間企業ということで、逆に下心なくプロジェクト実習Dを選ばせて戴きました。ただ、4月から活動してきて一番楽しかったと言ったらあれですが、有意義だった時間が市役所でのインターンシップの1週間でしたので、そういった意味では参加してよかったと考えております。

●須藤

水戸市役所に入りたいという気持ちにならなかったのが敗因で、ちょっと失敗したかな。1週間ほぼ毎日お昼を食べに行ったりして、ご馳走していたりしたのですが、あの投資はムダだったかと・・・(笑)。でも、楽しかったなということを4年生になったときに思い出して戴いて、「あっ、そうだ受けよう」と思って戴ければと思っています。

●上野

まず、この座席が真ん中だということで、茨城大学さんのご配慮が感じられたような、その分、うちの学生はとても緊張していますので、どうぞ皆さん、温かい目で見てください。

先程まで客席に座っていて、今ここに座っているだけで恐らく緊張していると思いますし、こういう経験がまた学生にとってとてもいい経験になるかと思えます。社会人になったときにプレゼンをする場面も沢山あるかと思えますので、そういう意味ではこの授業の一つの特色かと思えます。

私自身は、実はPBLのことを本当に全く分からなくて、PBLって何の略だろうと。私、実は英語の教員なのですが、そこから始まった位分からなかったのですが、私の先生は鈴木先生です。鈴木先生から色々教わりまして、当時、国際理解センター長という立場でしたので、国際理解に関しては一番関心があるであろうということで私に白羽の矢が立ったのですが、実際、私もそれに興味がありましたので、この授業が成立するためには、恐らく教員の意欲的な気持ちは大事かなと。ただ授業をするのが教員の務めなので、担当が何コマだから、そのうちの一つという感覚ではできないという感覚はありました。

かといって、教員の職業病だと思いますが、どうしても教えたくなのです。先程来鈴木先生がおっしゃっているように、学生の自主性を重要視しなければならないのに、あれこれ口出ししてはいけない、我慢我慢、これが最初の私の試練でした。

学生たちが一生懸命ディスカッションするのを見ているともどかしいのです。なかなか進まなくて、時間がたっても何も決まらない。一言こうすればと言いたくなるのを我慢していたのが私の最初の試練でした。

かと思うと、いつの間にか、茨大の誰々さんとどこどこで話し合いをしてきましたという報告があるのですが、担

当事者としては、学外に学生が行くときにはちゃんと届けを出さなければいけないのです。ところが、行ってきましたで事後報告ではダメなんだよというやり取りをしながら試行錯誤して、私自身も学んできたという経緯がございます。

●鈴木

プロジェクト実習は、色々な形で色々なことをやりながら、これまでともかくも動いて参りました。それを、質保証ということで学びにどういう風に結びつけていくのかというのが大事な所なのですが、まずはモチベーションだと思うのです。モチベーションを明確化することがまず大事だろうと思うのです。

担当教員のモチベーションは、極めてはっきりしています。PBL 授業をやるのだ。そして、少なくともこのプロジェクト実習は根力の育成プログラムですから、それによって根力を養成することが目的だ。途中で素材として地域連携をやるかもしれない。あるいは国際交流をやるかもしれない。それは担当教員からすれば二義的であって、まずは学生が根力をつける。要するに学ぶということなのです。ですから、成果物が素晴らしいというのは、勿論結構なことなのですが、何よりも、プロジェクトに取り組むことを通じて、何を学んだのが大事です。学ぶことが多ければ、成果物がズッコケていても、少なくとも担当教員としては、まあいいでしょうというような感じのモチベーションでございます。

さて、当の履修学生さんはどういう風に考えていたのでしょうか。これは、ばんばんばんと聞いていこうと思います。では、陽子ちゃんから順番にお答え下さい。なぜプロジェクト実習を履修したのでしょうか。

●南

私は今年2年目なのですが、正直、1年目は、ただ単に履修科目の一つとして、楽しそうとか面白そうとか軽い気持ちで取りました。2年目からは、正直、やるかどうか迷いまして、というのも、大変なことも多かったのですが、今こうして座っているということは、取っているのですが、何で取ったかという、学外の人とのつながりだったり、あと、メンバーと色々なことを乗り越えた、そういう人とのつながりが大きかったです。

●鈴木

1年目は気楽に入りました。2年目は足抜けできなくなりましたということでしょうか(笑)。

●飯村

自分がこの授業を取った動機は、まず、自分が小学校、中学校、高校、大学と受けてきた、教室に座ってただ黒板を見て受ける授業とは違って、学生が自分で動いてプロジェクトを進めていくという今までに受けたことがない授業だったので、面白そうだなと思って取りました。また、自分に足りていない社会性なども身につけると考え、履修しました。

●赤津

僕は、実習とか実践的な経験を通してスキルアップしたいというのが一番大きな理由です。茨大だと、人文というのは、実習とか研修のようなものとか、実践的な講義だったり座学が多いと思うので、そういった中で、発表であったりとかチームで何か活動するということを経験できる授業なのかなと思って取りました。

●鈴木

それでは、オトナ会議参加メンバーのお二人、いかがでしょう。お二人はどのようなモチベーションでこの授業にご協力を戴いているか。では、須藤さんから順番にお願い致します。

●須藤

私自身のモチベーションとしては、水戸市役所に優秀な人材を引き抜くという所にあるのです。何となく就職先として地方公務員、水戸にいるから水戸市役所ということではなく、前向きに水戸のことに取り組めるといふ人がとても必要だなと思っています。そこで、水戸市の大きな有利な点は、数多くある大学の中で水戸市を本部にしている大学があるということです。ですから、ぜひPBL 授業に食らいついて、私が定年を迎えるのが2030年なのですが、それまでは続けたいと思っています。

私は普通のゼミ活動位しかしたことがなく、プロジェクト実習のような授業を受けていませんでした。そういう中で、今の学生が、履修に当たってどういう意義があるのかということ考えた時に、通常の座学の授業では一方的受け身で知識を得るだけ。そこで得た知識を使って、また図書館で調べたりという行動的な学習もあるとは思いますが、基本的には人との関わりがない形態だと思うのです。PBL 授業の一番のポイントは、コミュニケーション能力がとても大事だという所で、そこが身につくという所が大きいポイントだと思います。

チーム編成で一つの物事に取り組むことになるので、チーム内で色々ないきかひがあったり、うまくいかないこと

があったり、そういった所を突破しなければいけないという、まず内向きのコミュニケーションが必要だということと、あと、社会に対して、例えば公共交通チームでしたら、茨城交通様と折衝して、こういうことをやらせて下さいという交渉能力も問われる。外向きのコミュニケーション能力も必要。そういったことが実践的に習得できるということはすごく有利なことなのではないかと思っています。

私自身の経験でいうと、大学でゼミ活動位しかしたことがなかったのですが、ゼミの先生がすごく頑固な老人で、ひどく嫌な思いをたくさんしました。その嫌さを超える存在はまだいないのですが、そのじいさんとの付き合いを克服したことで、今ではどんなじいさんとも付き合えるようになりました(笑)。そういうことがあったので、そういう強烈な経験がなくても、授業を通じてコミュニケーション能力を習得することができるということは、この授業の一つの売りにすべきだと思います。だからこそ、結果的にそういう能力が身についたねということではなく、あるタイミングで、コミュニケーション能力を高めるための専門的な講義をそこにに入れていく必要があるのではないかと思います。

●宮本

私としては、泉町2丁目商店街振興組合という水戸のまちなかのどこにでもある商店街で、どこにでもあるようにやはりちょっと寂れているという商店街なものですから、ここに学生の方々に一人でも多く来て載って何か利用して下さる。そこで遊ぶだったり、ご飯食べるだったり、買い物するだったりということのきっかけになればいいなという所で、プロジェクト実習という場で、皆さんたちと色々進めていければという所がモチベーションでございました。

学生の皆さんはモチベーションが高いので驚いていますが、よく私自身が学生の皆さんたちから聞くのは、自分たち学生だけでプロジェクトを実行できるという所が他ではないので、魅力的でやってみたいなということをよく聞きます。しかし、そのモチベーションが実際に実を結ぶのは結構難しく、この授業を受けるとそういうことができるよという仕組みではあるものの、実は授業を受けているだけでは何も始まらなくて、自分たちがプロジェクトを始める決断を下して、進めていかなければいけないという所が、他の授業と本当に違って、履修すれば必ず何かを得られるという訳ではないのです。履修して何かやらなければいけないという所が、イメージしていた所と履修してからのギャップとして感じられるのではないかと思うのですが、南さん、いかがですか。

●南

確かにそのとおりだと思います。ただ先生に言われてやるだけだと、その場では済むかもしれないのですが、社会に出たときに、何だおまえはみたいな感じで言われてしまうと思うので。

●宮本

勝手に振ってしまいましたが、そうなのです。社会に出てからだと、いわゆるルーチンワークというものは、どの会社でも、これは行政でもだと思いますが、あって、農家さんでも勿論そうですが、ルーチンワークというのはあるはずだと思うのです。それをやっていれば、多分、バブル経済の頃はそれで済んでいたと思うのです。しかし、今は特にすごい個性を求められたりとか、創意工夫して付加価値をつけなければいけないみたいな風潮が非常に強まっているので、私は現職も前職も営業なのですが、日々の営業をこなしているだけではいけなくて、そこから新たなサービスの提案をしなければいけないとか、新たな商品のご提案だったりとか、商品作りをしていかなければいけないみたいな。そういったことはプロジェクト実習と一緒になのですが、常にやっていかなければいけないというのは、学生の皆さんが社会人になったときに非常に厳しい洗礼としてあるかと思っています。

●鈴木

今のモチベーションに絡んでということで申せば、授業として今年盛り込んだものではルーブリックがございます。一番最初のA3とか、その次のカラーのこれです [編者注：第 I 章の図 12 と 13]。こういうルーブリックというものを書き込んで、自分で何のためにこの授業をやっているのだろうかということを折に触れて確認しながらやっていこうねということで織り込みました。

そのようなものをいっぱい織り込んだお陰で、スライド6のように、年間スケジュールがすごくトップヘビーになった訳なのですが、さて、効果のほどはどうだったか。ルーブリックを作って、モチベーションの明確化と維持にどの程度役立ったか、率直に言ってください。

●南

今、ルーブリックを確認しながらみたいな話があったのですが、作った時から一度も読み返していないので、確認しながらやっていないので、私の場合は効果はなかったと思います。

●飯村

ループリックは最初の授業の方で作ったのですが、確認する時間もなく、だんだんプロジェクトが進んでいくと、そちらの方に意識が行ってしまって、自分も同じように、今日やっと見返した感じなのですが、なかなかループリックの方に意識を向ける時間がなかったかなと思いました。

●佐藤

私の場合は、前々から自分で意識していた部分を言語化しただけだったので、逆に言うと、ループリックをやったからというよりは、前から自分で意識していたことを通年通してやったという感じになります。ただ、意識していても、実際にできたわけではなかったなので、その点が反省点です。

●鈴木

ループリックは今年度からだから赤津君は体験していない訳ですが、赤津君は、去年、ものすごくモチベーションをはっきりしてやってくれたのだけれども、あれはどうやって自分のモチベーションを明確化しながら維持しながらやっていたのでしょうか。

●赤津

自分は、正直、モチベーションを維持できたかという点、自分の中ではそんなこともないかなと思っています。途中で心が折れそうになることもあったような、何でこれをやっているのだろうと思うことは結構あったので、そういう風にモチベーションを維持されてきているように見られていたというのは、ちょっと意外ではあります。多分、最初に自分たちのチームではゴールを作ろうというものを、自分の中では明確にできていたように思うのです。僕の中では少なくともそういうものを設定していたので、ちょっと迷った時に、自分が何を目指しているのかという点、そういうゴールを明確に設定していたことで、それを思い返すことで、ある程度維持はできていたのかなと思います。

●鈴木

教員の方で、こういうツールを作らないとできないという訳でもなく、また、作れば必ずできるというものでもないということですね。さっき、南さんが「ループリックを作ったきり見ていないので」と言った時に、私は皆さんの顔をぱっと見渡したのですが、みんな様に「えへっ」という表情をしていましたから、多分、余り使われていないなど。うーん。その割には、先程のチーム報告では学びというものが出てきていたかなと。去年までは、ひたすら、これやりました、あれやりましたで終わった所に、今回は学びという言葉とか反省という言葉が出てきたので、きっと効果があったのだろうと思うことにします。はい（笑）。

さて、気を取り直して次へ参ります。スライドの1番、Ⅲの4と5です。

プロジェクトの提案は、「ざっくり」か「具体的」か、それから、「プロジェクトの完成度」か「学生の学び」かということですね。

これは、実はコインの裏表でして、私から説明しますと、学生がプロジェクトを提案します。学外からも戴きます。それがどの程度絞り込んだお題であるかというのは結構大事でして、非常にざっくり出しますという点、例えば須藤さんから戴いた、水戸の公共交通を活性化してくださいというお題です。それに対してどうしたかという点、「公共交通か」「鉄道もあるけれどもバスだ。」「高速バスもあるけれども市内バスだ。」「関東鉄道さんもあるけれどもやはり茨城交通さんでしょう。」と絞り込んできて、では茨城交通さんの中で、では何をするかという点、去年の赤津君のチームは時刻表の改善にフォーカスした訳です。今年の佐藤さんのチームは、先程出てきた「いばっぴ」と特急バスという風に絞ったのです。こーんな広い所から、ここまで絞ってきている。

それに対して、例えば、同じくプロジェクト実習Ⅱの方で、こみフェスの場合は、こみフェスというのが具体的にあって、開催日も決まっています、最初からこみフェスをいい形で進めましょうという話にフォーカスされています。最初からある程度絞られている。それだけに、その中で本当に何をすべきなのかという所にエネルギーを集中できます。

先程のように、今年は学年初めの授業内容が盛り沢山になりまして、学生たちが自分のチームで具体的に動き出すのが遅れています。チーム活動の時間が短くなっていく中で、どの辺のざっくり度がいいのだろうか、具体的ならいいのだろうかということがあります。

それは、イコール取り組むプロジェクトの完成度にも関わってきます。最初からぎゅっと絞られていけば、更なる絞り込みに時間を使いません。ある程度決めると、「ここをどうするか」に集中できますから、おのずと完成度は高くなります。それから、ざっくりやっていると、焦点を絞るのに手一杯で、よし、これをやろうと決めた瞬間、もう夏休みに入っているとか、そういうことになる訳です。

この、「プロジェクト提案というのはざっくりがいいのか具体的がいいのか」という問題について、今年の皆さんにアンケートをとりました。皆さんはどのチームに行きたいですかというアンケートです。その理由をざっと見ましたら、ある人は公共交通チームがいい。なぜかという、色々なことを考えられそう。要するにざっくりしているからいいと言うのです。ある人はこみフェスチームがいい。なぜかという、やることが最初から明確になっているからいいという感じで、学生の判断基準はそれぞれなのです。それを考えると、「ざっくり」という非常に曖昧な言い方をしたために、「ざっくり」という言葉で表される内容の実情がばらけたことで、却って履修生の色々な判断基準にそれぞれ適うものが出て来てよかったのかなど。してみると、提案の絞り込みの程度は、無理に統一しない方がいいのだなというのが現時点での私の結論です。

その上で、なのですが、プロジェクトの完成度か、あるいは学生の学びか、二者択一という話では勿論ないのですが、どういう風にそれを考えるべきかが問題になる訳です。

先程、先進地実地研修（近郊）ということで、拓殖大学で開催されました社会人基礎力育成グランプリの参観報告がありました。私も参観して感じたのは、あれはグランプリコンテストなのです。コンテストで好成績を挙げようとするれば、どうしてもプロジェクトの完成度の追求、成果物の追求になってくることは否めないのです。そうになると、ついつい教員が過剰に手を出してしまいがちになります。このコンテストはPBL授業としての完成度を競うものではなくて、どのような方法であれ社会人基礎力の修得度を競うものですから、それはそれで構わないのです。とはいえ私の目には、これはブラック企業に就職しても耐えられるように学生のうちから「こき使われ体験」をさせているのかな、みたいに見えるプロジェクトもありました。「社会人基礎力を身につける」という目的には適っているのかも知れませんが、少なくとも私の考えるプロジェクト実習、本学根力育成支援事業におけるPBL授業とは違うな、と。もちろん、非常に親近感のあるプロジェクトもありましたが。そこで、「完成度か学びか」そして「提案はざっくりか具体的か」という所で、それぞれお話をして戴きたいと思います。今度は、澁谷先生からお願い致します。

●澁谷

私自身は直接授業を担当している訳ではないので、ここにいる学生の皆さんと一緒に何かやっているという話ではないです。ですから、そういう所で、先程皆さんのモチベーションの話の中でも、面白そうだから、あるいは実践的な力をつけたいからという授業動機がありましたが、面白そうだからとやってみて、その学びの中で気がついたらこういう力が身についたということを振り返る中で、自分の成長を感じて戴ければいいと思います。ですので、私は、ざっくりがいいとか具体的がいいと決めつけるということではなくてもいいかなと思いますし、色々なバリエーションで、そういう意味では、色々なタイプの学生さんに合わせて、その形の中で色々学び方というのはあるような気がします。そういうカリキュラムの作り方というのは、教員のどの位そういうことを工夫してできるかというのがあります、そういう形で進めていけばいいのではないかとはいいます。

●鈴木

では、ざっくり派代表、須藤さんお願いします。

●須藤

ざっくり派代表の須藤ですが、PBL授業は水戸市役所の仕事として関わらせて戴くようになって2年目です。その前の年に、市民団体の活動の中で、赤津君たちと水戸の魅力発掘隊チームと一緒にやったという計3年間の経験があり、今の職務が公共交通のことを考え実践する部署にいるということもありまして、公共交通というお題だけを提供して、そこから自分で学生自身が考えて戴くという進め方でやっております。

一つの狙いとしては、公共交通という言葉自体がよくなくて、基本的に自分に関係ないなという感じを思わせるような言葉になっています。そういうのは鉄道マニアだけ考えていけばいいんじゃないのという向きがある言葉です。でも、本当はそうではなく、人間は日々移動しながら生きていく生き物ですので、必ず交通というものが関係しているのです。そういった所に気づいて戴きたいという所から、公共交通という大まかなテーマから、自分の関心どころにぎゅっと絞り込んでいく。そういった過程自体が、一つの考えていく過程の中で学びという効果が得られやすいかなという気がしております。

あと、何もざっくり派代表ではなく、水戸市役所ではもう一つ、こみっとフェスティバルに取り組むこみフェスチームも募集しているということもありまして、そのイベントをやるということは決まっているのです。ただ、それをどういうふうな工夫していくのかという余地が当然あったりするわけで、割合絞り込まれているようなテーマであっても、自分たちの能力や知恵といったものが生かせるという所で、そこでまた学びも出てくるということがあるので、どちらがいいということではなく、好みの問題ということかもしれないのですが、ただ、ざっくり派の

場合は、大まかなテーマが与えられて絞り込んでいくという過程があるので、どちらかというと教育効果的に向いているような気がします。予め決まっているものだと、なかなか出てこないということがあったりするかもしれないので、どちらもいい面があると思いますが、その辺が感想です。

●宮本

お題がざっくりで、そこから色々絞り込んでいくことは、私も非常に重要なことだと思いますので、それは大いに賛成なのですが、ここで私、3年間やってきて何となく思いますのは、プロジェクト実習で、大人が手出しをしてはいけないという縛りはあるものの、テクニックのようなものですか、考え方というか、運び方というものがある程度はこちらが提供してしまっていいのかなとは思っております。

こういう場合はどうすればいいのかなということを一通り学生の間で考えて、では、意見を、アドバイスを求めてみようかということで大人側に行くというのが多分理想なのだと思いますが、そうでなくても、必要に応じて、こういったときにはこういうことをすればいいとか、誰々に聞くと、それはよく分かっているから教えてくれるよというアドバイスをしていくということはいいいのかなと思います。

そうでないと、なかなかプロジェクト自体を決めることができなくなってしまうたり、そもそも、立案されたプロジェクト自体が、その1年間、実質は半年もないですから、その尺の中でできることなのかという所まで出てしまうということがあるのかなと思います。そのサポートの仕方というか、これはガイドラインを作るのが非常に難しく、先生にはガイドラインを作って下さいとずっとお願いをしていますが、やはりなかなかできてきません(笑)。そういった、こちらから出していい所と出さない方がいい所、あとは、この課題についてはこれ位時間をかけてもいいのかなという所を見ていった方がいいと思います。

さらには、先程の先進事例の学生さんの発表でもありましたが、埼玉のどこかの大学は、2カ月に1回、ミーティングでちゃんとやっている、みたいなお話がありましたが、その振り返りといいますか、レビュー・プレビューは定期的にやっていって、極端なことを言うと、2カ月たって、このプロジェクトはダメだなということになれば、また新しいプロジェクトを考えて、もう一回再出発するという英断までできるぐらいにしていっての方がいいのかなと。その上で、完成しなかったとしても、それはそれで全然問題ないのかなと思います。寧ろ、ずっと言っていますが、完成するだけとなってしまうのは一番よくないだろうということです。

●上野

お二方がざっくり型と仰っているのに対して、私の場合だと、課題が明確なタイプだということで申し上げたいと思います。

その前に、先程の発言の補足なのですが、私自身は、鈴木先生を師匠として4年間関わってきたというのは事実なのでございますが、今は文学部長の立場ですので、寧ろ、昨年度は、今ここにもいらっしゃいます国際理解センター長の山中先生が中心になってやっておられましたので、本当は山中先生が、今日、ここに座っていらしてもいいのかなと思いつつながら、それが補足なのですが。

さらに補足としましては、課題は明確なのですが、主となっているのが茨城大学さんということで、我々は、どちらかという、なるべく口を出さない。さらにアシスタント的な立場であったのも事実なのですが、大学の教員には、ある程度、幾つか教えなければいけないというノルマがあるのですが、それにこのプロジェクト実習担当がプラスアルファになっていた訳なのです。それが今度、課題が明確になっていて、さらに本学がそれを引き受けるということですから、さらに責任が重大になりまして、こちらでプロジェクト実習Cと言っていらっしゃるの、本学ではプロジェクト実習のIとII、前期1単位、後期1単位で、合計2単位ということでお引き受けする訳なのです。茨城大学側が年間で2単位ですから、それを合わせますと、前期と後期合わせて茨城キリスト教大学は2単位、内情を申し上げるようですが、ということはどういうことかといいますと、前期だけで成績を出す、後期だけで成績を出すために、前期と後期、簡潔に短期間で何かをしなければいけない。従って、課題を明確にしないと成績がつけられませんので、前期、話し合いはしましたが何もませんでしたというのでは成績はつけることがなかなか難しいので、そういう意味では、他のプロジェクトとかなり異質になるかなという気も致します。

ただ一方で、既にこちらでICEチームや異文化交流チームでやってこられた課題は割と絞られているので、やりやすいとも言えますので、では、課題が決まっていたから、先輩から引き継がれてきて、何も考えないで、そのまま先輩の言う通りですんなりいったかな、ディスカッションなくてできたかなという所を、ここにせっかくなりますから、一履修者である飯村君に聞いてみたいと思います。

●飯村

プロジェクト実習の中で2つの大学のチームがあって、それぞれ離れているということで、そのまま去年のフォーラムの内容を引き継いで、今年もそれで行うということではなく、しっかりと今年は今年で2つのチームで話し合っ
て決めていきました。

●上野

ということは、課題は決まっているけれども、何も話さなくて、すんなりできたというわけではないということ
ですよね。それでこそと思います。

●鈴木

さて、あっという間に時間がなくなりつつあります。

実は、オトナ会議等々で色々やっていたときに出てきましたキーワードがあります。「自問自答」です。須藤さん
から出てきたキーワードなのですが、オトナのほうで色々制度を作ったり、色々な課題を放り込んだり、それは勿論
やるべきなのだけでも、大事なのは学生が色々自問自答しながら進めていくことだろうということになりまして、
では、自問自答を促すための授業改善は何だということになります。例えば、ルーブリックなども本来はそういう役
割を果たすはずなのですが、どうも忘れ去られたみたいで、とりあえず今年はダメだったということです。ルーブリ
ック自体がダメだったのではなくて、その運用方法がまずかったという意味です

最後、かなり時間がきつくなってしまうので、オトナ3人に自問自答というキーワードで一言ずつお願いします。

●宮本

自問自答、私自身も常に繰り返していますが、繰り返しても一向によくならないと思って自問自答しています。

最初に掲げた目標をどういう風に達成していくかということや常に忘れないようにしましよな、という意味で
このキーワードが出てきたと思うのですが、先程、今までのを見て、次にどうしていくかという戦略を立て直す、
PDCAとか、よくそういうことがあると思いますが、これは大人になってからも実はできないことでして、ですから、
学生さんたちは、他の授業がある中でプロジェクト実習もやっていくからなかなか難しいことだとは思いますが、
それでもやはりそれをやっていったほうが良いだろうと思うのです。

ちょっと角度の違う話ですが、自問自答する時に、し過ぎるとどうしても視野が狭くなっていってしまうので、
時々俯瞰して見るということが重要なのかなと。最近、よくビジネスパーソンの中で俯瞰という言葉が出ています
が、小さいものを見たら、一回下がって、広くもう一回見直して、そもそも何でこの授業を受けたのかという所ま
で戻ってしまってもいいと思うのですが、そういったことから自問自答をしていくと、今どうしなければいけない
のかということが見えてくると思います。具体的に言うと、例えば10月の末に水戸まちなかフェスティバルに泉町
2丁目の所で皆さんに出て戴きましたが、ここでやるのはプロジェクトの一つ、皆さんのやりたいことの自己表現の
一つなので、例えば、そこに関わる保健所さんへの許可申請だったり、例えば消防法のどうのこうのといったこと
が、やっているよということを知っていることは重要だと思いますが、実際にやらなくてもいいのかなと思って、
そこは僕ら商店街のほうで全部処理してしまったのですが、そういうことだと思うのです。

出店しなければいけないから、そういう法律やら何やらまで全部調べて、ミスがないようにしなければいけない。
それも重要なことなのだけでも、自分たちがやらなければいけないのはそうではなく、例えばPRなのか、例えば
ポテトを迅速に出せばより多くの来場者にリーチできるということなのか分からないですが、そういったことが重
要なのであって、俯瞰して見た時に、多分、重要なこととそうでもないこと、優先順位が絶対出てくるはずなので、
そこが自問自答の一番のポイントになってくるのではないかと私自身は考えております。

●須藤

自問自答ということで、この授業を一年間履修しても2単位しかもらえないということで、単位のためにこれを受
けているという人は殆どいないのです。となると、自問自答するためにこれを履修しているという位の深い悩みの中
で活動してきた一年だと思うのですが、一番は、何のためにこれをやっているのかという所なのです。単位が少しし
かももらえないわけですから、これは自分のためになるものなのだと、何で自分のためになると思えるのか、そういっ
た所の繰り返しだと思います。一つのプロジェクト、イベントを立ち上げる上で、里美牛を使って何でカレーを出さ
なければいけないのだろうとか、なぜカレーが良いと思ったのだろうとか、その繰り返しで取り組みがどんどんよ
くなっていくという部分があるのかなと思います。

また、授業という一過性のものということだけではなく、自分のためになるということに加えて、あわよくば地域
のためにもなるということがこの授業の大きな特徴だと思っています。この授業を離れて、また、この大学を卒業し
て社会に出て、あの時ちょっと考えたこみっとフェスティバルのこととか、里美のこととか、交通のこととか、そ

ういったことは社会人になったらもうやめてしまっていていいという訳ではないのだと思うのです。様々な企業に就職して、勤務しながら、そういうテーマを常に持ち続けている。市民としてそういう舞台に立っていくということなどもきっと選択肢としてあると思いますので、自問自答というものは、自分の考えとか活動を継続させる源になるのではないかと思っています。

●鈴木

本当にロスタイムを超えてしまいました。でも、せっかく出てきてもらった学生さんたちに何をお願いしたいかという、1年間の恨み辛みをこういう所でばっと言ってもらおうというのがあって、それだけは言ってもらわないと詐欺になります。1年間やりました。そして、教員のほうはせいぜい改善した積もりになっています。実際やってみてどうだったろうか。今年度履修して教員の言う「改善」を体験した3人、それから「改善」以前を体験している赤津君と、一言ずつ、プロジェクト実習をやってみてどうだったかというのを、この際、率直に語ってください。

●南

恨みとかそういうのはないのですが、要望というか、ちょっと嫌らしい話なのですが、こういう活動をしていることを、就活ではないですが、将来に有利になれば少しはうれいします。

●飯村

この1年間を通して学んだこともあったのですが、ただ、このルーブリックに書き込んだことを1年間で全部達成することはできなかったのも、1年間を通して自分に足りないものなど反省点も多く見つかったのも、これから自分の反省点を直していくようにできたらと思いました。

●佐藤

学生を型にはめたがる所があるなと思って活動していました。例えば議事録の様式なのですが、場所や参加者、日時等書く欄がありまして、例えば私たちのチームは、時間が合わないために、1日に何回も集まったりという時があるので、そこまで必要か、大事なものは何をやってどう考えたかという部分ではないかと思っていました。また、その議事録、メールの多さは1人の班員への負担になっていたのも、改善を要望したいです。

●鈴木

今ので一つだけ、議事録なのですが、あれは教員の趣味によるものではありません。なぜああいう型式を定めているかという、教員のいない所での活動を正規の授業時間としてカウントするために、一定の書式で出さないといけないという文科省的な要求によるものです。この点については、年度始めのガイダンスで詳しく説明していたと思います。メールの方は分かりました。ごめんなさい。検討します。

●赤津

今年は4年生ということで、就活をやっていたのですが、その中で、こうやってプロジェクト実習で、最初受けているときは全然思わなかったのですが、前に出て発表したり、社会人の方、市役所の方であったり市民団体の方であったりとお話ししたりするという機会が、実際に面接を受けていて、その経験が役に立っているのかなというのはすごく感じました。

要望というか、この授業が年々よくなって来ているのは分かるのですが、自分が受講していた去年と一昨年は、急に予定が変わったりとか、ばたつくこと色々あったので、今年の内容を見ていると、だんだん型ができてきたとか、色々増えて来ていて、最初からそうだったらよかったのかなというのは正直な所です。

●鈴木

大学の授業は、通常はその分野に関して少なくとも10年は専門的トレーニングを受けてきた人間が、その専門性に基づいて運営するものなのです。ところがこのプロジェクト実習は、本当に自転車操業で、中国考古学だのフランス文学だのが専門の教員が、専門外のPBL授業について勉強しながら同時に実際の授業を運営して来ざるを得ませんでした。今、動いている授業に、勉強した側から直ちに新しい内容を追加しながらやって来たものですから、立ち上がりの3年間は、本当に不安定でひどかったと思います。ごめんなさい。そろそろ安定してきたかなと思っているけれども、まだまだもたっていますね。

●宮本

今回語られた中で、3人、4人の中に非常にいい気づきがあったかと思っていて、私、これは言わなければいけないと思ったのですが、社会人になるというのは、漠然と会社員になるとか勤めるということだと思ってしまうのですが、もう一つ、社会人と同時に、企業人とか組織人という言葉に代表されるような、ある程度大きな中での一人ということにもなるのです。

私も実際に就職するまでよく分からなかった、就職した後の研修会でそう言われて、ああなるほどねみたいな感じで、ピンとこなかったのですが、つまり、皆さん、茨城大学だったり茨城キリスト教大学の中の授業の一環としてやっているの、茨城大学の誰々さんだったり、何とかという授業を取っている誰々さんなので、その所はある程度の制約が出てくる。その制約を逆にどういう風に生かしていくかという所に持っていくと全然話が変わってくるのだと思うのです。

そういった所から、これが就活にどういうふうに関に立つか分からないですが、就職した後は絶対そういう意識は強くなると思います。就職して2、3年はそういうことが全然分からなくて、こんな会社いつ辞めてやろうかみたいな人がいっぱいいるのですが、そこで残っていくのは絶対そういう組織人という意識だと思うので、そういった所は大事にしたほうがいいと思います。

●鈴木

ありがとうございます。何か、まとめをして戴いたかなと。

●澁谷

さっき言おうと思って忘れたのですが、国立大学は10年ほど前から、6年ごとに目標・計画というのを立てて公表しています。さっき縮小云々という言葉を使いましたが、今年が第2期目の6年間の終わりで、来年度から第3期目に入るのです。こういう形になってから第3期目ということなのです。

第3期目の茨城大学としての中期目標・計画というのは素案が既に公開されていますが、その中に、全学部生が4年間に一度はPBL授業を受けるという目標がありますので、注目しておいてください。茨城大学はそれを掲げているということになりますので、皆さんが受けたプロジェクト実習と同じ内容の授業かどうかは別として、少なくとも次の6年間の終わりまでには全学部生がPBL授業を一度は受講するという目標を掲げております。そういう方向で大学は頑張ろうとしている。教員もそういうモチベーションでやっていくのだということを最後にお伝えしたいと思います。

●鈴木

皆さん、ありがとうございました。時間が本当になくなってしまって申し訳ないです。

もう一度スライドの1番に戻ります。そうですね、Ⅲの6の(1)、「そもそも学生の皆さんにどう見えていたのか」という所までは、どうか議論が進んで来たことになるかと思えます。Ⅲの6の(2)「具体的な授業改善に向けて(=まとめ)・・・簡単にまとめる訳にもいかないのかなとも思いますが、今日、色々お話して、教員がよかれと思ってやっていることが本当によく効果を出していることもあれば、却って迷惑になっていることもあるということも分かりました。率直に言ってもらえるのがいいだろうと思えます。

改善に向けてということで、先程澁谷さんから出てきました。そういう技法的なものを別立てにする。そういうようなものを作っていくというのはあるだろう。それは確かに今年のカリキュラムは非常に頭でっかちカリキュラムだったので、切り出すという手はあるだろう。ただし、どういう形でやり得るのか。そもそもマンパワーはどうなるのかということはあるかと思えます。

より本質的な所で、学生が自問自答する仕掛けの整備は幾らかはやった積もりですが、残念ながら今年度は空振りではあったなと。実効性を発揮していなかったな。来年度は、ではそれをどういう風の実効性を持たせるべきか。それと、もっと他に自問自答の環境というものを作るものができるのではないか、創意工夫ができるのではないか、そういうことを考えていく必要があるのだろうということを感じております。

本当に時間がないので、この辺り、ちょっと尻切れになってしまって申しわけないのですが、ここで締めとさせていただきます。

最初に「パンドラの箱を開ける」と申しました。パンドラの箱というのは、開けると、ありとあらゆる災厄が飛び出して、最後に希望が出てくるというのがオチの話なのですが、今日のパンドラの箱は、開けて特段災厄は出てこなかったですね。幸いにして色々な課題がいっぱい出てきて、最後に取り組むべきことが明確に出てきたかと思っております。これから先、また引き続き皆さんにご協力戴きながら、来年度、また質を向上させていければいいなと思っております。

かなり無理にまとめたという感があります。加えて時間も過ぎてしましまして大変申し訳ありません。これでトークセッションを閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

(7)式次第 8 閉会挨拶 佐川泰弘（人文学部長）

プロジェクト実習履修生の学生の皆さん、ご登壇者の皆さん、それから、報告会にお越し下さった皆さん、長い間ありがとうございました。

最後のパネルディスカッションがオトナ会議的な要素が強かったので、学生向けに少し話をしてみたいと思います。

私は須藤さんよりは年上ですが、茨大に、あと残り15年おりますので、これからも色々な形で皆さんとお付き合いさせて戴く機会があると思うのですが、PBLという言葉は、多分、5、6年前で、教員で知っているのはどの位というと1割もない。1%位しかいなかったかもしれません。それが、この授業の関係もありまして、茨城大学の中でも、PBLというのはこういうようなことかなというのがだんだん広まり、イメージも定着してきた所があるかと思えます。

ただ、その定義は難しく、色々な形のPBLがあるのかなということなのですが、今日の論点では2つあります。一つは、PBLといった時に、プロジェクトベースなのかということと、プロブレムベースなのかということです。もう一つは、根本的に成果なのか、それとも学びの過程なのかという問題がある。学生の皆さんからすれば、究極の答えを、正解を出せと言われていた訳ではなく、まだ卒論作成まで時間がある2年生、3年生がやっていることですから、ある程度練習です。

自問自答という話も出ましたが、私も、日々、人文学部をどうしたらいいか、来週も文部科学省へ行って色々な説明をしなければいけないのですけれども、どうしたらいいか自問自答で、どんな資料を作ったらいいとか、毎日授業をやりながらやっている訳です。でも、そういうことは管理職になるとかそんなことと関係なく、仕事を始めるとずーっと一生つきまとう話だと思います。

就業力という言葉が冒頭に出ましたが、仕事のやり方とはどういうことなのか、構えなのかみたいなことを、今の授業等で練習をしているのだと考えてもらえればいいかなと思っております。

では、何でこういうことをやってきたのか。もう一回おさらいみたいな話ですが、近年、茨大生を始め大学生が何を言われているのということです。よく勉強しているし、最近の大学生はすごくまじめだ。あるいは水戸市の須藤さんが仰ったように、地域の大学生は地域のこともよく知っているの、そのまま水戸市とか金融機関に就職してもらえれば、どういう所にどういう人がいて、どんなことをやっているか、この地域はこんなものだというのはある程度イメージがあるから、地域の仕事にも有利だということなのですが、一方で、前に出ていくという所が弱いと言われます。それから、概してコミュニケーション能力が弱いと言われる。世の中には色々な人がいますよね。須藤さんからもお年寄りとのコミュニケーションに関するお話がありましたが、性別とか、世代が違ったり、出身地・出身国が違ったりとか、そういう色々な人がいる訳です。人を選ばず、どんな人が相手でも、雑談から仕事の話まで自然に遣り取りができるようになるためのトレーニングを、大学生の内にやっておくことが大事なのではないかという発想がある訳です。それで、実際、皆さんの先輩が就職しているような行政機関とか企業にヒアリングに行くと、そういうことが大事で、大学生には必要だと思っているという意見が、大体口を揃えて出てくるという状態です。

そういう意味合いで、私ももこういう授業を展開しているし、それから、そういう要素をもっと強くするような大学改革を今やろうとしているということを理解してもらえればと思います。

もう一つ大事なのは、プロジェクト実習での取り組みは、それだけでは専門性や共通性がないのです。ある意味練習みたいな所がありまして。では、もっと成果とか答えを出していくにはどうしたらいいのかと言うと、それはやはり専門の勉強だということです。つまり、そもそも何が問題でこういうことが起こっているのかとか、では、どうすればみんな幸せになれるのかとか、もっと元をたどって哲学的に言えば、幸せって、みんなにとって、私にとって何なの、そういうところを考えることとセットにしないとイケない。小手先の所でどうこうしようと思ってもどうにもならないし、なつてこなかったというのが、私も含めた大人たちがやってきたことなのです。

そういう意味で、大人がこれまでやってきたことを、色々考えて色々やってきたけれども、どこがうまくいかなかったのかということ、専門の所で深く勉強をしていってほしいと思います。プロジェクト実習の履修で自ずと身につけてくる汎用的な能力と、各人が専攻に基づいて独自に学ぶ専門分野の知識・技術とをセットにすることで初めて、他の人とは違う、何かこの人は切れ者で優れているねという評価を受けられるようになるのではないかと思っております。

ですので、この1年間とか2年間とか、3年間、皆さん、ご苦労だったかと思いますが、決してこれで終わることなく、人生の、職業人としての、大人としての、これは始まりの授業ですので、今後も頑張って戴ければと思います。

最後に、何年にもわたってお付き合いいただいている地域の皆様方には、改めてお礼を申し上げたいと思います。

併せて、高校生もいらっしやっていますので、茨大に来て、ぜひ頑張ってもらえればと思います。

きょうは、長い時間どうもありがとうございました。

3:プロジェクト実習B 活動報告会(現地報告会)

プロジェクト実習Bの現地活動報告会は、2016年1月31日に常陸太田市里美地区里美学習センターで開催した。

(1)会場と足の確保

会場は、今年度も里美学習センターを使わせて戴いた。また、現地への学生の足として、本学水戸キャンパスーJR水戸駅前ー常陸太田市役所ー会場を結ぶバスを運行して戴いた。いずれも、連携関係にある常陸太田市役所ならびに里美ふるさと振興公社のご好意により無償で提供されたものである。

会場と足のどちらか欠けても、現地での活動報告会の開催は不可能となる。毎年のご支援に篤く御礼申し上げます。

図8:プロジェクト実習活動報告会配チラシ並びに式次第



上:チラシ(表面)

右:式次第(チラシ裏面データ)

2015年度プロジェクト実習B活動報告会	
I: 開会挨拶	
澁谷浩一(茨城大学評議員)	13:00-13:05
II: 第一部 2015年度活動報告	13:05-14:25
1: 今年度の活動概要	
(1) プロジェクト実習B	
担当教員 鈴木敦	
(2) 初年次PBL試行と今後の見通し	
担当教員 鈴木敦	
2: 学生・生徒の報告	
(1) さとみ・あいチームの活動	
プロジェクト実習B さとみ・あいチーム	
(2) 先進地実地研修(遠郊)報告	
プロジェクト実習A~D 履修生代表	
(3) 茨城県立水戸農業高等学校の活動	
水戸農業高等学校食品化学科・農業科 教員・生徒	
— 休憩・準備 20分 —	
III: 第二部 里美産品の試食と関係者スピーチ	14:45-15:55
(1) 茨城大学・事務サイドより御挨拶	
石井利男(茨城大学人文学部事務長)	
(2) 里美牛のブランド化と販売戦略・今後の見通し	
小林信房(里美ふるさと振興公社 代表理事)	
(3) 里川カボチャ復活への取り組みと今後の見通し	
荷見 誠(里川カボチャ研究会 会長)	
(4) 里川カボチャ焼酎とおさとちゃんグッズ	
山口景司(合名会社山口 専務)	
(5) 地域外との繋がり	
宮本紘太郎(泉町二丁目商店街振興組合)	
(6) 里美倶楽部誕生の経緯とこれまでの活動	
鎌田一夫(里美倶楽部)	
(7) 大学生・高校生から一言	
茨城大学・常磐大学・水戸農業高等学校 学生・生徒	
(8) 連携校教員から一言	
茨城キリスト教大学・常磐大学・水戸農業高等学校 教員	
(9) プロジェクト実習への想い	
蜂屋大八(宇都宮大学特任准教授・茨城大学プロジェクト実習B初期担当者)	
(10) 常陸太田市の支援と今後の期待	
白石栄里(常陸太田市役所里美支所 統括)	
IV: 閉会挨拶	
鈴木敦(茨城大学大学教育センター 副センター長)	15:55-16:00

(2) 事前広報

広報室を通じて茨城大学 HP 冒頭のイベント情報欄に開催通知を掲載して戴いた。

<http://www.ibaraki.ac.jp/events/2016/01/151736.html>

また、チラシ 2,000 枚を作成し、本学並びに連携関係にある常陸太田市様・泉町二丁目商店街振興組合様・茨城キリスト教大学様・常磐大学様・水戸市役所様を始め、各種連携組織を通じたルート、ならびに履修生・教員ルートで配付した。当日のチラシ（表面）と式次第（チラシ裏面用データ）を図 8 に示す。

(3) 会場設営と運営・撤収

現地説明会に当たっては、毎年人文学部事務長以下、総務係メンバーが総出でご支援を下さっている。看板（図 9）や横断幕（図 10）の作成からビデオ撮影・録音、万一の不調に備えてのバックアップ機材の準備まで、教員の意識が届かない部分を、「気がつけば準備は完了している」という絶妙の体制で支えて下さっている。

資料冊子の準備や会場の設営・模様替え・撤収要員としては、プロジェクト実習 B 履修生に加えて、今年度も履修生以外のアルバイト若干名を確保した。また、B 以外の履修生の中から、ボランティアで駆けつけてくれた者もいた。さらに水戸農業高等学校の生徒の皆さんや一般参加者の皆様も積極的に動いて下さった。

正に関係者全員で報告会を支えて戴いている。心より感謝申し上げます。



図 9: 会場正面と現地報告会看板

(4) 報告会概要

2015 年度の現地活動報告会には、過去最多となる約 70 名の方々にご参加戴くことができた（図 10）。これは、主として地域の方々のご参加数の増加によるものである。本章の冒頭で述べたように、今年度は地元の方々との連携を強く意識してプランニングに当たっただけに、嬉しい変化であった。

連携組織からは、常陸太田市役所・福田少子化・人口減少対策課長、常陸太田市役所里美支所・白石栄里統括、常磐大学・村山元理経営学科長、茨城キリスト教大学・池内副学長、始め、多くの方々にご参加戴けた。

特筆すべきは、宇都宮大学・蜂屋大八特任准教授ならびに「里美倶楽部」の皆様にご参加戴けたことである。

蜂屋准教授は、本学就業力育成支援事業開始に当たり任期付き教員として赴任され、里美地区との連携をゼロから立ち上げて下さった、プロジェクト実習 B の創始者である。その後、任期切れに伴い宇都宮大学に転出され、2016 年 3 月からは金沢大学にパーマネントの准教授として勤務されることになった。プロジェクト実習 B にとって節目の年となる本年、蜂屋先生ご自身も大きな節目を迎えられたタイミングでのご参加は、里美での活動を引き継いできた者として、とりわけ感慨深い（図 11）。

里美倶楽部は、約 15 年前に、里美地区（当時は「里美村」）におけるグリーン・ツーリズムへの取り組みが契機となって誕生し、主として東京圏在住のメンバーにより継続的な活動を続けておられる、里美地区と域外を結ぶ活動の大先達である。本学教育学部・岩佐淳一教授がメンバーのお一人である



図 10: 参加者による集合写真(後方に横断幕)

こともあり、筆者としてはかねてよりプロジェクト実習Bとの連携を望んでいたが、今回のご参加をきっかけに実現に向けた具体的な動きが始まることとなった。今後の展開が楽しみである（図12）。



図 11: 宇都宮大学・蜂屋特任准教授



図 12: 里美倶楽部・鎌田一夫様

現地報告会の司会は、井上紗希・星野由季菜の4年生コンビが担当した。

履修生による報告は、昨年12月の全体報告会での経験を踏まえて危なげの無いものであった（図13）。また、水戸農業高等学校生徒による報告は、2年目を迎えて内容・取り組み姿勢共に長足の進歩が感じられるものであった（図14）。



図 13: 履修生による報告



図 14: 水戸農業高等学校生による報告



図 15: 成果物陳列(配付用)



図 16: 成果物陳列(閲覧用)

会場後方には、過去四年間の活動を通じて蓄積してきた成果物を陳列し、参加者に自由にお持ち帰りないしご覧戴いた（図 15・16）。これまでの活動をご理解戴く上で有効であったと思われる。

唯一残念であったのは、今夏、プロジェクト実習 B と合同で開催した初年次 PBL 試行について、参加者自身による報告が実現せず、教員による報告のみになってしまったことである。報告会が学期末試験開始の前日であり、初年次生には酷な設定であったと反省している。詳細は、本書第 V 章を参照されたい。

試食会では、以下の方々に以下のメニューをご提供戴いた。従来の現地報告会参加者数を念頭に余裕を見込んで各 60 食ということをお願いしていたが、当日の参加者は過去最大の約 70 名に上った。しかし、皆さんが予め 60 食を上回る量をご準備下さっていたお陰で、余裕を持って対応することができた。主催者の想定ミスを補って戴き、誠にありがたいことであった（図 17）。

主食系

- ・ 里美牛カレー 里美ふるさと振興公社様
- ・ 里川カボチャのけんちん汁 食堂若竹（荷見誠）様

スイーツ系

- ・ 里川カボチャの柚子団子 食堂若竹（荷見誠）様
- ・ 里川カボチャのシュークリーム 茨城県立水戸農業高等学校食品化学科様
- ・ 里川カボチャのマドレーヌ 茨城県立水戸農業高等学校食品化学科様

アルコール系

- ・ 里川カボチャの焼酎 合名会社山口様

図 17: 試食会



里美牛カレー



里川カボチャのけんちん汁・シュークリーム・マドレーヌ



里川カボチャの柚子団子



里川カボチャ焼酎とおさとちゃんグッズ



会場風景①



会場風景②



会場風景③



会場風景④

試食会は大変好評で、里美製品の広報と集客の両面で、今回の報告会に大きく貢献してくれた。また、常陸大宮保健所保健衛生課の皆様には、開催の前提となる諸手続について懇切丁寧なご教示を戴いた。記して感謝申し上げます。

今年度の現地活動報告会は形態を大きく変更しての実施となり、主催者としては成否が大いに気になる所であったが、幸いにして関係各位のご支援により、「成功」と総括して差し支え無いものであったと考える。記して感謝申し上げます。


(5) 配付資料

以下に、現地報告会の配付資料を掲載する（図 18～22）。但し、下記の図については本報告書の別の箇所に収載されているため、重載を避けて当該箇所の指示のみとする。適宜ご参照戴ければ幸である。


式次第Ⅱ－1－(1)	プロジェクト実習 B 補足資料	第Ⅰ章 図 12・14～19
式次第Ⅱ－1－(2)	初年次 PBL 試行と今後の見通し	第Ⅴ章 図 1
式次第Ⅱ－2－(2)	先進地実地研修（遠郊）報告	第Ⅲ章 図 30・31

なお、図 20 は茨城県・茨城県青少年育成協会主催の「Youth & Top Meeting」開催に当たり、大久保太一常陸太田市長よりお声がけを戴き、プロジェクト実習 B 履修生代表が同席させて戴いた折の資料である。また、図 21 は全国市長会刊行の『市政』2016 年 1 月号に掲載された、大久保市長の寄稿文である。いずれも図 19 の補足資料として配付した。


図 18: 式次第 1- (1) プロジェクト実習B PPT


茨城大学就業力育成支援事業
根力育成プログラム
「プロジェクト実習B」の
背景・経緯と今後

茨城大学・大学教育センター
 副センター長（キャリア教育部長）
 鈴木 敏
 atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp



お話の流れ

1. 茨城大学就業力育成支援事業
2. 根力育成プログラムとプロジェクト実習
3. プロジェクト実習B・大まかな流れ
4. 発足時(2011年度)との差異
5. 授業改善への取り組み
6. 報告会のコンセプト


就職力と就業力・根力(ねぢから)

就職力：
面接対策などの、就職試験突破のための力


就業力：
就職活動時だけでなく、就職後も活躍して行けるための種々の能力の総体




根力：
本学学生が、卒業時に身につけているべき就業力
経済産業省「社会人基礎力」をベースに
茨城大学独自の要素を加えて定義


根力の構成要素


1. 基礎的学力	読解力	文章的理解力、論理的思考力、分析力
	筆記	文章作成能力、論理的思考力、分析力
	コミュニケーション	基本学力(学力)
	読解力	読解力、コミュニケーション能力、コミュニケーション能力
2. 社会生活力	生活力	自己の生活を実践できる力
	人間関係構築力	生活を通じて必要な人間関係を構築するための力
	情報処理力	生活を通じて必要な情報を知り、どのようにすれば入手できるかを把握する力
3. 行動力	主体性	物事に進んで取り組む力
	動機付け力	他人に動機付けを感じ取る力
	実行力	目的を設定し、短期に行動する力
	応用力	物事に従わず、積極的に思い通りの対応する力
	課題発見力	現状を分析し、目的や課題を明らかにする力
4. 思考力	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	整理力	課題が抱える矛盾、課題解決方法の影響など、状況を整理する力
	課題解決力	課題の本質を捉え、適切な解決方法を提示する力
	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
5. オープンマインド	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	異なる思いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々の物事との関係性を把握する力
	倫理性	社会のルールや人々の規範を守る力
	対人コミュニケーション力	対人関係の発生源に反応する力


茨城大学根力育成支援事業

1. 4年一貫の「根力育成プログラム」
2. アクティブラーニング(能動的学習)とりわけ
PBL(課題対応型学習) 技法の重視
3. 学生同士の相互教育体制
4. 学生の学びを学生自身と教職員が共有するための電子ポートフォリオシステムの構築
5. 所定単位の修得者に「根力修了証」発行


根力育成プログラム

各期の全学目標	根力(ねぢから)育成プログラム
第一段階 根力育成プログラム 学生が卒業時に身につけるべき就業力(就職力・就業力)を育成するための基礎的な学びを身につける。	1年 根力養成プログラム ①フレックシブルな学び
第二段階 根力強化プログラム 社会で求められる能力を身につけるための実践的な学びを身につける。	2年 ②スタックアップ 科目群 根力強化プログラム
第三段階 根力実践プログラム 実践的な学びを通じて、卒業までに身につけるべき就業力(就職力・就業力)を身につける。	3年 根力実践プログラム
	4年 根力実践プログラム


プロジェクト実習の位置付け

根力強化プログラム(初めての受講者向け)
「プロジェクト実習 **スタッフ編**」

根力実践プログラム(二回目の受講者向け)
「プロジェクト実習 **リーダー編**」

根力実践プログラム(三回目の受講者向け)
「プロジェクト実習 **メンター編**」


**2015年度
プロジェクト実習の構成**

授業科目名	プロジェクト実習 A	プロジェクト実習 B	プロジェクト実習 C	プロジェクト実習 D
テーマ	総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
段階	対象 学年	総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解
根力強化プログラム	2-4年	プロジェクト実習A スタッフ編	プロジェクト実習B スタッフ編	プロジェクト実習C スタッフ編
根力実践プログラム	3-4年	プロジェクト実習A リーダー編	プロジェクト実習B リーダー編	プロジェクト実習C リーダー編
根力実践プログラム	4年	プロジェクト実習A メンター編	プロジェクト実習B メンター編	プロジェクト実習C メンター編

大まかな流れ(1)

茨城大学

2010年度

- 茨城大学、文科省「大学生の就業力育成支援事業GP」に採択される

2011年度

- 茨城大学に蜂屋准教授着任。里美地区をフィールドとした授業を設計

(1)域学連携

- 常陸太田市役所・里美地区地域おこし協力隊・総務省等補助金

(2)3大学連携

- 常磐大学・茨城キリスト教大学

9

大まかな流れ(2)

茨城大学

2012年度

- 民主党の事業仕分けにより「就業力GP」打ち
- プロジェクト実習開講
- 里美Caféチーム（現・プロジェクト実習B）さとみ・あいチーム）活動開始

2013年度

- 「就業力GP」の事実上の後継補助金である文科省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に採択される
- 蜂屋准教授、宇都宮大学に転出
- 後任として、鈴木が里美地区でのプロジェクト実習の担当教員も兼任

10

大まかな流れ(3)

茨城大学

2014年度

- 里美地区地域おこし協力隊(第一期)三名、任期満了に伴い交替
- 里美ふるさと振興公社・茨城県立水戸農業高等学校・泉町二丁目商店街振興組合始め諸組織との間で連携を拡大
- 茨城大学「地(知)の拠点整備事業(COC)」に http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ 採択される
- 「産業界ニーズ事業」補助金交付期間終了
- 常陸太田市による予算補助打ち切り
- 協力隊(第二期)域学連携担当者退任

11

2015年度プロジェクト実習B 発足時(2011年度)との差異

茨城大学

	終了・退任・消滅	継続・拡充・新設
人	1. 蜂屋准教授 2. 里美地区地域おこし協力隊・域学連携担当者ポスト	1. 地域の方々のご支援 2. 市役所からのご支援 3. 新たなパートナー 4. 学生の意欲
予算	3. 産業界ニーズ事業補助金 4. 市役所からor市役所経由の各種補助金	6. COC事業補助金(毎年申請) 7. 大学による補助金(毎年申請) 7. 学生の独自申請による補助金
施設等		8. 公共施設等使用時のご支援 9. 交通手段確保のご支援

不安

12

授業改善への取組(1)

茨城大学

これが必要！①履修目的の明確化

(1)自己の現状分析：

- 「根力構成要素ルーブリック」記入
- マインドマップ作成&学生間意見交換

(2)取組対象の研究：

- PJ提案者との直接面談(質問票作成)

(3)選択理由成文化：

- 取組希望PJとその理由

(4)履修目的明確化：

- 「個人の達成目標ルーブリック」作成

13

授業改善への取組(2)

茨城大学

これが必要！②課題発見技法の実践学習

(1)役割の自覚：

- 事例シナリオ学習(「最悪の状況」を演出)

(2)課題発見技法(A)：

- ブレインストーミングとKJ法

(3)課題発見技法(B)：

- ブレインストーミングとKJ法でチーム活動構想立案

2015年度プロジェクト実習
冒頭に組み込み

14

主な追加教材

—お手元の資料をご覧ください—

- 根力の構成要素ルーブリック
- マインドマップ解説書
- 個人の達成目標ルーブリック
- 事例シナリオと課題(雛形)
- ブレインストーミングとKJ法解説

15

4年間にわたる
皆様のご支援に
心より感謝
申し上げますと共に
今後とも、どうぞ宜しく
お願い申し上げます

16

2つの報告会
それぞれのコンセプト

1.プロジェクト実習・全体報告会
茨城大学水戸キャンパス (12/12)
「学び」の内容を前面に、大学内外に

2.プロジェクト実習B現地報告会
里美学習センター (本日)
チームの具体的な活動内容と感謝の意
を前面に、現地の方々に

17

ご清聴感謝申し上げます

鈴木 敦
atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

18

図 19: 式次第 2-(1) さとみ・あいチームの活動 PPT

プロジェクト実習B

さとみ・あい活動報告

【さとみ力伝え隊】
箭内淳美 山田真理子 南陽子 山口奈穂 山口未来
【泉美・ゆう】
大枝俊貴 鈴木透 助川実咲 小林希望
【全体統括】
井上紗希 千葉美香 星野由季菜

1

全体報告

全体目次

1. チーム概要
2. さとみ力伝え隊活動報告
3. 泉美・ゆう活動報告
4. まとめ

2

全体報告

チーム概要

大チーム
さとみ・あい

小チーム
泉美・ゆう
水戸市泉町を
中心に活動

小チーム
さとみ力伝え隊
里美地区を
中心に活動

3

さとみ力伝え隊報告

さとみ力伝え隊報告 目次

1. 活動の目標・目的
2. 今年度の活動
3. 活動内容
・・・里美訪問、里川カボチャ収穫祭、
さとみ・あい合宿フィールドワーク、
かかし祭り出展・味覚祭参加、SNS広報
4. よかったこと、学んだこと
5. 今後の展望

4

さとみ力伝え隊報告

1. 活動の目標・目的

- 学生視点で里美をPRする
- 里美を外の人に知ってもらう
- 里美との新たなつながりづくりのお手伝いをする

→

- SNSを利用した広報の活発化
- イベントを成功させ、里美のファンを増やす
- 持続可能な活動を心がける
- 外部との連携の強化

5

さとみ力伝え隊報告

2. 今年度の活動

【フィールドワーク】

6月14日	・・・里美訪問
8月10、18日	・・・里美訪問
9月7日	・・・里美訪問
9月28・29日	・・・さとみ・あい合宿フィールドワーク
10月17日	・・・里川かかし祭り出展
10月24日	・・・里美訪問
10月30～11月1日	・・・里美かかし祭り出展、秋の味覚祭参加
11月15日	・・・youth&topミーティング参加
1月31日	・・・おさとちゃんトートバック配布

6

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容①里美訪問


6月14日 荷見様、里美ふるさと振興公社の方々への御挨拶・御相談、畑作業のお手伝い

8月10日 里美地区内取材

8月18日 畑の手入れ、BSジャパン取材対応
→ 2015年10月11日放映<日本「真」発見>

9月7日 里美ふるさと振興公社での打ち合わせ

10月24日 里美ふるさと振興公社にて里美牛カレーの仕込み



7

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容②さとみ・あい合宿フィールドワーク

日程: 9月28日・29日の二日間
●9月28日

【午前】
ガイドス
・常陸太田市里美地区概要(白石栄様)
・里美ふるさと振興公社の取組概要(豊田紀雄様)

【午後】
・里川カボチャのレクチャー(荷見誠様)
→ 在来種復元の取組: 里川カボチャ研究会・耕作放棄地対策
・畑見学 → 農事暦と作業の実際
→ メッシュ圃と電気圃によるイノシシ対策
・荷見様・豊田様・後藤様・鈴木様からのレクチャー、荷見様他4氏との情報交換、学生自身の振り返り

8

さとみカ伝え隊

3. 活動内容③さとみ・あい合宿フィールドワーク

●9月29日

【午前】
・里美牧場とプラトー里美に関するレクチャー(豊田様)
→ プラトー里美の施設見学・利用状況データ
→ 里美牧場における飼育～出荷体制
→ 現有体制・施設と旧体制・施設からの改善点等
・牧場、飼料米生産田&関係施設、ついでに里見学

【午後】
・里美牛関係施設、有機農園見学(豊田様)
・荒崎邸見学(NPO法人・遊学様)
・生産物直売所見学

9

さとみカ伝え隊

3. 活動内容③さとみ・あい合宿フィールドワーク

【学んだこと】

- ・カボチャや里美牛などの食が、地域や他地域の人々を結び役を果たす。
- ・イノシシ対策は、随時取って行く必要がある。
- ・新しい技術を研究し、取り入れていくことの重要性を実感した。
- ・林業、伝統文化、祭りにおいて、後継者がいないことにより伝わらなくなってしまう可能性への危機を感じた。
- ・地域内外に関わらず次世代の人間に関わっていく大切さを学んだ。

10

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容④里川カボチャ収穫祭

日程: 10月17日

【目的】
・里美に実際に足を運んでもらうきっかけを作る
・里美について知ってもらう
・他大学との交流を図る

【方法・内容】
・里川カボチャ収穫祭
・レクリエーション
・里川カボチャを使った軽食の提供
・観光スポットの一つである「横川の下滝」案内

11



参加者より

12

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容④里川カボチャ収穫祭

●アンケート
・参加者に、事前に作成したアンケートを配布

回答者: 参加者20名(さとみ・あいメンバー以外)

・質問は全部で6項目
・質問は「(ま)か(い)え」の二択と自由記述によるもの

13

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容④里川カボチャ収穫祭

収穫祭満足度

大変満足	5%
まあ満足	6%
普通	55%
少々不満	25%
不満	5%

収穫祭にまた参加したいか?

ぜひ参加したい	5%
まあまあ参加したい	15%
どちらでもない	30%
あまり参加したくない	50%

「特」にどのスケジュールが良かったですか? (複数可)

1位	かぼちゃ収穫	14
2位	レクリエーション	9
3位	里美地区観光・横川の下滝	8
4位	道の駅	5
5位	かぼちゃ試食会	5
6位	その他 (お昼)	(全部)

14

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容④里川カボチャ収穫祭

「収穫祭を通して里美に対する印象は変化したか?」
・自然、特産物、里美の人の良さなどを知り、里美は素敵なお場所だと感じた。

「感想・その他」
・大学、高校の学生、生徒、そして教員の方々と楽しい時間を過ごせた。
・試食会に水農の食文化も入れていければより面白いのではないか。
・グッズの開発があると楽しい。デザインをさとみ・あいにトータルなPR(食・自然・地域伝統文化)パンフレットを太田市役所に提案してほしい。

15

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容④ 里美かかし祭り出展

●里美かかし祭: 10/24~11/28
・さとみ・あいチームで計3体出展
→ 佳作、努力賞×2をいただきました!



16

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容⑤ 秋の味覚祭参加

- 秋の味覚祭: 10月31日(金)～11月1日(日)
- ・里川かぼちゃコロケの仕込みのお手伝い(10/30・31)
- ・里川かぼちゃ研究会のブースにて販売のお手伝い(10/31・11/1)

→二日間で
里川かぼちゃコロケ約470個を完売！！



17



18

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容⑥ SNS広報

- Facebookの「しいね!」 94人
- Twitterの「フォロワー」 78人 (2015年6月2日時点)

目標・・・今年度末までに倍増させる!

2016年1月24日時点で

- Facebook 108人
- Twitter 189人

←達成！！

19

さとみカ伝え隊報告

3. 活動内容⑥ SNS広報

- 更新回数
Twitter 昨年度7回、今年度28回
Facebook 昨年度25回、今年度12回
- 広報としてより即時性の高いTwitterに力を入れた
- ・どのように更新すればフォロワーやしいね!が増えるか
- ・里美地区の情報も併せて発信すべき

Twitter @satomi_ai
@izumi_u_satomi
Face book さとみ・あい

20

さとみカ伝え隊報告

4. 良かったこと・学んだこと(年間通して)

- ・メンバーが地域の方々と密接に関わることができた。
- ・メインの活動を絞ったことで、集中して取り組むことができた。
- ・小チーム内での意思疎通、役割分担ができた。
- ・目的を持って行動することの重要性を学んだ。
- ・自分たちが何をするためにどんなことをすればいいのかを考えることができた。

21

さとみカ伝え隊報告

5. 今後の展望

- 広報にさらに力を入れる
・・・里川かぼちゃを多くの人に知ってもらうための活動
・・・学内など身近なところに向けての活動
- 外部の方がもっと里美に足を運び易くなる方法を考える
- 「何が里美のためになるのか」ということを常に考えて活動していく
- ・・・地域の方々との交流を充実させる

22



ご清聴ありがとうございました!

さとみカ伝え隊の報告は以上です
以下、泉美・ゆうチームの報告です

23



泉美・ゆう

24

泉美・ゆう

自己紹介

さとみ・あい


／ 〵

さとみカ伝え隊 泉美・ゆう

25

泉美・ゆう

自己紹介



泉美・ゆう

「わたしたちが暮らす」 水戸市の「泉」町二丁目

「わたしたちが根ざす」 常陸太田市の里「美」地区

26

泉美・ゆう

目的

泉町商店街および水戸市を拠点とした

「里美地区のPR」
+
出店やイベント参加を中心とした

「泉町の魅力探し」

27

泉美・ゆう

活動内容

「里美地区特産品販売ブース“里美カフェ”」

- ①里美カフェ@泉町会館
- ②里美カフェ@水戸まちなかフェスティバル
- ③里美カフェ@茨苑祭

「PRリーフレットの作成」

28

泉美・ゆう

①里美カフェ@泉町会館



【menu】

main
里美牛カレー
里美牛丼



dessert
里川かぼちゃのアイスクッキー

Drink
飲むヨーグルト
里美コーヒー



29



30



31

泉美・ゆう

②里美カフェ@水戸まちなかフェスティバル

【menu】

main
里美牛カレー



dessert
里川かぼちゃのタルト

vegetable
ルッコラ
ホウレンソウ

32



33



34

泉美・ゆう

③里美カフェ@茨苑祭

【menu】

Dessert

里川かぼちゃのスイートパンブキン
里川かぼちゃのタルト



35



36

泉美・ゆう

リーフレット制作

両面に里美・泉町それぞれを特集

「入口」をふたつに

SNSには無いよさ

37

泉美・ゆう

リーフレット制作

費用について

「企画提案チャレンジ支援事業」

若者が自ら提案・実施する企画提案を募集。
補助金や指導員の助言指導を行い、地域における若者の活動のチャレンジを応援する。

主催：公益社団法人茨城県青少年育成協会様

プレゼンを行い、10万円の補助をいただいた。

38

泉美・ゆう

リーフレット作成

打上げて使ったお店よかったね!

感じた魅力をリーフレットにすればいいんじゃない?

カフェ多いし、魅力的だよな〜

生美焼きやまい!

39

泉美・ゆう

リーフレット作成

コンテンツ作成

24,000部

デザイン

40

泉美・ゆう

リーフレットの有用性

配布が現時点では不十分であること、またリーフレットによる振興の効果が実感しづらいことから、今回作成したリーフレットの有用性について検証を行った。検証の方法としては、茨城大学の学生をターゲットとして、配布したリーフレットを手にした学生に対して、配布したリーフレットに関する質問を行い、全体の88%が里美地区に関するリーフレットを手にした学生に対して、内容を聞いた。内容は、「おしゃべり」「レトロ」というキーワードを重視した。自分たちが感じた魅力をリーフレットに載せたいという声が多く聞かれた。狙ったようにリーフレットが活用されていると考えられる。このリーフレットが地域振興に役立つことにより、両地区の魅力を伝えることにつながる。配布に力をいれている。

■行ってみたいと思った ■魅力を感じた

■特に...

41

泉美・ゆう

リーフレット配布予定先(代表例)

茨城大学	泉町二丁目振興組合様
図書館広報スペース	泉町会館
社会連携センター	village310様
里美地区	水戸市
常陸大田市役所様	水戸市役所様
里美ふるさと振興興社様	水戸市公民館様
道の駅さとみ様	水戸芸術館様
1/31里美地区報告会	こみっとフェスティバル
2/7汁oneカッパ	

42

泉美・ゆう

成果

お客様の声(カフェにて)

- 「里美牛?」⇒メニュー等で里美を強調したこと興味をさっかけとされた。
- 「おいしいカレーでした」⇒里美牛のPRとしては疑問符が残る
- 「今年もかぼちゃ買いに来たよ」⇒魅力ではないが、確実に人気を得ている。
- 「タルト、美味いって聞いてきました」⇒茨城祭で販売するという戦略の成功。

先輩方が作成したリーフレットの配布
⇒リーフレットのPRに対する有用性を実感。

43

泉美・ゆう

学んだこと

ひとりよがりの解消
アンケートの実施(対象と内容)
マーケティング
どんな層をターゲットとして、どうすればその層に届く?
いかにブースの中に構造をつくっていくか
誘う難しさ
魅力を言葉にすること

44

泉美・ゆう

「プロジェクト」

表舞台から裏方まで、
さまざまな役割分担があって、
それぞれが力を出し切ってはじめて
ひとつのプロジェクトとなる。

45

泉美・ゆう

まとめ

「さとみ・あい」としての活動も相まり、
水戸での里美のPRはますます。

しかし、泉町のPRにおいてはその限りでない。

今回、作成したリーフレットがその一端を担ってくれるよう
継続した活動を!!

46

全体報告

お世話になった皆様

荷見誠様始め里美地区の皆様
 豊田紀雄様始め里美ふるさと振興公社の皆様
 福田様始め常陸太田市里美支所の皆様

宮本 綾太郎様始め泉町二丁目商店街振興組合の皆様
 森山純子様(水戸芸術館様)

茨城県立水戸農業高等学校様
 新堀俊博先生(食品化学科様)
 磯野貴志先生(農業科様)
 池澤正博先生(農業科様)

茨城キリスト教大学様
 常磐大学様

茨城大学教職員の皆様

47

ご清聴
 ありがとうございました！！




さとみ・あい 公式キャラクター
 おさとちゃん

・ Twitter @satomi_ai @izumi_u_satomi
 ・ face book さとみ・あい

48

図 20:式次第 2-(1) さとみ・あいチームの活動 補足資料(1)

Youth & Top Meeting



出会える
 聴ける
 話せる

**若者×トップ
 ミーティング
 2015**


地域で活躍する若者の団体・グループのリーダーと、自治体や企業のプロフが集まります。意見交換や交流会で、トップとのコミュニケーションを通じ、あなたの団体・グループが新しい一歩を踏み出すチャンスにしましょう。

テーマ
 3つの力を引き出す！
 活動の力を引き出す
 活動に参加する仲間を引き出す
 活動のPR力を引き出す

日時 平成27年11月15日 14:00～17:00
 会場 ホテルレイフビコー 水戸 (09113) 30～1
 参加費 無料(交流会費3,000円程度)
 対象 毎月1日～10日 30歳以下
 募集人数 30名
 募集期間 平成27年10月8日～平成27年11月5日
 参加申込 公益社団法人 茨城県青少年育成協会 FAX (募集開始)、Eメール (募集開始後) 茨城県青少年育成協会ホームページからダウンロードの申込用紙を提出
 TEL: 029-227-2747 FAX: 029-228-6200 Eメール: shab@baraku-kusel.jp ホームページ: http://www.baraku-kusel.jp

○申込日は、13時30分まで受付を致します。
 13時50分までには、受付を済ませて入場してください。
 ○駐車場について
 ホテル・レイフビコー駐車場をご利用できます。

主催：茨城県・茨城県青少年育成協会



FAX 029-228-6200

平成27年度 ユース&トップミーティング 参加申込書

ミーティング 14:00～16:00 参加する ・ 参加しない
 交流会 (会費3,000円程度) 16:00～17:00 参加する ・ 参加しない

※下記の1～8の質問からお選びください。番号：【 】

職業 1. 会社員 2. 公務員 3. NPO職員 4. その他団体職員 5. 自営業
 6. パート・アルバイト 7. 学生 8. その他

所属する若者団体の名称
 主な活動内容
 主な活動地域名称

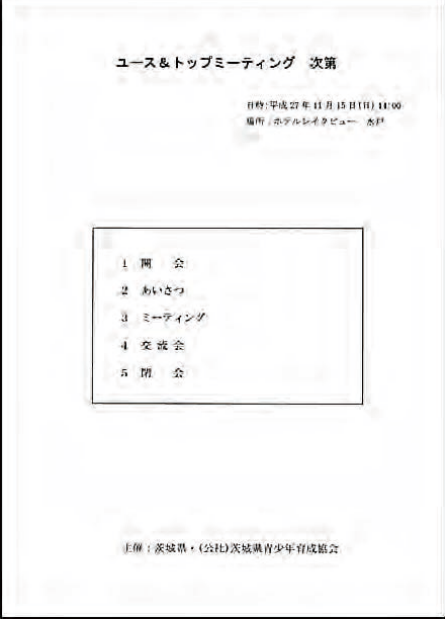
申込書住所
 TEL: 携帯電話
 E-Mail:

アンケート
 1. 募集チラシ (配布場所) 2. 青少年育成協会からの通知・案内
 3. 青少年育成協会ホームページ 4. フェイスブック 5. 知人の紹介
 6. その他 (具体的に)

自己PR
 貴自身の活動にまつわるPRや活動の動機についてご記入ください。

※ご記入いただいた個人情報等は本ミーティングの目的の範囲内において発表・維持・利用いたします。またお預かりした個人情報をご本人の承諾を得ることなく第三者に提供、開示することは一概いたしません。参加者の決定については、申込み後に連絡いたします。

【申込先】 〒310-0034 茨城県水戸市緑町1丁目1番16号 茨城県立青少年育成協会
 公益社団法人 茨城県青少年育成協会
 TEL: 029-227-2747 FAX: 029-228-6200
 メール: shab@baraku-kusel.jp ホームページ: http://www.baraku-kusel.jp

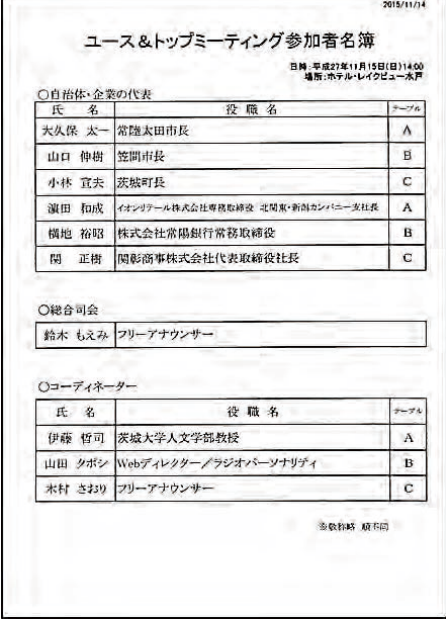


ユース&トップミーティング 次第

日時:平成27年11月15日(日) 14:00
 会場:ホテルレイフビコー 水戸

1 開会
 2 あいさつ
 3 ミーティング
 4 交流会
 5 閉会

主催：茨城県・(公社)茨城県青少年育成協会



ユース&トップミーティング参加者名簿

日時:平成27年11月15日(日)14:00
 会場:ホテルレイフビコー 水戸

○自治体・企業の代表

氏名	役職名	チーム
大久保 太一	常陸太田市長	A
山口 伸樹	笠間市長	B
小林 宣夫	茨城町長	C
濱田 和成	イオンリアルム株式会社専務取締役 北関東・新潟カンパニー支社長	A
横地 裕昭	株式会社常備銀行常務取締役	B
関 正樹	関彰商事株式会社代表取締役社長	C

○総合司会
 鈴木 もえみ フリーアナウンサー

○コーディネーター

氏名	役職名	チーム
伊藤 哲司	茨城大学人文学部教授	A
山田 タカシ	Webディレクター/ラジオパーソナリティ	B
木村 さおり	フリーアナウンサー	C

※役職略 略不同

2015/11/14

参加者名簿

氏名	団体名	テーブル
雨 陽子	茨城大プロジェクト さとみ・あい	A
山口 奈穂	茨城大プロジェクト さとみ・あい	A
山田 真理子	茨城大プロジェクト さとみ・あい	A
前田 竜甫	鹿嶋市青少年育成会議	A
楊 真緒	子育て応援隊NS26(茨城キリスト教大)	A
照沼 菜津美	子育て応援隊NS26(茨城キリスト教大)	A
鹿島 拓人	トリングル・ユニテッド	A
榎田 尊	どんどん和太鼓プロジェクト	A
祐木 仁男		A
井坂 勇方	いばらきキャンドルナイト	B
込山 慎一	茨城県農業研究クラブ連絡協議会	B
日熊 啓介	いばらきドリームプランプレゼンテーション実行委員会	B
矢口 絵里	いわまユースチーム	B
仲村 勇佑	いわまユースチーム	B
小川 文太	いわまユースチーム	B
重田 一成	鹿嶋市青少年育成会議	B
千島 美友	鹿嶋市青少年育成会議	B
鬼沢 希	カタリ・いばらき	B
前山 直道	学び場さくら塾	B
高田 梢枝	Satoani文化祭	C
三森 洗喜	We are調沼つ子(茨城東高校)	C
生山 未来	茨城県障がい者スポーツ指導者協議会	C
新引 章夫	茨城大学学びと交流の秘密基地	C
川又 大生	茨城東高校	C
黒田 昌樹	おーちやんどラゴン講演会事務局	C
比企 智浩	ゲストハウスjicca	C
宮谷 香純	水戸桜川千本桜プロジェクトユース	C
井上 歩	水戸桜川千本桜プロジェクトユース	C
高木 真矢子	茨女	C

若手社会人大募集!!

いばらきで、いきる。
その背中をあつめたい

キックアップされる
アナムの発展
地域活動に
キャリア教育
という課題がある

学生と社会人の対話イベントを開催!

第1回 12/6(日) 13:00-17:00
チームを動かす

第2回 12/27(日) 13:00-17:00
個性を活かす

第3回 1/16(土) 13:00-17:00
オトナの階段

開催地・申込み www.a-nam.ac.jp/igmp/





図21:式次第2-(1) さとみ・あいチームの活動 補足資料(2) [2018年1月31日 転載承諾済]

全国市長会『市政』2016年1月号

市政

January 2016 vol.65

特集
大学との連携で進める
地域活性化

市政ルポ
大野城市/悠久の歴史を共働でつなぐ
愛郷とにぎわいのまちづくり

全国市長会

市政

January 2016 vol.65

特集
大学との連携で進める地域活性化

年頭のごあいさつ
平成28年総務大臣年頭所感
全国市長会会長 尾崎市長 ● 森 民夫
総務大臣 ● 高市早苗

外部との融合による地域力向上
高経済大学地域政策学部長 ● 大宮 登

都留市版生涯活躍のまち(CCRC)構想
構想のキーポイントは「大学コンソーシアム」
都留市長 ● 堀内篤久

「彦根デザイン・カレッジ」の取り組みについて
彦根市長 ● 大久保 貴

人と産業が集まり成長するまち
一産学官連携による新産業創出
飯塚市長 ● 齊藤守史

「社会保険と都市の展望」
特別講演・労働供給制約の時代に
産学官連携による新産業創出
都留市長 ● 堀内篤久

「山科が力能代市(秋田県)で
「新連載」こたわりの食材で Smart Life
豆腐 ● 梶原の大豆食品「T.T.P.」

市政ルポ
大野城市(福岡県)
悠久の歴史を共働でつなぐ
愛郷とにぎわいのまちづくり
大野城市長 ● 井本宗司

JANUARY 2016 西暦 18

C O N T E N T S

■市長選後
健康寿命を延ばす、元気な地域づくり
慶応義塾市長 ● 中野市長 ● 池田 茂 ● 志木市長 ● 香川武文 ● 藤原市長 ● 北村正明 ● 小村和年 ● 呉市長 ● 田中 ● コーディネーター ● 中央大学総合政策学部長 ● 相野勲博

■自治の動き
30年後より30年前を見よ
東京大学大学院教授 ● 伊藤元重 ● ジャーリブ ● 松本亮夫

■法相相談室から
平成27年を振り返り
マイ・フレイトタイム
新庄をもっと元気に!
■わが市を語る
◆可能性を生かし、人と人が集まる山科水産ブランドを創出
◆人・地域・自然が奏でる、町のまほろば
◆住んでよかったと思える元気をまちづくり
◆住み続けたいまち「住んでみたいまち」の出現を目指して

■時代を駆け抜けた偉人たち
多喜田和 民雄 ● 川路聖謨 ● 山久工

■市政ギャラリー 都市の素顔
【平戸港(長崎県)】

■都市のリスクマネジメント
地域防災の観点からのリスクマネジメント
総務省消防庁消防大学校客員教授 ● 日野宗門

■全国市長会の動き—Mayors' Action
■平成28年度における東日本大震災に係る被災市町村に対する人的支援について(後編)

■これぞ! イノベーション(奈良県)

特集

大学との連携で進める地域活性化

地域活性化、地方創生の一翼を担うパートナーとして大学が近年、重要性を増しています。文部科学省は、自治体と連携した教育・研究、地域貢献を進める大学を支援する「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)を推進。総務省も、大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の課題解決や地域づくりに継続的に取り組んでいます。

今回の特集では、最近の動向を改めて、大学と都市自治体の連携によるまちづくりの重要性や具体的な都市事例をご紹介します。

寄稿1 大学との連携による地域活性化
高経済大学地域政策学部長 ● 大宮 登

寄稿2 外部との融合による地域力向上
地域と大学が連携した継続的な取り組み
常任太田市長 ● 大久保太一

寄稿3 都留市版生涯活躍のまち(CCRC)構想
構想のキーポイントは「大学コンソーシアム」
都留市長 ● 堀内篤久

寄稿4 「彦根デザイン・カレッジ」の取り組みについて
彦根市長 ● 大久保 貴

寄稿5 人と産業が集まり成長するまち
一産学官連携による新産業創出
飯塚市長 ● 齊藤守史

21 | 市政 JANUARY 2016

外部との融合による地域力向上 地域と大学が連携した継続的な取り組み

常陸太田市市長（茨城県）

大久保太一



はじめに

常陸太田市は茨城県北部に位置し、北は福島県に接している。本市の総面積は371.99km²で、茨城県全体の6.1%を占め、南北40km、東西15kmの広がりを持ち茨城県内で一番広大な市となっている。豊かな自然環境と古くから続く歴史と文化にあふれた地域であり、平安時代末期から約470年間は、県北地方一帯を支配した、常陸の豪族、佐竹氏の本拠地として繁栄し、江戸時代に入ると、水戸黄門こと徳川光圀公が晩年を過ごした西山御殿跡（西山荘・国の文化審議会において史跡及び名勝に指定するよう答申）などがあり、市内各所に歴史や文化の足跡をたどることができる史跡等が数多く残されている。

現在の本市は、平成16年12月に旧金沙郷町、旧水府村、旧里美村と合併した。本市が抱える最大の課題は少子化・人口減少対策であり、合併時6万人を超えていた人口が、

5万2049人（平成27年10月1日現在）にまで減少している。本市は、合併以降、合併効果を最大限に生



農家を「講師」にした学生による畑作業

かしながら、新市の一体感の醸成を図り、住民福祉の一層の向上を目指すため、平成19年3月「常陸太田市第5次総合計画」を策定した。この計画では、市民と行政が一緒になって考え行動する「市民協働によるまちづくり」と、市の恵まれた自然環境や風景・景観、歴史文化などの地域資源を活用する「エコミュージアム活動によるまちづくり」を市政運営の基本として位置付け、地域活性化およびその源泉である地域力の向上に取り組んできた。

近年、国においても、地域活性化の源泉としての地域力（特に地域資源力と人材力）の維持・向上を後押しする施策が多数展開されてきており、本市においても、これまでの地域力向上の取り組みを強化し、発展させるといふ観点から「地域おこし協力隊」や「域学連携地域づくり実証研究事業」などの活用により活性化に取り組んでいるところである。

これまでの大学連携の取り組みと課題

本市では、専門的な知識を有する大学の参



市内飲食店が考案したメニューに材料を提供した「かぼちゃフェス」

画を得ながら、市民協働によるまちづくりを推進すべく、県の内外を問わず、積極的に大学との連携を進めてきた。

とりわけ、茨城大学、茨城キリスト教大学、常磐大学の県内の近隣大学とは、市エコミュージアム活動への学生の参加や地域団体等と連携したイベントの開催または開催支援等、積極的に連携して取り組んできたところである。

しかし、茨城大学人文学部、茨城キリスト教大学、常磐大学とは連携協定を締結しているものの、各種活動が大学のカリキュ

ラムとしては位置付けられておらず、単位の取得にはつながらないことから、あくまで学生の自主性に委ねる形の参加となり、また、活動ごとにその都度学生に募集をかけるなど単発での連携となることが多く、継続的な事業の実施が課題となっていたところである。

「域学連携地域づくり実証研究事業」導入の経緯と本事業の特徴

このような状況の中、平成24年度に総務省において「域学連携地域づくり実証研究事業」の創設をきっかけとして、茨城大学からの提案により、本市の里美地域をフィールドとした、大学において単位化を伴う、持続可能なカリキュラムの構築を目指し、実証研究に取り組むこととなった。

本事業の特徴としては、茨城大学、茨城キリスト教大学および常磐大学の学生が、継続的に里美地域を訪問し、現地体験学習、地域資源の調査研究、課題論文の作成等を行うことにより、大学の単位が認定されるプログラムの開発を行うこととし、単位化を図ったことにある。

また、このプログラムの受け入れにあたり、当初は地域おこし協力隊との連携を図り、地域おこし協力隊が当該地域で感じた地域の魅力を授業内容に組み入れることで、学生にとって魅力的なプログラムの構築がなされている。

具体的な活動

具体的には里美地区において、里美地区の里川町で採れる「里川カボチャ」を使った生産ブランド化への取り組みを中心に行った。「里川カボチャ」は常陸太田市の里川町で採れる在来作物で、近年まで他品種との交雑が進み、本来の食感や風味、甘味、色などが失われつつあった。それらを地域住民の手で本来の「里川カボチャ」の姿を取り戻す取り組みが行われていたものである。そうした地域に学生が定期的に訪れ、地域住民と交流しながら、作物の生育から商品化まで一貫した取り組みをすることで、地域住民との絆が生まれ、また学生のコミュニケーション力や就業力の向上にも一役買っている。

また学生と生産者が一体となった活動により、市内の飲食店が地場産農産物を使い、オリジナルメニューを提供する「フアーム&キッチン」に食材として活用され、さらには市内で行われる「汁椀カップ」への出展や水戸市の水戸まちなかフェスティバルや大学文化祭、東京・六本木ヒルズの「いばらき市」での販売など市内はもとより市外でも販売・PRが行われている。

これらの活動においては、多数の地元住民が参加しての活動報告会が行われているほか、茨城県立水戸農業高等学校の生徒が一部のフィールドワークに参加するなど広がりを見せている。



地域の方と学生も参加した収穫祭

平成24年度においては、実証研究として取り組んだが、平成25年度より茨城大学の正課授業「プロジェクト実習」の一部に位置付けられ、茨城キリスト教大学および常磐大学でも履修が可能なカリキュラムとなり、単位化が可能となっている。

期待される地域へのメリット

本事業における地域へのメリットは、ワカモノ、ヨソモノである学生の視点から新たな

魅力が発見され、また、各種の地域資源が研究の対象となり、保存されることで、地域資源力の向上が期待される。学生が地域に入り、地域住民と関わることで、地域住民自らが地域資源を見つめなおす契機ともなる。

また、地域内において、調査を進めるにあたり、地域の集落のリーダーや年長者などを対象に聞き取り調査を行う機会も多いと考えられ、そうした取り組みの中で貴重な知識や経験を持つ地域人材の発掘につながるなど、地域人材力の向上にも寄与するものと考えられる。

このようにプログラムの開発・実施に取り組むことは、地域力の向上が図られるとともに、それらの地域力を活用した交流人口の拡大による地域活性化にも貢献するなど、持続可能な地域社会の構築にも大きく貢献するものである。加えて、里美地域が取り組みのモデル地域として確立されれば、同じく地域力の低下が懸念されている金砂郷地域や水府地域への波及も期待されることである。

大学および学生へのメリット

現在、大学教育においては、就業時に即戦力となり得る「就業力」の育成が求められている。「就業力」とは、学士課程教育で培われた学問智を実社会において実際に使っていくことができる能力である。この能力の育成には、これまでのような大学の講義室内で行わ

れる一方的な知識獲得型の講義では不十分であり、プロジェクト実習のような、実社会での体験を通じた学習に重きを置いたプログラムを開発することが必要とされており、本事業の実施は、学生のキャリア教育を担う大学および学生の双方にとって、大きなメリットになるものと考えている。

おわりに

本市では、少子化・人口減少に対処するため、「子育て上手 常陸太田」をキャッチフレーズに新築家庭賃助成や住宅取得時の助成、保育園・幼稚園の保育料の軽減、高校生までの医療費助成など、子育て世帯への経済的支援や妊娠から出産・育児までの切れ目のない支援を中心に対策を講じてきている。そうした取り組みとともに、人口減少の進行に伴う地域の活力低下に対して、地域おこし協力隊や域学連携などの地域力の維持・向上を狙ったさまざまな取り組みを進めてきているところである。地域力向上の取り組みは長丁場であり、今求められていることは、本市がこれまで独自に積み重ねてきた地域力向上の取り組みと域学連携や地域おこし協力隊などの取り組みを融合し、深化させ、長期的に定着を図ることである。地域力向上の新たな取り組みについて今後もその可能性を模索していきたい。

図 22: 式次第 2-(3) 茨城県立水戸農業高等学校の活動

①全体説明 PPT

農業高校におけるプロジェクト学習 ～里川カボチャを事例に～

茨城県立水戸農業高等学校 食品化学科 新堀俊博

県内の農業関連高校の所在地

農業関連高校における農業を学べる学科

学校名	設置学科
大子清流	森林科学科・総合学科(農業系列) 農業科・畜産科・園芸科
水戸農業	生活科学科・農業土木科・食品化学科・農業経済科 定時制農業科
鉾田農業	農業科・食品技術科・流通情報科
石岡第一	園芸科・造園科
貞壁	農業科・環境緑地科・食品科学科
坂東総合	総合学科(生物資源系列・環境デザイン系列)
江戸崎総合	総合学科(グリーンテクノ系列)

※総合学科は、2年生から農業に関する科目を学んでいきます

文部科学省 高等学校学習指導要領 (平成21年3月告示)

各教科	各教科に属する科目
農業	農業と環境・課題研究・総合実習・農業情報処理 作物・野菜・果樹・草花・畜産・農業経営・農業機械・ 食品製造・食品科学・微生物利用・ 植物バイオテクノロジー・動物バイオテクノロジー・ 農業経済・食品流通・ 森林科学・森林経営・林産物利用・ 農業土木設計・農業土木施工・水循環・ 造園計画・造園技術・環境緑化材料・測量・ 生物活用・グリーンライフ
	※上記以外でも、各高校において必要と判断した科目については、「学校設定科目」として実施

高等学校学習指導要領解説 農業編 (平成22年6月)

○第2節 教科の目標

- 第一に、目標をもった意欲的な学習を通して、農業に関する知識、技術の定着を図り、将来のスペシャリストの育成に必要な専門性の基礎・基本を身に付けさせること。
- 第二に、学習に取り組む主体的な態度や合理的な思考及び倫理的な姿勢を身に付けた、将来の地域を支える人間性豊かな職業人を育成すること。
- 第三に、農林業の多様化・高度化・精密化、安全な食料の生産と供給、地球規模での環境保全及び地域資源の活用など、社会の変化や農業教育の広領域化へ対応すること。

上記の三つの目標(視点)を基本とし、各教科を通して横断的な展開を図る。

課題解決(プロジェクト)学習について

○プロジェクト学習とは
生徒が主体的に学習する学習方法 教員は助言者

○プロジェクト学習の流れ
課題の設定→計画の立案→実施→反省・評価→改善

○プロジェクト学習で得られる教育的効果
学習に対する面白さ・楽しさを実感
チーム等のグループの仲間意識の向上
企画力・実践力の育成・向上
“わかる”の実感

里川カボチャの商品開発に携わる経緯

○平成26年6月
株式会社JTB関東法人営業水戸支店
水戸誘客促進・活性化事業担当 西島佳子様

○平成26年7月
茨城大学 人文学部 鈴木 敦先生

食品化学科食品科学部の活動の記録をお聞きください!

里川カボチャ ～おいしく魅力を引き出そう！～

茨城県立水戸農業高等学校
食品化学科 2年
食品科学部

活動目的

- 里川カボチャの良さを十分引き出せる
お菓子の商品開発をする。

「初めまして～試食会までの流れ」

月日	内容
7月4日	茨城大学 鈴木先生と初対面・趣旨および概要説明
8月4日	茨城大学 さとみ・あいチームと初対面・活動内容説明
8月23日～25日	夏合宿に参加
9月19日	打ち合わせ 2回目
9月22日	干しかぼちゃの試作開始
9月30日	かぼちゃのようかんの試作開始
10月1日	かぼちゃのタルトの試作開始 1回目
10月3日	カボチャのタルトの試作 2回目
10月9日	かぼちゃのマフィン・スコーンの試作
10月10日	かぼちゃパイの試作

1年目 試作したもの(2014年度)

- カボチャのタルト
- カボチャのパイ
- カボチャのけんぴ
- カボチャのスコーン
- カボチャのクッキー
- カボチャのようかん

「しさく・シサク・試作…」



商品開発の難しさにぶ・つ・か・る

本当に
「里川カボチャ」の魅力って…??

「…甘さ! ?
…色! ?
…何! ?」

「試食会～本番までの流れ」

10月12日	試作 試食会 (スコーン・ケンピ・タルト・パイ)
10月19日	里川カボチャの収穫祭へ参加
10月29日	タイの先生の特別講義 (かぼちゃのデザート)
11月4日～7日	カボチャのタルトの試作
11月9日～12日	原材料の価格調査及び原価計算
11月13日	カボチャのタルト作成
11月15・16日	茨城大学 茨苑祭 水戸農業 水農祭

「ここから選んでもらおう！」





「たくさんの人に出合ってね…」



里川カボチャのタルト
完成品

良い点・悪い点

- 試作がたくさんできた。
- 里川カボチャの甘さを活かすように砂糖の量を少なくした。
- 定期的に活動できなかった。
- 作る前の準備が遅かった。
- 効率が悪かった。

「感想…」

- 入学して早々商品開発をすることとなってビックリした
- 調理が好きだけでは商品開発ができないことを実感した
- 大変だったけど充実していた
- 慌ただしく過ぎて行ってしまった感じ
- とっても「甘〜い」ことにびっくりした

「考察」

- アンケート調査などを実施してより具体的な結果を知る
- 里川カボチャを利用活用している企業での研修を行う
- 里川カボチャの商品開発に利用可能な食材を校内で栽培する
- 長期保存が可能な商品を開発する

今年1年間のまとめ(2015年度)

茨城県立水戸農業高等学校
食品化学科 2年
食品科学部

今年度の流れ

9月9日	里美カフェ用試作 (スイーツパン・ジェラート・クッキー)
9月23日	里美カフェ 本番(ジェラート・クッキー)
10月17日	収穫祭(常陸太田市里美地区)
10月21日	水戸まちなかフェス用試作・試食会 (スイーツパン)
10月23日	水戸まちなかフェス 本番 (スイーツパン)
11月4日	試作(マドレーヌ・タルト)
11月9日	茨城大学 茨苑祭 水戸農業 水農祭 本番 (マドレーヌ・タルト)
11月14・15日	茨城大学 茨苑祭 水戸農業 水農祭

今年度の流れ

11月20日	外部講師による製菓実習 (マドレーヌ・ブルーベリームース)
12月2日	茨城県農業関連高校「学校産・地元産食材を使った スイーツコンテスト」用 試作(モンブラン)
12月15日	スイーツコンテスト 本番用 (モンブラン)
12月16日	スイーツコンテスト当日
1月20日	2015年度プロジェクト実習報告会用 試作(シュークリーム)
1月27日	試作(ミルクレープ・マドレーヌ・プリン)
1月30日	本番(マドレーヌ・シュークリーム)
1月31日	報告会

2年目 試作したもの

- かぼちゃのジェラート
- かぼちゃのクッキー
- かぼちゃのタルト
- かぼちゃのマドレーヌ
- かぼちゃのモンブラン
- かぼちゃのシフォンケーキ
- かぼちゃのミルクレープ
- かぼちゃのスイートポテト



良い点・悪い点

- かぼちゃ感がupした。
- 発想が豊かになった。
- 行事の集まりが悪かった。
- 計画性がなかった。

里川カボチャのモンブラン 使用する材料 (4個分)

- | | |
|-------------------|-------------------|
| •かぼちゃのクリーム | •カスタードクリーム |
| 里川かぼちゃ 220g | 卵黄 1個 |
| グラニュー糖 30g | グラニュー糖 36g |
| 生クリーム 20g | 小麦粉 72g |
| バター 20g | 牛乳 100cc |
| •下生地 | •ホイップクリーム |
| 卵 2個 | 生クリーム 100cc |
| 小麦粉 50g | |
| グラニュー糖 40g | |
| バター 19g | |
| 牛乳 100cc | |

作り方

カボチャのクリーム

里川カボチャの皮をむき蒸す。
その後、裏ごしをする。

裏ごしをしたものに、
バター、グラニュー糖、生クリームを加え
全体がなじむまで混ぜる。



下生地

卵と砂糖を泡立てる。
卵と砂糖が立ったら、
そこに振った小麦粉を混ぜる。
小麦粉が混ざったら、バター、牛乳を加え
さらに混ぜる。
出来上がった生地を予熱がすんだ
165℃のオーブンで約15分焼く。



カスタードクリーム

卵黄とグラニュー糖を混ぜる。
そこに振った小麦粉を混ぜる。
小麦粉がなじんだら、牛乳を混ぜ、
全体がなじむまで湯せんする。



ホイップクリーム

生クリームをたてる。
ボールを逆さにして
生クリームが落ちない程度まで



完成品



まとめ

- 里川カボチャ本来の甘さを最大限に活かしたスイーツ。
- 里川カボチャの色がとてもきれいなので、その色を引き立たせるように、全体の色のバランスを意識した。
- 素材の持っている色・味を消さずに、最大限に活かしていくことを今後も考えていきたい。

今回作ったもの

- かぼちゃのシュークリーム
- かぼちゃのマドレーヌ



かぼちゃのシュークリーム

材料(シュー生地) 30個分

牛乳	180ml
水	180ml
無塩バター	180g
砂糖	3g
塩	少々
薄力粉	210g
全卵	8個

作り方(シュークリーム シュー生地)

1. 牛乳, 水, 無塩バター, 砂糖, 塩を鍋に入れ弱火~中火にかける。
2. まわりがふつふつとして白い泡が立ったら, 火を止め薄力粉を入れる。
3. 粉の粒が見えなくなるまで, 木べらで手早くしっかりと練る。
4. だんご状に1つにまとまったら再び火にかけ, よく生地を練る。
5. 上から押さえつけるように混ぜ, 鍋底に薄く膜ができるようになったら火を止め, ボウルに移す。
6. ぬれ布巾の上のせて, 溶きほぐした卵を少しずつつけて加える。

作り方(シュークリーム シュー生地)

7. しぼり袋に生地を入れる。
8. クッキングシートを引いた天板に直径4cmに丸くしぼり出す。
9. しぼり終わりのとがった部分を水でぬらした指先で軽く押さえ, さらに全体に霧吹きかける。
10. オープンに入れて190~200℃で20分焼く。
11. 170~180℃に下げてもさらに10~15分焼く。

かぼちゃのシュークリーム

- 材料(かぼちゃのクリーム) 30人分

かぼちゃ	1260g
牛乳	150g
バター	36g
砂糖	54g

作り方(シュークリーム クリーム)

1. かぼちゃを一口大に切る。
2. かぼちゃのクリームの材料を耐熱ボールに入れる。
3. それを700wで20分温める。
4. かぼちゃに竹串が通ったらそれを裏ごしして混ぜる。

かぼちゃのマドレーヌ

- 材料(生地) 47個分
- | | |
|-----------|------|
| 無塩バター | 250g |
| 卵 | 250g |
| グラニュー糖 | 250g |
| はちみつ | 75g |
| 薄力粉 | 250g |
| ベーキングパウダー | 2g |
- 材料(かぼちゃのペースト) 47個分
- | | |
|------|------|
| かぼちゃ | 200g |
| 砂糖 | 30g |

作り方(マドレーヌ)

1. ボウルに卵を入れて泡立て器でときほぐす。
2. グラニュー糖, はちみつを加えて混ぜる。
3. 溶かしバターを少しずつ混ぜながら加える。
4. ふるった粉類をもう一度ふるいながら加える。
5. すべてが入ったら、ゴムベラで切るように混ぜる。

作り方(マドレーヌ)

6. 生地にならばさがなくなったら、ラップをかぶせて冷蔵庫で30分休ませる。
7. 生地を軽く混ぜながら、マドレーヌ型にかぼちゃのペーストを層になるように8分目まで入れる。
8. オープンに入れて、180℃で約15分焼く。
9. 型から取り出し、並べて冷ます。

完成品



ご視聴
ありがとうございました。
ございました。

③農業科 PPT

野菜専攻2016プロジェクト

里川カボチャで何かする？

by農業科



茨城県立水戸農業高等学校

始めに

- 2016（平成28）年度に農業科のルールで野菜専攻はプロジェクト発表を行う（私の着任前に決まっていた）
- プロジェクトを初めて行う人が中心になる

⇒今年度のうちに発表スライド以外は実行したい
（私自身が不慣れなので）



茨城県立水戸農業高等学校

栽培品目設定

- 地元産品がよい（那珂カボチャはすでに園芸科でプロジェクトが行われている）
- できれば、市場流通していない品目

里川カボチャは

- 地元産品
- 市場流通には不向きな品種

⇒里川かぼちゃは条件に合致



茨城県立水戸農業高等学校

里川カボチャを学校で栽培する

農業科2年生の取組



茨城県立水戸農業高等学校

課題と計画

- 課題：里川カボチャを学校の畑で栽培できるか
- 計画
 - ①学校で通常栽培するカボチャと比較栽培を行う
 - ②コンパニオンプランツの活用による効果を検証する
 - ③収穫後、精度測定で里美地区のカボチャとの違いを検証する



茨城県立水戸農業高等学校

準備(土壌)

圃場全体に堆肥・苦土石灰を播き、定植する場所によりりんご化成肥料を散布した



茨城県立水戸農業高等学校

準備

学校では通常黒マルチを利用するが、今回は銀マルチを使用

メリット：防虫効果が高い
デメリット：地温が上がりにくい



茨城県立水戸農業高等学校

比較品種の定植

4月27日に比較品種としてみやこを定植した

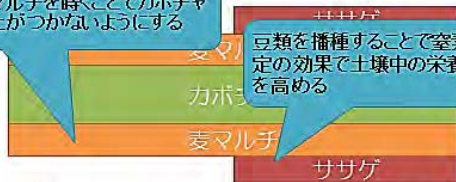


茨城県立水戸農業高等学校

コンパニオンプランツの導入

麦マルチを蒔くことでカボチャに土がつかないようにする

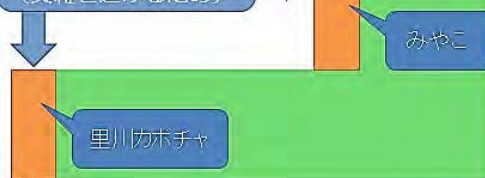
豆類を播種することで窒素固定の効果で土壌中の栄養分を高める



茨城県立水戸農業高等学校

交雑防止策

品種ごとに圃場内の離れた場所で栽培する(交雑を避けるため)



茨城県立水戸農業高等学校

里川カボチャの種の準備

5月15日に里美地区の荷見さんのお宅に伺い、種をいただくとともに、里川カボチャの取組について教えていただきました。



茨城県立水戸農業高等学校

播種

5月21日に里川カボチャを播種しました

この週は、中間試験で実習がなかったため、来れる人だけで行いました



茨城県立水戸農業高等学校

圃場の条件の比較

種をいただくと同時に、荷見さんの圃場から土をいただき、学校の圃場の土と肥料分を比較しました



茨城県立水戸農業高等学校

土壌成分の違い

	N	P	K
学校	10~15kg	25kg	7.5kg
荷見さん	5~10kg	25kg	10kg

学校の圃場は窒素分が多く、荷見さんの圃場はカリウム分が多かった



茨城県立水戸農業高等学校

里川カボチャの定植

6月18日に里川カボチャを定植しました



茨城県立水戸農業高等学校

みやこに異変が...

比較品種のみやこが収穫に近づいてきたときに、異変が起きました



日に焼けてしまった



茨城県立水戸農業高等学校

さらに...

カボチャから泡が...

カラスがつついた？



とにかく臭い！！



茨城県立水戸農業高等学校

さらに...

ほとんど日に焼けてしまい、みやこは収穫がほぼできませんでした



茨城県立水戸農業高等学校

寒冷紗の設置

みやこが日に焼けたため、7月30日に寒冷紗を設置しました



しかし、寒冷紗の下からつるが逃げていきました



茨城県立水戸農業高等学校

収穫・糖度測定(1回目)

9月24日と10月8日に収穫しました

10月8日には、最初に収穫したカボチャの糖度測定を行いました



茨城県立水戸農業高等学校

里川カボチャにも異変が・・・

里川カボチャに交雑しているのが見つかりました

白い九十九里？

里川カボチャの皮の色も見える・・・



茨城県立水戸農業高等学校

糖度測定の方法

- ① カボチャをすりおろす
- ② 糖度計にすりおろしたカボチャを載せる



茨城県立水戸農業高等学校

糖度測定の結果

	里川カボチャ (皮がオレンジ)	里川カボチャ (皮が緑黒じり)	白い九十九里 との交雑	みやこ
収穫数	2個	14個	6個	3個
平均重量	2.12kg	1.74kg	2.15kg	0.95kg
糖度	9度	8.9度	11.4度	4.8度

糖度は白い九十九里との交雑が1番高かった



茨城県立水戸農業高等学校

糖度測定

12月22日に荷見さんから頂いたカボチャと学校で育てたカボチャで2回目の糖度測定を行いました

1回目との違い

- ・カボチャの水分が少ないので、純水で割った
- ・電子レンジを使って、加熱処理して加熱前と後でも糖度を比較した



茨城県立水戸農業高等学校

測定方法

- ① すりおろしたカボチャ20g用意し、純水20gで割る
- ② ガーゼでカボチャの水分を絞り出して糖度計で糖度を計測する(加熱前の糖度)
- ③ 電子レンジで1分間加熱する
- ④ ②を繰り返す(加熱後の糖度)



茨城県立水戸農業高等学校

測定結果

	ホクホク系	ねっとり系	荷見さんの カボチャ
加熱前	10.6度	7.6度	12.2度
加熱後	7.2度	5.2度	12.4度

里美地区のカボチャに比べて学校のカボチャは糖度が低かった



茨城県立水戸農業高等学校

まとめ

- ・学校の圃場で栽培したカボチャは糖度が低かった
- ・みやこがほとんど収穫できなかったため、品種の違いによる比較が出来なかった
- ・今回の管理方法では、コンパニオンプランツの効果を確認することが出来なかった



茨城県立水戸農業高等学校

ご清聴ありがとうございました

m(_ _)m



茨城県立水戸農業高等学校

(6)式次第Ⅰ：開会挨拶 澁谷浩一（茨城大学評議員・人文学部副学部長）

皆さん、こんにちは。

人文学部主催者を代表しまして、学部長の代理として、今日は、副学部長であります私澁谷が一言だけご挨拶申し上げます。

本日は、本当にお忙しい中、悪天候も予想されましたが、幸い、からっと晴れてよかったかなと思います。遠くからまた地域から、たくさんの方にお越し戴きまして、ありがとうございます。

プロジェクト実習という授業が、本格的に地域をフィールドにして始まってから今年で4年目になります。後で担当の鈴木教員の方から詳しい説明はあると思いますが、茨城大学は5年前から大学全体として就業力育成という形で様々な事業を進めて参りました。その一環として根力育成プログラムという教育カリキュラムを新設し、運営して参りました。人文学部が開講しているプロジェクト実習という授業は、この根力育成プログラムの中の非常に重要な授業科目として位置づけられています。

プロジェクト実習は、その新しい教育方法から「PBL授業」とも呼ばれています。PBLとは、Project Based Learning、あるいはProblem Based Learningの省略形ですが、プロジェクト実習が始まる少し前の5年前ぐらいには、名前も知らない教員が殆どで、PBLって何？という状況でした。

その後、プロジェクト実習がだんだん定着するにしたがって、PBLという教育手法がいつの間にか当たり前になりました。これまで大学といえば、教室に座って先生の話の聞くというスタイルが主流でした。それに対して、具体的なプロジェクトを設定し、その完成を目指して活動をするPBL授業を通じて、教室の授業だけでは養成できない、社会に出てきちんと社会の一員として働ける力を身につけるのが本学の就業力育成支援事業の目的です。その代表格がこの授業であり、この地域をフィールドにして行った授業はそういう役割をこれまで果たしていたのだと思います。

この数年間、毎年こういう形でこの時期に、少しスタイルを変えながら報告会をやらせて戴いております。

今年は今年で、学生たちが実際にこの地域で関わった里美ブランド、その商品の試食会というものもあるということで、昨年、一昨年とはまた違った形で、後半は少し和やかな形になるのではないかなと思って、おいしいものが食べられるかなということを含めて楽しみにしております。私は副学部長という立場で、学部のカリキュラム全体を統括する役割を担っております。そういうと、何となく偉そうな言い方になってしまいますが、実際にプロジェクト実習の運営を担い、直接学生たちと一緒に活動するという立場ではありません。しかし、12月12日にもこれ以外の活動を含めた報告会が茨城大学で開催されまして、今回のことも含めて、そういう報告会に立たせて戴きますと、学生たちの活動の成果、本当に学生たちがこういう授業を通じて成長しているというありがたさが本当に目に浮かぶといえますか、非常に強く感じるところであります。

今日も後半を含めてその成果が目に見える形になると思いますので、大変楽しみにしております。

長くなって申し訳ありませんが、もう一言だけ、今後のことも少し先走ってお話しさせて戴きたいと思います。こういう形で進めてきたわけですが、日本の大学をめぐる状況というのは非常に急に動いております。大学というのは地域における知識と知恵の拠点であると同時に、地域の拠点であるということで、COCという言葉もほぼ定着するような言葉になりつつあります。

一方で、我々の学部は人文学部と名乗っているわけですが、人文社会系の学部というのは、特に国立大学の中においては非常に厳しい状況にあるというのも事実です。マスコミの様々な報道等で皆さんも耳にしたことがあるのではないかと思います。わかりやすく言うと、国立大学に文系って要るのかという話が出てきたりしています。

そういう中で、我々はこのような活動も含めて、人文系、社会系の学問というのは絶対に必要だという信念を持っておりまして、まだ公に具体的なことは申し上げられませんが、一部、報道等に出ております、茨城大学全体が改組・改革という方向で動いております、人文学部もその例外ではありません。

ただし、そういう改革の中でも、こういう形でまさに積み上げてきたものをしっかりと生かしながらこれからの新しい形を作っていかなければいけないということを私たちは思っております。ですから、今日、これから皆様にご披露いただく様々な成果というものを基礎にしながら、それをさらに発展させるという形で新しい方向を目指していかなければ意味がないと思います。最後の方に鈴木先生からもお話があるかもしれませんが、そういう状況で、これからも、この地域も含めて、茨城大学人文学部も含めて、様々な活動を続けていきたいと思っております。

という決意表明的なことも含めまして、私の挨拶とさせていただきます。

今日は本当に楽しみにしております。充実した時間が過ごせると思いますので、よろしく願いいたします。

以上でございます。

(7)式次第Ⅲ：第二部 里美製品の試食会と関係者スピーチ

以下に、式次第Ⅲ「第二部 里美製品の試食会と関係者スピーチ」から、関係者スピーチの「概要」を会場での録音に基づき敬称略で掲載する。ICレコーダーの設定ミスにより音声不明瞭な部分が多く、編集時に極力復元に努めたものの最終的に欠落してしまった部分も多々ある。お一人当たり5分ということでお話をお願いしたにも拘わらず記録がごく短かったり、繋がりが悪くスピーチとして不自然な部分があるのは、いずれも録音の不備が原因である。スピーチを戴いた皆様・読者の皆様大変申し訳なく、深くお詫び申し上げます。

①茨城大学・事務サイドより御挨拶 石井利男(茨城大学人文学部事務長)

皆様、初めまして。

茨城大学人文学部事務長を仰せつかっております石井と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日の2015年度の常陸太田・里美地区を主たるフィールドと致しまして活動させて戴きました茨城大学のプロジェクト実習Bの授業ならびに初年次PBL試行につきまして、ご支援を戴いた地元の皆様の前でこのように活動報告会を開催できることを大変うれしく思っております。

プロジェクト実習という授業そのものは、鈴木先生を中心に、関係の先生方が一生懸命やっているわけですが、我々職員の方としましても微力ながら下支えをさせて戴いているところです。

最後になりますが、里美地区における地域連携PBLの多様な展開をまた整備することにより、プロジェクト実習B、いわゆるPBL授業の受講生の振り返りの場とすると同時に、関係者の一層の連携強化に向けた情報共有の場となることを切に願ひまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

本日は、皆様どうもありがとうございました。

②里美牛のブランド化と販売戦略・今後の見通し 小林信房(里美ふるさと振興公社 代表理事)

ただいまご紹介を戴きました、里美ふるさと振興公社の代表理事をしております小林です。

茨大の先生方には、日ごろから、振興公社のプラトーさとみの研修施設活用、あるいは、既に里美牛のPRにも来て戴きまして大変ありがとうございます。

白田先生に今お話ししたのですが、4年ぐらになると思いますが、里美で何かブランド化をしたいねというお話がありまして、里川カボチャをやったらどうだということで皆さんにお話ししまして、こんなふうにご皆さん方に熱心に発表して戴き、お酒なども含めましてブランド化に進んでいることをここから改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

今日は、里美牛ブランド化に向けてということで、皆さんも里美牛を食べている方もいるかと思いますが、これからのブランド化の実施についてお話をさせて戴きたいと思ひます。

茨城県には、常陸牛というブランドの牛肉があります。これは誰でもわかっていると思ひますが、肉にはランクがついております。ランクの低い方からA-1、A-2、A-3。ここまでは常陸牛ブランドにはできず、まとめて茨城県産の黒毛和牛と呼ばれております。A-4からA-5になれば常陸牛になるのです。そういうことで、常陸牛と呼べる牛肉を作るには、血統のいい牛を買ったり、高い餌を食べさせたり、脂肪をつけて常陸牛にしております。ですので、常陸牛においては、値段も100グラム2,000円以上しますが、A-1、A-2になれば1,000円ぐらいということで、半値ぐらいの値段になるそうで、そういうことで誰もが常陸牛を目指して肥育をしているわけです。

里美牛については、既に皆さんもご案内と思ひますが、里美牧場があります。里美牧場は標高750メートルぐらひはあると思ひますが、先ほど里川の方の話を聞きましたら、雪が毎年30センチぐらひ残っていて、夕べ、また20センチぐらひ降って50センチぐらひ積もっているというお話がありました。いかに寒いところであるかということがおわかりかと思ひます。

その里美牧場は520ヘクタールで、関東地区でも最も広い牧場だと思ひます。その一角に里美牛を肥育している牧場があります。この牧場については、明治の初めごろに、馬牧場として昔の小里村が牧場を開設したそうでありまして、長い歴史があります。昔は、農耕がきつかったり、軍馬として兵隊が馬を使いまして、軍馬に使っておいりましたが、時代の流れで馬が使えなくなっておりまして、黒牛の肥育をやるということになりました。

しかし、既に黒牛をやりました30年近くになりますが、どうしても里美牧場の牛は、例えば、血統、親が悪い、

系統が悪いということ、寒くて育ちが悪いということで、市場に出しても、ほかの牛は30万円か50万円で売れるのに、5万円か10万円にしかならない。そういうことを何十年も繰り返して今現在に至っているところでもあります。

そういうことから、何とか里美牛をブランド化しようということで、行政とも相談をしまして、4年ぐらい前に1億5,000万円ぐらい投資をして戴きまして、親牛を1頭70万円ぐらいするのを70頭ぐらい買って、牛舎や飼料を調合する機械等も整備して戴きまして現在にきたということでもあります。現在は210頭ぐらいの黒牛がおります。

そういうことで、何とかブランド化を進めるために取り組んでおりましたが、随分、餌代が高くなりまして、何をやっても、肥育は成り立たないような状況が続いております。

そういうことになっておりましたが、最近、農業後継者がいないというようなこともありまして、里美ばかりではありませんが、里美地区の田んぼも荒れ放題になっておるといことで、牛に食べさせる飼料用米の栽培に昨年からは取り組んでおります。

牛の餌は、今までは藁と米ぬかと牧草。サイロの脇にビニールでまとめた白い大きなロールがあると思いますが、あれが牧草の束です。今回、振興公社が取り組んでいるのは、普通の米みたいに刈って、もみにしまして、玄米にして、玄米を細かくして、消化をよくして牛に食べさせるということをごさしまして、米を食べている里美牛ということで売り出し中でもあります。現在は、里美に里美牛の加工所も作りまして、そこで牛肉を加工しております。そういうことで、幅広く皆様のところにおいしい里美牛をお届けできるようにしようとしているところです。

つい最近は、ふるさと納税のお返しの品にも申し込んだところ、かなりの数の注文が来て、大変喜んでるところであります。

まだまだ加工したり取り組んでいるところでありまして、ブランド化に向かってはまだまだ遠いミッションだと思います。既に里川カボチャのブランド化でもお願いしていて、さらに里美牛についてもお願いするのは本当に心苦しいところではありますが、里美地区のために、そして、何よりも遊休農地をなくすということ飼料用米を作っておりますので、ぜひ皆様のご協力を戴きたいと思っております。

今日は、ふるさと振興公社の統括支配人の豊田さんが来ております。私より豊田さんにお話ししてもらった方がいいのではないかと話したんですが、豊田さんに言われまして私がお話させて戴きました。ご質問等ございましたら、ふるさと振興公社の豊田さんにして戴ければより詳しいお話をして戴けると思っております。

今日は大変ありがとうございました。

③里川カボチャ復活への取り組みと今後の見通し 荷見 誠(里川カボチャ研究会 会長)

ただいまご紹介を戴きました、現在、里川カボチャ研究会の会長をしております荷見誠でございます。どうぞよろしくお願いたします。

今、鈴木先生の方からご依頼のありました、里川カボチャの復活の取り組みと今後の見通しということですが、これまでも皆様ご承知と思っておりますので、簡単にご紹介いたします。

復活の最初のきっかけなのですが、これは、2007年、平成19年度に、国の国土交通省、農水省、それから総務省が、将来的に限界集落になってしまうというような過疎地域の実態調査を致しました。そういう中で茨城で常陸太田市が選ばれて、常陸太田市の中で里川町ということで、将来どうなるか、今の資源をどう生かせばいいかという色々な実態調査をやりました。その中で昔から作られていた、里川の土手カボチャと言われましたが、それも地域の産物の一つであろうということから、これを復活してみようかという意見が出たのが一つのきっかけになっております。

その間の色々支援とか補助もありましたが、とりあえず今日はカボチャのことをお話ししますと、次の年になってから、ではやっぱりみんなでカボチャを作ってみようかということになりまして、カボチャサミットというのをやりました。里川カボチャは昔から作られていたものですが、その後外から入ってきた別の品種のカボチャと交雑してしまいました。そこで、昔の本来の里川カボチャを復元することになるわけですが、皆さんと努力をしてきた中で、外の皮の色がピンク色をした・甘みの強いカボチャを里川カボチャの特徴としてきちんと位置づけていこうではないかということで始めたのがそもそもであります。

その後、2年ほど、町会を中心にして苗を作りまして、希望者にお分けして作ってもらったのですが、2014年から、今日も皆さんから色々発表されておりますが、大学、企業の地域連携ということで、地域の事業として一緒にご協力戴いて進めてきたというようなところでもあります。

お陰様で、始めたころは年間で500キロから1トンぐらいの収穫だったのですが、平成24年、3年前にはカボチ

ャの焼酎を作りました。平成 25 年度はカボチャ焼酎に約 600 キロのカボチャを使いました。平成 26 年度は約 1 トンのカボチャで焼酎を作って戴いています。今日も来ておりますが、山口酒屋さんのご協力を戴きまして、また、醸造については、市内の蔵本であります剛烈富永酒造さんということで、全て地元の方々で作って戴きました。去年の平成 27 年度は 2 トンちょっとのカボチャを焼酎にすることができまして、現在、絞って甕の中で熟成をしているところですので、平成 27 年度産の焼酎は、今年 4 月ごろ、新しいものが完成します。

そういうことで、里川カボチャは焼酎ばかりではなく一般个体販売（直売所・水戸市内・東京都内の一部・各種イベント）をしています。今年の生産量は約 3.5 トン程度と思われます。しかし今後は集落としても高齢化が進み、畑を増やすこと、イノシシの被害対策等による問題があり、生産量が懸念されます。

そのほか、今日の料理の中では、昔から作られた伝統的なカボチャ料理ということでしたが、カボチャといえば単純に切って、割って、塩を入れて煮立てて作るものでしたが、最近は茨城大学の皆さん、水農の生徒さん方も取り組んで下さいまして、スイーツを作ったり、色々なものに加工しております。

また、今日はカボチャけんちんを作らせて戴きました。このカボチャけんちんは、普通のけんちんの具にカボチャのマッシュを入れて、その後に小さく切ったものを入れたというようなことで、これは先日、金砂郷で行われましたけんちんまつりに出品したカボチャけんちんであります。

それから、カボチャの団子なのですが、きなこがかかっている団子ですが、これは今までカボチャだけを使ってやっていたのですが、カボチャだけですとちょっとぼそぼそとした感じになるというので、今日は米粉が入っております。米粉とカボチャのマッシュを合せたもの、片方にはゆずジャムをちょっと入れてみたのですが、カボチャは色々料理の方法があるかと思いますが、これからも皆さんから色々なアイデアを出して戴いて、我々も生産部の方に言いたいと思いますが、どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

④里川カボチャ焼酎とおさとちゃんグッズ 山口景司(合名会社山口 専務)

お世話になっております。常陸太田で酒の卸問屋をやっています山口と申します。

今回は、荷見さんとは里川カボチャで焼酎をやらせて戴いている中で、おさとちゃんというキャラクターができて上がっているのので、グッズを作ろうという話になりまして、作りました。なぜグッズかといいますと、多分、カボチャは収穫時期の 2 カ月間か 3 カ月間だけしか物がないので、グッズが一人歩きすることによって、また里川カボチャのところに戻ってきたりとか、里美村に戻ってきたりとか、こういうグッズがあることによって、これ何だろうという話になることによって、また里美地区のカボチャが盛り上がるのかなと思って作りました。

今回、キーホルダーと缶バッジを作って、味覚祭の時に売ったのですが、1 日 10 個ぐらいは売れるというところでやっています。後ろにありますので、少しですけれども、欲しい方は持って行って下さい。

ちなみに、作った時は、このキーホルダーが 200 円で缶バッジが 100 円で売りました。

今後、色々学生さんとお話をしながら、缶バッジにしたりとか、下敷きにしたりとか、そういうのができればなと思っております。

以上です。ありがとうございます。

⑤地域外との繋がり 宮本紘太郎(泉町二丁目商店街振興組合)

こんにちは。ただいまご紹介戴きました泉町二丁目商店街振興組合の宮本です。よろしくお願いいたします。

本日は、地域外のつながりということで、水戸の泉町二丁目というと、京成百貨店の 1 つ西側のブロックが泉町二丁目ということでして、ここの商店街振興組合で活動しております。

常陸太田市の里美地区と水戸市はちょっと遠いですが、ここの橋渡しになって戴いているのがまさにこのプロジェクト実習の活動をされている学生の皆さんということで、非常に私どもとしてもありがたく思っております。

もともと我々泉町二丁目商店街振興組合がやっているファーマーズ・マーケットに、里美 Café ということで、学生さんたちが里美の PR でやっているカフェを開催させてほしいと、2 年前にお話があったのが最初でございまして、今日司会をしていた井上さんたちが取り組んで下さって、もう卒業なのだちょっと感慨深くなってしまいますが、それだけ自分も年を取ったなみたいな感じです。

そういうことでやらせて戴いて、本当に水戸の我々が里美地区まで来るともなかなかなかったのですが、そういった機会を得て、地域間のつながりでやっています。

我々泉町二丁目は、一応、県都水戸市の街中の商店街なので、黙っていてもお客さんが来たりして、商店街も、ある意味、殿様商売でも成り立っていたのですが、ただ、今はそうでもない。みんな東京にもすぐに行けてしまう。高速バスもあるし、電車もあるし。そういう中で、我々地元の商店街はどうしていくのというと、近隣のところから来て戴く、あるいは水戸市内から色々な人たちに遊びに来てもらうというのが生命線だということになってくる。

そうすると、水戸の魅力って何ですかといった時には、水戸の街中は都市として成立していますが、ちょっと車を走らせるだけで緑がいっぱいあると。車で1時間も来ればこんな雪に囲まれていて、風光明媚な農村地帯がまだまだ残っているということが非常に財産だと思っております、こういった楽しみ方もできるよと水戸の街の中の人たちに紹介する。それができるのは泉町二丁目なのだろうなと思っておりますし、また逆に、こっちの方から水戸にたまに遊びに来て戴いて、デパートでお買い物をして戴くとか、水戸でおいしいものを食べて戴くということが出来るのも泉町二丁目というところで魅力づくりをしていければと思っております活動させて戴いております。

先ほどちょっと焼酎を飲んで、口を滑らせられるようになると困ると思ったのですが(笑)、まともなお話になってしまいましたが、今後ともまた展開していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

⑥大学生・高校生から一言

●助川実咲(茨城大学人文学部社会科学科2年)

さとみ・あいチーム内、泉美・ゆうチームの助川です。

きのうの午前中の段階で里美は雪と伺っていたので、どうなるかと心配していたのですが、こんなに集まって戴けてよかったです。

プロジェクト実習の活動の一環として、県から補助金を戴いていまして、昨日はその報告会があったのですが、その帰り道で大枝君とこれだけ沢山やるのがあって、一年で2単位というのはちょっと厳しいのではないかと(笑)。この一年間の色々なことを思い出しながら家に帰ったのですが、でも今日集まってみて、こんなに沢山の人に来て戴けて、おいしいものにもいっぱい出会えたので、2単位でも仕方ないかなあと思いました(笑)。水農さんのスイーツも、大変おいしかったです。ありがとうございました。

●三宅真寛(常磐大学国際学部経営学科2年)

常磐大学国際学部経営学科の2年の三宅真寛です。

前回、秋の大収穫祭に参加して、1年生の榊田さんも参加したのですが、今日は来られないということなので、代表でお話させて戴きます。

茨城大学と水戸農業高等学校さんとの触れ合いの中で里美地区の魅力を感じ取ることができました。

実は、今週の水曜日からテスト期間で、なかなか勉強が進まない中、このような催しに参加させて戴いてありがとうございます。カレーとか豚汁もおいしくて、焼酎は香りもよく、おいしかったです。

プロジェクト実習という授業の中で、里美地区の魅力とか、他の生徒さんとの交流とかもやれたので、とても楽しくやっております。

今日は本当にありがとうございました。

私事なのですが、常磐大学の地域研究会という主催している体験イベントが2月6日に開催されます。おこのみ・もんじゃ・このみ屋。とK's Lively forestのお店で通常3,000円のところを、参加費が300円で体験することができます。

内容としては、アクセサリづくりとお好み焼きの試食です。学生さんに主にお願いしたいと思っております。この場をかりてお願いします。

ありがとうございます。

●石川 蓮(茨城県立水戸農業高等学校食品化学科2年)

水戸農業高校の食品化学科2年の石川です。

今回は、ちょっと慣れない部分もあってぼーっとしまったのですが、今後、それをどうしていくか考えて、頑張っていきたいと思っております。皆さんは場数を踏んでいるだけあって、かなわないというか、さすがだと思います。

僕たちの作ったシュークリームやマドレーヌがなくなっているので、食べてもらってうれしいなという気持ちに

なりました。ありがとうございました。

ほかのテーブルに置いてあるものの試食をさせて戴いたのですが、団子の中にゆずが入っていて、びっくりしました。とても斬新でおいしかったです。

豚汁にもカボチャが入っていて、カボチャの甘さを生かしていると思いました。

カレーも大変おいしかったです。

今回は貴重な体験をさせて戴き、ありがとうございました。

●浅野恵萌(茨城県立水戸農業高等学校食品化学科 2年)

水戸農業高校2年の浅野です。

今回は私たちのために協力して戴いて、本当にいい経験になったと思うし、とても楽しかったです。

自分は食べるのが大好きなので、今日、色々な里美の美味しいものを食べられて本当にうれしいです。

自分たちでは思いつかないようなことを皆さんがやっていて、やっぱりすごいなと尊敬するし、自分もそうなりたいなど。自分もそういうアイデアを出していけたらいいなと思いました。

頑張って作ったものがこうやって食べてもらえてうれしいです。

ありがとうございました。

⑦連携校教員から一言

●池内耕作(茨城キリスト教大学 副学長)

茨城キリスト教大学の副学長をしております池内でございます。

地元の皆様、それから各校の先生方、日々、学生と我々教職員とをお鍛え戴いておりまして、大変感謝申し上げます。

茨キリはちょっと今日は影が薄いのですけれども、普段は薄くなくちゃんとやっているのですが、今日は私1人で本当に申し訳なく思います。

その分、先ほど申し上げたように、本当に鍛えられておりまして、私は、今日、スピーチをするまでに全部食べてからしなければいけないなと思って、カレーから入ったのがちょっとまずかったのですが、いや、カレーはまずくありません、カレーはおいしかったのですが、カレーがおいしかったのではなく、お肉がおいしかったのですが、いや、カレーもおいしかったのですが、おいしすぎてお腹がいっぱいになって、カボチャのお団子までは行きました。ゆずのジャムが本当においしくて、今日来てよかったなと思っております。シュークリームとかけんちんとか、全部食べて帰ろうと思っています。

今、茨大さんに盟友と言ってもらいましたが、普段はロープで牽引してもらっているようなことで、これを何とか二人三脚にしていかなければいけないなと思ってはいますが、ロープで引っ張られる方もこれはこれで大変でございまして、結構、まっすぐ行って下されば引っ張られても楽なのですが、結構蛇行なさるので何とか振り落とされないように頑張ってやっております。

関わった学生の顔を見てみると、本当によく育てて戴いて、いい顔をしています。フィールドに出て行って、地元に入って行って、受け入れて下さる方々とにかく感謝しなければねという話をいつもしています。ただよく「現場現場」というのですが、事件は現場で起こっているのですが、実は会議室の方も結構大変なのです。裏では会議で汗を流すということもいっぱいあります。そういう見えない努力をぜひくんで戴いて頑張ってほしいと思います。

これからもどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

●村山元理(常磐大学 国際学部経営学科長)

皆さん、こんにちは。

常磐大学国際学部経営学科から参りました村山と申します。

鈴木先生とは2014年度から3大学の単位互換の連携ということで茨城大学のプロジェクト実習に常磐大学の学生さんも来て下さいませんかというところから話がありまして、私のゼミ生の3年生を参加させたあたりから始まって、今は、本当は大学の副学長レベルでちゃんと交渉しなくてはいけないのですが、今は副学長が本当に忙しすぎて全然対応できてなくて、私、個人的に参加しているような感じがするのですけれども、昨年度も参加させて戴

いてまして、昨年度の収穫祭、今年も収穫祭と参加させて戴きました。

常磐大学ではプロジェクトをやっているのかというと、実は、プロジェクト実習が始まる前から色々やっています、先ほど、学生さんから「地域がミュージアム」という話がありましたが、あれはうちのコミュニティ振興学部の塚原先生という方がいて、その方は「町がミュージアム」という視点で町おこしに関わっていて、最近も産経新聞に載っていましたが、常総市で水害を受けた時、あそこに学生たちが行って、地元から物語を拾って、小冊子を作るということもやっております、大学としてはプロジェクト実習として全体的にまとまってやりたかったのですが、そこそこやっています。でも、全体としては、こういった茨城大学さんみたいなことは大変だということをやっていないので、非常に私も参考になります。こちらに来て色々な人脈が広がって、私自身も非常に勉強させてもらっていますので、ありがとうございます。今後もお付き合いさせて戴きたいと思います。

ただ、一つだけお話ししたいことがあって、私も以前から里美に何度か来ているのですが、この近くに中野屋旅館というのがあって、そこにはいわれがあって、源義家が通ったというお話が書いてあります。私は水戸市内の見川というところに住んでいますが、その近くの神社に源義家が与えた軍配扇があるのですね。これを私がちょっと調べたら、茨城県内には結構源義家の伝説があちらこちらに多くて、水戸市内に十万原というところがありますが、義家の軍勢が10万ぐらいいたのだという話なのですけれども、こういった伝説を集めたら、何か一つ大きな広域連携的な観光のネットワークができるのではないかなということで、自分でも学生に調べさせていたのですが、これは私の夢です。そうすると、水戸市とこちらがうまくつながるのかなと思っているのですけれども。これは私の今後の研究課題を通じてやっていきたいと思っています。

どうもありがとうございました。

●新堀俊博(茨城県立水戸農業高等学校 食品化学科教諭)

水戸農業高校の新堀です。お世話になりました。

もう既に生徒たちが作った試食をして戴けたかと思います。マドレーヌとシュークリームを作らせて戴きました。

アンケートを聞き取りでやっております、色々プレゼンで見せましたとおりに、試作品は結構色々作っているのですが、生徒たちもなかなかまだ技術的な面で向上に時間がかかっておりまして、試作段階では色々作っているのですが、どうでしょうか、皆さんのお口に届けるのがなかなか難しい状態です。

新たにもしこういうカボチャのものを食べてみたいなーなんていうのがありましたら、生徒たちは聞き取りでアンケートを取っていますので、ぜひ提案を戴ければありがたいと思います。その提案を帰って集計しまして、投票数の多いものから試作段階を練っていかうかなと思っております。

ちらっとパワーポイントの方に載っていたのですが、里川カボチャの加工した状態でも長期保存が可能な商品がもしできれば還元できるかなというのが一つと、あとカボチャの種、多分、加工する時には捨てているかと思うのですが、その種を使って里美珈琲に次ぐ何かお茶系、飲み物系のものができればいいかなということ、私個人的に思っております、もしそこら辺のアイデア等もありましたら戴ければ幸いです。

引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

以上です。

●磯野貴志(茨城県立水戸農業高等学校 農業科教諭)

ご紹介に預かりました農業科の磯野と申します。

これまでの授業では、地元の産品というのを知る機会が生徒自身ありません。あれを作れ、これを作れとこちらが指示したものを生徒が一生懸命管理もしてくれるし、育ててくれていますが、ではこれが茨城県の元々のものなのかと言われるとさっぱりわからない状態でいつもやっていたかなというのが印象としてありました。

今回、新堀先生から、里川カボチャについて取り組むということで、せっかくであれば私もそういった地元産品を育てさせるということ、茨城県に勤めているということであれば体験させたいという思いがありましたので、優秀な生徒に偶然囲まれまして、今年、できることが色々ありました。

今後も生徒に取り組みさせていきたいと考えておりますが、食品化学部の活動とは違いまして、授業の一環でやっておりますので、来年はまた別な生徒に取り組みさせるという形で考えておりますが、ここまでできるかは正直不安でしかありません、1年生の様子を見ていても不安です。

ですが、やり方によっては、地元のこういう野菜があるということを知ってもらう機会になればと思ってこれか

らも続けていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

⑧里美倶楽部誕生の経緯とこれまでの活動

●鎌田一夫(里美倶楽部)

こんにちは。

里美倶楽部なんてあるのかと思った方が多いと思いますが、15年ほど前ですが、当時、村の方でグリーン・ツーリズムを少し仕掛けたいというふうに、小林さんが村会議員だったころです。豊田さんが課長だったかな。

茨城大に相談に来て、当時の教育学部の教授だった荒川千恵子さん、それから岩佐先生、そして、私は専門は建築ですが、たまたま非常勤講師で茨城大で教えていましたので、そんなこともあってグリーン・ツーリズム研究会というのを作って、それまでも村は結構都会の人たちに来てもらおうということで、おもてなし型のツーリズムをやっていたらしいのです。それですっかりくたびれてしまった。都会の人が積極的に見に来てくれる、村を楽しんでくれるというようなツーリズムがないかというようなことで研究会をやっついていかないかということで始めた。

大したことはできなかったのですが、古民家ツアーと巨木ツアーをやりました。それぞれ20~30人ぐらいの参加者でしたが、古民家ツアーは、今、荒蒔邸が民泊として使われていますが、それにつながっています。

もう一つ、体験型の何かをやろうということで、色々案は出たのですが、稲作だろうということで、田んぼを借りして、みんなで田植えをやろう、稲作をやろうということになりまして、それは今でも続いています。15年続いています、もうメンバーがみんな大分あれていますので、作業は大変になってきまして、その分、昔はおだかけで天日干しでやっていたのですが、最近はコンバインを使うようになって、少し作業は減っていますが、そんなことをやっています。

感想を一言。

私、里美を見ていて3つほど感じるのですが、一つは、昭和何年でしょう、もう大分前に2つの村が合併して里美村ができているのですが、その時から人口はほぼ半分以下になります。4割、40何%ほど。ところが、世帯数は1割ぐらいしか減っていないのです。人はいなくなっているけれども家はなくなっていないのです。これは中山間地の特徴だと思いますが、これからを考える時に、人口減少、人口減少と言っているけれども、家は残っているという状態をどういうふうにか考えるかという点が大きいと思いました。

もう一つは、小林さんや豊田さんがそうなのだけれども、とにかく里美村って色々なことをやりますよね。国が何かやると必ずそれをやっているという感じがする。色々なことをずっと仕掛けてきた。工場誘致もして、工業団地を作って企業誘致をした時もあるし、それから、お嫁さん探しも大分一生懸命やった。色々な試みをやっつて、あまり成功していないけれども、とにかく続けてやっつているということが非常に大きいことではないかなと思うのが2点目です。

それから、3つ目は、財産を持っているということです。里美牧場という財産を持っていることが非常に大きい。唯一の可能性が私は里美にあるのではないかなと思っています。

ただ、それをどうやって組み合わせていくかは、具体的なプランは私にはありませんが、ただ一つ、皆さんにお願いしたいことがあるのですが、最近、大学がみんな地域に入ってきていますよね。もっとあれなのは、被災地なんかにも若い人たちが支援に行っています。そのままそこに居つく人が多くなってきているのです。それって非常に大切に、ぜひ、さとみ・あいの皆さん、1人でも2人でも残って下さい。それが一番の地域貢献ではないかという気がします。

●浅井義泰(里美倶楽部)

東京から参りました。今日はこういう大切な報告会に出席させて戴きましてありがとうございます。

私は、さっき、農業高校のカリキュラムの話が出ましたが、その中に造園計画という教科がありました。実を言うと、私は造園計画が専門なのですが、里美のよさはこの風景にあると思います。この谷あいの風景は日本を代表する里の風景です。これは絶対に守っていくべきで、農業だけでなく、林業も含めて、農があるからこの風景は支えられています。ぜひ、田んぼの維持は大切なので、(私も後期高齢者になったので、)若い方々に後継者になってもらいたいと思います。小林さん、宜しくお願いします。

⑨プロジェクト実習への想い 蜂屋大八(宇都宮大学特任准教授・茨城大学プロジェクト実習B初期担当者)

宇都宮大学の蜂屋と申します。

茨城大学を辞めてから2年半ぶりに里美に参りました。何となく里帰りしたような気持ちでこちらに参りました。

もう昔話でしかないのですが、私が茨城大学に来て、学生さんと一緒に地域づくりをやりたいと考えて、そういう活動ができそうな地域がないかなと思っていた時に、カンというか、何かに誘われてふらふらとやってきたのが、この里美でした。それまで1回も来たことはないのですが、きっと何かの縁があったのですね。来てみたら、里美支所に白石さんがいらして、「もっと里美(だけ)が目立つことをやりましょう！」なんて意気投合しました(笑)。

その後、学生さんを連れてここに来た時に、小林さんから目の前にカボチャを並べられまして、「先生、これは産直に並べると300円にしかならないけれども、これを1,500円にしてほしい」というなんともめっちゃくちゃなことを言われまして、それで里川カボチャのプロジェクトが立ち上がりました。プロジェクトを進める過程では、荷具さんご夫妻に大変お世話になりました。

大学の方では、これをカリキュラムにするということで、澁谷先生にかなりのご支援を戴きました。また、連携校ということで、常磐大学の先生や茨城キリスト教大学の諸先生方に本当にお力添えを戴きました。お陰様でこういう今日がなし得ているのかなと思います。

鈴木先生から、先ほど来、何度も名前を出して戴いていますが、私はここで何ができたのかなと思います。私がやったことで自信を持って言えるのは種をまいたことです。種をまいて、春に芽が出て、葉っぱが2~3枚のところまではやったという自信があります。ただ、その後、本当であれば、茨城大学を去る時にその出た芽は刈り取っていくのが私の責任だと思うのですが、幸い、鈴木先生と神田先生がそれを引き継いで下さいまして、水をやって育てて戴いて、葉っぱに肥料をやって戴いて、ここまで育てて戴きました。ですので、私がやったことというのは本当に小さなことだったなということを、今日、これだけの皆さんの顔を見て思っているところです。

私事ですが、先ほど、鈴木先生からご紹介いただきましたとおり、3月1日から金沢大学に勤務します。こうやってここにも気軽に来られるのも今日が最後かなと思っていたので参りました。来てよかったなと思っております。

私のようなよそ者は、芽が出てある程度育ったら消えるのが宿命ですので、これからは、茨城大学、それから、協力校の先生方、私に遠慮なく、どうぞご自身の言葉でこの成果を発信して戴きたいと思っております。いつまでも私の名前が出てくるのはおかしいので、今日を機会に、ぜひご自身の力で、ご自身のお名前で作成して戴ければと思います。

皆様のお陰で、このプロジェクトは、非常に良いプロジェクトになりました。学生さんが地域と真摯に向き合って、地域の皆さんの課題を取り上げて活かしていくということは、本当に全国で見ても優良事例だと思います。規模の大きさや小ささは関係なくて、ストーリー性があるということが大事なのだと思います。そのためには、ぜひ今後、鈴木先生はじめ茨城大学、そして連携校の皆さんと一緒に情報発信をがんばって戴ければと思います。

今日私がここへ来たのは、それをお願いしたくて来たのだと思っております。私にお力添え戴きました皆様、本当にありがとうございました。

⑩常陸太田市の支援と今後への期待 白石栄里(常陸太田市役所里美支所 統括)

どうも皆さん、こんにちは。

里美支所の統括の白石です。よろしくお願ひします。

この事業とのお付き合いは、今、蜂屋先生からありましたが、平成23年の蜂屋先生との出会いから始まりました。何か面倒なことに巻き込まれそうだなという感じで、大変困った思い出がございます(笑)。

今、種をまかれたということで、知らないうちにあちこちに種をまかれまして、気がついてみたらこのように大きな花が咲いたということをお大変うれしく思います。

また、当時は、地域おこし協力隊とともに、里美地区の住民と学生さんが交流をして戴きまして、学生さんの目線で里川カボチャの商品開発とか色々な地域おこしをやって戴きまして、大変ありがたく思っております。

それから、当時の思い出なのですが、今日来ていらっしゃるのですが、江幡さんと、今県庁にいる出口さんかな、共に民泊にいらっしゃいまして、彼らと夜遅くまで田舎の話や生き方の話などをしたことを覚えております。

ただし、残念なことには、今、日本自体が経済最優先、効率最優先ということで来ております。経済性優先というよりは、効率最優先で社会が殺伐としていますが、今はそういう状況で、日本は人口減少社会に入っているのですが、東京都だけは転入超過ということで、東京一極集中になっております。

東京のアスファルトだらけのコンクリートジャングルの中で人間が本当に固まって生きているのですが、本当にこういうことでいいのかなという思いがあります。

どうか皆さんは、この経済寄りの観点からではなくて、自然と共生できる道をこのフィールドを通して考えて戴きたいと思います。

この里美で行ったフィールドワークを通して学んだことをいかにによりよい未来につなげていくか、貢献できるか、そういうところを全世界各地に行って活躍して戴きたいと思います。

最後になりますが、常陸太田市の皆さんへのご支援についてということなのですが、皆さんに対する支援については、今日のような会場の提供とか、それから、皆さん方がフィールドで動けるようなバックアップを続けていきたいと思っています。

それから、これからも皆様は就職で都会の方で暮らすようになるのですが、そういうところで、辛かった時にはここに帰ってきて、皆さんの顔を見た時にはお帰りなさいと言えるような地域にしておきたいと思います。皆さんが癒されるような自然をずっと守っていくことが私たちの仕事だと思います。

今年も報告会は大変にぎわっております。里美地区が愛されていることを感じまして、大変ありがたく思っております。

今後とも里美をよろしくお願ひしたいと思います。

本日はどうもご苦労さまでございました。

V : 初年次 P B L 試行

(プロジェクト実習B夏季合宿フィールドワーク報告を含む)

1. 趣旨と経緯
2. プロジェクト実習B活動報告会 P P T
3. 設計理念
4. 概要
5. 初年次 P B L 試行・プロジェクト実習B夏季合宿
合同フィールドワーク
6. 総括 ー今後に向けてー

V : 初年次 PBL 試行(プロジェクト実習 B 夏季合宿フィールドワーク報告を含む)

鈴木 敦

1: 趣旨と経緯

プロジェクト実習は、今年度で開講 4 年目を迎えた。授業として「ひとまずの安定」を得たこと、加えて文部科学省のアクティブ・ラーニング (PBL 授業を含む) の推進方針、ならびに本学における COC カリキュラムの始動等を勘案すると、今後は、授業の質的向上と他学部・他大学への拡大が重要な課題となる。そのためには、現行のプロジェクト実習における

- ①運営と評価に纏わる、マニュアルやルーブリック等各種ツールの整備
- ②担当教員・履修学生代表者による先進大学の取り組みの参観・参加等による、プロジェクト実習そのものの完成度向上
- ③HP や活動報告会等、広報活動の充実
- ④予算とマンパワー両面での組織的運用体制の整備

への取り組みと並行して

- ⑤1 年次向け 5 学部混合 PBL 授業の試行 (以下「初年次 PBL 試行」)

が必要となる。

以上の認識から、2015 年度教育改革推進経費の交付を受けて、常陸太田市里美地区をフィールドに小規模な試行を行い、正規開講に向けて克服すべき課題を抽出することとした。

2: プロジェクト実習 B 活動報告会 PPT

今年度実施した初年次 PBL 試行については、2016 年 1 月 31 日に常陸太田市里美地区で開催した、「2015 年度プロジェクト実習 B 活動報告会」(詳細は第 IV 章を参照されたい) の場で報告している。順番が前後するが、まずその際の PPT を示し (図 1)、以下これに沿って記述してゆくこととする。

図 1: 初年次 PBL 試行と今後の見通し PPT

<p>プロジェクト実習 初年次PBL試行</p> <p>鈴木 敦 atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp</p> <p>1</p>	<p>二種類のPBL</p> <p>1:精製型</p> <p>2:化学反応型</p> <p>2</p>
<p>1:精製型</p> <p>専門性追求型のPJ</p> <p>単一大学 → 単一学部 → 単一学科 → 単一ゼミ</p> <p>3</p>	<p>2:化学反応型</p> <p>多様性追求型のPJ</p> <p>複数ゼミ → 複数学科 → 複数学部 → 複数大学</p> <p>4</p>

プロジェクト実習の設計は

化学反応型

茨城大学＋常磐大学
＋茨城キリスト教大学
＋水戸農業高等学校

5

大学ベースでの
現実は・・・

茨大人文学部学生
主 体

6

茨大内部
キャンパス間の距離

三大学間
キャンパス間の距離
＋
単位互換受講のメンドウさ

7

高校－大学間
初年次向けPBL授業の欠落



8

初年次PBL試行

- ・ 全員水戸キャンパス
- ・ 5学部で「化学変化」期待
- ・ 夏季集中で負荷軽減
- ・ 予算支援
- ・ 単位なし

9

設計モデルは

山形大学・初年次向けPBL

フィールドワーク
共生の森 もがみ

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/mogami/07.html>

10

お手元の
資料を
ご覧下さい

11

- 1:事前学習
- 2:フィールドワーク
- 3:振り返りと
レポート

12

事前学習



- ・個人の達成目標ルーブリック
- ・現地講師によるレクチャー(於:茨城大学)
- ・フィールドワーク時における各人の課題

13

<編者注>

スライドNo.14-17は「フィールドワーク(1)-(4)」として活動状況の写真を収載していますが、本章図8-28とほぼ重複するため省略しました

振り返りとレポート



- ・個人の達成目標ルーブリック完成
- ・アンケート回答
- ・レポート作成

18

検討課題(1)

- ・予算の安定確保
- ・FWVの時期
- ・効果的な広報
- ・キャパ

19

検討課題(2)

- ・授業の位置づけ
- ・授業の内容
- ・評価の客観性
- ・安定的運営体制

20

お世話になりました
たくさんの方々に
心より
感謝申し上げます

21

ご清聴いただき
ありがとう
ございました

鈴木 敦

atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

22



OSATO-CHAN

3:設計理念

初年次 PBL 試行は、以下の認識に基づき、現行のプロジェクト実習 B との協働・接続を前提に設計した (図 2 資料 1)。

- (1) 現行のプロジェクト実習の履修対象は 2 年次以上である。高校においても PBL 授業が導入されている中、現状では本学には 1 年次生が受講できる PBL (Project Based Learning) 授業が存在しない。高大間での接続ができていないことが、プロジェクト実習履修生数の伸び悩みの一因と考えられる。
- (2) プロジェクト実習は、多様な背景を持つ履修生が一つのチームを結成し、協力して課題に取り組むことを通じて、「化学反応的学び」を目指している。このため、本学人文学部開講授業であるが他学部・連携他大学にも積極的に開放している。しかし、2012 年の初開講以来、履修者は人文学部学生に集中している。原因は多岐に亘ろうが、こと茨城大学内部においては、3 キャンパス間の距離が大きな障害となっていると思われる。分散キャンパスの制約のない初年次生を対象とすることで、履修生の多様性確保に有利な条件が確保できると期待される。
- (3) 山形大学「エリアキャンパスもがみ」の中核授業である「フィールドワーク共生の森もがみ」は、初年次生を対象とし、山形県北部 8 市町村をフィールドとして運営されている PBL 授業である (<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/mogami/index.html>)。茨城大学と同様にキャンパスが分散している山形大学において、現地の自治体・住民の協力の下に、構成全学部から年間 300 人前後の履修生を得て運用されており、文部科学省の COC 事業の雛形の一つとなった実績を持つ。
- (4) 現行のプロジェクト実習 B は、山形大学から赴任された蜂屋大八准教授 (当時) がフィールドワーク共生の森もがみをモデルに、常陸太田市里美地区を主たるフィールドとして常陸太田市役所並びに地域住民の協力を得て立ち上げたカテゴリーであり、親和性が高い。初年次 PBL 試行を実施する上で、プロジェクト実習 A・C・D に比して有利な条件が揃っている。
- (5) 現行のプロジェクト実習は、通年 2 単位の負荷の高い授業である。大学生活に不慣れな・受講科目も多い初年次生向けには、より負担の少ない形で提供する必要がある。そこで、将来の正規開講に当たっては

①前学期後半の事前プログラム

②夏季休暇中の宿泊型 (1 泊 2 日×2 回もしくは 2 泊 3 日×1 回程度) のフィールドワーク

③後学期初頭の事後プログラム

からなる集中 2 単位で設計することを想定している。その前提の下に、今回の初年次向け PBL 試行のプログラムは、日程・内容をさらに圧縮するのが現実的である。


- (6) 初年次 PBL 試行は、正規開講に向けた課題抽出のための文字通り「試行」であり、単位も無い。完成度の低い、「授業以前」レベルのプログラムに、学生の自己負担を求めることはできない。既存の「先進地実地研修 (遠郊)」をモデルに、宿泊費等も含めて学生に無償で提供できる条件を整えねばならない。自ずと、募集人数も最大 10 名程度に抑えるのが現実的である。
- (7) 初年次 PBL 試行参加者に対しては、「プロジェクト実習 B 履修生との交流を通じて、里美地区における学生の活動の実際を知り、より実感を持って試行に取り組めるように」、プロジェクト実習 B 履修生に対しては「(通常の活動は専ら学生の自発的な計画によっているが) 教員サイドで作り込んだフィールドワークを体験し、今後の活動の参考にして貰うために」、2015 年度は、「初年次 PBL 試行のフィールドワーク」と「プロジェクト実習 B 恒例の夏季合宿フィールドワーク」を合同で実施する。

4:概要

教員から学生への指示文書や学生からの事前レポート等は、現地でのフィールドワークの際に配付した「参加者のしおり」に収め、初年次 PBL 試行参加者は勿論、プロジェクト実習 B との合同開催により参加した 2 年生以上のメンバーにおいても、常に確認できるようにした。再度順番が前後するが、まず、このしおりを提示し (図 2)、以下これに沿って記述してゆくこととする。

図 2: 2015 年度プロジェクト実習B夏合宿・初年次 PBL 試行参加者のしおり (1/4 縮小・一部原寸)

2015 年度
初年次 PBL 試行
プロジェクト実習B夏合宿
参加者のしおり



OSATO-CHAN

常陸太田市里美地区

2015年9月28-29日

1. 参加者名簿

(1) 現地講師の皆様 (ご登壇順)
白石栄里 様 (常陸太田市役所里美支所統括)
豊田紀雄 様 (里美ふるさと振興公社総括支配人)
荷見 誠 様 (里川カボチャ研究会会長)
後藤武巳 様 (里美捕獲隊)
鈴木 修 様 (里美捕獲隊)

(2) 学生
＜名簿省略＞
・初年次 PBL 参加者 5 名
・プロジェクト実習 B からの参加者 7 名

(3) 教員
鈴木敦・神田大吾

2. スケジュール

9月28日(月)
8:45 茨大正門発
9:05 銀杏坂発
9:45 常陸太田市役所発
10:15 大中着
*会計手続き等
10:30 ガイダンス (里美ふれあい館 TEL: 0294-70-7131) [1時間]
*スケジュール確認&諸注意 (鈴木敦)
*常陸太田市里美地区概要 (白石栄里様)
*里美ふるさと振興公社の取り組み概要 (豊田紀雄様)
→里美牛のブランド化と耕作放棄地対策を兼ねたエサ米生産
→有機栽培と販売戦略
→イノシシ問題 (主として駆除の観点から) 等
11:30 移動&昼食 (荷見誠様宅・昼食代は奥様のお手製お弁当を 500 円でお預りしています)
13:30 午後の活動 (荷見誠様宅・里川地区) [2時間 30分]
*里川カボチャのレクチャー (荷見誠様)
→在来種復元の取り組み・里川カボチャ研究会・耕作放棄地対策
→イノシシ被害と対策の実例 (主として防護の観点から)
*商品化の取り組み (プロジェクト実習 B 「チームさどみ・あい」メンバー)
→水産との連携・里川カボチャ焼酎
*畑見学 (荷見様)
→農事暦と作業の実例
→メッシュ柵&電気柵によるイノシシ対策等
→可能であれば農作業のサワリ体験 (除草?)
*里川地区の里川カボチャ生産地&耕作放棄地見学 (荷見様) 等
16:00 プラトー里美 (<http://www.sat.orai.f.u.t.l.jp/platacau/>) TEL: 0294-82-4221) 着
*この時点でバスは水戸へ
*分室・入浴等

17:30 夕食&情報交換 (プラトー里美) [1時間 30分]
*荷見様・豊田様並びに地元親友会の後藤武巳様・鈴木修様にござ様置き、夕食を共にしながらの振り返り・情報交換

19:00 個々人の振り返り (プラトー里美) [1時間]

20:00 解散・以後自由

22:00 就寝

9月29日(火)
*希望者は早朝散歩 (鈴木敦)

7:30 朝食

9:30 午前の活動 (プラトー里美・里美牧場) [計1時間 30分]
*里美牧場とプラトー里美に関するレクチャー (豊田様)
→プラトー里美の施設見学・利用状況等データ
→里美牧場における飼育～出荷体制
→現行体制・施設と旧体制・施設からの改善点 等

10:30 プラトー里美発 (豊田様)
*牧場諸施設見学
*飼料米生産田&関係施設見学

12:30 昼食 (うぐいすの里 TEL: 0294-82-2980 で各自注文。昼食代は数百円～)
<http://www.kanko-hitachiota.com/vp/hitachiota/leisure/%E4%BD%9C%E2%83%A1%E3%81%96%E3%81%98%E3%81%9C/>
*うぐいすの里見学

13:30 午後の活動 [大中地区・2時間 30分]
①里美牛関係施設見学 (豊田様)
②有機農園見学 (豊田様)
③乳酪見学 (NFO法人・遊学様より、自由見学の承諾済み)
④生産物直売所 (見学・希望者は買い物)
*③④は、残り時間を覗みながら判断します。

16:00 生産物直売所発
16:30 常陸太田市役所発
17:10 銀杏坂発
17:30 茨城大学正門着・解散

*畑・牧場・耕作放棄地等を廻りますので、汚れてもいい格好をお願いします。特に靴は頑丈で実用的なものをお願いします。

*プラトー里美&荷見様宅周辺の標高は 600m 前後あります。単純計算で茨城大学水戸キャンパスより 6 度は気温が低くなります。通常の服装に加えて、暖かい衣類を持参して下さい。

*2 日目の昼食は里美名産のソバになります。ソバアレルギーのある方は、事前に申告して下さい。また、ソバ以外にも、食物アレルギーのある方は申告して下さい。

◎遅刻厳禁です。10 分前行動を心掛けてください◎

3. 持ち物

- 現金 (最低限、宿泊費と 2 回の昼食代が必要です)
- 動きやすい服装 (昼間の活動用)
- 暖かい服装 (夕方～夜は冷えます)
- しっかりした靴 (長靴・トレッキングシューズの類があればベスト)
- 帽子・タオル・軍手等、フィールドワークに必要な小物類
- 飲み物
- カメラ、メモ帳、筆記用具など
- 保険証 (コピーでも可)
- 常備薬

以上のもの以外にも、各自必要なものがあれば適宜準備してください。

4. 緊急時の対応と連絡先

緊急事態が発生した場合は、まず鈴木敦様に連絡してください。
電話 : XXX-XXXX-XXXX
メール : XXXXXXXXXXXXXXX@tocom.ne.jp

5. 注意事項等

- ・今回のフィールドワークは、多くの方々のご支援を載せて実現しています。先方にご迷惑をおかけすることのないよう、自分で考えて行動するようにしてください。特に挨拶やお礼はしっかりと行いましょう。
- ・集合時間等には遅れることのないよう、早め早めの行動を心掛けてください。

6. 活動に当たって

(1) フィールドワークには、専用のメモ帳を携行し、こまめにメモをとります！「記録を取ること」を習慣化することが大切です。

(2) メモ帳は、各自の好みで構いません。＜参考までに＞考古学の調査等で使用する「野帳」をご紹介します (コクヨ 野帳 セーYS)。生協の購買部等でごく安価 (200 円程度) に販売していますので、この機会に購入するのもいいでしょう。(鈴木敦の方で、新品をいくつか持っています。)

(3) 担当教員のスタンス
PBL 授業ですので、教員は極力手を出さないように心がけています。かくして通常は、皆さんの活動を「傍観」することを基本とします。何事であれ、「自ら動く」ことを心がけて下さい。一方で、困ったこと等が出て来た時は、遠慮せず声をかけて下さい。

(4) 終了後に、レポートを提出して下さい。
①プロジェクト実習 B メンバー: 過去のフィールドワークに準じます。締切は 10/23 となります。
②初年次 PBL 試行メンバー : 本パンフレット 8 ページ「5」の通り。

資料1：初年次 PBL 試行・趣旨書

1 年次向け 5 学部混合 PBL 授業・試行

参加者募集

大学教育センター・キャリア教育部長
鈴木 敦

茨城大学就業力育成支援事業「根力育成プログラム」では、人文学部の専門科目として 2 年次生以上を対象に PBL 授業「プロジェクト実習」を開講しています。同授業は茨城大学の他学部学生は勿論、茨城キリスト教大学・常磐大学学生にも単位互換科目として開放されています。

アクティブ・ラーニング（中でも PBL 授業）は、近年の社会的要請を背景に、文部科学省が拡充に力を入れている新しい形態の授業です。上記「プロジェクト実習」は、

- (1) 学外から頂いた「ざっくりした課題」について
- (2) 学生自身が問題を絞り込んで具体的な「プロジェクト」を設定し
- (3) チームで取り組む

という形態で取り組んでいます。

この度、これを 1 年次学生向けにも拡大すべく、来年度以降の正規開講を視野に **時間数をできる限り圧縮し・単位無しで・募集定員 10 名で** 試行することとなりました。試行であること・時間数が少ないことから単位は出せませんが、その分予算的支援を手厚くし、皆さんの経済的な負担を極力抑えるよう努力しました。

概要は次ページに記した通りです。参加を希望する方は

7月15日（水）までに

鈴木敦 (XXXXXXXX@mx.ibaraki.ac.jp) 宛にメールで 連絡して下さい。

→質問についても、上記アドレスへお願いします。

皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

I：目的

茨城大学の 5 学部にもたがる初年次学生が、**学内でのいわゆる座学と茨城県常陸太田市里美地区でのフィールドワーク** に取り組み、「背景を異にするメンバーで・地域の課題にチームで取り組み・成果をまとめて報告する」という一連の流れを体験し、課題解決力・チームワーク力等、根力（＝茨城大学版社会人基礎力）の重要な構成要素について実地にトレーニングします。

Ⅱ：活動概要（1・3・5は一斉授業形式・それ以外は各人で自由に取り組みます）

1：現地講師による事前レクチャー・課題提示（7/24・5限・教室で講義）

→下記、現地講師のお二人から「ざっくりした課題」をご提示戴きます。

荷見 誠氏（里川カボチャ研究会代表）

豊田紀雄氏（一般財団法人・里美ふるさと振興公社総括支配人）

*典型的な中山間地域・少子高齢化地域である茨城県常陸太田市里美地区において、地域が直面する諸課題に挑戦的な取り組みを展開しておられるお二人から、「耕作放棄地問題の深刻さと対策の困難さ（対策の前提となるイノシシの害の深刻さを含む）」をお話し戴く予定です。今回の試行では、提示された課題について各人がネット等で収集した情報と現地フィールドワークで得た知見に基づき、「課題解決の一助となる提案」をまとめます。

2：事前調査&各人のテーマ設定（～8/31・各自で取り組み、メールで提出）

→「具体的にどういうテーマについて提案を行うか・そのために現地フィールドワークで何を調べるか」について、各人の計画を200字以上に纏めて、8/31までにメールで提出します。

→「ざっくりした課題」から「具体的なテーマ」への絞り込み方については、別紙の「<ざっくりした課題>から<自分のテーマ>への思考シミュレーション」を参照して下さい。

3：現地フィールドワーク（9/28-29・常陸太田市里美地区でチーム活動）

→現地講師の方々にご指導を戴きつつ、一泊二日で現地調査

4：事後調査とレポート取りまとめ（11月末・各自で取り組み、メールで提出）

→4での知見に事後調査を加えて提案書（800字以上）に纏め、11/30までにメールで提出。

5：報告会（12月12日）

→5の提案書に基づき、代表者による一件10分程度のプレゼンと質疑応答

*プロジェクト実習の活動報告会と合同で行います。



OSATO-CHAN

資料2：初年次向けPBL 試行・思考のシミュレーション

[7/24 事前レクチャーの概要]

「耕作放棄地問題の深刻さと対策の困難さ（対策の前提となるイノシシの害の深刻さを含む）」
→これは確定です。それを踏まえて「ざっくりとした課題」として具体的にどのようなの
が提示されるかは未定です。以下は、あくまでシミュレーション用に当方で考えたものです。

[ざっくりした課題（例）]

「カボチャ等のく地面を覆って繁茂する作物」を、最初から収穫を目指すことなく栽培し、雑
草・低木の繁茂を抑える。その上で毎年秋に一回草刈り機をかけることで、低木を確実に排除
する。これを実現するための（イノシシ対策も含めた）種々の提案を求める。」

→高齢化とイノシシによる農業被害の深刻さから、年々耕作放棄地が拡大している。耕作放棄
後2年もすれば低木が入り始め、急速に雑木林化する。そうになったら、事実上もはや農地と
して回復させる術はない。対応策として

- (1) 速やかな再耕地化
(2) 耕地以外への転用
(3) その他の対応

の3つが考えられる。上記「ざっくりとした課題」は、(3)の一例として「将来、農業法人
等が進出して再耕地化の条件が整った際に、耕作放棄地を速やかに再耕地化できる状態で
（＝耕作放棄地ではなく休耕地として）保全するための方策を考える。」ということ。
保全のためには、継続的に低木の侵入を抑えることが必須となる。そのための労力と予算
をいかに抑制するかが、成否の勘所となる。侵入一年目の低木は草刈り機で容易に排除でき
るが、二年以上経つと草刈り機では歯が立たず、低木排除のためのハードルは一気に上がる。
*文末の資料は、福島県富岡町の原発事故被害地の事例です。今回フィールドワークを行
う茨城県常陸太田市里美地区に関するものではありませんが、いかなる理由であれ田畑
の手入れができなくなると、「雑木林化」がいかに急速に進んでしまうかを示す例として
掲載しています。参考にして下さい。

[<自分のテーマ>への、学部別(?)思考シミュレーション]

上記「ざっくりした課題」を「各人の具体的なテーマ」に落とし込んでいく流れについて、「学
部別の思考シミュレーション」を記してみたいと思います。あくまでも「参考までに」という位
置づけです。皆さんの自由な発想に期待します。

<基本姿勢>

「この課題に、自分の専門性を活かして、どういう貢献ができるだろうか?」と考える。

(1) 農学部学生:

うカリキュラム案の策定」を自分のテーマとしよう。と、すれば、フ
ィールドワークで調べるべき事は・・・(以下、略)

(5) 人文学部学生:

少子高齢化地域だから耕作放棄地が発生する。機械を作っても・好適品種を発見して
も、地域の労働力・経済力だけで十分に運用することは難しい。行政・NPO・企業・ボラ
ンティア等を巻き込んだ、包括的な保全体制を設計・実現できないか?これまでに無い特異
性を構築すれば、モデルケースとして補助金も期待できる・・・

農業法人誘致による再耕地化はどこでも可能な訳ではない。見通しも無く漫然と・長年保
全し続けることは不可能。別の切り口からの休耕地対策も併せて考える必要があるのではな
いか?農地が雑木林になっていくという現象を「耕作放棄」ではなく「環境破壊」と捉える
観点はどうか?地域外に向けて「休耕地保全策」ではなく「環境保全策」として働きかける
のはどうか?イノシシ対策、特に駆除の方策を考えるには、前提となる各種法律・条例の調
査が不可欠・・・

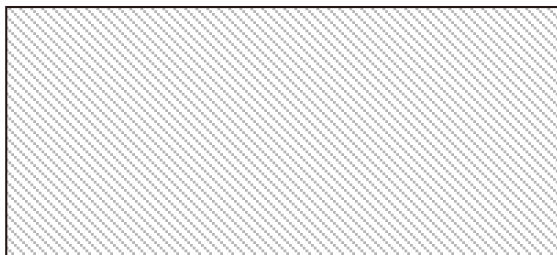
→具体的テーマ:今回は「イノシシの駆除方策に関する、現行の各種法律・条例を踏ま
えて、現地で採用可能な具体的駆除方法(罠・銃等)の提案」を自分のテ
ーマとしよう。と、すれば、フィールドワークで調べるべき事は・・・
(以下、略)

[資料]

ヤナギの壁、米作り再開阻む

福島、立ち入り制限の水田

20140709 朝日新聞夕刊



収穫を期さない・地面を覆うことを第一義とするカボチャ栽培には、どういう品種が相
応しいだろうか?雑草を抑えるために、ただカボチャの葉を繁茂させるだけでよいなら、定植
時の全面耕起は不要。なまじ実がなったりするとイノシシのエサを増やしてしまい、却って
事態を悪化させる。そうであれば「農作業の手間」は積極的に減らせる。しかし、成長不良
になっては被覆効果が減ってしまう。1株当たりどの程度の面積を耕起し、株間はどれ位と
するのが効率的だろうか?また、そもそもこの目的にもっと相応しい農作物はないか?・・・
或いは牛・山羊等の、これまた「除草を第一義とする・商品価値のある肉の生産を期さない
」粗放的放牧は?イノシシ除けとして活用している地域もあるらしい・・・
→具体的テーマ:今回は「くただ葉を繁茂させるだけの栽培」にはカボチャ1株当たりど
の程度の面積を耕起し、株間はどれ位とするのが効率的か?」を自分
のテーマとしよう。と、すれば、フィールドワークで調べるべき事は・・・
(以下、略)

(2) 工学部学生:

耕作放棄地になる所は、不便な所。しかも山間に散在している。通常のトラクターを持
ち込もうとしたら移動の手間と燃料代ばかりかかってしまう。一方で高齢者の人力のみでは
対応不能。では、アシストスーツやロボットを作るか?仮に作れたとしても、休耕地保全と
いう、直には収入を生み出さない作業のために多額の予算投入を要する合理性・実現可能性
があるか?むしろ草刈り機の構造をベースに、持ち運びが容易な「局所耕起機」を作れない
か?これなら遥かに短時間で・安価で作れるはず・・・

イノシシ対策にはコンピュータやセンサー技術を活用できるはず・・・
→具体的テーマ:今回は「持ち運び容易な局所耕起機に相応しい仕様(形態・重量等)の
策定」を自分のテーマとしよう。と、すれば、フィールドワークで調
べるべき事は・・・(以下、略)

(3) 理学部学生:

収穫を期さないなら、農作物ベースで考える必要は無い。もっと簡単に栽培でき、イノシ
シのエサにもならない植物はないか?ナギナタガヤはどうか?しかし外来作物の安易な大量
導入は生態系を乱す可能性があり、問題はないか?・・・

現代日本において、イノシシほど身近かつ深刻な被害を発生させている野生動物はいな
い。しかし、その生態の研究は進んでいない。イノシシの生態研究を進めることで、対策
も見えてくるのではないかと・・・
→具体的テーマ:今回は「現地の自然環境に合い・既存の生態系を乱さず・イノシシのエ
サにならない植物の選択」を自分のテーマとしよう。と、すれば、フ
ィールドワークで調べるべき事は・・・(以下、略)

(4) 教育学部学生:

児童・生徒への環境教育の一環として、休耕地対策を考えるカリキュラムを設計できな
いか?授業の一環として、保護者も巻き込みつつ実際に保全活動を行うという取組を構想す
ることはできないか?・・・或いは児童・生徒に拘らず、グリーンツーリズム系でプランニ
ングした方が、実現可能性が高いか?
→具体的テーマ:今回は「授業の一環として、保護者も巻き込みつつ実際に保全活動を行

資料3：初年次PBL 試行・各人のテーマ

15L2039H 大里智華 人文学部社会科学科1年)

私の設定したテーマは、イノシシ駆除のできる人材育成とその定着、である。里美地区の人口は少
なく、またイノシシを駆除できる方は更に少ない。故に私はイノシシ駆除のできる人材を育成するこ
とが獣害を減らす第一歩であると考えた。しかし、いくら人材育成を提案したところでたくさん
の問題があると考えられるよって私はフィールドワークにおいて以下のことを調査したい
・イノシシ狩りの伝わり方
・銃の扱いなどは免許を取ればいいが、実際狩をするとなると必ず師匠に当たる存在がある。その方
にどのようなことを教えてもらうのか、きちんと習得できるようになるまでどのくらい時間がかかるの
か?
・若者を里美地区に引きこむと考えると時に里美地区の方々にとって心配なこと 実際、里美地区に来
る若者達の心配を考慮することは多々あれど当の里美地区の方々にとって目が行くことは少ないように思わ
れるのでこのことについて聞いてみたい
・里美地区の方々にとっての地域の魅力、問題点
里美地区の方々にとって里美地区にはどのようなところ、不便なところがあるのか尋ねてみたい
以上の聞き込み調査を中心に当日のフィールドワークを進め、最終的にイノシシ駆除のできる人材育
成のシミュレーションを考え、またその人材が里美地区に定住する案を提案したい。
また、調査方法としては、主にレクチャー等でお話をいただける方々に質問しようと考えている。ま
た、適宜聞き込みを増やしたいと考えている。

15L2069G 木村帆南 人文学部社会科学科1年)

日本で高齢化が進んでいることは以前から言われてきているが、里美も例外ではなく、高齢化による
環境の変化が、里美が抱える問題の原因となっている。猪被害の増加の原因は、農業従事者の高齢
化と担い手不足により、耕作放棄地が増え、手入れをしないために雑草や低木が増え、猪の活動範囲
と人間の生活範囲との境界線があいまいになっているため、猪被害が増加している。また、作物を外
に捨てるのが餌付け行為になってしまっている。根本的な原因の解決を急がなければ、事態はさら
に悪化するだろう。そのことから、スムーズな、新規就農者の獲得から作物の栽培・出荷までの流れ
を作ることが必要である。また、里美のピンク色のかぼちゃなどの農産物を「里美牛」のようにブラン
ド化することで知名度を高めることにつなげる。しかし何より重視すべきは、新規就農者の獲得と
栽培から販売までのサポート、農業の継続のための支援が出来る体制の確立である。そのためフ
ィールドワークで調べることは、里美の地理・人口、アクセス経路や現状の里美の農業のあり方・取り組
み、流通経路などである。

15I2017 佐藤豊大 人文学部社会科学科1年)

目的:【新しいヒット作物を植えること、もしくは新しいヒット家畜を育てることによる、耕作放棄地
の有効利用、減少】
そのために現地に調べること
・耕作放棄地の面積・分布
・過去の栽培データによる優良作物の選定
・選定した作物を育てるに必要な人件的、金銭的コストの試算

・牧場で飼育されている動物の種類、流通量、用途、価格

・里美地区の労働人口の推移、要因

また、耕作放棄地の増加、イノシシ被害等それぞれの本質的な問題は、人口の減少にあると推測する。新しい作物、家畜を育て、里美地区のヒットブランドとし、里美地区の知名度をあげることで、人口減少に歯止めをかけることで問題の根本的解決にあたる。(289字)

1ST3011T 上野瑛永 工学部 電気電子工学科 1年)

事前レクチャーにおいて、イノシシと豚の交配種であるイノブタは繁殖力が強く、地域の駆除が追いつかないと聞いた。そのため、イノシシを駆除するよりも、先ず優先的に被害を減らす方法を提案する。里山では、農耕地を荒らすイノシシやイノブタによって田畑を荒らされる被害に悩んでいる農家が少なくない。しかし、単に電気柵を設置するだけでは飛び越えたり、つき破ったりしてしまうため何か改善策を講じなければならない。また、先の電気柵の漏電による死亡事故のニュースを受け、人間への安全面も考慮しなければならない。さらに適宜、電気柵以外のよい方法(音、におい、光等)があれば上手に取り入れたい。

具体的テーマ：「イノシシが農耕地や住宅へ侵入することを阻止する電気柵の改良、新しい設置法等の考察」

フィールドワークで調べるべきこと

i) 現地の住民は、現状でイノシシを駆除しきれないと思っているかどうか、できないならばどうすればいいと思うか、または、できない理由は何かを調査する。

ii) どんな動物が畑を荒らし、どの作物が狙われやすいのか調査する。
*イノシシの被害を優先して調べる

iii) イノシシが自宅に侵入しないように取っている対策を調査する。

iv) 電気柵等の鳥獣から畑を守ることにかけることのできる費用を調査する。

v) 農家同士でうまく連携がとれるか、とれているかどうか調査する。

vi) 事前に電気柵の設置法をインターネット等で調べ、実際にどう使っているのか調査する。

vii) できる限り地域の方々と話し合いながら、電気柵の改良、設置の案をまとめる。

1ST1068F 林 翔太 工学部 機械工学科 1年)

1 里美地区農業振興計画案

概要

現在、里美地区で耕作地が占める面積は、わずか 2% 以下しかない。そのうえ、農業の規模を拡大しようにも高齢化等の影響で人手が足りないのも事実である。

そこで、海外から農業従事者を招待するというのはどうだろうか。特に発展途上国では、農業従事者が多く存在する。そのような国に住む人を呼べば、作物の出荷量が増え、道の駅を再開することも可能になるだけでなく、里美の人口を増やすことも可能である。また、イノシシが持つ残みを好む習性から、耕作放棄地の減少により、鳥獣被害の減少を期待することも出来る。

問題点

- ・言語の習得が、互いに困難である。
- ・耕作放棄地の開墾に多額の費用が必要である。

実地にてすべきこと

- ・すぐに使える耕作放棄地がどれだけあるのかを調べる。
- ・気候や土壌の性質を調べ、どんな農作物が作れるのかを知る。

2 出荷物運搬簡略化計画案

概要

耕作地には、そこに辿り着くまでの道がしっかりと整備されていないものが存在する。そのような場所で生産された収穫物を軽トラック等を用いず、人力で運ぶのは時間がかかる上、手間もかかる。このような事態を避けるために、収穫物を運搬するためのゴンドラ、あるいはトロッコを作るのはどうだろうか。

問題点

- ・自然が損なわれる。
- ・定期的に点検する必要があるため、維持費がかかる。
- ・耕地面積の割合が現在のまま増えない場合、このような設備自体が必要ない。

実地にてすべきこと

- ・収穫物を運搬するのに最も効率の良いルートを探る。

3 イノシシ対策

概要

猟師の減少、耕作放棄地の増加、天敵であるニホンオオカミの絶滅等の理由により、イノシシによる被害が全国的に増えている。里美地区もその例外ではない。しかし、長い時間をかけて増え続けてきたイノシシの数を即座に減らすことは困難である。

そこで、まずはイノシシの数を減らすのではなく、イノシシの被害をいかにして防ぐかを考えることにする。

問題点

- ・イノシシの数は減らないので、根本的な解決にはならない。

実地にてすべきこと

- ・現場でどのような対策がとられているのかを調べる。
- ・イノシシが里に降りてくる原因を調べる。



OSATO-CHAN

(1) 事前プログラム (前学期後半)

① 募集広報と結果

趣旨と概要を記したチラシ (図 2 資料 1) を、関係各方面にご協力を戴き広く配付すると共に、条件が許す場合は直接説明に出向いた。ご協力を戴いた皆様に、感謝申し上げます。

しかし、残念ながら募集期間を延長したにも関わらず、最終的に参加したのは人文学部 3 名・工学部 2 名の計 5 名に留まった。所属と氏名と所属は、以下の通りである。

- 大里智華・木村帆南・佐藤豊大 (人文学部社会科学科)
- 林翔太 (工学部機械工学科)
- 上野瑛永 (工学部電気電子工学科)

参加者が固まった所で対面のガイダンスを行い、募集チラシに沿って趣旨ならびに参加者に課される諸課題について改めて確認した。

なお、2015 年度前期に担当していた教養科目の授業でアンケート (図 3) を取ってみた所、「参加したいがフィールドワークの日程が合わない」という回答が大きな比率を占めた。同アンケートにおいては、さらに「夏季休暇中で参加可能な時期」を 10 日間単位・複数選択可で尋ねているが、回答は全くバラバラであり、絞り込むことは不可能であった。

また、将来の「自己負担を伴う正規開講」に対する参加意志の有無に関する問いでは、「金銭的理由で不参加」という回答と「日程的理由で不参加」という回答が拮抗した。金銭的理由は織り込み済みであったが、日程設定も思いの外大きな足枷となりそうである。

母集団の小さなアンケートではあるが、注意を要する内容であった。

因みにフィールドワーク共生の森がみにおいては、受入先・テーマによってフィールドワークの日程はまちまちであり、全体として見れば夏季休暇期間を通じて断続的に次々と実施されている。一見、不統一で非効率な感を抱かせるが、母集団が大きいケースでは分散実施が却って現実的であることが分かった。

初年次向けPBL授業試行に関するアンケート 20150626分野別教養科目1年次生・回答総数19)

既にレナンディでお知らせしておりますように、来年度(以降)の正規開講を睨んで、この夏に初年次向けPBL授業の「短縮版試行」を行います。これについて、皆さんの率直な考えをお聞かせ下さい。

今回の試行は、「信じる勉強 疑う勉強」の成績とは関係ありません。その点、ご心配無く。

皆さんのご意見を踏まえて、今後全学の1年次生に向けて募集を行います。そのための調査ですので、くれぐれも遠慮無く率直な所を回答して下さい。

回答は、「**当てはまる物全ての番号に○を付ける**」形をお願い致します。

I :今年度の試行について

1: 参加する	1
2: 参加しないorできない	18

* 以下、2と回答した方のみ回答して下さい。

3:参加しないorできない理由

(1) そもそも地域連携PBL授業の内容自体に魅力を感じない	2
(2) 内容自体には興味があるが、単位なしでは参加する気になれない	6
(3) 参加したいが、期末試験の日程等が気になり参加できない → 4に回答して下さい	11

* 以下(3)と回答した方のみ回答して下さい。

4:今回の試行日程で、フィールドワークがどの時期であれば参加できますか

(1) 8月下旬	2
(2) 9月上旬	4
(3) 9月中旬	4
(4) 9月下旬	5

II :来年度(以降)の正規開講について

将来の<正規開講>では、今回の試行内容を大枠としつつ、「泊二日のフィールドワークを2回」実施することになり、かつ今回の試行でも自己負担の現地での昼食代その他に加えて、宿泊代(泊二日 2食付で6,500円程度×2=13,000円程度)が自己負担となります。単位は2単位です。来年度(以降)に正規開講された場合、もしあなたが1年次生であったら

1: 参加する	6
2: 参加しない	13

* 以下、2と回答した方のみ回答して下さい。

3:参加しないorできない理由

(1) そもそも地域連携PBL授業の内容自体に魅力を感じない	2
(2) 参加したいが、自己負担が大きく、参加できない → 4に回答して下さい	6
(3) 日程が合うなら参加したい → 5に回答して下さい	6

4:宿泊代の自己負担は、「泊二日(2食付)×2回」合わせてどれ位が限界でしょうか

(1) 12,000円	0
(2) 11,000円	0
(3) 10,000円	4
(4) 9,000円	0
(5) その他(円)	8 5 4 千円 各1名

5:フィールドワークがどの時期であれば参加できますか

(1) 8月中旬	0
(2) 8月下旬	1
(3) 9月上旬	3
(4) 9月中旬	5
(5) 9月下旬	2

図 3:アンケート集計表

②目的意識の明確化

参加希望者には、プロジェクト実習履修者と同様に「根力の構成要素ルーブリック」「個人の達成目標ルーブリック」を使用して、「今回のプログラム参加を通じて何を学ぼうとするのか」を明確にさせた。詳細については、第 I 章・図 15・16 ならびに関連箇所の記述を参照されたい。

③現地講師による事前レクチャーと課題提示

構想の初期の時点で、プロジェクト実習 B において常々ご支援を戴いている荷見誠（里川カボチャ研究会代表）・豊田紀雄（一般財団法人・里美ふるさと振興公社総括支配人）のお二方に現地講師をお願いして、ご快諾を戴いた。この時点でフィールドワーク参加予定者に対しては、後日、現地講師のお二方から示される「ざっくりした課題」を、各人が「具体的なテーマ」へと絞り込んでいくための参考資料として、「<ざっくりした課題>から<自分のテーマ>への思考シミュレーション」（図 2 資料 2）を配付した。

その後、現地講師のお二方との何度かの遣り取りを経て、最終的に「レクチャーのテーマ」・「初年次 PBL 試行における取り組み課題」を以下のように定めた。

- ・テーマ：耕作放棄地問題の深刻さと対策の困難さ（対策の前提となるイノシシの害の深刻さを含む）
- ・課題：各人がネット等で収集した情報と現地フィールドワークで得た知見に基づき、当該問題解決の一助となる提案をまとめること。

以上を踏まえ、2015 年 7 月 24 日 5 限にお二方に本学までお運び戴き、人文 A208 教室においてご講義を戴いた。参加希望者全員とプロジェクト実習 B 履修者の代表が出席し、レクチャー後の質疑応答では活発な遣り取りがなされた（図 4）。



図 4: 現地講師によるレクチャー(7 月 24 日)

④事前調査と各人のテーマ設定

事前レクチャーを踏まえて、「具体的にどういうテーマについて提案を行うか・そのために現地フィールドワークで何を調べるか」について、各人の計画を 200 字以上に纏めて、8 月 31 日までにメールで提出するよう求めた。

全員が、期日までに所定の字数を超える文章を提出した（図 2 資料 3）。

⑤テーマの共有

当初予定では「テーマ発表とチーム編成」として、発表会を行い親和性の高いテーマを掲げている者同士をまとめて 5 名程度のチームを最低 2 チーム編成する予定であった。しかし、参加者総数が 5 名に留まってしまったため、発表会・チーム編成共に中止し、上記④の各人の文章を共有させるに留めた。大変残念なことであった。

(2) フィールドワーク (9 月 28 日・29 日)

現地でのフィールドワークは、2015 年 9 月 28 日から 29 日にかけて一泊二日で実施した。プロジェクト実習 B 恒例の「夏季合宿フィールドワーク」と合同での実施である。幸いにして天候にも恵まれ、関係各位のご指導・ご支援の下、当初計画の計画（図 2 2. スケジュール）に沿って滞りなく終了した。詳細は、本章第 5 節に記す。

(3)事後調査とレポート作成（後期前半）

初年次 PBL 試行参加者にとってのフィールドワーク後の課題は、以下の3項目である。以下、順に記述する。

①「個人の達成目標ルーブリック」の完成（8月31日締切）

本節(1)－②で途中まで作成しておいたルーブリックに、全日程を終えた上での結果記述を追加して完成品とし、再提出することとした。全員が締切までに提出した。個人情報に関わる内容を含むため本報告書に掲載することは控えるが、各人、進歩の跡が読み取れる。

②アンケートへの回答（8月31日締切）

事後アンケート（図5）に記入の上、提出することとした。3名は締切までに提出したが、残り2名は再三の督促の後に締切を大幅に超過して漸く提出した（図6）。

図5:事後アンケート質問票（1/4 縮小）

初年次向け PBL 授業試行に関するアンケート	
20151013 鈴木教	
9/28-29のフィールドワーク、お疲れ様でした。お手数ですが事後アンケートへの回答をお願いします。このアンケートは、正規開講を目指して改善点を探るためのものであり、今回の試行は、このアンケートに答えて戴くために実施したと言っても過言ではありません。くれぐれも遠慮無く・率直な所を回答して下さい。	
I：今年度の試行内容について、自らの学びを進めるために「有効だった=5」→「有効ではなかった=1」の5段階から1つ選び、それ以外の番号を消して下さい。	
1:事前準備	
(1)教員による事前広報(アナウンス・趣旨書等)	5・4・3・2・1
(2)思考のシミュレーション(プリント)	5・4・3・2・1
(3)現地講師による事前レクチャー(7/24 実施)	5・4・3・2・1
(4)事前課題 ① ルーブリック作成	5・4・3・2・1
(5)事前課題 ② 活動ゲームメモの作成	5・4・3・2・1
2:フィールドワーク当日	
A:9/28の活動	
(1)プロジェクト実習との合同実施	5・4・3・2・1
(2)ガイダンス①里美地区概要	5・4・3・2・1
(3)ガイダンス②里美ふるさと振興公社の取り組み概要	5・4・3・2・1
(4)里川カボチャの歴史・復元・栽培・商品化に関するレクチャー	5・4・3・2・1
(5)農作業体験	5・4・3・2・1
(6)インシシ被害地ならびに対策見学	5・4・3・2・1
(7)情報交換会①インシシ(不参加の人は「不参加」を選んで下さい)	5・4・3・2・1・不参加
(8)情報交換会②里美牛 (同上)	5・4・3・2・1・不参加
(9)情報交換会③里川カボチャ (同上)	5・4・3・2・1・不参加
B:9/29の活動	
(10)里美牧場・プラトー里美・里美牛に関するレクチャー	5・4・3・2・1
(11)牛舎並びに関係施設見学	5・4・3・2・1
(12)飼料米生産田見学	5・4・3・2・1
(13)有機農園見学	5・4・3・2・1
(14)食肉加工場見学	5・4・3・2・1
(15)古民家(荒蒔瓶)見学とプロジェクト実習の活動紹介	5・4・3・2・1
(16)生産物直売所見学～買物	5・4・3・2・1
3:事後の課題 or 呼びかけ	
(1)事後課題①ルーブリックへの結果記入	5・4・3・2・1
(2)事後課題②事後調査とレポート作成	5・4・3・2・1
(3)プロジェクト実習の催事への参加呼びかけ(参加は任意)	5・4・3・2・1
4:試行全体の総合的な評価	
	5・4・3・2・1
<次のページに続きます>	
ご協力ありがとうございました。	

II：Iでは単純に番号で答えて戴きました。より詳しいコメントがあれば、当該項目の番号を明記の上、自由に記して下さい。(なるべく色々書いて戴けると助かります。必要に応じて、下記記入スペースを拡張して下さい。)

III：来年度（以降）の正規開講について、該当する番号を選んで他を消して下さい。
 正規開講では、今回の試行内容を大枠として「一泊二日のフィールドワークを2回」「2単位」で実施することになります。現地での昼食代その他に加えて、宿泊代(一泊二日・2食付で6,500円程度×2=13,000円程度)が自己負担となります。**来年度(以降)に正規開講された場合、もしあなたが1年次生であったら**
 1: 参加する
 2: 参加しない or 参加できない
 *以下、2と回答した方のみ回答して下さい。
 3: 参加しない or 参加できない理由 **(該当する全てを選んで下さい)**
 (1) 参加したいが、上記金額で自己負担が大きく、参加できない →4に回答して下さい
 (2) 日程が合うなら参加したい →5に回答して下さい
 (3) 試行に参加してみたが、地域連携 PBL 授業の内容自体に魅力が感じられなかった
 (4) その他(**必要に応じて記入スペースを拡張して下さい**)

4:自己負担の大部分を占める宿泊費は、「一泊二日(2食付)×2回」合計でどれ位が <限界>でしょうか
 (1) 12,000円 (2) 11,000円 (3) 10,000円 (4) 9,000円 (5) その他(円)

5:フィールドワークがどの時期であれば参加できますか、**(該当する全てを選んで下さい)**
 (1) 8月上旬 (2) 8月下旬 (3) 9月上旬 (4) 9月中旬 (5) 9月下旬

IV：今回の試行に参加した経験を踏まえて、学生が参加しやすく・学習効果が高い授業にするために「こういう所をこういう風に改善すべき」「こういう内容を追加すべき」という指摘/提案/アイデアを記して下さい。どのようなものでも構いません。遠慮なく・なるべく沢山書いて下さい。(必要に応じて、下記記入スペースを拡張して下さい。)

図 6: 初年次 PBL 試行参加者 事後アンケート集計結果

質問Ⅰ: 項目別の有効性評価

1 事前準備

	5	4	3	2	1
(1) 教員による事前広報(アナウンス・趣旨書等)	2	1		2	
(2) 思考のシミュレーション(プリント)	3	2			
(3) 現地講師による事前レクチャー(7/24実施)	2	3			
(4) 事前課題① ルーブリック作成	2	1	2		
(5) 事前課題② 活動テーマメモの作成	3		2		

2: フィールドワーク当日

A 9/28の活動	5	4	3	2	1	不参加
(1) プロジェクト実習との合同実施	3	1	1			
(2) ガイダンス① 里美地区概要	4		1			
(3) ガイダンス② 里美ふるさと振興公社の取り組み概要	4		1			
(4) 里川カボチャの歴史・復元・栽培・商品化に関するレクチャー	4		1			
(5) 農作業体験	4			1		
(6) イノシシ被害地ならびに対策見学	4		1			
(7) 情報交換会① イノシシ(不参加の人は「不参加」を選んで下さい)	2	1				2
(8) 情報交換会② 里美牛 (同上)	2					3
(9) 情報交換会③ 里川カボチャ (同上)	1					4

B 9/29の活動	5	4	3	2	1
(10) 里美牧場・プラトー里美・里美牛に関するレクチャー	4		1		
(11) 牛舎並びに関係施設見学	4	1			
(12) 飼料米生産田見学	4			1	
(13) 有機農園見学	4		1		
(14) 食肉加工場見学	3		2		
(15) 古民家(荒蒔邸)見学とプロジェクト実習の活動紹介	3		1	1	
(16) 生産物直売所見学～買物	4			1	

3 事後の課題or呼びかけ	5	4	3	2	1
(1) 事後課題① ルーブリックへの結果記入	4	1			
(2) 事後課題② 事後調査とレポート作成	4	1			
(3) プロジェクト実習の催事への参加呼びかけ(参加は任意)	4	1			

4 試行全体の総合的な評価	5	4	3	2	1
	4		1		

質問Ⅱ: Iに関するコメント(無回答1名)

- 1-(1) 広報に関してですが、前期、金曜日5限で私はこの試行について知りましたが、今回いっしょに参加した木村さんは私が伝えなければおそらく知らないままだったと思います。そう考えますと、少々広報の押しが弱かったのでは、と思います。もちろん、色々あったこともわかりますが、試行の内容はすごくためになるのに、存在を知らない人たちが多いのは残念だと思います。(拙い文章で申し訳ありません)
- 1-(3) 事前レクチャーより前にテーマ設定をすべきだった。現地講師がどんなテーマを望んでいるかも、より深く話し合えればよかった。
- 1-(4) 私は常にルーブリックを意識し続けられなかった。
- 2-(14) あまり驚きがなかった。
- 2-(15) ほかの地域の古民家と異なる特徴があれば、説明してほしかった。
- 4 新しい物事を作り出すためのテーマ設定や調査方法の難しさについて学ぶことができ、とても有意義だった。

*里美のさまざまな施設や農場見学を通して、地域振興の最前線のリアルな現場を知ることができ、非常に有意義な学習の時間になった。

しかし現場で知ることが多く、事前レクチャーでは個人のテーマの規模・具体性が把握しにくかった。私の場合、事前テーマが抽象的で規模も大きく、また“里川カボチャ（ピンク色の希少性）の生産”という点に依存した案は、農場見学にて不可能であると判断できた。まったく違う観点から考えなおす必要があったが、合宿でのレクチャーで、講師の皆さんのお話から、考えるヒントをいただいた。事前テーマの設定には、少しも現場の状況が把握できていないと難しいだろう。しかし『鳥獣被害』、『観光』、『特産品』などの観点から里美を考える切り口になった事前レクチャーは非常に有効であった。

・現地に赴き、地元の人々話を直接聞いたのはとても良い経験になったと思う。だが、全体の内容としては勉強しにいったというよりは、観光しにいったという感じであった。参加する側のやる気よる所も大きいですが、課題がもう少し明確に与えられてもよいのではないかと思う。

*また、現地で調査することを事前に考え、レポートにまとめたが、今回の日程では、人によっては自分の調査しようと思っていたことが、調査できなかったのではないかと思う。もう少し自由に動ける時間を設けてもよかったと思う。

宣伝についてであるが、私はフランス語の授業で神田先生からクラス全体に対して宣伝していただいて、この試行のことはじめて知った。知人に紹介しても、この試行のことを知っているという人が一人もいなかった始末である。掲示板に掲示する以外に、いくつかの授業の始まりに宣伝しても良いのではないかと思う。実際、茨城学では、そういった宣伝を授業前に行っていることがあるので、検討する価値はあるのではないだろうか。

質問Ⅲ：正規開講時の履修を巡って

参加する：1

参加しない or できない：4

理由（複数回答可）：

(1)予算：3（上限は 10,000 円：2 5,000 円：1）

(2)日程：2（8月上旬：1 9月下旬：2）

質問Ⅳ：試行を踏まえての意見（無回答1名）

*何よりも人と人があって話し合いをするのが大事だと思ったので、参加した学生同士であつまる機会を自主的なものだけでなく、PBLとして設けていただけたらより質の高いPBLになるのではないかと思いました。

*テーマ設定を、学部によらず自由にするべき

まず自分でテーマを考えた後に、学生たちでどんなテーマがあるのか意見交換やできる範囲で協力する機会を設けるべき

ルーブリックの活用：フィールドワーク当日に自分の弱みを意識するために、ルーブリックを用いて、自らの改善点を発表する。

*国立大学に通う学生＝おそらくほとんど苦学生と考えて

お金の問題は大きいので、費用を見て勉強する機会を減らしてしまうのはもったいない。

短時間で現場の人と自分の理解を深めることは難しいので、継続的に活動をする必要がある。

*Ⅱでも記述したが、ざっくりとした課題だけでなく、明確な課題もいくつか与えられると良いと思う。また、今回、5学部合同にするための試行であるという説明を受けたが、合同にした意図があまり感じられなかった。こうした方がいい、という具体的な案は特に思い浮かばないが、せっかく5学部合同なのだから、その場でしか出来ない何かが出てくるはずである。

もう一点、宣伝についてであるが、内容自体はとても魅力的であるので、広く宣伝すれば必ず人は集まるはずである。何か方法を模索するべきであると思う。

今回のアンケートは、母集団が極端に小さくなってしまったため、統計処理をして何らかの方向性を見出そうとするには無理がある。一方で、個別の見解には注目すべき点も多い。具体的な事柄については、本章第6節を参照されたい。

③レポート作成（11月30日締切）

フィールドワークでの知見に事後調査を加えて、提案書（800字以上）に纏め、11/30までにメールで提出」することとした。3名は締切までに提出したが、1名は再三の督促の後に締切を大幅に超過して漸く提出した。1名は遂に提出せずじまいであった。以下に、提出されたレポートの全文を掲載する（図7）。なお、編集に当たり若干体裁を修正していることをお断りしておく。

図7:事後レポート

駆除と猟

15l2039h 大里智華

はじめに

七月に荷見氏達から話を伺い、獣害についての課題を受け、筆者は最初に狩猟の面から考えてみようと思った。実際に、里美地区に伺い、見聞きした上で狩猟と駆除はひと続きであると考えた。そのように考えた経緯を説明するため、以下のような順序で報告を行う

- 1、イノシシとイノブタ
- 2、駆除
- 3、狩猟

1、イノシシとイノブタ

獣害とは言っても種類は多々ある。そのなかで、今回里美地区で取り上げられたのはイノシシ害であった。そのイノシシにも二種類いる。一種類目は古くからいるニホンイノシシであり、もう一種類はそのイノシシと野生化したブタが交配したイノブタである。ふたつは同じ種類の動物であるが、違いを二つ上げる。

一つ目は繁殖である。ニホンイノシシの方は、年に1～2回の出産で、平均で4.5頭産む。イノブタの方は、イノシシの5倍の繁殖力があり、年間20頭ほど出産する。（注1）

二つ目は、味である。ニホンイノシシの方は臭みが強く、あまり食すには適さない。

2、駆除について

猟友会の方にお話を聞いた。その方々は、年に4回銃器による駆除をしていて、その他年間を通して罠を用いて捕獲し駆除していると言った。また、罠は猟友会で設置するが、一般の方々も罠に関する資格を取れば制作できる。設置時は山の持ち主に掛け合う必要がある。

3、狩猟について

猟友会に所属することで解禁されると所属するグループで活動することができる。狩猟をするには、きちんと狩猟用に訓練された犬と銃等が必要である。もちろん、銃を打つため、ライセンスや許可も必要である。里美地区では肉を欲して千葉や土浦から猟にくる人もいる。

また、猪は一頭一万の補助金が出るが、東関東大震災時の原子力発電所の事故により猪を売ることはできない。

猟友会の方に聞いたところ、それは趣味であり小さなものは見逃す、大きすぎるものは深追いしないなど所属グループにより考え方が違うようだ。

考察

里美地区での獣害が減少しない理由は猪が減少しないからである。その猪が減少しないのはその繁殖力の強さ故の出生率と死亡率が見合わないからだと筆者は考える。

狩りをする人が減少しているのは事実であるが、狩りをする目的が“趣味”であり、対して駆除はだけ

さに言えば駆逐が目的であるため、目的が一致せず減少しないのである。

また、猟友会に所属する者に限らず、一般の方も罠を設置できるが、猪の習性を熟知できなければ意味を成さないという点もその原因に入るのであろう。

結論

狩りの観点から猪を考えると狩りすぎるとは、趣味がなくなり楽しみが減ってしまうことであり、農家は駆除したいという意思がある。その二つの考えを統合させる、もしくは統合しなくても二つの考えが少しずつ妥協しひとつの目的に向かう必要があると筆者は考える。

提案

それを踏まえて筆者は、農家の方が猟友会に所属することを提案する。そう考える理由をいかに述べる。

上で述べたとおり、駆除と狩りには決定的な違いがある。そして農家の方と狩りをする人の認識、持っている知識にも違いがある。それぞれに良い点があり、欠点があるのであるから、それを共有すべきである。そういった場を設けるとなったとき、猟友会にそういった場を設け、そこに農家の方が所属することで自然と猟友会と交流ができ情報も共有できる。

情報を共有するだけならば、猟友会に所属することはないだろうが、狩りをする方の人数や効率などを考えたとき猟友会を基にするのはとてもやりやすいと考える。

以上の理由を元に筆者は農家の方が猟友会に所属することを提案したい

参考:Web

なっとく！！2つの違い辞典 イノシシとイノブタの違い <http://lance3.net/chigai/z0062.html>

里美レポート

15L2069G 木村帆南

はじめに、合宿を通して見えた里美の現状についてである。里美の地域振興に積極的に取り組んでいる方々の活動を知った。特に里川カボチャや里美牛などの特産品に力を入れていた。またそれに対して、「市が積極的でないのではないか」、「ただ補助金を出すだけでは根本的な解決にはならないのではないか」など市との連携がうまくいかないとの意見が在った。

合宿前に作成した事前テーマについて、合宿で学んだ事をふまえて、現状をまったく把握しきれずに考えてしまった点が多くあったことに気づいた。作成したテーマは「ピンク色の里川カボチャ」の希少性に依存した内容であったが、ピンク色のカボチャは県内のスーパーに出回るには少ない収穫であり、またピンク色のカボチャの収穫できる量は安定していない。ブランド化のためには、生産力の向上と認知度を高める必要があるだろう。

新しい提案とはいえないが、ふるさと納税をしたいと考える人の数を増やすために、情報発信に力を入れるべきである。ふるさと納税とは「所得税の納税義務者が都道府県又は市区町村に対し寄附をした場合に支出寄附金のうち2千円を超える部分について、一定の上限までは、原則として所得税・個人住民税から全額が控除される」という仕組みである。合宿時のお話の中で「里美のふるさと納税は評判が良い」ということから、SNSを用いた情報発信をこまめにするすることで、里美の有益な情報が拡散される機会も増えるのではないかと考えた。また、常陸太田市は現在、デザイナーを呼び、地域の人々との交流の場を提供している。常陸太田の特産品の商品パッケージのデザインも彼らが手がけていることもある。このような市の活動とリンクさせながら活動が行うことが可能であれば、里美の地域振興の進歩につながるのではないかと考えた。

いのしし被害の対策については、ボランティアの協力を得ることを考えたが、猟友会の皆さんと、被害を受けた農家の皆さんの立場を理解し、それは実現できることではないと判断できた。

「一般人でもできることはないのか」となると、耕作放棄地の手入れ（草刈）だ。そこで協力を募

る際、ボランティアを呼ぶ機会も、里美の地域振興に大いに利用できるのではないかと。人が集まれば里美の特産品を知ってもらえ、ボランティアというよりはイベントのような空気がつくれるなら、また参加したいと思う人や参加者のつながりで新しく参加者が増える機会も増えるのではと考えた。

二日間の里美見学を通し、自分の考えや地域振興の問題点、猟に関する二つの視点の違いなどさまざまな角度から里美の地域振興について考えることができた。知識不足な点が目立つが、地域について学ぶ機会を得ることができ、非常に勉強になった。

プロジェクト実習報告書

15L2107N 人文学部社会化学科一年次 佐藤豊大

私が初年次試行 PBL である 9/28、29 の合宿に参加させていただいたことの報告をさせていただきます。

まず、私が耕作放棄地、イノシシ問題について現地に赴く前に考えていた問題解決策とそのためにより現地で調べなくてはならないことが以下のとおりである。

【新しいヒット作物を植えること、もしくは新しいヒット家畜を育てることによる、耕作放棄地の有効利用、減少】

そのために現地にて調べること

- ・耕作放棄地の面積・分布
- ・過去の栽培データによる優良作物の選定
- ・選定した作物を育てるに必要な人件的、金銭的コストの試算
- ・牧場で飼育されている動物の種類、流通量、用途、価格
- ・里美地区の労働人口の推移、要因

また、耕作放棄地の増加、イノシン被害等それぞれの本質的な問題は、人口の減少にあると推測する。新しい作物、家畜を育て、里美地区のヒットブランドとし、里美地区の知名度をあげるにより、人口減少に歯止めかけることで問題の根本的解決にあたる。

また、現地にて学んだことは、最終ページの現地でのメモにもあるとおり

- ・里美地区行政目線での紹介
- ・里美地区の歴史
- ・基本的な地理
- ・地域おこし活動
- ・農作物、家畜生産の変遷・現在
- ・振興公社さんでの取り組み
- ・里川カボチャのお話
- ・イノシシ猟について
- ・牛肉加工場見学
- ・実際に荒らされた水田の見学
- ・牧場見学

など常陸太田市里美地区の概要から里美地区振興のための取り組み、里美牛加工現場、過疎化問題やイノシシ害の実態など現場でしかわからない情報まで幅広く教えていただいた。

現地に赴いて様々なことを学んだ後、里美地区の問題解決として新たに以下の事を提示する。

「里美牛・里川カボチャでの地域おこし、財政確保、人口増加を行い、里美地区の興隆」

このような結論にいたった理由としては

- ①新商品として里美牛・里川カボチャが既に存在していた。
 - ②耕作放棄地を、カボチャ用農地、牧場用農地、家畜用飼料米用農地としての転用が期待できる。
- の二点がおおきい。

私がかもとも提示した。「新しいヒット作物、新しいヒット家畜」ですが、実際に現地に赴いてみる既に同様なことを里美の方々が取り組んでおり、それが正に里川カボチャ・里美牛であり、そこに新たなアイデアを考えるというよりはそれらの商品をどういうアイデアで販売するか、どこに販売するかなどマーケティングの方法を考える形で里美地区の振興に繋がるのではと思ひ、解決策をこちらに転換した。

また、耕作放棄地、・イノシシ対策についてであるが、現地にて行っている取り組みやこれからの展望を考えると里川カボチャ・里美牛を里美地区の基幹産業として軸に置き、それらのための農地として耕作放棄地を活用したほうが土地を有効に活かせる。

また、飼料米としての土地利用であれば早急に土地利用ができ、土地を死なせることを防ぐための緊急措置として取れるのではないか。

しかし、基幹産業としてまだ不安定な商品をブランド化して基幹産業かするには大きなリスクもあるのではという懸念もあるが、里美の方々は決死の覚悟をもって里美牛や里川カボチャでの地域おこしをしている現状がうかがえた。簡単どころでも私たち学生がお手伝いすることができることは若者ならではの斬新な商品開発アイデア、SNSをはじめとする広報活動がある。プロジェクト実習という形でも学生が里美に関わる機会があれば、役に立てるのではないかと感じた。

里美 PBL レポート

— 動物による畑への侵入対策 —

～イノシシ対策を前提とした耕作放棄地問題の深刻さと対策の困難さ～



イノシシに荒らされた飼料米畑

工学部 電気電子工学科
15t3011t 上野瑛永

I：行動日程表

<本章・図2と重複するため、編者の判断で省略した>

II：事前課題

1：現地での活動計画作成

「里美 PBL 行動計画」

事前レクチャーにおいて、イノシシと豚の交配種であるイノブタは繁殖力が強く、地域の駆除が追いつかないと聞いた。そのため、イノシシを駆除するよりも、先ず優先的に被害を減らす方法を思案する。里山では、農耕地を荒らすイノシシやイノブタによって田畑を荒らされる被害に悩んでいる農家が少なくない。しかし、単に電気柵を設置するだけでは飛び越えたり、つき破ったりしてしまうため何か改善策を講じなければならない。また、先の電気柵の漏電による死亡事故のニュースを受け、人間への安全面も考慮しなければならない。さらに適宜、電気柵以外のよい方法(音、におい、光等)があれば上手く取り入れたい。

具体的テーマ：「イノシシが農耕地や住宅へ侵入することを阻止する電気柵の改良,新しい設置法等の考案」

2：フィールドワークで調べるべきことのリストアップ

- i) 現地の住民は、現状でイノシシを駆除しきれると思っているかどうか、できないならばどうすればいいと思うか、または、できない理由は何かを調査する。
- ii) どんな動物が畑を荒らし、どの作物が狙われやすいのか調査する。
*イノシシの被害を優先して調べる
- iii) イノシシが家宅に侵入しないように取っている対策を調査する。
- iv) 電気柵等の鳥獣から畑を守ることにかけることのできる費用を調査する。
- v) 農家同士でうまく連携がとれるか、とれているかどうか調査する。
- vi) 事前に電気柵の設置法をインターネット等で調べ、実際にどう使っているのか調査する。
- vii) できる限り地域の方々と話し合いながら、電気柵の改良、設置の案をまとめる。

III：活動のまとめ

1：はじめに

私は9月28,29日の二日間、里美 PBL(課題解決型学習)に参加した。参加理由は、PBL 活動に参加し、少子高齢化の進む農村がどのような対策を考えているか、その実状を見てみたかったこと。また、普段から農業について考えることがないので、何がよい対策となるか、自分で課題を設定し農業を考えるきっかけとしてよい機会になると考えたからである。

2：活動結果

行動計画で示したように、今回の活動では、イノシシが畑を荒らさないようにする方法として、電気柵を主軸に対策を考えることにした。実地研修でどのような対策をしているか見聞きして、感じたことを以下にまとめる。

今回の活動まとめ

- (1) 鳥獣対策にかかる費用。
- (2) どのような方法で畑を守るか。
- (3) 農家同士のネットワーク(つながり)。

(1)鳥獣対策にかかる費用

①電気柵：

それ自体の費用の他に電気代とこまめな草刈りが必要。



②メッシュ柵：

物にもよるが、畑に使われていたものは400m長さで約15～20万円かかり、5年はもつという。



③トタン柵：

メッシュ柵と同様に大きな畑を囲むためには値段がかかる。

電気柵は草刈りが必要になってくるので、メッシュ柵やトタンに比べて管理の手間がかかる。メッシュ柵やトタンは短期的に見ると費用が掛かるように思われるが、5年は持つのでそこまで大きな負担という風ではなかった。



(2) どのような方法で畑を守るか

実地研修にて、イノシシ対策には電気柵、メッシュ柵、トタンが使われているのを見た。中には防虫剤をぶら下げ、忌避剤として用いている畑もあった。事前にインターネットで、電気柵とトタンを使い2重に柵を張る方法もあったが、そのような方法をとっている畑はなかった。お金と手間が掛かるからだと考える。私はお金と大きな手間をかけずによい柵がないかと、実用的で簡単だと考えた方法として、木の杭とブルーシートを使って柵を作る方法を農業従事者の方に提案してみたが、ブルーシートは軽いうえに風を受けるので、風の強い日に飛んで行ってしまおうと言われた。今回の研修で見聞きしたことから判断すると、電気柵の改良を考えるより、草刈りの手間が掛からないメッシュ柵かトタンが良いように思えた。

(3) 農家同士のネットワーク(つながり)

集落共同で柵を造る場合、市からの補助金が多くもらえる。しかし、どの種類の柵にするか

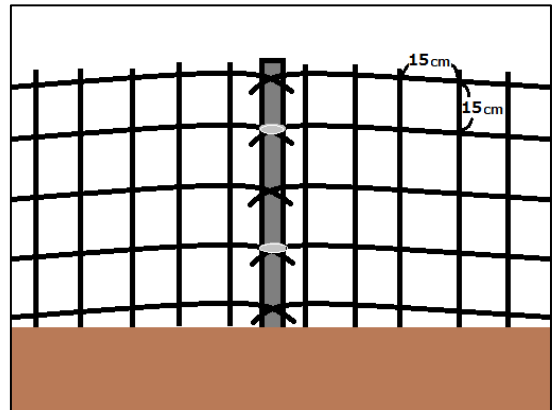
人によって好みが異なっていることや、他の人と関わることを避けたい人もいるので、実際に農業従事者同士で深く関わりあっているようではなかった。

私の意見として、農業従事者で助け合うことが、これからの農業に欠かせないと考えている。なので、スマートフォンが普及していることを利用し、SNS などを使って他地域との協力関係を築き、情報交換などを行い助け合うことは獣害から農業を守る方法の1つとして良いと思った。

最後に、農業従事者の方からメッシュ柵の張り方を教わったので書いておく。

柵は 15 cm角のものを使う。柵と柵の堺の支柱には、ビニールハウスの鉄骨を使い、グラインダーを使い 1m20 cm程度の長さで切断する。そして、柵と柵の端を重ね合わせワイヤーを使い、安定するように支柱に括り付ける。

これらをイノシシに掘り返されないよう、支柱の鉄骨を地中 30 cm埋める。



IV：事前、事後調査

1：イノシシの特性

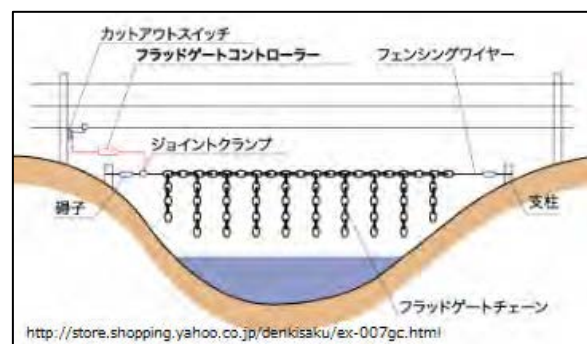
地面を掘り返す能力に長けており、力が強く 60~70 kgの物も持ち上げる。泳ぎが得意。昼夜問わず活動する。助走をつけると 1m ほどの高さなら飛び越える。最初は危険だと思っていた物が安全だと分かたり、慣れたりすると、平気で畑に侵入する。豚との交配種であるイノブタはイノシシの食べなかった野菜や牧草を食べるようになり、繁殖力が強い。

2：獣害対策に使える方法

柵/ネット/爆音機/ディストレコール(動物の悲鳴)/センサーライト/花火/ラジオ/案山子/CD/テキサスゲート/フラッドゲート など



テキサスゲート



フラッドゲート

3：ワイヤーメッシュを利用した防護柵の設置方法(1)

- (1)ワイヤーメッシュを用いた柵は、上部30cm を外側に20 ~ 30 度折り返した「しのび返し」が効果的であり、角材を使って簡単に加工が行える。
- (2)ワイヤーメッシュは、既存の建築資材のものではなく、線径4mm, 10cm 格子のものを用いることが重要である。(※線径2.6 ~ 3.2mm が一般的な規格)
- (3)設置の際は、金網は縦の鋼線が上に出ている方を柵の外側にすることが重要である。また、2 枚のワイヤーメッシュをつなげる際は、10cm 程度重ねて設置する。さらに、アンカーは長辺を上にして

斜め45 度に打ち込むこと等がポイントである。

(4)設置の後、ほ場外側の草刈を行って管理道を作るなど、設置後も定期的な管理を続けることが大切である。

V：反省点

自分が実現可能な範囲でテーマを設定するべきで、行動計画が少し雑だったかもしれない。今回の場合、電気柵を考えるというより、獣害対策の実状を知るのみに留まってしまった。また、電気柵を作る知識もなく、企業も電気柵を作っていることを考えれば、もっと別のテーマを選ぶべきだったのかと思っている。初めての研修だからこそ、新しいことを考える前に、もっと深く実地の実状を知らなければならぬと思った。できる範囲で他のメンバーと協力できればよかったと思った。

VI：里美 PBL の感想

そこらじゅうの畑がイノシシに荒らされていると思っていたが、思った程荒らされていなかった。新しいことは、一朝一夕では産み出せないが、そのための行動の早さと準備の大切さを思い知った。また、今回の自分の様子から、再び似たような機会があったとき、どのようにテーマ設定をして行動すべきか、よい参考になるので参加して良かった。

○参考・引用

(1)茨城県・「集落の守り方と防衛策の設置」・記載日不明

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/econou/eco/documents/2-1.pdf>

(2)・危険生物MANIAX・「ニホンイノシシ」・2014年

<http://inoshishi.etc64.com/>

(4) 報告会

報告は、当初よりプロジェクト実習 B の現地報告会で行う予定であった。しかし、今年度の現地報告会は、諸般の理由で当初アナウンスしていた 2015 年 12 月 12 日ではなく、2016 年 1 月 31 日に変更することとなった。2 月 1 日からは学期末試験週間という、初年次生には甚だ酷な日程となってしまったのである。

正課外の初年次 PBL 試行への対応を強制して、成果授業の学期末試験対策に悪影響を与えることはできない。教育改革推進経費申請書に記した計画とはズレが生じてしまうが、やむを得ず、参加者による報告は諦めて担当教員が代行することとした(図 1)。試行に参加してくれた学生達にも、ご支援下さった地域の方々にも、大変申し訳ないことであった。

5: 初年次 PBL 試行・プロジェクト実習 B 夏季合宿 合同フィールドワーク

初年次 PBL 試行の現地フィールドワークは、プロジェクト実習 B 恒例の夏季合宿フィールドワークと合同で実施した。初年次 PBL 試行からは参加者(本章 4-(1)-①)全員、プロジェクト実習 B からは以下のメンバーが参加した。

千葉美香・星野由季菜(人文学部人文コミュニケーション学科 4 年)

井上紗希(人文学部社会科学科 4 年)

南陽子・箭内淳美・山口未来(人文学部社会科学科 3 年)

大枝俊貴(人文学部人文コミュニケーション学科 2 年)

なお、「合同実施」の意図する所については、本章第 3 節「設計理念」の(7)を参照されたい。

9月28日

(1) 現地への足

里美地区でのフィールドワークに当たっては、従来、大人数の際は常陸太田市よりバスを出して戴き、少人数の際は筆者がレンタカーのワゴンを運転するという形を採って来た。今回は前者に相当するが、偶々市のバスが修理中であったため本学のバスを利用した。昨今、学外活動を伴う授業の増加により大学バスの予約はタイトになりつつあるが、今回は幸いにも確保することができた。

バスは本学水戸キャンパス―水戸駅北口周辺（银杏坂）―常陸太田市役所前で、順次参加者を乗せながら現地に向かう。本学出発時の様子を図8に示す。



図8: 今回の足は大学バス

(2) ガイダンス (10:30～11:30・里美ふれあい館・図9・10)

①常陸太田市役所里美支所統括・白石栄里様より、常陸太田市里美地区の概要と課題についてご講義を戴いた。

②里美ふるさと振興公社総括支配人・豊田紀雄様より、中山間地域の生き残り策としての6次産業化策とその実現に纏わる各種状況についてご講義を戴いた。具体的には以下の5点であった。

- a : 「里美牛」ブランド新設に纏わる事柄
- b : 里美牛加工品の開発と販売戦略
- c : 有機農法による農産物生産の経緯と現状
- d : 里美ヨーグルト・里美ジェラートの開発経緯と現状
- e : イノシシ問題・耕作放棄地問題



図9: 白石様によるレクチャー



図10: 豊田様によるレクチャー

(3) 里川カボチャのレクチャー・昼食・農作業体験 (12:00～14:30 荷見家・図11・12)



図11: 里美食材の昼食



図12: 荷見様のご指導で農作業体験

里川カボチャ研究会会長・荷見誠様より、在来種里川カボチャの復元と生産、商品開発についてご講義を戴き、奥様のお料理になる里美食材の昼食を戴いた。その後、荷見家の農地をお借りして学生達が栽培している里川カボチャの畑で短時間ながら農作業（除草）を体験した。

(4) イノシシ対策ならびに被害の現状見学

(14:30～16:30 里川コミュニティーセンター並びに里川町内各地・図 13-16)

同じく荷見様のご指導により、まず里川コミュニティーセンターにてレクチャーを戴いた後、生産農家様をお訪ねして、イノシシ対策（メッシュ柵・トタン柵・電気柵・ナフタリン等）並びにイノシシ被害を受けた農地・休耕地並びに耕作放棄地の現状を見学した。本物のイノシシの足跡や、収穫間際で踏み荒らされ掘り返された農地の現状を直接目にしたことは、学生達に大変強いインパクトを与えたようである。



図 13: 里川コミュニティーセンターでのレクチャー



図 14: 里川カボチャの生産農家・佐藤様と



図 15: 収穫間際でイノシシに荒らされた水田



図 16: おっかなびっくり電気柵に触れてみる

(5) プラトー里美 (<http://www.satomiful.jp/plateau/>) について

今回、宿舎として利用させて戴いたプラトー里美は、里美牧場の一角・標高 780m の位置にあり、真夏でも快適な高原の宿である。このため、小中学校の夏休み期間には全 15 室・定員 60 名の施設でも予約が取りにくいという活況を呈するが、他の 3 シーズンの利用者をいかに増やすかが課題となっている。

しかし、大規模な投資を要するハードの整備は昨今の社会情勢に鑑み現実的ではない。現在、既存の天体観測施設を活用して実施されている星座観測会のような、ソフト部分での工夫が重要になる。プロジェクト実習にとって格好のテーマであり、状況が許せば取り組んでみたい課題である。

また、将来初年次 PBL が大規模正規開講に至った際には、里美地区での宿泊施設の確保が課題となる。里美地区には数軒の温泉宿が存在するが、授業の一環として学生が自費で宿泊するには費用面でのハードルが高い。山形大学「フィールドワーク共生の森もがみ」でも活用されている民泊は、宿泊費の値頃感に加えて地域の方々とのより深い交流が可能になるというメリットが大きく、初年次 PBL に最適の宿泊施設と言えるが、里美地区においては受け入れのキャパが限られるという制約がある。

小中学生が去った後の・9月のプラトー里美は、頼もしい受け皿となってくれるに違いない。

(6) 夕食・個別課題に関する質問会 (18:00～21:00 プラトー里美・図17・18)

宿舍到着後、入浴等の後、待望の夕食となった。豊田様ならびにプラトー里美支配人・石山徳男様のご配慮により、里美牛をメインとした・男子学生にとってもボリューム十分のおいしいメニューを戴いた。また、連携している茨城県立水戸農業高等学校様より、里川カボチャを使ったジェラートの試作品(第IV章・図22-②スライド17枚目)のご提供を戴き、夕食時に全員で試食した。評判は上々であり、今後の製品化に向けて活発な遣り取りが行われた。

質問会の冒頭で、学生一人一人が本日の学びについて一言ずつ報告するコーナーを設けた。その中で、メディア文化コース所属の学生(プロジェクト実習B履修生)による「電気柵での事故死報道で、電気柵は危険なものと思っていた。実際には家庭用電源をそのまま用いたが故の事故であり、通常用いられている乾電池式のもの、冬場の静電気のようなレベルで触れても危険はないことが分かった。将来メディア方面への就職を考えている者として、報道の仕方について考えさせられた。」という旨の発言が印象に残った。第三者には直接関係しないと見える、「中山間地でのフィールドワーク」と「自らの専攻・将来計画」とを、学生はそれぞれに融合させつつ学んでいくことができるという好例であろう。

次いで、里美地区で実際にイノシシ駆除を担当されている里美地区捕獲隊の後藤武巳様・鈴木修様より、駆除活動の現状についてレクチャーを戴いた。

その後さらに、荷見様・豊田様・後藤様・鈴木様にご対応戴き、昼間の学習を踏まえてのより詳しい質疑応答を行った。「イノシシ対策」「里美牛」「里川カボチャ」のテーマ別に3つのテーブルに分かれて、学生は自らの興味関心に従って自由に行き来して質問させて戴くという形式を採った。

当初は夕食時間プラスアルファで90分程度を予定していた。しかし、学生達の質問は尽きず・また講師の方々も当初お伝えしていた終了予定時刻を遥かに超過しても積極的にご対応下さった。結果的に質問会は予定のほぼ二倍の長時間に及び、これまでになく踏み込んだ遣り取りをさせて戴く事ができた。



図17: 後藤様・鈴木様によるレクチャー



図18: 3テーブルに分かれて、個別の質問会

9月29日

(7) 里美牧場とプラトー里美に関するレクチャー

(9:30～10:30 プラトー里美・図19)

豊田様より、里美牧場ならびにプラトー里美の歴史と現状についてご講義を戴いた。育成牧場の閉園・リゾート開発の頓挫によるプラトー里美の孤立等、文字通り存続の危機を迎えている現状と、現在ドラスティックに進められている機構改革・人事改革の状況を伺った。「既得権を奪われる人々からは大いに恨まれる。しかし存続のためには断固として改革を進めねばならない」との言は、学生は勿論、筆者にとっても心に響くものであった。



図19: プラトー里美でのレクチャー

(8)肉牛生産施設見学 (10:30~11:30 里美牧場・図 20-23)

豊田様ならびに同施設副支配人・鈴木修様のご案内により、肉牛生産施設（飼料調合施設・成牛牛舎・繁殖牛舎・放牧地等）を見学した。飼料と肉質・生産サイクル・衛生管理等、里美牛を支える現場の状況について、実地にレクチャーを戴いた。

大型獣に間近に接することの恐怖感、否応なく漂う糞尿の臭い、蠅等、当節の学生（特に女子学生）には抵抗感が強いかと懸念したが、学生達は「そこも見なければ勉強にならない」と、積極的に見学していた。教員としては予想外の頼もしい反応であった。

なお、筆者が、昨今イノシシ対策として山林と農地の間に牛の放牧帯を設けて成功している事例があることを挙げ、里美での実現可能性についてお尋ねした所、里美のイノシシは牛舎に入り込んで牛の餌を食べているという状況であり、効果は期待出来ない旨のお返事を戴いた。一般に喧伝されている成功例が、個々の現場で常に成功する訳ではないことを改めて思い知らされ、よい経験となった。



図 20: 飼料調合施設でのレクチャー



図 21: 調合を終えた飼料



図 22: 繁殖牛舎前にて



図 23: 一見、牛盗人・本人は真剣

(9)飼料米生産田見学 (13:00~14:00 折橋町・図 24)

豊田様、ならびに実際に栽培を担当しておられる里美ふるさと振興公社の高星雅利様・興野馨様のご案内で、里美牛用の飼料米（ホシアオバ種）生産田を見学した。昨年度はイノシシ害で壊滅的な打撃を受けたこと、今年度は予算を投入して広範囲に電気柵を設けて生産していることを伺った。広大な水田を電気柵で一気に囲むことは多額の予算を要する。電気柵に沿って延々と続くイノシシの掘り返し跡は、電気柵の有効性を雄弁に物語っていた。しかし、最近のイノシシは電気柵も突破する智慧を付けつつあるとのご説明を伺い、生産者のご苦勞の一端を窺うことが出来た。



図 24: ホシアオバ種の水田と電気柵
(足元の白線内が、イノシシによる掘り返し跡)

また、通常の食用米（コシヒカリ種）との交雑を避けるためにわざと一ヶ月遅れで生産しており、その分収量が落ちること等のご説明を戴いた。折良く、見学の時点でコシヒカリ種は既に黄色く色づき始めており、まだ青々としているホシアオバ種との差異が一目瞭然であった。

(10)有機農園見学（14:00～14:30 大中町・図25・26）

引き続き、豊田様・高星様・興野様のご案内で、里美ふるさと振興公社の有機農園「里美ふるさと農園」を見学し、レクチャーの後、短時間ながら大根の間引き作業を体験した。

もとは河川敷であった場所に、里美牧場から牛糞を運んで開墾した経緯、土作りの苦勞、無農薬・減農薬栽培ゆえに必然的に発生する虫害と、消費者の無理解（産品に虫がついている、というクレーム）等々、関係者のご努力とご苦勞を詳しく知ることができた。町育ちの学生達には、「畑の土はただの地べたではない。長年に亘って労力を投入して作り上げる財産であり、農業の根幹をなすものである」という事実は新鮮であったと思う。



図 25: 里美ふるさと農園



図 26: 里美ふるさと農園でのレクチャー

(11)里美牛加工場見学（14:30～15:00 大中町・図27）

豊田様のご案内で、里美牛の加工施設を見学した。生憎、作業は前日にピークを終えた所であったが、里美ふるさとファーム副支配人・高星隆志様より各種機材についてご説明を戴きながら、一連の工程について学ぶことができた。

(12)荒蒔邸見学ならびにプロジェクト実習の活動紹介（15:00～15:30 大中町・図28）

里美地区の代表的な古民家であり、過去のプロジェクト実習においても活動の場や宿泊施設として活用させて戴いている「荒蒔邸」を見学した。併せて、前日に実施できなかった、プロジェクト実習B履修生による初年次PBL 試行参加者に向けた、活動紹介を行った。



図 27: 加工室内でのレクチャー



図 28: 荒蒔邸にてプロジェクト実習Bの活動紹介

(13)里美生産物直売所見学・利用（15:30～16:00 大中町）

里美生産物直売所の見学と、任意の買い物の機会を設けた。豊田様が旧里美村役場職員時代に開発

を指揮された里美ヨーグルト・里美ジェラートを楽しみにしていた学生が多かった。

学生達が、2日間に亘り当初予定を遅延しても快く運転業務を担当して下さった本学運転手・中林隆夫様へのお礼にと、名物の里美まんじゅうを自費で購入してお渡ししていた。感謝の気持ちを持つこと・それをきちんと表現できることもまた、就業力を構成する重要なファクターである。担当者として嬉しい気持ちで現地を後にすることができた。

[謝辞]

多くの方々のご支援により、初年次 PBL 試行・プロジェクト実習 B 夏季合宿合同フィールドワークは、無事全日程を終えることができました。紙幅の制約からお名前を記すことができなかった方々もごぞいます。ご支援戴いた全ての皆様に、改めて篤く御礼申し上げます。

6:総括—今後に向けて—

(1)設計と運用

今回、初年次 PBL 試行のカリキュラムを設計し、荷見様・豊田様という現地のキーマンお二人を中心に多くの方々のご支援を得て運用した。その結果、今回の設計を核に内容を補強して「1年次生向けに5学部混合のPBL授業の正規開講版カリキュラム」を設計・運用することは

- ①連携実績を持つ常陸太田市里美地区をフィールドとして
- ②受講生数が最大でも20名程度という小規模な開講形態で
- ③夏季集中2単位という形式で
- ④成績評価に関しては、現行のプロジェクト実習における手法を援用して

という条件下においては、基本的に可能との認識を得た。

勿論、これはあくまで「授業本体」に限定しての認識であり、大前提となる予算確保や運営体制整備等の課題は捨象してのことである。以下、これを前提に正規開講に向けての課題を列記する。

(2)小規模正規開講に向けた課題

初年次 PBL 試行参加者による、事後アンケートの集計の結果(図6)評価が低かった項目、具体的には質問Ⅰで「評価5」又は「同4」への回答が3名に満たなかった項目は、以下の4項目であった。

- 1:事前準備
 - (1)教員による事前広報(アナウンス・趣旨書等)
 - (2)事前課題②活動テーマメモの作成
- 2:フィールドワーク当日
 - (14)食肉加工場見学
 - (15)古民家(荒蒔邸)見学とプロジェクト実習の活動紹介

この内、設問(14)と(15)は、参加者が事前に設定していたテーマとの親和性が比較的低かったこと、並びにフィールドワークメニューの最終段階で、疲労から少々緊張感が薄れていたことが影響したと思われる。今後の工夫で如何様にも対応可能と思われる。

設問(1)は、予想通りの結果であった。今回、教育改革推進経費への申請が認められ、基本的な手配を済ませて募集に入れたのは、既に6月も末になってからのことであった。幾人もの先生にご協力を戴いて広報したが、学期の途中で・本学5学部の1年次生合計約1,600名を対象に・満遍なく広報するというのは、極めて困難である。正規開講時の広報は、年度始めのガイダンス等、然るべき場を得て行う必要がある。

本件に関しては、同アンケートの問Ⅱ・Ⅴにも、いくつか具体的な記述がある。広報の質以前に広報の絶対量が足りなかったことが分かる。

設問(2)は、設計・運用の根幹に関わる重要事案である。同アンケートの問Ⅱ・Ⅴへの回答と突き合

わせることで、具体像が見えてくる。

まず、実体験に基づく情報・イメージを持っていない段階で、現地講師から提示された「ざっくりした課題」を「個人の取り組みテーマ」に絞り込んで行くことの困難さを指摘し、最初からもう少し絞り込んだテーマを提示すべきという意見があった。

- ・事前テーマの設定には、少しでも現場の状況が把握できていないと難しいだろう。
- ・課題がもう少し明確に与えられてもよいのではないかと思う。
- ・ざっくりとした課題だけでなく、明確な課題もいくつか与えられると良いと思う。

一方で、以下のような意見もあった。

- ・新しい物事を作り出すためのテーマ設定や調査方法の難しさについて学ぶことができ、とても有意義だった。

両者の対立は、奇しくも 2015 年度の全体報告会・トークセッションにおける重要なテーマのひとつでもあった（第IV章 2-(6) トークセッション）。

初年次 PBL 試行の参加者は大学生になってまだ間もなく、プロジェクト実習履修生とは異なり「考えをまとめるための手法」等（第 I 章 図 14-19）についても、まだ殆ど学ぶ機会を与えられていないのが普通であろう。正規開講に当たっては、「事前学習にこれらの内容を組み込み、提示するテーマ自体は絞り込まない」という選択肢もある。しかし少なくとも今年度のテーマ提示については、もう少し具体的に絞り込んでおくべきであったと反省している。

これに関連して、関係者間のコミュニケーションに関する改善提案も見受けられる。

- ・事前レクチャーより前にテーマ設定をすべきだった。現地講師がどんなテーマを望んでいるかも、より深く話し合えばよかった。
- ・何よりも人と人があって話し合いをするのが大事だと思ったので、参加した学生同士であつまる機会を自主的なものだけではなく、PBL として設けていただけたらより質の高い PBL になるのではないかと思います。
- ・まず自分でテーマを考えた後に、学生たちでどんなテーマがあるのか意見交換やできる範囲で協力する機会を設けるべき。
- ・5 学部合同にするための試行であるという説明を受けたが、合同にした意図があまり感じられなかった。こうした方がいい、という具体的な案は特に思い浮かばないが、せっかく 5 学部合同なのだから、その場でしか出来ない何かがきっと見つかるはずである。

「試行参加学生と現地講師」「試行参加学生同士」の意見交換の場を試行メニューの一環として設定し、その中でテーマの絞り込みや協力・分担関係の構築を進めるべきとの意見は、非常に有益である。これもまた「自分達で・自発的におやりなさい」と言うのは、相互に殆ど面識が無い初年次生にとっては酷であろう。正規開講カリキュラムを設計するに当たっては、是非取り入れたい意見である。また、今年度は事前レクチャーや合同フィールドワーク等、プロジェクト実習 B 履修の 2 年次以上の学生と一緒に活動する場が何度かあったにも関わらず、「先輩-後輩」の意見交換の場を十分に設けることができなかった。担当教員としての目配りが不十分で、貴重な「資産」を有効活用できなかったことも反省点である。

事後アンケートの問いは、直接的には「フィールドワークの事前準備段階で作成した、個人の活動テーマメモの有効性」に関するものであったが、結果的に試行カリキュラム全般において関係者間のコミュニケーションを促す仕組みが不足していることが明らかとなった。通年で行うプロジェクト実習とは異なり、短期完結の初年次 PBL を設計するに当たって、今後十分に留意すべき要素である。

本章第 3 節「設計理念」に記しているように、今回の初年次 PBL 試行を設計するに当たってモデル

としたのは、山形大学の初年次向け PBL 授業「フィールドワーク共生の森もがみ」である。同授業のフィールドワークは「1泊2日×2回」を原則としているが、今回の試行では予算的制約ならびに参加学生の負担軽減の必要から、フィールドワークは1泊2日を1回だけに圧縮している。また、事前・事後の学習についても最低限の内容に圧縮している。

言い訳めいて気が退けるが、上述の「コミュニケーションの場の不足」の原因には、カリキュラムを圧縮したことも一つの原因となっている。同様に、フィールドワークの日程圧縮が原因で、以下のような意見も寄せられている。

- ・私の場合、事前テーマが抽象的で規模も大きく、また“里川カボチャ（ピンク色の希少性）の生産”という点に依存した案は、農場見学にて不可能であると判断できた。
- ・現地で調査することを事前に考え、レポートにまとめたが、今回の日程では、人によっては自分の調査しようと思っていたことが、調査できなかったのではないかと思う。もう少し自由に動ける時間を設けてもよかったと思う。

いかに周到な準備を行っても、現地に出かければ想定外の事態に遭遇することは避けられない。逆に言えば、想定外の事態が全く無いようなフィールドワークでは、実施の意義が問われよう。フィールドワークが2回設定されていれば、一回目のフィールドワークで発生した課題を大学に持ち帰り、事前調査よりも焦点を絞った・質の高い調査が行える。それを踏まえての二回目のフィールドワークでの学びもまた、より深いものになるだろう。「現地調査での新発見—大学での資料調査—再度の現地調査」というサイクルを、実際に体験することも可能となる。現地での自由な調査機会を提供することが重要なことは言を俟たないが、それも2回目のフィールドワークに組み込むことで更に有効性が増すとと思われる。

「学生の個人負担」と「フィールドワークの実施時期」に関しては、本章 4-(1)で述べているが、改めて言及しておきたい。

教養科目履修者へのアンケート（図 3）でも、今回の試行でも、フィールドワークの実施時期の設定が思いの外難しいことが判明した。日程設定には、当然ながら受け入れ側のご都合も大きく関係する。早い段階から周到な準備が必要である。

また、学生の個人負担については、事後アンケートの問IVには以下のような記述が見られた。

- ・国立大学に通う学生＝おそらくほとんど苦学生と考えて、お金の問題は大きいので、費用を見て勉強する機会を減らしてしまうのはもったいない。短時間で現場の人と自分の理解を深めることは難しいので、継続的に活動を続ける必要がある。

結論としては健気なものであるが、設計者として心に刻むべきは冒頭の「国立大学に通う学生＝おそらくほとんど苦学生と考えて」であり、このような記述が学生自身からさりと出てくる現実である。「お金の問題は大きい」と言いつつ、なお「理解を深める」ために「継続的な活動の必要」を語る。この思いに応えるためにも、カリキュラム設計に当たっては学生の一般的な経済状況を十分に認識し、個人負担の軽減に最大限配慮することが不可欠である。

(3) 里美地区での正規開講に関するデータ

上述の通り、解決すべき課題はあるものの、里美地区での正規開講は予算等の条件が整えば基本的に可能と判断される。以下に、正規開講に際して踏まえるべきデータを列記しておく。

① 現地への足（定員はいずれも補助席込み）

本学所有のマイクロバスの定員は 28 名

常陸太田市にご提供をご相談できるバス（中型）の定員は 40 名

バス会社の大型観光バスの定員は 50～55 名

*但し、里美地区各地をスムーズに移動するには、道路事情に鑑みて中型バスが限界

②里美地区の宿舎のキャパ

民泊は MAX30 名程度

古民家宿泊は、荒蒔邸・沼田邸合わせて MAX40 名程度（風呂は「ぬくもりの湯」利用・自炊）
プラトー里美の客室定員は 60 名

*いずれも 8 月は小中学生の宿泊需要とバッティング。9 月実施が現実的。

③現地活動時の学生グループの適正規模

現地活動時の学生グループは、1 グループ 20 名程度が限界。15 名未満が理想。

引き続き荷見様・豊田様にご支援戴けると仮定しても、正規開講に伴い受講生数が増えれば、現地での手が足りなくなる。お二方をハブに、現地講師の新規開拓が必要になる。

(4)COC 教育プログラムの動向と当面のスタンス

2015 年度初頭段階では、本学のカリキュラムに「地域を対象とした初年次向けの PBL 授業」は設定されておらず、その後も設定される見通しはなかった。本学の 2015 年度教育改革推進経費に予算申請をし、常陸太田市里美地区において初年次 PBL 試行を実施したのは、その欠を補う必要があると考えたためである。

しかし、2015 年度も後半になってから、COC 統括機構が 2016 年度から夏期集中形式で、「初年次生から履修可能な 5 学部混合地域 PBL」を開講する計画であることが表明された。現時点で計画の詳細は把握していないが、趣旨・形態が類似する授業を乱立させることは、学生は勿論、受け入れ先にも学内にも混乱を招きかねない。当面、慎重に推移を見守った上で、小規模運用を前提とした正規開講を今後も志向して行くべきか、撤退すべきかの判断を下したい。

(5)初年次 PBL 授業の大規模正規開講構想を巡って

本学の「第三期中期目標・中期計画素案」の第 4 ページには、「新たな共通教育の展開」として PBL 授業を含むアクティブ・ラーニング全般の重視が謳われている（第 I 章 3-(8)）。現行のプロジェクト実習も、今回の初年次 PBL 試行が将来に期す正規開講授業も、Project Based Learning であり、期間・予算・マンパワーの全ての面で、履修生にとっても教職員にとっても負荷が大きい形態である。このような授業を上記の如く全学展開することはもとより不可能である。中期計画に言う「PBL 授業」の中核をなすのは、自ずと比較的負荷の少ない Problem Based Learning になるものと予想される。

一方で、これまで再三言及してきた山形大学の「フィールドワーク共生の森もがみ」は、年間 300 人前後の受講生に対して Project Based Learning 授業を提供し、かつそのために大学が負担する予算は 500 万円程度という、コストパフォーマンスの高い授業である。一地方大学において、そのような授業がなぜ設計・運用可能であったのか？2014 年度に山形大学に伺い、設計・運用の責任者である小田隆治教授並びに庄司由紀彦様から直接ご教示を戴いた。

筆者は 2010 年度以来、「就業力育成支援事業 GP」ならびにその実質的な後継事業である「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」を背景に、根力育成プログラムの構築に取り組んできた。プロジェクト実習は同プログラムの基幹授業の一つであるが、専門科目ゆえに履修対象者は 2 年次生以上に限られる。初年次生を対象とした「フィールドワーク共生の森もがみ」的授業の設定は長年の課題であったが、この間、遂に実現することはできなかった。

しかし、本学は幸いにして 2014 年度に COC 補助金に採択され、以来、学長をトップとする COC 統括機構が地域連携をベースとしたカリキュラムの整備を精力的に進めている。上記(4)の「初年次生から履修可能な 5 学部混合地域 PBL」開講計画の公表は、その一環である。同計画が今後さらに拡充され、「フィールドワーク共生の森もがみ」的授業へと発展してくれることを期待している。同時に、これにより筆者が今後、全学展開型の Project Based Learning 授業を構想する必要性は無くなったと判断される。そこで、本報告書において手持ちの情報を公開・共有することを以て、貴重な情報を惜しまずご教示下さった小田先生始め山形大学の皆様のご好意を活かし切れなかった失礼を、些かなりとも免ぜられたいと願う（図 29）。

20150108 山形大学調査メモ

20150110 鈴木敦

I : 前提情報

1 : 「エリアキャンパスもがみ」と「フィールドワーク共生の森もがみ」「チーム道草」の関係

- (1) 山形大学様が「エリアキャンパスもがみ」を立ち上げ
- (2) その一環として「フィールドワーク共生の森もがみ」という 授業群を設定し
- (3) その中の、金山町をフィールドとして開講された授業を受講した伊藤大貴さんが中心となって、サークルとしての「チーム道草」を立ち上げて今日に至る。
→「チーム道草」は上記授業を契機に成立したがあくまでも学生サークルであり、その意味では「エリアキャンパスもがみ」の取組からは独立した活動である。

2 : 「フィールドワーク共生の森もがみ」の大枠

- (1) 2014 度も引き続き「フィールドワーク共生の森もがみ」という授業群が継続開講されており
- (2) 『平成 26 年度フィールドワークハンドブック』に記されているようにもがみ地域全域で多数の授業が展開されている。
- (3) 授業はいずれも「半期 2 単位の教養科目の演習」という位置づけであり
- (4) 各講時の内容は、書類上は以下の通り。
第 1・2 講 (各 90 分) は学内で「プログラム紹介」「オリエンテーション」等
第 3~14 講は、「一泊二日×2」のフィールドワークを以て当て
第 15 講 (90 分) で活動報告会 (学内で実施)。
受講期間中に複数のレポートを課し、FW への参加・講師の評価・報告会での発表・学生相互評価との総合で成績を付与する。
- (5) 現実の運用は、以下の通り。
①厳密には第 1 講~第 15 講を(4)のように割り当ててはいない。受講する学生に出席を義務づけているのは、第 2 講「オリエンテーション」以降。「説明会 (プログラム紹介)」は、あくまでも履修するかどうかの検討材料を与えるための機会として位置づけており、出席は任意。但し、実態として、大半の学生は出席する。
②出席点として加味しているのは
a : オリエンテーション (受講プログラム決定後)
b : 1 泊 2 日のフィールドワーク 2 回
c : 期末に行う「活動報告会」
d : 中間レポート「活動の振り返り」並びに最終レポート「私はもがみで考えた！」提出
→フィールドワークの前・中・後に、それぞれ事前学習、中間学習、事後学習として義務づけ、その成果を、レポートの形で LMS (=茨城大学のレナディに相当) に投稿 (提出) させる。
③成績評価には、現地講師の評価、活動報告会の成果、受講生同士の相互評価の点数を加味。
*成績評価についてはIVで再度整理する。
- (6) 「担当教員」として登録されているのは北川忠明先生お一人であり、各地で行われる FW のそれぞれにおいて、直接的に学生を指導されるのは現地の「達人講師」の方々である

(7) 個々のFWのプログラムは、それぞれの「達人講師」の方々が設計・準備され、行政や地域住民がその実施をバックアップする。

Ⅱ：「フィールドワーク共生の森もがみ」開講実現の背景

1：開講に至る経緯

(1) 2003年6月に、小田隆治先生が中心となって職員向けの第一回SD研修会を開催。お題として、職員を3人ずつのチームに分け、「それぞれ地方へ行って、地域が求め・大学ができる地域貢献プロジェクトを考えるように」と指示。

→研修の説明会が開催された6月を「スタート」と位置づける。

(2) その内、新庄市に行ったチームが「最上地域の活性化問題」を取り上げた。

(3) その流れで、金山町教育長・樋口勝也先生が最上地区に山形大学のバーチャルキャンパスを作ることをご構想し、最上広域圏の教育長会に働きかけ

(4) 2004年7月～9月に、大学と県内自治体の連携策を構想する「山形大学活性化プロジェクトー地域へ飛び出してみようー」を実施。

(5) その中で、最上広域圏に大学の機能を誘致し、地域住民と教員・学生が交流することによって地域の活性化を図る構想を教育長会が中心になって取り纏め、同プロジェクトの研修生を通して提案。

→そもそものスタートは大学のFD活動。これを受けた地域側が積極的に動いたことで一挙に発展し、「地域から大学への要望」という形で「エリアキャンパスもがみ」構想の原型が提示される。

(6) 当初は「大学の任務にはそぐわない」「大学には対応できない」要望も多々出された。これを小田先生始め大学側が整理し、「市町村が保有する施設を有効利活用し、学生が自身の専門性と興味に基づいて教職員や地域住民と一緒に主体的に活動し、地域の活性化と人材育成に寄与する」という基本線が定まる。

(7) 2005年3月22日にエリアキャンパスもがみ広域圏8市町村の首長と学長との間で「教育の発展と地域振興に資するための協定」を締結。「エリアキャンパスもがみ」が成立した。

(8) 「エリアキャンパスもがみ」の具体的な教育プログラムとして、2006年4月に「フィールドワーク共生の森もがみ」(1年生向け・教養科目・半期2単位)が開講された。

(9) 以来、2014年度現在でのべ2,200人が受講。

2：「エリアキャンパスもがみ」の運営体制

(1) 総責任者は「エリアキャンパスもがみ・キャンパス長」

→当初は教育担当副学長。現在は小白川キャンパス長

(2) 運営会議

①山形大学運営委員

キャンパス長、教員7名、事務職員2名、「もがみ協力隊」学生代表3名

→「もがみ協力隊」は「フィールドワーク共生の森もがみ」受講OB・OG有志からなる。

Ⅲ-6-(3)参照。

②最上広域圏運営委員

広域圏8市町村の教育長8名、教育・芸術・地域活動団体等各分野代表5名

(3) もがみ事務局

現地事務所。最上広域圏市町村の事務職員が常駐。

(4) 年間スケジュール

- 4月：もがみ担当者会議
- 前期フィールドワーク開始
- 7月：エリアキャンパスもがみ運営会議
- 前期フィールドワーク活動報告会
- 9月：もがみ担当者会議
- 10月：後期フィールドワーク開始
 エリアキャンパスもがみ懇談会
- 11月：タウンミーティング
- 2月：エリアキャンパスもがみ運営会議
- 後期フィールドワーク活動報告会
- 3月：研究年報・ニュースレター刊行

3：「フィールドワーク共生の森もがみ」スタンスと目標（シラバスより筆者が抽出）

(1) スタンス

もがみを知ることは、山形を知り、日本を知り、ひいては世界を知ることにつながっていきます。

(2) 目標

「課題発見能力」「課題探求能力」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション」「行動力」「社会性」の基礎的な力を身につけることを目標とします。

(3) キーワード

エコキャンパス、地域活性化、住民との交流、現地体験、プレゼン能力の向上

4：「フィールドワーク共生の森もがみ」授業設計上の工夫（2013年度報告書より）

- (1) 授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。
- (2) 現地で行う体験型学習となっている。
- (3) 現地の「その道の達人」が講師として直接指導に当たる。
- (4) 開講日を土・日曜日にすることによってたくさんの住民が参加できる。
- (5) 学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。
- (6) この授業は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

5：「フィールドワーク共生の森もがみ」の予算的・人的裏付け

- (1) 現地でのプログラムの設計・運用に関する予算は、基本的に受け入れ市町村が提供。
- (2) 現地講師は無償もしくは受け入れ市町村が謝金を負担する形で対応。
- (3) 大学は「現地へのバス代」と「学生サポーター（＝履修経験者がバイトとして活動支援）謝金・旅費」、「引率教職員旅費」、「ハンドブック・研究年報・ニュースレター等の印刷経費」、「その他、消耗品の購入」等で、年間約500万円を大学予算から支出。
→近年の受講生は、前後期合わせて300人前後で推移している。
- (4) 大学側の事務処理については、既存の事務体制の中で対応。
- (5) 学生は、宿泊費・食費を自弁。そのため、参加費（2回分合計）はプログラムによって6,000円位から18,000円位までの間で幅が生じる。
→本学「プロジェクト実習」における「チーム予算」のようなものは設定していない。
かくして「補助金無き大事業」が成立。

*補助金を獲ってきて、「獲ってきたんだからやれ」と言っても動かない。仮に動いても、補助金終了と同時に立ち消えになる。いかにして補助金に頼らず実施するかが重要。（小田先生）

Ⅲ：運用状況

1：受講生数

受講生数は年によって変動するが、近年は前期 200 人・後期 100 人位。

→大学としては「約 500 万円の大学独自予算を投入することで、300 人の学生に半期 2

単位の特色あるフィールドワーク・プログラムを提供すると共に、地域における山形大学の存在価値を、当該地域はもちろん全国に向けて発信している」形。

→主として 1 年生が受講する教養科目のため、タコ足キャンパスの影響は受けない。理系学生も多数受講。

【参考】平成 26 年度の学部別受講学生数

●前期 (191 人)

人文：30 地域教育：44 理：21 医：14 工：34 農：47 他：1

●後期 (98 人)

人文：10 地域教育：42 理：15 医：3 工：20 農：7 他：1

2：教職員側の準備

(1) 現地講師への FD (90 分×1 回)

①当該年度の冒頭に行く、前期履修希望者向け「フィールドワーク説明会(ガイダンス)」に現地講師の先生方に来学して戴き、それぞれご担当戴く授業について説明して戴く(2014 年度の説明会は 4 月 14 日(月) 15:00~)。説明会終了後、引き続き現地講師 FD を実施(2014 年度は 16:30~)。

②授業の目的・目標や安全確保に関する留意事項等を、小田先生が具体的に伝え、その他、講師同士のグループワークも実施して「考えて」もらう内容にしている。

(2) 新入生への「フィールドワーク共生の森もがみ」ガイダンス参加を呼びかける広報
一人でも多くの学生がフィールドワークに興味を持って、説明会にきてもらうよう、様々な広報活動を展開する。①掲示 ②オリエンテーション資料へのチラシの封入 ③学食テーブルへの告知チラシ配布 ④新入生歓迎イベント等における告知 ⑤ご協力戴ける教員の授業におけるチラシの配布 など)

(3) 班編制の差配(下記 4-(1)-(4))。

(4) その他

①地域側担当者との調整

②日程等、ハンドブックへの掲載内容調整(11~2 月)

③受講者決定後の参加学生に関する情報提供、必要な事務連絡

④バスの手配・乗車割り振り・運行計画の策定

⑤参加学生に配付する「しおり」の制作等

→「他にも各論としては色々あるのですが、ここでは割愛させて戴きます。」とのこと。

3：フィールドワーク当日の運用方針

大学側からフィールドワークに同行するのは、履修経験のある上級生が謝金の支給を受けて班を支援する「学生サポーター」。フィールドワーク当日は、現地講師・市町村職員と学生サポーターが協力して全体を運営。

→学生サポーターへの謝金は、山形大学の学生 A. A. 雇用の単価と同一(学部生：800 円/H、大学院生：850 円/H)。それに、期間中の業務時間数を乗ずる(プログラムにより、時間数に若干の差異が生じる)。

→同一週に複数のプログラムが開講される場合も多いので、山形大学教職員の同行が必須にはし

ていない(=できない)。「可能な限り、橋爪孝夫(教育開発連携支援センター専任講師・教育学)・時任隼平(教育開発連携支援センター専任講師・教育工学)の両先生、もしくは関係職員も引率という形で同行」とするのが精一杯。あくまでも講師は地元の方なので、指導等は必要最低限にとどめ、主に安全な実施を見守るという観点での参加としている。

4：学生から見た流れ

(1) ガイダンス

- ①自由参加。2014年度前期は4月14日15:00～
- ②事前に当該年度の『フィールドワークハンドブック』を受け取る。
 - 同年度前・後期に開講される全てのプログラムの日程や概要が記されている。
- 新入生オリエンテーション資料の中に封入して、全新入生に配付。
 - 同ハンドブックは、そのままエリアキャンパスもがみのHPにも公開されている。
- 各プログラムの定員は、受け入れ側が設定する。10名～20名程度。12名程度のものが主流。実際に運用してみると、20名は少し多過ぎる感あり。
- ③ガイダンスにおいて、各プログラムの現地講師 or 事業責任者からのプレゼンと質疑応答。
 - 学生の個人負担額は、ここでアナウンスされる。
 - * 1プログラム当たり5分。
 - * 5限に相当するが、延長もあり。特に前期はプログラム数が多いことと、5分で説明が終わらない自治体関係者もいるため。
- ④受講を希望する学生は、期日(約1週間後)までに「受講希望調査票」(第1～4希望とそれを希望した理由、を記載)を提出する。
 - その後、提出された調査票に基づき、教職員側で班編制(=個々のプログラムへの割り振り)を行う。定員を超過した場合は第2希望以下へ回される学生が出る。
 - その結果、下記(2)のオリエンテーション時には、既に「調査票」に基づく班編成が済んでおり、受講プログラムが決定している。
- 「受講希望調査票」と、後述の「LMSに提出させるレポート」は別物。

(2) オリエンテーション・班ごとに顔合わせ・FWの心構え等に関する講義

- ①この回から授業。2014年度前期は5月8日16:30～
 - 2014年度前期は、ガイダンスには400名以上が参加し実際に履修登録したのは約200名。
 - 後期は同・約200名に対して同・約100名。
- ③第一回フィールドワークまでに、「自己紹介文」ならびに「訪問する自治体の基本情報や活動する内容等についてネット等で下調べをした結果」をLMS上のウェブクラスに書き込むことが課される(事前学習)。

(3) 第一回フィールドワーク

- ①実施日はプログラムによって変動。いずれも土日の一泊二日。
 - 都合2回のフィールドワークは、前期の場合5月から8月の間に実施
- ②宿泊先も公民館的なものから民泊まで様々(このため参加費も様々)
- ③現地側で準備したプログラムに従って活動
- ④後日、第一回レポート「活動の振り返り」(「良かった点」「課題点」について、各200～400字程度)を作成し、ウェブクラスにアップして提出。
- ⑤第二回のフィールドワークまでに、ネット等で下調べをしてウェブクラスに書き込むことが課される(中間学習)。

(4) 第二回フィールドワーク

- ①基本構造は、第一回と同じ。
- ②現地側で準備したプログラムに従って活動
- ③後日、第二回レポート（第1回目と同じ）「活動の振り返り」をウェブクラスにアップして提出。

(5) 最終レポート

最終レポート「私はもがみで考えた！」（1,000字程度）を作成し、ウェブクラスにアップして提出。

→同レポートは、年度末に刊行される報告書に全文収載される。

*まとめると

- ①希望調査票における希望理由
- ②第一回フィールドワークに先立つ下調べ
- ③第一回レポート（200～400字）
- ④第二回フィールドワークに先立つ下調べ
- ⑤第二回レポート（200～400字）
- ⑥最終レポート（1,000字程度）

の、合計6種類の「書き物」を作成することになる。

(6) 活動報告会準備

- ①活動報告会（2014年度は7月25日16:30～）における、各班の持ち時間は5分。
- ②ただ単純にPPTで「〇〇をやりました」というだけの発表ではダメ。「他人が聞いてくれる報告」ができるように工夫をこらすことが求められる。
→現物を持ち込む・寸劇をする等々
- ③チーム別リハーサル
→学生の自主的活動として、チームごとに随時・何度も行われる。
- ④公式練習
最終的に担当教職員の前で1班当たり30分の「公式練習」を2回程度行い、指導を受ける。
→事務方が、使用する教室を手配し、各班の希望を勘案して使用割り振りを策定。
→担当教職員側は、同一メンバーで全ての班を統一的に指導する。

(7) 活動報告会

- ①指導教員（橋爪先生もしくは時任先生）による、内容、方法、注意点、事前提出物等に関する説明
- ②チームごとのプレゼンと質疑応答
 - a：「受講生のプレゼンテーション能力向上の為に、フィールドワーク活動を通じて感じたこと、活動状況、最上地域への提案などを題材に報告する」（ハンドブックの記載より）
 - b：受講生・現地の方々・担当教職員等が参加
 - c：審査員（＝教員）が、採点表に基づいて採点。
→審査員の人数は毎回固定している訳ではない。「エリアキャンパスもがみキャンパス長＝小白川キャンパス長」、小田先生、橋爪先生、時任先生等、概して4～5名程度。
→地元講師による評価は別途行う（IV-2参照）ため、地元関係者は活動報告会の審査員には加わらない。

5：その先の「授業」

(1)もがみ専門科目

学部・大学院の既存の専門科目の内、「エリアキャンパスもがみ」の趣旨にあう物を「もがみ専門科目」と位置づける。殊更に新しい授業を立てることはしていない。

→2013年度の実績は、以下の通り。

- ①人文学部 「地域づくり特別演習」
- ②地域教育文化学部 「教育実習」(新庄市)
- ③大学院教育実践研究科 「学社融合の実践と課題」(戸沢村)
- ④理学部 「野外実習Ⅱ」(防災科研長岡雪氷研新庄支所見学)

6：その先の「課程外活動」

(1)タウンミーティング(毎年12月・於：新庄市)

a：活動発表を行う学生10数名

→大学が手配したバスで参加(バス代は、Ⅱ-5-(3)「大学予算約500万円」の中から手配)。

b：有志学生も参加。

(2)山形大学見学旅行

山形大学主導の行事ではなく、最上地域の各小中学校主催の行事に協力する形で実施。(子供達は、山形大学以外に県庁なども訪問するらしい)。

→事前に、小中学校側から山形大学に対して訪問の打診があり、事務方で調整して「理科実験教室」を開講や学食での食事体験(食費は児童・生徒負担)、授業風景見学、構内案内(学生A.A.が説明要員となる)等を行う。

(3)もがみ協力隊(Ⅱ-2-(2)-①参照)

①主たる活動内容は、「夏季学習指導ボランティア」。最上の中学生に勉強を教える夏季集中講座の学習指導員などを行う。

→必ずしもサークル単位で参加するという事業ではなく、自治体からの派遣要請に基づき、当該町村でフィールドワークを行った学生等に広く参加を募る。

→要請してきた市町村側で、交通費と若干の謝礼は町村側が負担。毎年、2～3の町村から各数名の派遣依頼がある。

②他に、「町の祭りのスタッフとして参加して欲しい」といった類の依頼もあり。

→①と同様に広く募集を行ってきた。ただ、現在は既に下記学生サークル「ともしび」等が団体として参画するようになってきているため、そちらで完結するケースが増えた。このため、大学への依頼はレアケースと言っても良いくらい少なくなっている。

(4)大学公認の学生サークル

①チーム道草：金山町を中心に活動

②ともしび：要請があれば基本的にどの市町村でも活動

*いずれも「フィールドワーク共生の森もがみ」受講生が立ち上げたサークルであるが、現在のメンバーには、同授業の履修経験が無い者も含まれる。

7：学生の自発的活動に対する支援事業

(1)元気プロジェクト

山口大学の取り組みをモデルに設定した支援制度。

①個人/友人/サークル/クラス/ゼミ等、人数・母体不問

②申請→審査→採択により補助金支給

③「上手くいったか否か」は問わず、チャレンジを支援

→科研の萌芽的研究のような性質。

④継続性重視

8：「フィールドワーク共生の森もがみ」単位取得者のその後
2年生以降の成績や、進路（進学 or 就職）に関して、「単位取得者と非取得者」という対比で、何らかの追跡調査は行っていない。

IV：「フィールドワーク共生の森もがみ」の担当教員と成績評価について

「フィールドワーク共生の森もがみ」の「担当教員」は、エリアキャンパスもがみキャンパス長＝小白川キャンパス長が当たることになっている。2014年度のシラバスやハンドブックに「担当教員」として北川忠明先生のお名前が記されているのは、この規定に基づく。成績評価は、後述の通りシステムを整え・いわば「機械的に」行えるようにしてあるので、小白川キャンパス長が既存の諸業務に加えて「フィールドワーク共生の森もがみ・担当教員」として「一人で300人分のレポートを読んでそれぞれの出来を評価し、さらに・・・」といった事態に陥ることはなく、安定的な運用が可能となっている。

成績は以下の4つの観点で評価する。この観点ならびに比率はシラバスに明記され、学生にも予め周知されている。

- (1) フィールドワーク活動への参加：30%
- (2) 現地講師による活動評価：40%
- (3) 活動報告会での発表：20%
- (4) 受講生相互評価：10%

1：フィールドワーク活動への参加（30点）

- (1) 学生個人への評価
- (2) エビデンスはレポート

「活動の振り返り」（第一回、及び第二回フィールドワーク終了後）と「私はもがみで考えた！」（学期末）のレポート提出を以て、一律に「満点＝30点」を加算。

→個々のレポートの「出来」を評価することはしない。

2：現地講師による活動評価（40点）

- (1) 学生個人への評価
 - (2) 現地講師には、統一フォーマットの採点表に基づき評点を付けて貰う
 - ①「評価の観点」を明示。具体的には「能動性」「問題解決能力」「コミュニケーション能力」「行動力」「リーダーシップ」の5項目。それぞれに5段階評価。
 - ②評点は①の合計ではなく、一発で付ける。
- 「評価の観点」は、目の付け所を意識して貰うための物。ここに記入して貰うことで、現地講師に観点を意識化して貰い、主観的になりすぎないようにすることが目的。最終的な評価は「一発」
- (3) 現地講師の評価を教員側で検討することはせず、そのまま加算。

3：活動報告会での発表（20点）

- (1) 班への評価
- (2) 審査員（Ⅲ－4－(7)参照）には、統一フォーマットの採点表に基づき、10点満点で評点を付けて貰う

①「評価の観点」を明示。具体的には以下の通り。それぞれ5段階評価。

A：課題発見と探求について

a：内容の独創性

b：課題発見能力

c：課題探求能力

d：発表の情報の量

(文献的にどれだけ勉強したか、自分たちの考えたことを相対化するために)

e：発表の情報の質

(最新で正確な情報を入手していたか、質の高い勉強であったか)

B：発表の方法（技術）について

a：発表方法の独創性

(メッセージ性、インパクトなどを含む)

b：論理性

(要点の整理や分かりやすい構成などを含む)

c：具体性

(活動した具体的内容や参加者の生の声を反映しているか)

d：表現力

(視線、表情、ジェスチャー、声の大きさ、速さなどを含む)

e：タイムマネジメント

(発表時間は正確に)

②評点は①の合計ではなく、一発で付ける。

→考え方は、IV-2-(2)-②に同じ

(3) 審査員の採点結果を合計して20点満点に換算した上で、各人の成績に加算。

4：受講生相互評価（10点）

(1) 学生個人への評価

(2) 同一班内での、自分自身を含めた学生個人を評価する

①「評価の観点」を明示。具体的には同じプログラムの受講者が、どれだけ班活動に貢献したかを、それぞれを10点満点で評価。自分自身についても10点満点で自己評価。

②評点は①の合計ではなく、一発で付ける。

→考え方は、IV-2-(2)-②に同じ

(3) 各人の採点結果を合計して10点満点に換算した上で、各人の成績に加算。

V：その他のプロジェクトとの関係

1：COC事業との関係

別物として、積極的に切り分けている

2：「大学環ネットかねやま」との関係

特に関係はない

VI : 成果と課題

VI: 成果と課題

鈴木 敦

4年目を迎え、授業の枠組みも漸く安定してきた。プロジェクト課題をご提供下さる、あるいは学生達の具体的な活動の諸局面でご支援を下さる方々は、開講当初の予想を遙かに超える広がりを見せている。誠にありがたい誤算であり、感謝申し上げると同時に責任も痛感している。

履修生数は、2012年度の試行が約20名でスタートし、正規開講の初年度である2013年度に約90名と激増したが、この2年間は20名～30名台で推移している。2014年度の激減には、そうなるべき重大な原因があったが、ここでは記さない。今はただ、2014年度の危機をどうにか乗り越え2015年度は40名に迫る水準まで回復したことを喜び、この間にご支援下さった多くの方々に感謝申し上げたい。2015年度は、人文学部を中心に教育学部・理学部・さらに茨城キリスト教大学からも参加者を得て、当初設計の柱の一つである「多様性」の芽が見え始めている。2016年度以降の発展に期待したい。

主担当教員－副担当教員－顧問教員による担当体制の確保は、予算確保と併せて専ら関係教員の個人的努力によって維持されている。従来の大学における「個人経営者たる教員の集合体」とでも称すべきあり方に照らせば、これは至極当然の結果であろう。しかし、何事に付け大学という組織体としての取り組みが強く求められる昨今、教育改革の柱としてPBLさらには各種アクティブ・ラーニングの全学展開を目指すのであれば、このような体制は間もなく行き詰まることは自明である。大学の、「組織としての対応」の進展に期待したい。

枠組みの安定を踏まえて、今年度から本格的に授業改善に取り組んだ。プロジェクト実習の年間スケジュールをおおまかに3区分すれば、以下のようになる。

- ① 4月～5月：立ち上がり期間
- ② 6月～11月：活動期間
- ③ 12月～1月：リフレクション期間

従来は、ややもすれば活動それ自体が目的となってしまう、「活動を通して何を学ぶのか」という、本来の目的が曖昧になりがちであった。オトナ会議始め外部からのご指摘・アドバイスも踏まえ、今年度は「目的意識の明確化」「思考の組み立て方」に焦点を絞り、各種改善を試みた(第I章)。

教員としては大いに努力した積もりであったが、年度末に至ってこれらの改善が学生に十分根付いていなかったことが判明した。具体的には、「ループリックは書いた。しかし、それきり見なかった。」「ブレインストーミングとKJ法を学んだ。しかし実際のチームミーティングにおいて活用することはなかった。」といった具合である。

思えば、これらの改善を上記①の立ち上がり時期に学生へ集中的に提供したことで安心してしまい、②の活動期間・③のリフレクション期間を通じてこれを活用するシカケを全く組み込んでいなかった。何から何まで教員が指示してしまったのではPBLの理念に合わない。とは言え、これらのコンテンツは2015年度に初めて提供したものであり、学生達には運用実績が無い。少なくとも今年度は、PBLの理念を逸脱することがあっても敢えて小まめに活用の指示を出すべきであったと反省している。2016年度以降は「中間報告会」等の機会を利用して、学生が「やらされている感」を抱くこと無く、自然に活用するように仕向けるシカケを盛り込まねばならないと考えている。換言すれば、2015年度は①立ち上がり時期に集中した授業改善を、②活動期間・③リフレクション期間にも及ぼすことが必要である。

昨今、教育の質保証が強く求められている。「単位の実質化」あるいは「評価の実質化」は、

その重要な構成要素である。従来は、年度末の活動報告会を文字通り年度末の1月後半～2月初頭に設定していた。年度末の活動報告会という、これも一種の「活動」をこなすと、もうリフレクションの時間は残っていないという日程を改善し、2015年度は12月12日に報告会を終え、その後をリフレクションの時期として確保した。

しかし、こちらも運用において額面通りの成果を上げたとは言い難い。特に、プロジェクト実習B履修生は里美地区での現地活動報告会が1月31日に設定されたこと、プロジェクト実習D・こみフェスチームはピーク行事である「こみっとフェスティバル」の開催が2月20日の開催であったことから、結果的にリフレクションの期間が十分確保できなかったものと推察される。里美地区現地活動報告会の形態は、比較的容易に変更できる。一方でこみっとフェスティバルについては、授業日程の都合で開催日を変更できる筈もない。リフレクション期間を実質化するためには、全体設計の改善と併せて各チームの事情に即したきめ細かな対応策が不可欠である。より一層の工夫が求められる。

成績評価については、2012年度の当初設計から殆ど改善がなされていない。2012年度の報告書の第V章「平成24年度の成果と今後の課題」から、関係部分を抽出して図1に示す。

図1:「客観的な評価」を巡って -2012年度報告書の記載から-

2: 今後の課題 「客観的な評価」を巡って

(1) PBL科目の評価を巡る現状

PBL技法に基づく正規科目は、少なくとも本学人文学部においては初めての開講であったが、一方で教育課程外でのPBL「的な」取り組みであれば、筆者自身のそれを含めて人文学部の実績には枚挙に遑がない。両者を隔てる物、換言すれば後者の事例が多数ありながら前者への移行例が絶えて無かったのは、いかなる理由に拠るものであろうか？

思うに両者を隔てる最大の差異は、後者が教育課程外で「自由に運用できる」のに対して前者は正規科目として「最後に評価、それも<客観的な>評価を求められる」所にある。「正解」がはっきりしている理科系の科目に比して、人文系の科目における「客観的な」評価が難しいことは、今更言うまでもない。PBL科目となればその困難さはさらに増大する。一方で、「客観的な評価」を求める「圧力」は益々高まっている。これが教員を躊躇させ、PBL科目の普及の足枷になるのは、至極当然のことである。

- 中略 -

(2) 学生による相互評価導入の試み

とはいえ、現実に正規科目として開講する以上は某かの「客観的な評価」を示さねばならない。今年度のプロジェクト実習の履修生は20名余と少ないものの、チームごとの自発的活動を重視するという科目設計に照らして、個々の学生の全ての取り組みを直接目にし、客観的な評価を行うことは不可能である。そこでより多くの評価者による判断を求め、それらを集約・勘案して少しでも「客観性」を高めようと考えた。即ち

a: 実習担当教員の評価 に加えて

b: 顧問教員の評価

c: 学生自身による相互評価

という3通りの評価を集め、(1)を主としながらも(2)(3)を援用して最終的な評価を下す、という形を構想した。

具体的には、事前アナウンスの上で1月30日の最終講の席上、図1に示すフォーム〔編者注: 本報告書では、2014年度に作成した改訂版を「図2」として示す〕を配布して、チームごとに学生自身に相互評価をさせると共に、各顧問の先生方にも、ご担当戴いたチームについて同様に評

価して戴いた。また、筆者も同一フォームで評価を下し、その結果を対比することとした。

(3) 結果と課題

学生による相互評価の結果を概観すると、以下の傾向が見て取れた。

- a : 評価者の如何に関わらず、「上位に評価される学生のグループ」と「下位に評価される学生のグループ」に二分される。
- b : 各グループ内での順位は評価者によって微妙に変動するが、同一学生が評価者によって上位グループに位置付けられたり下位グループに位置付けられたりする、というケースは極めて希である。換言すれば、評価者による揺らぎが上位／下位グループの枠を越えるほど大きなケースは滅多にない。

筆者は、過去に担当した主題別ゼミナール（以下「主ゼミ」）においてもほぼ同様の形で、学生による相互評価を実施した経験を持つが、その際の傾向もこれと似通ったものであった。

—中略—

引き続き実施例を蓄積していかなければならないことは勿論であるが、学生による相互評価の信頼性は思ったより高いと考えてよさそうである。

上記の結果を顧問の先生方による担当チームの学生に対する評価と付き合わせてみると、(これもまた実施例が限られているという留保条件はあるものの) ほぼ同一と見てよいと判断された。

例外的に評価が分かれたケースにおいては、例えば「意欲的かつ有能でありリーダーシップもあるが、時としてそれが強引に過ぎることもある」というような、「同一事象のプラス・マイナスの、どちらをより大きく見るか」といった性質の問題に対する判断の差違が原因と思われた。相互評価に当たっては「貢献度の高さ」という甚だ漠然とした基準しか示していない。一方で、闇雲に基準を細かくすれば客観性が高まるというものでもなかろう。引き続き検討して行くことが必要である。

一方で、筆者による評価結果を学生並びに顧問による評価結果と付き合わせてみると、概して同一の傾向を示すものの大きくずれるケースも散見した。当該ケースを検討してみると、ほぼ全てが「学生並びに顧問の先生方による評価において上位グループに位置付けられている学生を、筆者は下位グループに位置付けている」というケースであった。当該ケースについて更に子細に検討してみると、ズレの原因は概してチーム内での裏方仕事での貢献に対して十分目が届いていなかったために、これを正當に評価できなかったという所にありそうであった。一言で言えば「実習担当教員として学生の自主的活動部分に十分目が届いていなかった」ということになる。

言い訳がましくなるが、学生・顧問による評価は当事者が深く関わった特定のチームに限定してなされたものであるのに対して、筆者のそれは実習の担当教員として4チーム全ての学生に対して行ったものである。僅か4チーム・20名余を対象とした評価でもこのような事態が生じている。来年度以降、受講生が増加すれば「目が届かない」範囲がさらに膨らむのは避けられない。具体的な方法については更に検討を重ねる必要があるが、前述の「(実習担当教員一人の評価に拠るのではなく) より多くの評価者による判断を求め、それらを集約・勘案して少しでも客観性を高める」という方針を堅持しなければならないことは疑いない。

3 : 顧問のあり方と評価・普及

今年度の顧問の先生方には、漠然と「チームの相談に乗って戴く」ことを御願ひした。その結果、「恒常的に・極めて密接に」関わって下さった方から文字通り「相談があった時だけ対応する」という形を取って下さった方まで、そのスタンスは様々であった。現状では、顧問就任はあくまでその先生方のボランティアな意志に頼る形になっている。そのような体制である限り、「漠然と

した御願い」にならざるを得ないのは当然である。

とはいえ、たとえボランティアであってもお引き受け戴いた先生方には相応のご負担をおかけすることになる。引き続きご好意に頼るだけで済ませられるとは思えない。また、今後「評価の客観性」を担保する上で顧問の先生方に評価面でも深く関与して戴く必要が高まれば、そのスタンスについても某かのガイドライン的統一措置が必要になってこよう。一方で、PBL 科目の裾野を広げるという課題に照らせば、顧問就任が過重な負担となるような体制は避けねばならない。これはもはや一担当教員の意志でどうこうできる性質の課題ではなく、今後学部レベル・全学レベルでの検討を御願いしなければならないと考える。

図 2 に記している「チーム内相互評価表」は、2014 年度に若干の手直しを行い 2015 年度もそのまま使っている。ここでは、2014 年度作成の改訂版を図 2 として示す。

図 2: チーム内相互評価表(2014 年度改訂版 1/2 縮小)

チーム内相互評価表		評価者名:		
<p>この表は「チーム内メンバー同士」での相互評価用です。自分自身を含めて貢献度が高いと判断した人から順に氏名と役割分担を記入して下さい。隣接する上位と下位の間隔を、それぞれ1～5の数値で記して下さい。その際、同一順位は厳禁です。また最上位から最下位まで間隔が全て同一、というのも通常はあり得ません。評価欄の記述内容と整合が取れるよう十分意を用いつつ、大小のメリハリを効かせた数値を定めて下さい。2位以下の人の評価文には、「すぐ前の人(2位の人なら1位、3位の人なら2位)との間隔(1～5)の判断根拠」も必ず記して下さい。</p> <p>皆さんにとっては、将来「管理者・評価者」として「公平・公正な評価」を下せるようになるためのトレーニングになります。仲良しを最優先せず、自分のことも変に謙遜せず、ひたすら「公平・公正な評価」に努めて下さい。皆さんから提出された相互評価表の、担当教員にとっての意義は2つあります。1つは、担当教員が評価を下すに当たって、客観性を高めるための参考資料。もう一つは、提出者の「公平・公正な評価能力」を評価するための判断材料です。つまり、「評価を下した皆さん自身が、自ら下した評価の公平性・公正性によって評価される」ということです。恐らく、今回の授業で一番イヤ～な作業になると思いますが、頑張ってください!</p>				
順位	氏名	役割分担	評価	間隔 (1～5)
1 (高)				
2				
3				
4				
5				
6				
7 (低)				
※チームの人数が多くて、この表に収まらない時は、適宜追加して下さい。				

初開講以来 4 年を経ても、残念ながら「評価の客観性」担保のための方策・ツールには目立った改善を施せていない。またこの間、ご協力戴いた先生方の中からは、大学教育の中でこのような相互評価を行わせることに対する「違和感」も寄せられている。プロジェクト実習は就業力育成を目的とした授業であり、チームは職場の疑似体験の場であると考えて実施して来ているが、筆者自身にも迷う所がないではない。

客観的な評価が難しい中で、高等教育の専門家の任用も無く、PBL 授業を含むアクティブ・ラーニング授業を全学展開すれば、恐らく成績評価の分野においても大きな混乱を生ずるものと予想してい

る。三重大大学のように、この種の授業においては所謂成績評価を行わず、単位を出す・出さないだけに留めるという方法もある。客観性の担保が難しいのであれば、いっその方式に切り替えた方が「益も少なくなる代わりに、害も発生しない」であろう。しかし、成績評価の実質化を求める流れは、このような変更を「逆行」とみなして許さないであろうことも容易に想像できる。

評価のためのツールとして、昨今、ルーブリックの活用が一種のブームとも言える活況を呈している。2015年度に実施したプロジェクト実習の授業改善においても「学生の目的意識を明確化するためのツール」として盛り込んでいるが、ルーブリックは本来「評価の客観性担保のためのツール」である。2016年度以降の授業改善においては、これまで手つかずであった「リフレクション期間」へのテコ入れが重要であり、そのための一ツールとしてルーブリックに期待する所は大きい。

ただし、学生がルーブリックを使って自己評価をしたとして、それをそのまま成績評価とすることはできないのは当然である。プロジェクト実習のように、教員の見ていない場面での活動が多い PBL 授業で、「教員による学生評価のツール」として活用しようとしても限界がある。かつて注目されたポートフォリオ同様、ルーブリックもまた万能薬ではないのである。

そうであれば、結局4年前に戻ってしまうが「より多くの評価者による判断を求め、それらを集約・勘案して少しでも『客観性』を高め」ること（図 1- (2)冒頭）に努めることが、「一発解決」とはならないが最終的に確度の高い方法であろう。付け加えるとすれば、評価者のみでなく「評価のツール」においてもより多くのものを併用すべきである。万能薬ではないルーブリックは、多様なツールを構成する一つとしてこそ、その有効性を発揮してくれるものと思われる。

プロジェクト実習は漸く大枠が固まり、個別具体的な授業改善に着手できるようになったが、上述の如く課題は山積している。担当教員の努力だけで解決できる事案は限られているが、担当教員が努力しない限り、解決に向けた動きも生まれては来ないだろう。焦らず・怒らず・諦めず、地道な努力を重ねていきたいと思う。

おわりに

神田大吾

社会生活力、行動力、思考力、チームワーキング能力を大学卒業時には身に付けていてほしい。このような目標を掲げて始まった教育プログラム「根力（ねぢから）育成プログラム」の中の一科目である「プロジェクト実習」は、今年度で開講四年目となる。

今年度の「プロジェクト実習」は①マインド・マップによる自己分析、②個人の達成目標ルーブリックの作成、③事例シナリオ学習などを新たに導入した。学生個々人が明確な目的意識を持って学ぶ体制は整えられたが、他方、導入後のフォロー（プロジェクトに効果的に取り組むよう促す仕掛け等）はまだ十分とは言えない。年度を通じ、学修内容が定着したか否かの確認作業を継続的に行う必要性を再認識し、この反省を2016年度に活かしていきたい。

授業の総括、即ち成績評価についても、改善の余地が残っている。学生はチームを組んで活動するが、成績評価は個人別につける。評価は適正でなければならない。いわゆるペーパー・テストによる点数評価と同じくらい、合理的に説明のできる評価方法を取ることが、PBL 授業を行う必要条件と言えよう。茨城大学の「プロジェクト実習」では、教室外でのチーム活動は、提出される「議事録」によって教員が活動状況を把握している。また、年度末には個人別にレポートを提出させ、かつ、「チーム内相互評価表」も提出させることにより、教員がチーム活動の推移と結果とを理解する。これらを総合的に判断して成績評価を付けており、これは他大学のPBL 授業の先進事例を参考にした評価方法ではあるが、今後も引き続き情報収集に努め、他大学の教員の事例に学びながら、本学の授業改善につなげていきたい。

例年同様、今年も「プロジェクト実習」の学生の活動に多くの皆様からご支援を戴きました。この場を借りて、改めて深く感謝申し上げます。授業のさらなる改善と充実に向け、ご助言ご指摘を頂戴できれば幸いです。どうぞ今後とも引き続きよろしくお願い申し上げます。

付 記

鈴木 敦

『プロジェクト実習活動報告書』刊行の目的は、以下の4項からなります。

1: 学外・学内を問わず、種々ご支援を戴いた方々へのご報告ならびに謝意の表明

これはもう、いくら記しても記し足りるものではございません。受講生数わずか40名足らずの一授業のために、どれだけ多くの方々が物心両面でご支援下さったか。授業の設計ならびに運営担当者として、そのありがたさは骨身にしみております。

ありきたりな表現で申し訳なく存じますが、他に言葉が見つかりません。

皆様のご支援に、心より感謝申し上げます。

2: 当該年度履修生へのリフレクション材料の提供

2015年度履修生の皆さん、プロジェクト実習は「単位集めの楽勝授業」とは対極にある、1単位当たりの負荷の大きさで言えば卒業論文並に大変な授業だったと思います。それを単なる「授業選択のミス」「無用の苦労」「辛い思い出」に貶めてしまうか、「一生ものの貴重な体験・トレーニング」に高めることができるかは、皆さん自身によるリフレクションにかかっています。履修期間中は、忙しさに取り紛れて十分な自省の時間が取れなかったかも知れません。報告書のページをめくりながら、じっくりと振り返ってみてください。様々な学びが得られる筈です。

加えて、もし今後、就職活動その他で「在学中にエネルギーを注いだ活動」について語る機会があれば、語りだけでなく、この報告書をそのエビデンスとして活用して下さい。皆さんの体験談が、薄っぺらな面接用トークとは一線を画す・しっかりとした実績に基づくものであることを理解して戴けると幸いです。

3: 次年度履修生への参考文献の提供

今年度初めてプロジェクト実習を履修される皆さん、周囲から「プロジェクト実習は大変だよ」と言われ（てますよね？）ながら、敢えて取り組もうとするその積極性に敬意を表します。不安も大きいとは思いますが、この報告書に記された先輩たちの取り組みを参考に、是非、後日「自分なりの」などという逃げの物言いではなく、「自分だからこそ」という攻めの言葉で表現できるプロジェクトを推進して行って下さい。

プロジェクト実習はPBL授業ですから、担当教員が先回りして手を出すことはしません。しかし、皆さんから積極的に働きかけがあれば、これまでの経験を背景に色々な支援ができると思います。プロジェクト実習の担当教員は、あなたの「指導者」ではなく「伴走者」です。大いに活用しつつ、自分たちのプロジェクト実習を創って行って下さい。

4: 授業担当者ならびに関係者が、授業改善のPDCAサイクルを回すための情報整理

2012年度の初開講から3年がかりでP→D→Cとサイクルを進め、2015年度は初めてある程度まとまった形で「A」を動かしました。3年の蓄積に見合うだけの「A」であったか否か？これからじっくり確認し、オトナ会議始め皆様のアドバイスを戴きながら、二周目のPDCAサイクルに入って行きたいと考えています。


フランス文学と中国考古学という、およそ本来の専門性とはかけ離れた分野の教員が手探りで進める授業改善は、試行錯誤の連続でした。振り回され続けた履修生ならびに協力者の皆様に、この場を借りてお詫び申し上げます。

本学は第三期中期目標・中期計画に基づき、今後PBLを始めとするアクティブ・ラーニングを全学的に展開していくと表明しています。当該分野に明るい高等教育の専門家が任用されれば、これから取り組む多くの教員は、専門家のイニシアティブと支援の下に、効率的に「自分ならではの」「茨

城大学ならではの」のPBL／アクティブ・ラーニングを構築して行けるものと推察致します。個々の教員が、独自に試行錯誤を繰り返しながら構築していくことは勿論重要ですが、誰も彼もがプロジェクト実習構築時のような膨大かつ非効率なエネルギーを費やさねばならないとしたら、茨城大学全体としてあまりにもロスが大きいのではないでしょうか。


ともあれ、素人の見よう見まねによる試行錯誤の繰り返しにも参考にして戴ける部分があるのか、近年では他大学のFD等でプロジェクト実習をご紹介させて戴く機会も、ちらほらと与えて戴いております。お話しさせて戴く内容は勿論その時々で同一ではありませんが、お話の最後に必ず組み込んでいるスライドを、本書の末尾にも掲載させて戴きたいと思います。

お目通しを戴き、ありがとうございました。

最後に・・・鈴木 の 葛藤 

おれあ、甲骨文字の研究がしくて
苦労して大学教員になったんだあ！

就業力？PBL？
アクティブ・ラーニング？
勝手なことばっか言いやがってえ！
んなもんに関わっていられっかあ！

最後に・・・鈴木 の 葛藤 

「強制」への反発は措いとして・・・

MOOC、さらにはJMOOCの誕生で
世界の超一流教授の授業が
居ながらにして・しかも無料で
いくらでも受講できる時代

地方大学<でも>できること
地方大学<だから>できることは
なんだろう？

2015 年度 根力育成プログラム

「プロジェクト実習」

活動報告書

平成 28 年（2016）3 月 30 日刊行

編集 神田大吾 鈴木 敦

発行 茨城大学人文学部根力育成プログラム小委員会

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

茨城大学人文学部

e-mail daigo.kanda.8139@vc.ibaraki.ac.jp